宮城県文化財調査報告書第100集

宮城県営圃場整備等関連
遺跡詳細分布調査報告書

(昭和58年度)

昭和59年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

宮城県は、農業経営を近代化しその効率をたかめるため、県営圃場整備事業を鋭意推進してきた。昨年度に引き続き色麻町において同事業を実施するに当たり、地域内に周知の遺跡が含まれているところから、宮城県教育委員会では、農政部と協議を重ね、昭和58年度国庫補助事業による詳細分布調査並びに発掘調査を行った。本報告書は、色麻町所在の２遺跡の報告に加え、丸森町矢ノ目遺跡の調査結果をも併せ収めている。

加美郡色麻町上郷・高野所在の色麻古墳群は、７世紀末から８世紀にかけての終末期古墳群で、今回調査区域から古墳13基のほか竪穴住居跡等を検出した。伴出した土器のなかには関東系と考えられる土師器も含まれている。

色麻町小栗山中谷地所在の大谷地遺跡は、保野川中流域に立地した縄文中期から後期にかけての集落跡である。

伊具郡丸森町小斉字矢ノ目所在の、矢ノ目遺跡は、隈東地区前並揚水機場新設及び用水路工事に関連して発掘調査を実施したもので、阿武隈川が形成した自然堤防上に立地する古代から中世にかけての集落跡であることがわかった。

この報告書が、研究者はもとより広く一般の方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心がたかまることになれば慶びこれに優さるものはない。最後に、これらの調査にたいしてご協力を賜わった関係者の方々に厚く御礼を申し上げる次第である。

昭和59年3月

宮城県教育委員会

教　育　長　　三　浦　　徹

目　　次

序

はじめに

（Ⅰ）色麻古墳群 …… 3

（Ⅱ）大谷地遺跡 …… 163

（Ⅲ）矢ノ目遺跡 …… 251

例　　言

１．本書は宮城県営圃場整備事業に係わる２遺跡、及び宮城県営排水事業に係わる１遺跡の調査報告書である。

２．調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町教育委員会の御協力をいただいた。

３．本書における土色は『新版標準土色帖』（小川・竹原：1967）を使用し、土性については国際土壌学会の粒形区分を参照した。

４．この報告書に使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１の地形図「丸森」・「角田」・「中新田」、および同５万分の１の地形図「中新田」である。

５．執筆編集は文化財保護課が行った。各遺跡の担当者は次のとおりである。

色麻古鎖群	古　川　一　明
大谷地遺跡	茂　木　好　光
矢ノ目遺跡	後　藤　彰　信

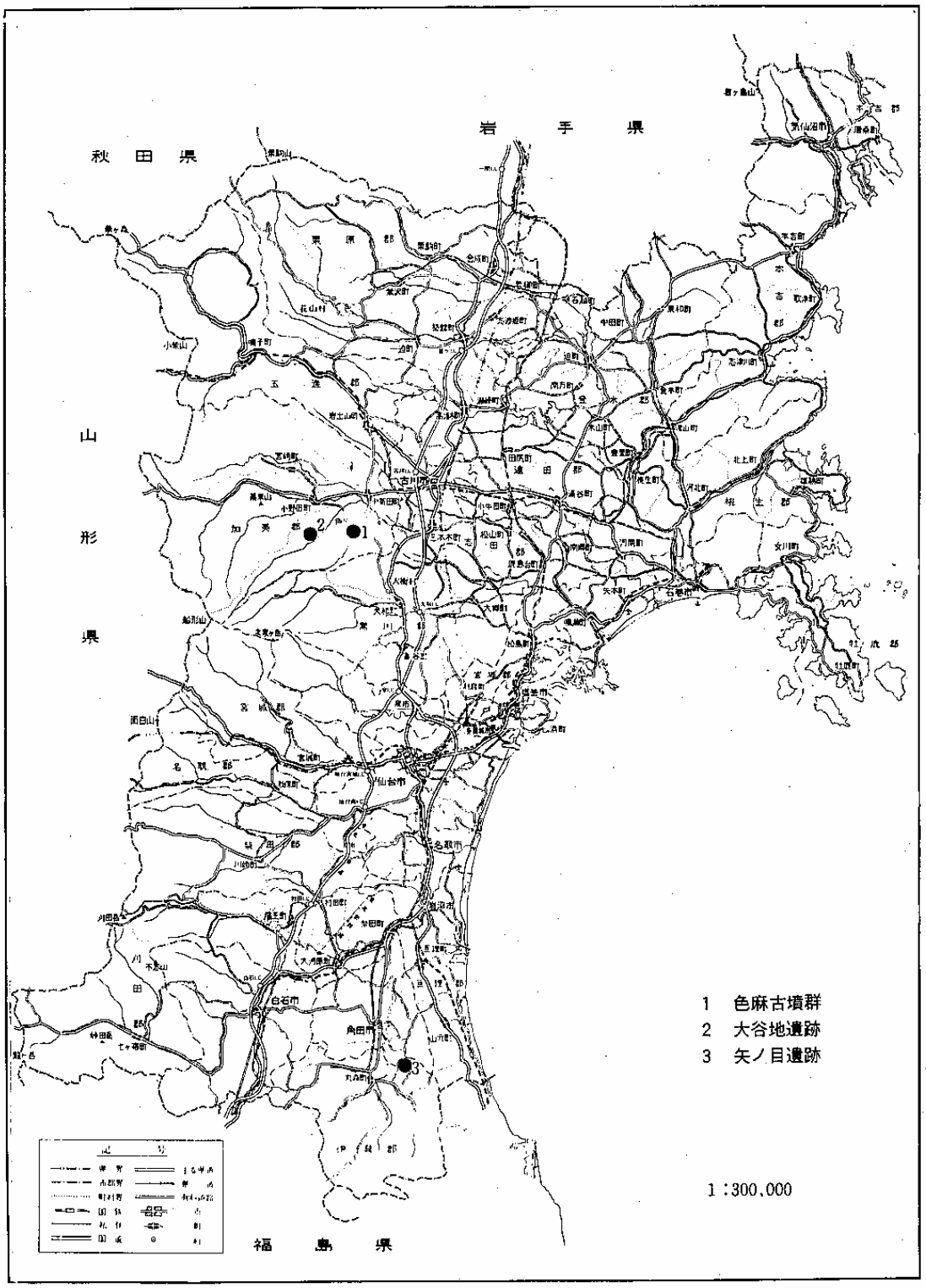
はじめに

宮城県教育委員会は、宮城県営圃場整備事業に係る色麻町色麻古墳群・大谷地遺跡の二遺跡と宮城県営かんがい排水事業に係る丸森町矢ノ目遺跡などあわせて三遺跡の詳細分布調査及び発掘調査を昭和59年度の国庫補助事業として実施した。

色麻町色麻古墳群については昭和57年度の調査などにより、現水田下に古墳の下部構造が遺存していることが判明していた。このため今年度分の圃場整備事業を実施するまえに、遺跡保存のための協議資料を得ることを目的として、幹線排水路部分を中心に遺跡の範囲・遺構の種類とその分布状況などを調査した。この詳細分布調査の結果、現水田面下から古墳14基、竪穴住居跡25軒が発見されたので、関係者間で度重なる協議を行い、幹線排水部分を除いて、すべて盛土工法によって遺跡・遺構を保存することになった。幹線排水路部分についてもできるだけ古墳の遺構をさけるようにした。結局、発掘調査に切り変え事前の記録保存を行ったのは古墳５基と竪穴住居跡21軒である。

また工事の施工にあたり、文化財側から保存のための仕様書を提出し、施工側からは施工計画書などの提出があり、相方で互にその内容を検討確認しあい、工事の際には両者が立会うなど万全を期した。古墳群を保存するための工法の変更は事業経費の増加をもたらすものであったが宮城県農政部および色麻町の関係者、圃場整備による受益農民の文化財に対する深い理解に基づいて合意されたものである。なお調査の期間中に色麻町教育委員会によって色麻町生活改善センターの図書室で昨年度発掘調査した土器などの展示が行われ、多数の町民がおとずれ好評であった。

矢ノ目遺跡は排水路を中心に詳細分布調査を行った。その結果、井戸跡１基と若干の遺物が発見された。工法の変更は困難とあって、ただちに発掘調査による記録保存に切りかえ、調査を行ったものである。



遺跡位置図

Ⅰ　色麻（しかま）古墳群

調査要項

遺跡記号：ＧＴ（宮城県遺跡地名表登載番号　31006）

遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町上郷・高野

調査期間：昭和58年4月11日～昭和58年8月5日

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：斎藤　吉弘・森　　貢喜・後藤　彰信

古川　一明・茂木　好光

調査対象面積：約100,000㎡

発掘面積：6,400㎡

目　　次

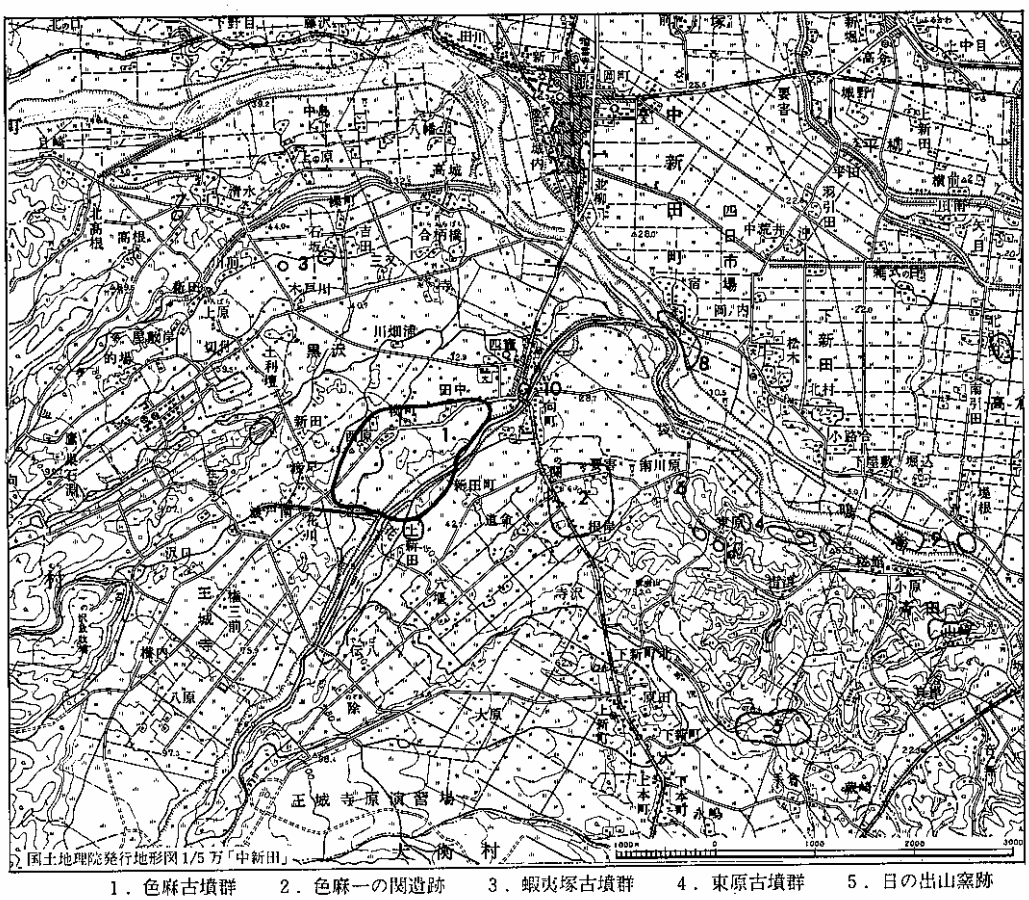
Ⅰ　遺跡の位置と環境……5
Ⅱ　調査の方法と経過……9
Ⅲ　確認された古墳とその出土遺物……10
Ⅳ　住居跡とその出土遺物……48
Ⅴ　その他の遺構と遺物……104
Ⅵ　考　察……108
　1　古墳について……108
　2　住居跡・その他の遺構について……130
　写真図版……145

Ⅰ　遺跡の位置と環境

色麻古墳群は宮城県北部、加美郡色麻町上郷、高野に所在しており、町の南西部にあたる。

遺跡の含まれる宮城県北部の地形を概観すると、西部は奥羽山系の丘陵、東部は北上山系丘陵地帯であり、両丘陵地間の中央部が平野部となっている。中央の平野部はさらに東西に区分することができる。東部は北上川を母胎として南北に広がる沖積地を主体とするものである。西部は奥羽山系から東へ枝状にのびる丘陵間に形成された東西に広がる沖積地を主体とするものであり、南から吉田川流域、鳴瀬川・江合川流域、追川流域との三部分がある。東部の沖積地は“北上川低地帯”と呼ばれるように谷地部分が多くその本格的な開発は近世以降のことであるが、西部の各沖積地は古くから開発が進んでいたと考えられ、そのことは周辺に各時代を通じて多数の遺跡が存在していることから推定できる。

本古墳群は江合・鳴瀬川流域の平野部（大崎平野）の南西端に位置している。この地域には標高30～90mの扇状地性の洪積台地が広がっており、この台地を開析して花川・保野川などの中小河川が各所に狭い氾濫原を形成しながら北東に流下し鳴瀬川に合流している。古墳群は花



1．色麻古墳群　2．色麻一の関遺跡　3．蝦夷塚古墳群　4．東原古墳群　5．日の出山窯跡
6．官林瓦窯跡　7．高根瓦窯跡　8．元宿遺跡　9．堤根遺跡　10．御山古墳

第1図　周辺の遺跡

川の中・下流域南北両岸の東西２㎞・南北１㎞、標高35～45mの範囲に分布している。北岸が上郷地区・南岸が高野地区で、現状は一部山林部分もあるが大部分は水田であり、確認できる古墳は水田中に残存している。

本遺跡周辺には各時代の遺跡が多数所在しているが、その中でも本古墳群と深く関連する古墳時代から奈良時代の諸遺跡の状況についてみて行きたい。まず古墳時代前期・中期の遺跡として鳴瀬川・江合川流域に分布する諸古墳がある。これらの諸古墳は、岩手県胆沢町角塚古墳のような孤立的なものを除けば、前期・中期古墳分布の北根地域を形成している。主要なものとして宮崎町夷森古墳・色麻町御山古墳・同念南寺古墳・古川市青塚古墳・小牛田町京銭塚古墳・同保土塚古墳など50mを超える規模の円墳・前方後円墳・前方後方墳があり、時期的には、東北地方南部土師器編年（氏家：1957）の第Ⅰ型式「塩釜式」期の土器類が出土し、近世紀に遡る可能性の指摘される青塚古墳（平沢・太田：1981）・夷森古墳、断面台形のタガをもつ埴輪が採集され５～６世紀の年代が想定される御山古墳・念南寺古墳などがある。このような規模・年代は、仙台平野以南における主要古墳の在り方と比較した場合でも大きな相違はないものと言える。

一方、同期の集落跡についても、嶋瀬川、江含川流域の自然堤防などの微高地上に多く立地するものと推定され、古川市塚の目・竹の内両遺跡では「塩釜式」期に属するとみられる竪穴住居跡が15軒、同じく留沼遺跡（手塚：1980）でも１軒発見されている。小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1976）では前期に属する竪穴住居跡25軒と大溝とが確認され、大溝からは農工具を主とした木製品も発見されている。上記諸遺跡のうち、特に御山古墳は、花川沿岸で本遺跡の下流0.5㎞に位置するもので、本古墳群との関係は必ずしも明確ではないが、距離的には極めて近接した位置にある。

次に古墳時代後期・奈良時代の遺跡として、後期・終末期群集墳、官衙、寺院跡、窯跡がある。まず、群集墳は高塚と横穴の双方がみられるが、高塚群集墳は大崎低地西部の丘陵・台地上に主に分布するのに対し、横穴群集墳は主に大崎低地北部・南部・東部の丘陵に分布し、高塚と横穴が共存する地域もみられる。群の規模は、高塚・横穴ともに10～30基前後によって構成されるものが多いが、岩出山町川北横穴古墳群（氏家他：1970）では200基を超える横穴の存在が推定され、高塚群集墳における本古墳群同様、極めて突出した規模を誇っている。本古墳群周辺で内容が明らかなものとしては、本遺跡の北西約１㎞の色麻町内に所在する夷蝦塚古墳群、北方約５㎞の宮崎町米泉館山横穴古墳群がある。夷蝦塚古墳群は径10m前後の円墳がかっては十数基確認されていたが、現在では１基のみが地上から確認できる。立地は、本古墳群に極めて類似し、保野川中流域南岸の扇状地性洪積台地上にある。古墳群の範囲・規模は確認されていないが、十数基規模を大きく上回るものではないと推定される。

古墳の構造・出土遺

物の在り方は、本古墳群のそれに極めて類似しており、本古墳群の一部と共存するものと考えられる（斎藤：1983）。米泉館山横穴古墳群（佐々木：1972）では２基の横穴が調査されている。高塚群集墳が主に分布する大崎低地西部の中にあることに加え、その内部構造は、他地域のものとはやや異り床面敷石、間仕切り石等の特徴ある施設が確認されており、横穴式石室との類似性も指摘されている。出土土器の特徴から古墳の使用年代として「８世紀前半を遡る時期」から８世紀後半の年代が想定されている。

上記の群集墳の年代に近接もしくは重複する時期に本地域には官衙・寺院が造営されている。大崎低地西部地域では古川市名生館遺跡・伏見廃寺、中新田町城生遺跡・菜切谷廃寺、色麻町一の関遺跡など比較的多くの遺跡が調査されている。一の関遺跡（阿部：1977）は、本遺跡の南東約１㎞に位置し、建物基壇跡・掘立柱建物跡・土塁状遺構などが発見され出土遺物から９世紀を中心とした寺院跡もしくは官衙跡である可能性が強いとされている。しかし、部分的な調査のため遺跡の範囲、性格については不明な点が多い。

城生遺跡（中新田町教委：1978他）は、一の関遺跡の北方約６㎞に位置し、現在までの調査で築地、溝による外郭施設と、その内部に掘込地業倉庫跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見され、北辺外郭線中央に八脚門も確認されている。出土遺物から８世紀前半から平安時代にかけてのものと考えられており、遺構の状況から官衙施設としての性格をもつものとされている。なお、この北東約１㎞には、付属寺院とされる菜切谷廃寺跡（伊東：1979）がある。

城生遺跡のさらに６㎞北北東には名生館遺跡（多賀城調査研究所：1980・1981）が位置している。現在までの調査で、７世紀末から９世紀にかけての掘立柱建物群、竪穴住居跡などが発見され、特に７世紀末から８世紀初頭には瓦葺、四面廂付掘立柱建物跡が造営され、整った官衙施設としての性格をもつものとされている。なお、この南約0.8㎞には付属寺院とされる伏見廃寺跡（佐々木：1971）がある。

窯跡としては、本遺跡の南東約３㎞に日の出山窯跡群、同じく北西約４㎞に高根窯跡群がある。このうち、日の出山窯跡群Ａ地点（岡田他：1970）では７基の窯が調査され、瓦・須恵器が発見されている。瓦は多賀城跡の創建期に供給されたものであり8世紀前葉前後の操業期が想定されている。

以上のように、群集墳、官衙、寺院跡、窯跡は位置的、年代的に極めて密接な関係にある。特に一の関、城生、名生館などの官衙関係遺跡は、現在の陸羽街道沿いに約６㎞間隔で位置するが、名生館遺跡は古代玉造郡域内に属し、「玉厨」の墨書土器が発見されたことなどから玉造柵跡の有力な擬定地とされ、一方、一の関遺跡は古代色麻郡域に属すと考えられ、色麻柵跡に関連する施設と推定されている。このような特色ある遺跡群の周辺に高塚を主体とする群集墳群が分布することは、それらの被葬者の性格を考える上で極めて興味深いものと言える。特に

色麻古墳群の場合は300基を超える規模をもっており、被葬者集団の性格は、上記のような歴史的環境の中で理解されるものと考えられる。

参 考 文 献

氏家和典（1967）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

太田・平沢（1981）：「青塚古墳」宮城県古川市文化財調査報告書第５集　宮城県古川市教育委員会

手塚　均（1980）：「留沼遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ　宮城県教育委員会

加藤・富村（1979）：「山前遺跡」史跡環境整備報告書　宮城県小牛田町教育委員会

氏家　他（1970）：「川北横穴古墳群」『岩出山町史上巻』　宮城県岩出山町教育委員会

斎藤吉弘（1982）：「蝦塚古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書　宮城県教育委員会

佐々木茂楨（1972）：「米泉館山横穴古墳群」宮城県宮崎町文化財調査報告第１集　宮城県宮崎町教育委員会

阿部　恵（1977）：「一の関遺跡」宮城県文化財発掘調査略報　宮城県教育委員会

中島　直（1978～1983）：「城生遺跡」宮城県中新田町文化財調査報告書第１～７集　宮城県中新田町教育委員会

伊東信雄（1979）：「菜切谷廃寺跡」宮城県　宮城県教育委員会

白鳥・後藤他（1981～1982）：「名生館遺跡Ⅰ、Ⅱ」多賀城関連遺跡発掘調査報告第６、７冊　宮城県多賀城跡調査研究所

佐々木茂楨（1971）：「伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻３号　日本考古学会

岡田　他（1970）：「日の出山窯跡」宮城県文化財調査報告書第22集　宮城県教育委員会

原秀四郎（1901）：「陸前の積石塚」『東京人類学会雑誌』第184号　東京人類学会

布施千造（1903）：「累々たる蝦夷塚を探見するの記」同上第202号　〃

清水東四郎（1938）：「加美郡四釜の古墳」宮城県史跡、名勝、天然記念物４　宮城県教育委員会

伊東信雄（1951）：「宮城県加美郡上郷古墳」『日本考古学年報』４　日本考古学協会

鈴木貢他（1979）：『色麻町史』　宮城県色麻町教育委員会

古川一明（1981、1982）：「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書　宮城県教育委員会

Ⅱ　調査の方法と経過

宮城県営圃場整備事業の行われる四釜地区は、総面積45haで、昭和57・58・59年の３ヶ年に分け工事が行われる。これに伴う色麻古墳群の調査は、その分布地域が主に水田であるため、休耕・工事期間との関係から、その年の工事対象地域を対象とした範囲確認、記録保存の調査を各年度毎に行い、報告書を刊行している。昭和57年度は四釜地区の西側、南側にあたる約22haを調査し、本古墳群に関する概略的なデーターを得た。（1982：古川）今年度、昭和58年度は四釜地の北側にあたる約10haについて昨年度のデーターに基づき以下に述べる方法経過で、調査を行った。

調査の方法としては、まず工事の際掘削の及ぶ計画支線排水路の路線（総延長2,300m）に巾３mのトレンチを設定し、遺構の分布を確認することにした。これは、宮城県農政部古川土地改良事務所・色麻土地改良区、宮城県文化財保護課の間の協議による、「支線排水路を除き、現表土以下の切り土、掘削を伴う工事は行わず、埋蔵文化財は基本的に現状で保存する。」という合意を前提にしたものである。次に調査対象地区内の微地形と、古墳、遺構の分布状況から遺跡の範囲を確認し、不明確な部分については地形に合わせて巾２mの任意のトレンチを設定し微地形の再確認を行った。さらに支線排水路にかかる古墳６基、住居跡22軒については調査区を拡張し遺構の全体を確認した上で記録保存調査を行った。トレンチ、調査区については平板により1/200の実測図を作成し、遺構については簡易遺り方により1/10もしくは1/20の実測図を作成し、写真を撮影した。なお、保存されることになった古墳や、遺構についてはその位置を確認し写真の記録だけをとった。

以上の調査終了後、調査期間内に着手できなかった旧道部分の撤廃工事に伴う立ち合い調査を行った。その結果旧道下から３基の古墳が確認されたが、協議によりいずれも保存されることになったため位置を確認し写真の記録だけをとった。

古墳の番号は、昭和54年度の宮城県教育委員会による本古墳群の分布調査の番号を基本とし新発見のものには104番以降の継続番号を付した。住居跡の番号は、昭和57年度の調査により発児された住居跡番号の継続番号を付した。

古墳の保存については、「残丘」をもつ第８・24・28・29・30・34・35が「残丘」を現況のまま地上に出した状態で保存され、他のものについては地下に埋没し保存された。このうち特に第24号墳については頭初支線排水路にかかる予定であったが、原形を良好に保っていたため協議により排水路の路線を変更し保存されることになった。なお方位についての記録は磁北を基準としている。以後の記述もことわりのないものは全て磁北によるものとする。

Ⅲ　確認された古墳とその出土遺物

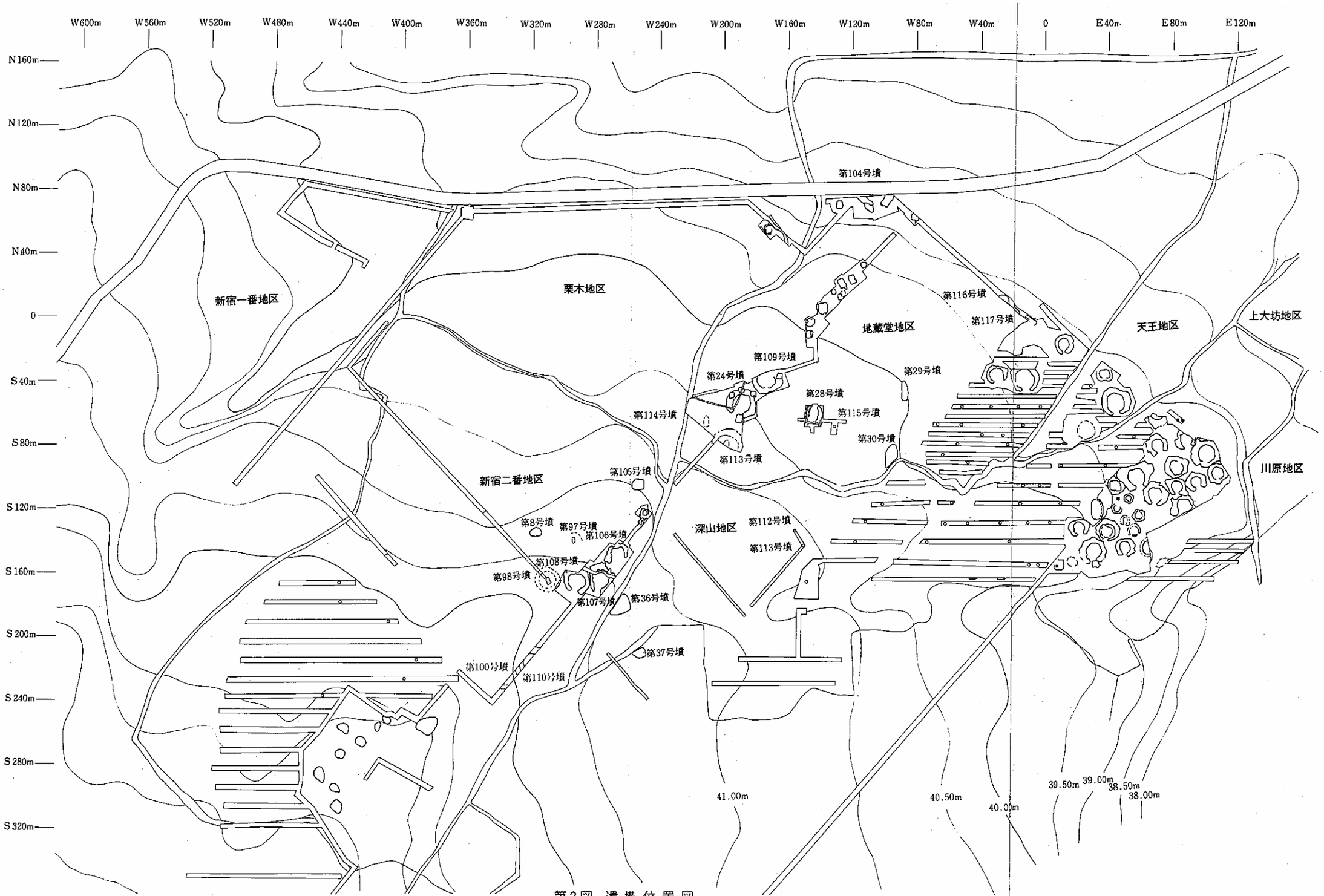
微地形と古墳分布

調査対象地区内の地形は、大きくみて扇状地性の洪積台地面と花川の氾濫原とに分けることができる。しかし、氾濫原は、対象地区内では南東部に若干かかるだけで、他の大部分は北東に緩やかに傾斜する扇状地性の洪積台地面となっている。氾濫原と、洪積台地面の比高は１m前後である。

確認された古墳はいずれも洪積台地上に分布するが、特に台地面の浸蝕作用により形成されたと考えられる対象地区中央を南西から北東に横切る尾根状の微高地に集中して分布している。この尾根状の微高地は昨年度（昭和57年度）の調査対象地区内で古墳の分布がみられた「北西地区」と「北東地区」とを結ぶ一連の地形であり、分布する各古墳もまた一連の古墳群として捉えることができる。ところで、上記の地形をより詳細にみてゆくと、さらに小単位の微地形がみとめられる。これらの微地形は水田の区画整理、宅地造成等により不明確になっている部分もあるが、明治19年作成の地籍図にみられる字切り図を参考にかなり明瞭に復元することができる。（２図参照）。これによれば四釜地区古墳の分布する尾根状の微高地は南西から北東へ新宿二番、地蔵堂、深山、川原、天王、上大坊、大坊の六つの小字に分けられる。そして各々の小字の地区は等高線にみられるように、沢状の地形を介するなどして一定の地形的なまとまりを示している。これらの微地形に対し古墳もまたそれぞれの地区に分布しているが、各古墳の内容の検討はまだ不十分であり実質的な支群の摘出はできない。ここでは古墳の分布を上記の微地形、即ち小字によって便宜的に六つの地区に分け以下の記述、考察を行っていく。なお、今回の調査対象地区内には「新宿一番地区」、「栗木地区」、「新宿二番地区」、「地蔵堂地区」、「深山地区」の５地区が含まれている。しかしこのうち古墳の分布が確認されたのは前述したように尾根状の微高地にあたる「新宿二番地区」、「地蔵堂地区」、「深山地区」の３地区あたりであり「新宿一番」「栗木」の両地区では確認されなかった。確認された古墳は「新宿二番地区」に９基、「地蔵堂地区」に11基、「深山地区」に４基である。「新宿二番地区」には昨年の調査で確認された「西地区」の古墳群が含まれ、同じく「深山地区」には「東地区」が含まれる。（第２図参照）

残存状況

次に古墳の残存状況をみると、確認された24基のうち８基（第８、24、28、29、30、36、37、97号墳）は、封土、石室の一部が残丘状に遺存し、発掘調査前に確認することができたものである。これに対し、他の16基（第98、100、104、105、106、107、108、109、110、111、112、


W600m
W560m
W520m
W480m
W440m
W400m
W360m
W320m
W280m
W240m
W200m
W160m
W120m
W80m
W40m
0
E40m
E80m
E120m
N160m
N120m
N80m
N40m
0
S40m
S80m
S120m
S160m
S200m
S240m
S280m
S320m
第104号墳
新宿一番地区
栗木地区
地蔵堂地区
天王地区
上大坊地区
川原地区
新宿二番地区
深山地区
第116号墳
第117号墳
第109号墳
第24号墳
第29号墳
第28号墳
第115号墳
第114号墳
第30号墳
第113号墳
第105号墳
第8号墳
第97号墳
第106号墳
第112号墳
第113号墳
第108号墳
第98号墳
第107号墳
第36号墳
第37号墳
第100号墳
第110号墳
41.00m
40.50m
40.00m
39.50m
39.00m
38.50m
38.00m

第2図 遺構位置図

113、114、115、116、117号墳）はトレンチによる発掘調査の結果現地表下から周湟もしくは石室の最下部が発見されたことで新たに古墳として確認されたものである。つまり群を構成する大半の古墳は削平を受け、地上で確認できなかったものであり、このような潜在する古墳が、さらに多数存在するものと考えられる。明治19年の地籍図、昭和25年の東北大学考古学研究室作成の古墳分布図、微地形等からみて、古墳の実数は本地区内のみで60基前後に及ぶものと考えられる。

以下確認された各古墳のうち精査を行ったもの５基について記述する。他の19基については確認事項を一覧表に示すに留める。（第１表、46頁参照）

第24号墳

〔立地〕地蔵堂地区に属し、尾根状の微高地のほぼ中央の高地に占地している。本古墳の東に109号墳、南に113号墳、西に114号墳がそれぞれ隣接している。

〔確認状況〕石室裏込めを主体とする「みかけ」の墳丘が遺存していた。その平面形は一辺約５mの三角形を呈し、周囲の水田面との比高約0.7mで、その上部は後世寄せ集められた礫により覆われていた。調査の結果「みかけ」の墳丘下に石室の玄室部が確認されさらに周囲の水田面下から羨道部天井石をはじめ封土、葺石、周湟等が確認された。本墳は、墳丘の上部が削平され玄室部の天井が失われているものの、後世墳丘の南東部側に客土が施されたため墳丘南半が極めて良好に保存されていることが確認された。墳丘は葺石列から直径９m前後の円墳になると考えられるが、周湟内法は隅丸方形を呈している。なお本古墳の周辺に５軒の竪穴住居跡が確認されている。これらはいずれも本古墳の周湟堆積土を掘り込んでおり、本古墳の周湟が埋まり切った後に構築されたものである。また墳丘の西辺を南北に縦断し南西部のテラス付近で直角に折れ西に向う時期不明の溝が確認されている。この溝は本古墳の周湟堆積土を掘り込んだ第28号住居跡を破壊しており、第29号住居跡よりも更に新しいものである。

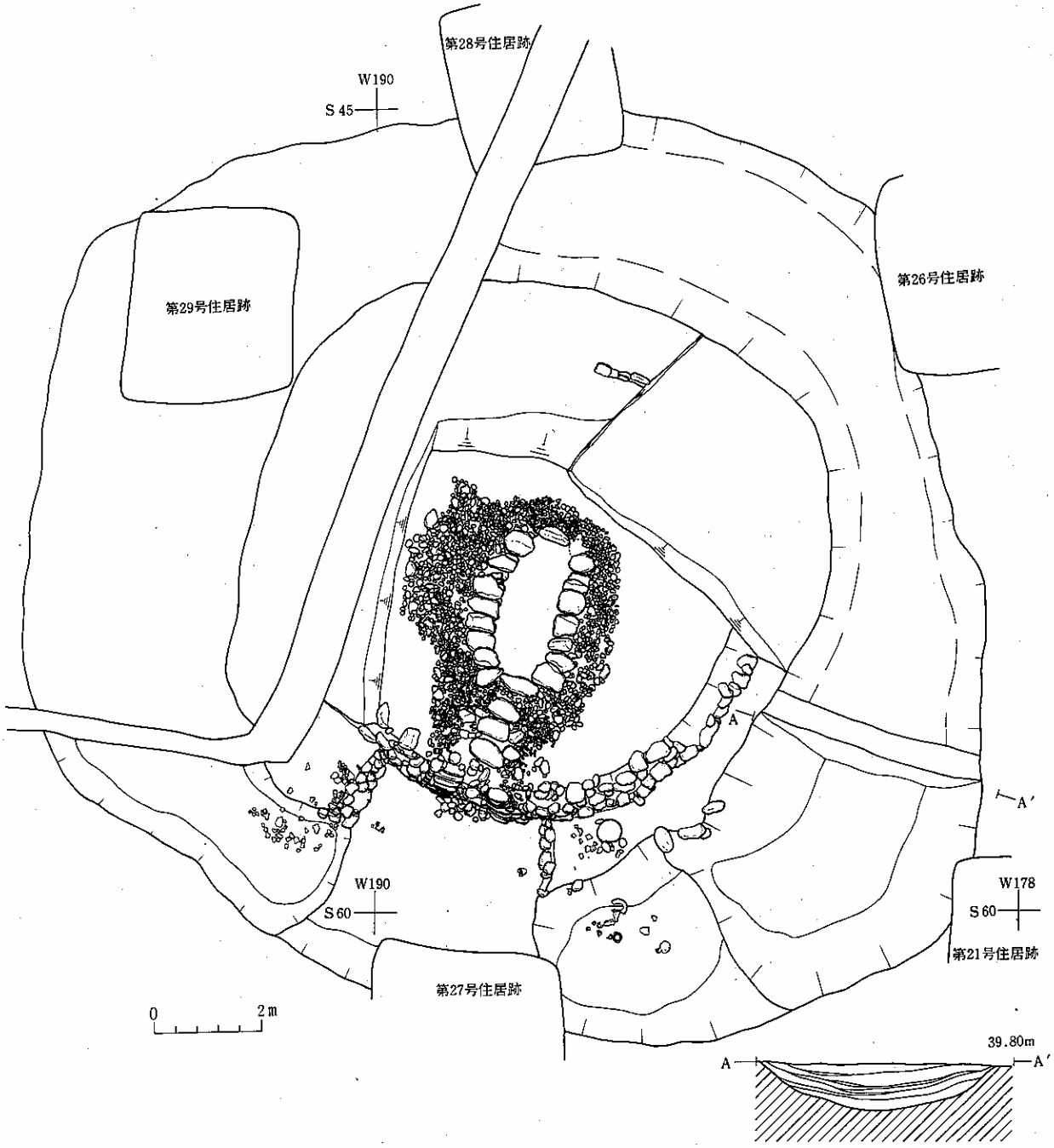
〔主体部〕河原石使用の横穴式石室で玄室部に弱い胴張りがみられる。奥壁部には巨石が二段遺存しているが本来は三～四段積まれ奥壁部を構成していたものと考えられる。側壁は玄室部、羨道部では枕状の石を粗い互目積みにし、さらにそれらの間隙に小石をかませ安定をもたせている。持ち送りは上部に行くにつれ強くなりアーチ状になっている。これに対し、玄門、羨門部はやゝ偏平な石を通目積みにし、特に羨門部では持ち送り状に羨道部側壁側にもたせかけながら積み上げている。床面は玄室部、羨道部ともに平坦でほぼ同一レベルであるが、玄室部には径５～10cmの小石を一面に敷き詰めているのに対して、羨道部では、玄門部付近に径５～10cmの小石が敷き詰められているものの、羨門部側には径20cm前後の礫が乱雑に敷かれているだけである。玄門部、羨門部にはそれぞれ梱石が認められる。玄門部のものは玄室部、羨道部床

面との比高10cmの高さをもち、羨門部のものは羨道部床面との比高約25cm、前庭部底面との比高約40cmの高さである。天井は、残存する羨道部では表門から玄門にかけて偏平な石を五石横に渡して水平な天井を作っている。床面から天井まで約80cmを計る。玄室部の天井は失われているが、玄門部の天井には石が二段積み上げられていること（第４図－Ｃ）や玄室部側壁の残存高、玄室内に崩落した石材（写真図版第１図）等から推定すると、その高さは羨道部よりも50cm以上高く、床面からも130cm以上の高さがあったものと考えられる。閉塞は、羨道内一ぱいに径20～30cmの礫が乱雑に詰め込まれていたが羨門部、玄門部では、いずれも羨道側に寄せかけるように積まれていた。裏込めは石室周囲に径２～10cmの小石を粘土とともに充塡したもので、残存する羨道部の天井石上にも同様の石がみられ、裏込めは天井部上をも覆っていたと考えられる。さらに側壁の外側にはやや大きめの偏平な石を用いた控え積みもみられる。なお玄室西側の裏込めは立木の根により攪乱を受けている。

〔外部施設〕石室の表門から両側に葺石が延び、これに沿って前庭、テラス、周湟等の外部施設が確認された。葺石は径20～30cm前後の石を乱石積みにしたもので平面形は直径９m前後の円形を呈する。前庭部では高く急峻であるが、東西に廻り込むにつれて低く、緩傾斜になる。本来は墳丘を一周していたものと考えられるが、西側から北側にかけての葺石は、北側の一部を除いて失われている。前庭は羨門前方に平坦に開けている。旧表土を浅く掘り込んで作られたもので周湟に対しては土橋状になり、テラスからは一段下がってその段の所に石組みをしている、石組みは葺石から周湟上端まで延び、平面的には八の字状を呈する。テラスは葺石と周湟の間に在る巾50cm前後の平坦面で旧表土面を上面としている。前庭の両側から左右に延び本来は墳丘を一周する施設だったと考えられるが、西側から北東側にかけては削平を受け不明確である。周湟は旧表土・地山を掘り込んで作られている。平面形は内法が隅丸方形、外法は不整円形を呈し、前庭部では途切れる。西半部を除き掘り下げているので全体の状況は把握できないが、東西で巾が広がり深くなるものと考えられる。堆積土は、周湟各部で異った様相を示しているが東側の深い部分をみると基本的に２層に大別され、第１層が黄褐色もしくは褐色の砂層、第２層が底面堆積土で黒褐色もしくは褐色のシルト層で、いずれも流入した状態で堆積し、周湟全体に分布するものである。そしてこれらの各層中には暗褐色、もしくは黄褐色の粘質土が薄くレンズ状に堆積している。

〔構築方法〕不明

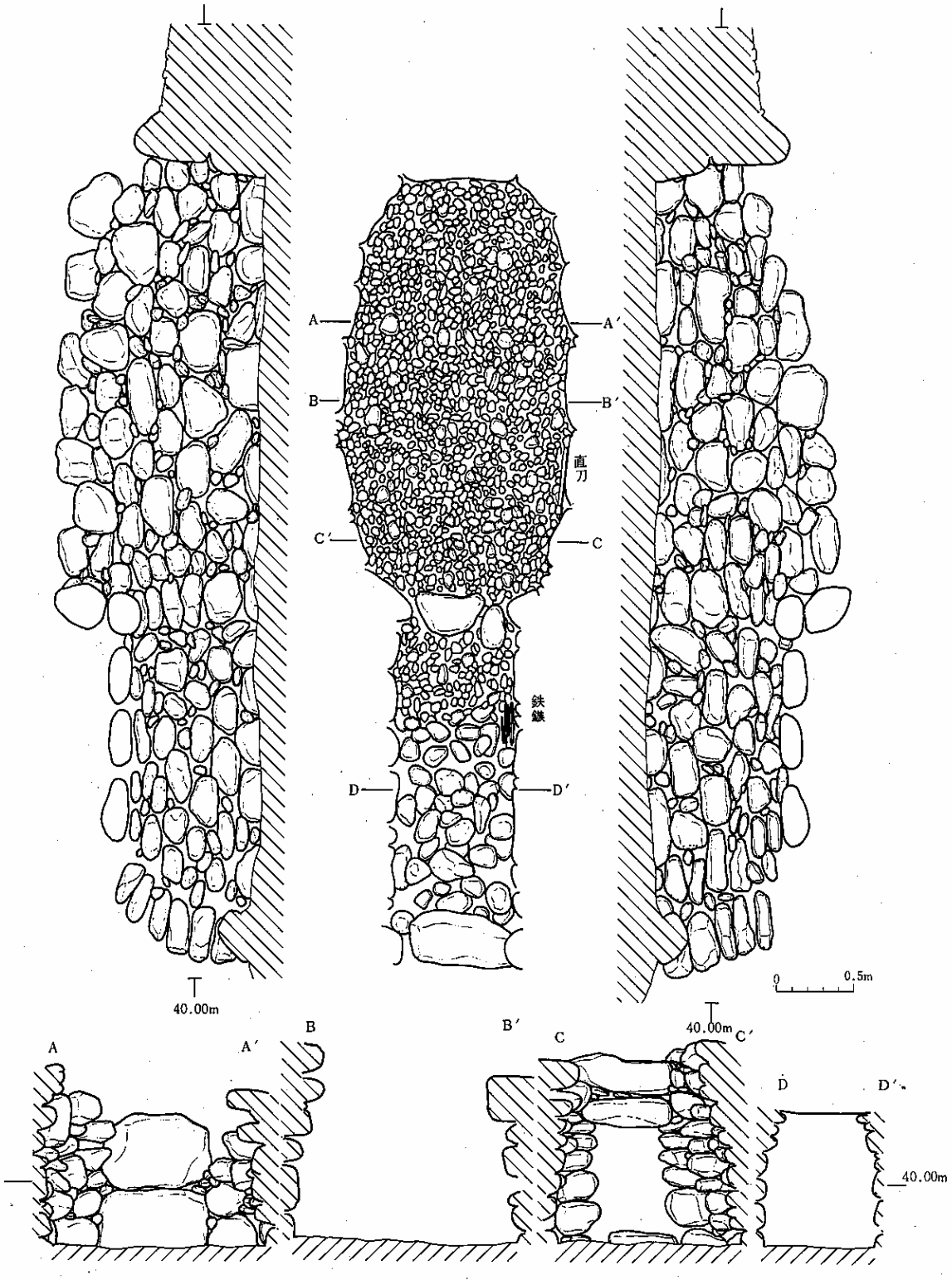
〔出土遺物〕玄室底面の東側壁に沿って直刀が一振り出土した。（第９図－23）また玄室奥中部の底面から琥珀製臼玉一点が細片となって出土している。玄室内に遺体の痕跡は認められなかった。羨道の閉塞石を除去したところ底面の東側壁に沿って鉄鏃がまとまって出土した。（第４図）切先部の点数は22点である。（第９図１～22）羨門東側の前庭、テラス、周湟から土師器



第 24 号 墳 計 測 値

主 体 部								外 部 施 設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
5.0m	2.7m	2.3m	0.7m	1.4m	0.7m	2.7m	N-10.5°-E	11.1m	5.3m	0.8m	8.8m

第 3図　第24号墳全景

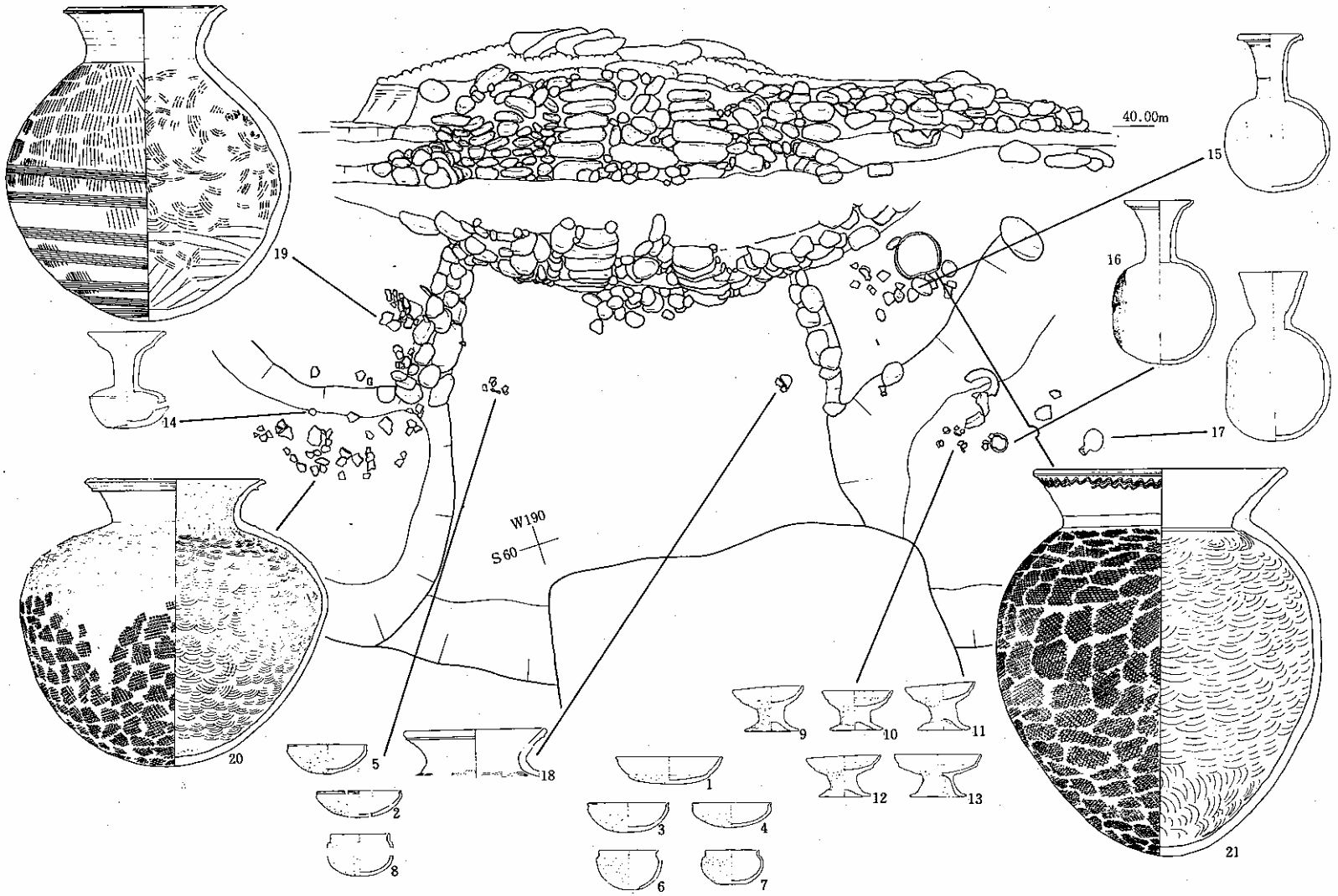


第４図　第24号墳石室

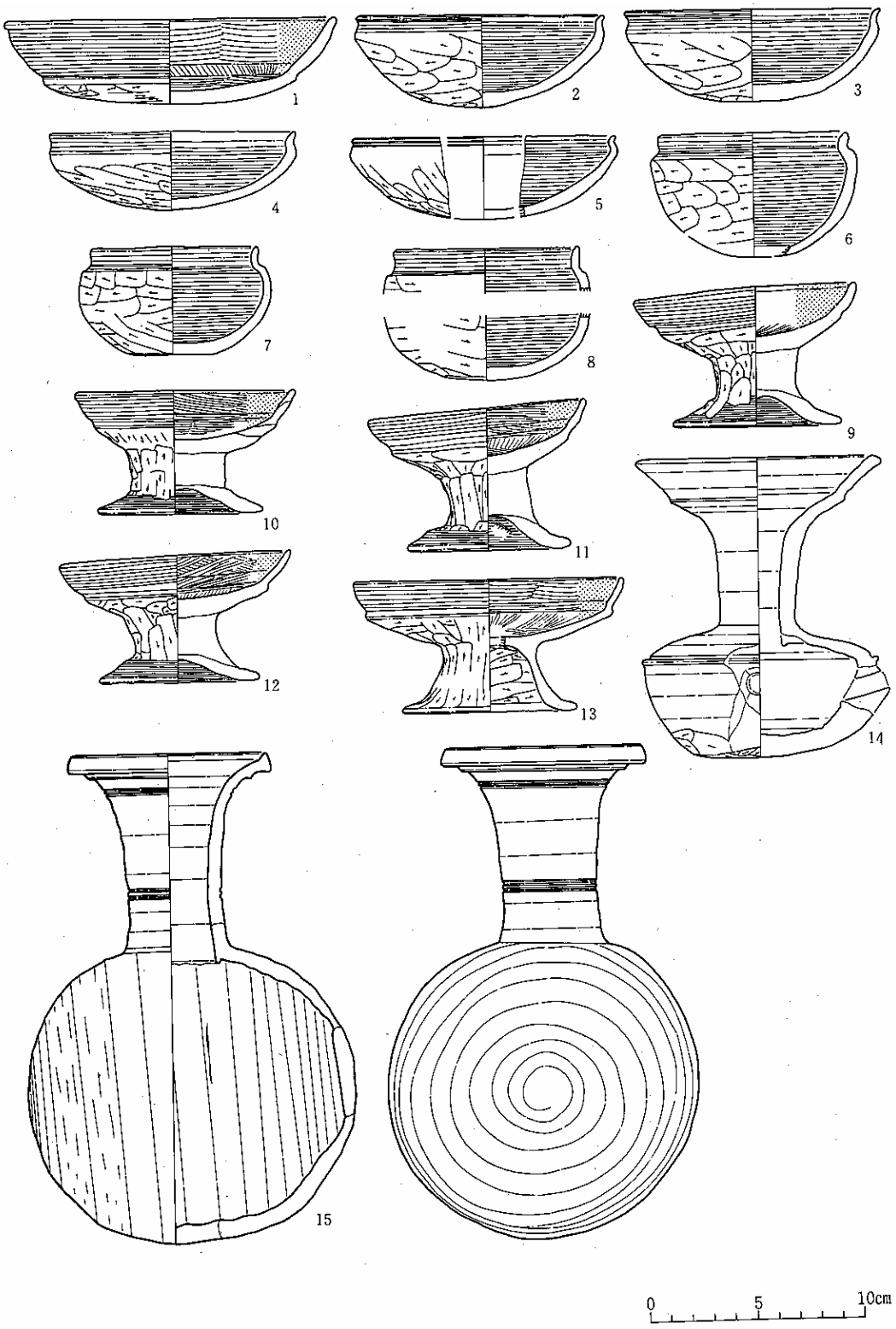
坏３点（１、３、４）、同埦２点（６、７）、同高坏５点（９～13）、須恵器長頸瓶１点（15）、同提瓶２点（16、17）、同甕２点（18、21）、鉄鏃片が出土している。羨門西側の前庭、テラス、周湟からは土師器坏２点（２、５）、同埦１点（８）、須恵器𤮋１点（14）、同甕２点（19、20）が出土している。これらの土器類の出土状態をより詳細にみてみると、（第５図参照）、まず東側のテラス上には須恵器甕（21）、同長頸瓶（15）、周湟底面には土師器高坏（９～12）、須恵器提瓶（16、17）、前庭底面には須恵器甕（18）がそれぞれ完形で、その一部が周湟内に流入しているもののほぼ原位置を保った状態で出土している。特に甕（21）は体部中位までが地中に埋置された状態であった。これに対し土師器坏、埦（１、３、４、６、７）、同高坏（13）は、前庭から周湟内に流入する状態でいずれも細片となり、周湟斜面もしくはそれに近い周湟堆積土から出土している。次に西側テラス上には須恵器甕（19、20）の底部がいずれもテラス上に設置された状態で出土した。しかし両者は焼成が堅緻で、しかも復元の結果完形となったにもかかわらず、出土時にはかなりの細片となり、その体部、口縁部破片の多くはテラス上から周湟底面にかけて散在した状態で出土している。また、土師器坏、埦（２、５、８）、須恵器𤮋（14）はいずれも前庭底面を中心としてテラス、周湟、石組み上などから細片となり散在した状態で出土している。以上21点の土器は上記のような出土状況から本墳に伴う遺物であると考えられる。なおこの他に周湟、前庭の堆積土から製作にロクロを使用した土師器坏、甕の破片がまた周辺の表土層から須恵器、ロクロ使用の土師器類、青磁、その他の中・近世陶器の細片が出土しているが図示できるものはなく、本古墳に直接関係するような出土状況を示すものもなかった。

番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器　坏	前庭2～3層	内黒。器下半部の内外に段。段以上は内弯気味に外傾。	24—Po、1	AⅠ2biiイ
2	〃	前庭底面	内面ナデ調整。外面の口縁下部に沈線状の段。	24—Po、2	BⅢ
3	〃	前庭2～3層	内面ナデ調整。外面の口縁下部に稜。口縁は短く外反。	24—Po、3	BⅡ
4	〃	前庭底面	〃	24—Po、4	〃
5	〃	〃	〃	24—Po、5	〃
6	土師器　埦	〃	内面ナデ調整。頸部に水平な段。丸底風の平底。	24—Po、6	B
7	〃	〃	〃	24—Po、7	〃
8	〃	前庭２層	〃	24—Po、8	〃
9	土師器高　坏	周湟底面	小型。坏部：内黒、内外に段、脚部：中実、屈曲して外反。	24—Po、9	A
10	〃	〃	〃	24—Po、10	〃
11	〃	〃	〃	24—Po、11	〃
12	〃	〃	〃	24—Po、12	〃
13	〃	前庭３層	小型。坏部：内黒、内外に段。脚部：中空、屈曲して外反。	24—Po、13	B
14	須恵器　𤮋	前庭底面	口縁下端の内外に段。肩部に沈線。丸底風平底。	24—Po、17	
15	須恵器長頸瓶	テラス上面	体部球形。口縁下部に段。頸部上位、中位に沈線。	24—Po、14	
16	須恵器提　瓶	周湟底面	体部やや偏平。口縁下部に段。頸部は細く長い。	24—Po、16	
17	〃	〃	体部やや偏平。口縁は長く内弯気味に外傾。頸部は短い。	24—Po、15	
18	須恵器　甕	前庭底面	中型。口縁下部に隆帯。底部は丸底。	24—Po、18	BⅠ
19	〃	テラス上面	小型。口縁下端を外方につまみ出す。なで肩。丸底。	24—Po、19	BⅡ
20	〃	〃	中型。口縁下端を外方につまみ出し、その下に隆帯。丸底。	24—Po、20	BⅠ
21	〃	〃	中型。口縁下端に沈線。頸部上位に櫛描波状文。	24—Po、21	AⅡ

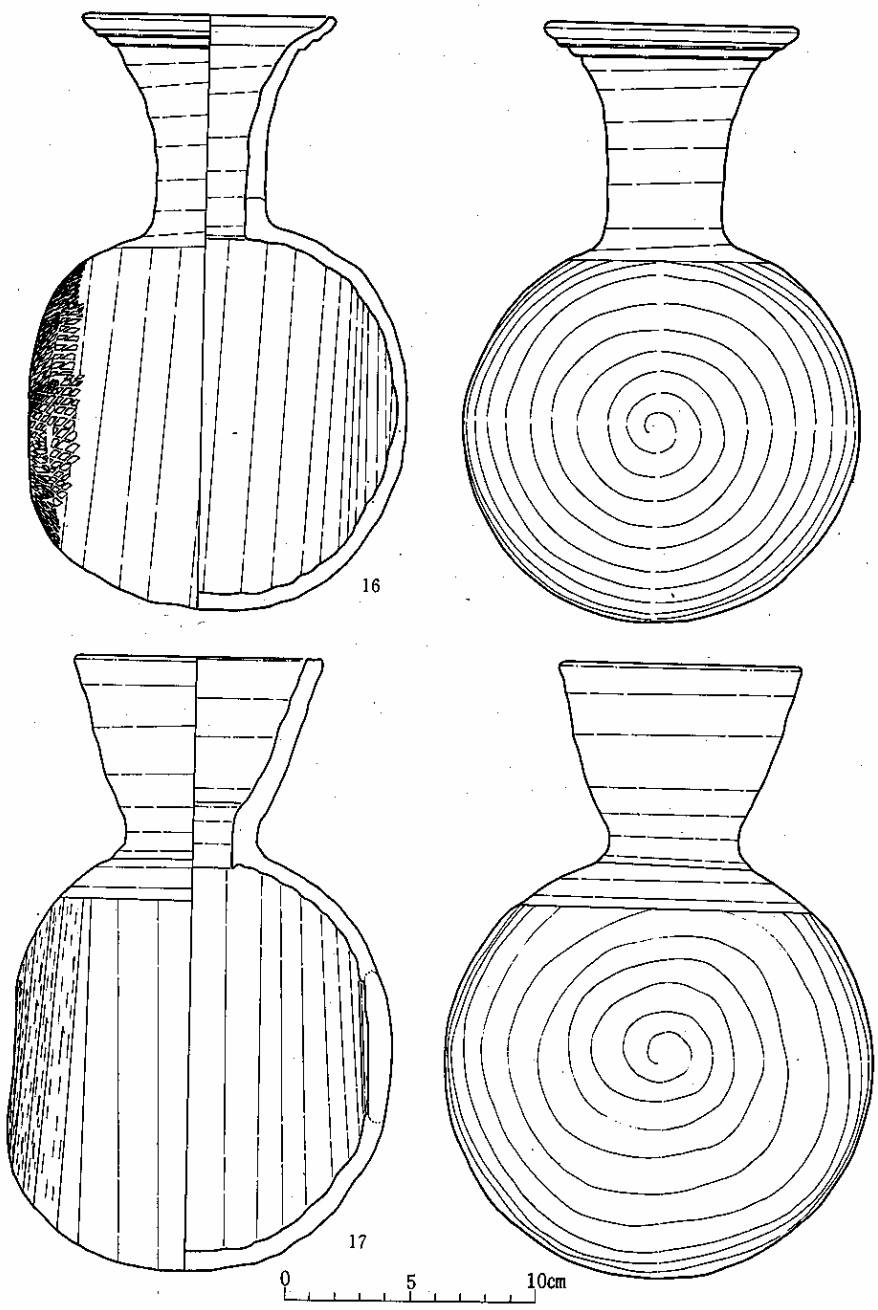
第24号墳前庭出土遺物観察表



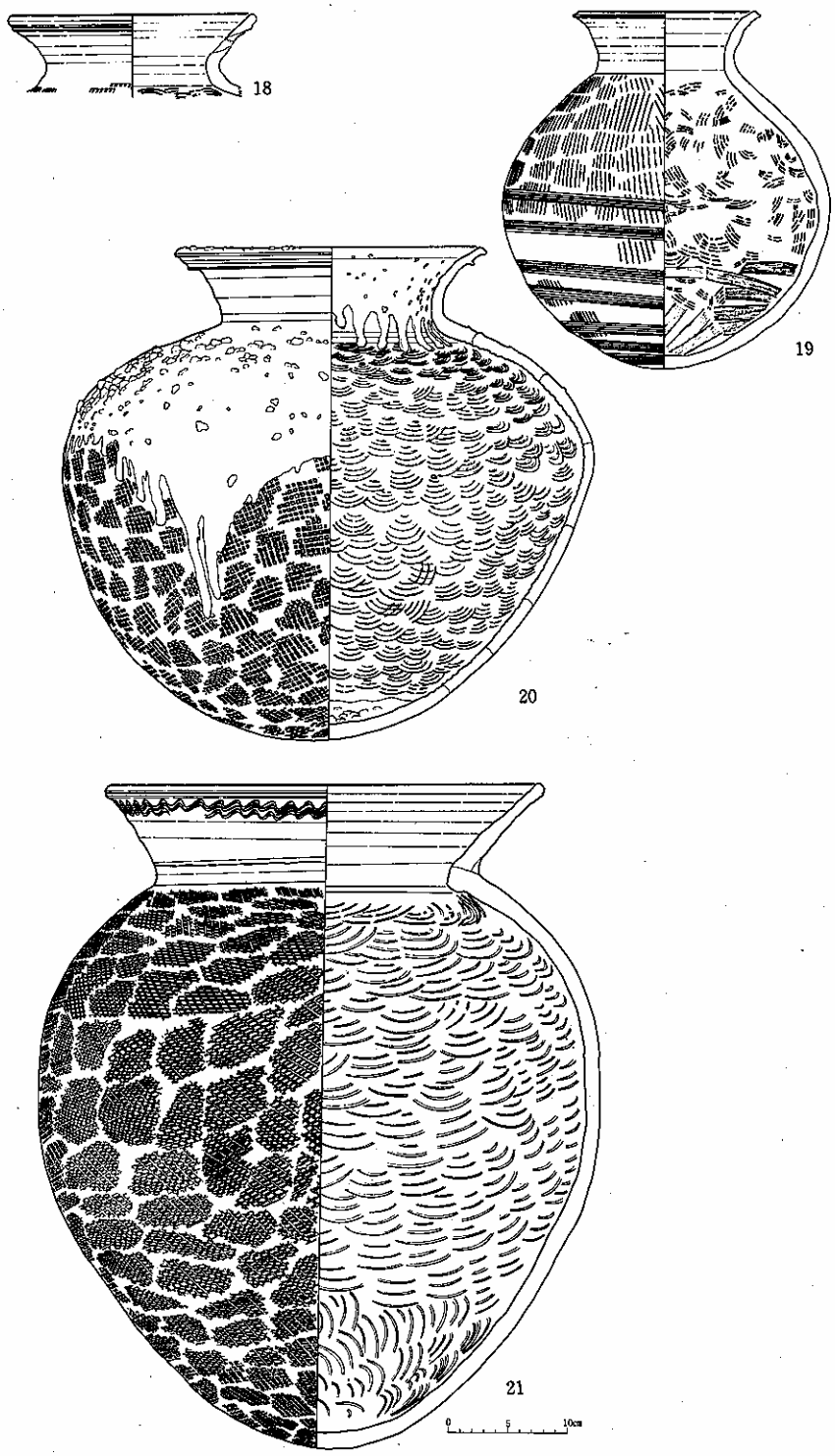
第５図　第24号墳前庭遺物出土状況



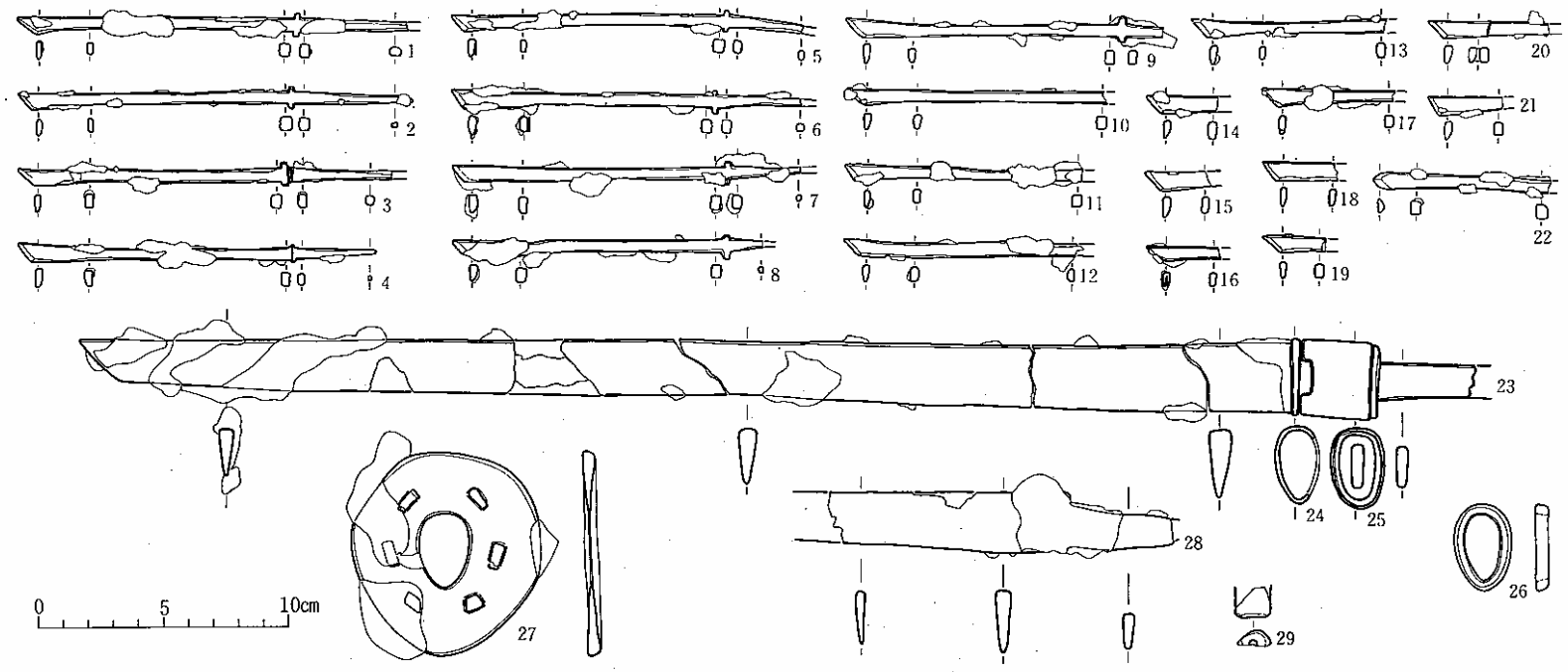
第６図　第24号墳前庭出土遺物（１）



第７図　第24号墳前庭出土遺物（２）



第８図　第24号墳前庭出土遺物（３）

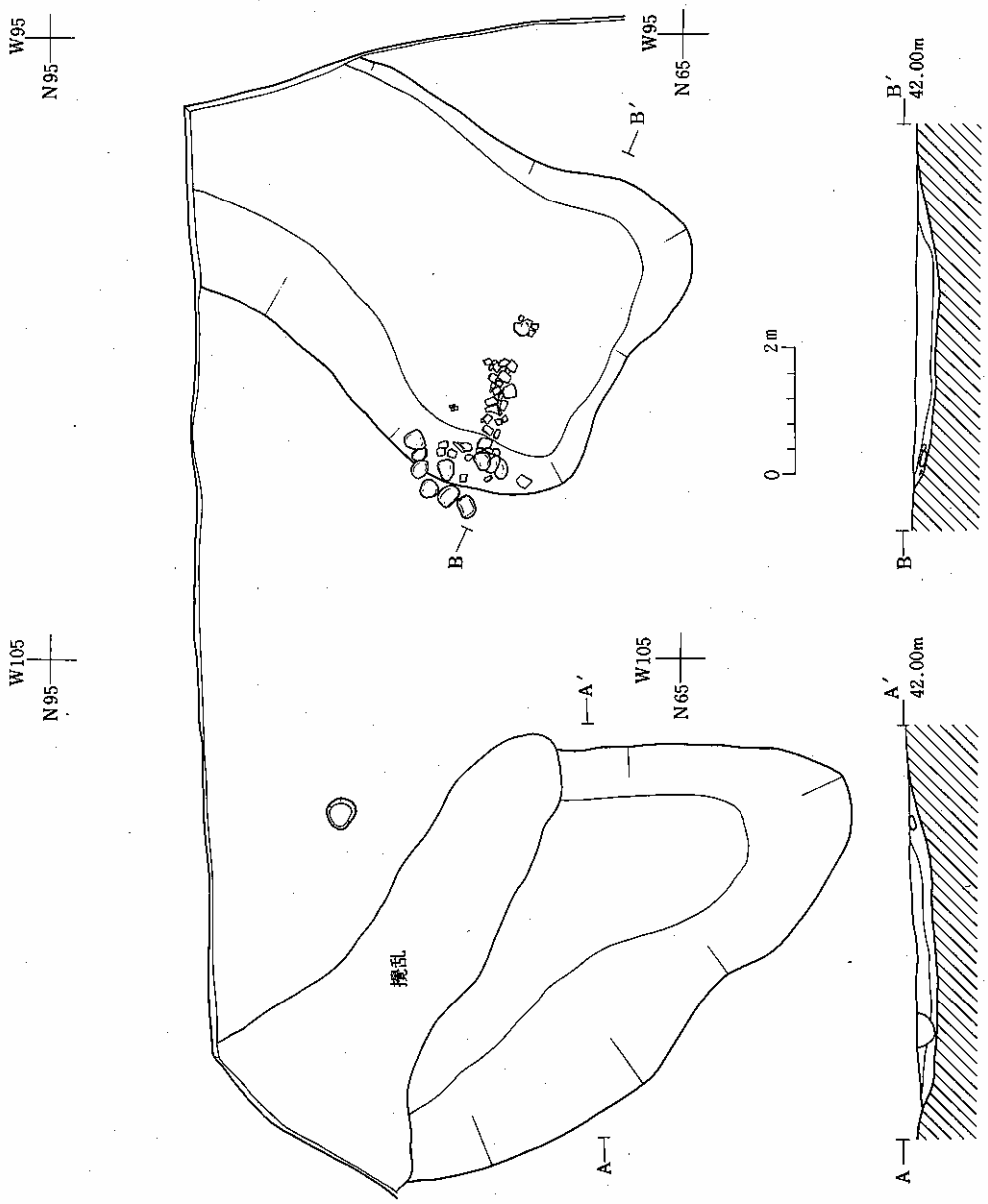


番号	器種	層位	特徴	登録 No.	分類
1～21	鉄鏃	羨道床面	片丸。端片刃。フクラ付き。長篦被。棘状突起。尖根。	24－E.1～E21	
22	〃	〃	片丸。両端刃。長篦被。棘状突起。	24－E22	
23	直刀	玄室床面	平棟。平造。フクラ付き。両関。	24－E23	
24	責金具	〃	金銅製。金メッキ(?)	24－E24	
25	鞘口金具	〃		24－E25	
26	把縁金具	〃		24－E26	
27	鍔	〃	倒卵形。六窓。両打返耳。	24－E27	
28	直刀	〃	平棟。平造。両関。	24－E28	
29	琥珀玉	〃		24－S 1	

第９図　第24号墳石室出土遺物

第104号墳

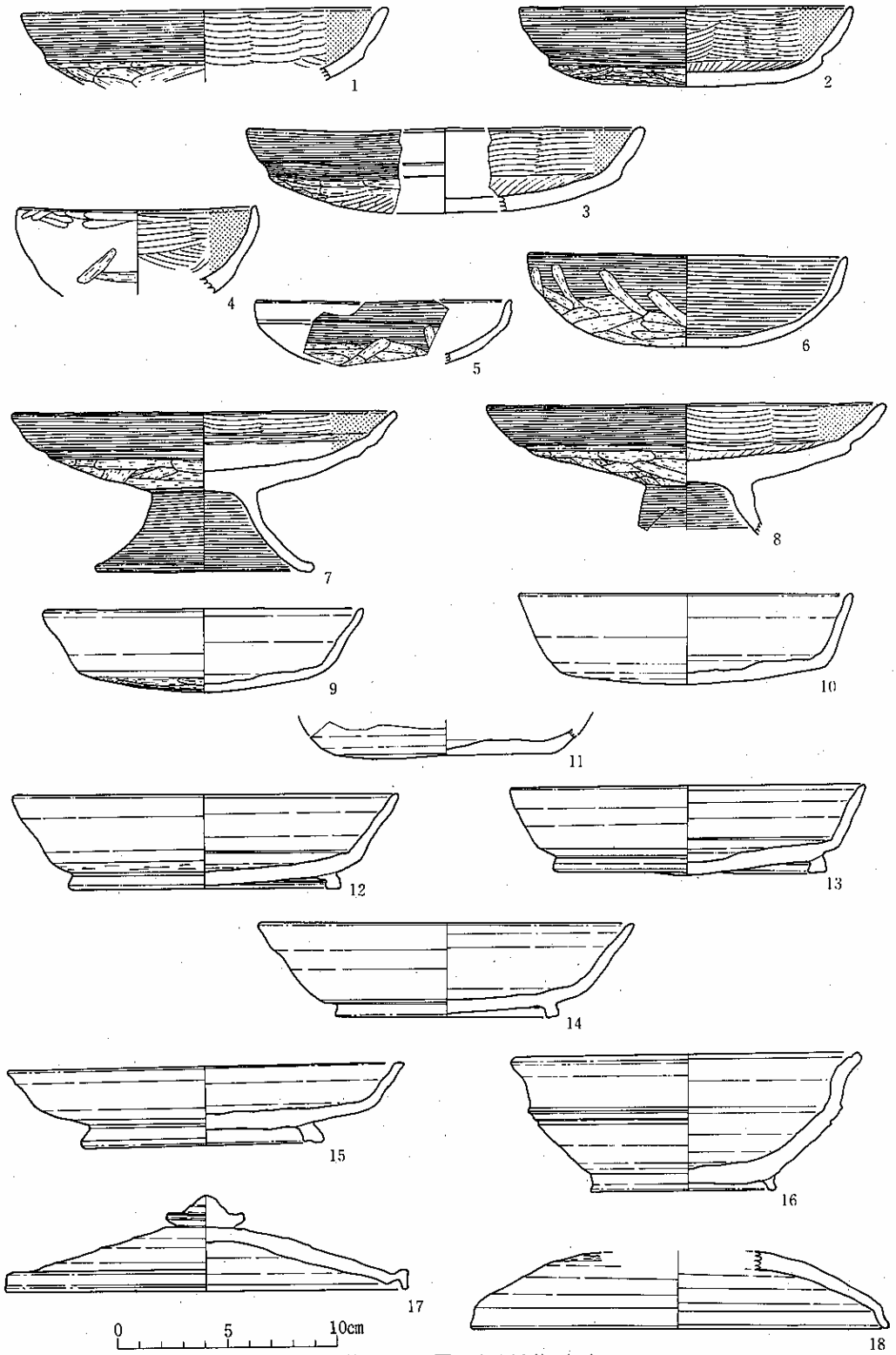
〔立地〕地蔵堂地区に属す。尾根状の微高地上のほぼ中央の高所に占地しており、近隣に古墳の分布は確認できなかった。



第104号 墳 計 測 値

主 体 部								外 部 施 設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
——	——	——	——	——	——	——	——	13.6m	4.5 m	0.5 m	——

第10図　第104号墳全景



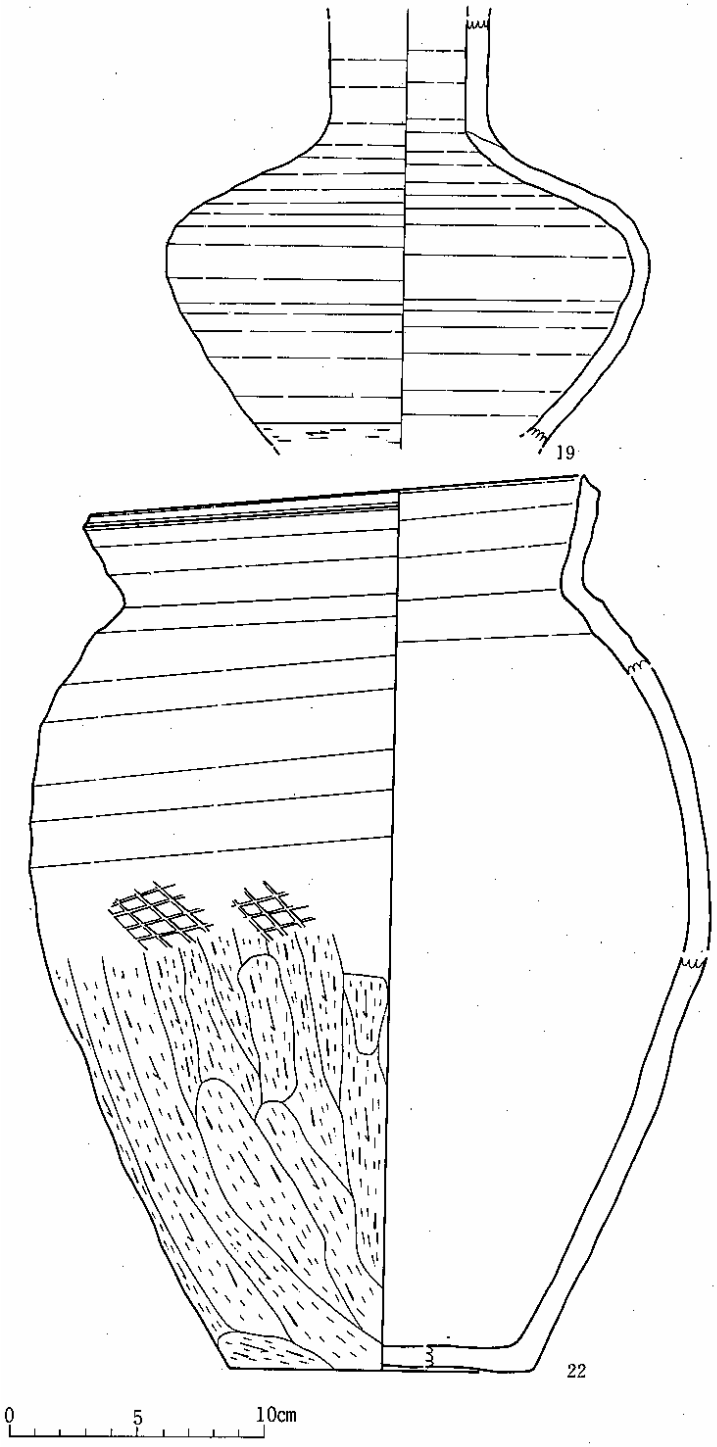
第11図　第104号墳周溝出土遺物（1）

〔確認状況〕水田面下約 30 ㎝で周湟の一部が確認された。確認された周湟は南半のみで北半は町道四釜、王城寺線の道路敷下に延びているため未調査である。周湟以外の主体部、その他の施設などはみとめられない。周湟規模からみて直径 13m 前後の比較的大きな円墳であったと考えられる。

〔主体部〕確認されていない。削平により失われたものと考えられる。

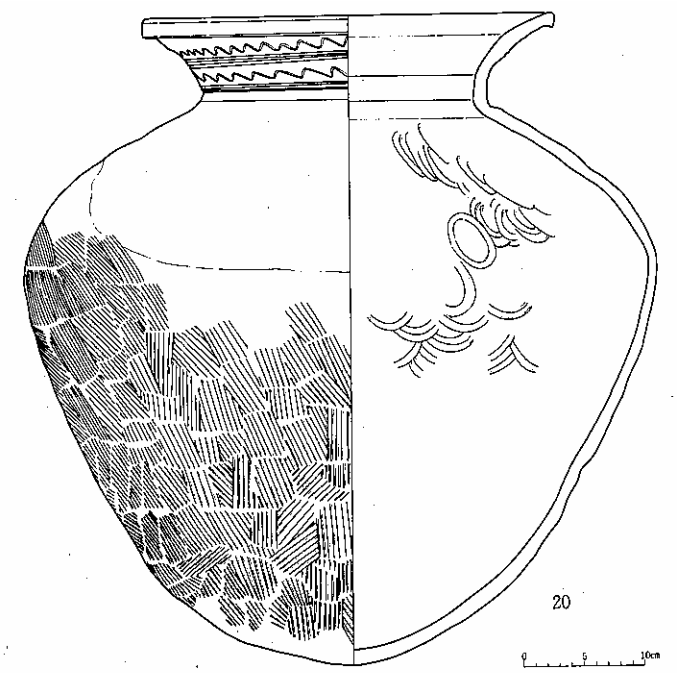
〔外部施設〕周湟だけが確認された。なお周湟が途切れる南端部の上縁（第10図参照）に配石が一部残存しているがこれらは他の古墳の例から類推して前庭石組みに連なる配石と考えられる。（第24号墳、第３図参照）、周湟は地山面で検出され、平面形が内周は直径13～14mの正円形、外周もほぼ正円形を呈すると考えられる。底面はほぼ平坦で南側中央部では途切れている。斜面、底面は全て地山で主に褐色砂質シルトからなるが、部分的に砂礫層が露出している。堆積土は２層みとめられ、第１層は黄褐色粘土層、第２層（底面堆積土）は暗褐色砂質シルト層でいずれもレンズ状に堆積している。

〔出土遺物〕周湟南東端部の底面、堆積土第２層から多量の土師器、須恵器類が出土している。



第12図　第104号墳周湟出土遺物（２）

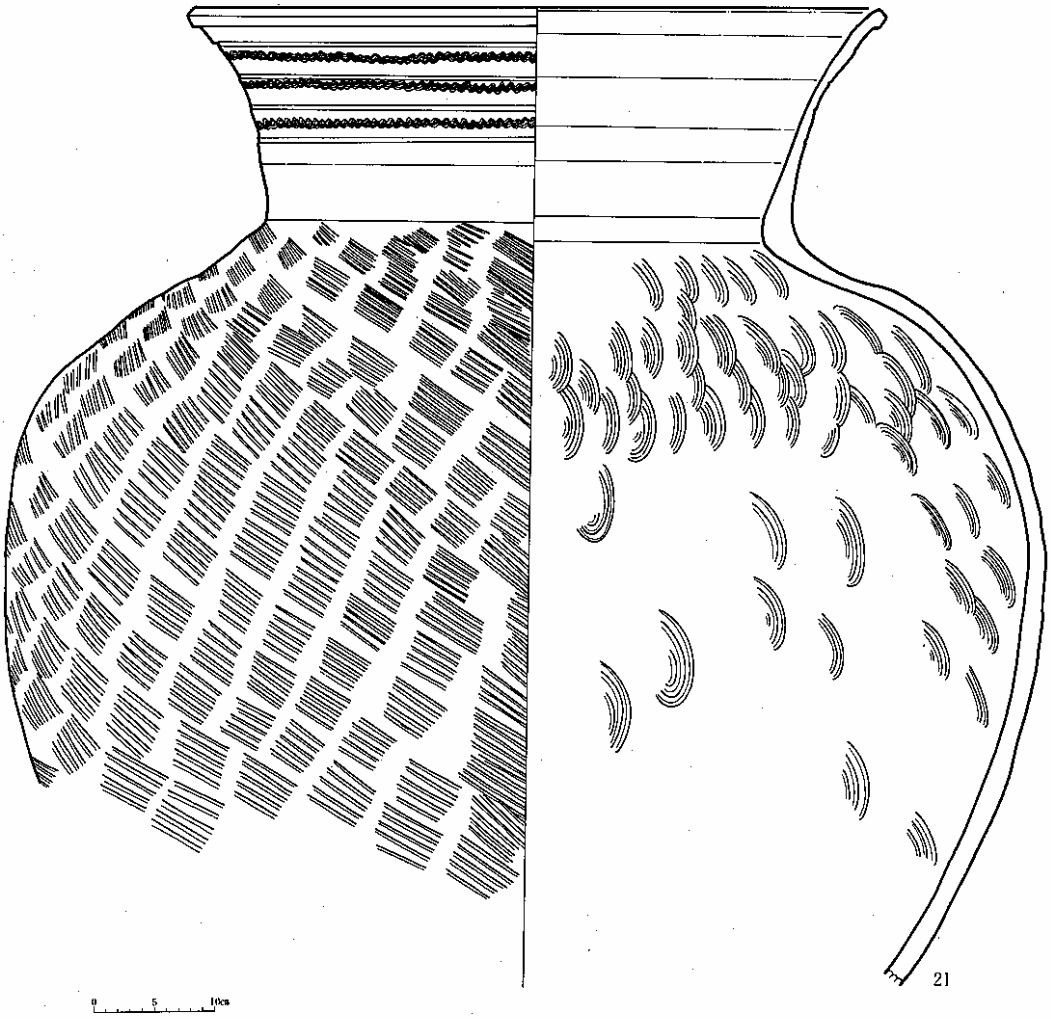
図示できたものは土師器坏６点（１～６）、同高坏２点（７、８）、須恵器坏３点（９～11）、同高台付坏４点（12～15）、同高台付埦１点（16）、同蓋２点（17、18）、同長頸瓶１点（19）、同甕３点（20～22）、でこの他に土師器坏類の破片が数点分出土している。以上の土器類はいずれも小破片となり墳丘方向から周湟内に流入した状態で出土しており、周湟内側斜面もしくは直上の堆積土第２層中に含まれていたものである。以上の土器類はその出土状態からいずれも本古墳に伴う遺物であると考えられる。



第13図　第104号墳周湟出土遺物（３）

番号	器種	層位	特徴	登録 No.	分類
1	土師器　坏	周湟底面	内黒。器下半部の内外に段。段以上は内弯。	104－Po、3	AⅠ2biiイ
2	〃	〃	〃	104－Po、4	AⅠ2biiイ
3	〃	〃	内黒。器下半部の内外に段。底部外面にヘラミガキ。	104－Po、21	AⅠ2biiロ
4	〃	〃	内黒。平底か(？)。内外ヘラミガキ。	104－Po、7	AⅢ2b
5	〃	〃	内面ナデ調整。口縁部で器壁が屈折する。	104－Po、2	BⅥⅥ
6	〃	〃	内面ナデ調整。口縁下部に稜。口縁は外傾。	104－Po、1	BⅤ
7	土師器高　坏	〃	大型。坏部：内黒、器内外に段。脚部：中空、大きく外反。	104－Po、9	B
8	〃	〃	〃	104－Po、8	〃
9	須恵器　坏	〃	丸底。体部下端に稜。底部全面手持ちケズリ再調整。	104－Po、6	AⅡ1
10	〃	〃	〃	104－Po、5	〃
11	〃	〃	平底。底部全面を手持ちヘラケズリ再調整。	104－Po、20	〃
12	須恵器台付坏	〃	体部は直線的に外傾。丸底状。底部全面を回転ヘラケズリ。	104－Po、13	CⅡ
13	〃	〃	〃	104－Po、12	〃
14	〃	〃	体部は直線的に外傾。丸底状。底部は手持ちヘラケズリ。	104－Po、11	〃
15	〃	〃	体部、口縁部は低く直線的に外傾。丸底風平底。	104－Po、10	CⅠ
16	須恵器台付埦	〃	口縁部内面に沈線。体部中位外面に稜、沈線。	104－Po、17	
17	須恵器　蓋	〃	宝珠ツマミ。口縁部は段差をもって屈曲。内面に凹線。	104－Po、18	Ⅲ
18	〃	〃	高い天井から口縁部が屈曲し、端部は外方につまみ出す。	104－Po、19	Ⅳ
19	須恵器長頸瓶	〃	なで肩。	104－Po、22	
20	須恵器　甕	〃	中型。頸部に二段のヘラ描き波状文。	104－Po、15	AⅡ
21	〃	〃	大型。頸部に三段の櫛描き波状文。	104－Po、16	AⅠ
22	〃	〃	平底。口縁端部は上方にツマミ上げられる。	104－Po、23	D

第104号墳周湟出土遺物観察表



第14図　第104号墳周湟出土遺物（４）

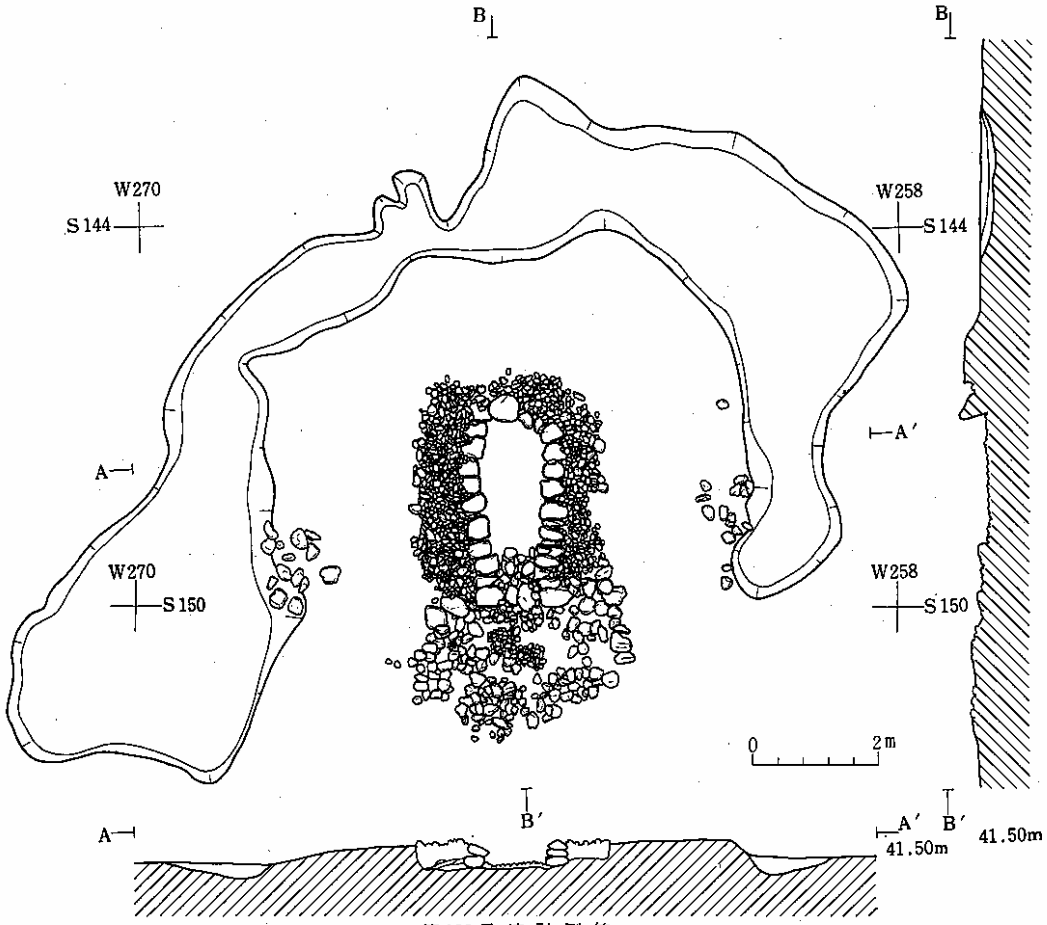
第106号墳

〔立地〕新宿二番地区に属する。南側に第107号墳が隣接している。尾根状の微高地の東縁部に立地し、すぐ東側は沢状の地形を介して深山地区に隣接する位置にある。

〔確認状況〕水田面下20cmに残存する石室の石材が認められ、周囲に、周湟、前庭等の施設が確認された。削平により石室上部が失われ、外部諸施設の破壊も著しいが、石室の下部と前庭部の石組みは良好に残存していた。これは本墳の立地が尾根上の微高地のはずれのやや低所に位置することが幸したものと考えられる。墳丘は径６m前後の円墳になると考えられる。

〔主体部〕河原石使用の横穴式石室で玄室部に弱い胴張りがみられる。また本墳の特徴として羨道が約１m足らずと極端に短いことがあげられる。奥壁部には巨石が一つ立てられ、いわゆる鏡石を構成している。この鏡石は頭部が大きく欠損し上部が玄室側に傾いているがこれは

後世の開発行為によって破損し原位置から若干移動したもので、本来は直立した一枚石の奥壁であったと考えられる。側壁は玄室部、羨道部ともに枕状の石を互目積みにし、それらの間隙に小石をかませ安定をもたせている。残存するのは二～三段程度であるが、かなり強い持ち送りがあったものと推定される。玄門、羨門部は偏平な石を用い通目積みにしている。床面は玄室部が羨道部よりも約16cmほど低く、羨道部床面はさらに前庭部よりも20cm前後低くなり、前庭から玄室へ階段状に低くなっている。羨道、玄室とも径５～10cm前後の小石がほぼ平坦に敷きつめられ、玄門部、羨門部には梱石がみられる。天井は削平により残存していないが、奥壁、側壁の状況や、石室規模からみて、その高さは玄室部でも、床面から１m前後であったと推定される。閉塞は羨道一ぱいに径10～20cmの石が乱雑につめこまれていたが羨門部ではやゝ偏平で大型の石が整然と積み重ねられていた。裏込めは、石室の掘り方内に径５cm前後の小石と砂



第106号 墳 計 測 値

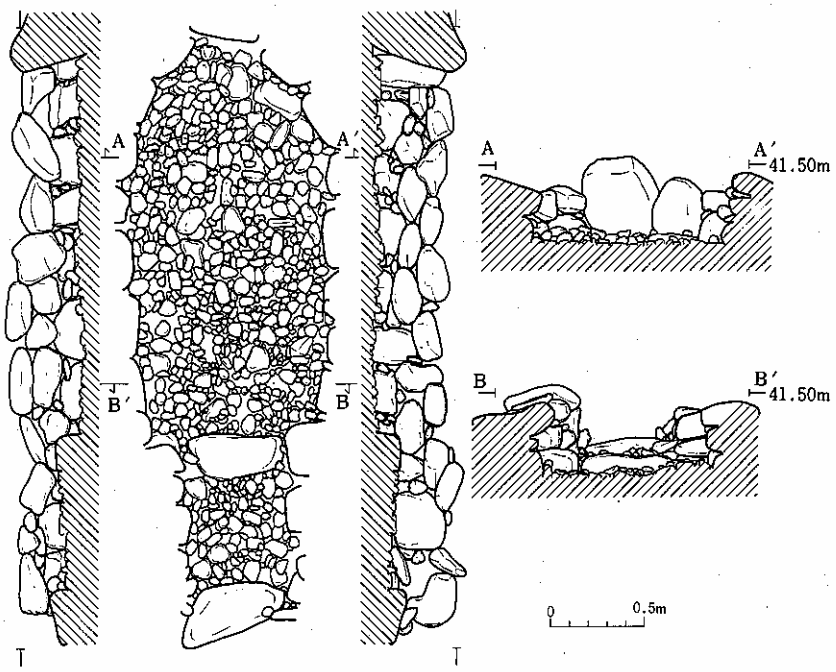
主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
3.2m	2.1m	1.1m	0.35m	1.0m	0.5m	2.2m	N-10°-W	7.8m	4.0m	0.3m	――

第15図　第106号墳全景

質シルトを充塡したものである。

〔外部施設〕前庭、周湟がみとめられる。なお、石室の東、西の周湟内縁部に河原石が集中してみとめられ、葺石の存在した可能性もあるが、その他の部分に石は全くみとめられずこれがむしろ性格不明の外部施設を構成していたと考えることができる。前庭は羨門前方に開いている。地山を掘り込んだのち羨門を中心に「コ」の字型に石を二～三段配列して区画を作り、底面にはやや凹凸があるが径10cm前後の石が粗く敷かれている。前庭底面は、石室羨道の床面より20cm前後、玄室床面より30cm前後も高いが地山を掘り込んで作られたものである。周波は確認の時点からその輪郭が不明瞭であったが、掘り下げた結果最も深い石室の東西部でも20cm前後と非常に浅く、しかも内外周ともに極端に不整形で南半部では途切れる形であることが確認された。これは削平により周湟の深い部分の底面付近のみがかろうじて残ったためであると考えられる。堆積土は基本的に１層で暗褐色砂質シルト層がみとめられる。

〔構築方法〕石室、前庭はともにまず地山に達する平面形が長方形の掘り方が掘られている。側壁根石、奥壁、梱石等が配置されその外側に裏込めが寄せかけられ固定されている。次に側壁は漸次裏込めが寄せかけられ互目に積み重ね、その間隙に小石がかんでもち送りされている。床面敷石は掘り方底面に５cm弱の厚さに敷かれている。墳丘は削平により失われたものと考えられるが、石室掘り方が深いのに対して石室規模が小さく天井の高さも床面から１m前後と推



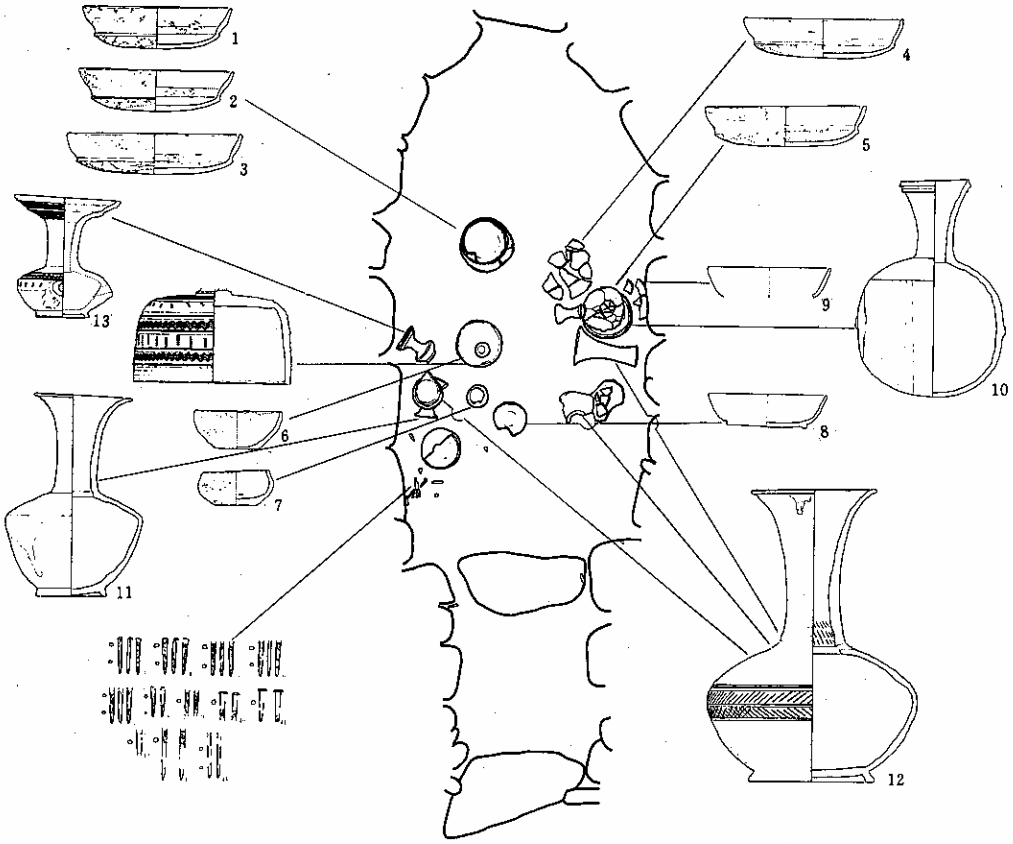
第16図　第106号墳石室

定されることから比較的低い墳丘であったと考えられる。周湟はその意味では墳丘を削り出し、封土を供給するという墳丘を高く見せる上での二重の役割を果たしていると考えられる。

〔出土遺物〕玄室の床面もしくはその直上から13点の土器類と鉄製角釘が出土している。内訳は、土師器坏６点（１～６）、同埦１点（７）、須恵器高台付坏２点（８、９）、須恵器蓋１点

番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器　坏	玄室内堆積土	内黒。器下部内外に段。外面にヘラミガキ。	106－Po、1	AⅠ2biiロ
2	〃	〃	〃	106－Po、2	〃
3	〃	〃	〃	106－Po、3	〃
4	〃	玄室床面	〃	106－Po、4	〃
5	〃	〃	〃	106－Po、5	〃
6	〃	玄室内堆積土	内外黒色処理。平底。口縁部、体部は内弯気味に外傾。	106－Po、8	AⅢ2b
7	土師器　埦	〃	内外黒色処理。平底。口縁部、体部は内弯。	106－Po、7	
8	須恵器台付坏	玄室内堆積土	体部は直線的に外傾。底部は丸底風平底。	106－Po、9	CⅡ
9	〃	玄室床面	体部は直線的に外傾。	106－Po、10	〃
10	須恵器横　瓶	〃	体部球形。口縁下部に段。口縁端部はつまみ上げ。	106－Po、11	
11	須恵器長頸瓶	〃	肩部に稜。口縁は大きく外反。	106－Po、13	
12	〃	〃	なで肩。体部中位に櫛歯列点波状文。口縁外反。	106－Po、12	
13	須恵器　瑞	〃	口縁下端内外に段。櫛描波状文。櫛歯列点波状文。	106－Po、14	
14	須恵器　蓋	玄室内堆積土	櫛描波状文。櫛歯列点波状文。	106－Po、15	BⅠ
15	〃	前庭底面	口縁端部は屈曲。内面に浅い凹線。	106－Po、16	BⅢ
16	須恵器長頸瓶	〃	肩部に稜。	106－Po、17	
17～28	釘	玄室底面	鉄製角釘。頭部は折り返されている。	106－E1～E12	

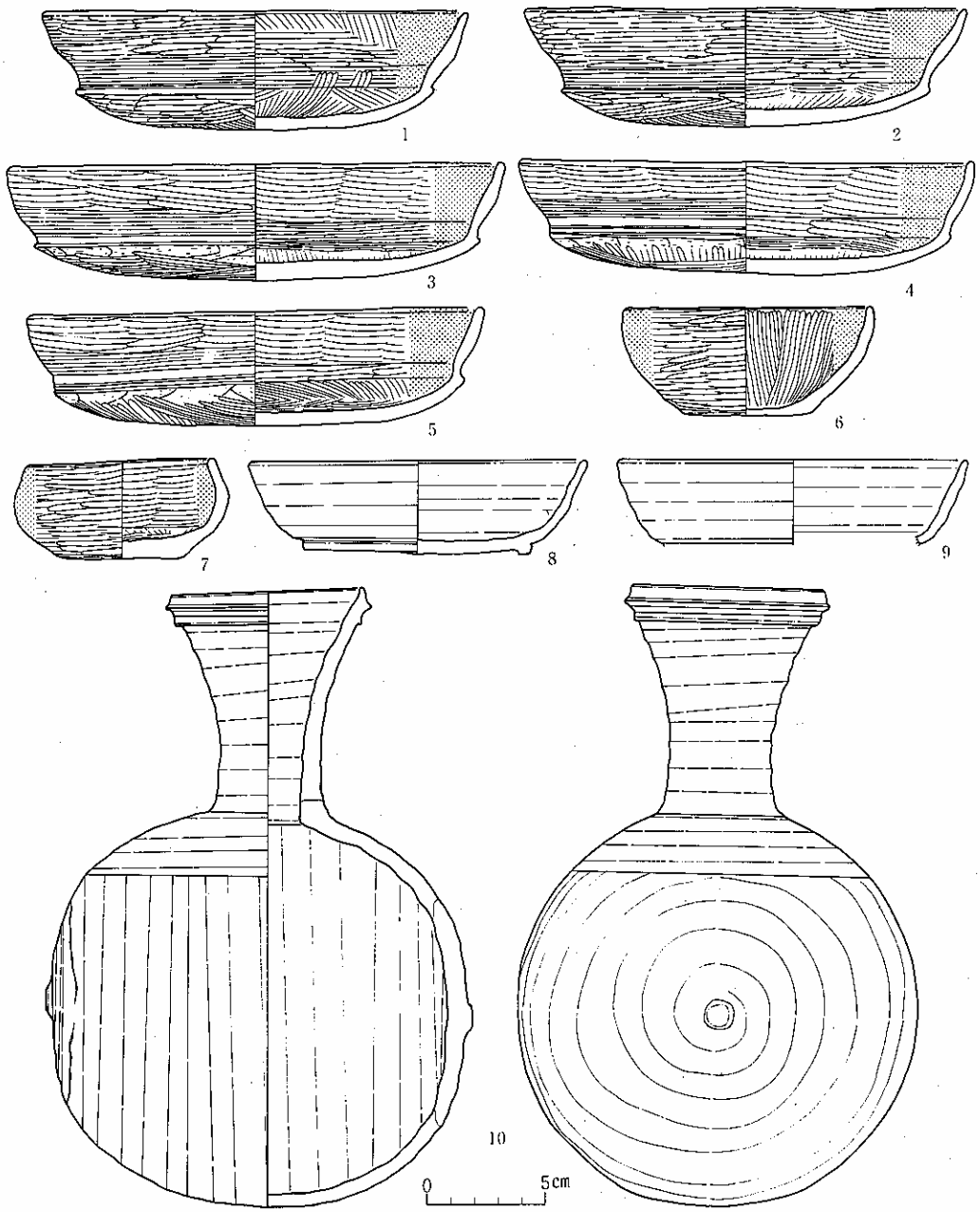
第106号墳出土遺物観察表



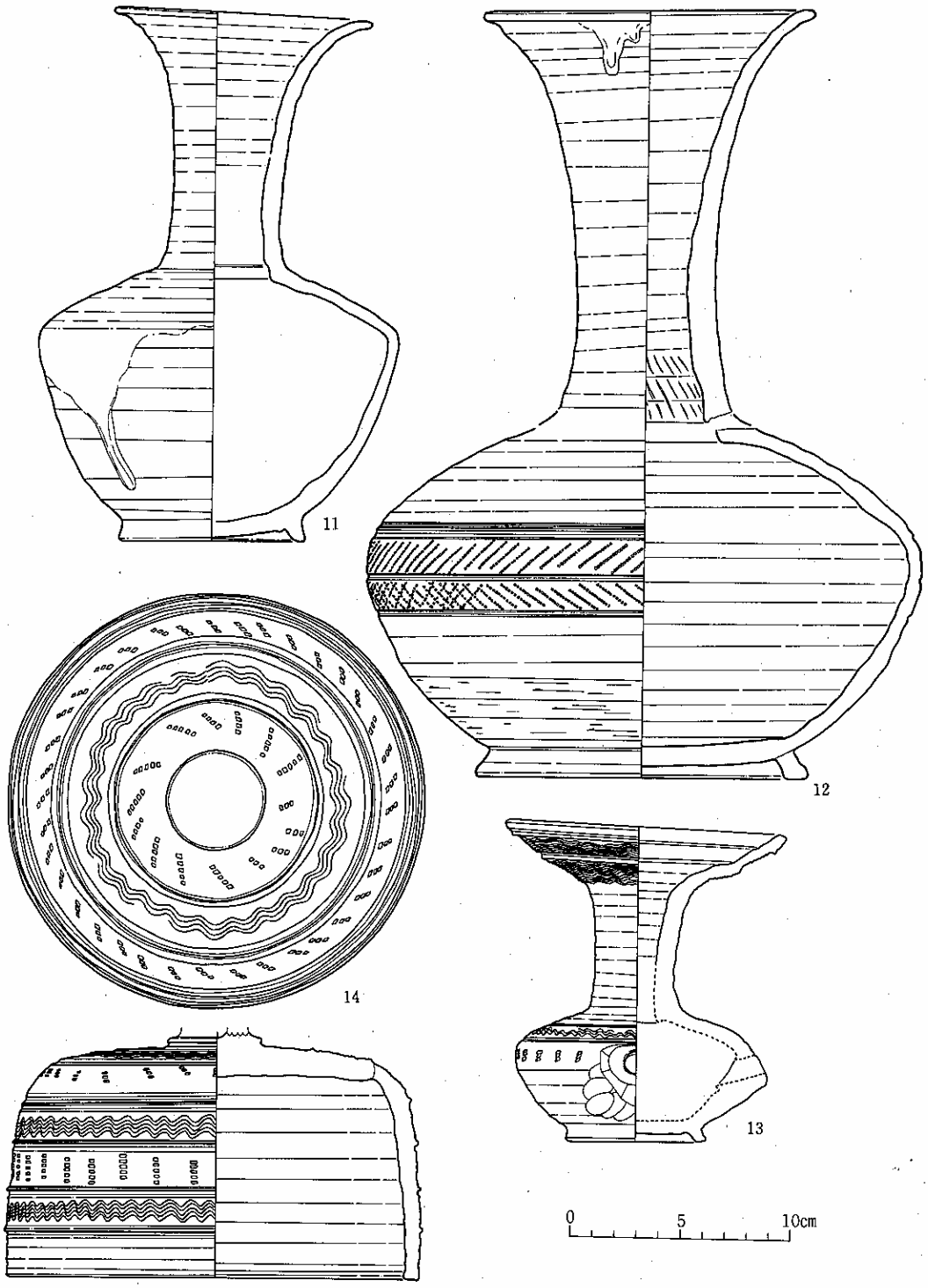
第17図　第106号墳玄室遺物出土状況

（14）、須恵器長頸瓶２点（11、12）、同横瓶１点（10）、須恵器𤮋１点（第19図－13）、鉄製角釘は図示できるもの12点（第20図17～28）である。玄室内に攪乱、盗掘は及んでおらず上記の遺物はいずれも本墳に伴うものである。なお遺体の痕跡は認められなかった。前庭底面からは須恵器壺、蓋各１点（15、16）、が出土している。出土状況から本墳に伴うものと考えられる。

以上の遺物の出土状況は第16図に示した如くである。石室左右の土器類は床面に接地している



第18図　第106号墳玄室出土遺物（１）



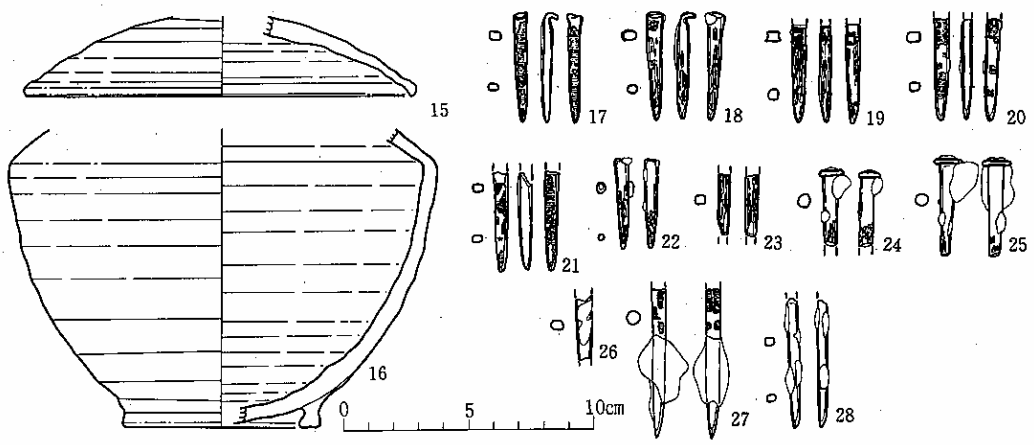
第19図　第106号墳玄室出土遺物（2）

ものが多いのに対して、石室中央部の土器類はいずれも床面から数cm浮いておりこれら石室中央部の土器は遺骸上に置かれた可能性が強く玄室内の土器類はその有り方から大きく二群に分けることができる。しかし土師器坏のうち床面から浮いているもの（1、2、3）と床面に接地しているもの（5）とでは形態、細部成作技法、焼成等が酷似しており同時に製作されたものと考えることができる。したがって両群土器類のあり方の違いは追葬などの数次にわたる副葬品の搬入の結果を示すものではなく、一回の副葬品の搬入、配置の状態を示すものと考えたい。なお釘が玄室南西隅に集中していること、須恵器蓋（14）の内面に漆状の被膜が付着していることなど非常に興味深い点も多いが、その意味、性格については不明な点が多い。なお、本墳周辺の表土からロクロ使用の土師器類、近世磁器が出土しているが図示できるものはなく、本墳に直接関係するような出土状況を示すものはなかった。

第107号墳

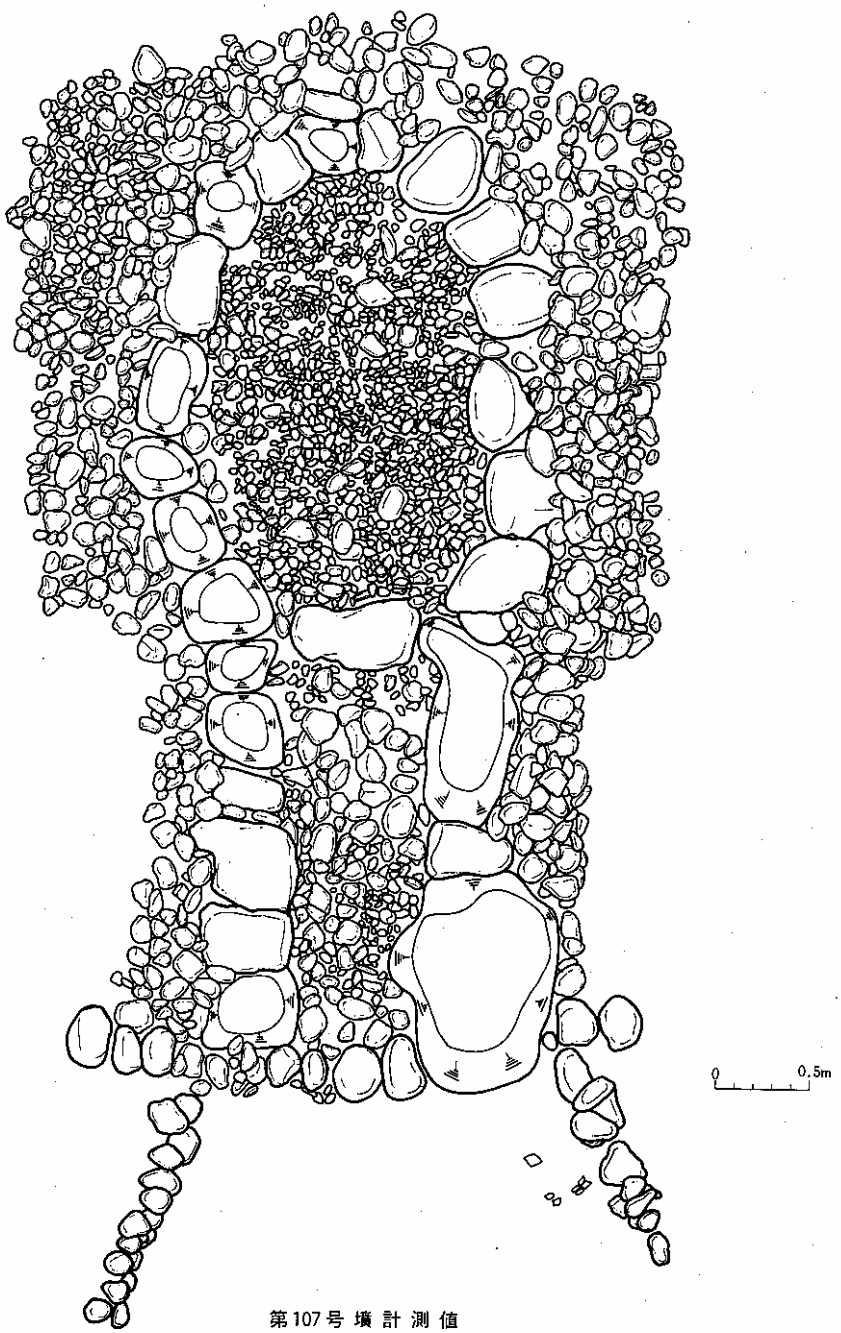
〔立地〕新宿二番地区に属し、北側に第106号墳、西側に第108号墳が隣接している。特に第108号墳とは近接しており本古墳の周湟は、第108号墳の周湟を避けている。第106号墳と同様尾根状の微高地の東縁部に位置し、すぐ東側は沢状の地形を介して深山地区に隣接している。

〔確認状況〕水田面下20cmに残存する石室の石材が確認され周囲に周湟、前庭などの施設が確認された。削平により上部の構造は失われており、石室、周湟ともに基底面がかろうじて残存していた。墳丘は9m前後の円墳になると推定されるが封土は全て失われている。なお本古墳の北辺に時期不明の溝が東西に走っている。この溝は石室部分では石室を避けるように北側に屈曲しさらに周湟を切っていることから本古墳構築後に掘り込まれたものである。



第20図　第106号墳前庭、玄室出土遺物

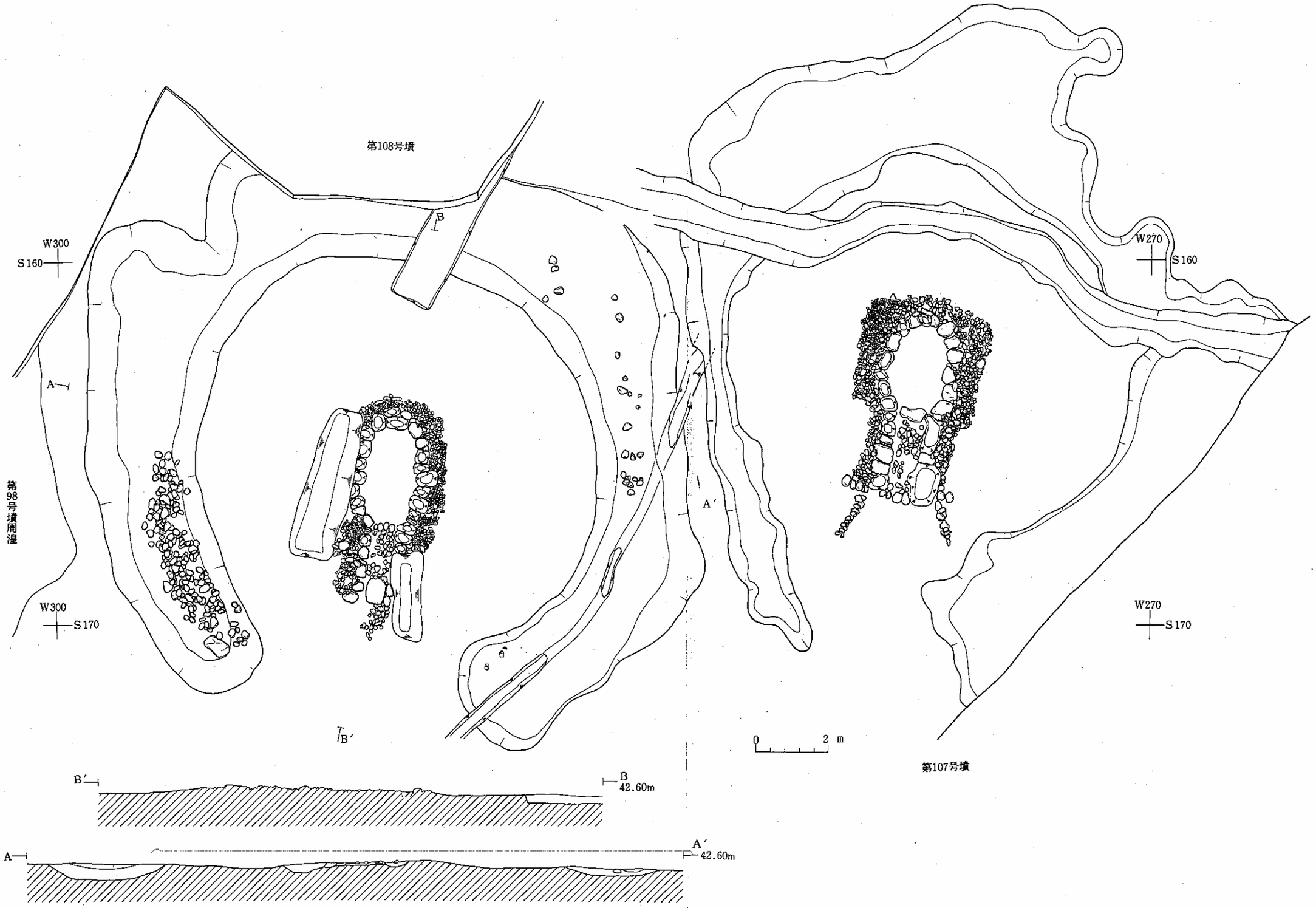
〔主体部〕河原石使用の横穴式石室で玄室部に強い胴張りをもつ。奥壁部は側壁同様の枕状の石により緩やかなカーブを作り出しており、いわゆる鏡石のような巨石は使用されていない。壁側は根石が部分的に残存するだけであるが抜き取りの痕跡から石室の平面形態は明確に復元できる。羨門、玄門部にはいずれも深い抜き取り痕がみとめられ柱状の石が埋置されていたも



第107号 墳 計 測 値

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
5.1m	2.5m	2.6m	――	1.4m	0.7m	2.3m	N-4.5°-E	11.2m	4.6m	0.3m	――

第21図　第107号墳石室



第22図　第107、108号墳全景

のと考えられる。床面は、羨道部が玄室部よりも約10cm前庭底面よりも15cm前後高い。玄室部には径２～３cm前後の非常に細かい小石がほぼ水平に敷き詰められているが羨道部には径20cm前後の石が粗く敷かれている。玄門部には梱石が認められるが羨門部には梱石状に大きめの石が数個並べられているにすぎない。閉塞は羨道部内床面上に閉塞石の一部と考えられる径20cm前後の石が数個残存していたが大半は失われており詳細は明らかでない。裏込めは石室掘り方内に径10cm前後の石とシルト質の土を充填したものである。

〔外部施設〕前庭、周湟が認められる。テラスの存在も推定されるが、封土、葺石等が全く残存していないため明らかではない。前庭は表門の前方に開けている。地山を掘り込んだ後羨門を中心に「ハ」の字型に石を配列して区画を作り出しておりその底面はほぼ平坦である。前庭のさらに南方は緩やかに南に傾斜している。この緩斜面は人為的なものではなく東側の沢状地形が本古墳の前方で一部西側に廻り込んでいるためのものである。周湟は内周の平面形がほぼ円形を呈し、外周は極めて不整形である。特に西部は隣接する第108号墳の周湟を避け極端に巾を減じており巾がわずかに60cm足らずの部分もある。深さは最も深い北西部で約25cmあるが、北部から東部にかけては礫層の地山が浅く分布するためわずか５cm足らずであり、周湟底面は礫層となっている。堆積土は基本的に１層のみみとめられ、暗褐色もしくは褐色の砂質シルト層である。

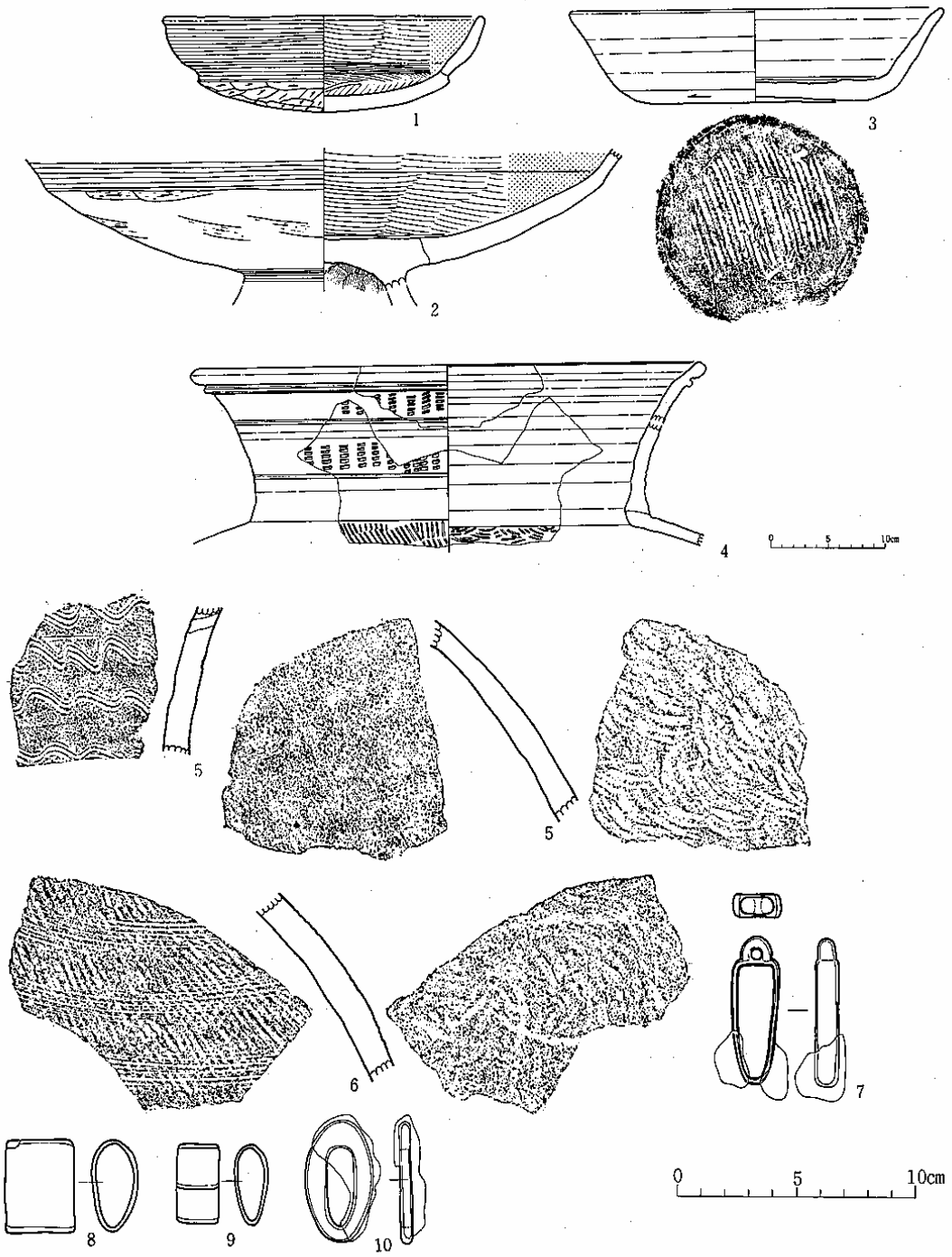
〔構築方法〕石室、前庭についてはともにまず地山に達する平面形が前方後方型の掘り方が掘られている。次に側壁根石、梱石等を一定のレベルにするために、それら各々について据え方が掘られた後側壁根石、梱石等が配置され、その外側に裏込めが寄せかけられ固定されている。次に床面は、掘り方底面に一旦粘土ブロックの混じるシルト層が約５cmの厚さに敷かれ、更にその上に同様のシルトと径２～３cmの細かい小石が約20cmの厚さに敷かれている。側壁根石の上面と床面敷石の上面とのレベルはほぼ一致する。

〔出土遺物〕玄室、羨道の床面から鉄製刀装具、鉄鏃の破片が出土している。図示できるのは鍔(10)、吊り金具（7）、鎹（8、9）の４点のみで、他には鉄鏃ののかづき、茎部の断片が十数片あるだけである。（7）は玄室南東隅、（8～10）は羨道中央付近から出土した。前庭堆積土から土師器坏（1）、同高坏（2）、須恵器坏（3）が出土した。（1、2）は東側の前庭石組寄りから、（3）は西側の石組に寄った位置からそれぞれ細片となって出土している。周湟の東南部の内側寄り底面、堆積土からは須恵器、甕３点分の破片（4、5、6）が出土した。

番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器　坏	前庭堆積土	内黒。器中位の内外に段。段以上内弯。	107－Po、1	AⅠ1aiiイ
2	土師器高　坏	〃	大型。坏部：内黒、器内外に段。脚部：中空。	107－Po、2	B
3	須恵器　坏	〃	平底。体部下端、底部周縁回転ケズリ再調整。静止糸切。	107－Po、3	BⅡ2a
4	須恵器　甕	周湟堆積土	大型。口縁下部に沈線。頸部に櫛歯列点波状文二段。	107－Po、4	AⅠ
5	〃	〃	大型。頸部に櫛描波状文。	107－Po、6	AⅠ
6	〃	〃	中型。	107－Po、5	BⅠ
7	吊　金　具	羨道床面	金銅製。金メッキ。	107－E、1	
8	鞘口金具	玄室床面	鉄製。	107－E、2	
9	鎹	〃	鉄製。	107－E、3	
10	鍔	〃	鉄製。喰み出し鍔。	107－E、4	

第107号墳出土遺物観察表

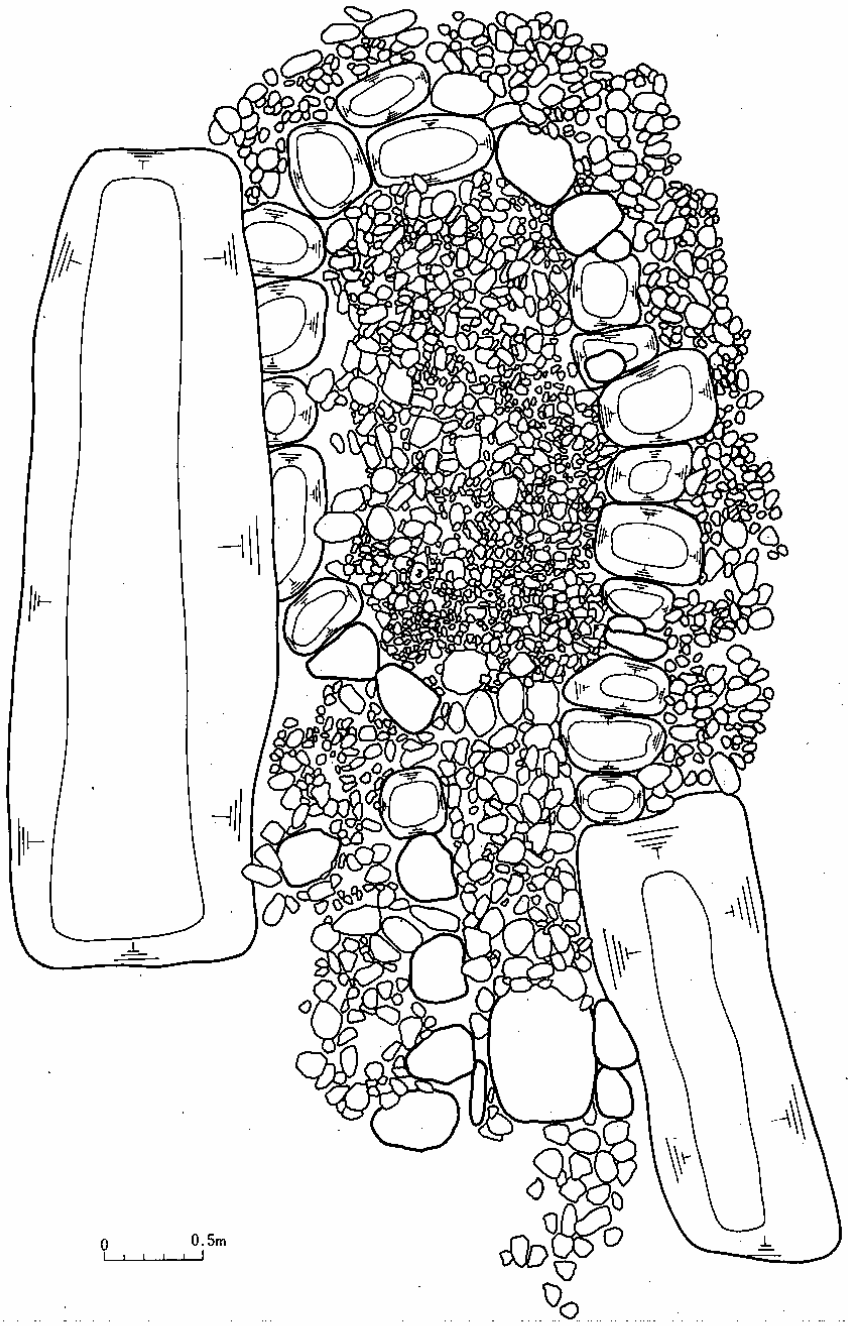
以上の遺物はその出土状況から本古墳に伴う遺物と考えられる。この他本古墳周辺の表土、周湟堆積土からロクロ使用の土師器類、須恵器甕、壺類の細片が出土しているが図示できるものはなく、また本古墳に直接関係するような出土状況を示すものもない。



第23図　第107号墳出土遺物

第108号墳

〔立地〕新宿二番地区に属す。尾根状の微高地のほぼ中央の最高所付近に立地し、東側に第107号墳、西に第98号墳が近接している。



第108号 墳 計 測 値

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸内径	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
4.9 m	2.6 m	2.3 m	0.6 m	1.4 m	0.6 m	3.1 m	N-4°-E	10.8m	3.8 m	0.5 m	——

第24図　第108号墳石室

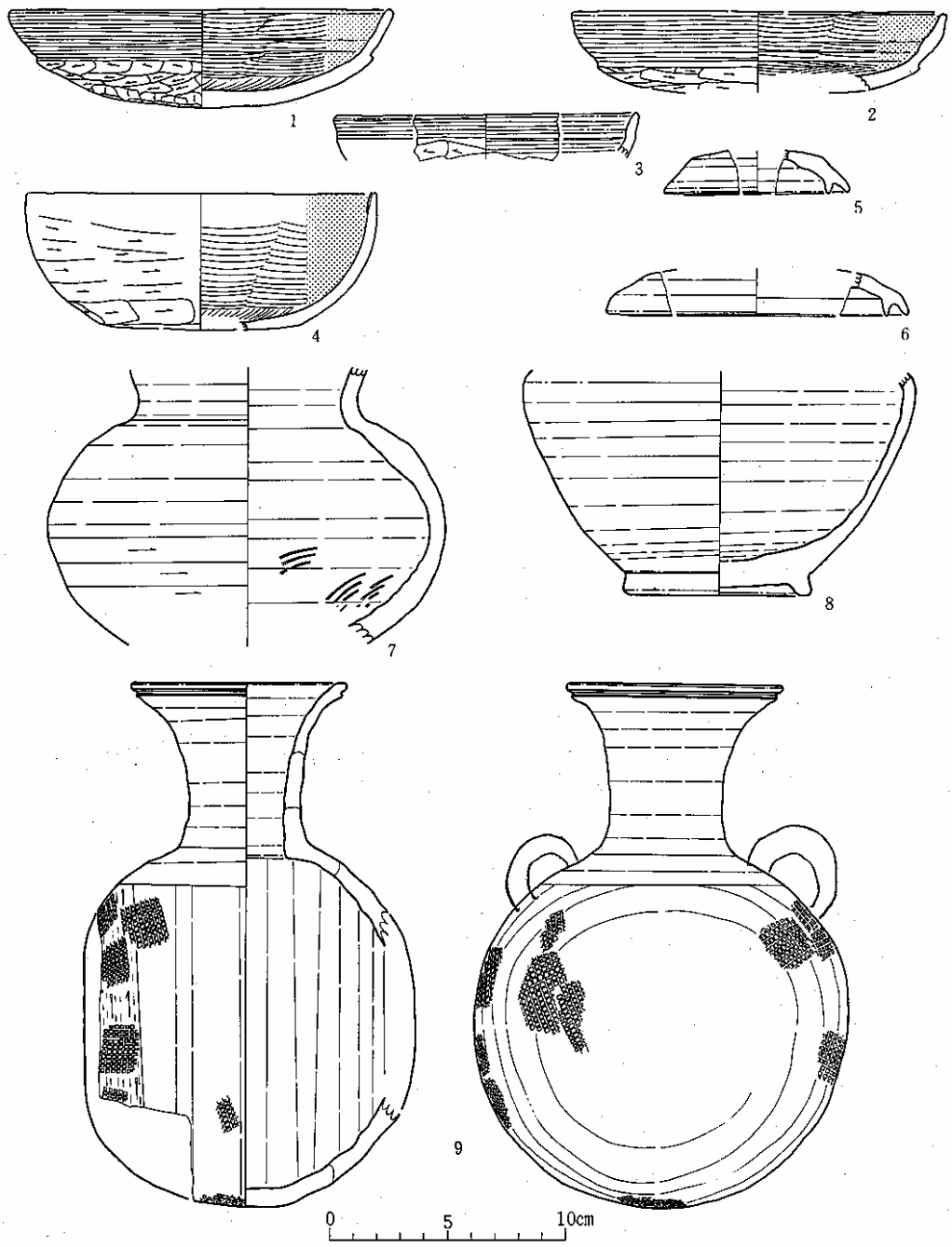
〔確認状況〕水田面下15cmに残存する石室の石材が確認され周囲に周湟が検出された。削平により上部の構造は失われており石室の基底面と周湟のみがかろうじて残存していた。墳丘は径10m前後の円墳になると推定されるが封土は全て失われている。なお南西部を主として周湟内には径20cm前後の粒のそろった石がまとまって崩落しており、葺石の廻る墳丘であったことが推定される。本古墳の北辺を時期不明の溝が東西に走っている。この溝は第107号墳の北辺から延びる溝で本古墳の周湟を切っており本古墳構築後に掘り込まれたものである。この他玄室の西辺、羨道の東辺、石室北側には破壊した石室の石材を投棄した平面形が長方形の土壙が、同じく周湟東部を南北に縦断する溝状の攪乱がみとめられる。これらは堆積土内より近・現代陶磁器破片等が出土しており最近の攪乱によるものである。

〔主体部〕横穴式石室で玄室部に弱い胴張りをもつ。奥壁部の石材は抜き取られているが、その抜き取りの痕跡は長方形を呈し、他の側壁用材の抜き取りに比して大きいことから巨石が数段積まれ、いわゆる鏡石を構成する構造であったと推定される。側壁も玄室北東隅部と羨道西側の数個の石を除き他は抜き取られているが石材の抜き取り痕跡から石室の平面形は明確に復元できる。玄門、羨門部に巨石の配置は認められない。床面も削平による攪乱を一部受けている。玄室部はほぼ平坦で径２cm前後の細かい石が敷かれている。これに対し羨道もほぼ平坦であるが径10cm前後のやや大きめの石が敷かれている。玄門部には横長のやや大きめの石が四つ梱石状に並列され玄室部、羨道部を区切っている。羨門部には座布団状の梱石が埋め込まれている。玄室部と羨門部の床面の高さはほぼ同じで、玄門、羨門部の梱石の上面はそれらより10cm前後高い。閉塞はほとんど失われている。裏込めは石室掘り方内に径２～10cmの小石と粘土を充塡したもので、奥壁裏側には偏平でやや大きめの石が控え積みされている。

〔外部施設〕周湟が確認されただけで封土、葺石、テラス、前庭等は削平により失われたものと考えられる。なお周湟内には暮石が崩落したと推定される径20cm前後の粒の揃った石が堆積しているが、特に南西部にはまとまってみられた。周湟は内周の平面形が整った正円形を呈し、その中心は石室の玄室奥半部に位置する。外周もやや凹凸はあるがほぼ正円形を呈する。前庭部では途切れ、北西部ではくびれブリッチ状に浅い部分がみとめられる。底面はほぼ平坦

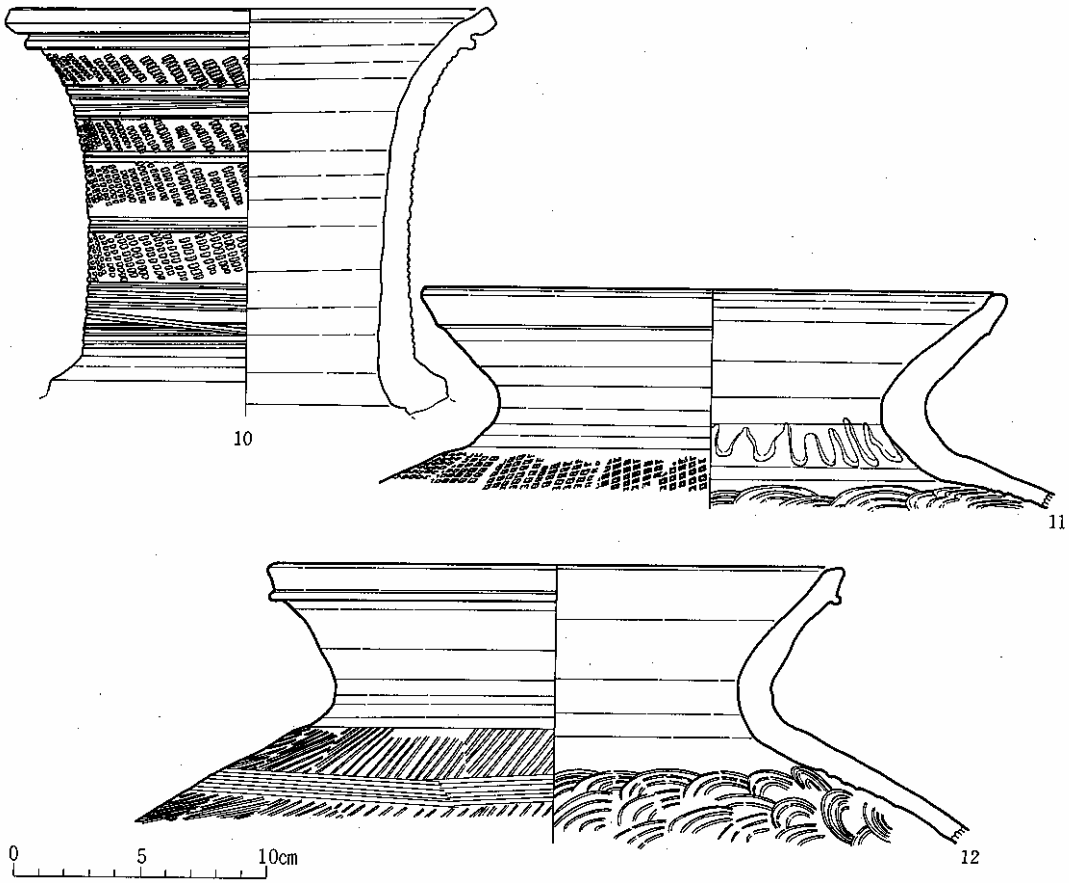
番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器　坏	周湟堆積土	内黒。器中位の内外に段。段以上内弯。	108－Po、1	A Ⅰ1aiiイ
2	〃	〃	内黒。器下部の内外に段。段以上は内弯。	108－Po、2	A Ⅰ2biiイ
3	〃	〃	内面ナデ調整。口縁下部に稜。口縁部は短かく外反。	108－Po、8	B Ⅱ
4	〃	〃	内黒。平底。体部は内弯気味に立ち上がる。	108－Po、3	A Ⅲ2a
5	須恵器　蓋	〃	内面にカエリ。水平な天井部から稜をもって口縁部へ。	108－Po、4	A
6	〃	〃	内面にカエリ。口縁端部は屈曲する。	108－Po、5	〃
7	須恵器広口壺	〃	体部はそろばん玉状。	108－Po、9	A Ⅱ
8	須恵器長頸瓶	〃	肩部に稜。	108－Po、6	
9	須恵器提　瓶	〃	口縁部に沈線。体部は偏平。	108－Po、7	
10	須恵器広口壺	〃	口縁下部に隆帯。頸部に櫛歯列点波状文四段。	108－Po、12	A Ⅱ
11	須恵器　甕	〃	中型。口縁下端に段。	108－Po、11	B Ⅰ
12	〃	〃	中型。口縁下端に隆帯。	108－Po、10	〃

第108号墳出土遺物観察表



第25図　第108号墳出土遺物（１）

であるが西～北部は南～東部に比して約10cm深い。堆積土は２層認められる。第１層は灰白色の火山灰層で西部～北部の周湟の中央上層にレンズ状に堆積しているが東部～南部にはみとめられない。厚い所で約10cm前後堆積している。第２層は黒褐色砂質シルトで周湟底面の堆積土

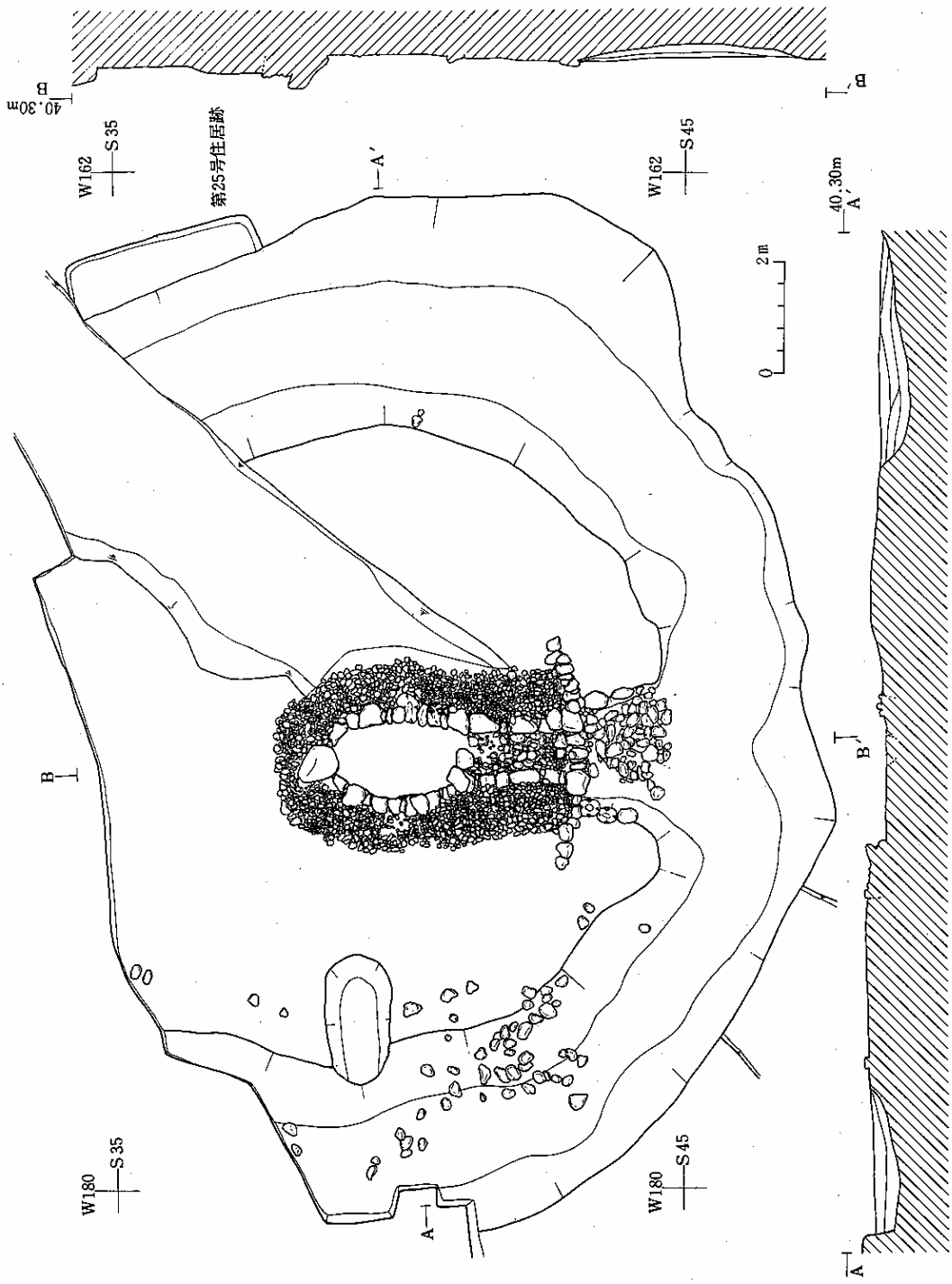


第26図　第108号墳出土遺物（２）

である。崩落石、土器類はこの層に包含されていた。

〔構築方法〕石室については平面形が石室と相似形で深さが地山に達する掘り方を掘っている。次に側壁根石・梱石等を一定のレベルに据えるためにそれら各々について据え方が掘られ側壁根石、梱石等が配置され、その外側に裏込め、控え積みが施されている。床面は側壁梱石の配置後掘り方底面に厚さ10cm前後に敷石が施されている。

〔出土遺物〕南東部の周湟底面より須恵器壺２点（７、10）、北東部の周湟底面より須恵器甕１点（10）が破片となり出土している。また南東部の周湟堆積土第２層から土師器、須恵器の破片が出土している。図示できるものは土師器坏４点（１～４）、須恵器蓋２点（５、６）、須恵器長頸瓶１点（８）、須恵器提瓶１点（９）、須恵器広口壺２点（７、10）、須恵器甕２点（11、12）である。これらはいずれも破片となり周湟内側寄りに墳丘方向から流れ込んだ状態で出土している。以上の12点の土器類は出土状態からみて本古墳に伴う遺物と考えられる。この他の周湟堆積土、周辺の表土層からロクロ使用の土師器類が出土しているが図化できるものはない。



第109号 墳 計 測 値

主 体 部								外 部 施 設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
4.4 m	2.3 m	2.1 m	0.5 m	1.3 m	0.7 m	2.5 m	N-10°-W	11.6m	4.7 m	0.4 m	9.2 m

第27図　第109号墳全景

これらの中に本古墳に直接伴う出土状態を示すものはない。

第109号墳

〔立地〕地蔵堂地区に属す。南西側に第24号墳が隣接している。尾根状の微高地の中央部の高所に占地している。

〔確認状況〕水田面下20～30cmに残存する石室の石材が確認された。周囲に前庭、葺石テラス、周湟等の施設が確認された。また墳丘、周湟の北辺は調査区外まで延び、削平により石室上部が失われ外部諸施設の破壊も著しいが、石室下部、前庭の石組み等は良好に残存していた。墳丘は葺石根石の配列からみて直径９m前後の円墳になると考えられる。なお本古墳周辺に１軒の竪穴住居跡１基の土壙が確認されている。住居跡は北東部の周湟堆積土を掘り込んで構築され、土壙は西部の墳丘、テラス、周湟堆積土を掘り込んで構築されたもので、いずれも本古墳の周湟が埋まりきった後に構築されたものである。

〔主体部〕河原石使用の横穴式石室で玄室部に胴張りをもつ。奥壁部には巨石が１つ立てられいわゆる鏡石を構成している。この鏡石は上部が外側に傾いているがこれは後世の開発行為によって原位置から若干移動したもので本来は直立した一枚石の奥壁であったと考えられる。壁側は玄室部・羨道部ともに枕状の石を互目積みにしそれらの間隙に小石をかませ安定をもたせている。残存するのは２～３段である。玄門部、羨門部は偏平な石を用いて通目積みにしている。床面は玄室部が羨道部よりも10cmほど低く、玄室部、羨道部とも径２～３cm前後の小石がそれぞれほぼ平坦に敷かれている。表門部にはやや大きめの枕状の石が梱石状に並列され前庭と羨道を区切っている。玄門部西側にもやや大きめの梱石が一石埋置されている。これに並列する東側のもう一個の石は抜き取られている。閉塞は羨道一ぱいに径10cm前後の石が乱雑につめ込まれているが羨門部ではやや偏平で大きめの石が並列され互目に積み重ねられている。裏込めは石室掘り方内に径５～10cm前後の小石が充填されたものである。

〔外部施設〕前庭・周湟・葺石根石・テラスがみとめられる。葺石は根石の一部のみがまばらに残存しているにすぎないがこれらは径20cm前後の石を使用し、平面的には玄室奥半部に中心を置く直径９m前後の正円形に配置されている。なお西部の周湟内縁部や前庭部の堆積土中には粒の揃った径20cm前後の河原石がまとまってみとめられた。これらは葺石が崩落したものと考えられる。前庭は羨門前方に開けている。地山を掘り込んだ後、羨門を中心に「コ」の字型に石を配置して区画を作っている。底面は羨門部梱石より約10cm低く、南側に廻る周湟に向って緩やかに移行しておりその区切りは不明瞭である。一方テラスに対しては石組みによって明確に区切られ10cm前後低くなっている。なお前庭堆積土は２層みとめられたがこの上部に径30cm前後の葺石がまとまって崩落していた。前庭堆積土第１層は暗褐色シルト、第２層（底面

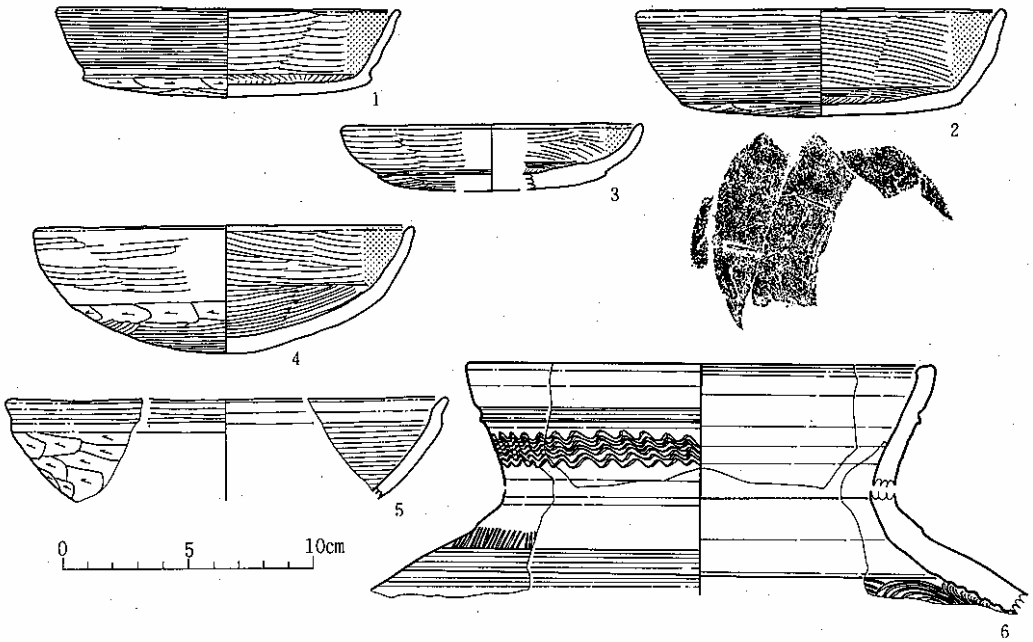
堆積土）は褐色砂質シルト層でいずれも前庭を覆っている。テラスは暮石と周湟の間にある巾１m前後の平坦面で旧表土面を上面としている。前庭の両側から左右に延び、本来は墳丘を一周する施設だったと考えられる。周湟は内周の平面形が整った正円形を呈しその中心は石室の玄室奥半部に位置する。外周もやや凹凸はあるがほぼ正円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが浅めの南部から深めの東部、西部の方に緩やかな斜面になっている。比高は20cm前後となる。また南部では浅くなるものの途切れることなく、前庭部底面からは緩やかに下降しており比高は約10cmである。堆積土の状況は各部で異なるが、主に褐色のシルト層と暗褐色砂質シルト層とがレンズ状に交互に堆積している。遺物の出土した南部では２層認められ第１層が暗褐色シルト層、第２層（底面堆積土）は褐色砂質シルト層で、遺物はこの層に包含されていた。

〔構築方法〕石室については、平面形が石室とほぼ相似形で、深さが地山に達する掘り方を掘って構築している。それ以外の構築行程については石室を現状保存するために調査を加えなかった。

〔出土遺物〕羨門東側のテラス上面、周湟堆積土から土師器類の破片が出土している。図化

番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器　坏	周湟堆積土	内黒。体部下端の内外に段。平底風。	109－Po、1	AⅠ3
2	〃	〃	内黒。体部下端の内外に段。平底風。静止糸切。	109－Po、2	〃
3	〃	〃	内黒。体部下半部に段。底部から全体的に内弯。	109－Po、3	AⅠ2bi
4	〃	〃	内黒。体部中位に稜。段以上内弯。外面にヘラミガキ。	109－Po、4	AⅠ1biiイ
5	〃	〃	内面ナデ調整。口縁下部に稜。口縁部は短かく外反。	109－Po、5	BⅡ
6	須恵器　甕	前庭底面	中型。口縁下部に沈線。頸部に櫛描波状文。	109－Po、6	BⅡ

第109号墳出土遺物観察表

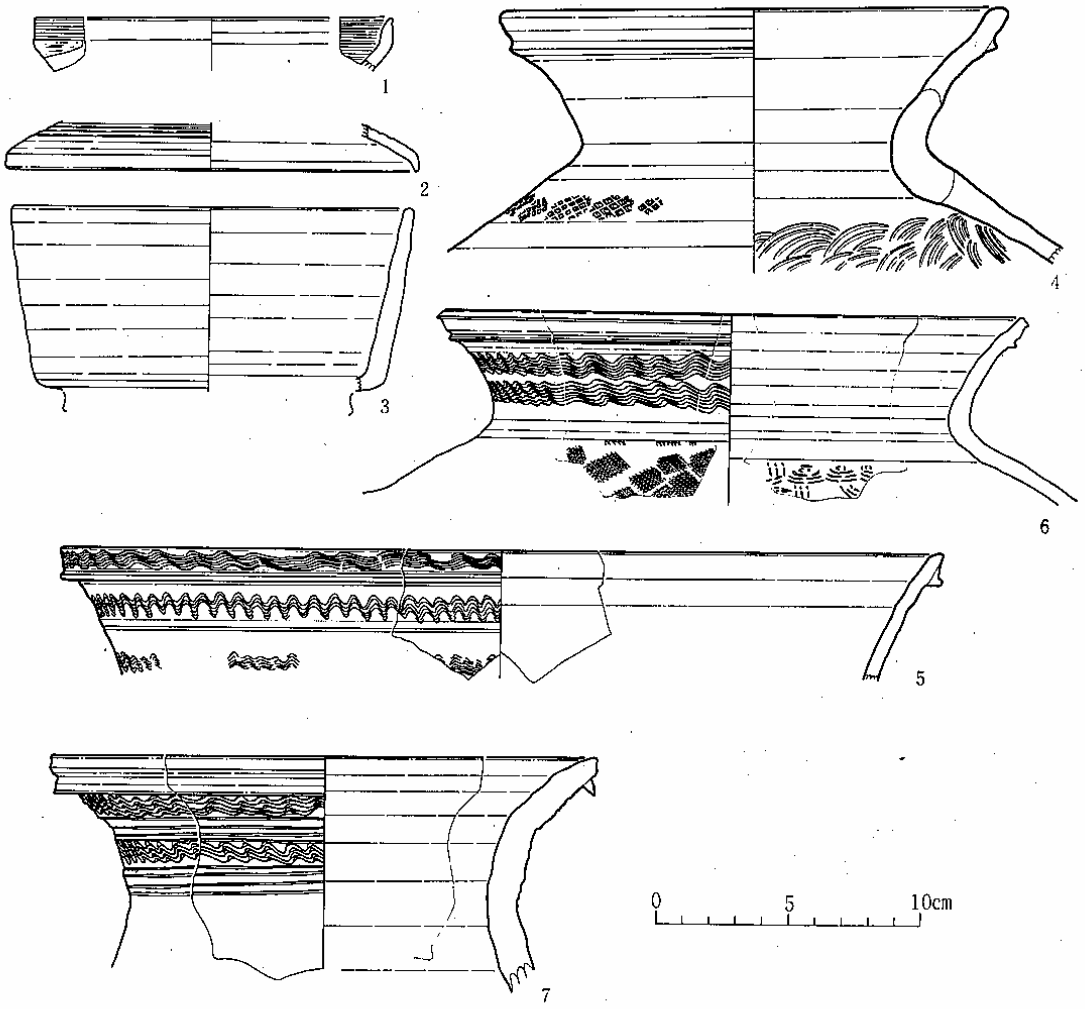


第28図　第109号墳出土遺物

古墳番号	位置・立地	確認部位	主体部形態	出土遺物	現況	備考
第8号墳	S 136m、W 315m 新宿二番地区微高地	墳丘が残存	不明	墳丘南東 表土より須恵器破片	畑の中に墳丘を保存	未調査 墳丘上は墓地
第24号墳	S 55m、W 187m 地蔵堂地区 微高地	全体	横穴式石室	前庭部付近より土器 石室内より鉄器	水田中に墳丘を保存	昭和56年に一部調査 昭和57年に報告※(No24地点)
第28号墳	S6 65m、W 143m 地蔵堂地区 微高地	〃	〃	前庭部付近より土器 石室内より鉄器	〃	昭和56年に精査 昭和57年に報告※(No28地点)
第29号墳	S 45m、W 88m 地蔵堂地区 微高地	墳丘が残存	不明	なし	〃	未調査 墳丘上は墓地
第30号墳	S 89m、W 93m 地蔵堂地区 微高地	〃 羨門が露出	横穴式石室	〃	〃	〃
第36号墳	S 75m、W 215m 深山地区 低地	墳丘(?)が残存	不明	〃	〃	〃
第37号墳	S 207m、W 203m 深山地区 低地	〃	〃	〃	〃	未調査
第97号墳	S 135m、W 295m 新宿二番地区微高地	石室、羨道部のみ、前庭	横穴式石室	前庭部より須恵器破片	水田下に埋没、保存	旧道下から発見された。 玄室部は失われている。
第98号墳	S 165m、W 309m 新宿二番地区微高地	石室、玄室南半～羨道前庭	〃	前庭部より土師器 須恵器	〃	旧道下から発見された。 玄室奥半部は失われている。
第100号墳	S 226m、W 340m 新宿二番地区微高地	周湟 前庭	不明	〃	〃	旧道下から発見された。 石室は削平により失われている。
第104号墳	N 78m、W 106m 地蔵堂地区 微高地	〃	〃	〃	新排水路により破壊、消滅	本文参照
第105号墳	S 101m、W 254m 新宿二番地区微高地	古墳跡	横穴式石室	なし	畑の中に保存	聞き取り調査 昭和57年報告 ※径30m前後の円墳(No105地点)
第106号墳	S 144m、W 264m 新宿二番地区微高地	全体	〃	玄室より土器、釘 前庭より土器	新排水路により破壊、消滅	本文参照
第107号墳	S 164m、W 276m 新宿二番地区微高地	〃	〃	石室より鉄器 前庭付近より土器	〃	〃
第108号墳	S 165m、W 291m 新宿二番地区微高地	〃	〃	前庭付近より土器	〃	〃
第109号墳	S 40m、W 73m 地蔵堂地区 微高地	〃	〃	〃	水田下に埋没、保存	〃
第110号墳	S 214m、W 318m 新宿二番地区微高地	周湟の一部	不明	なし	新排水路により破壊、消滅	石室は削平により失われている。 前庭部は水田下に埋没、保存。
第111号墳	S 142m、W 149m 深山地区 微高地	葺石	〃	〃	水田下に埋没、保存	未調査 保存の良好な古墳。
第112号墳	S 133m、W 154m 深山地区 微高地	前庭	〃	前庭より須恵器破片	〃	〃
第113号墳	S 79m、W 196m 地蔵堂地区 微高地	石室北半 周湟北半	横穴式石室	なし	〃	〃
第114号墳	S 64m、W 209m 地蔵堂地区 微高地	石室	〃	石室南東部より 須恵器破片	〃	〃
第115号墳	S 71m、W 129m 地蔵堂地区 微高地	石室	〃	なし	〃	昭和56年に一部調査 昭和57年に報告※(No104地点)
第116号墳	N 10m、W 24m 地蔵堂地区 微高地	周湟の一部	不明	周湟南東部より須恵器破片	新排水路により破壊	〃
第117号墳	S 5m、W 8m 地蔵堂地区 微高地	〃	〃	なし	〃	〃

第1表 古墳一覧表

できたものは土師器坏5点（1～5）で、この他に2～3点分の坏破片がみられる。前庭、羨門西側の底面から須恵器甕1点（6）が出土している。破片となってはいたもののほぼ完形状態であったが遺構確認作業の際その一部が失われ復元できなかった。これらの土器類の出土状態をより詳細にみると土師器坏（1～5）はいずれも小破片となりテラス側から周湟内に流入した状態で出土し、テラス上ではほぼテラス上面に、周湟中では堆積土第1層に若干含まれるもののその他の大半は第2層（周湟底面堆積土）中に含まれていた。これに対して須恵器甕（6）は小破片となってはいるものの底部が前庭底面に設置された状態で出土している。以上の土器類はその出土状態からいずれも本古墳に伴う遺物と考えられる。この他周湟堆積土中第1層、周辺の表土層からはロクロ使用の土師器類が出土しているが図化できるものはなく、また本古墳に直接伴う出土状態を示すものはなかった。



番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器 坏	前庭堆積土	内面ナデ調整。口縁下部に稜。口縁部は短かく外反。	98−Po、1	BⅡ
2	須恵器 蓋	〃	口縁端部は屈曲する。	100−Po、1	BⅣ
3	須恵器台付坏	〃	体部は高く直線的に外傾。	100−Po、2	B
4	須恵器 甕	〃	中型。口縁下端に隆帯。	100−Po、3	BⅠ
5	〃	〃	大型。口縁下端に隆帯。口縁、頸部に櫛描波状文。	100−Po、4	AⅠ
6	〃	周溝堆積土	大型。頸部に櫛描波状文。	112−Po、1	AⅡ
7	〃	〃	中型。 〃	116−Po、1	BⅡ

第29図　第98、100、112、116号墳出土遺物

Ⅳ　住居跡とその出土遺物

住居跡の分布状況

確認された住居跡は24軒でいずれも洪積台地上に分布し、花川の氾濫原にはみとめられない。この立地条件は前記の古墳群のそれと一致するものであり、したがってこれらの住居跡群は洪積台地上に分布する古墳群の中の空間地に主に分布している。その分布状況は西方から栗木地区に１軒（第14号住居跡）、新宿二番地区北端に３軒（第15、16、18号住居跡）、地蔵堂地区北部に20軒（第6～10、19、20、24～35号住居跡）が確認されそれぞれの地区でまとまりを示している。このうち栗木地区、新宿二番地区では地形的にみて集落の広がりはかなり限定されたものであることが推定される。これに対し地蔵堂地区では調査区外の広い範囲により多くの住居跡の存在が予想され比較的大規模な集落跡であることが推定される。

第６号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属す。本住居跡の東側約20mに第104号墳が、南西約45mに第8、9、10号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。住居の平面形は東西4.0m、南北4.8mの長方形である。住居南辺寄りに土壙状の攪乱がみとめられる。

〔壁・床面〕住居床面はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。いずれも地山の黒褐色シルトからなる。

〔カマド〕住居東辺のほぼ中央の部分にカマドが構築されている。燃焼部側壁は粘土、河原石で作られている。燃焼部の底面は浅く掘り窪められている。

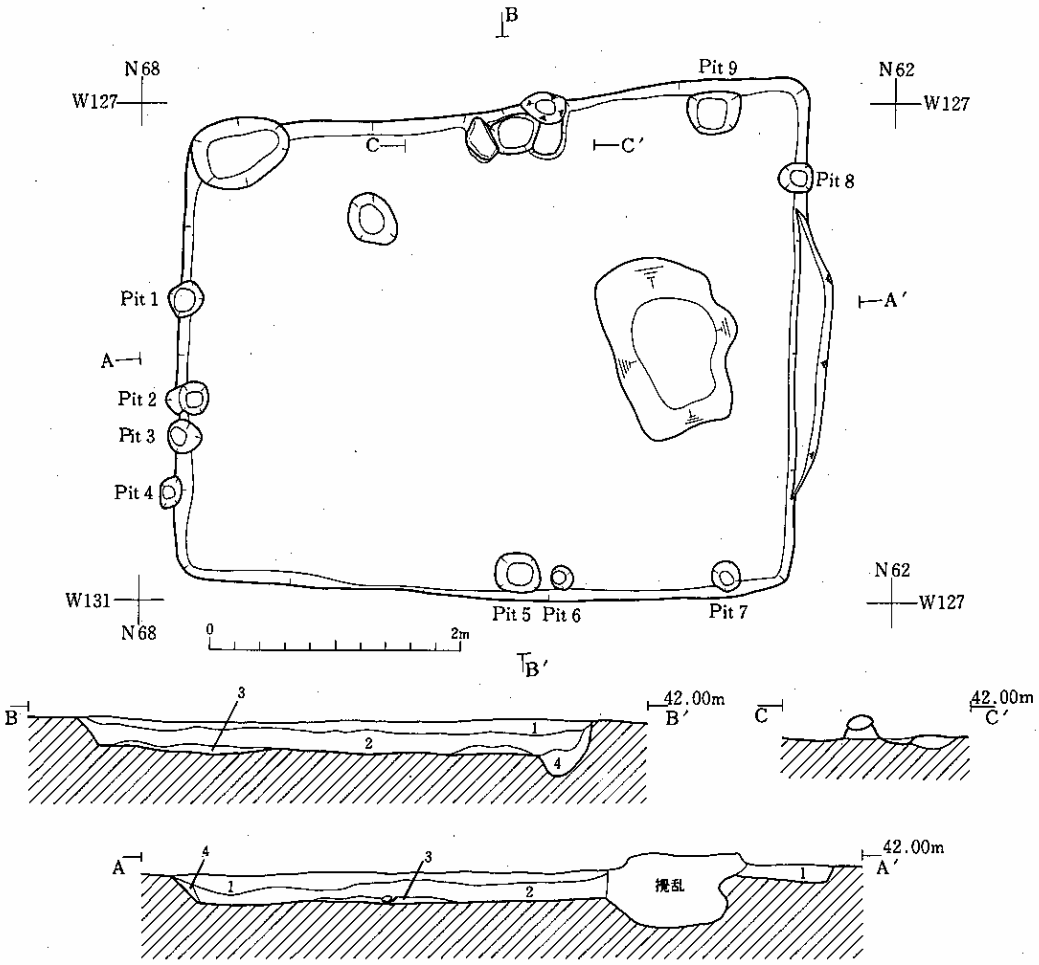
〔柱穴〕壁柱穴が計９個確認された。北辺に４個（Ｐｉｔ１～４）、西辺に３個（Ｐｉｔ５～７）、南辺に１個（Ｐｉｔ８）、東辺に１個（Ｐｉｔ９）みられるが柱間尺は不規則である。

〔貯蔵穴状ピット〕住居北東隅に貯蔵穴状ピットがみとめられる。平面形が長軸80cm、短軸60cmの楕円形で床面からの深さ約10cmで底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕３層に大別される。いずれも住居内に流入した状態で堆積している。第１層は暗褐色シルト層で住居上部全体に分布している。第２層は暗褐色砂質シルト層で住居全体に分布し部分的に住居床面直上にも堆積している。第３層は黒褐色シルト層で住居床面直上の所々に薄く堆積したもので木炭、焼土粒を多く含むことから生活層と考えられる。

〔出土遺物〕住居床面から須恵器坏２点（２、３）、土師器甕２点（５、６）カマド内堆積土から土師器甕１点（７）が出土している。これらの遺物は出土状況から本住居跡に伴う遺物と考えられる。この他住居内堆積土第２層から土師器坏１点、須恵器稜埦１点が出土している。

また図示されなかったものとしては土師器坏、甕、須恵器坏、稜埦などの破片が少量住居内堆積土から出土しているが住居跡との関係は明らかでない。

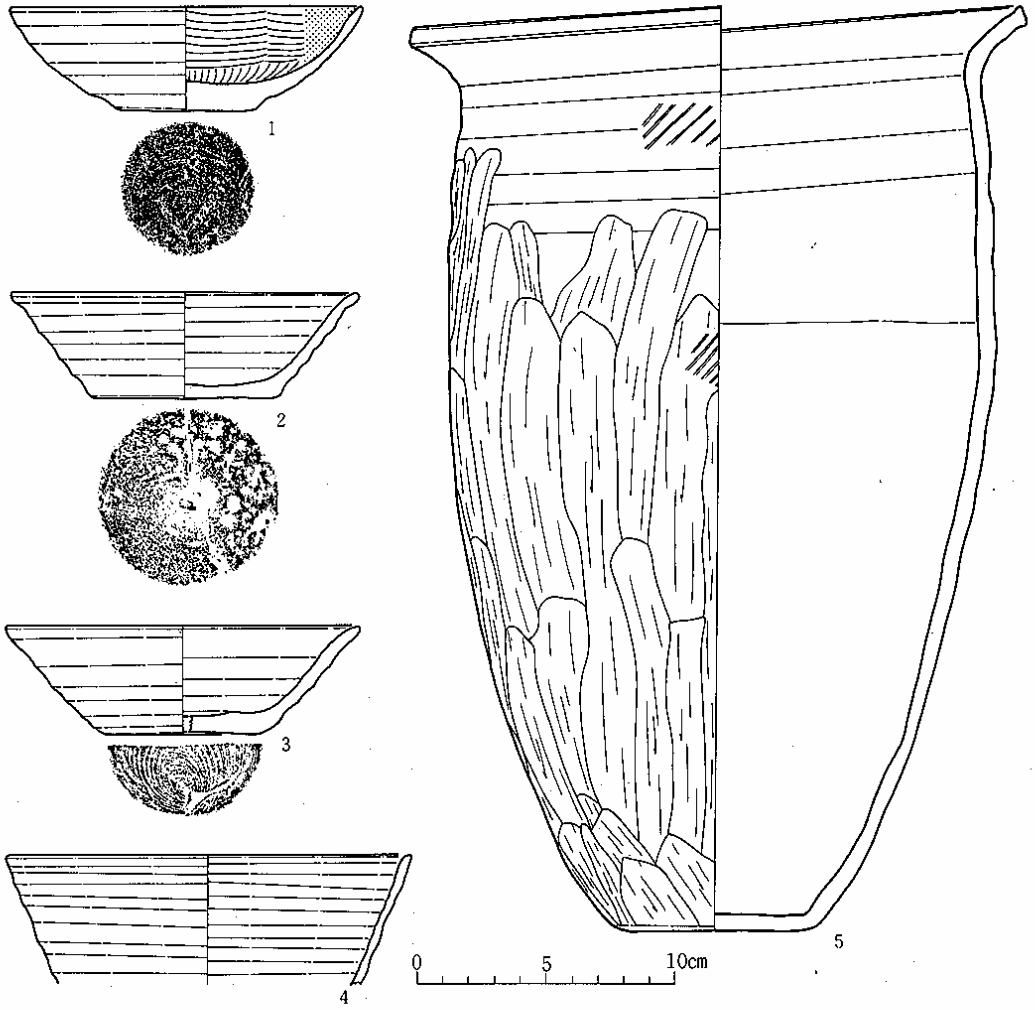


層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	暗褐色	シルト	粘性あり	
2	No 2	暗褐色	砂質シルト		焼土ブロックを若干含む
3	No 3	黒褐色	シルト		焼土ブロック、木炭粒を多く含む
	No 4	暗褐色	シルト		地山ブロックを多く含む

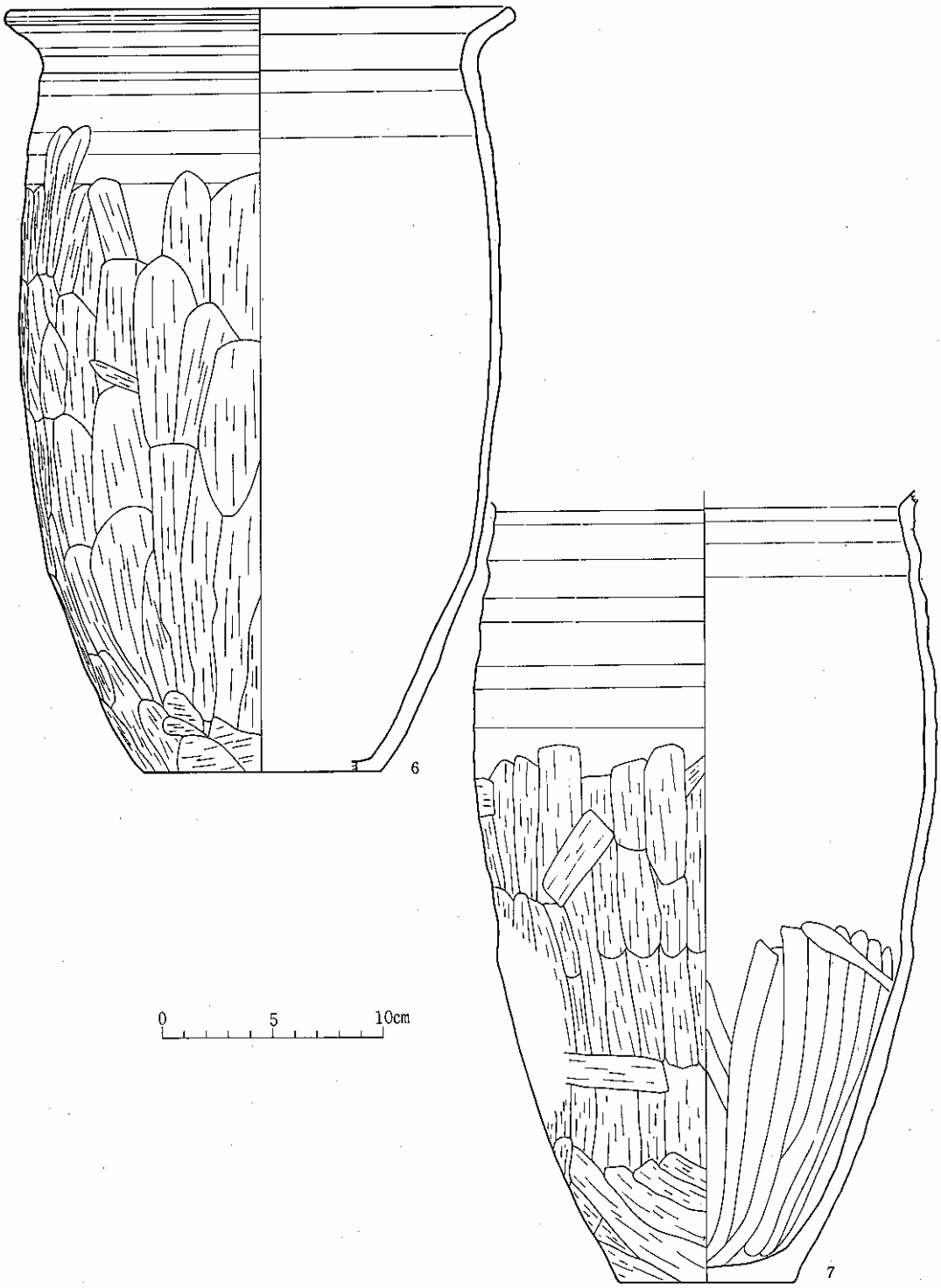
第30図　第６号住居跡

番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器　坏	堆積土	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.6　器高 4.0 底径 5.4　口径比 4.0	6住－Po、5	B Ⅱ
2	須恵器　坏	床面	内・外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り離し	口径 13.4　器高 4.1 底径 7.4　口径比 5.5	6住－Po、6	A
3	〃	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 13.6　器高 4.2 底径 5.6　口径比 4.1	6住－Po、4	B Ⅰ
4	須恵器稜　埦	堆積土	内・外面：ロクロナデ	口径 15.6　器高 底径　口径比	6住－Po、5	
5	土師器　甕	〃	外面：ロクロナデ→体部下部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	口径　器高 底径　口径比	6住－Po、3	A
6	〃	〃	〃		6住－Po、1	A
7	〃	カマド	外面：ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ 内面：ロクロナデ→ヘラナデ		6住－Po、2	A

第６号住局跡出土遺物観察表



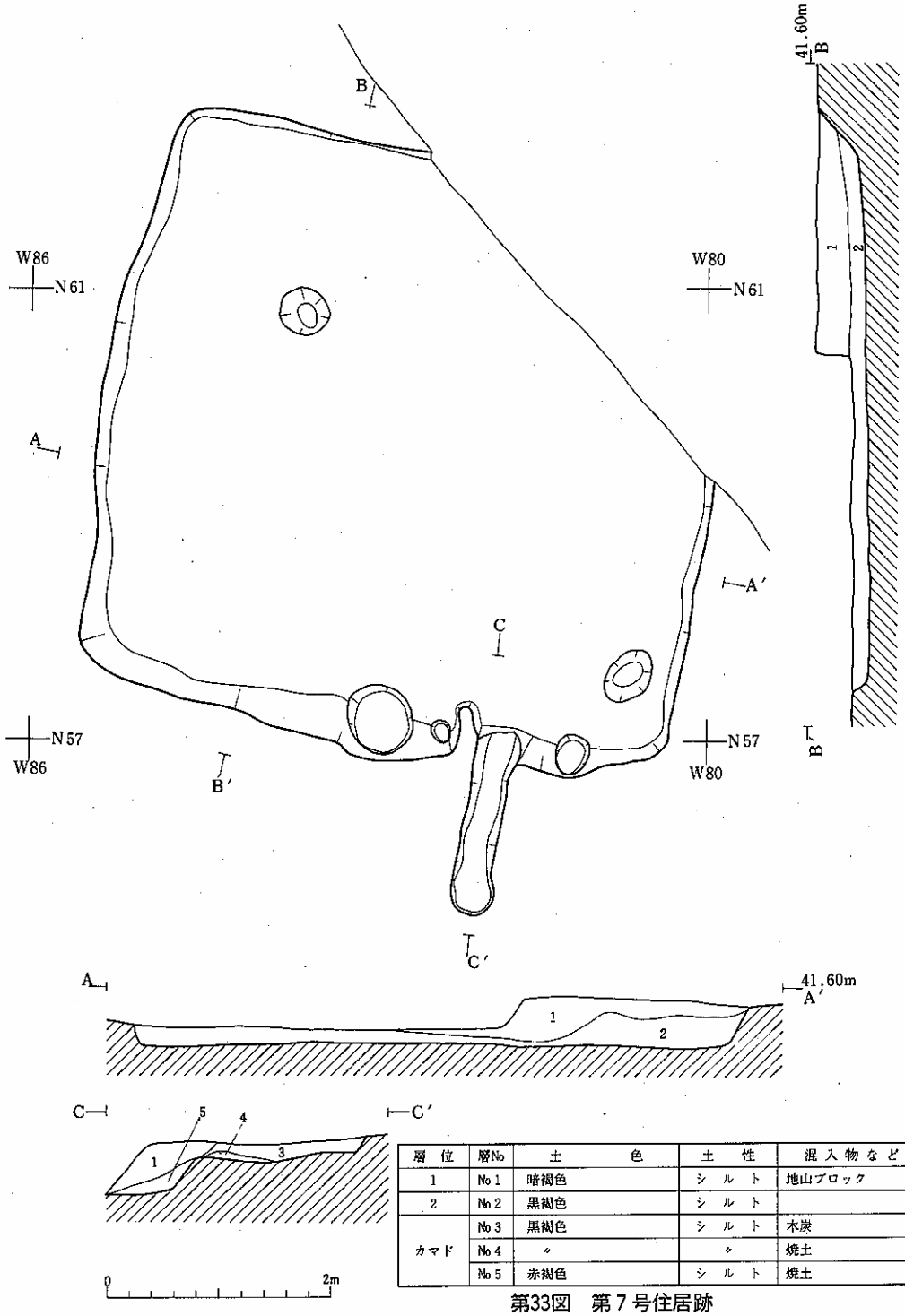
第31図　第６号住居跡出土遺物（１）



第32図　第６号住居跡出土遺物（２）

第７号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属す。本住居跡の北西約 20m には第 104 号墳が確認されているが、本住居周辺に住居跡は確認されていない。



層位	層No	土色	土性	混入物など
1	No 1	暗褐色	シルト	地山ブロック
2	No 2	黒褐色	シルト	
カマド	No 3	黒褐色	シルト	木炭
	No 4	〃	〃	焼土
	No 5	赤褐色	シルト	焼土

第33図　第７号住居跡

〔平面形・重複〕住居北東隅は調査区外に延びているが、調査区内の部分のみを調査した。他の遺構との重複はない。平面形は東西5.5m、南北5.2mのほぼ方形を呈する。

〔壁〕確認された壁はいずれも地山の暗褐色砂質シルトからなり住居床面から緩やかに立ち上がる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦で地山暗褐色砂質シルトからなる。

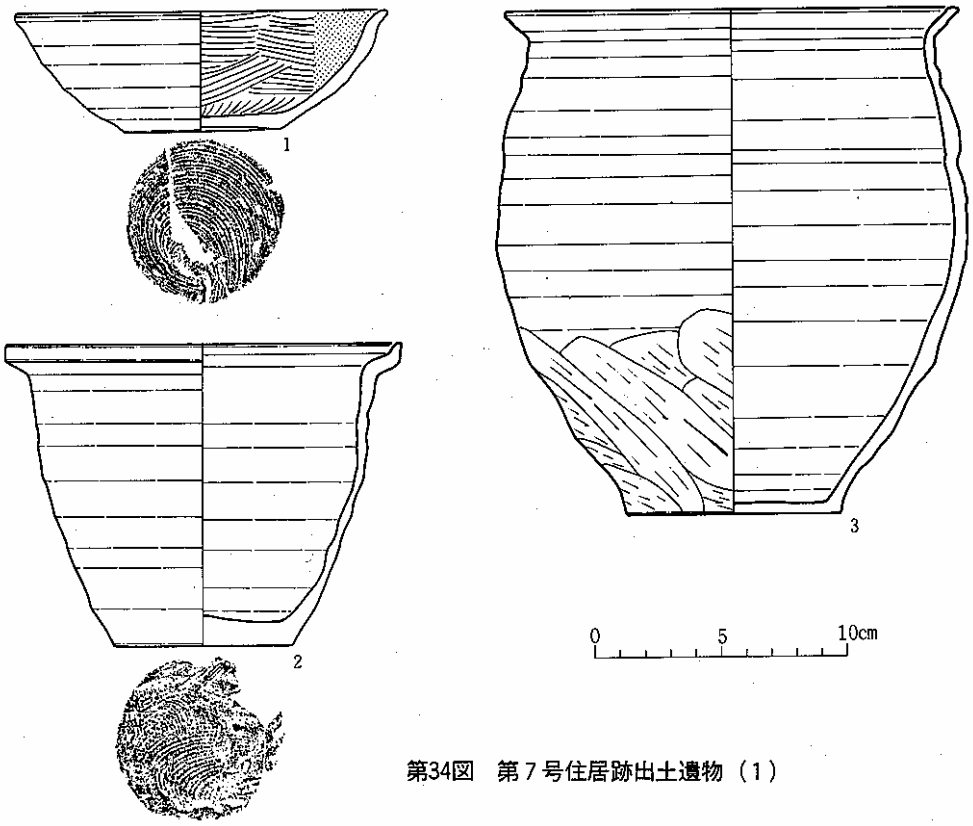
〔カマド〕住居南辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部は失われているが両側壁部分の床面、壁にかけて石材の据え方が確認されている。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたもので先端部はピット状に浅く掘り窪められている。

〔堆積土〕２層に大別され、いずれも住居内に流入した状態で堆積している。第１層は暗褐色シルト層で住居上部全体を覆っている。第２層は黒褐色シルト層で住居床面を覆っている。

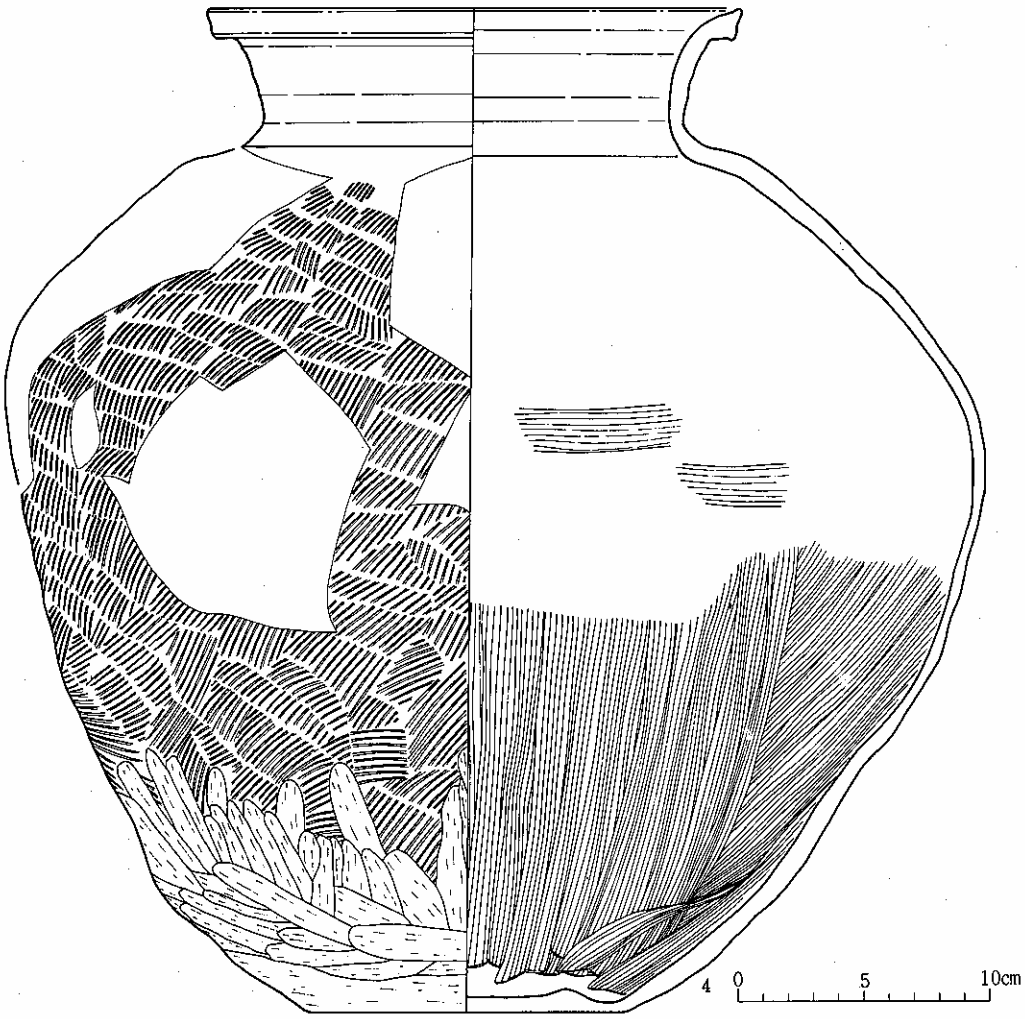
〔出土遺物〕住居床面から土師器坏１点（第34図１）、同甕２点（２、３）、須恵器甕１点（４）が出土している。また図示できなかったが住居床面から土師器坏の被片が出土している。これらは本住居に伴う遺物と考えられる。この他住居内堆積土第１層から土師器甕、須恵器坏などの破片が出土している。

番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器　坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.8　器高 4.7 底径 6.6　口径比 4.5	7住－Po、1	BⅠ
2	土須器　甕	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 15.8　器高 12.0 底径 7.0	7住－Po、2	CⅠ
3	〃	〃	外面：ロクロナデ、体部下半：ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	口径 24.0　器高 28.6 底径 10.4	7住－Po、3'	BⅠ
4	須恵器　甕	〃	外面：口縁、ロクロナデ、体部：タタキ、下部ヘラケズリ 内面：　体部：ヘラナデ	口径 23.3　器高 40.2 底径 13.0	7住－Po、4	

第７号住局跡出土遺物観察表



第34図　第７号住居跡出土遺物（１）



第35図　第７号住居跡出土遺物（２）

第８号住居跡

〔位置〕栗木地区に属す。本住居跡の南東側は沢状地形を介して地蔵堂地区に隣接している。

〔平面形・重複〕本住居跡は第９、10号住居跡と重複し、第９号住居跡よりも新しく、第10号住居跡よりも古い。平面形は東西約3.3m、南北約4.2mの長方形である。

〔壁〕確認された壁は東辺部では第９号住居跡堆積土、その他は地山の黄褐色砂質シルトを壁としている。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

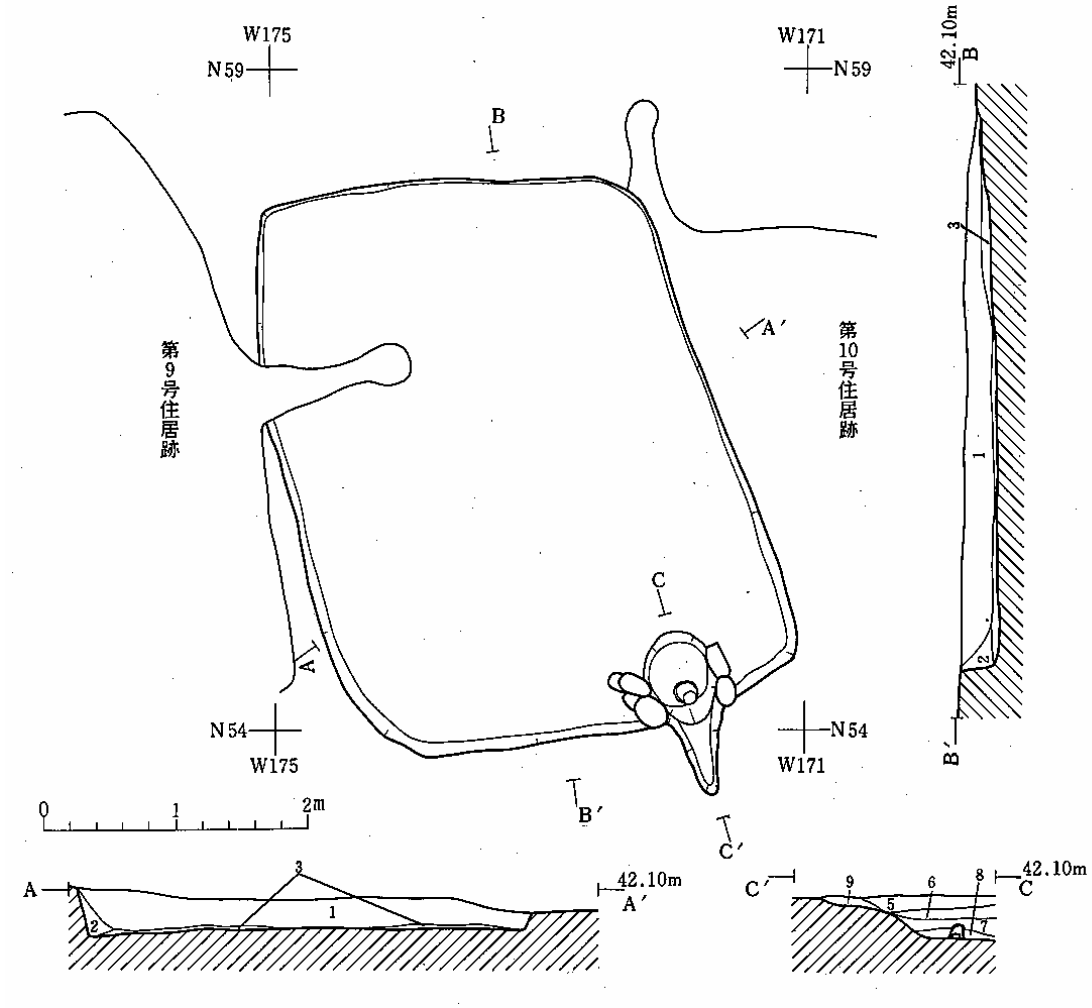
〔床面〕住居床面はほぼ平坦でしまりのない地山黄褐色砂質シルトからなる。

〔カマド〕住居南辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部側壁は偏平な河原石を粘土で固定して作られている。底面は浅く掘り窪められ奥壁部で緩やかに立ち上がる。

煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたものである。燃焼部の中央からやや奥壁寄りに棒状の石が立てられその上に土師器甕（2）を伏せた支脚がみられる。

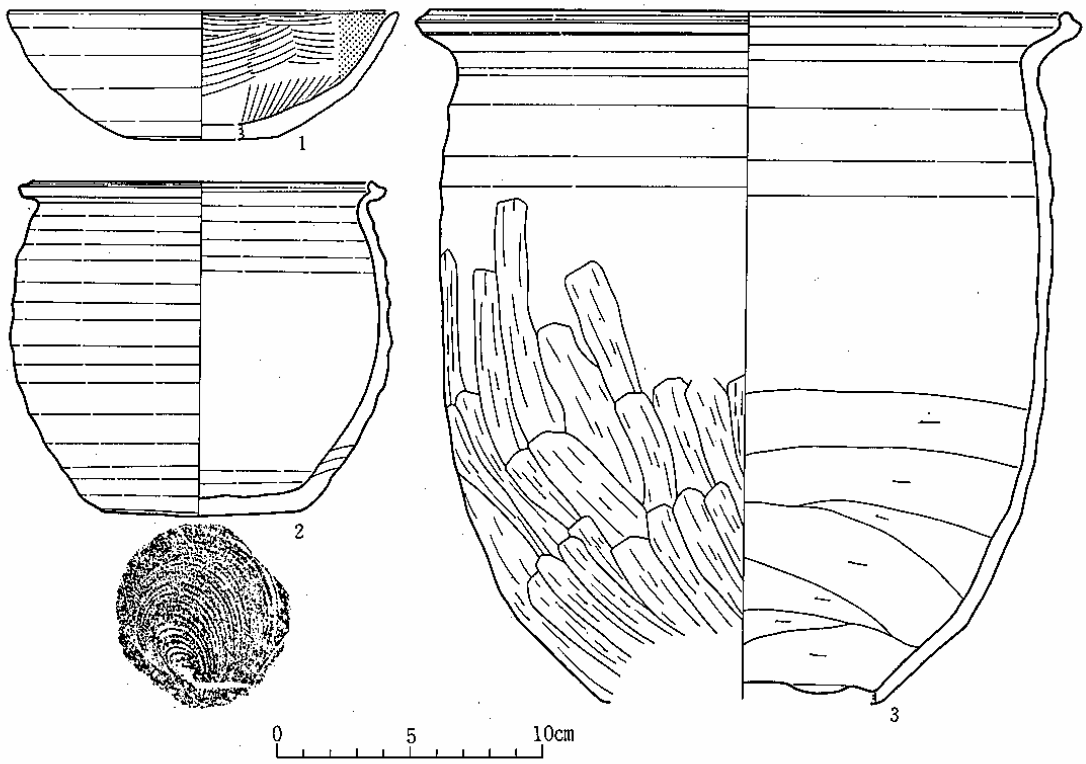
〔堆積土〕２層に大別される。第１層は暗褐色砂質シルト層で流入した状態で住居全体を覆っている。第２層は黒褐色シルト層で床面直上に薄く堆積しており炭火物、焼土を多量に含むことから生活層と考えられる。

〔出土遺物〕カマド内から土師器坏１点（第37図１）、同甕２点（２、３）が出土している。



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	暗褐色	砂質シルト		
	No 2	暗褐色	砂質シルト		
2	No 3	黒褐色	シルト	炭化物・焼土	生活層
カマド	No 5	暗褐色	シルト		
	No 6	黒褐色	〃	木炭	
	No 7	〃	〃	焼土	
	No 8	赤褐色	〃	〃	
	No 9	黒褐色	〃	木炭	

第36図　第８号住居跡



番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.6 器高 4.9 底径 5.8 口径比 4.0	8住－Po、1	BⅡ
2	土師器 甕	〃	内・外面：ロクロナデ	口径	8住－Po、2	CⅢ
3	〃	〃	外面：ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ 内面：ロクロナデ→体部下半ヘラナデ	口径 25.2 器高 26.6 底径 10.6	8住－Po、3	BⅡ

第37図　第８号住居跡出土遺物

第９号住居跡

〔位置〕栗木地区に属す。本住居跡の南東側は沢状地形を介して地蔵堂地区に隣接している。

〔平面形・重複〕本住居跡は溝及び第８号住居跡と重複している。本住居跡は溝、第８号住居居跡よりも古く、住居西半は第８号住居跡により削平され、同じく東辺は溝により破壊されている。また住居南辺は確認されなかった。平面形・規模は不明である。

〔壁〕確認された壁は住居北辺の一部のみである。床面からほぼ垂直に立ち上がり地山の黄褐色砂質シルトからなる。

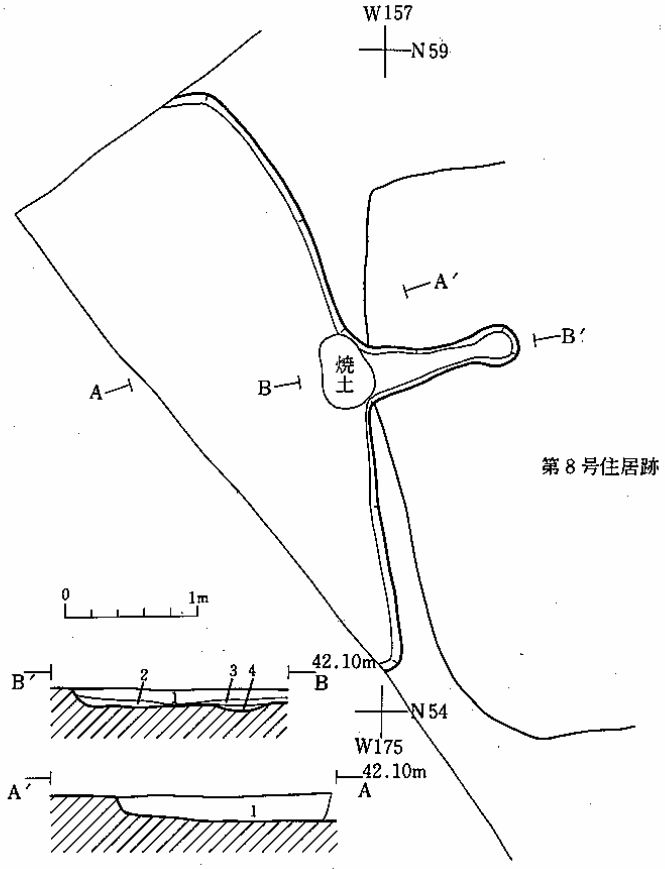
〔床面〕ほぼ平坦でしまりのない黄褐色砂質シルトからなる。

〔カマド〕住居北辺のほぼ中央付近と推定される部分にカマドが構築されている。燃焼部は失われている。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたものである。

〔堆積土〕２層確認された。分布、堆積状況は不明であるが第１層は住居上部に堆積しており暗褐色砂質シルト層で灰白色火山灰のブロックを含む。第２層は第１層の下部に堆積してお

り暗褐色砂質シルト層である。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏、高台付坏の破片が出土しているが図示できるものはない。



層　位	層No	土　　色	土　性	混　入　物　な　ど	備　　考
1	No 1	暗褐色	砂質シルト		
カマド	No 2	黒褐色	〃	木　炭	
	No 3	赤褐色	〃	焼　土	
	No 4	〃	〃	〃	

第38図　第９号住居跡

第10号住居跡

〔位置〕栗木地区に属す。本住居跡の南東側は沢状地形を介して地蔵堂地区に隣接している。

〔平面形・重複〕本住居跡は第８号住居跡に重複し第８号住居跡よりも新しい。本住居の西半部は調査区外に延びていたが調査区内の部分のみを調査した。西辺は4.5mを測るが平面形は不明である。

〔壁〕確認された壁は床面から緩やかに立ち上がり全て地山の黄褐色砂質シルトからなる。

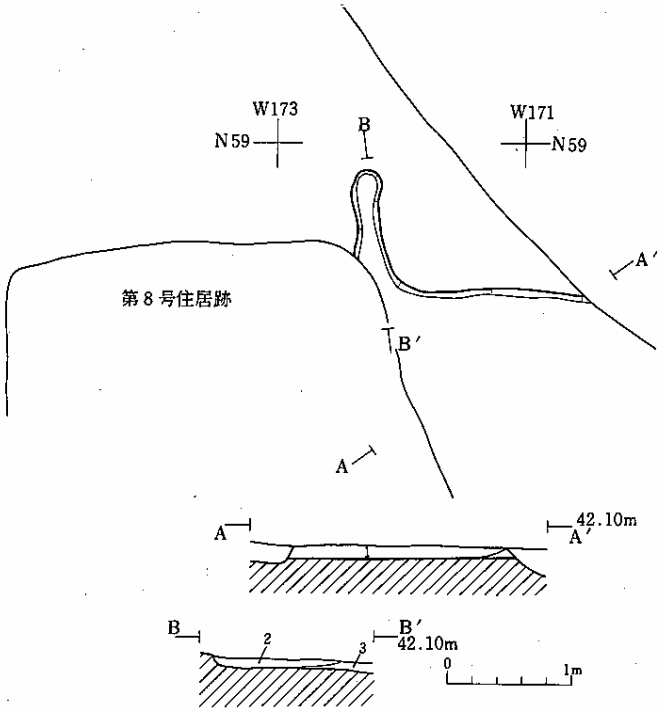
〔床面〕住居床面はほぼ平坦でしまりのない地山黄褐色シルトからなる。

〔カマド〕住居西辺のほぼ中央部にカマドが構築されている。燃焼部側壁は失われているが、

底面は浅く掘り窪められたものである。煙道はトンネル状に掘り抜いたものである。

〔堆積土〕１層のみ認められる。暗褐色砂質シルト層で住居全体を覆っている。

〔出土遺物〕堆積上から土師器坏、甕の破片が出土しているが図示できるものはない。



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	暗褐色	砂質シルト		
煙道	No 2	赤褐色	シルト	焼土	
	No 3	暗褐色	シルト	木炭	

第39図　第10号住居跡

第14号住居跡

〔位置〕栗木地区の西端部の微高地上に立地する。本住居跡西側には南北方向に沢状地形が入り込んでおり、その対岸の微高地上に畑跡が検出されている。しかし本住居跡周辺に、古墳、住居跡は確認されていない。

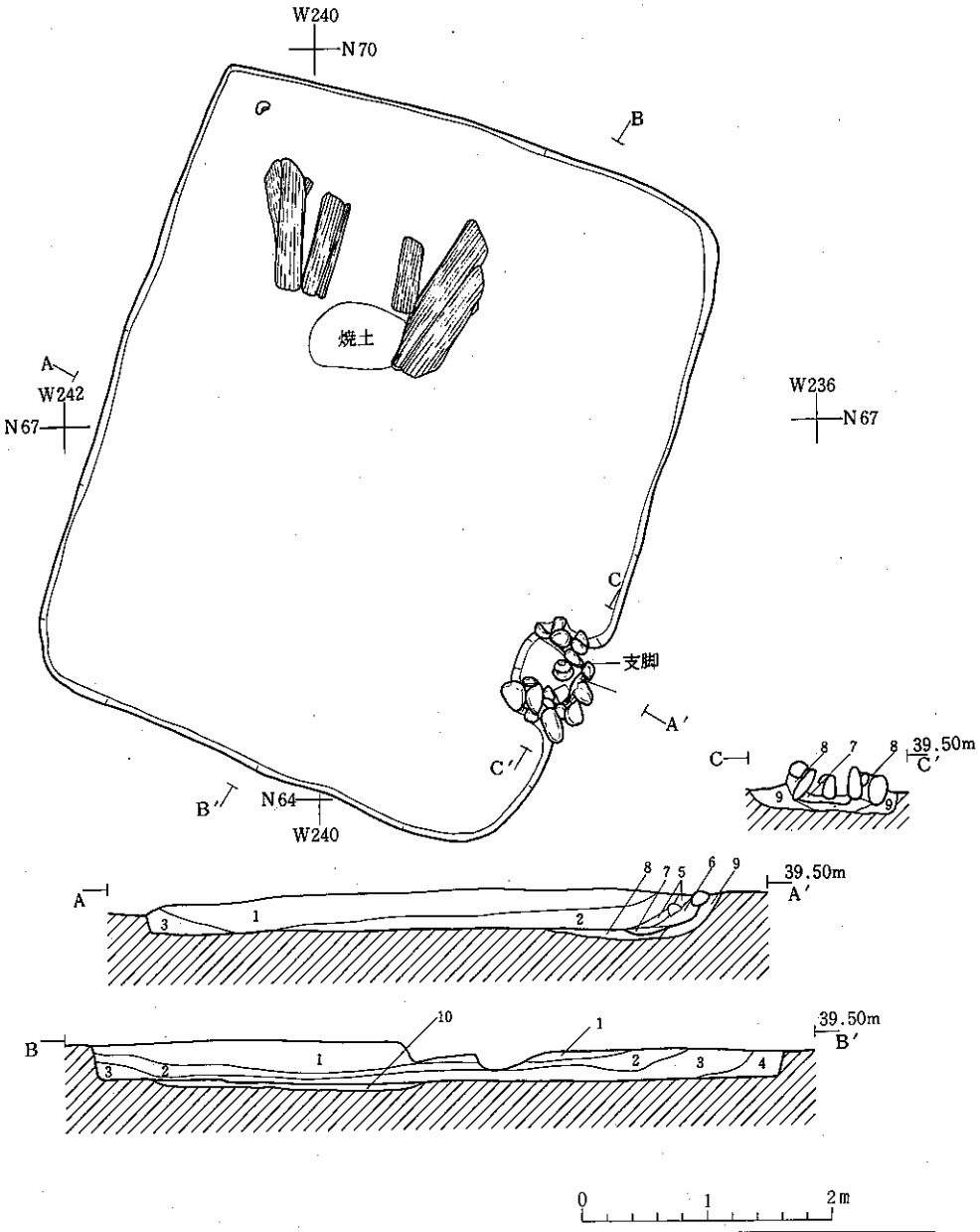
〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。平面形は、南北軸5.5m、東西軸4.5mの長方形を呈する。

〔壁〕検出された壁は全て地山の褐色砂質シルトである。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦で、全て地山の褐色砂質シルトからなる。

〔カマド〕住居東辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部の側壁は偏平な河原石を粘土で固定して構築されている。燃焼部底面は浅く掘りくぼめられ奥壁部でゆるやかに立ち上がっている。燃焼部のほぼ中央に棒状の河原石を直立させた支柱がみとめられる。

〔堆積土〕堆積土は３層に大別される。いずれも流入した状態で堆積している。第１層は褐色シルト層で住居跡上部のほぼ全体を厚く覆っている。第２層は灰白色シルト質火山灰層で第

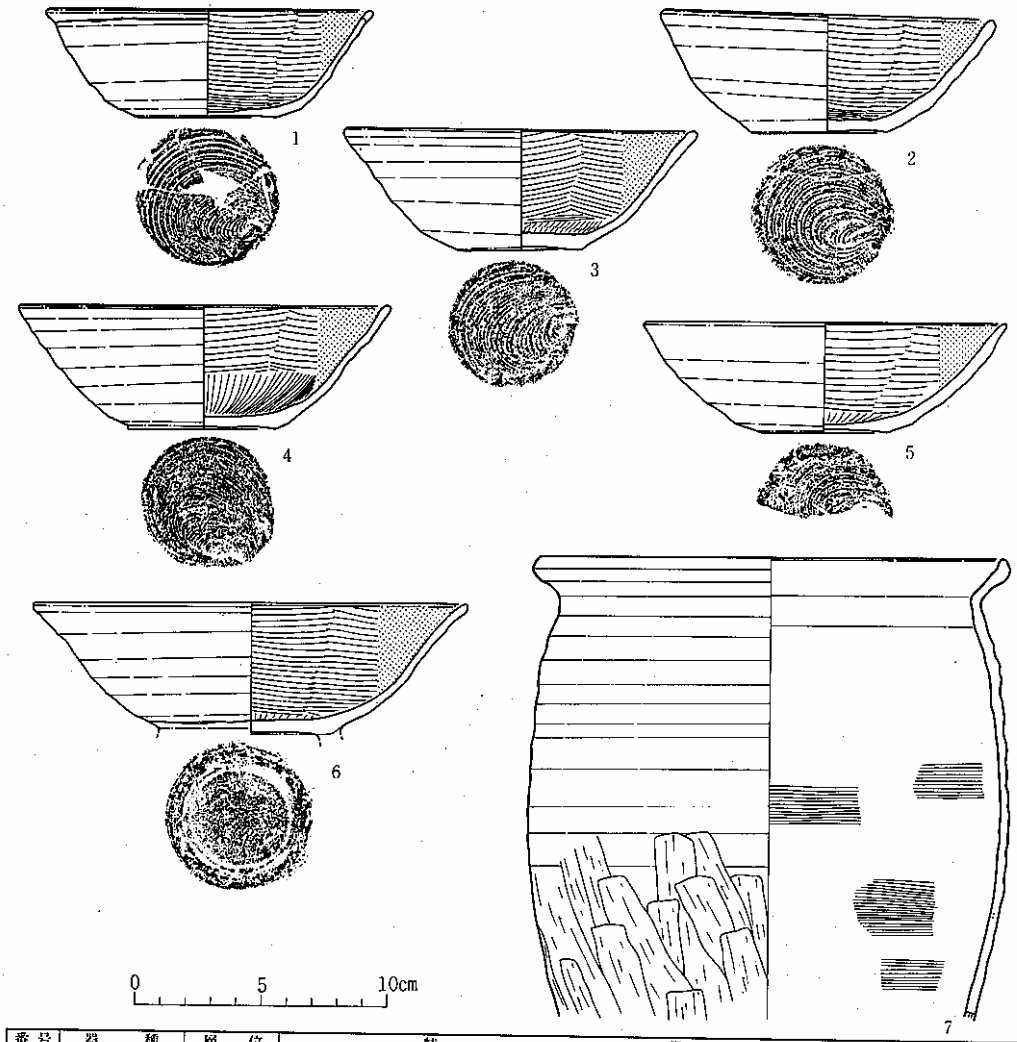


層　位	層No	土　　色	土　性	混　入　物　な　ど	備　　考
1	No 1	10YR⅓　褐　色	シ ル ト	地山ブロック、炭化物	
2	No 2	7.5YR⅔　灰白色	シ ル ト		火山灰層
3	No 3	10YR⅜　暗褐色	シ ル ト		
	No 4	10YR⅜　暗褐色	シ ル ト	灰白色火山灰粒	
カマド	No 5	10YR⅔　黒褐色	シ ル ト	焼　土　粒	
	No 6	10YR⅔　黒褐色	シ ル ト	焼土粒を多量に含む	
	No 7	7.5YR⅝　黄橙色	シ ル ト		焼　土
掘り方	No 8	10YR⅓　褐　色	シ ル ト	焼土粒、炭化物	
	No 9	10YR⅜　暗褐色	シ ル ト		
貼り床	No10	10YR⅖　にぶい黄褐色	シルト質粘土		固くしまっている。

第40図　第14号住居跡

１層の下に堆積し、住居跡の西部で薄くなるもののほぼ全体を覆っている。第３層は床面上の堆積土で暗褐色シルト層である。住居跡全体に分布しているが壁際では厚く、住居跡中央部では薄く堆積している。

〔出土遺物〕カマド内堆積土から土師器坏２点（第41図１、２）、同甕１点（第41図７）、住居床面から土師器坏３点（３～５）これらはいずれもほぼ完形で出土状態から直接本住居跡に伴う遺物と考えられる。特に坏（１）はカマド内の支柱上に伏せた状態で出土した。この他堆積土第２層から土師器高台付坏１点（第41図６）が出土している。台部は付け高台であるが欠損している。



番号	器種	層位	特徴	徴	登録No.	分類
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.0 器高 4.3 底径 5.4 口径比 4.2	14住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	〃	口径 13.2 器高 5.0 底径 5.5 口径比 4.2	14住－Po、2	A
3	〃	床面	〃	口径 14.0 器高 4.9 底径 5.0 口径比 3.6	14住－Po、3	A
4	〃	〃	〃	口径 14.8 器高 5.0 底径 5.9 口径比 3.9	14住－Po、4	B Ⅱ
5	〃	〃	〃	口径 14.4 器高 4.4 底径 5.0 口径比 3.5	14住－Po、5	B Ⅱ
6	土師器台付坏	住居２層	〃	口径 17.2	14住－Po、6	A
7	土師器 甕	カマド	外面：口縁ロクロナデ、体部下半：ヘラケズリ 内面：口縁、ロクロナデ、体部：ナデ	口径 18.8	14住－Po、7	A

第41図　第14号住居跡出土遺物

第15号住居跡

〔位置〕新宿二番地区北端部に位置する。東側は南北方向の沢状地形を介して深山地区となる。本住居跡の北側には規模の大きな第105号墳が隣接しており調査区北端で検出された落ち込みは105号墳の周湟の一部と考えられる。また南側には第18号住居跡が隣接し、さらに南側には第106、107、108号墳が位置しており北、西、南の三方向は古墳に囲まれた位置にある。

〔平面形・重複〕第15号住居跡は、第16号住居跡と重複している。第15号住居内の堆積土及び床の一部は第16号住居跡によって切られている。また住居跡東辺部は不明確である。平面形は南北軸５m、東西軸4.6mの長方形である。

〔壁〕検出された壁は全て地山の暗褐色砂質シルトである。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕残存する床面はほぼ平坦で、住居中央部には薄い貼り床がほどこされている。住居掘り方底面は地山砂礫層上面まで及び、その直上が床面になっている。なお本住居床面の北東寄りの３×３m の範囲は第16号住居掘り方によって掘り込まれている。

〔カマド〕住居南辺の南東隅寄りにカマドが構築されている。燃焼部の側壁は偏平な河原石を粘土で固定し構築され、天井の前端に枕状の河原石が架構されていた。燃焼部床面は浅く掘り窪められ、その中央東寄りに棒状の支柱の石が直立している。燃焼部奥壁はゆるやかに立ち上がっており、燃焼部内の奥壁、側壁、架構された河原石は火熱により赤褐色を呈している。煙道部は住居外にトンネル状に掘り抜いたもので先端はピット状になっている。

〔貯蔵穴状ピット〕住居南辺のカマド西側に接して不整円形のピットがある。直径約80cm、深さ約40cmで底面はほぼ平坦である。地山礫層を掘り込んで作られたものである。（Pit１）

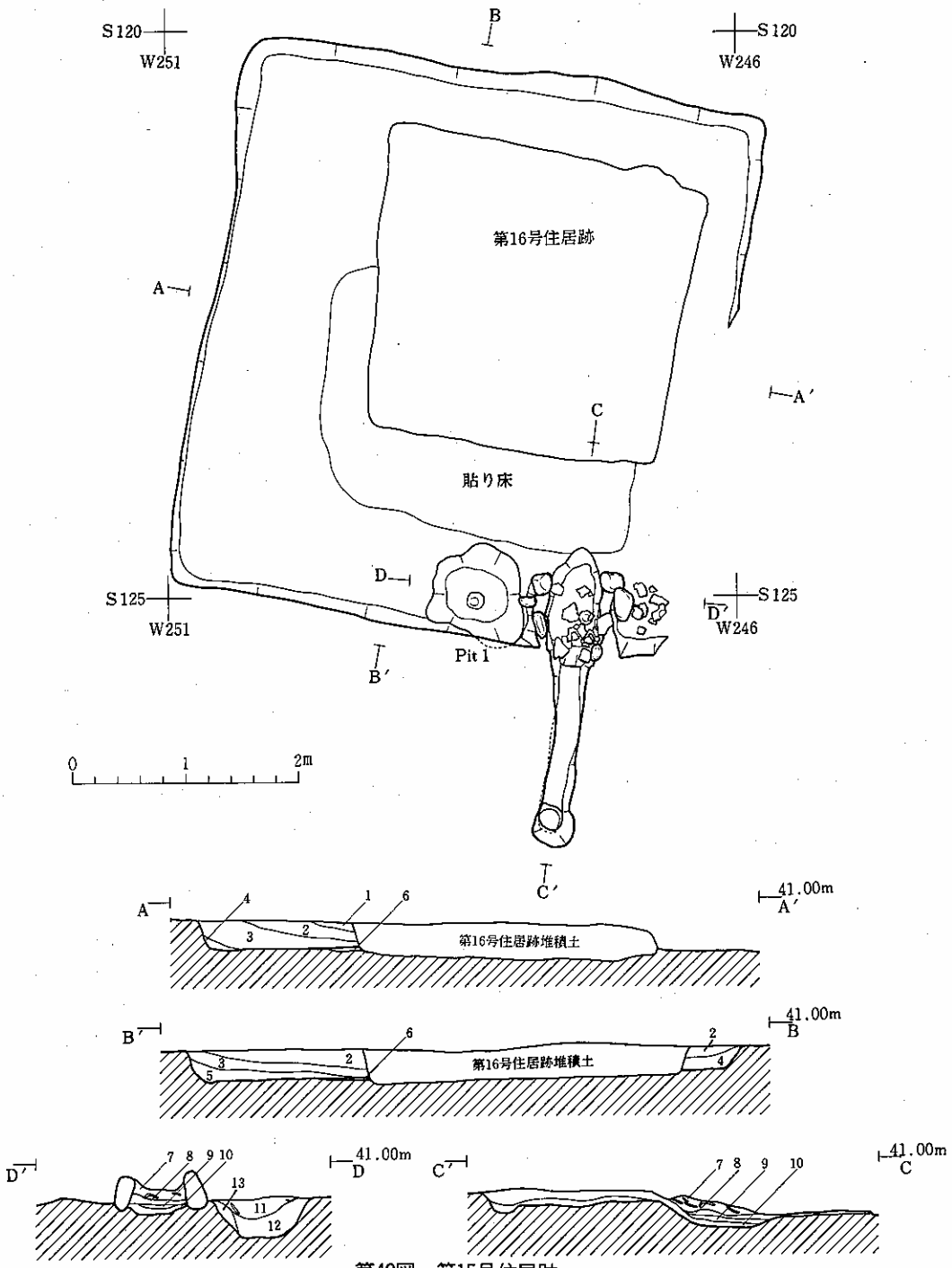
〔堆積土〕住居内堆積土は２層に大別され流入した状態で堆積している。第１層は黒褐色シルト層で西辺部は削平により失われているが住居跡全体を覆っている。第２層は床面上の堆積土で黒褐色もしくは暗褐色のシルト層である。

〔出土遺物〕カマド内堆積土から土師器坏１点（第43図５）、同甕２点（第44図12、13）須恵器甕１点（第43図11）、住居床面から土師器坏４点（第43図１～４）、同甕１点（９）、須恵器坏１点（７）、貯蔵穴状ピット内堆積土から須恵器坏２点（６、８）土師器甕１点（10）が出土し

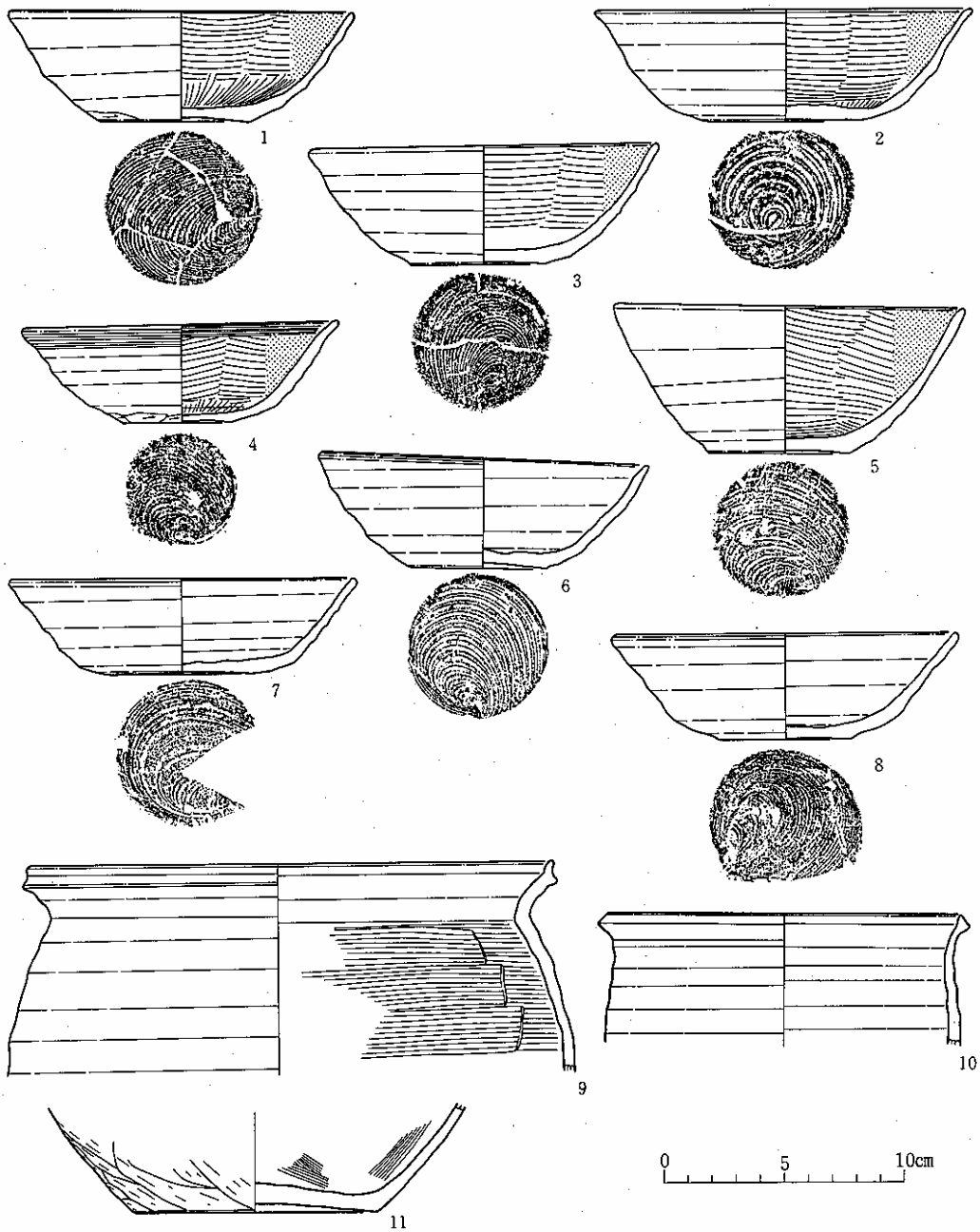
層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No1	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No2	10YR2/3 黒褐色	シルト	木炭	
2	No3	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No4	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山ブロック	
	No5	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土	
貼り床	No6	10YR4/4 褐色	砂質シルト		固くしまっている。
カマド	No7	10YR6/8 明黄褐色	粘土		カマドの天井か(?)
	No8	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	焼土	
	No9	7.5YR3/4 暗褐色	砂質シルト		
	No10	10YR3/2 黒褐色	シルト		
貯蔵穴状ピット	No11	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No12	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土、粘土、炭化物	
	No13	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト		

第15号住居跡土層観察表

ている。これらはその出土状態からいずれも本住居跡に伴う遺物と考えられる。特に土師器坏（5）はカマド内の支柱上に伏せた状態で出土した。この他住居跡内堆積土から土師器坏、甕、須恵器坏、赤焼土器坏等の破片が多量に出土しているが出土状態に規則性はみられず本住居跡に直接伴う遺物とみることはできない。

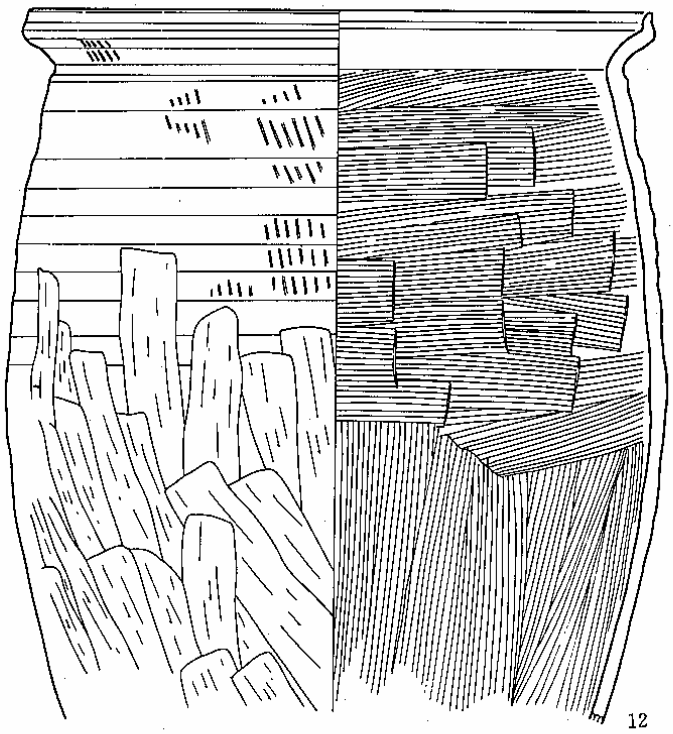


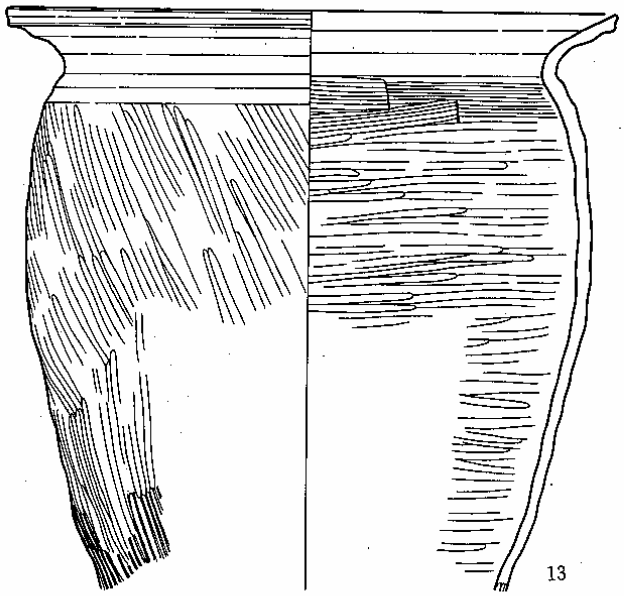
第42図　第15号住居跡



番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ、体部下端：ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.4 器高 4.7 底径 6.4 口径比 4.4	15住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 15.8 器高 4.7 底径 6.1 口径比 3.9	15住－Po、2	B Ⅰ
3	〃	〃	〃	口径 14.6 器高 5.0 底径 5.6 口径比 3.8	15住－Po、3	A
4	〃	〃	外面：ロクロナデ、口縁：ヨコナデ、体部下端：ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.2 器高 4.0 底径 4.5 口径比 3.4	15住－Po、4	B Ⅰ
5	〃	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.7 器高 6.3 底径 5.8 口径比 3.9	15住－Po、5	A
6	須恵器 坏	Pit 1	内・外面：ロクロナデ	口径 13.8 器高 4.9 底径 5.7 口径比 4.1	15住－Po、6	B Ⅰ
7	〃	床面	〃	口径 14.5 器高 4.0 底径 5.8 口径比 4.0	15住－Po、7	B Ⅰ
8	〃	Pit 1	〃	口径 14.5 器高 4.4 底径 5.6 口径比 3.9	15住－Po、8	B Ⅱ
9	土師器 甕	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラナデ	口径 21.0	15住－Po、11	A Ⅱ
10	〃	Pit 1	内・外面：ロクロナデ	口径 14.6	15住－Po、12	C Ⅰ
11	須恵器 甕	カマド	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	底径 10.2	15住－Po、13	

第43図　第15号住居跡出土遺物 (1)





0 5 10cm

番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
12	土師器 甕	カマド	外面：タタキ→ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ 口径 23.6 内面：ヘラナデ	15住－Po、9	A Ⅱ
13	〃	〃	外面：口縁、頸部、横ナデ、体部ヘラミガキ 口径 23.2 内面：〃 〃	15住－Po、10	A Ⅲ

第44図　第15号住居跡出土遺物 (2)

第16号住居跡

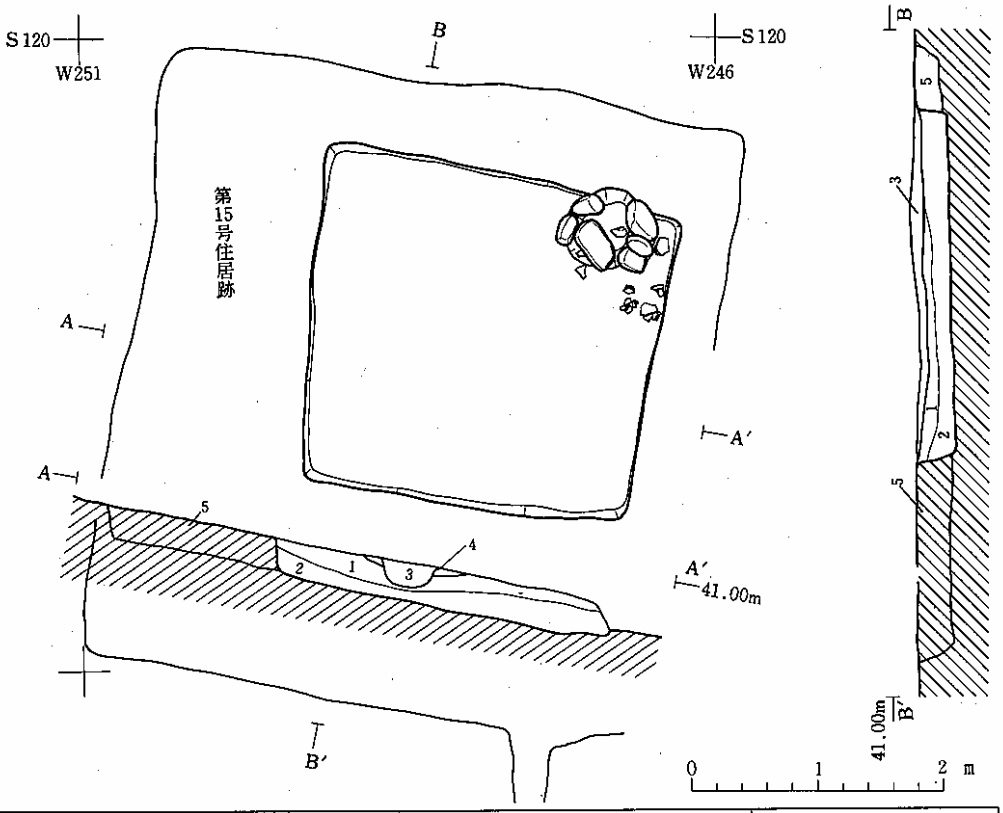
〔位置〕新宿二番地区北端部に位置する。

〔平面形・重複〕第16号住居跡は第15号住居跡と重複している。第16号住居跡は第15号住居堆積土を掘り込み、その掘り方底面は第15号住居跡の床面を切っている。さらに本住居跡堆積土を掘り込んだ南北方向の溝がみられる。この溝は本住居跡内堆積土の中央部だけに遺存し住居外側では削平されている。この溝の堆積土は灰白色火山灰である。住居の平面形は３×３mの正方形を呈する。

〔壁〕検出された壁は、全て第15号住居跡埋土である。壁面は床面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦である。住居掘り方は、地山の砂礫層を５～10cm掘り込みその直上を床面としている。

〔カマド〕住居北辺の北東隅寄りにカマドが構築されている。燃焼部側壁は偏平な河原石を粘土で固定し構築され架構されていた枕状の河原石が崩落している。煙道は確認されていない。

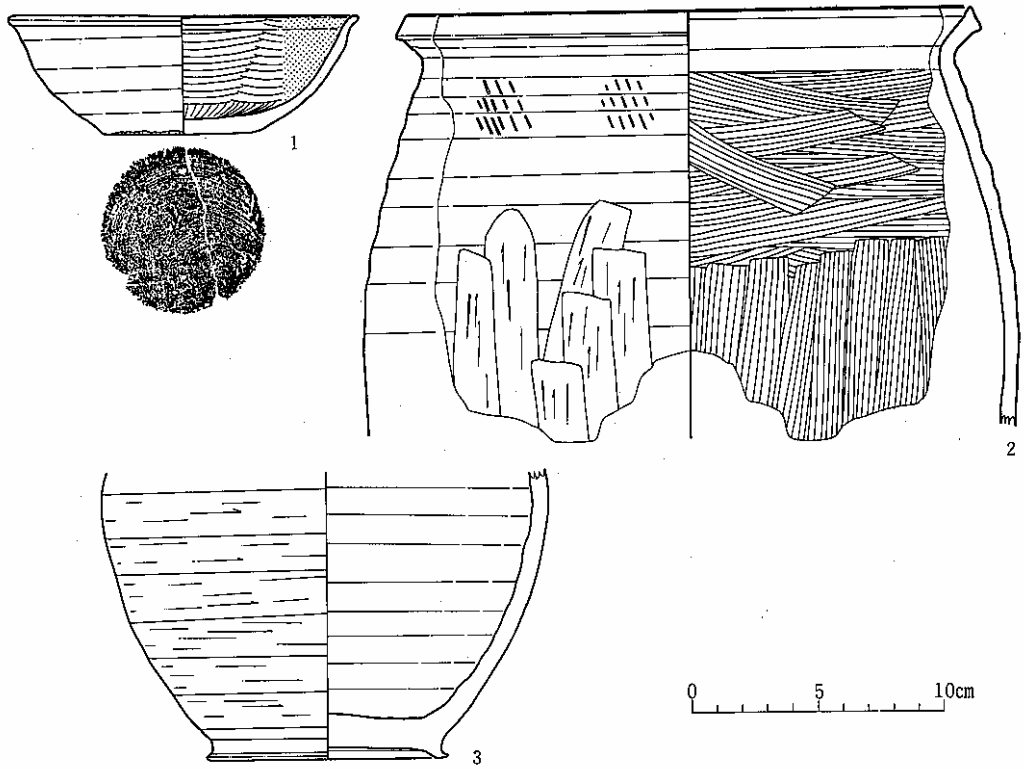


層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR3/3 暗褐色	シルト		
2	No 2	10YR3/2 黒褐色	シルト		
溝	No 3	10YR8/2 灰白色	シルト		灰白色火山灰
堆積土	No 4	10YR3/2 暗褐色	砂		
	No 5				第15号住居跡堆積土

第45図　第16号住居跡土層観察表

〔堆積土〕２層みとめられる。第１層は暗褐色シルト層、その下の第２層は黒褐色シルト層でいずれも流入した状態で堆積し住居全体に分布している。

〔出土遺物〕カマド内堆積土から土師器坏１点（第46図１）、住居床面から土師器甕１点（２）、須恵器壺１点（３）が出土している。その他、図示できなかったが土師器坏、甕、須恵器坏、赤焼土器の坏等の破片が出土している。これらはいずれもカマド周辺の床面もしくは堆積土第２層から出土しており本住居跡に伴う遺物と考えられる。



番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.9 器高 4.8 底径 6.4 口径比 4.6	16住－Po、1	A
2	土師器 甕	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラナデ	口径 22.4	16住－Po、2	AⅡ
3	須恵器 壺	〃	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	底径 9.6	16住－Po、3	

第46図　第16号住居跡出土遺物

第18号住居跡

〔位置〕新宿二番地区の北端部の微高地上に位置する。本住居跡東側は沢状地形となりこれを介して深山地区に隣接している。北側には第15・16号住居跡が隣接している。

〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。平面形は南北2.2m、東西3.1mの長方形を呈する。南半は掘り過ぎにより不明確である。

〔壁〕検出された壁は全て地山の褐色砂質シルトである。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

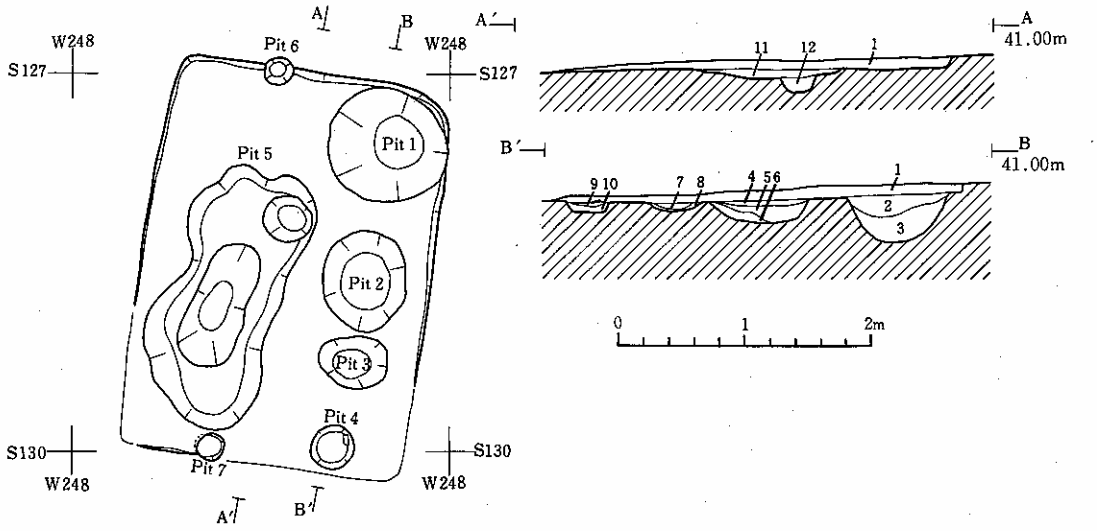
〔床面〕ほぼ平坦で全て地山の褐色砂質シルトからなる。

〔柱穴〕南北壁のほぼ中央に対応する一対のピットがみとめられる。柱痕は確認されなかったが位置的にみて柱穴と考えられる。（Pit６、７）

〔その他の施設〕住居床面に計５ヶ所のピットがみとめられる。Pit１～４は住居東辺に南北に並び、PitからPit４へと順次規模が小さくなる。またPit２～４の堆積土中には焼土粒が含まれ、特にPit３の第２層は焼けて固くしまっている。これに対しPit５は外形が不規則で形態も不整形である。これらのPit群の性格は明らかでない。

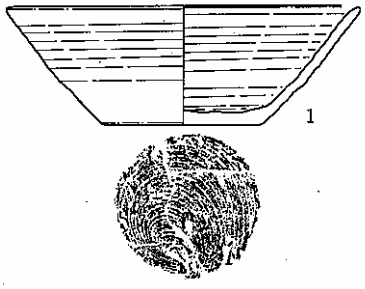
〔堆積土〕住居床面上に１層のみみとめられる。黒褐色シルト層が住居床面とPit群の上面を水平に覆っている。なおPit１、２、６の堆積土最上層には木炭片と灰白色火山灰のブロックを含む暗褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕Pit１、２、４の底面・堆積土から土師器坏、甕、須恵器甕、赤焼土器の坏などの破片が出土している。このうち、赤焼土器坏は器形の判別できるものがPit２で１点、Pit



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR3/2 黒褐色	シルト		
Pit 1	No 2	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭、灰白色火山灰粒	
	No 3	10YR3/3 暗褐色	シルト		
Pit 2	No 4	10YR3/4 暗褐色	シルト	灰白色火山灰粒	
	No 5	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土粒	
	No 6	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック	
Pit 3	No 7	7.5YR4/6 褐色	シルト		焼けて固くしまっている。
	No 8	7.5YR3/4 暗褐色	シルト		
Pit 4	No 9	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭、焼土粒	
	No10	10YR3/3 暗褐色	シルト		
Pit 5	No11	10YR3/2 黒褐色	シルト	木炭、灰白色火山灰粒	
	No12	10YR3/2 黒褐色	シルト		

第47図　第18号住居跡



４で２点出土しているのに対して、その他の土師器、須恵器はいずれも細片で器形の判別できるものはなかった。図示できたものは赤焼土器１点のみである。（第48図１）

番号	器種	層・位	特徴		登録No.	分類
1	赤焼土器 坏	Pit2	内・外面：ロクロナデ	口径 14.0 器高 4.7 底径 6.4 口径比 4.6	18住－Po.1	A

第48図　第18号住居跡出土遺物

第19号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属す。北側に第20号住居跡が隣接している。

〔平面形・重複〕第22号住居跡の堆積土を掘り込んで作られている。平面形は南北4.3m、東西3.2mの長方形を呈する。

〔壁〕南・北の壁は地山が暗褐色砂質シルトであるが、東西壁は第22号住居跡堆積土である。また壁の下部には地山の礫層が露出している部分がある。

〔床面〕ほぼ平坦で床面下には地山礫層が存在するがこの上にしまりのない暗褐色砂質シルトの貼り床がみとめられ、さらにカマド周辺には非常に固くしまった褐色砂質シルトの貼り床がみられる。

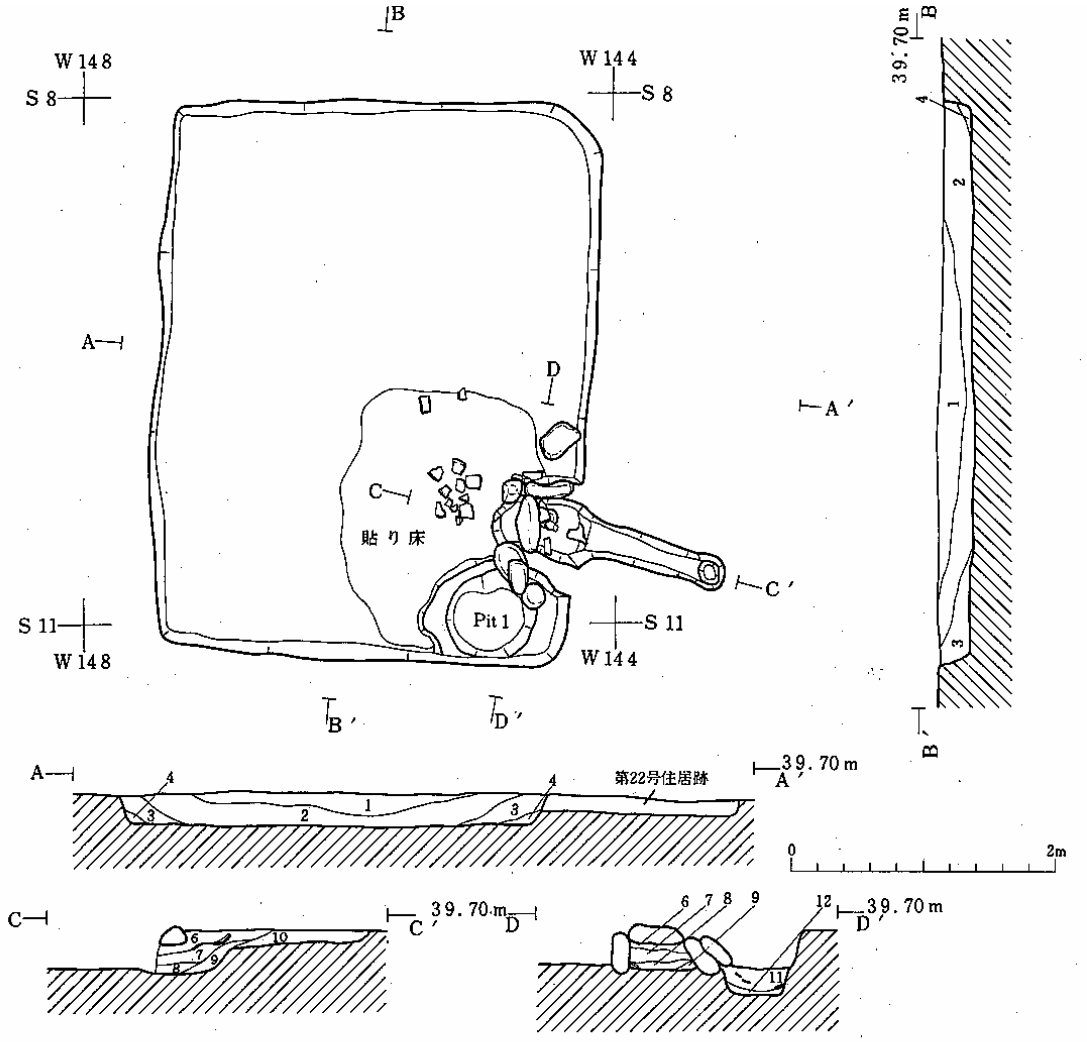
〔カマド〕住居東辺の南東隅よりの部分にカマドが構築されている。燃焼部の側壁は偏平な河原石を粘土で固定し構築されている。燃焼部底面は浅く掘り窪められ奥壁部でゆるやかに立ち上がっている。燃焼部中央やや北寄りに棒状の石を直立させた支柱がみとめられる。煙道はトンネル状に掘り抜かれたもので、主軸は住居東辺に対してやや南に振れている。床面はほぼ平らで、先端はピット状に浅く掘り込まれている。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの南隣、住居の南東隅にある。平面形は直径約60cmの円形、深さが約20cmで底面は平坦である。地山礫層を掘り込んで作られたもので壁には礫が露出している。また、口縁部には固くしまりのある褐色砂質シルトで巾５cm、高さ10cm、断面台形の堤状の土手が廻っている。（Pit１）

〔堆積土〕住居内堆積土は３層に大別されいずれも流入した状態で堆積している。第１層は火山灰起源と考えられる粘性のある黒色シルト層で住居中央の上部に堆積している。第２層は暗褐色シルトで住居内全体に分布し、中央部では床面を直接覆っている。第３層は黒褐色シルトで炭化物を多量に含む層で住居の壁際に堆積している。

〔出土遺物〕カマド内から土師器甕１点（第50図６）、住居床面から土師器坏１点（第50図１）、

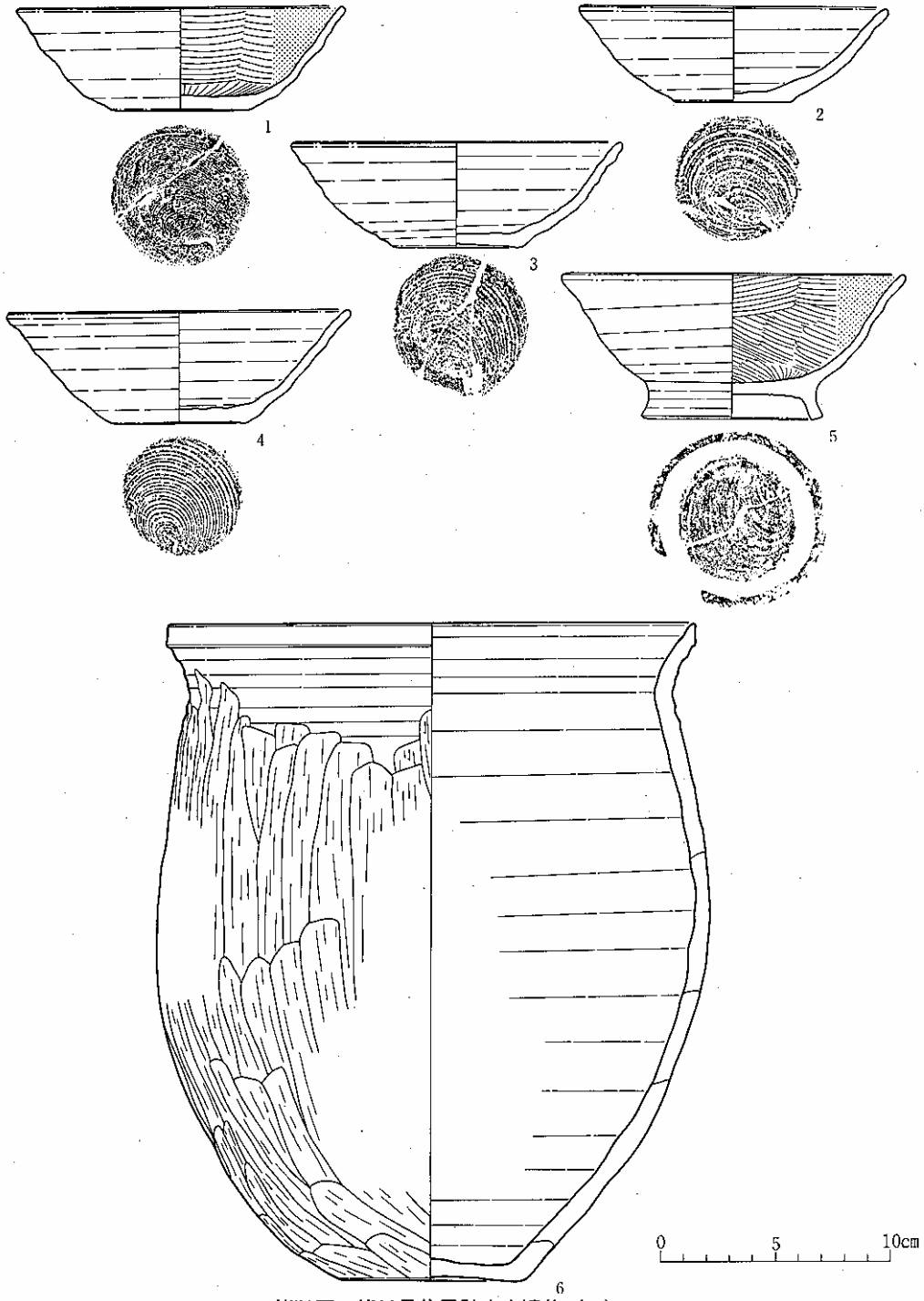
同鉢１点（第51図７）、貯蔵穴内から赤焼土器の坏３点（第50図２～４）が出土している。これらはその出土状態から本住居跡に伴う遺物と考えられる。この他図示できなかったがカマド内堆積土から、土師器坏、同甕、貯蔵穴内堆積土から赤焼土器の坏、同高台付坏、土師器甕の破片が多量に出土しており特に赤焼土器が大半を占める。これらも、本住居跡に伴う遺物と考え



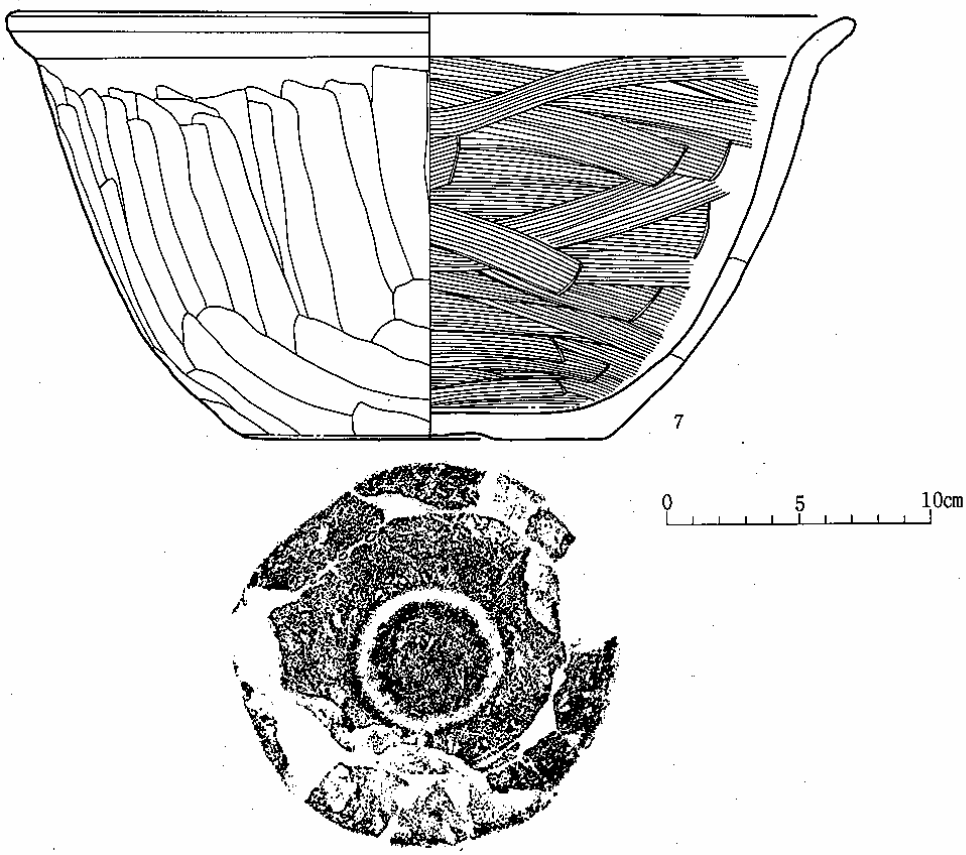
層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR3/1 黒色	シルト		黒ボク土
2	No 2	10YR3/3 暗褐色	シルト		
3	No 3	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物	
	No 4	10YR3/2 黒褐色	シルト	多量の炭化物	
カマド	No 6	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No 7	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土粒、炭化物	
	No 8	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土を多量に含む	
	No 9	10YR3/2 黒褐色	シルト		
煙道	No10	7.5YR3/3 暗褐色	シルト		
貯蔵穴状ピット	No11	10YR3/3 暗褐色	シルト	土器片、木炭	
	No12	10YR3/3 暗褐色	シルト		

第49図　第19号住居跡

られる。また床面からは須恵器坏、甕、土師器坏、甕の破片が少量出土しているが、これらの一部が、住居内堆積土第２、３層出土の土器破片と接合するものがあり、堆積土第２、３層の土器についても本住居跡に伴う遺物と考えることができる。図示できたものとしては堆積土第２層出土の土師器高台付坏（第50図５）だけである。



第50図　第19号住居跡出土遺物（１）



番号	器種	層位	特徴		登録No	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.4 器高 4.6 底径 6.2 口径比 4.3	19住－Po、1	B Ⅰ
2	赤焼土器 坏	Pit1	内・外面：ロクロナデ	口径 13.6 器高 4.2 底径 5.2 口径比 3.8	19住－Po、2	B
3	〃	〃	〃	口径 14.4 器高 4.7 底径 5.8 口径比 4.0	19住－Po、3	A
4	〃	〃	〃	口径 14.4 器高 4.9 底径 5.8 口径比 4.0	19住－Po、4	A
5	土師器高台付坏	堆積土	外面：ロクロナデ、底部回転糸切離し 内面：坏部内面ヘラミガキ、黒色処理	口径 15.0 器高 6.3 底径 7.9	19住－Po、7	
6	土師器 甕	カマド	外面：ロクロナデ、体部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	口径 23.0 器高 28.6 底径 8.2	19住－Po、5	B Ⅱ
7	土師器 鉢	床面	外面：口縁横ナデ、体部ヘラケズリ 内面：〃 体部ヘラナデ	口径 32.1 器高 16.3 底径 13.6	19住－Po、6	

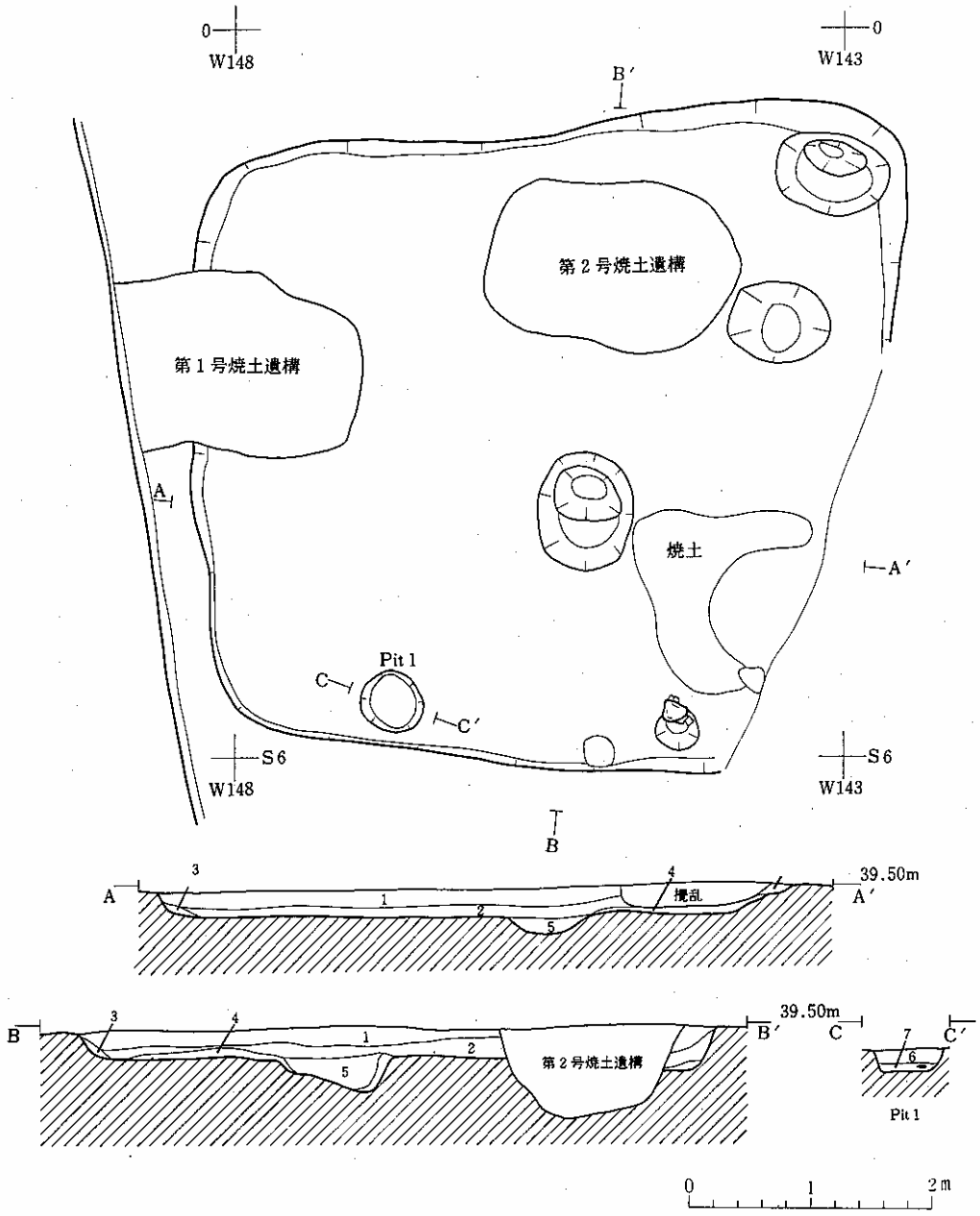
第51図　第19号住居跡出土遺物 (2)

第20号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する、本住居跡の南側2.2mに第19、22号住居跡が、北東約２mに第24号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕本住居跡西辺の一部を掘り込んで第１号焼土遺構が、また住居内北東隅寄りの堆積土、床面を掘り込んで第２号焼土遺構（105頁参照）が作られている。住居の平面形は南北5.0m、東西5.0mの不整な方形である。

〔壁〕確認された壁は、南東隅部が地山の礫層で不明確であるが、その他は地山の暗褐色砂質



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト		
2	No 2	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No 3	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No 4	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘土、焼土粒	
Pit 2	No 5	〃	シルト	炭化物、焼土粒	
Pit 1	No 6	〃	シルト	〃	
	No 7	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト		

第52図　第20号住居跡

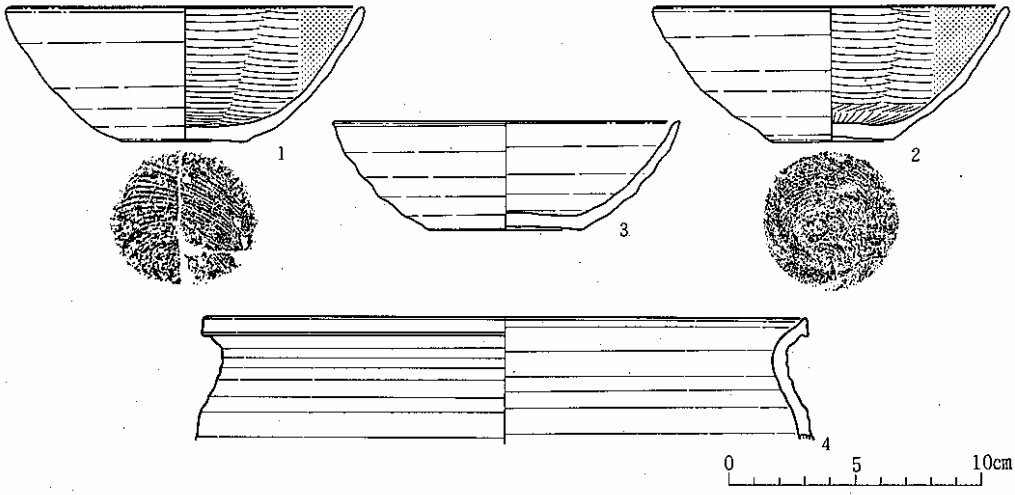
シルトである。床面からほぼ垂直に立ち上がるが、礫層の部分では不整形である。

〔床面〕床面はやや凹凸がみられ床面直下に地山礫層が分布し床面はしまりのない黒褐色シルトの貼り床となっている。

〔カマド〕住居東辺の南東隅寄りの床面にカマド本体の残骸と考えられる粘土、焼土が散在していた。煙道は確認されていない。

〔堆積土〕住居内堆積土は２層に大別されいずれも住居内全体に分布しほぼ水平に堆積している。第１層は黒褐色シルト層、第２層は暗褐色シルト層で床面上の堆積土である。

〔出土遺物〕住居床面からの出土遺物はない。住居内堆積土第２層から土師器坏２点（第53図１、２）、須恵器坏１点（３）、同甕１点（４）が出土している。これらはいずれもほぼ完形で床面直上から出土していることから本住居に伴う遺物と考えられる。この他堆積土第１、２層から土師器坏、甕、須恵器坏、赤焼土器坏の破片が出土しているが少量であり図示できるものはなかった。



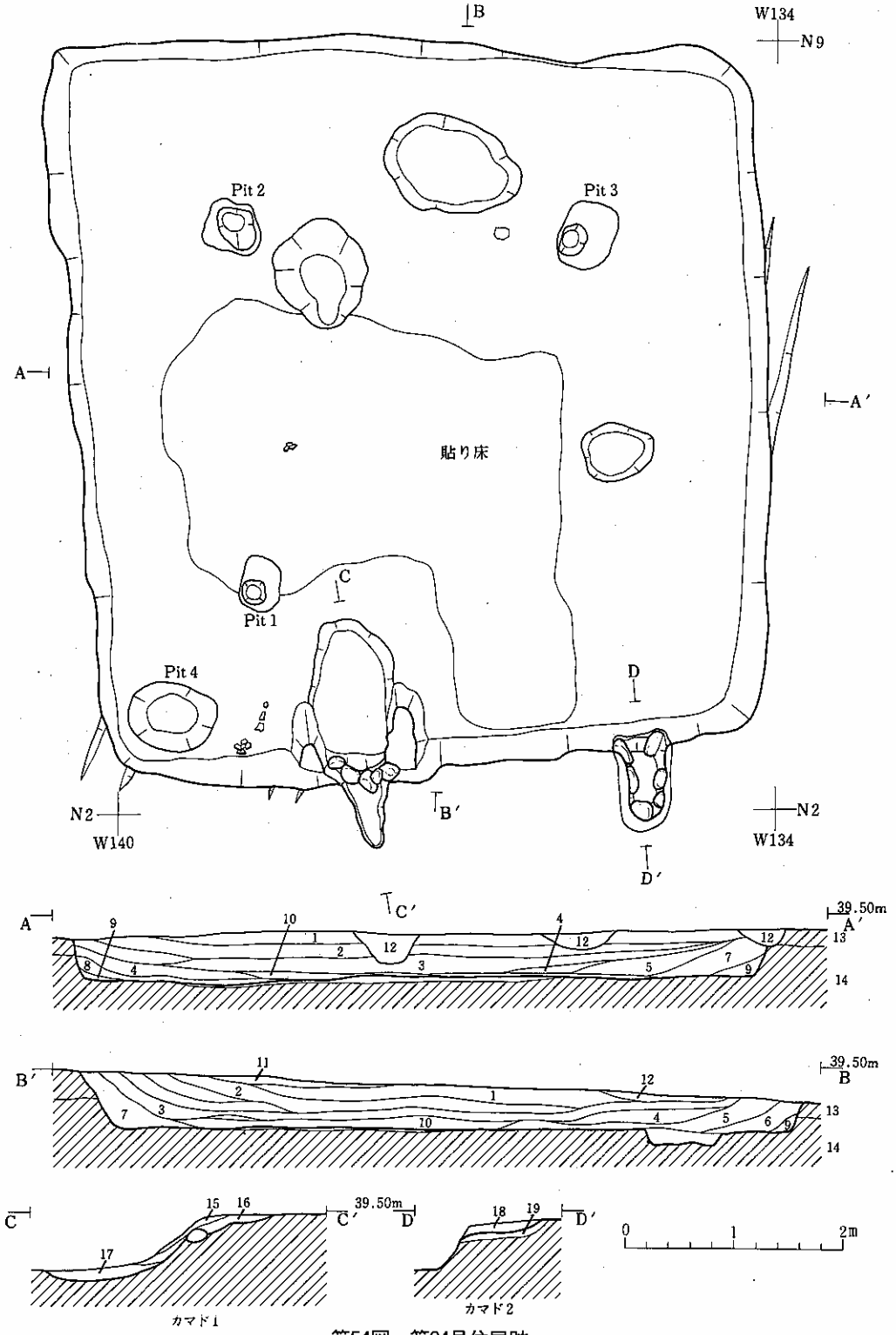
番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器　坏	堆積土	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.2　器高 5.3 底径 5.0　口径比 3.5	20住－Po、1	A
2	〃	〃	〃	口径 14.2　器高 5.4 底径 4.8　口径比 3.4	20住－Po、2	A
3	須恵器　坏	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 13.8　器高 4.3 底径 6.2　口径比 4.5	20住－Po、3	B I
4	須恵器　甕	〃		口径 23.8	20住－Po、4	

第53図　第20号住居跡出土遺物

第24号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡南西２mに第20号住居跡が、北５mに第35号住居跡が、北東６mに第22、33、34号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕本住居跡堆積土を掘り込んだ南北方向の畑跡がみとめられる。この畑跡の畝間には灰白色火山灰が堆積している。畑跡は住居内堆積土の部分にのみ残存し、住居跡外で



第54図　第24号住居跡

層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No1	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No2	10YR3/3 黒褐色	シルト		
2	No3	10YR3/2 黒褐色	シルト	粘土，地山ブロックグライ化含む	
3	No4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		
	No5	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト		
	No6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト		
	No7	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト		
	No8	10YR4/4 褐色	砂		
	No9	10YR3/3 暗褐色	シルト		
4	No10	10YR2/1 黒色	粘土	（炭化物層）	
畑畝	No11	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	No12	10YR8/2 灰白色	シルト	（火山灰）	
地山	No13	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No14	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト		
カマド1	No15	10YR3/4 にぶい黄褐色	シルト		
	No16	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土を多量に含む	
	No17	2.5YR3/6 暗赤褐色	粘土	焼土層	
カマド2	No18	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土粒	
	No19	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト		

第24号住居跡

は削平されている。住居の平面形は一辺が6.5mの正方形を呈している。

〔壁〕確認された壁は上部が暗褐色シルト層、下部が地山の暗褐色砂質シルト層からなる。また南壁の下部には部分的に礫層が露出している。

〔床面〕床面は東から西に緩やかに傾斜しており、カマド周辺から住居中央部にかけては固くしまりのある褐色シルトの貼り床がみとめられる。その他はしまりのない暗褐色シルトである。

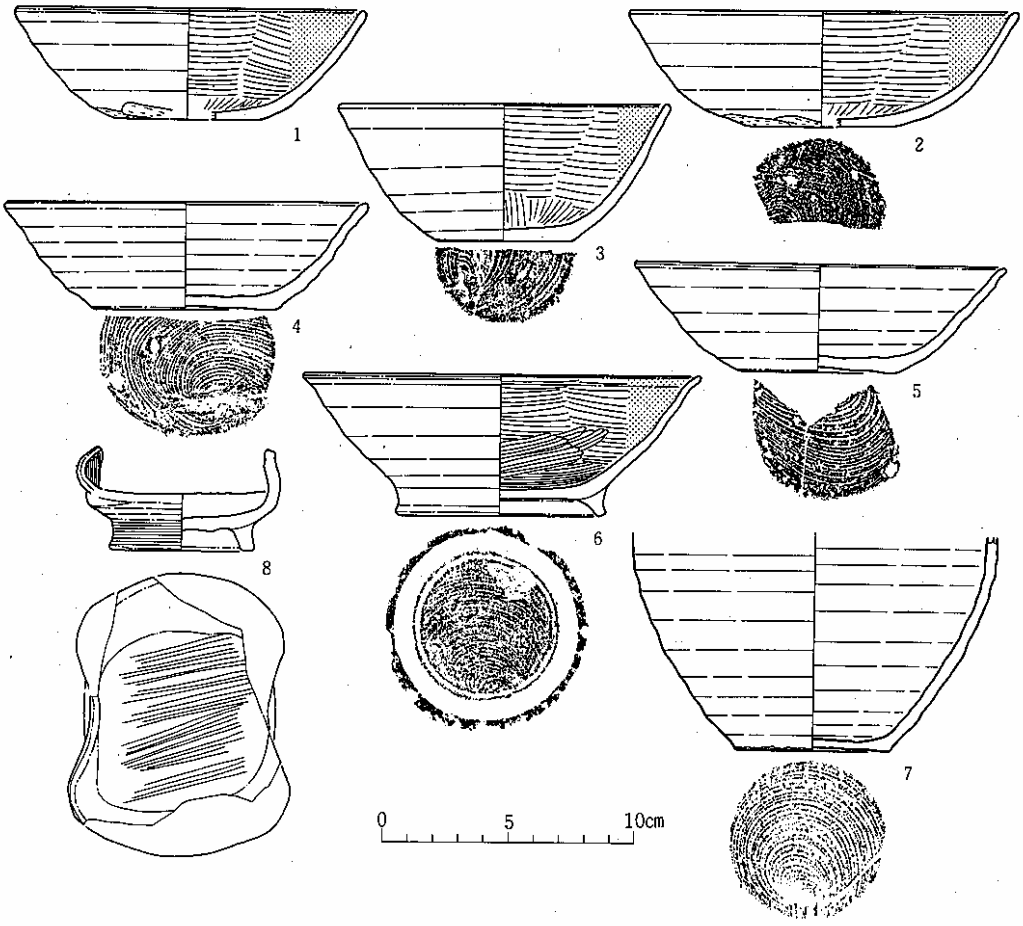
〔カマド〕住居南辺の南西隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部の側壁は青灰色の粘土によって構築されており、燃焼部内には天井部の粘土が崩落していた。燃焼部底面は浅く掘り窪められ奥壁は緩やかに立ち上っている。煙道はトンネル状に掘り抜かれたもので、煙道部と燃焼部の境は円礫で区画されている（カマド１）。この他住居南辺南東隅寄りにも煙道が確認された。燃焼部は解体されているが、煙道は掘り方を掘った後その壁面を礫によって土止めしている（カマド２）。

〔貯蔵穴状ピット〕住居の南西隅の部分に貯蔵穴状のピットがある。平面形は、径60cm×80cmの楕円形で底面は平坦である（Ｐｉｔ４）。

〔柱穴〕柱穴は３個検出された（Ｐｉｔ１～３）。これらは住居対角線上に位置し、結んだ線は西壁北壁と平行になる。いずれも楕円形の掘り方を持ち柱間は3.5m、3.1mである。

〔堆積土〕堆積土は４層に大別されいずれも流入した状態で堆積している。第１層は暗褐色もしくは黒褐色のシルト層で住居中央の上面に分布している。第２層は黒褐色シルト層で第１層同様住居中央に分布している。第３層は住居床面堆積土で、砂質シルト、粘質シルトの互層で壁際に堆積している。第４層は住居中央部の床面上に薄く堆積した炭化物層で、生活層であると考えられる。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏２点（第55図１、２）、同高台付坏１点（４）、同甕１点（７）、須恵器坏１点（６）、貯蔵穴底面から須恵器坏１点（５）が出土している。これらは本住居跡に伴う遺物と考えられる。また図示できなかったが住居床面から土師器坏、高台付坏、須恵器坏、甕の破片が出土している。これらも本住居跡に伴う遺物と考えられる。この他柱穴掘り方（Ｐｉｔ３）の埋土から土師器坏（第55図３）、住居跡堆積土第２層から土師器耳皿（８）、鉄製品（釘か？）、土師器坏、高台付坏、須恵器坏、甕の破片が出土している。堆積土第２層出土の土器類は床面出土のものと接合関係にあるものが多い。堆積土第１層からは土師器坏、甕、須恵器坏の破片が少量出土しているが出土状態に規則性はみとめられなかった。



番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器　坏	床　面	外面：ロクロナデ、底部全面ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.0　器高 4.4 底径 6.0　口径比 4.3	24住－Po、1	ＢⅠ
2	〃	〃	〃	口径 15.6　器高 4.6 底径 6.1　口径比 3.9	24住－Po、2	ＢⅡ
3	〃	Pit3	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.2　器高 5.4 底径 5.4	24住－Po、3	Ａ
4	土師器高台付坏	床　面	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り離し 内面：坏部ヘラミガキ、黒色処理	口径 15.9　器高 5.6 底径 8.4	24住－Po、5	
5	須恵器　坏	Pit4	内・外面：ロクロナデ	口径 14.4　器高 4.3 底径 7.4　口径比 5.1	24住－Po、6	ＢⅠ
6	〃	床　面	〃	口径 14.8　器高 4.3 底径 6.2　口径比 4.2	24住－Po、4	ＢⅠ
7	土師器　甕	〃	内・外面：ロクロナデ	底径 6.2	24住－Po、7	ＣⅠ
8	土師器　耳皿	堆積土	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り→回転ケズリ→付け高台 内面：ヘラミガキ、黒色処理		24住－Po、8	

第55図　第24号住居跡出土遺物

第25号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の西側に第109号墳が隣接している。

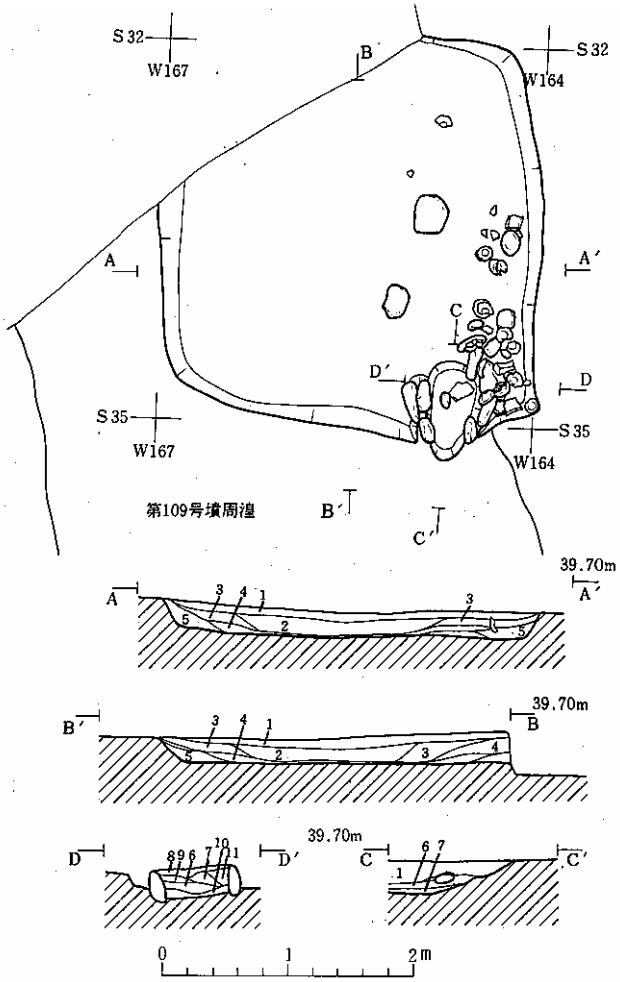
〔平面形・重複〕本住居跡は第109号墳の周湟と重複し、住居西半部は第109号墳の周湟堆積土を一部掘り込んで作られている。また住居北西隅部は掘り過ぎにより失われた。平面形は南北軸3.0m、東西軸3.0mの正方形を呈する。

〔壁〕壁は暗褐色シルと層で、第109号墳と重複する西半部では第109号墳の周湟堆積土を壁としている。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦でしまりのない暗褐色シルトからなり、直下には地山礫層がみられる。

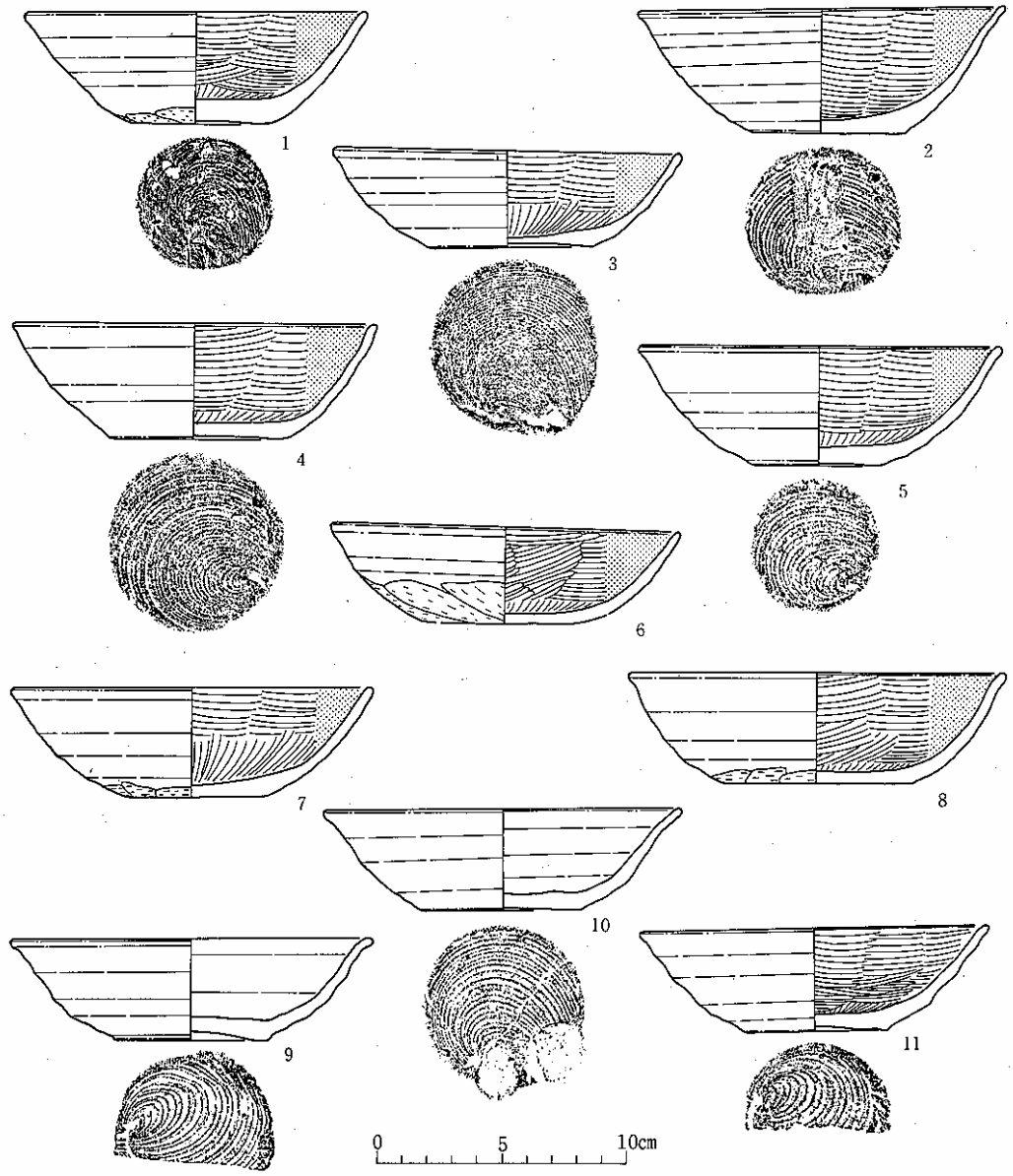
〔カマド〕住居南辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部側壁は偏平な河原石を粘土で固定して構築されている。燃焼部底面は浅く掘り窪められ奥壁部で緩やかに立ち上がる。燃焼部中央には棒状の河原石を直立させた支柱がある。

〔堆積土〕３層に大別されいずれも流入した状態で堆積している。第１層は暗褐色シルト層で住居上部の全体に分布している。第２層は黒褐色もしくは暗褐色シルト層でほぼ住居全体に分布しているが中央部では厚く、外縁部ではかなり薄くなっている。第３層は



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を微量含む	
2	No2	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を含む	
	No3	10YR3/4 暗褐色	シルト		
3	No4	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物の層	
	No5	10YR3/2 黒褐色	シルト		
カマド	No6	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物	
	No7	25YR3/4 暗赤褐色	シルト	焼土層	
	No8	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No9	〃	シルト		
	No10	7.5YR3/3 暗褐色	シルト		
	No11	〃	シルト	灰白色火山灰粒	

第56図　第25号住居跡

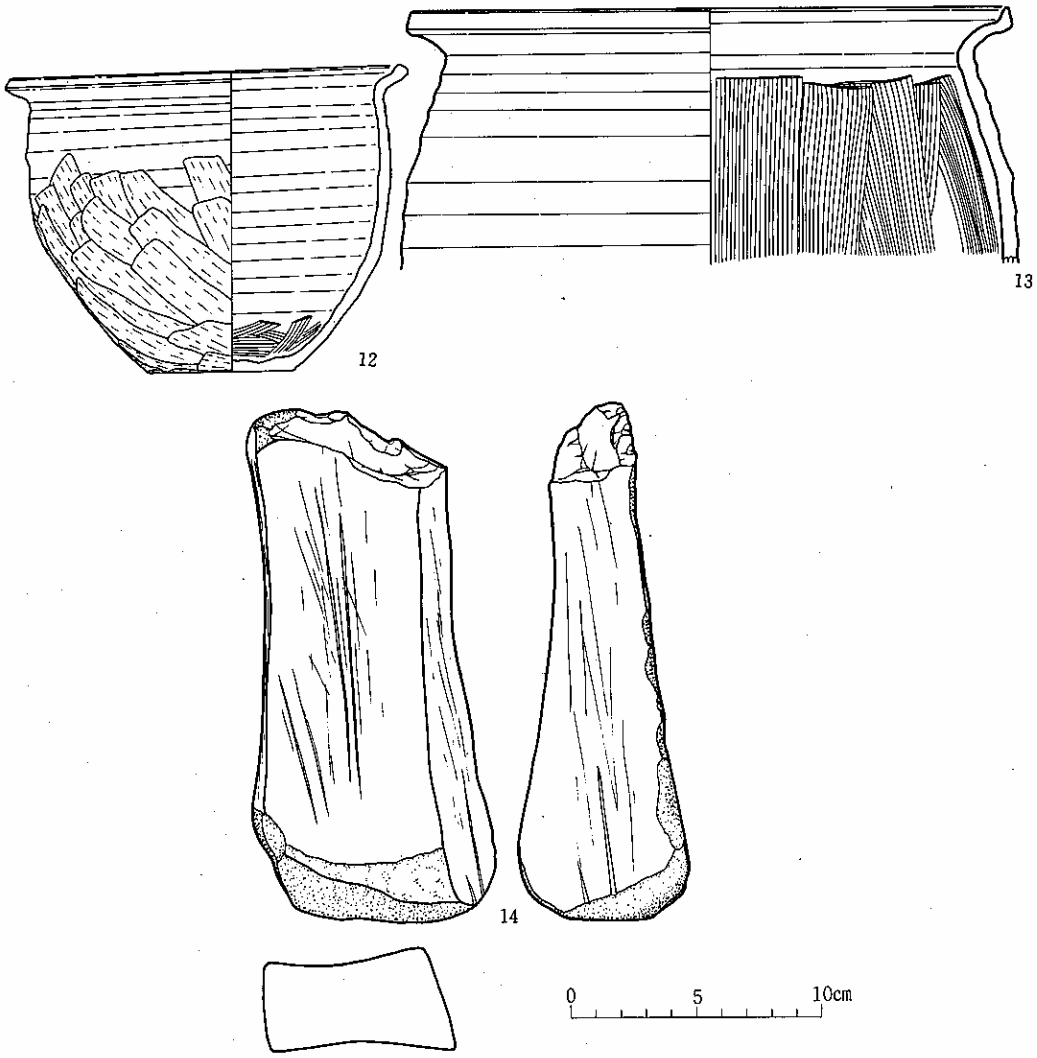


番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ、体部下端ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.8 器高 4.6 底径 5.6 口径比 4.1	25住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.8 器高 4.7 底径 6.2 口径比 4.2	25住－Po、2	〃
3	〃	〃	〃	口径 14.0 器高 4.0 底径 5.6 口径比 4.0	25住－Po、6	〃
4	〃	〃	〃	口径 14.6 器高 4.6 底径 7.1 口径比 4.9	25住－Po、4	〃
5	〃	〃	〃	口径 14.6 器高 4.8 底径 5.3 口径比 3.6	25住－Po、5	B Ⅱ
6	〃	〃	外面：ロクロナデ、体部下端底部全面ケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.0 器高 4.4 底径 6.7 口径比 4.6	25住－Po、3	B Ⅰ
7	〃	〃	〃	口径 14.6 器高 4.4 底径 5.7 口径比 3.9	25住－Po、7	B Ⅱ
8	〃	〃	〃	口径 15.2 器高 4.5 底径 7.9 口径比 5.2	25住－Po、8	B Ⅰ
9	須恵器 坏	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 14.6 器高 4.1 底径 6.2 口径比 4.2	25住－Po、9	〃
10	〃	〃	〃	口径 14.4 器高 4.2 底径 6.6 口径比 4.6	25住－Po、10	〃
11	〃	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ（？）	口径 14.0 器高 4.2 底径 5.8 口径比 4.0	25住－Po、11	B Ⅱ

第57図　第25号住居跡出土遺物（1）

黒褐色シルト層で床面上に堆積し住居全体に分布している。壁際で厚く住居中央部では薄く堆積しており、特に中央部は炭化物層となっていることから生活層と考えられる。

〔出土遺物〕カマド周辺の住居床面から土師器坏８点（第57図１～８）、同甕２点（12、13）、須恵器坏３点（９～11）、砥石（第58図14）が出土している。これらはいずれも本住居に伴う遺物と考えられる。また図示できなかったがカマド内堆積土から土師器坏１点、同高台付坏２点、同甕２点、須恵器坏１点、住居床面から土師器坏２点が出土している。このうち土師器坏の底部はいずれも全面手持ちケズリ再調整されたものである。これらの遺物も本住居跡に伴うものと考えられる。この他住居堆積土第１、２層から土師器坏、高台付坏、甕、須恵器甕の破片が



番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
12	土師器 甕	床面	外面：ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ 内面：ロクロナデ→底部ヘラナデ 口径 16.0 器高 12.2 底径 5.9	25住－Po、12	CⅡ
13	〃	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラナデ 口径 24.0	25住－Po、13	AⅡ
14	砥石	〃		25住－S、1	

第58図　第25号住居跡出土遺物（2）

出土しているが出土状態に規則性はみられず、図示できるものもなかった。

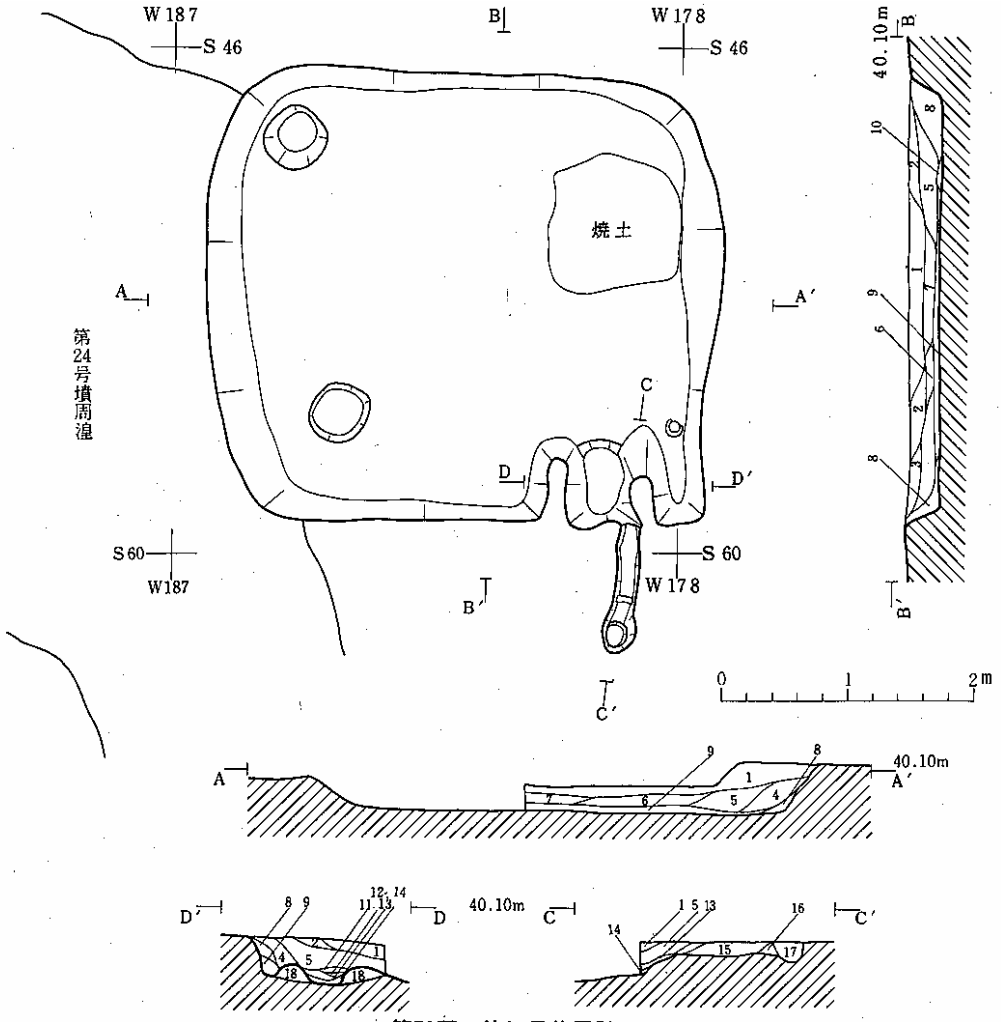
第26号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の東側に第109号墳、西側に第24号墳が隣接している。また北西約４mに第28号住居跡、南約10mに第21号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕本住居跡は第24号墳の周湟と重複し住居南西部は第24号墳の周湟堆積土を一部掘り込んで作られている。平面形は南北軸3.5m、東西軸4.0mの長方形を呈する。

〔壁〕確認された壁は床面からゆるやかに立ち上がり上部が黒色シルト層、下部が地山の黄褐色砂質シルト層である。また第24号墳に重複する南西コーナー部では第24号墳周湟の堆積土を壁としている。

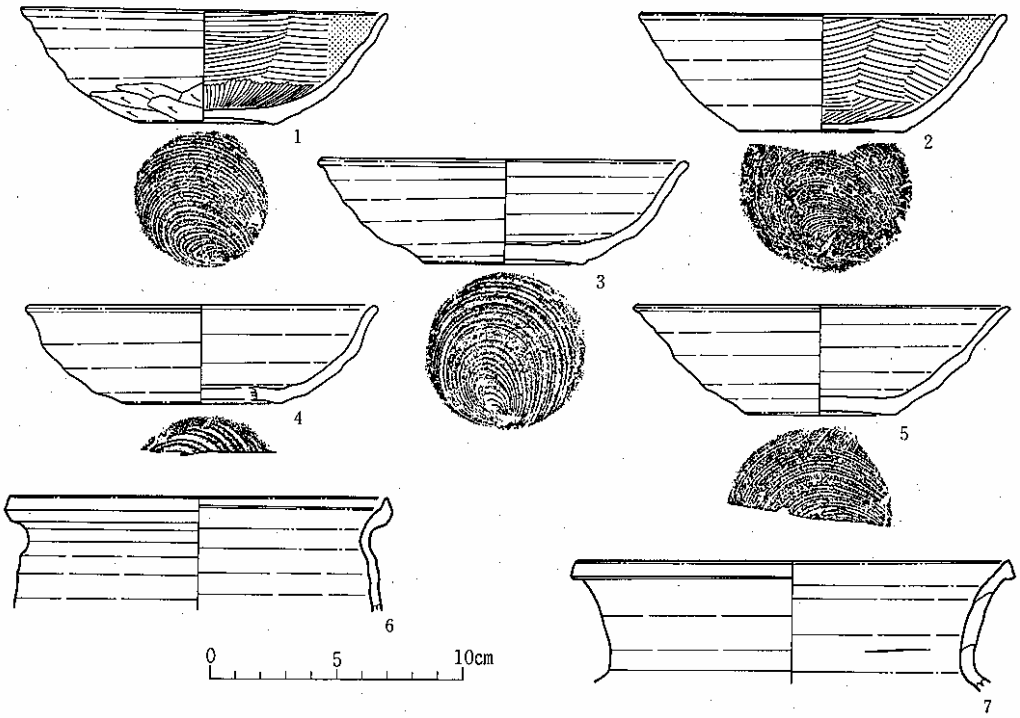
〔床面〕床面はほぼ平坦でしまりのない黒褐色シルトからなり直下は地山礫層になっている。また第24号墳と重複する南西コーナー部では第24号墳周湟の堆積土を床としている。



第59図　第26号住居跡

層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No1	10YR4/4 褐色	シルト		
	No2	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック	
	No3	10YR5/6 黄褐色	シルト		
2	No4	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No5	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、地山ブロック	
	No6	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No7	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、地山ブロック	
3	No8	10YR3/1 黒褐色	シルト		
	No9	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No10	10YR3/3 黒褐色	シルト	炭化物	
カマド	No11	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	No12	10YR4/6 褐色	シルト		
	No13	5BG5/1 青灰色	粘土		
	No14	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	焼土	
煙道	No15	10YR3/1 黒褐色	シルト	地山ブロック	
	No16	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土粒	
	No17	10YR3/4 暗褐色	シルト		
カマド袖	No18	5BG5/1 青灰色	粘土		

第26号住居跡



番号	器種	層位	特徴		登録No	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ一体部下端ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.6 器高 4.6 底径 5.6 口径比 3.8	26住－Po、1	BⅡ
2	〃	堆積土	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.6 器高 4.7 底径 6.7 口径比 4.6	26住－Po、2	BⅠ
3	須恵器 坏	カマド	内・外面：ロクロナデ	口径 14.6 器高 4.2 底径 6.4 口径比 4.4	26住－Po、3	BⅠ
4	〃	堆積土	〃	口径 14.0 器高 3.9 底径 6.0 口径比 4.4	26住－Po、4	BⅠ
5	〃	〃	〃	口径 15.0 器高 4.4 底径 6.0 口径比 4.0	26住－Po、5	BⅠ
6	土師器 甕	〃	〃	口径 15.4	26住－Po、6	CⅠ
7	須恵器 甕	〃	〃	口径 17.8	26住－Po、7	

第60図　第26号住居跡出土遺物

〔カマド〕住居南辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部の側壁は青灰色粘土によって構築されており燃焼部内には天井部の粘土が崩落していた。燃焼部底面は浅く掘り窪められ奥壁は緩やかに立ち上がっている。煙道はトンネル状に掘り抜かれたもので、先端はピット状に掘り込まれている。またこのピット状の掘り込み部と煙道との境の底面に甕の口縁部破片が設置されている。

〔堆積土〕３層に大別されいずれも流入した状態で堆積している。第１層は褐色もしくは暗褐色シルト層で住居上部のほぼ全体を覆っている。第２層は暗褐色シルト層で住居内全体に分布するが、住居中央部ではやや薄く堆積している。第３層は黒褐色シルト層で床面直上の堆積土であり、住居床面全体を覆っている。

〔出土遺物〕カマド内堆積土から須恵器坏１点（第60図３）、住居床面から土師器坏１点（１）が出土している。これらは本住居跡に伴う遺物と考えられる。また住居内堆積土第３層から土師器坏１点（２）、須恵器坏１点（４）、須恵器甕１点（７）、堆積土第２層から土師器甕１点（６）、第１層から須恵器坏１点（５）が出土している。この他図示できなかったものとして堆積土第２層から土師器坏、須恵器甕などの破片が少量出土しているが、いずれも出土状態に規則性はみられない。

第27号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の北側には第24号墳、南西に第114号墳、南に第113号墳が位置している。また本住居跡の東側10mに第21号住居跡、北西約10mに第29号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕本住居跡は第24号墳の前庭と重複し、住居北部は第24号墳の前庭堆積土の一部を掘り込んで作られている。平面形は南北軸4.7m、東西軸4.0mの長方形を呈する。

〔壁〕壁は床面からゆるやかに立ち上がり上部が暗褐色シルト層、下部が地山の褐色砂質シルト層である。また第24号墳の前庭に重複する北半部の上部は第24号墳前庭の堆積土を壁としている。

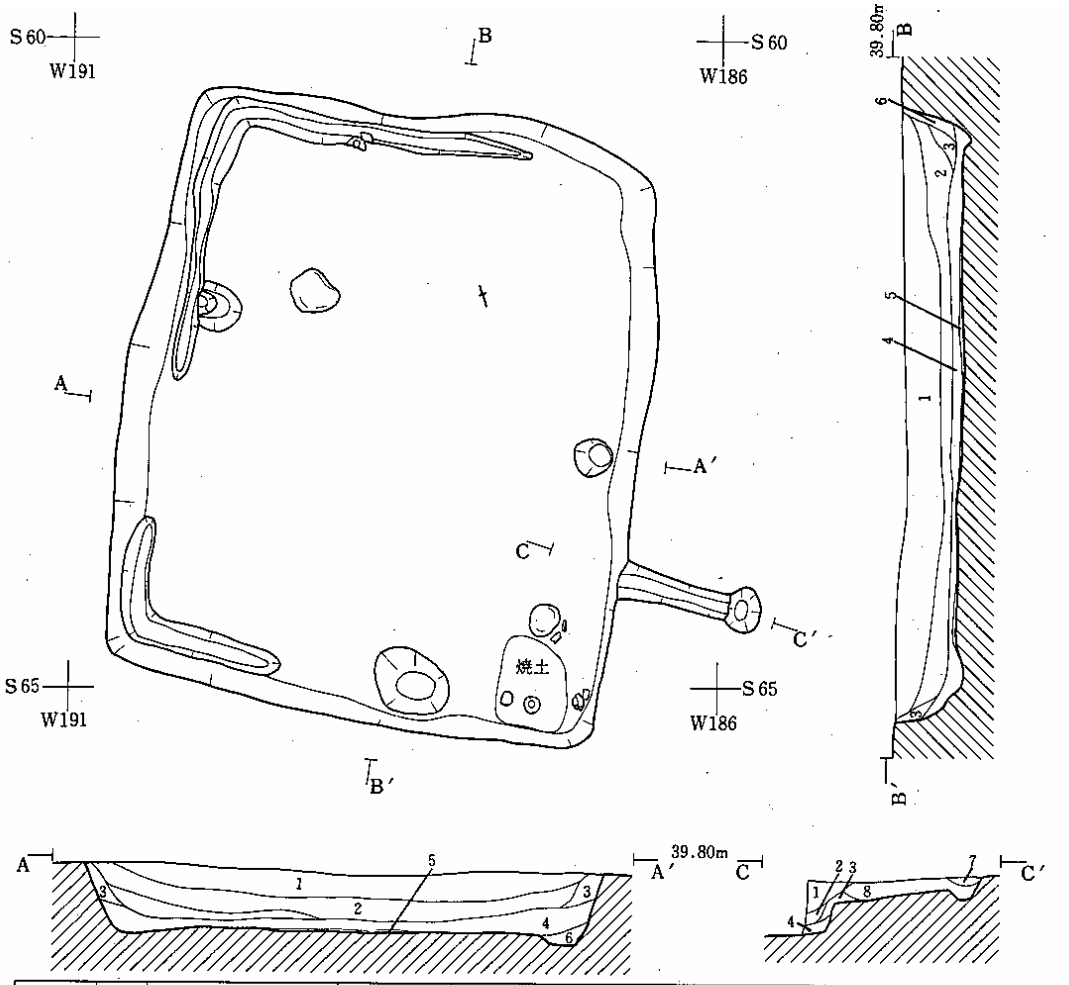
〔床面〕床面はほぼ平坦でしまりのない褐色砂質シルトからなる。

〔カマド〕住居東辺の南東隅寄りの部分に煙道が確認された。カマド本体は解体されている。煙道はトンネル状に掘り抜かれたもので先端はピット状に掘り込まれている。

〔周溝〕南西隅部と北西隅から北壁にかけて巾15cm、深さ５cmの周溝が廻っている。

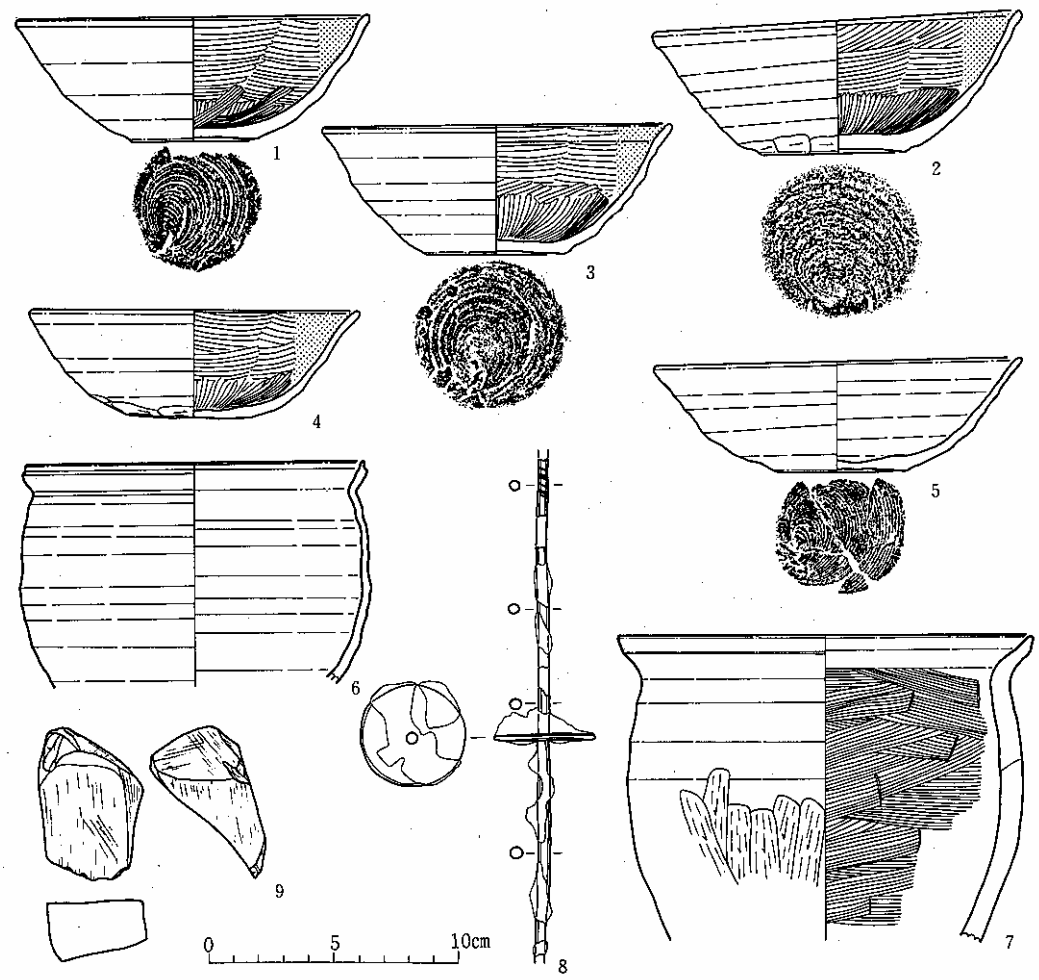
〔堆積土〕３層に大別され、いずれも流入した状態で堆積している。第１層は暗褐色シルト層で住居の上部全体に厚く分布している。第２層は褐色もしくは暗褐色シルト層で住居西半部にのみ分布している。第３層は灰白色火山灰で床面直上に極く薄く堆積している。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏４点（第62図１～４）、砥石１点（９）、鉄製紡錘車１点（８）が出土している。これらは本住居跡に伴う遺物と考えられる。また図示できなかったが住居床面から内面を黒色処理した土師器甕破片が出土しており、これも本住居に伴うものと考えられる。住居内堆積土第１層から土師器甕２点（第62図６、７）、須恵器坏１点（５）が出土している。また図示できなかったが土師器坏、同高台付坏、同甕、赤焼土器坏の破片が出土している。これらはいずれも第１層下部にみとめられたもので、土師器坏破片の中には床面出土の坏と接合関係にあるものが含まれている。器種の識別できるものとしては土師器高台付坏が８～10点になり破片の大半を占めている。



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR3/3 暗褐色	シルト	若干の焼土粒、炭化物粒を含む	
2	No 2	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒、焼土粒を若干含む	
	No 3	10YR5/6 褐色	シルト		
	No 4	10YR2/2 黒褐色	シルト		
3	No 5	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、焼土粒を含む	火山灰層
	No 6	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山	
煙道	No 7	10YR5/4 褐色	シルト		
	No 8	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物、焼土	

第61図　第27号住居跡



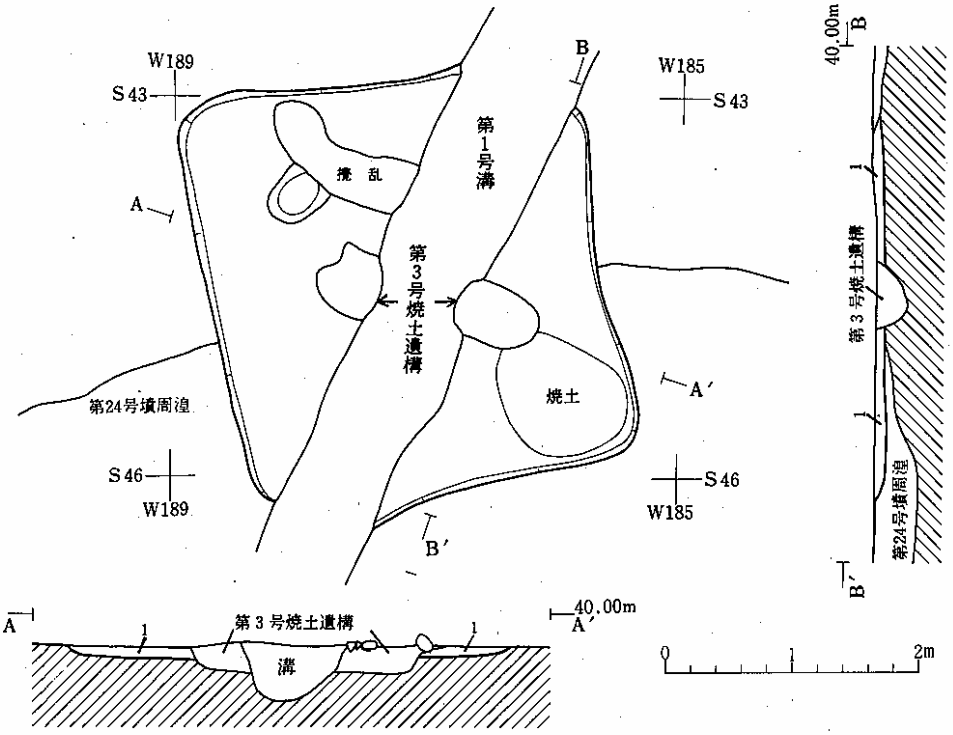
番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 口径 14.0 器高 5.0 底径 4.9 口径比 3.5	27住－Po、1	A
2	〃	〃	外面：ロクロナデ、体部下端ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 口径 14.6 器高 5.5 底径 5.7 口径比 3.9	27住－Po、2	〃
3	〃	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 口径 14.0 器高 5.2 底径 5.6 口径比 4.0	27住－Po、3	〃
4	〃	〃	外面：ロクロナデ、体部下端・底部全面ケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 口径 13.2 器高 4.3 底径 5.0 口径比 3.8	27住－Po、4	B Ⅱ
5	須恵器 坏	堆積土	内・外面：ロクロナデ 口径 14.6 器高 5.5 底径 5.4 口径比 3.7	27住－Po、5	B Ⅰ
6	土師器 甕	〃	内・外面：ロクロナデ 口径 13.4	27住－Po、6	C Ⅲ
7	〃	〃	外面：ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ 内面：ヘラナデ 口径 16.6	27住－Po、7	C Ⅱ
8	鉄製紡錘車	床面		27住－E、1	
9	砥石	〃		27住－S、1	

第62図　第27号住居跡出土遺物

第28号住居跡

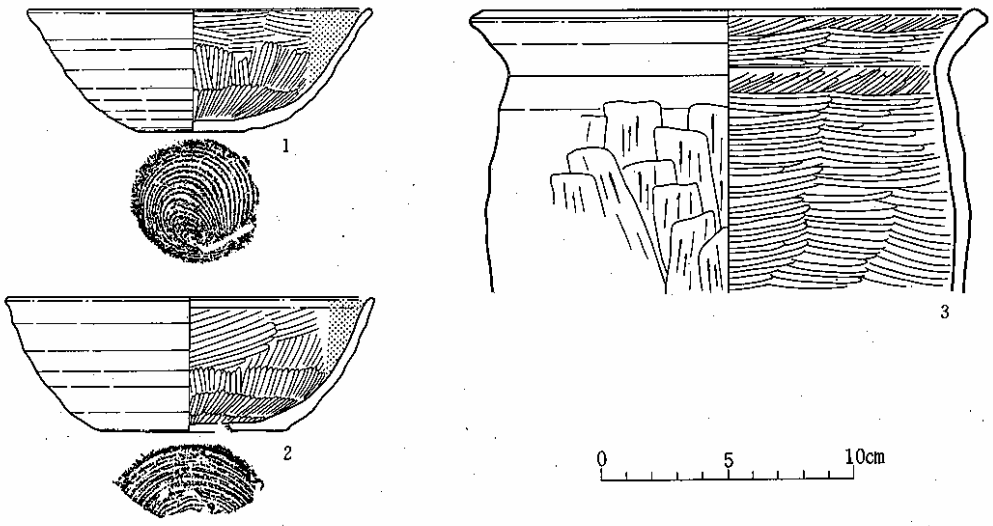
〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の南側には第24号墳が隣接し、南東約５mには第26号住居跡、南西約４mには第29号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕本住居跡は第24号墳の周湟と重複し、住居南半は第24号墳の周湟堆積土を掘り込んで作られている。また本住居跡中央部の堆積土床面を掘り込んで第３号焼土遺構、さ



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No1	10YR3/3 黒褐色	シルト		

第63図　第28号住居跡



番号	器種	層位	特徴		登録No	分類
1	土師器　坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.7　器高 5.0 底径 4.9　口径比 3.6	28住－Po、1	A
2	〃	〃	〃	口径 14.6　器高 5.4 底径 7.8　口径比 5.3	28住－Po、2	〃
3	土師器　甕	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ	口径 11.0	28住－Po、3	B

第64図　第28号住居跡出土遺物

らにこれらの堆積土を掘り込んで北東から南西に走る第１号溝が作られている。住居の平面形は南北軸3.2m、東西軸3.0mのほぼ正方形を呈する。

〔壁〕確認された壁は床面からゆるやかに立ち上がり地山の褐色砂質シルトからなる。また住居南半では第24号墳周湟堆積土を壁としている。

〔床面〕住居床面は平坦で、しまりのない褐色砂質シルトからなり、住居南半では第24号墳周湟堆積土を床面としている。

〔堆積土〕床面上に１層のみ認められる。暗褐色、もしくは黒褐色シルト層で住居床面全体を覆っている。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏２点（第64図１、２）、同甕１点（３）が出土している。これらは本住居跡に伴う遺物と考えられる。この他図示できなかったが住居床面から土師器坏、甕、須恵器坏、甕もしくは壺、赤焼土器坏、灰釉陶器坏の破片が出土している。

第30号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡南西約６mに第31号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。平面形は南北軸3.6m、東西軸3.6mの正方形を呈する。

〔壁〕確認された壁は住居床面からなだらかに立ち上がり、全て地山の暗褐色砂質シルト層からなる。

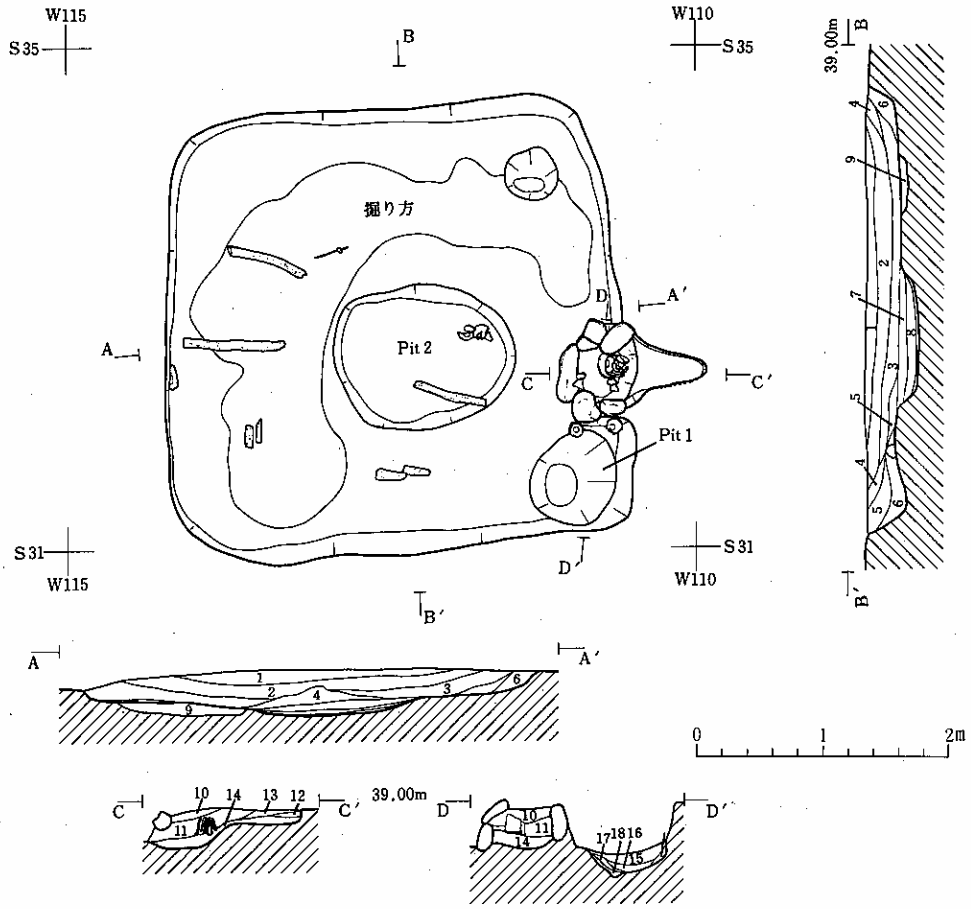
〔床面〕住居床面からほぼ平坦でしまりのない暗褐色砂質シルト層からなる。また住居東辺、北辺、西辺にかけて「コ」の字形に床面下に浅い掘り方がみとめられ固くしまった粘土の貼り床が施されている。

〔カマド〕住居東辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部側壁は偏平な河原石を粘土で固定して作られている。燃焼部底面は浅く掘り窪められ奥壁部でゆるやかに立ち上がる。燃焼部底面の中央部に棒状の石を直立させた支柱がある。またカマドの前端には燃焼部天井に架構されていたと考えられる石が崩落していた。煙道は地面を掘り込んだものである。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの南隣、住居南東隅部に貯蔵穴状ピットがある。平面形が直径約80cmの円形で床面からの深さは約20cm、底面はすり鉢状になっている（Ｐｉｔ１）。

〔その他の施設〕住居中央の床面に平面形が南北軸1.2m、東西軸1.4mの楕円形を呈し深さ15cmの土壙が確認された。土壙底面には炭化物が確認された（Ｐｉｔ２）。

〔掘り方〕住居の東辺、北辺、西辺にかけての住居床面に平面形が「コ」の字型の掘り方が認められる。埋め土は固くしまっており貼り床を施すための地業的な性格を持つものと考えられる。

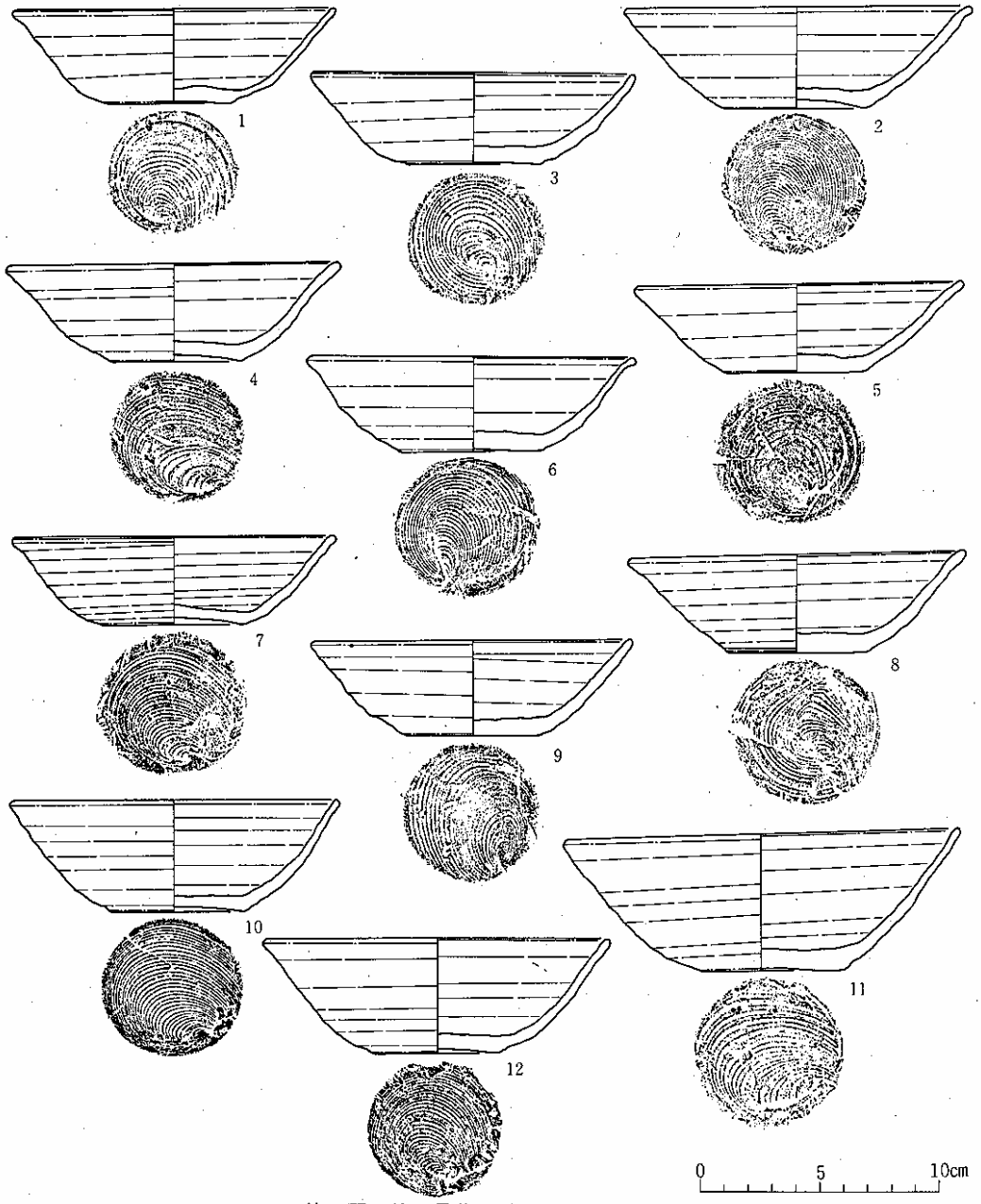


層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR5/6 黄褐色	シルト		
2	No 2	10YR5/4 にぶい黄橙	シルト	酸化鉄の成分を含む	
3	No 3	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を少し含む	
	No 4	10YR3/2 黒褐色	シルト	木炭を多量に含む	
	No 5	10YR4/4 褐色	砂		
	No 6	10YR3/4 暗褐色	シルト(砂質)	木炭を含む	
	No 7	7.5YR4/6 褐色	粘土	粘土が固く焼けしまっている。	
	No 8	7.5YR4/6 褐色	粘土	粘土が焼けてしまっている状態。	
掘り方	No 9	10YR3/4 暗褐色	シルト		
カマド	No10	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物	
	No11	5YR3/4 極暗赤褐色	シルト	焼けた粘土	カマド天井部崩落土
	No12	10YR3/3 黒褐色	シルト		
	No13	10YR3/4 暗褐色	シルト		焼土層
	No14	2.5YR3/3 暗赤褐色	シルト		
貯蔵穴状ピット	No15	10YR4/4 褐色	砂		
	No16	10YR3/3 黒褐色	粘土		
	No17	10YR3/3 暗褐色	砂		
	No18	10YR3/3 黒褐色	粘土質砂		

第65図　第30号住居跡

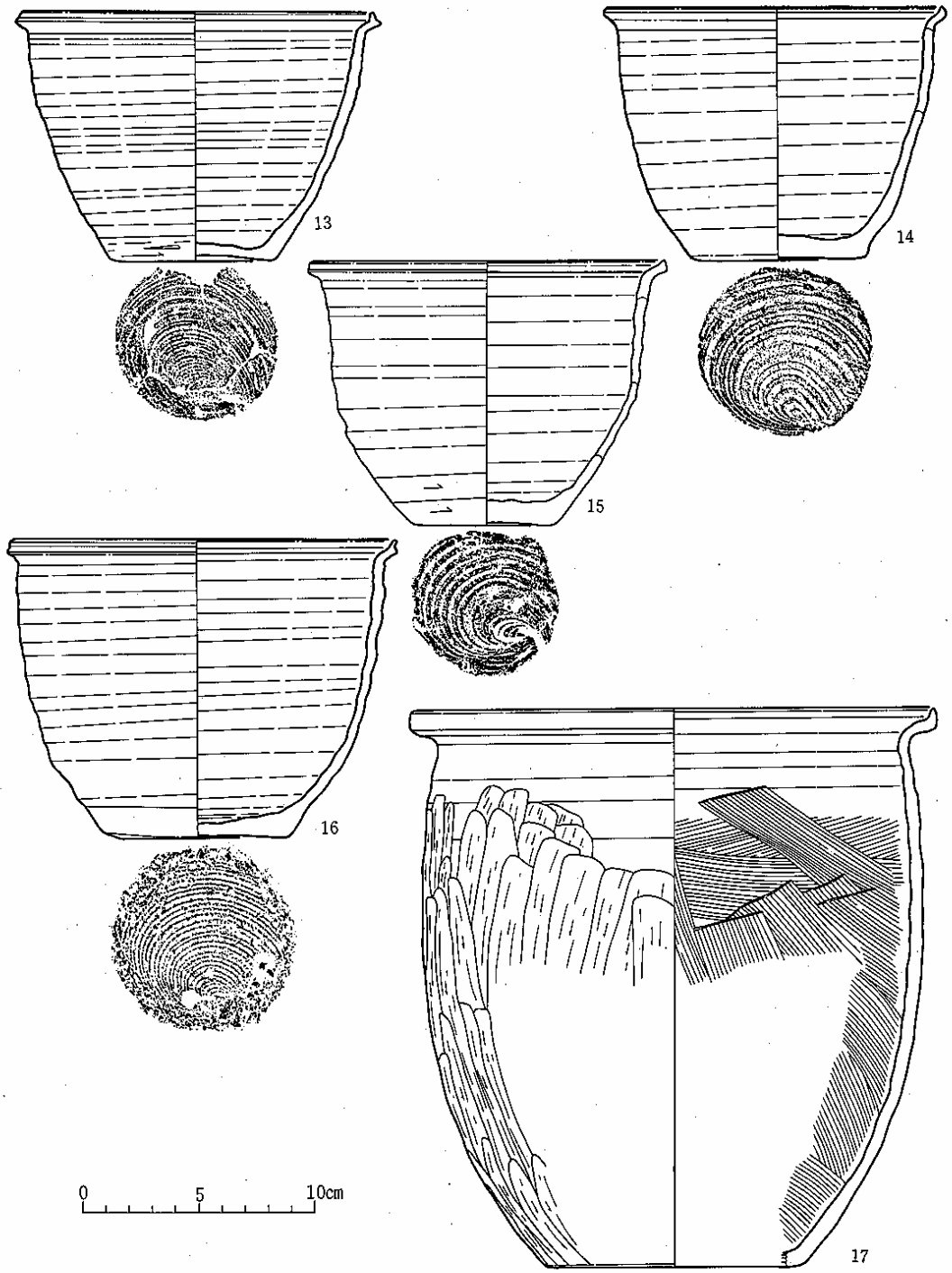
〔堆積土〕３層に大別される。第１層は黄褐色シルト層、第２層はにぶい黄橙色粘土層、第３層は黒褐色、暗褐色、褐色の砂、粘土、シルト層で炭化材、焼土粒を多量に含む層である。第３層の上面は凹凸がありその上を第１・２層が覆っている。以上のような堆積土の状況から本住居跡は火災を受けた住居跡であると考えられる。

〔出土遺物〕本住居跡堆積土第１、２層からの出土遺物はなく、遺物は全て住居床面、もしくはその直上の第３層、もしくはカマド内などから出土している。カマド内からは須恵器坏３



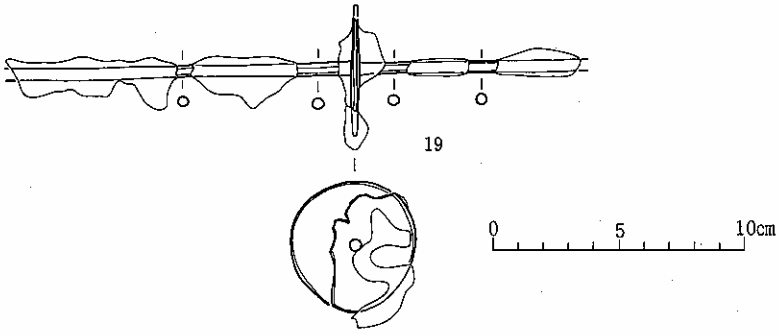
第66図　第30号住居跡出土遺物（１）

点（第66図１～３）、土師器甕５点（第67図13～17）、須恵器甕１点（図示不能）、住居床面からは須恵器坏11点（7～12、５点は図示不能）、土師器甕３点（図示不能）、鉄製紡錘車１点（19）が出土している。また住居内堆積土第３層からは須恵器坏３点（４～６）が出土している。この



第67図　第30号住居跡出土遺物（２）

うちカマド内出土の土師器甕は支柱上に口径の小さいものから順に（13～17）伏せられており更にその最上部に須恵器坏３点が伏せられていた。これらはいずれも完形品であり出土状態からみていずれもほぼ元位置を保っているものと考えられる。



番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	須恵器 坏	カマド	内・外面：ロクロナデ	口径 13.6 器高 4.0 底径 5.4 口径比 4.0	30住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	〃	口径 16.6 器高 5.0 底径 6.0 口径比 3.6	30住－Po、3	〃
3	〃	〃	〃	口径 14.5 器高 4.2 底径 5.8 口径比 4.0	30住－Po、4	〃
4	〃	堆積土	〃	口径 13.6 器高 3.9 底径 5.6 口径比 4.1	30住－Po、5	〃
5	〃	〃	〃	口径 14.0 器高 4.1 底径 5.5 口径比 3.9	30住－Po、8	〃
6	〃	〃	〃	口径 14.6 器高 4.8 底径 5.2 口径比 3.6	30住－Po、9	〃
7	〃	床面	〃	口径 14.2 器高 4.3 底径 5.8 口径比 4.1	30住－Po、10	〃
8	〃	〃	〃	口径 13.8 器高 3.8 底径 6.1 口径比 4.4	30住－Po、7	〃
9	〃	〃	〃	口径 13.9 器高 4.0 底径 6.0 口径比 4.3	30住－Po、12	〃
10	〃	〃	〃	口径 13.6 器高 3.2 底径 5.8 口径比 4.3	30住－Po、11	〃
11	〃	〃	〃	口径 13.9 器高 4.7 底径 5.7 口径比 4.1	30住－Po、2	B Ⅱ
12	〃	〃	〃	口径 13.5 器高 4.0 底径 5.7 口径比 4.2	30住－Po、6	〃
13	土師器 甕	カマド	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	口径 15.0 器高 10.8 底径 7.2	30住－Po、13	C Ⅰ
14	〃	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 16.4 器高 13.0 底径 8.0	30住－Po、16	〃
15	〃	〃	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	口径 15.2 器高 11.4 底径 6.4	30住－Po、15	〃
16	〃	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 14.3 器高 11.0 底径 7.6	30住－Po、14	〃
17	〃	〃	外面：ロクロナデ→体部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ→ヘラナデ	口径 22.2 器高 24.0 底径 11.2	30住－Po、17	B Ⅰ
18	灰釉 坏(?)	〃			30住－Po、19	
19	鉄製紡錘車	床面			30住－E 1	

第68図　第30号住居跡出土遺物（3）

第31号住居跡

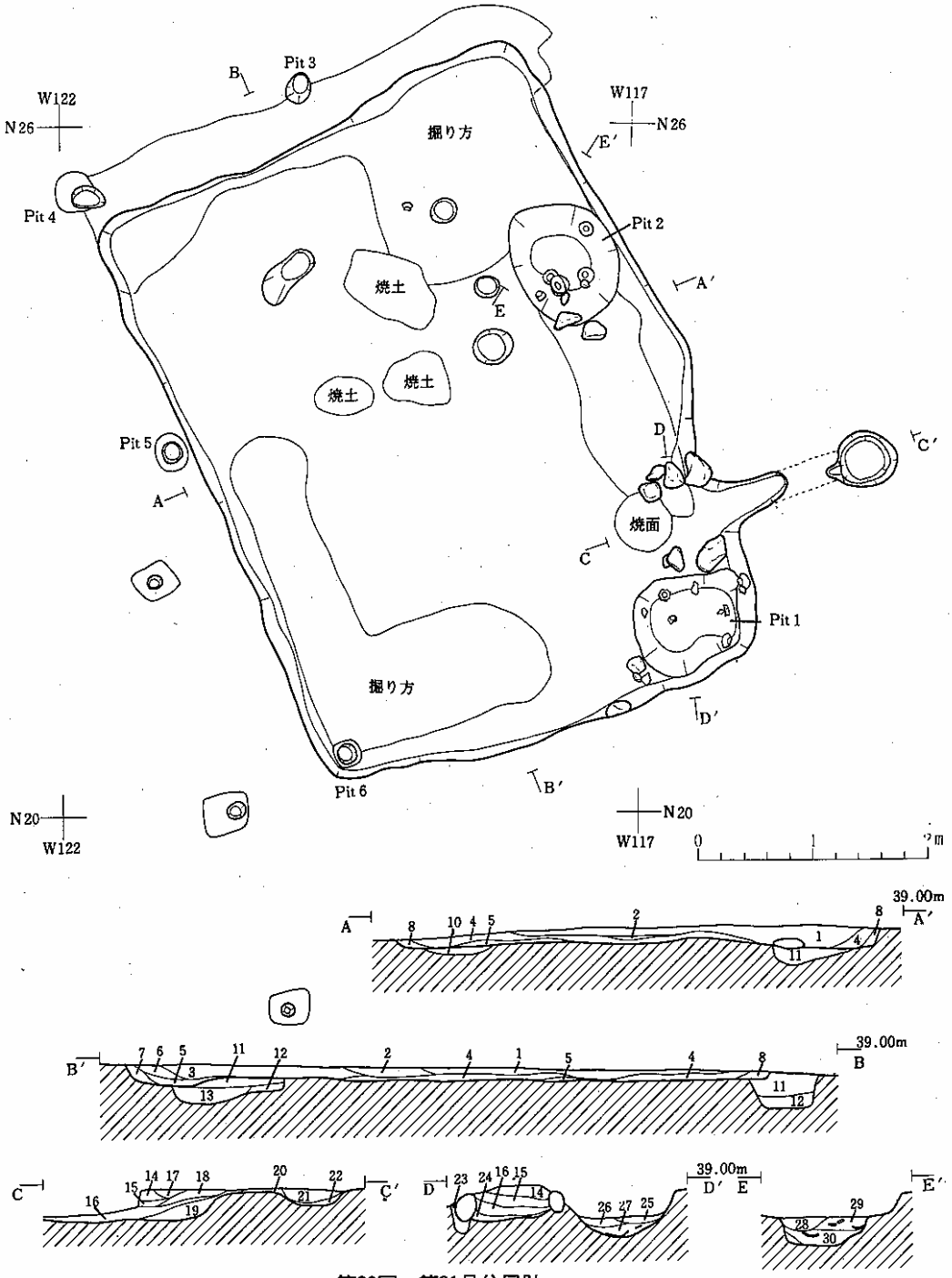
〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の北東約６mに第30号住居跡、南西約３mに第32号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。平面形は南北軸5.6m、東西軸4.2mの長方形を呈する。

〔壁〕確認された壁は住居床面からなだらかに立ち上がり、北壁は黄褐色砂質シルトからなり他は全て地山の暗褐色シルトからなる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦でしまりのない暗褐色シルトからなる。また住居北辺、東辺部と南西隅部には掘り方が認められ、しまりのある黄褐色砂質シルトの貼り床が施されている。

〔カマド〕住居東辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部側壁は河原石で作られている。燃焼部底面はほぼ平坦で奥壁部はゆるやかに立ち上がる。煙道はトンネル状に掘り抜いたもので先端はピット状に掘り込まれている。



第69図　第31号住居跡

層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR3/4 にぶい黄褐色	砂質シルト		
	No 2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)土サンディーシルトブロックを含む	
2	No 3	10YR3/4 にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む	
	No 4	10YR3/4 黄褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒を含む	
	No 5	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色土ブロック、焼土粒を含む	生活層か？
3	No 6	10YR5/4 褐色	シルト		
	No 7	10YR3/2 黒褐色	シルト	1次崩壊土	
	No 8	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	No 9	2.5YR5/6 明赤褐色	シルト	焼土	
	No10	10YR3/4 にぶい黄褐色	シルト	黒褐色土ブロックを含む	
掘り方	No11	10YR3/4 黄褐色	砂質シルト		固くしまる
	No12	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No13	10YR5/4 褐色	砂質シルト		
カマド	No14	10YR5/4	シルト	焼土	
	No15	10YR3/4	シルト	焼土	
	No16	10YR3/4	シルト		
	No17	10YR5/6	粘土		
	No18	10YR3/4	シルト		
	No19	10YR3/4	シルト		
	No20	10YR5/4	シルト	焼土	
	No21	10YR3/4	シルト	焼土、炭化物	
	No22	10YR3/4	シルト		
	No23	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土	
貼り床	No24	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰ブロック	
Pit1	No25	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	No26	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No27	10YR5/4 褐色	砂質シルト	土器	
Pit2	No28	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土粒、木炭	
	No29	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	土器	
	No30	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、土器	

第31号住居跡

〔貯蔵穴状ピット〕カマド南隣、住居南東隅部に平面形が長軸100 cm、短軸80 cmの楕円形で住居床面からの深さ約20 cmで断面がすり鉢状の貯蔵穴状ピット（Pit１）が、住居東辺中央北寄りの部分に平面形が長軸110 cm、短軸80 cmの楕円形で住居床面からの深さ約25 cmの底面が平らな貯蔵穴状ピット（Pit２）がある。いずれもその堆積土内に土器類、炭化物が多く含まれていた。

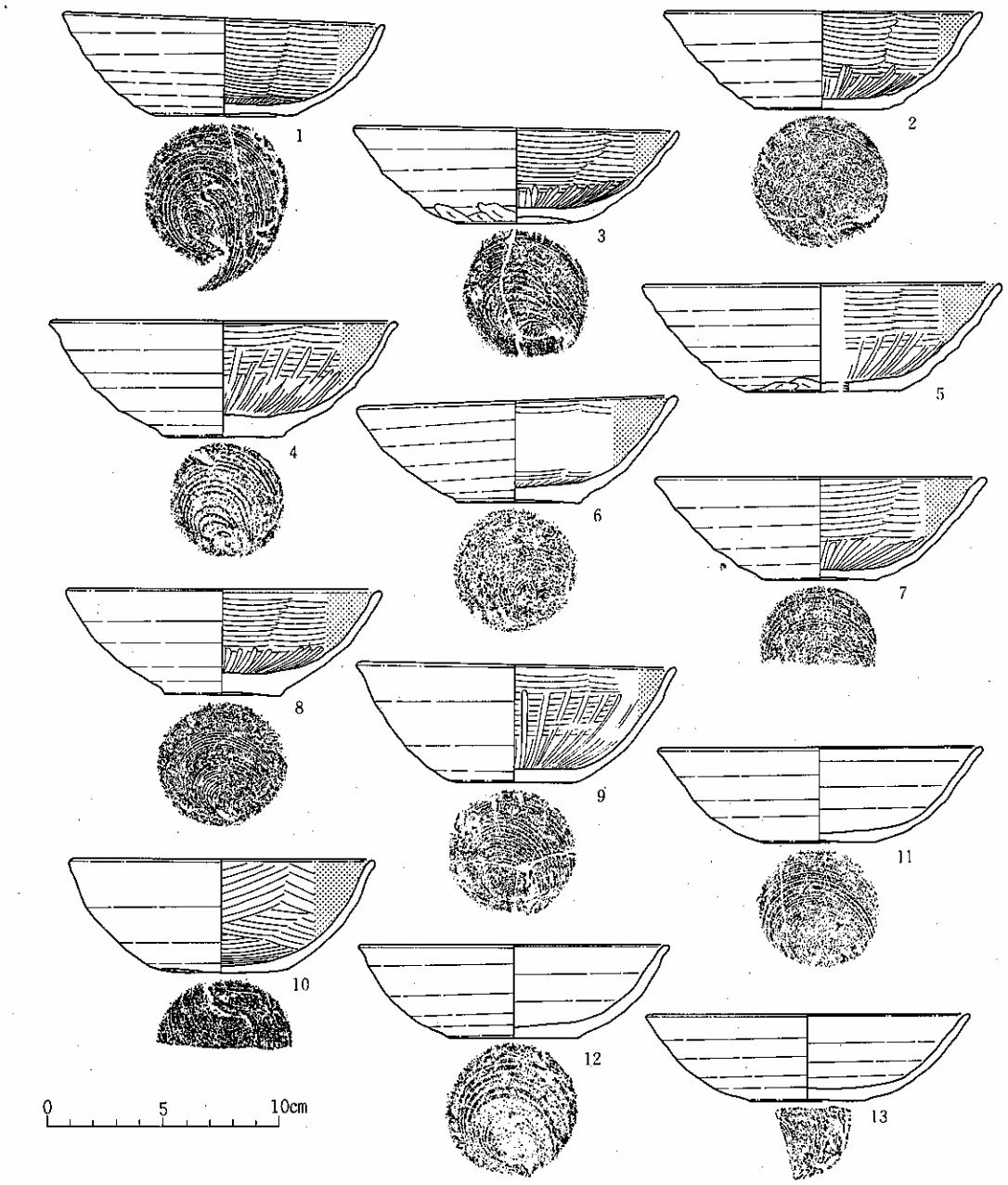
〔柱穴〕住居北辺中央部（Pit３）、同北西隅部（Pit４）、同西辺中央部（Pit５）、同南西隅部（Pit６）の計４ヶ所に壁柱穴が確認された。柱間はPit３、４、５がいずれも約２m、Pit５、６が３mで、いずれも径約30cmの掘り方を持つ。

〔掘り方〕住居北辺、東辺部と、南西隅部の住居床面に掘り方が認められる。埋め土は固くしまっており、貼り床を施すための地業的な性格を持つものと考えられる。さらに北辺についてはこの掘り方埋め土を壁としており、また柱穴が掘り方外郭部に位置することから住居北辺に何らかの施設を設けるためのものと考えられる。

〔堆積土〕３層に大別される。いずれも流入した状態で堆積している。第１層はにぶい黄褐色砂質シルト層で住居中央の上部に分布する。第２層は灰白色火山灰層もしくは灰白色火山灰粒を含む黄褐色シルト層で住居全体に分布し、中央部では部分的に床面直上に堆積している。

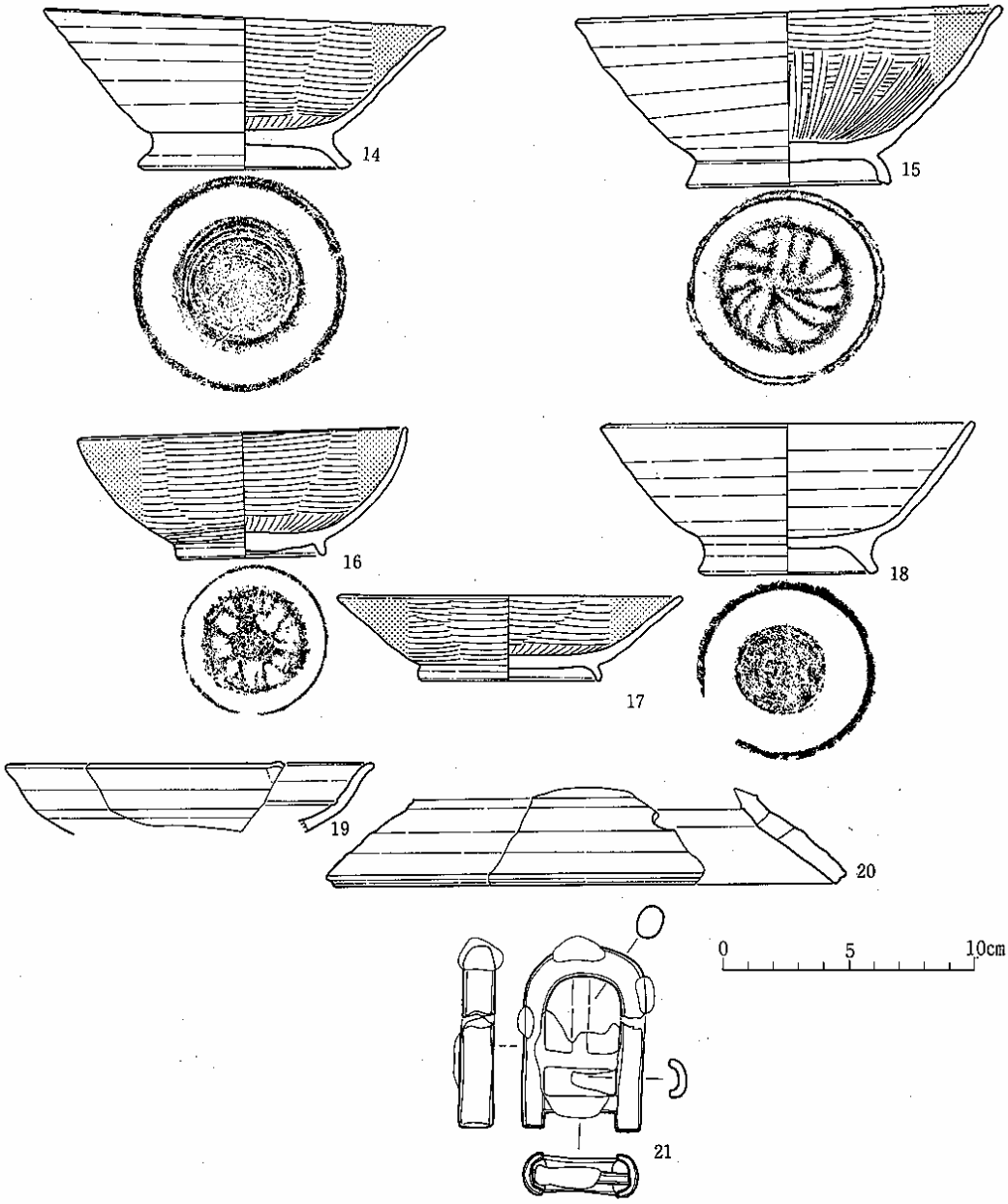
第３層は暗褐色シルト層で主に壁際に堆積している。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏５点（第70図１～５）、同高台付坏１点（14）、同台付皿１点（16）、同台付皿１点（17）、赤焼土器高台付坏１点（18）、Ｐｉｔ１堆積土から土師器坏４点（7～10）、同高台付坏１点（15）が出土している。また、図示できなかったが住居床面から



第70図　第31号住居跡出土遺物（１）

土師器坏、台付坏、甕、赤焼土器、坏、台付坏、須恵器坏などの破片が、Ｐｉｔ２堆積土からは土師器坏、高台付坏、赤焼土器台付坏、須恵器坏、甕などの破片がそれぞれ出土している。これらは出土状態からみて本住居に伴う遺物と考えられる。この他掘り方埋土内からは土師器、須恵器類の細片、緑釉稜埦（第71図19）が、住居内堆積土からは土師器坏、甕、須恵器坏、甕、赤焼土器坏などの細片が出土しており、特に赤焼土器の坏、台付坏の破片が多くみられる。これらの土器の出土状態については規則性は特にみられない。



第71図　第31号住居跡出土遺物（２）

番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.7 器高 4.4 底径 6.2 口径比 4.5	31住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	〃	口径 13.6 器高 4.2 底径 5.8 口径比 4.3	31住－Po、2	〃
3	〃	〃	外面：ロクロナデ→体部下端ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.9 器高 4.2 底径 5.3 口径比 3.8	31住－Po、3	B Ⅱ
4	〃	〃	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.9 器高 5.0 底径 5.1 口径比 3.4	31住－Po、4	〃
5	〃	〃	外面：ロクロナデ→体部下端、底部全面ケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 15.4 器高 4.6 底径 6.8 口径比 4.4	31住－Po、5	B Ⅰ
6	〃	堆積土	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.7 器高 4.6 底径 5.3 口径比 3.9	31住－Po、6	B Ⅱ
7	〃	Pit1	〃	口径 13.5 器高 4.5 底径 5.0 口径比 3.7	31住－Po、7	〃
8	〃	〃	〃	口径 14.2 器高 4.5 底径 5.0 口径比 3.5	31住－Po、8	〃
9	〃	〃	〃	口径 13.7 器高 5.1 底径 5.3 口径比 3.9	31住－Po、9	A
10	〃	〃	外面：ロクロナデ→体部下端ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 13.0 器高 4.9 底径 6.0 口径比 4.6	31住－Po、10	〃
11	赤焼土器 坏	堆積土	内・外面：ロクロナデ	口径 13.3 器高 4.0 底径 5.6 口径比 4.2	31住－Po、13	A
12	〃	〃	〃	口径 13.9 器高 3.7 底径 5.0 口径比 3.6	31住－Po、11	B
13	〃	〃	〃	口径 13.9 器高 4.1 底径 5.0 口径比 3.0	31住－Po、12	B
14	土師器高台付坏	床面	外面：ロクロナデ、 内面：ヘラミガキ、黒色処理、 底部：回転糸切り離し	口径 13.8 器高 4.4 底径 7.4	31住－Po、14	
15	〃	Pit1	外面：ロクロナデ、 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：菊花文	口径 13.1 器高 5.0 底径 6.0	31住－Po、16	
16	台付埦	床面	外面｝ヘラミガキ、 内面｝黒色処理 底部：菊花文	口径 16.9 器高 7.0 底径 8.1	31住－Po、15	
17	台付皿	〃	外面｝ヘラミガキ、 内面｝黒色 底部：回転ヘラケズリ	口径 15.9 器高 6.4 底径 8.4	31住－Po、17	
18	赤焼土器高台付坏	〃	外面｝ロクロナデ、 内面｝ 底部：回転ケズリ	口径 14.8 器高 6.0 底径 7.1	31住－Po、18	
19	緑釉稜埦	掘り方	外面｝ヘラミガキ 内面｝		31住－Po、20	
20	赤焼土器高台	Pit2	器種不明		31住－Po、19	
21	鉄製馬具鈴具	床面			31住－E1	

第31号住居跡出土遺物

第32号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の北東約3mに第31号住居跡が、南西約2mに第35号住居跡が、南約3mには第33、34号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。平面形は南北軸6.0m、東西軸4.5mの長方形を呈する。

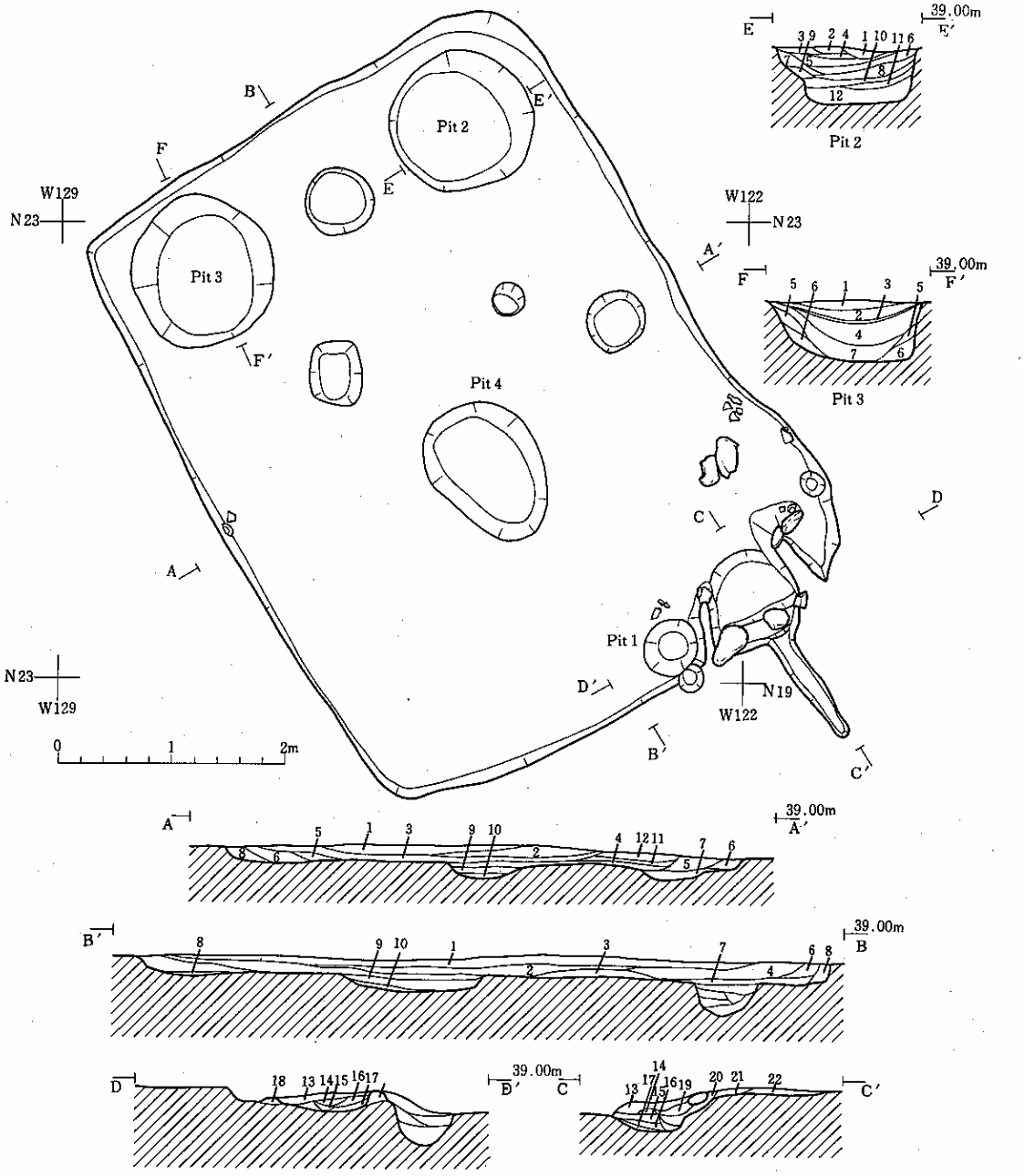
〔壁〕確認された壁は住居床面からなだらかに立ち上がり総べて黒褐色砂質シルトからなる。

〔床面〕住居床面は平担で、しまりのない黒褐色砂質シルトからなり、住居ほぼ中央には一部粘土による貼り床がみとめられる。

〔カマド〕住居南面の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部側壁は粘土によって作られ、奥壁部、側壁の先端部などには河原石が用いられている。燃焼部底面は浅く掘り窪められ奥壁部でゆるやかに立ち上がる。煙道はトンネル状に掘り抜いたものである。

〔貯蔵穴状ピット〕カマド西隣に平面形が直径約50cm、住居床面からの深さ約30cm、断面すり鉢状の貯蔵穴状ピットがある（Ｐｉｔ１）。また住居北辺の東、西両隅部にそれぞれ平面形が径1.2m、住居床面からの深さ50cmで底面が平担な貯蔵穴状ピットが２個ある。堆積土はいずれも流入した堆積状況を示し、北東隅部のもの（Ｐｉｔ２）の堆積土下部には炭化した籾殻を含む層が、北西隅部のもの（Ｐｉｔ３）の堆積土上部近くには薄い炭化物層がみとめられる。Ｐｉｔ２の３層から土師器坏の被片が出土している。

〔その他の施設〕住居中央部に平面形が南北軸1.3m、東西軸1.0mの楕円形を呈し、住居床面からの深さ約15cmの土壙（Ｐｉｔ４）がみとめられ、土壙内堆積土上層には多量の焼土粒、炭化物が含まれている。



第72図　第32号住居跡

〔堆積土〕３層に大別されいずれも流入した状態で堆積している。第１層は褐色シルト層で住居中央部に分布する。第２層は暗褐色シルト層で住居全体に分布する。第３層は暗褐色砂質シルトもしくは炭化物層で住居床面直上に部分的に分布している。

層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No1	10YR5/6 褐色	シルト	炭化物微量	
	No2	10YR5/4 褐色	シルト		
2	No3	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物微量	
	No4	10YR3/3 暗褐色	砂土		
	No5	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物含む	
	No6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト		
	No7	10YR2/1 黒色		炭化物の層	
3	No8	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト		
	No9	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	粘土	
	No10	10YR3/3 黒褐色	砂質シルト		
	No11	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒を少量含む	
	No12	10YR3/3 暗褐色	シルト		
カマド	No13	10YR5/6 明黄褐色	粘土		カマド天井部崩落土
	No14	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土	
	No15	5YR5/2 灰褐色	シルト	焼土	
	No16	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	焼けた粘土	
	No17	10YR5/8 明赤褐色	シルト	焼けた粘土	
	No18	10YR5/6 黄褐色	粘土		カマド側壁
	No19	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	No20	5YR5/2 灰褐色	シルト		
	No21	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	No22	10YR3/2 黒褐色	シルト		

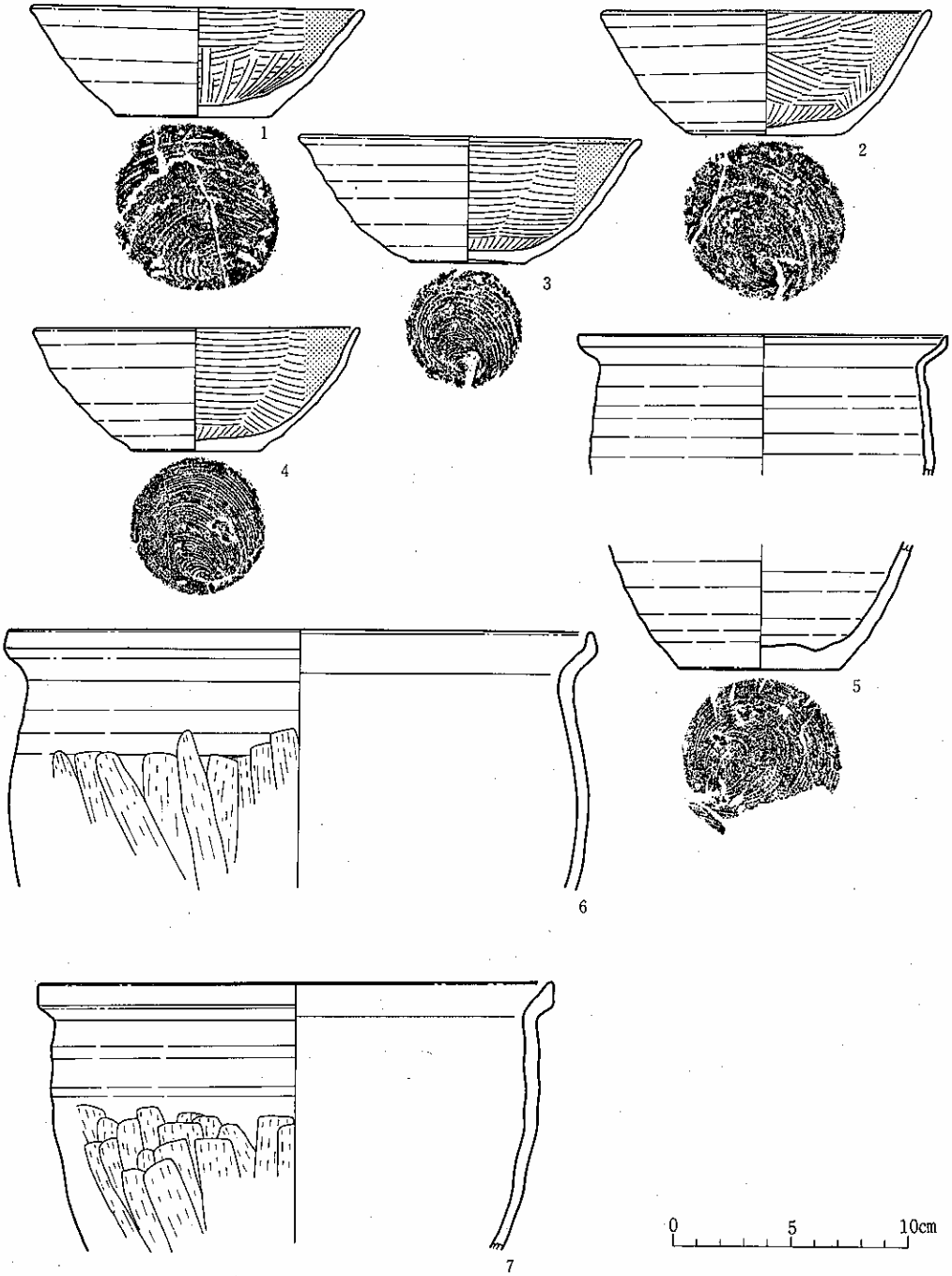
Ｐｉｔ２堆積土

層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
	No1	10YR5/4 褐色	シルト	わらの炭化したものを含む	
	No2	10YR3/4 暗褐色	シルト	わらの炭化したものを多く含む	
	No3	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、焼土粒を多く含む	
	No4	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No5	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土粒を若干含む遺物を含む	
	No6	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックを若干含む	
	No7	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	No8	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト		
	No9	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	炭化物粒を含む	
	No10	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	焼土粒を若干含む炭化物粒を含む	灰の層
	No11	10YR3/2 黒色	シルト	焼土粒を含む	籾がらの炭化層
	No12	10YR5/4 褐色	シルト	小礫をわずかに含む	

Ｐｉｔ３堆積土

層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
	No1	10YR5/6 褐色	シルト	焼土粒、炭化物粒、黄褐色粘土を少量含む	
	No2	10YR5/4 褐色	シルト	炭化物粒を含む	
	No3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	褐色土ブロックを若干含む	遺物を含む
	No4	10YR5/4 褐色	砂質シルト	暗褐色土ブロックを含む	
	No5	10YR5/6 黄褐色	サンド		
	No6	10YR3/4 暗褐色	シルト		

第32号住居跡



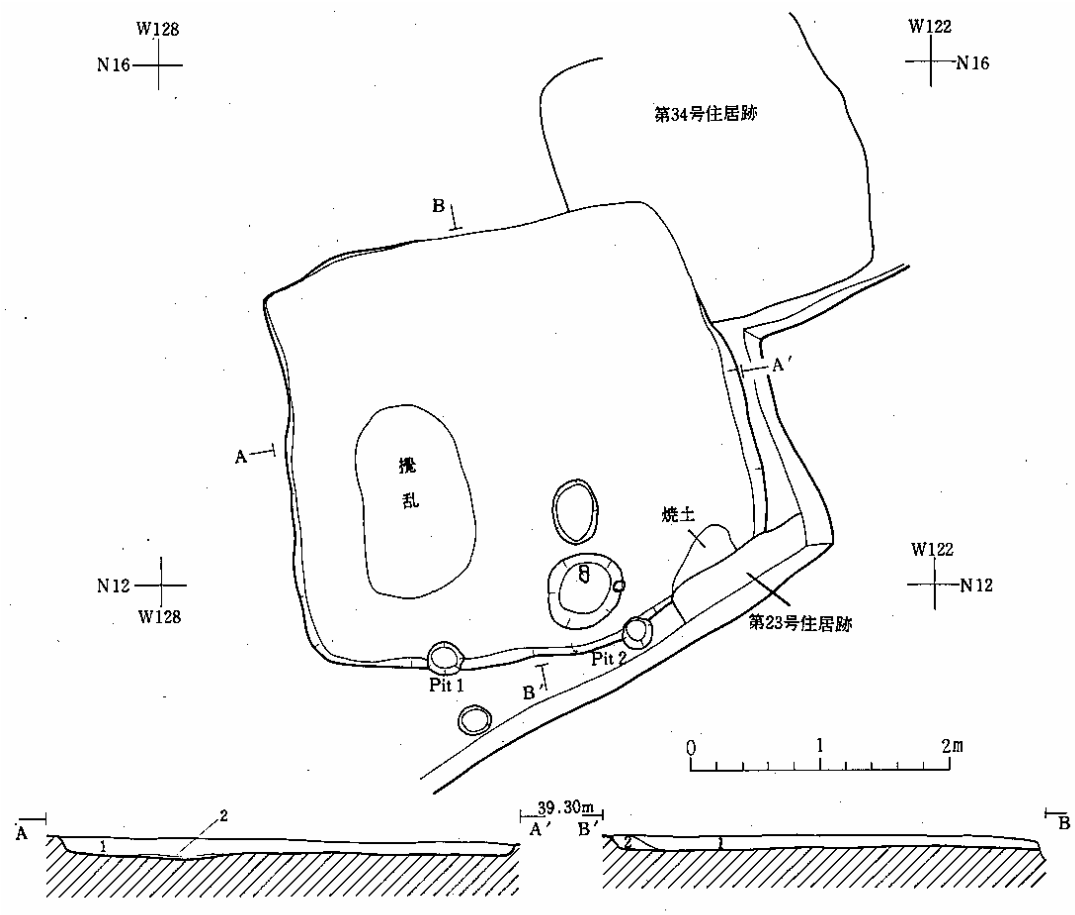
番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.1 器高 4.8 底径 6.5 口径比 4.6	32住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	〃	口径 14.0 器高 5.3 底径 6.5 口径比 4.6	32住－Po、2	A
3	〃	Pit2	〃	口径 14.6 器高 5.4 底径 4.8 口径比 3.3	32住－Po、3	〃
4	〃	〃	〃	口径 13.9 器高 5.2 底径 5.5 口径比 4.0	32住－Po、4	〃
5	土師器 甕	カマド	内・外面：ロクロナデ	口径 21.6	32住－Po、7	C Ⅰ
6	〃	床面	外面：ロクロナデ→体部ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	口径 21.6	32住－Po、5	A Ⅲ
7	〃	〃	外面：タタキ→ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 15.6 底径 6.8	32住－Po、6	

第73図　第32号住居跡出土遺物

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏２点（第73図１、２）、同甕２点（６、７）、Ｐｉｔ２堆積土から土師器坏２点（３、４）、カマド内堆積土から土師器甕１点（５）が出土している。また図示できなかったが、住居床面から土師器坏、甕、須恵器甕、赤焼土器坏の破片が、カマド内堆積土から土師器坏、甕、赤焼土器坏の破片が、Ｐｉｔ１、Ｐｉｔ２内堆積土からは土師器坏の破片がそれぞれ出土している。このうち土師器坏の破片が大半を占めている。これらは出土状態から本住居に伴う遺物と考えられる。住居堆積土第１、２層からは土師器片が少量出土したにすぎない。

第33号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の北西約２mに第35号住居跡が、北約４mに第32号住居跡が確認されている。



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	1	10YR4/4 褐色	シルト	焼土	
	2	10YR2/1 黒色	シルト		掘り過ぎ

第74図　第33号住居跡

〔平面形・重複〕北東隅部は第34号住居跡を掘り込んで作られている。また本住居跡南東隅部を掘り込んで第23号住居跡が作られている。住居東辺は掘り過ぎにより一部失われている。平面形は南北軸3.4m、東西軸3.6mの方形を呈する。

〔壁〕確認された壁は床面からなだらかに立ち上がる。黒色シルトからなるが北東隅部は第34号住居跡堆積土を壁としている。

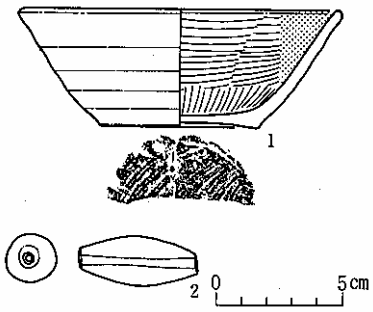
〔床面〕住居床面はほぼ平担で黒色シルトからなるが北東隅部は第34号住居跡堆積土を床面としている。また住居西辺寄りの一部に貼り床がみとめられる。

〔カマド〕住居南東隅部は第36号住居跡により破壊されているがこの部分の床面上に焼土、粘土が分布しており、カマドが存在したものと考えられる。

〔柱穴〕住居南辺に壁柱穴が２個認められる。柱間は1.5mである。（Ｐｉｔ１、２）

〔堆積土〕１層のみ認められる。褐色シルト層で住居床面全体を覆っている。

〔出土遺物〕住居床面から土錘が出土している。貼り床中より土師器坏１点（第75図）が出土し、この他図示できなかったが住居堆積土からは土師器坏、台付坏、甕、須恵器甕、坏、赤焼土器坏などの破片が出土している。



番号	器種	層位	特徴	登録No.	分類
1	土師器 坏	貼り床	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 口径 12.9 器高 4.7 底径 6.4 口径比 5.0	33住－Po、1	A
2	土錘	床面		33住－Po、2	

第75図　第33号住居跡出土遺物

第34号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の北西約１mに第35号住居跡が、北約３mに第32号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕第33号住居跡と重複し、本住居南西隅部を掘り込んで第33号住居跡が作られている。平面形は南北軸2.3m、東西軸2.1mの方形を呈する。なお住居北辺は掘り過ぎにより失われた。

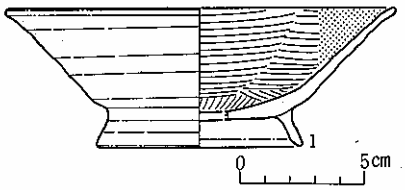
〔壁〕確認された壁は全て黒色シルト層で、床面からなだらかに立ち上がる。

〔床面〕住居床面はほぼ平担で黒色シルトからなる。

〔堆積土〕２層に大別されいずれも流入した状態で堆積している。第１層は黄褐色もしくはにぶい黄褐色シルト層で住居上部全体に分布している。第２層は暗褐色シルト層で住居床面全体を覆っている。

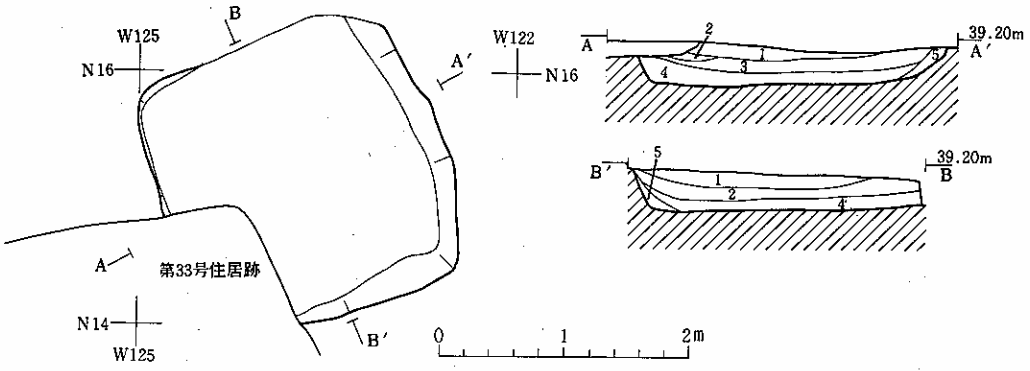
〔出土遺物〕住居床面の遺物として、図示できなかったが土師器坏、須恵器坏、赤焼土器坏な

どの破片が出土している。住居内堆積土第２層からは土師器台付坏（１）の他、図示できなかったが土師坏、甕、須恵器坏、甕、赤焼土器坏などの破片が出土している。以上の出土状態から本住居に伴う遺物と考えられる。この他住居内堆積土第１層から土師器、須恵器の破片が出土しているが図示できるものはなく出土状態に規則性はみられない。



番号	器種	層位	特徴	登録No	分類
1	土師器高台付坏	堆積土	外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り無調整 内面：ヘラミガキ、黒色処理 口径 15.5　器高 5.6 底径 8.1	34住－Po、1	

第76図　第34号住居跡出土遺物



層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR4/4 褐色	シルト		
	No 2	10YR5/4 にぶい黄橙色	シルト	炭化物	
	No 3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	少量の炭化物	
2	No 4	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	No 5	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト		

第77図　第34号住居跡

第35号住居跡

〔位置〕地蔵堂地区に属する。本住居跡の南東約１mに第34号住居跡が、南西約４mに第24号住居跡が、東約３mに第32号住居跡が確認されている。

〔平面形・重複〕他の遺構との重複はない。平面形は南北軸約3.4m、東西軸約2.7mの長方形を呈する。なお、住居北東部は掘り過ぎにより失われた。

〔壁〕確認された壁は全て黄褐色シルトからなり、住居床面からゆるやかに立ち上がる。

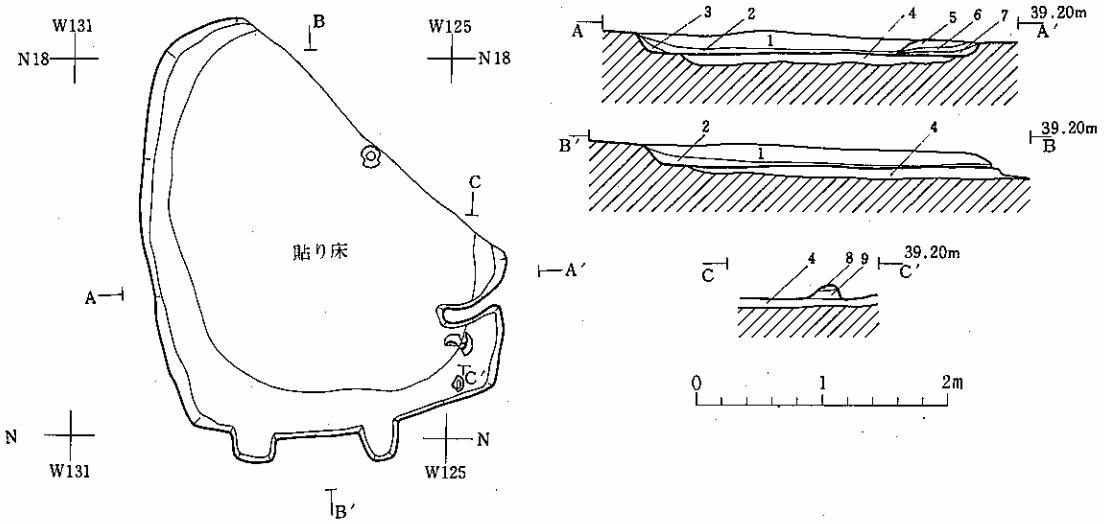
〔床面〕住居床面は平担でほぼ全面がしまりのない黄褐色シルトの貼り床からなる。

〔カマド〕住居東辺の南東隅寄りの部分にカマドが構築されている。燃焼部底面は住居床面からほぼ平坦に連続しており奥壁部でゆるやかに立ち上がる。側壁は粘土もしくはシルトにより

作られている。煙道は確認されていない。

〔堆積土〕２層に大別される。第１層は黄褐色シルト層で住居上部全体に分布する。第２層は黒色シルト層で炭化物を多量に含み床面直上に薄く堆積していることから生活層と考えられる。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏２点（第79図１、２）、赤焼土器坏１点（３）、須恵器壺１点（４）が出土し、この他図示できなかったが土師器坏の破片が少量出土している。またカマド内堆積土からは図示できなかったが土師器坏、台付坏、甕、赤焼土器坏などの細片が少量出土している。これらは本住居に伴う遺物と考えられる。この他、住居掘り方埋土から土師器坏破片、住居内堆積土第１層から土師器、須恵器類の破片が出土しているが図示できるものはなく出土状態に規則性はみられなかった。

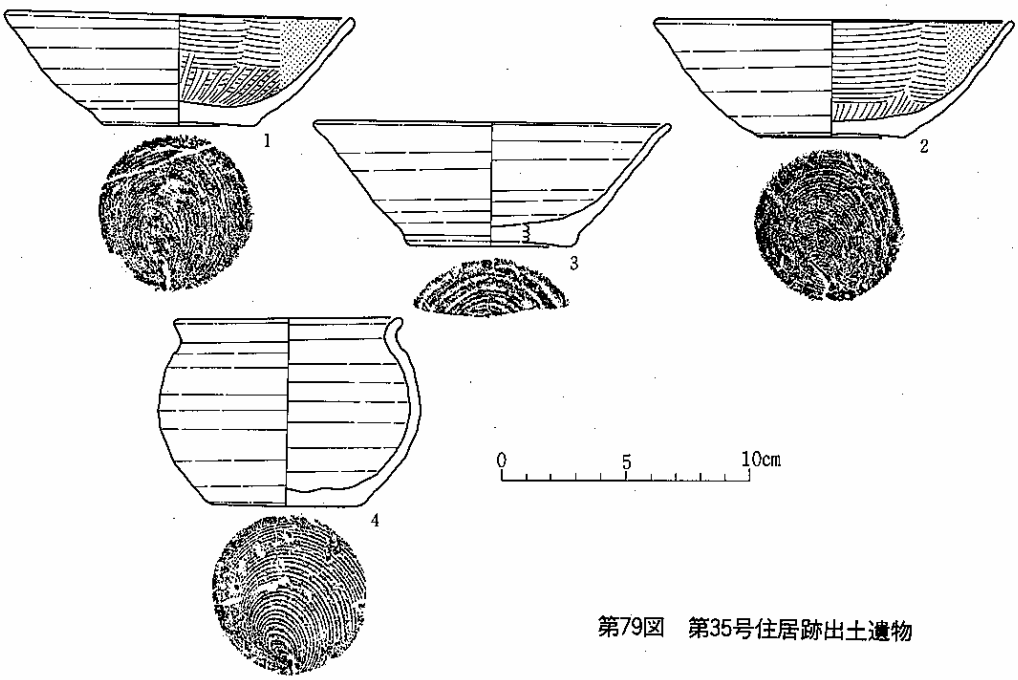


層位	層No	土色	土性	混入物など	備考
1	No 1	10YR⅘ にぶい黄褐色	シルト	少量の炭化物	
2	No 2	10YR⅔ 黒色	シルト	多量の炭化物	
	No 3	10YR⅗ 暗褐色	シルト		
掘り方	No 4	10YR⅝ 黄褐色	シルト質粘土		
カマド	No 5	10YR⅘ 褐色	シルト	少量の焼土	
	No 6	10YR⅘ 褐色	シルト	多量の焼土	
	No 7	10YR⅘ 褐色	シルト	少量の焼土	
カマド袖	No 8	10YR⅝ 明黄褐色	シルト質粘土		
	No 9	10YR⅘ にぶい黄褐色	シルト		

第78図　第35号住居跡

番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.0 器高 4.6 底径 6.1 口径比 4.4	35住－Po、1	B Ⅰ
2	〃	〃	〃	口径 14.3 器高 4.7 底径 6.0 口径比 4.2	35住－Po、2	〃
3	赤焼土器 坏	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 14.2 器高 5.0 底径 6.4 口径比	35住－Po、3	A
4	須恵器小型壺	〃	内・外面：ロクロナデ	口径 9.1 器高 7.6 底径 6.4	35住－Po、4	

第35号住居跡出土遺物



第79図　第35号住居跡出土遺物

住居跡番号	位置・立地	規模・平面形	主軸方向	カマドの位置	その他の施設	備　　考
第６号住居跡	N 65m、W 129m 地蔵堂地区	4.9m ×4.0m の長方形 20㎡	N－４°－W	住居東辺中央	壁柱穴	
第７号住居跡	N 60m、W 83m 地蔵堂地区	5.3m ×5.3m の正方形 28㎡	N－０°－EW	住居南辺		
第８号住居跡	N 56m、W 173m 栗木地区	4.4m ×3.5m の長方形 15㎡	N－14°－W	住居南辺		
第９号住居跡	N 56m、W 173m 栗木地区	不　明	N－９°－W	住居北辺		
第10号住居跡	N 56m、W 175m 栗木地区	不　明	N－12°－W	住居東辺		
第14号住居跡	N 67m、W 240m 栗木地区	5.5m ×4.5m の長方形 25㎡	N－12°－E	住居東辺		堆積土第２層に灰白色火山灰層
第15号住居跡	S 123m、W 249m 新宿二番地区	5.0m ×4.6m の方形 23㎡	N－３°－E	住居南辺	貼り床 貯蔵穴状ピット	
第16号住居跡	S 122m、W 249m 新宿二番地区	3.0m ×3.0m の正方形 9㎡	N－３°－E	住居北辺		
第18号住居跡	S 129m、W 249m 新宿二番地区	2.2m ×3.1m の長方形 7㎡	N－３°－E	なし	性格不明ピット	
第19号住居跡	S 10m、W 146m 地蔵堂地区	4.3m ×3.2m の長方形 14㎡	N－５°－W	住居東辺	貼り床 貯蔵穴状ピット	堆積土第１層に火山灰起源の黒ボク土層
第20号住居跡	S 3m、W 145m 地蔵堂地区	5.0m ×5.0m の不整な正方形 25㎡	N－７°－W	住居東辺		
第24号住居跡	N 5m、W 137m 地蔵堂地区	6.5m ×6.5m の正方形 42㎡	N－12°－W	住居南辺	貼り床、柱穴 貯蔵穴状ピット	
第25号住居跡	S 33m、W 165m 地蔵堂地区	3.0m ×3.0m の正方形 9㎡	N－12°－W	住居南辺	柱穴	
第26号住居跡	S 48m、W 180m 地蔵堂地区	3.5m ×4.0m の長方形 14㎡	N－７°－W	住居南辺		
第27号住居跡	S 63m、W 188m 地蔵堂地区	4.7m ×4.0m の長方形 19㎡	N－５°－E	住居東辺	周溝	床面直上に灰白色火山灰
第28号住居跡	S 44m、W 187m 地蔵堂地区	3.2m ×3.0m の方形 形10㎡	N－18°－W	住居南東隅(?)		
第30号住居跡	N 33m、W 112m 地蔵堂地区	3.6m ×3.6m の正方形 13㎡	N－15°－W	住居東辺	貯蔵穴状ピット	焼失家屋
第31号住居跡	N 23m、W 119m 地蔵堂地区	6.6m ×4.2m の長方形 24㎡	N－28°－W	住居東辺	壁柱穴 貯蔵穴状ピット	堆積土第２層に灰白色火山灰を含む
第32号住居跡	N 21m、W 126m 地蔵堂地区	6.0m ×4.5m の長方形 27㎡	N－36°－W	住居南辺	貯蔵穴状ピット	
第33号住居跡	N 13m、W 125m 地蔵堂地区	3.4m ×3.5m の方形 12㎡	N－20°－W	住居南辺	壁柱穴	
第34号住居跡	N 15m、W 124m 地蔵堂地区	2.3m ×2.1m の方形 5㎡	N－33°－W	なし		
第35号住居跡	N 17m、W 129m 地蔵堂地区	3.4m ×2.7m の長方形 9㎡	N－11°－W	住居東辺	壁柱穴	

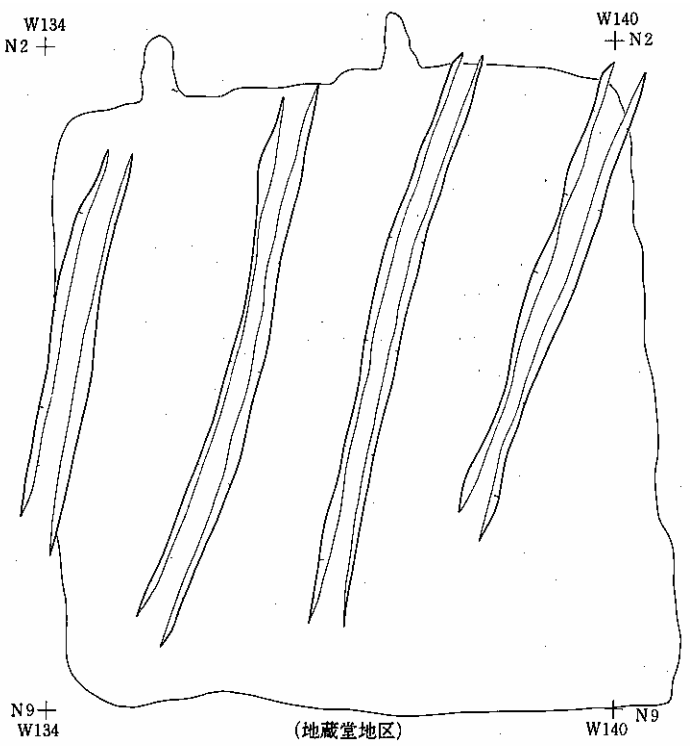
第２表　住居跡一覧表

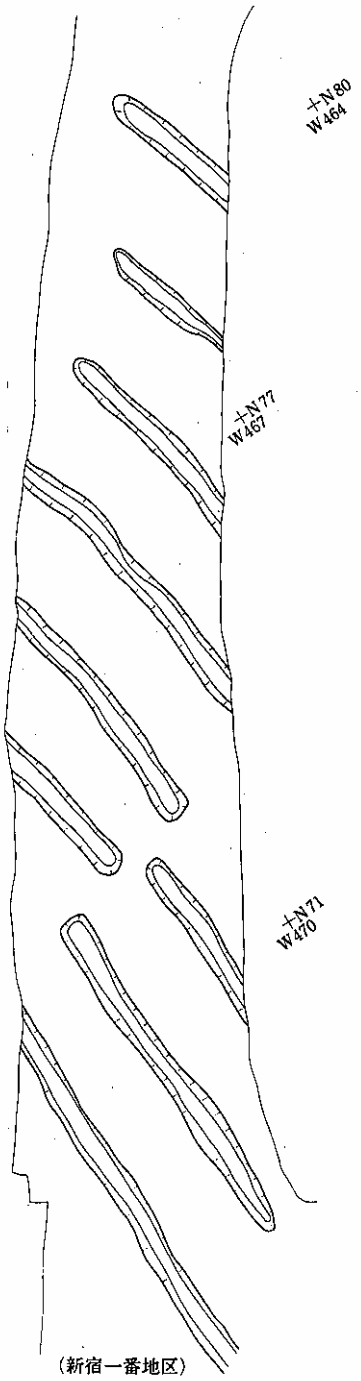
V　その他の遺構と遺物

今回の調査により古墳、住居跡以外の遺構として焼土遺構、畑跡、掘立柱列などが発見された。

畑跡

昨年の調査対象地区の北東部を中心に各所で畑跡が確認されたが、今回の調査対象地区内でも各所に同様の畑跡が発見された。畑跡は竪穴住居跡、沢状の低地などの後世の削平が及んでいない部分にだけ残存しておりその本来の広がりは明らかでない。図示したものは地蔵堂地区第24号住居跡堆積土内に検出されたものと新宿一番地区のトレンチ内で検出されたものである。前者は畝の方向がN－8°－E、畝の巾約１m、畝間の巾約30cm、後者は畝の方向がN－8°－W、畝の巾約１m、畝間の巾約40cmである。両者とも畝間の深さは約30cmで灰白色火山灰によって上面が覆われている。出土遺物はない。



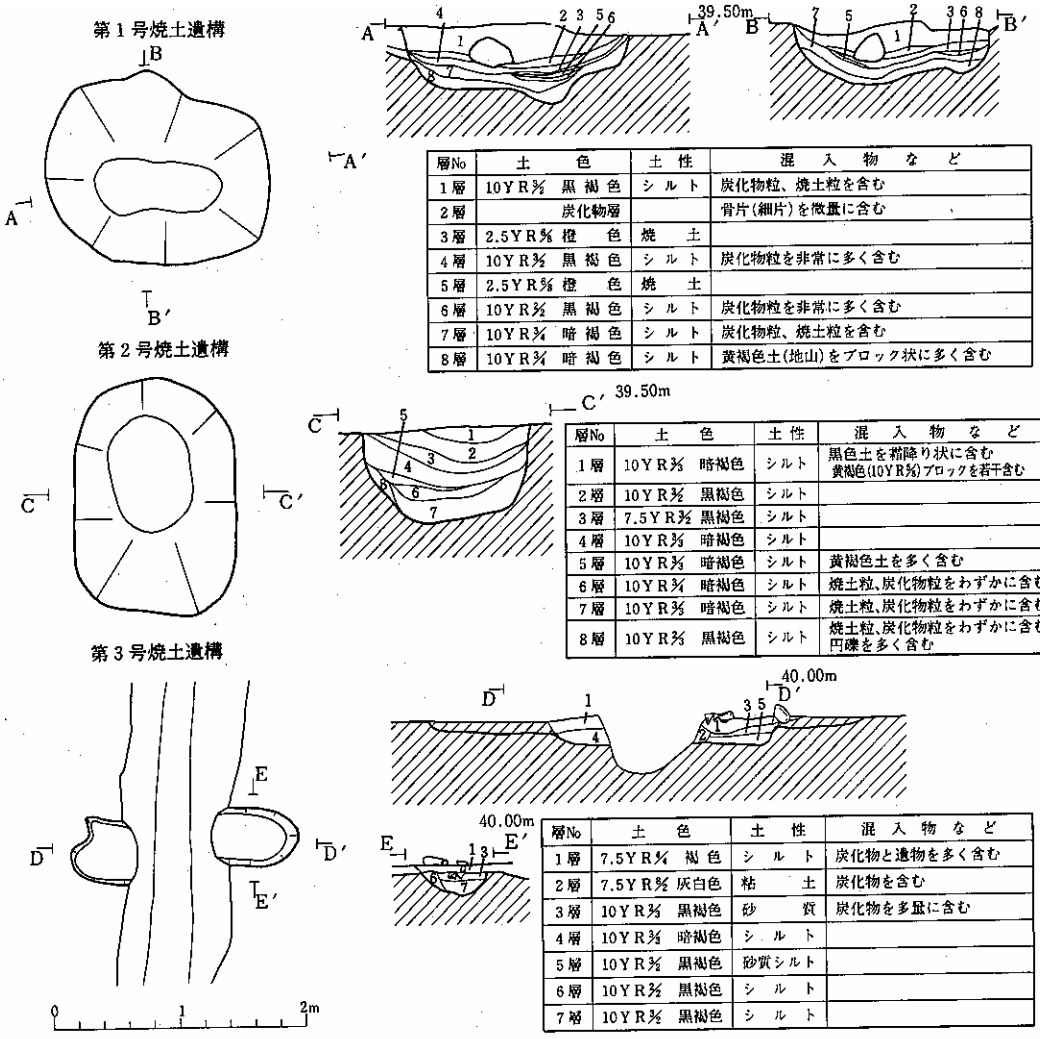


第80図　畑　　跡

焼土遺構

住居に伴わない土壙で堆積土に焼土、炭化物を含むものが３基検出された。これらを焼土遺構として一括して記述する。

第１～３号焼土遺構は、いずれも地蔵堂地区に所在する。第１、２号焼土遺構は第20号住居跡の堆積土を掘り込んで作られたもので平面形は楕円形を呈し長軸1.5～1.8m、短軸1.2mである。底面は舟底状で確認面からの深さは約0.8mを測る。底面は火熱により赤褐色を呈し堆積土下層には焼土、炭化物が含まれその上部には薄い炭化物層が分布している。第１号焼土遺構ではこの炭化物層の中に骨粉が含まれており、さらにこの層の直上、土壙のほぼ中央に人頭大の石が１個検出された。この石は層の状態などからみて人為的に投げ込まれたものと考えられる。出土遺物は、第１号焼土遺構堆積土第８層から土師器坏２点（第82図１、２）が出土



層No	土色	土性	混入物など
1層	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物粒、焼土粒を含む
2層	炭化物層		骨片(細片)を微量に含む
3層	2.5YR5/8 橙色	焼土	
4層	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物粒を非常に多く含む
5層	2.5YR5/8 橙色	焼土	
6層	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物粒を非常に多く含む
7層	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒、焼土粒を含む
8層	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土(地山)をブロック状に多く含む

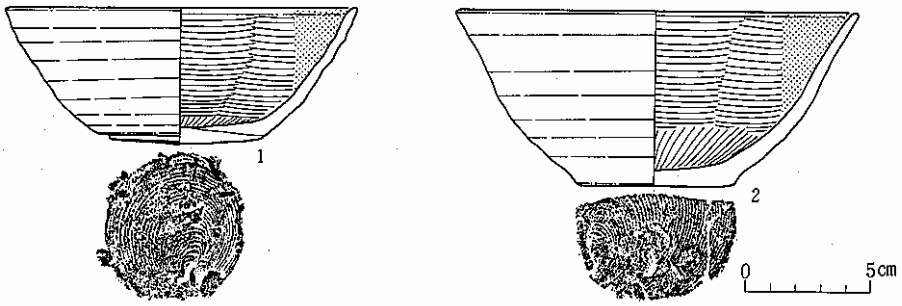
層No	土色	土性	混入物など
1層	10YR3/3 暗褐色	シルト	黒色土を斑降り状に含む 黄褐色(10YR5/6)ブロックを若干含む
2層	10YR3/2 黒褐色	シルト	
3層	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	
4層	10YR3/3 暗褐色	シルト	
5層	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色土を多く含む
6層	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土粒、炭化物粒をわずかに含む
7層	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土粒、炭化物粒をわずかに含む
8層	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土粒、炭化物粒をわずかに含む 円礫を多く含む

層No	土色	土性	混入物など
1層	7.5YR4/4 褐色	シルト	炭化物と遺物を多く含む
2層	7.5YR8/2 灰白色	粘土	炭化物を含む
3層	10YR3/3 黒褐色	砂質	炭化物を多量に含む
4層	10YR3/3 暗褐色	シルト	
5層	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	
6層	10YR3/2 黒褐色	シルト	
7層	10YR3/2 黒褐色	シルト	

第81図　焼土遺構

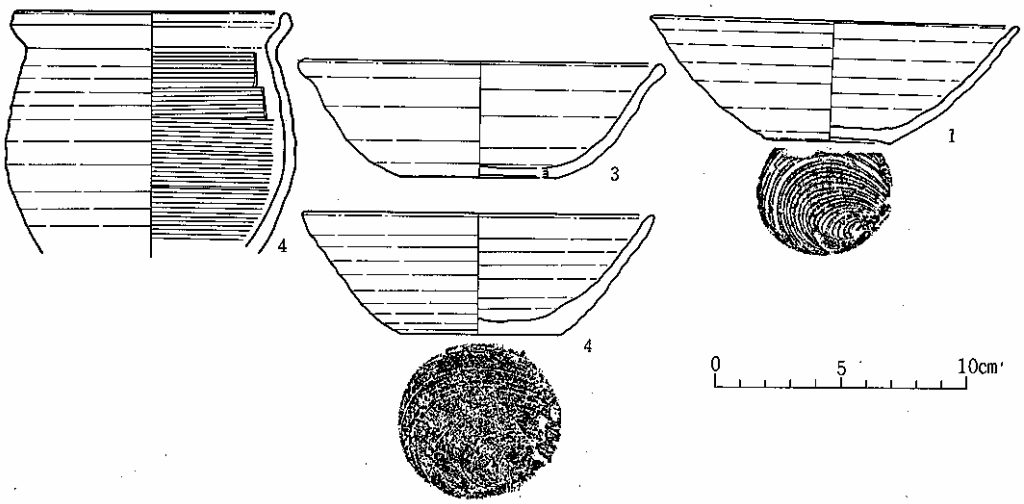
している。この他第１、２号焼土遺構堆積土各層から土師器坏の破片が少量出土したが図示できるものはない。なお堆積土出土の土師器に火を受けた痕跡のみられるものはない。

第３号焼土遺構は第28号住居跡を掘り込んで作られたもので長さ1.9m、巾0.4m、深さ0.3mの溝状の土壙である。堆積土は焼土、炭化物を含む層からなり、特に第１層は赤褐色の焼土層である。しかし土壙の底面に火熱を受けた痕跡はない。第１層の焼土層からは火をうけた土器類、火はねした石、スラグなどが出土している。図示できたものは赤焼土器坏３点（第83図１～３）、土師器甕１点（４）である。この他図示できなかった破片が多いが赤焼土器が主である。



番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	土師器坏	8層	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	口径 14.0 器高 5.5 底径 6.5 口径比 4.6	焼1－Po、1	A
2	〃	〃		口径 16.0 器高 7.0 底径 6.2 口径比 3.9	焼1－Po、2	A

第82図　第１号焼土遺構出土遺物



番号	器種	層位	特徴		登録No.	分類
1	須恵器坏	1層	内・外面：ロクロナデ	口径 14.6 器高 4.6 底径 5.2 口径比 3.6	焼3－Po、1	BⅡ
2	赤焼土器坏	〃	〃	口径 14.6 器高 4.8 底径 6.2 口径比 4.2	焼3－Po、2	A
3	〃	〃		口径 14.0 器高 4.6 底径 6.3 口径比 4.5	焼3－Po、3	A
4	土師器甕	〃		口径 19.4		AⅡ

第83図　第３号焼土遺構出土遺物

掘立柱列（第69図）

第31号住居跡の西側約60cmに柱間約2.1m等間隔の３本の柱穴が確認された。いずれも一辺30cmの方形の掘り方をもち柱痕は径10cm前後である。方向はN－26°－Wで第31号住居跡西辺にほぼ平行する。出土遺物はない。

溝　跡（第３図）

第28号住居跡、第24号墳を切る溝跡が検出された。上巾約１m、深さ約50cmで断面は「V」字状を呈する。方向はN－36°－Eでほぼ直線的に延び第24号墳の南西部でほぼ直角に折れ西方に直線的にさらに延びる。堆積土は３層に分かれいずれも流れ込んだ状態で堆積している。第１層は褐色砂質シルト層、第２層は暗褐色シルト層、第３層は暗褐色粘土質シルト層である。出土遺物はない。

Ⅵ 考　　察

確認された遺構は古墳24基、住居跡25軒、焼土遺構２基、掘立柱列１列、畑跡である。このうち遺構を確認した時点でその現状保存が決定された古墳19基、住居跡３軒を除く古墳６基、住居跡22軒、焼土遺構２基、掘立柱列、畑跡についての精査を行った。精査の結果、各遺構からは土器を中心とした多数の遺物が出土し各遺構の年代、性格について考察を加える資料を得た。

このうち古墳の玄室・前庭・テラス・周湟などから出土した土器と、住居跡床面・カマド、焼土遺構などから出土した土器とでは、土器の様相に大きな相違が認められる。この相違は特に土師器坏において顕著であり具体的には古墳出土の土師器坏が製作に際しロクロを使用していないのに対して住居跡出土の土師器坏はすべてロクロを使用して製作したものである。この土師器坏にみられる製作技法の相違は、東北南部地域における土師器編年作業の成果から明らかに年代差を示すものと考えることができる。したがって少なくとも精査を行った遺構に限定した場合には古墳と住居跡・焼土遺構との間に一定の年代差が在るものと考えることができる。この年代差を踏まえた上で以下「古墳」「住居跡」「その他の遺構」に分けてそれぞれの年代、性格について考察を加える。

１　古墳について

確認された古墳24基のうち精査を行った第24、104、106～109号墳の計６基を中心に考察を加え、併せて昨年度調査を行った88基の古墳との比較、対照により色麻古墳群の内容についても検討を重ねたい。

（１）出土土器について

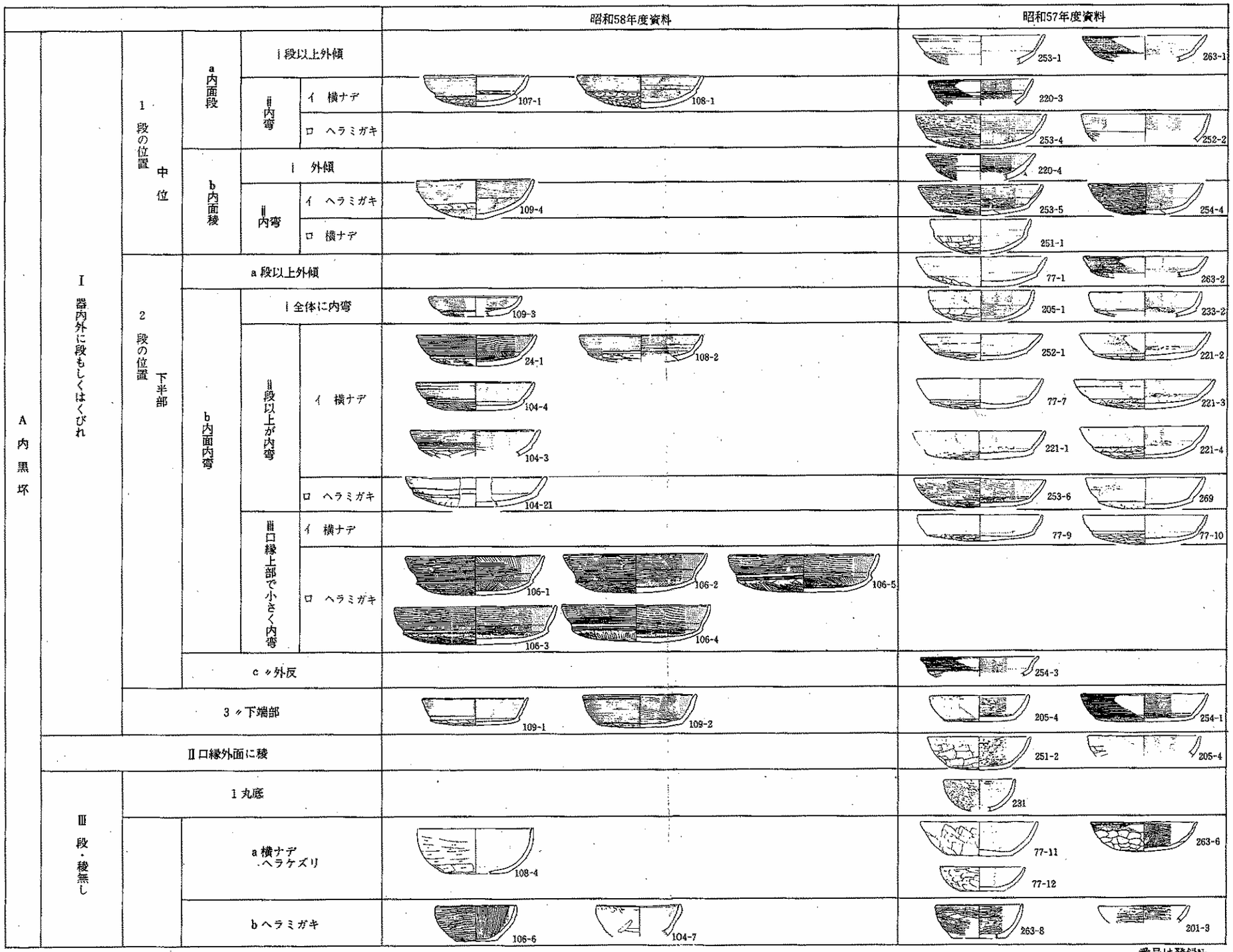
〇土器の出土状況

各古墳から比較的まとまった量の土器が出土しているがその出土状況にはいくつかの相違点がみられる。まず、出土位置をみると、第106号墳では玄室・前庭から土器が出土しているのに対し、他の５基ではいずれも前庭を中心としてこれに隣接したテラス周湟などからだけ出土し石室内からは土器の破片すら出土していない。さらに後者の中でも第24号墳では羨門に向って左右のテラス、周湟から多量の土器が出土しているのに対して第104、107、108、109号墳では羨門に向って右側のテラス、周湟からのみ土器が出土し左側からは全く出土しないという違いがみられる。次に出土層位についてみると、第106号墳の玄室出土のものについては玄室床

面と、玄室内堆積土出土のものとに分かれるが、両者の違いは遺体の位置との関わりの違いと考えることができ本来は一括埋納された土器群であると考えられ、前庭底面出土の土器と共に単一の葬儀に関係した土器群であると考えられる。他の５基のものについて残存状態の良好な第24号墳を中心にしてみると、まずテラスではその上面に接地もしくは埋置されたものがみられるのに対して、前庭・周湟において、その底面に接地しているものと、堆積土各層中に破片となって含まれるものとに分かれる。しかし、堆積土中のものは、いずれもテラス方向から流入した状態で出土しており堆積土中の破片の大半がテラス上の土器と接合関係にあることからみて他の古墳の周湟堆積土中の土器類も本来はテラスもしくは前庭に設置された土器群の一部であると考えられる。つまり、各古墳の前庭・周湟・テラスにおける土器群は各古墳に供献された一括の土器群と考えることができよう。ただし、第24号墳では羨門の左側のものがいずれも細片となっているのに対して、右側のものはほぼ完形の状態で出土したものが多いという羨門の左右での土器のあり方の違いがみられる。これは第104、107、108、109号墳における右側にのみ土器が偏在するというあり方に関係するものとして考えればそこに複数回の供献行為が存在した可能性を考えることもできる。しかし第104、107、108、109号墳の左側のテラス・周湟からは土器の細片すら出土していないこと、第24号墳左側の出土土器の器種構成は右側のそれと補完的な関係にあることなどを考えるならば、この左右における土器の在り方の違いは複数回の供献行為の結果と考えるよりもむしろ葬送儀礼中の土器の配置や扱い方の違いを強く示しているものと考えられる。第24号墳にみられる土師器の坏類と高坏類において、高坏５点がいずれもほぼ完形で周湟底面から出土したのに対して、土師器坏類はいずれも細片となり周湟・前庭にかけて広く散在していたことはその一例であると考えられる。以上のような出土状況をまとめると、第106号墳における玄室内出土の土器群はいずれもほぼ完形品であり内容的にもやや特殊な器形、器種によって構成された一括の副葬品として捉えることができる。一方各古墳の前庭・テラス・周湟から出土した土器群については、須恵器の甕を中心として主に土師器・須恵器の坏類、須恵器壺類によって構成される一括の供献土器群として捉えることができよう。つまりこれらは副葬・供献という性格の違いを持ちながらもいずれも各古墳の葬送儀礼に直接関わる一括の土器群である。これらの検討結果は第106号墳にみられる玄室への土器類の副葬が初見であることを除けば昨年度の調査における検討の結果と一致するものである。

〇土器の分類

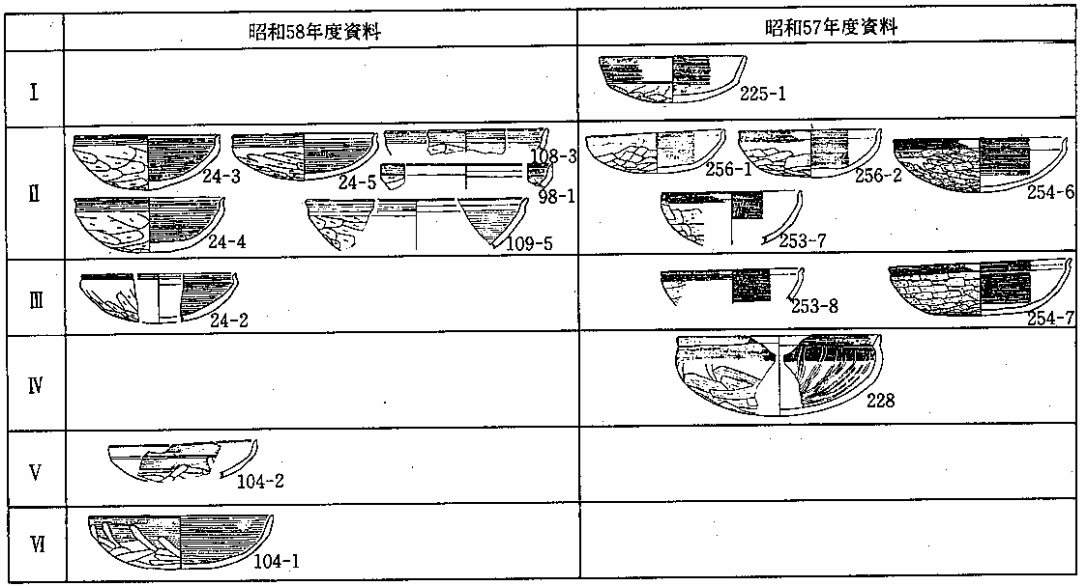
前項でみたように出土土器は各古墳ごとに共伴関係にあるものであり、またそれらの特徴から導き出される年代は直接古墳の年代を示すものと考えられる。各古墳ごとに土器の器種組成は多様であるが共通する部分も多い。ここでは昨年度の調査における出土土器の分類検討結果に



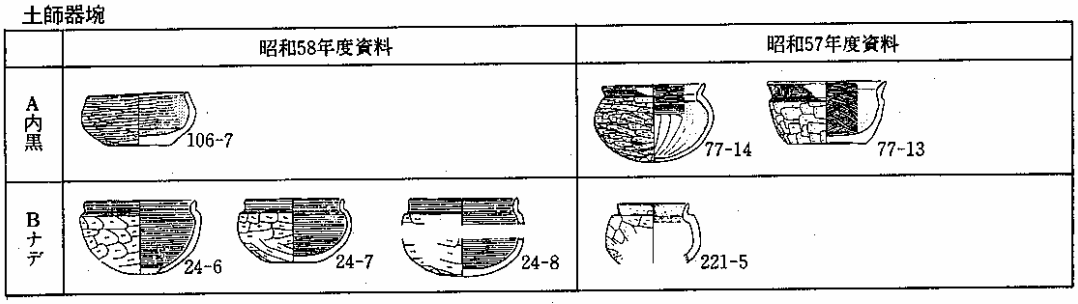
番号は登録No

第84図　土師器坏Ａ類の分類

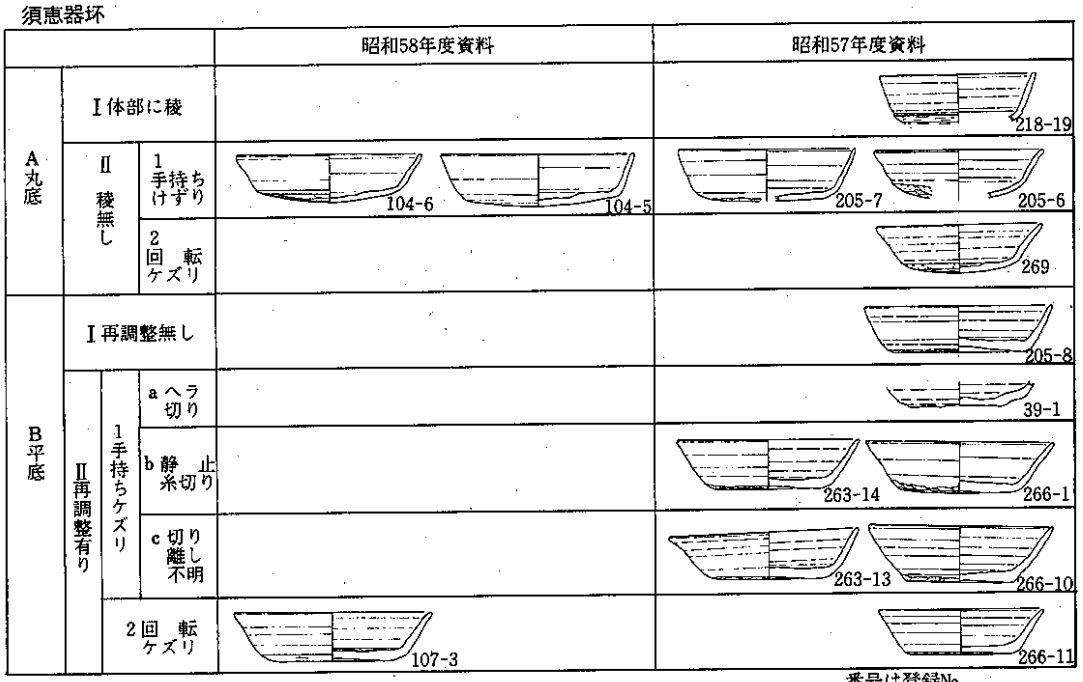
土師器B類



土師器埦



須恵器坏



番号は登録No

第85図　土師器B類、埦、須恵器坏の分類

基づき今回出土した土器群について分類、整理して年代的検討を行う。
出土土器は土師器、須恵器で、図示できたものは土師器40点、須恵器49点の計89点である。

〔土師器〕

坏、高坏、埦がある。

坏　28点ある。器内面の器面調整の違いにより、内黒のもの（A）、ナデ調整のもの（B）とに大別される。両者の違いは器面調整にとどまらず器形的にも顕著な違いを示している。これらはさらに器形、調整技法によって細分されその分類基準は第84、85図に示す如く多きに亘るがこの中には昨年の調査で出土したが今回は該当する資料が出土しなかった類型がある一方で今回新たに確認された類型が二つ（ＢＶ、Ⅵ類）みられる（第３表参照）。

このうち外面の最終器面調整に着目するとＡＩ１ａⅱロ、ＡＩ１ｂｉ、ＡＩｂⅱイ、ＡＩ２ｂⅱイ、AⅢ１、AⅢ２ｂの各類はヘラミガキが多様されるという点で共通しており、他の各類はいずれも口縁部横ナデ、体部、底部ヘラケズリを基本としている。これに対し前段階の調整技法についてみるとＡＩ類、ＢⅢ類のものは器上部、もしくは口縁部に横方向の強いヘラナデを加えることによって段、くびれが形成されている。また平底風のＡＩ３類に属する（109－$P_0$２）の底部中央には静止糸切り痕が残っている。

埦　４点出土している。（106－$P_0$７）は平底で体部、口縁部が内弯するもので器内外面ともヘラミガキ、黒色処理されている。……（A類）
（24－$P_0$６～８）は内面ナデ調整で丸底風の平底から体部が内弯気味に立ち上がり、頸部で水平な段が形成された後短い口縁部が直立もしくは外傾するものである。器面調整は口縁部～頸部が横ナデ、体部～底部がヘラケズリ、内面がナデ調整されている。……（B類）

高坏　８点出土している。いずれも坏部は内黒で内外に段が形成される。その特徴は上記の内黒坏ＡＩ２類と同様である。これに対し脚部は中実のものと中空のものとに分かれる。中実のものは小型のもののみにみられるが（24－$P_0$９～12）中空のものは小型のもの（24－$P_0$13）と大型のもの（104－$P_0$８、９～107－$P_0$２）がある。

〔須恵器〕

坏、台付坏、埦、蓋、広口壺、長頸瓶、横瓶、提瓶、甕、甕などがある。

坏　４点ある。丸底のもの（A）、平底のもの（B）とに大別される。これらはさらに器形、調整技法によって細分されその分類基準は第85図に示す如くである。昨年の調査で出土したが今回は該当する資料が出土しなかった類型が多い。

このうちＡⅡ類の内面の底部中央には丸い凹みがみとめられ（104－$P_0$９、10）ではその部分に粘土紐巻き上げ痕が残っている。またＡⅡ類を含めA類の底部は総べて器壁が薄く、切り離し技法が明らかなB類とは底部の厚さが全く異っている。これらのことから少なくともＡⅡ類の

底部は粘土紐巻き上げにより製作されたもので切り離し技法を必要としなかったものと考えられる。これに対しB類はいずれも底部を何らかの切り離し技法により作り出したものであることは明らかである。

台付坏　７点ある。昨年の資料には、坏部の口縁、体、底部が内弯して立ち上がるもの（A）、高くのびて外傾するもの（B）、直線的に外傾するもの（C）の３類型がみとめられた。今回の資料中にはB類（100－$P_0$３）、C類４点（104－$P_0$12～15）があるが、C類においては（104－$P_0$15）のように器形が低平なものや（104－$P_0$14）のように底部が手持ちヘラケズリされたものがあり、以下のように分類される。

Ａ：口縁、体、底部が内弯して立ち上がるもの ‥‥ Ａ

Ｂ：口縁、体部が高く伸びて外傾するもの ‥‥‥‥ Ｂ

Ｃ：口縁、体部が直線的に外傾するもの

　Ⅰ：器高が低いもの‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ ＣⅠ

　Ⅱ：器高が高いもの

　　ａ：底部が回転ヘラケズリされたもの ‥‥‥ ＣⅡａ

　　ｂ：底部が手持ちヘラケズリされたもの ‥‥ ＣⅡｂ

これらのうち新たに細分されたC類についてみると坏部においていずれも、底部は丸底風で中には底部の一部が台部を凌駕するもの（106－$P_0$８）もみられるという特徴をもつ。しかし底部内面について観察するとロクロナデもしくはロクロ目を残しながら平坦に仕上げられたもの（106－$P_0$８）と、底部内面中央に凹みがみられるもの（104－$P_0$12～15）の違いがみとめられる。このような坏部内面の特徴は、坏類におけるＢⅡ１ｃ類中のイ類とロ類のそれに各々対応するものである。

台付埦　１点のみが出土している。昨年は資料が得られなかったものである。底部は平底で外にふんばる台が付き、体部下半は直線的に外傾して立ち上がる。体部中位でくびれ内面に沈線状の段、外面に沈線と隆帯状の段を形成する。口縁部は外反し端部は丸くおさまるが、内面に一条の沈線が廻っている。器形の変換点は全体的に鋭角的である。

壷　６点ある。内面にカエリをもつもの（A）、カエリをもたないもの（B）とに大別されB類は口縁部の形態によりさらに４類型に細分される。

Ａ：カエリをもつもの　　カエリが大きいもの ‥‥ ＡⅠ、カエリが小さいもの‥‥ ＡⅡ

Ｂ：カエリをもたないもの

　Ⅰ：天井部が水平で長い口縁部が下るもの

　　１：口縁部が鋭角的に屈曲しほぼ垂直に下るもの‥‥‥‥‥‥ ＢⅠ１

　　２：口縁部が丸みをもって屈曲しわずかに外側に開くもの‥‥ ＢⅠ２

Ⅱ：天井部から丸みをもって口縁部に移行するもの‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ ＢⅡ

Ⅲ：口縁部で強く屈曲し対応する内面に浅い凹線がめぐるもの‥‥‥‥‥ ＢⅢ

Ⅳ：口縁上部で段をもって屈曲し口縁部が外方につまみ出されたもの‥‥ ＢⅣ

Ａ類（108－$P_0$５）、ＢⅡ類（106－$P_0$16）、ＢⅢ類（104－$P_0$18）は天井部を欠損していて全体形は分からない。（106－$P_0$15）は外面全体に櫛歯列点波状文を廻らし極めて装飾性の高いものでやや特殊な土器と考えられる。ツマミは欠損しているが宝珠形のツマミをもつものと考えられツマミ下部には穿孔がみられる。一応形態的にＢＩ２類に含めておく。ＢⅡ類（106－$P_0$16）、ＢⅢ類（104－$P_0$11）は宝珠形のツマミをもち口縁端部で折り返すように強く屈曲し外面に段、内面に凹線を形成して受け部を作り出している。

広口壺　２点ある。昨年の資料については体部の形態により、そろばん玉、もしくは楕円形を呈するもの（Ａ）、ほぼ球形を呈するもの（Ｂ）とに大別された。今回の２点はいずれも全体形を知り得ないが、体部破片からいずれもＡ類に属すと考えられる。（108－$P_0$12）は体部と頸部の境に補強帯状の段を持ち長い頸部から大きく外反して口縁部に至る。頸部、体部には櫛歯列点波状文を施す装飾性の高い土器である。

長頸瓶　６点ある。昨年は資料を得られなかったものとして、球形の体部から細く長い頸部が大きく外反し口縁部に至るフラスコ形の長頸瓶が１点ある。体部は提瓶の体部の成形技法と同一で底部側に回転ヘラケズリを加え上部を円盤で密閉した後、体部の中位に穿口し頸部を取り付けている。頸部の中位に二条、上位に一条の沈線が廻り口縁部には一条の隆帯が廻っている。台の付く長頸瓶は（106－$P_0$17、108－$P_0$６）、（106－$P_0$12、13）の４点でいずれも口縁部が大きく外反し口縁端部が外方につまみ出されたもので、体部下端～底部にかけて回転ヘラケズリが施され、外方にふんばる台が付く。（12）の体部は楕円形で中位に二段の櫛歯列点波状文が廻っている。（13）は肩が張る。（104－$P_0$22）、（106－$P_0$17）、（108－$P_0$６）はいずれも長頸瓶の体部破片で肩が張る体部形態のものである。

横瓶　１点ある。（106－$P_0$11）で球形の体部から細く長い頸部を経て口縁部は外傾する。体部は両端を円盤で密閉し頸部を取り付けており、円盤の中央にはボタン状の瘤がある。口縁部下端には二条の隆帯が廻り口縁端部は上方にツマミ上げられている。製作の技法は横瓶のそれであるが器形は長頸壺に近い。

提瓶　３点ある。いずれもほぼ完形である。吊手はみられないが、体部は偏平で、底部側に回転ヘラケズリもしくはタタキを加え上部を円盤で密閉した後、体部中位に穿孔し頸部を取り付けている。（24－$P_0$15）は短い頸部を径て口縁部が大きく外傾するもので口縁端部は水平にそぎ落されている。（24－$P_0$16、108－$P_0$７）は長い頸部を径て口縁部が外反し、（16）は口縁下部に隆帯が二条廻り、（７）は口縁部に沈線状の段が形成されている。（16、７）は製作技法は

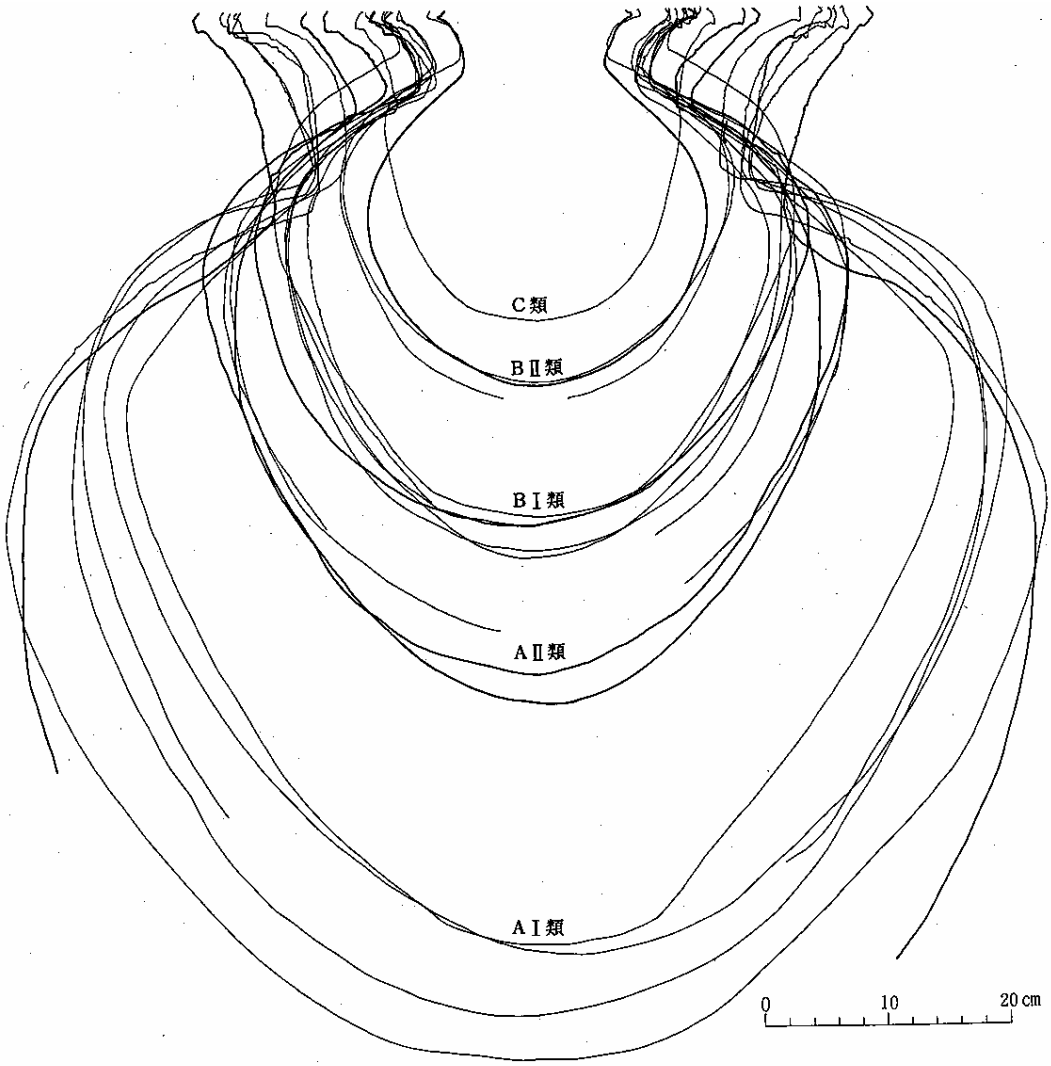
提瓶のそれであるが、器形的には長頸瓶に近い。

瓶　２点ある。いずれもそろばん玉状の体部から細く長い頸部を径て大きく外反する有段の口縁に至る。（24－$P_0$17）は注口部が欠損している。肩部に一条の沈線が廻っているが他に装飾的な要素はなく、底部は手持ちヘラケズリされ丸底風に粗く仕上げられている。これに対し（106－$P_0$14）は口縁部、肩部に櫛描波状文、体部中位に櫛歯列点波文が施され底部は回転ヘラケズリされた後、外にふんばる台が付けられている。

甕　17点ある。底部形態の明らかなものは（104－$P_0$23）一点を除き総べて丸底である。昨年の資料は総べて丸底のもので、法量により三類に分類されたが、今回はA、B類についてさらに各々二類型に細分された。

ＡⅠ：口径40～55㎝、器高70～100㎝の大甕 ･････････････ ＡⅠ

ＡⅡ：口径30～40㎝、器高45～65㎝の大甕 ･････････････ ＡⅡ



第86図　須恵器甕の法量比較

ＢＩ：口径17～28㎝、器高30～45㎝の中型の甕 ･････････ ＢＩ

ＢⅡ：口径17～24㎝、器高28～33㎝の中型の甕 ･････････ ＢⅡ

Ｃ　：小型のもの･････････････････････････････････ Ｃ

今回の資料はＡ（104－$P_0$16）（107－$P_0$４）（100－$P_0$４）、Ｂ（109－$P_0$６、24－$P_0$20）（24－$P_0$19）があるが他の11点については破片資料も多く必ずしも上記の分類基準にあてはまるものではない。（104－$P_0$15、24－$P_0$21）については（21）が口径37㎝、器高57㎝、（15）が口径34㎝器高54㎝とＡ類とＢ類の中間的な法量を示しており法量的にＡ、Ｂの間に類型を設定することができた。これら両者が頸部に櫛描波状文をもつことから、資料中２点のみに波状文のみられるＢ額よりも、資料中１点を除き総べてに波状文が施されるＡ類により近いものとみてＡⅡ類とした。さらにＢ類についても（24－$P_0$19）と（109－$P_0$20）とでは口径部に文様要素をもたない点では共通するが法量的に大きな違いをみせており二類型に細分される。

○出土土器の組み合わせと年代

類別された土器の出土一覧を第３表に示した。このうち第106号墳玄室出土の土器群は副葬品としての性格をもち、その他の各古墳の前庭テラス、周湟などから出土した土器群は葬送儀礼に用いられた供献土器としての性格をもつものと考えられる。このような性格の土器群は一般集落の土器群とは異った要素を多分にもつもので、土師器甕類の稀少性、須恵器各類の質的、量的な豊富さなどの器種組成はそれを端的に示している。さらに土器類各個体についても供膳などの日常雑器の形態とは必ずしも一致するものではない。これらの制約を前提とした上で以下各古墳の土器群のもつ内容、年代について検討を行う。

〔土師器について〕

土師器には系統を異にする数種の土器が含まれ、各器種で多様な様相を示している。

坏ＡＩ類　坏の特徴として内面をヘラミガキ、黒色処理するもので東北地方、すなわち在地の土器の系統に属するものと考えられる。さらにこの中でも、器高が概して高く段の位置が器中位にくるもので外面の最終調整がヘラミガキを主体とするＡＩ１類は東北地方北部地域の土器系統に、また、低い器形で段の位置が器下半分にくるもので外面の最終調整が横ナデ､ヘラケズリを基本とするＡＩ２、３類は東北地方南部地域の土器系統に属するものと考えられる。ただし上記各類の中には、両系統の折衷的な特徴をものも多く含まれ画然と区別されるものではない。出土量比はＡＩ１類３点･ＡＩ２、３類：12点で、昨年における比（10：41）にほぼ比例しており、本遺跡の土師器坏の大半は南部地域の土器系統に含まれることを示している。

坏Ｂ類　いずれも内面がナデ調整されるもので器形の特徴から関東地方各地の土器の系統に属すものと考えられる。Ａ類とＢ類との出土量比をみるとＡ類：19点、Ｂ類：９点（図示でき

第3表　古墳出土土器一覧表

土師器

資料	古墳No.	坏A-I-1-a-i-イ	坏A-I-1-a-i-ロ	坏A-I-1-a-ii-イ	坏A-I-1-a-ii-ロ	坏A-I-1-b-i	坏A-I-1-b-ii-イ	坏A-I-1-b-ii-ロ	坏A-I-2-a	坏A-I-2-b-i	坏A-I-2-b-ii-イ	坏A-I-2-b-ii-ロ	坏A-I-2-b-iii	坏A-I-2-c	坏A-I-3	坏A-II	坏A-III-1	坏A-III-2-a	坏A-III-2-b	坏B-I	坏B-II	坏B-III	坏B-IV	坏B-V	坏B-VI	高坏A	高坏B	埦A	埦B	甕	鉢A-I	鉢A-II	鉢B	甑	壺
昭和58年度資料	24										1										3	1				4	1		3						
昭和58年度資料	98																				1														
昭和58年度資料	100																																		
昭和58年度資料	104										2	1							1					1	1		2								
昭和58年度資料	106											5							1									1							
昭和58年度資料	107			1																							1								
昭和58年度資料	108			1							1							1			1														
昭和58年度資料	109						1			1					2						1														
昭和57年度資料	15																				1														
昭和57年度資料	39																																		
昭和57年度資料	77				1				1		3		5					2									1					1	1		1
昭和57年度資料	201										1		1						1											1					
昭和57年度資料	202										1																								
昭和57年度資料	204																																		
昭和57年度資料	205									1	2				1	1											1	1						1	
昭和57年度資料	207																																		
昭和57年度資料	209																																		
昭和57年度資料	212																										1								
昭和57年度資料	217																				2														
昭和57年度資料	218																																(1)		
昭和57年度資料	220			1		1							1		1																				
昭和57年度資料	221										4																		(1)						
昭和57年度資料	222																																		
昭和57年度資料	224														1																				
昭和57年度資料	225																			1															
昭和57年度資料	227																											1		1					
昭和57年度資料	228																								(1)										
昭和57年度資料	231										2						1																		
昭和57年度資料	233									2																									
昭和57年度資料	234																																		
昭和57年度資料	250							1																											
昭和57年度資料	251										1					1		1																	
昭和57年度資料	252				1						1																								
昭和57年度資料	253	1			1		1				2	1									1	1						1							
昭和57年度資料	254						1				1		1	1				1			1	1													
昭和57年度資料	256																				2														
昭和57年度資料	257																																		
昭和57年度資料	260																																		
昭和57年度資料	263		1						1	1	2							2	1												1		1	1	
昭和57年度資料	266																																		
昭和57年度資料	269											2									1														
昭和57年度資料	401																																		
昭和57年度資料	403															1																			
計																																			

須恵器

資料	古墳No.	坏A-I	坏A-II-1	坏A-II-2	坏B-I	坏B-II-1-a	坏B-II-1-b	坏B-II-1-c-i	坏B-II-1-c-ii	坏B-II-2-a	坏B-II-2-b	高台付坏A	高台付坏B	高台付坏C-I	高台付坏C-II	蓋A	蓋B-I	蓋B-II	蓋B-III	蓋B-IV	長頸瓶	短頸瓶	広口壺A-I	広口壺A-II	広口壺B	提瓶	甕A-I	甕A-II	甕B-I	甕B-II	甕C	甕D	台付埦	横瓶	𤭯
昭和58年度資料	24																				1					2		1	2	1					1
昭和58年度資料	98																																		
昭和58年度資料	100												1							1							1		1						
昭和58年度資料	104		3											1	3				1	1	1						1	1				1	1		
昭和58年度資料	106														2		1		1		3													1	1
昭和58年度資料	107									1																	2		1						
昭和58年度資料	108															2					1			2		1			2						
昭和58年度資料	109																													1					
昭和57年度資料	15																									1									
昭和57年度資料	39					1												1								1									
昭和57年度資料	77																		2				3	1			1								
昭和57年度資料	201																							1											
昭和57年度資料	202																																		
昭和57年度資料	204															4					1					1	1	1							
昭和57年度資料	205		1		1			1		1						○					3	1					2								
昭和57年度資料	207																										1								
昭和57年度資料	209																												1						
昭和57年度資料	212															1													3						
昭和57年度資料	217																																		
昭和57年度資料	218	(1)																																	
昭和57年度資料	220																																		
昭和57年度資料	221																				1				1				2						
昭和57年度資料	222								1																										
昭和57年度資料	224																																		
昭和57年度資料	225																																		
昭和57年度資料	227									1							1					1							1						
昭和57年度資料	228																																		
昭和57年度資料	231																																		
昭和57年度資料	233														3				1																
昭和57年度資料	234																									1									
昭和57年度資料	250																		⟨1⟩		1														
昭和57年度資料	251																										1								
昭和57年度資料	252																							1											
昭和57年度資料	253																												1						
昭和57年度資料	254											3	1							1	2			1			2		4						
昭和57年度資料	256																																		
昭和57年度資料	257																													1					
昭和57年度資料	260																														1				
昭和57年度資料	263						3		2												2				1				2						
昭和57年度資料	266						5	3	2		1				1		1					2					1		1	1					
昭和57年度資料	269			1																															
昭和57年度資料	401																																	1	
昭和57年度資料	403																										1								
計																																			

○実測できなかったもの

( ) 石室裏込め出土

〈 〉 撹乱出土

たもののみ）であり昨年における比63：12よりもＢ類の比率が高くなっている。総体的にみた場合Ｂ類はＡ類を越えるものではないが、第24号墳では出土した坏の４点中３点までがＢⅡ類によって占められ少数の古墳内ではＢ類がＡ類を凌駕する例もあることが新たに確認された。

坏ＡⅡ類　今回の調査では本類に含まれる資料は出土していない。本類は内面がヘラミガキ、黒色処理される点では在地の土器としての特徴をもつが、器形的には口縁下部に稜が形成され口縁部が短かく外反気味に立ち上がるものでＢⅡ類の特徴に一致する。つまり内黒という在地の技法が、関東系の土器に用いられたものと考えられる土器である。

高坏　坏部の特徴はいずれも「坏ＡＩ類」に一致するもので類例的にも東北地方の系統に属す土器である。

埦A類・坏AII類　いずれも内面がヘラミガキ、黒色処理されており在地の系統に属すと考えられる。しかし、法量にばらつきがあり、器形的にも丸底のもの、平底のものがある他、器外面の調整技法もまちまちであるなど固定的な器種構成から逸脱したやや特殊な土器群である。

埦B類　器面調整、細部の器形的特徴は「坏Ｂ類」に類似している。周辺地域では三本木町混内山横穴古墳群（三宅：1975）第７号墳に１点類例がみとめられるだけである。厳密な資料の対比はしていないが、北関東西部地域に多く類例が見出せることから関東地方の系統に属する土器と考えられる。

以上の系統の異なる各類型の土師器群は各古墳においてある程度の類型のまとまりを示しながらも第３表にみられるように総体的には在地の土器と考えられる「坏ＡＩ２、３類」もしくは関東地方の系統に属すと考えられる「坏ＢⅡ類」と共伴関係にある点で共通している。つまりこれらの土師器は「坏ＡＩ２、３類」、「坏ＢⅡ類」の特徴や、組成上の共通性を媒介として一定の年代幅の中で組み合せ関係が成立する一括の土器群と考えることができるのである。その意味では各古墳のもつ土師器の類型組成、系統の相違などの問題は、時期差を示す問題であるよりもむしろ、被葬者、葬儀参加者などの性格に帰属する問題として捉えられる。この点については「古墳群の性格」の項で触れることにして、ここでは上記の土師器類の特徴から導引き出される年代について検討を進める。

まず在地の土器の系統に属す「坏ＡＩ２、３類」の器形的特徴として器内外面に段もしくはくびれを有し、口縁部が内弯もしくは外傾することがあげられる。このような特徴は東北地方南部地域の土師器編年における「栗囲式」（氏家：1957、1961、1968）、（桑原：1976）に後続し、同じく「国分寺下層式」（氏家：1957）、（桑原：1976）に先行する要素と考えられる。まず「栗囲式」の中でも新しい段階のものとされる名取市清水遺跡第Ⅴ群土器（丹羽・阿部・小野寺：1981）と比較した場合、清水遺跡第Ⅴ群土器に含まれる土師器坏第１、２類は口縁部が外反、もしくは外傾するものであり本遺跡の「坏ＡＩ２、３類」とは明らかに異り、本遺跡のものが

より新しい器形的特徴を示している。次に「国分寺下層式」とされる志波姫町糠塚遺跡第１群土器（小井川・手塚：1978）と比較すると糠塚遺跡第１群土器に含まれる土師器坏Ａ、Ｂ類は口縁部が内弯するなど器形的にかなり類似した特徴をもつものである。しかし糠塚遺跡では総べてのものの器外面にヘラミガキが加えられること、外面に段の他に沈線の廻るＡⅡ、ＢⅡ類が含まれること、共伴する須恵器坏は底部が回転ヘラ切り、回転糸切りされたものであることなどの点で違いをみせている。特に共伴する須恵器坏が異る点から本遺跡の「坏ＡＩ２、３類」が糠塚遺跡第１群土器に先行することが理解できる。

清水遺跡第Ⅴ群土器は７世紀後半、糠塚遺跡第１群土器は８世紀後半の年代がそれぞれ想定されていることから、本遺跡の土器については８世紀前半を中心とした段階のものと考えられる。県内でこの段階に含まれる土器を出土した遺跡としては、蔵王町塩沢北遺跡（小川：1980）、高清水町観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）、田尻町日向前横穴古墳（早坂：1981）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川：1982）などがある。

次に関東地方の土器の系統に属すと考えられる「坏ＢⅡ類」、「埦Ｂ類」についてみてゆく。「坏ＢⅡ類」の特徴として口縁下部に稜が形成され、口縁部は短かく外反気味に立ち上がることがあげられる。このような特徴は関東地方の鬼高式終末～真間式初当の坏の一形態として類例のみとめられるものである。近年この種の土師器坏が宮城県内でも確認され、その例が増加しており各遺跡においてその位置付けがなされている。仙台市郡山遺跡（木村他：1981、1982、1983）、古川市名生館遺跡（白鳥、後藤：1981、1982）、古川市朽木橋横穴古墳群（阿部：1983）。このうち「坏ＢⅡ類」に類似したものは郡山遺跡第２～４段階（木村他：1983）に属する遺構出土の土器群、清水遺跡第Ⅴ群土器、御駒堂遺跡第１群土器などの中に見出すことができる。また「坏ＢⅢ類」に類似したものは日向前横穴古墳、郡山遺跡、「坏ＢⅤ、Ⅵ類」に類似したものは郡山遺跡から出土している。これらの各遺跡では共伴する他の土器の検討などから若干の相違はみられるものの７世紀末～８世紀初当という年代が与えられている。次に「埦Ｂ類」についてみると、県内に類例がみられるのは混内山横穴古墳群第７号墳（三宅：1975）出土の１点のみである。器形的には頸部に水平に近い段が形成され口縁部は短く外反するもので厳密な比較は行っていないが北関東西部地域を中心に類似したものがみられる。埼玉県大里郡岡部町六反田遺跡（石岡・浅野地：1981）では鬼高式後葉に位置付けられる第131、150号住居跡出土土器の中に類似したものがみられる。さらに第127号住居跡では「坏ＢⅡ類」に類似した土器が共伴している。これらのことから「坏Ｂ類」、「埦Ｂ類」については７世紀末～８世紀初当の年代を想定することが可能である。

以上のことから今回の調査により各古墳から出土した土師器については共伴、組み合せの関係からいずれも７世紀末～８世紀初当の年代が与えられる。

〔須恵器について〕

蓋、坏、高台付坏、壺、瓶などの小型品と、大型品の甕類とを比較すると、小型品は各器種において器形、文様要素、製作技法が極めて多様であるのに対し、大型品の甕類は器形、文様要素、製作技法が法量に基づく一定の規格に準じて製作されている。また小型品の中には特徴的な胎土、焼成のものがいくつかみられる。（24－$P_0$14）、（106－$P_0$７、10、12、13、16、17）はいずれも①胎土が緻密で灰白色を呈する。②焼成は堅緻で暗緑色の自然釉がかかる。③ロクロ目が明瞭で成形にタタキ技法が用いられない。などの点で共通しており、他の製品に比べ技術的に洗練された製品である。科学的な胎土分析を行っていないがこれらを含めいくつかの生産地の異る製品が各古墳に供給されたものと考えることができる。

以上のように須恵器の中でも甕類についてはその主な特徴が法量と相関的な関係にあることが理解された。また小型品では異なる産地の製品が含まれることもあり特に壺、瓶の特徴は多様性をもちうるものと考えられる。したがってここでは坏、高台付坏、壺類などを中心にその年代について検討を加える。

坏には丸底のものと平底のものとがある。丸底のものはＡⅡ１類が第104号墳から３点出土しており、平底のものはＢⅡ２ａ類が第107号墳から１点出土している。ＡⅡ１類は周辺地域に類例を見い出すことはできないが、底部の再調整が回転のヘラケズリであることを除いた特徴がほぼ一致するＡⅡ２類は福島県福島市小倉寺窯跡（工藤：1969）、宮城県涌谷町長根窯跡Ａ地点（佐々木：1971）に類例がみとめられる。一方ＢⅡａ類については本遺跡の東南約３㎞に所在する日の出山窯跡群Ａ地点（岡田・工藤他：1970）に類例が見出せる。小倉寺窯跡は７世紀末、長根窯跡は８世紀初当に位置付けられ、日の出山窯跡は多賀城創建瓦を焼成した窯跡群という性格から８世紀前半の年代が与えられている。

高台付坏はＣ類のみが出土した。いずれも高台が坏底部周縁から１㎝前後内側に付けられたもので、体部口縁部は直線的に外傾する。これらに類した特徴をもつものは長根窯跡群Ａ地点からも出土している。しかし、長根窯跡のものは高台が高く外方にふんばる形態のもので底部が平底を呈するのに対し、本遺跡のものは高台が低くその断面が台形となり、底部は丸みを帯び高台を凌駕するものもみられるなどの違いがある。これらの特徴をもつものは周辺の窯跡出土資料の中に見出すことはできない。しかし東海、関東地方においては７世紀末～８世紀初当に上記の特徴をもつ高台付坏がみられ当期の土器群の一指標ともされている。（神奈川考古：1983）。

蓋はカエリのあるものとないものとがある。第104号墳ではカエリのないＢⅡ、Ⅲ類が各１点出土している。第105号墳でもカエリのないＢⅠ、Ⅱ類が各１点出土している。これらに対し第108号墳ではカエリのあるＡ類が２点出土している。カエリのあるものは古い要素と考え

られるが、第108号墳と第104、106号墳において共伴する土器を比較した場合いずれの古墳からも土師器坏ＡＩ２類が出土している。さらに第108号墳では土師器坏ＢⅡ類が共伴し、第104、106号墳では高台坏C類が共伴している。これらはすでにみたようにいずれも７世紀末から８世紀初頭に位置付けられるものである。福島市小倉寺窯跡ではカエリのあるものとないものが共存していることなどからみても上記の第108号墳出土のカエリのある蓋が第104、106号墳のカエリのない蓋に先行すると考えることはできない。

以上のことから本遺跡出土の須恵器については第107号墳出土の坏ＢⅡ２ａ類を除き他の土器との共伴関係などからみても７世紀末～８世紀初当の年代を想定することが可能である。第107号墳出土の坏ＢⅡ２ａ類については共伴する土師器坏ＡＩ１類、須恵器大甕A類を含め８世紀前半という年代が想定される。しかしこれについても静止糸切り技法の存続年代が不明確である現在、第107号墳の土器組成が削平の影響により欠落をきたしていることを考えるならば、他の古墳出土の土器群により近い年代的位置付けが妥当かと考えられる。

以上のように本遺跡出土土器については７世紀末から８世紀初当という極めて限定された年代が与えられた。土器の各類の特徴の存続する年代幅はまちまちであるが昨年の調査による50基、今年の６基、計56基もの古墳の出土土器は共伴・組み合せ関係から約半世紀という年代幅の中に集中することが明らかとなった。これらの土器群は各古墳における出土状況からいずれも古墳築造と一体となった葬送儀礼に供された土器でありその年代は古墳の築造年代とほぼ一致するものである。中には隣接する古墳の周湟同士が切り合い、回避の関係をもつものもみられ逆に土器群の前後関係が示される場合もある。しかし７世紀末～８世紀初当という限定された年代幅の中で上記土器群の時期的細分を試みることは遺跡の性格、各古墳の残存状況からみて現段階では困難である。土師器では土器の系統の識別、須恵器については生産地の同定などの未解決の問題も残しており上記の時期的細分も含め今後の周辺地域の調査成果を待って検討されるべき課題と思われる。

（２）古墳の構造について

昨年度の本古墳群の調査で確認された古墳88基中主体部形態の確認できたものは30基あった。そのうちわけは横穴式石室が23基、竪穴式小石室が５基、箱式石棺が３基であった。さらに残りの58基についても横穴式石室と考えられるもの54基、竪穴式小石室と考えられるもの３基、箱式石棺と考えられるもの１基からなる。横穴式石室、竪穴式小石室の古墳は石室側壁が横長の石材を積んで作られ、胴張りのプランをとること。さらに周湟を廻るすことなどの点で共通した構造をもっており、土器類が出土したものではその特徴からいずれも７世紀末～８世紀初当の年代が与えられた。しかし、規模は前者が径５m前後、後者が10m前後と異なる。一方箱式石棺は側壁が偏平な石を立て並べて作られ、周湟などの施設は全く確認されなかった。土器の出土もなくこれらの構築年代について結論を出すことはできなかった。

今回の調査では確認された古墳24基のうち８基が横穴式石室を主体部とするものであることが確認され他の16基についても周湟をもつこと、規模が径10m前後であることなどからみて、いずれも横穴式石室を主体部にもつものと考えられる。ここではこれら横穴式石室を主体部とする古墳の構造について昨年の資料を参考にして検討を重ねることとする。

○規　模

確認された古墳はその周湟の内周径がいずれも６m～15mほどの小規模なもので墳丘もこれに対応した５m～14m前後の円墳であったと考えられる。墳丘の半径は石室の全長とほぼ一致するものであり、墳丘規模、周湟内周径は石室全長の大小によって規定されることが理解できる。昨年の調査例では石室全長が３m代のものが12基、４m代のものが６基、５m代のものが２基と小形のものが多くみられた。これに対し今回のものは３m代のものが１基、４m代が２基、５m代が２基と大形のものが多い。この他石室の計測値の得られなかったものでも第104、110、113号墳の周湟内周径はいずれも10mを越えるものであり全長４m以上の石室を主体部とする古墳であると考えられる。このように今回確認された各古墳は昨年のものに比べ相対的に規模の大きなものが多い。

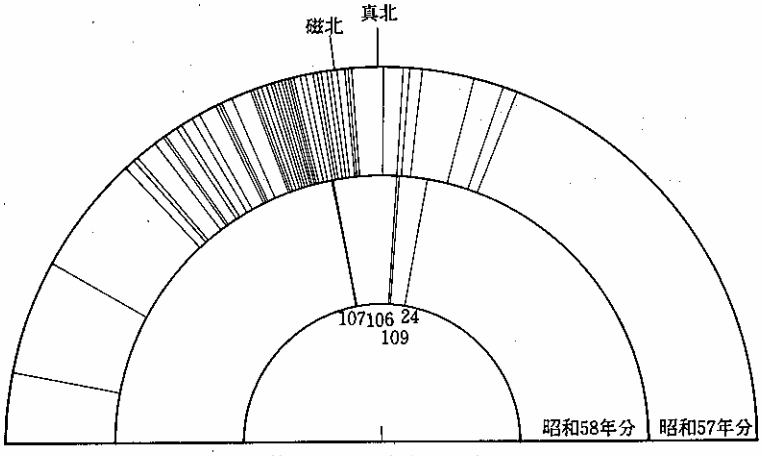
○規　格

石室を構成する玄室、羨道各部の長さは第106号墳を除きほぼ10：９の比を示しており相関的な関係にある。第106号墳は羨道が本古墳群では例外的に短いものである。これは第106号墳で前庭が他の古墳よりも内側に位置するためと考えられる。羨道、玄室の巾は各古墳の規模の大小に関わらず近似した値を示す。玄室部にみられる胴張り曲線の弧の半径は玄室最大巾よりも大きいものばかりで昨年みられたような最大巾に近い強い胴張りになるものはない。石室の主軸方位はいずれもＮ－10°－WからＮ－14°－Ｅの中におさまるもので昨年の資料で最も集中した範囲に一致する（第87図）。周湟はいずれも玄室の奥半部に中心を置く円形を基本としてい

る。これに対して外周は第24、104、108、109号墳のようにほぼ内周の同心円になるものと、第106、107号墳のように不整形なものとがある。第106、107号墳の周湟は確認面が低かったこともあり、底面の凹凸が確認面に表われた部分もあるが第107号墳の周湟西側外周は明らかに第108号墳の周湟を避けた形態を示している。

〇構　造

各古墳で残存状況に差があり、特に墳丘、石室の上部などが失われたものが多くその構造については不明な点が多い。石室は地山まで達する掘り方を掘りその中に石室を構築したものでいずれの古墳も石室床面は旧表土よりも下にある。石室入口部にあたる前庭も地山を掘り込んで作られたものであるが墳丘周囲のテラス部分は第24号墳にみられるように旧表土上面をそのまま利用している。石室の掘り方内には奥壁や側壁根石、梱石を固定させるための「据え方」をさらに掘り込み石室平面プランを決定している。玄室床面には径２～５cmの小石を敷きつめているが羨道床面は第106号墳を除きいずれも径10cm前後の大きめの石が粗雑に敷かれたものである。第106号墳の羨道床面は玄室同様の小石が敷きつめられたもので他の古墳と異なる。前庭底面は平坦で地山からなるが、第106号墳だけは径10cm前後の敷石が施されこの点でも他と異なる。さらに玄室床面、羨道床面、前庭床面のレベルは第106号墳では前庭、羨道、玄室と階段状に低くなっているが他のものは玄室、羨道はほぼ同一レベルで前庭が一段低くなっており、第106号墳が羨道、前庭について他の古墳よりも比較的丁寧な作りになっていると理解できる。本古墳群で例外的に第106号墳玄室内から多量の土器が出土したことは、このような構造の特殊性とも関連するものと考えられ、そこには他の古墳と異なった葬送儀礼の行為が推定されよう。石室の側壁は横長の石材を持ち送りしながら積み上げており、それらの間隙にはさらに小石が押入され安定を保たせている。同時に小石や粘土を使用した石室裏込めが寄せかけられ封土も積み上げられていったと考えられる。側壁はほぼ互目積みであるが羨門、玄門部には通目積み



第87図　石室主軸方位

がみられる。奥壁は不明な点が多いが第106、109号墳のように比較的大きな石を立て所謂「鏡石」状を呈するものや第24号墳のように立方体形の石を数段積み上げたと考えられるもの、さらに第107号墳のように側壁同様に石を積み上げたものなどの変化がみられる。天井部は第24号墳の羨道部を除きいずれも失われておりその構造は明らかでない。第24号墳の羨道天井は横長の偏平な石四個によって構成されておりそのうちの羨門上のものは崩落していた。玄門部では天井が立ち上がり玄室部天井はより高かったことを示している。羨道の巾は約70㎝、高さは約90㎝で大人が通るには四つん這いになってかろうじて通れる程度である。この羨道部には径10～20㎝前後の石が天井までいっぱいにつめられ閉塞されていた。本古墳群内では規模の大きな部類に属す第24号墳の羨道部も上記のような構造からみて追葬などの本来の機能は果たし得ないものと考えられる。

前庭については第24、106、107号墳のように「ハ」の字形の石組みがテラス部との境にみとめられるものがある。墳丘は第24、109号墳のように葺石が確認されたものの他、第108号墳のように葺石が周湟内に崩落しており同じく葺石が廻らされていたと考えられるものがある。しかし第104、106、107号墳については葺石が存在したか否かは確認できなかった。第24号墳の葺石についてみると前庭部では小さめの石が互目に整然と積まれその他の部分では大きめの石が旧表土上からやや粗雑に積まれていた。周湟は断面が浅い「U」字状で底面に大きな凹凸はみられない。しかし第104号墳の西南部や第107号墳の東半部の地山の礫層が露出する部分では礫層を掘り込んでおらず凹凸が激しい。なお第108号墳の北西部には土橋状の浅い部分がみられた。

以上各古墳の規模、規格、構造についてみてきたが総体的にはほぼ画一的な古墳構築プランに基づいていることが理解できる。細部にみられる規格、構造の相違や規模格差などの要素はすでにみた出土土器の特徴、年代からみて必ずしも各古墳の時期差に結びつけられるものではない。むしろ前庭の付設、羨道の形該化、前庭付近にみられる供献土器群などの共通した特徴は古墳の築造、葬送儀礼が一体化した画一的な葬制に基づくことを示すものと考えられる。胴張りをもつ玄室部の形態は県内でも仙台市安久諏訪古墳（田中：1981）、古川市塚原古墳群（佐々木：1970）、同日光山古墳群（佐々木：1972）、大和町鳥屋八幡古墳（氏家：1981）、白石市鷹ノ巣古墳群（志間：1972）などで確認されている。しかし本古墳群のように石室裏込めに多量の小石を使用するという特徴や、群として胴張りのもののみがみられるなどの点では周辺地域に分布する古墳群とは大きく異った様相をもつ。このような古墳群としての特徴はむしろ北関東西部の特定の地域にみられるいくつかの古墳群と極めて類似したものである。埼玉県大里郡川本町鹿島古墳群（埼玉県教委：1972）、同児玉郡美里村塚本山古墳群（埼玉県教委：1977）、同広木大町古墳群

（埼玉県遺跡調査会：1980）、群馬県藤岡市東平井古墳群（群馬県教委：1981）などがそれである。これらはいずれも胴張り形の玄室をもつ横穴式石室が主体となり大規模な古墳群が形成されたもので石室裏込めに多量の小石が使用されるという特徴もこの地域における一つの特徴であるとされている。特に埼玉県大里郡、児玉郡にかけては類似した特徴をもつ古墳群が多く分布している。ただし上記古墳群には「模様積み」と称される技術が側壁の構築に多く用いられていること、群の形成が６世紀末～７世紀初頭にさかのぼるものが多いことなどの点では本古墳群とやや異った内容もみられる。しかし本古墳群における胴張り型の石室構築技法は本古墳群内では安定したあり方を示しながら、周辺地域では必ずしも系統性を辿れるような安定、定着したものでないと考えられる。したがって本古墳群の構築技法は系譜的に北関東西部地域との関連の中で理解されるべきものと考えられる。

（３）古墳群の性格

色麻古墳群を構成する古墳の総数は調査対象地域である花川北岸の上郷支群と、南岸の高野支群を併せ300基を上回ることが現在までの調査成果により確実性を増しつつある。これらの古墳の大半は胴張り型の横穴式石室を内部主体とする径10m前後の小円墳である。また各古墳はその出土土器の特徴から７世紀末～８世紀初当というかなり限定された期間に続々と造営されたことも明らかになってきた。このように大規模な群集墳が急激に形成された背景には被葬者、古墳造営者がより大きな集団として存在していたものと考えられる。

本古墳群の被葬者、造営者の性格を示す要素として副葬品、各種土器類、古墳の築造技術があげられる。副葬品は、鉄製の直刀、鏃が主であるが儀礼刀などの装飾性の強いものはほとんど出土していない。また玉類もほとんどみられず、馬具、帯金具などは全く出土していない。副葬品の内容は各古墳で極めて個性が薄いと言える。これに対し土器類では系統の異なる土師器が出土しており特に関東地方の系統に属す土器が在地の土器と組み合せ関係をもっていくつかの古墳で供伴していることは、古墳の築造技術が北関東西部地域との関連を示していることに対応するものと考えられる。つまり本古墳群の被葬者、造営者の集団の中に関東地方、特に北関東西部に深い関わりをもつ人間が含まれていたことを示すものと考えられる。

次にこれら被葬者、造営者の性格を周辺地域の歴史的環境の中から位置付けてみたい。本古墳群の周辺には７世紀末～８世紀前半にかけて官衙、城柵、とそれに関連する遺跡が多くみられる。これに関しては本文の「遺跡の位置と環境」（７頁）ですでにみたとおりである。このうち特に名生館遺跡、一の関遺跡は７世紀末～８世紀における「城柵」もしくはこれに関連した施設として位置付けられている。これら城柵の性格については多くの学説、論考がなされている。このうち平川南氏は「文献」・「考古学」の成果を照合させることによって８世紀後半から９世紀にかけての古代東北城柵の設置を新たな令制郡の建置のための前段階の措置として位置付け、

これが７世紀後半から８世紀前半の城柵についてもある程度あてはまることを論証している。そして「柵戸」の移住については城柵の設置から建部への過程の中で理解されるものとしている（平川:1978)。古川市名生館遺跡、仙台市郡山遺跡では７世紀後半もしくは７世紀末に整備された官衙施設が形成され、それらの外郭区画施設の内外にはそれと前後する時期の竪穴住居跡群が検出されている。これら住居跡群の性格についていまだ検討の過程にあるが出土遺物中には関東地方の系統に属する土器群が含まれている。

以上のような論考、調査成果を参考にするならば本古墳群における群形成が７世紀末から８世紀初当に急激に行われていることは、本古墳群被葬者、造営者集団が城柵の設置にはじまる一連の律令制的措置に関わった集団であることを予想させる。しかし各古墳の規模、出土遺物に必ずしも特殊な身分階層の墳墓としての性格をうかがえるものはない。また出土土器には系統の異る土師器群がみられるにも関わらず古墳の構造は北関東西部の古墳築造技術との強い関連の基で画一化された様相を示している。これらのことは本古墳群の被葬者集団が必ずしも官人や特定の技術集団に限定されるものではなく、むしろ一定の墓制により規制を受けた集団員の墳墓群としての性格が与えられよう。『続日本紀』天平９年４月戊午条にみえる「色麻柵」は現在その明確な比定地が確認されていないが本古墳群周辺に位置することはほぼ確実である。本古墳群被葬者、造営者は位置的、年代的な観点からみて「色麻柵」の設置に深く関わったと考えることができる。したがって色麻古墳群は、「色麻柵」の設置を中心とした律令制的措置を群形成の最大の要因として成立した最終末期の群集墳と考えることができる。

引用・参考文献

穴沢　和光（1972）：「東北南部における胴張りプランの横穴式石室とその問題」
『福島考古』13号　福島県考古学会

甘粕　　健（1982）：「東日本における群集墳の総合的研究」
昭和56年度科学研究費補助金研究成果報告書

阿部　　恵（1980）：「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
（昭和54年度）　宮城県教育委員会

石岡憲雄・浅野晴樹他（1981）：「六反田遺跡」　埼玉県岡部町教育委員会

〃　　（1977）：「一の関遺跡」　宮城県文化財調査略報　昭和51年度分
宮城県教育委員会

氏家　和典（1977）：「仙台平野における横穴式石室古墳について」『研究紀要』Ⅳ
宮城県多賀城調査研究所

〃　　（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

〃　　（1981）：「鳥屋八幡古墳」宮城県史34　宮　城　県

小川　淳一（1980）：「塩沢北遺跡」　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ　宮城県教育委員会

岡田・桑原（1974）：「多賀城周辺における古代坏型土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ
宮城県多賀城調査研究所
加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡」　東北新幹線関係遺跡調査報告書（4）
宮城県教育委員会
木村浩二他（1981）：「郡山遺跡」Ⅰ　宮城県仙台市教育委員会
〃　（1982）：「郡山遺跡」Ⅱ　〃
〃　（1983）：「郡山遺跡」Ⅲ　〃
桑原滋郎他（1971）：「長根窯跡群」　宮城県涌谷町教育委員会
〃　（1972）：「長根窯跡群」Ⅱ　〃
〃　（1976）：「長根窯跡群」Ⅲ　〃
工藤　雅樹（1969）：「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」　福島県福島市教育委員会
小井川・手塚（1978）：「糠塚遺跡」宮城県文化財調査略報　昭和52年度分
宮城県教育委員会
小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡」　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ　〃
佐々木茂楨（1970）：「古川市塚原古墳群」　宮城県古川市教育委員会
〃　（1972）：「日光山古墳群」　〃
進藤・白鳥他（1982）：「名生館遺跡」Ⅰ　宮城県多賀城調査研究所
白鳥・後藤他（1983）：「名生館遺跡」Ⅱ　〃
柴田　俊彰（1975）：「胴張り型横穴式石室の形態について」『福島考古』16号
福島県考古学会
志間　泰治（1972）：「鷹ノ巣古墳群発掘調査概報」　宮城県白石市教育委員会
田中　則和（1981）：「安久諏訪古墳」宮城県史34　宮　城　県
丹羽・阿部・小野寺
（1981）：「清水遺跡」　東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）宮城県教育委員会
早坂　春一（1981）：「日向前横穴古墳」東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）
宮城県教育委員会
平川　　南（1978）：「古代東北城柵の特質について－建郡との関連を中心として－」
『東北歴史資料館研究紀要』第４巻　東北歴史資料館
古川　一明（1982）：「色麻古墳群」　宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
（昭和56年度）　宮城県教育委員会
〃　（1983）：「色麻古墳群」　宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
（昭和57年度）　宮城県教育委員会
三宅　宗議（1975）：「混内山横穴古墳群」　宮城県三本木町教育委員会
埼玉県教育委員会（1972）：「鹿島古墳群」　埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
（1977）：「塚本山古墳群」　〃　Ⅵ
埼玉県遺跡調査会（1980）：「広木大町古墳群」　埼玉県遺跡調査会報告第40集
群馬県教育委員会（1981）：「東平井古墳群」　群馬県昭和55年度遺跡詳細分布調査実績報告書

２　住居跡・その他の遺構について

確認された住居跡25軒のうち精査を行った第６～10、14～16、18～20、24～28、30～35号住居跡の計22軒について考察を加える。

（１）出土土器について

出土した土器には土師器、須恵器、赤焼土器、施釉陶器がある。これらについて分類、整理して年代、性格について検討を加える。

○出土土器の分類

〔土師器〕

坏、高台付坏、耳皿、鉢、甕がある。

坏　56点ある。製作に際し、いずれもロクロを使用し、内面は総べてヘラミガキ、黒色処理され底部の切り離しは総べて回転糸切り離し痕がみられる。主に器形、細部の特徴によって以下のように分類される。

Ａ類　21点ある。器高が高く深い器形のものである。体部は内弯気味に外傾し口縁部はそのまま丸く収まるものと端部で軽く外反するものとがある。底部の器壁は厚いものが多く再調整の加えられるものは21点中２点のみである。底部は概して小さめで底部、体部の境は明瞭なものが多い。

Ｂ類　器高が低く浅い器形のものである。底部の大きさ、体部の形状により二類に分かれる。

ＢⅠ類：18点ある。口径に対して底径が大きく体部が直線的もしくはやや内弯気味に外傾するものである。口縁部は丸く収まるものが多く、端部で軽く外反するものも少数みられる。底部の器壁は概して薄く、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ再調整の加えられるものが多い。底部、体部の境は不明瞭なものが多い。

ＢⅡ類:17点ある。口径に対して底径が小さく体部が内弯気味に緩やかに立ち上がるものである。口縁部は端部で軽く外反するものが多く、そのまま丸く収まるものは少い。底部の器壁は概して厚く体部下端に手持ちヘラケズリ再調整が加えられるものも少数みられる。底部、体部の境は明瞭なものが多い。

高台付坏　６点ある。いずれも体部が内弯気味に緩やかに立ち上がり口縁部で外反するものである。台は総べて付け高台で、高く外方に強ふんばる形態のものである。器面調整は坏内面がヘラミガキ、黒色処理され、外面はロクロナデである。坏底部には回転糸切り離し痕が残るものが多いが、回転ヘラケズリ再調整が加えられるもの、菊花状のナデツケが加えられるものが少数みられる。

台付埦　１点だけある。体部から口縁部へ内弯して立ち上がり口縁部はそのまま丸く収まるものである。器内外面は総べてヘラミガキ、黒色処理されており底部には菊花状のナデ付けが加

えられている。台は低く内弯気味の形態である。

台付皿　１点のみである。体部が直線的に外傾し、体部、台部とも内外面へラミガキ、黒色処理されており底部は回転ケズリ再調整が施されている。台は低く内弯気味の形態である。

甕　製作に際し、いずれもロクロを使用したものである。法量により三類に分かれる。

Ａ類：口径24㎝前後器高35～40㎝の長胴の甕である。器形の全体形がわかるものでは高さ36㎝前後になるが完形品が少く器高のわかるものは少い。器形調整技法により三類に細分される。

ＡⅠ類：４点ある。口縁径が胴部最大径を上回るものである。胴部は砲弾型を呈し頸部で「く」の字状に屈曲し口縁部は直線的に外傾し端部は丸くおさまる。ロクロ成形後、外面胴部上位から底部までヘラケズリが加えられ内面にヘラナデが加えられるものもある。

ＡⅡ類：６点ある。口縁径が胴部最大径を下回るものである。完形品はないが胴部最大径が中位にあり倒卵型を呈するものであろう。口縁部は外反し端部は上方につまみ出され受口状になる。ロクロ成形後、外面胴部下半にヘラケズリが加えられ内面はヘラナデされるものが多い。胴部に粘土紐巻き上げ、タタキの痕跡の残るものもある。

ＡⅢ類：３点ある。口縁、胴部最大径がほぼ等しいものである。胴部は倒卵形を呈し、口縁部は強く外反し端部は外方につまみ出され受口状を呈する。器面調整は内面に横位のヘラミガキが加えられるという共通性をもち口縁部内外横ナデ、胴部外面へラナデ後上半に斜位のヘラミガキが加えられるものと、胴部外面にヘラケズリが加えられるものがある。

Ｂ類：口径20㎝前後、器高30㎝前後の中型の甕である。器形、調整技法により二類に細分される。

ＢⅠ類：２点ある。口径が胴部最大径を上回るものである。ずん胴で胴部下半で急激にすぼむ。口縁部は短かく外反し端部は上方につまみ出され受口状を呈する。ロクロ成形後胴部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデがそれぞれ加えられる。

ＢⅡ類：２点ある。口径、胴部最大径がほぼ等しいものである。底径は小さめであるが胴部最大径が下半にあるため安定感はある。口縁部は短く外傾し端部は上方もしくは外方に軽くつまみ出されている。ロクロ成形後、胴部外面にヘラケズリが加えられている。

Ｃ類：口径16㎝前後、器高10～13㎝の小形甕である。器形、調整技法により三類に分けられる。

ＣⅠ類：８点ある。口径が胴部最大径を上回るもの。胴部最大径が上位もしくは中位にあり口縁部は外反して端部が上方につまみ出されて受口状を呈する。内外面ともロクロ成形され、体部下端に回転ケズリが加えられるものもあるが再調整はほとんど加えられない。底部の観察できるものは総べて回転糸切り離し痕が残る。

ＣⅡ類：２点ある。器形的要素はＣⅠ類に一致するが調整技法において異なり、ロクロ成形後胴部外面に手持ちヘラケズリ、内面にヘラナデが加えられるものである。

ＣⅢ類：３点ある。口径と胴部最大径がほぼ等しいかもしくは上回るものである。胴部最大径は中位もしくは下位にあり口縁部は外反して端部が上方につまみ出されて受口状を呈する。内外面ともロクロ成形され再調整はほとんど加えられない。

鉢　１点ある。体部は内弯気味に外傾し口縁部は外反した後端部は丸くおさまる。底部中央部には丸く凹みがみられる。器面調整は口縁部横ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

鍋　１点ある。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反し端部は上方につまみ上げられている。器面調整は口縁部内外面ヘラミガキ、胴部外面はタタキ、ロクロナデ、体部下端にヘラケズリが加えられており、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

〔赤焼土器〕

坏、高台付坏がある。

坏　製作に際し、いずれもロクロを使用し底部はいずれも回転糸切り離し、無調整で器面調整は内外面ともロクロナデ調整によるものである。法量・器形により二類に分かれる。

Ａ類：７点ある。器高が高く体部が外傾し、口縁部で外反する。法量は土師器坏ＢⅡ類、須恵器坏Ｂ類にほぼ等しい。口径に対して底径が割合大きめである。

Ｂ類：３点ある。器高が低く体部は内弯し、口縁部で外反する。法量は土師器、須恵器の坏各類に比して小さい。口径に対して底径が小さめである。

高台付坏　１点ある。器形的には土師器高台付坏と共通する。器面調整は内外面ともロクロナデで底部は回転糸切り離し痕が残る。法量的には、土師器高台付坏よりも小さい。

〔須恵器〕

坏、壺、甕がある。

坏　総べて平底である。回転ヘラ切りのものが１点、他は総べて回転糸切り離しで再調整は全く加えられない。底部の切り離し方法、器形により分けられる。

Ａ類：１点ある。底部がヘラ切り無調整のもので口径に対して底径が55％あり、須恵器坏の中では最大値を示す。体部は直線的に外傾し、口縁部で外反する。

Ｂ類：底部が回転糸切り離し無調整のものである。体部は直線的もしくは内弯気味に外傾するものがある。底部の大きさにより二類に分かれる。

ＢⅠ類：18点ある。口径に対して底部が大きめのものである。体部は直線的もしくはやや内弯気味に外傾し口縁端部で軽く外反するものが多いが丸くおさまるものもある。

ＢⅡ類：５点ある。口径に対して底部が小さめのものである。体部は内弯して緩やかに立ち上がり口縁部は外反する。

壺　２点ある。完形品の（７住－$P_0$３）は口径21㎝、器高40.5㎝、体部最大径38㎝を測る。平

底で、体部は最大径が中位のやや上部に位置し全体的に丸みをもち、頸部は外反気味に外傾し口縁部は外反し端部が上下につまみ出されている。器面調整は口縁、頸部がロクロナデ、体部外面はタタキ後、体部下端にヘラケズリが加えられ内面はヘラナデが加えられる。（26住－７）は口縁～頸部の破片で口径12cmを測る。頸部外反気味に外傾し、口縁部は軽く外反して端部がつまみ出される。

甕　完成品はない。（15住－$P_0$13）は底部～体部下端の破片で、平底で体部下半にヘラケズリ、内面にヘラナデが加えられている。

〔緑釉陶器〕

第31号住居跡掘り方から稜埦の破片が１点出土している。外面中位に明瞭な稜が形成され稜以上は外反し、口縁外側に２対、もしくは４対の刻目が施される。また稜に対応する内面には一条の沈線が廻っている。内外面は横位のヘラミガキが加えられ、胎土は灰色できめが細かく硬質である。釉の色調は暗緑色で微細な嵌入がみられる。

〔灰釉陶器〕

第28号住居跡、第30号住居跡床面から出土している。細片で器形の判別はできないが、坏もしくは皿類になると考えられる。いずれも胎土は灰色できめ細かく硬質である。28住出土のものは体部下端の破片で高台の付く器形、30住出土のものは口縁部破片で内弯気味の体部から小さく外反し端部が丸くおさまる器形である。

○出土土器の組み合わせと年代

以上のように分類された土器の各住居跡ごとの出土状況は第４表のようにまとめられる。土師器坏、甕、はいずれも製作に際しロクロを使用するという特徴から東北地方南部地域の土師器編年における「表杉ノ入式」（氏家：1967）に比定されるものであり他の土器類もこれらとの共伴関係から「表杉ノ入式期」に属する土器群と考えられる。「表杉ノ入式期」はほぼ平安時代全般に対応するものと考えられているが、その中でも土師器坏を中心とした土器群の様相の相違からさらにいくつかの段階のあることも明らかになってきている。したがってここでは各住居跡の床面、カマド内堆積土、貯蔵穴状ピットなどから出土し、一定の共伴関係にあると考えられる土器群を中心にしてその組み合わせ、年代について考察を加えることとする。

〔組み合わせ〕

土師器坏の類型を各住居跡の出土状況でみた場合いくつかの住居跡では出土した坏の類型に一定のまとまりを示すものがみられる。さらにこれらに伴う須恵器、赤焼き土器のあり方にも異った点がみとめられる。これらの組み合わせ関係に基づき土器群を３グループに分けることができる。

住居番号	土師器																	赤焼土器			須恵器					緑釉	灰釉	鉄製品	土錘	ト石
	坏			高台付				甕								鉢	鍋	坏		高台付坏	坏			壺	甕					
	A	B						A			B		C					A	B		A	B								
		Ⅰ	Ⅱ	坏	埦	Ⅲ	耳Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ							Ⅰ	Ⅱ							
第6号住居			1					4				1									1	1								
第7号住居		1													1									1					1	
第8号住居			1								1	1																		
第9号住居			1																											
第14号住居	2	1	2	1					1																					
第15号住居	2	3							3	1			1									2	1							
第16号住居	1								1													+		1						
第18号住居			+															1+				+			+					
第19号住居		1	+	1					+			1				1		2	1+	+			+		+					
第20号住居	2																					1			1					
第24号住居	1	1	1	1+			1						1									2+								
第25号住居		6	2	+					1+					1								2+	1							1
第26号住居		1	1										1									3		1						
第27号住居	3		1							+				1	1													1		1
第28号住居	2									1												+					+			
第30号住居											1		4									10	2				+	1		
第31号住居	2	3	5+	2+	1	1												1	2+	1+			+		+	1		1		
第32号住居	3	1							+	1			1				1	+							+					
第33号住居	1			+					+									+				+			+				1	
第34号住居				1					+									+				+			+					
第35号住居		2		+					+									1+						1						
焼土遺構1	2																													
焼土遺構2																														
焼土遺構3									1									2	+	+			1		+					
	21	18	17	6	1	1	1	4	7	3	2	2	9	2	2	1	1	7	3	1	1	18	5	4	1	1	2	3	2	2

第4表　住居跡出土土器一覧表

第１グループ：須恵器坏Ａ類をもちこれに須恵器坏ＢⅠ類、土師器甕ＡⅠ類、ＢⅡ類が共伴する。第６号住居跡出土の土器群がこれにあたる。共伴する土師器坏はみられないが須恵器坏Ａ類、土師器甕ＡⅠ類は他の住居跡で出土しておらず明らかに他のグループの土器群と様相を違にしている。

第２グループ：土師器坏ＢⅠ類が主体となるグループである。これに土師器坏Ａ類、須恵器坏ＢⅠ類が伴う。甕は土師器甕ＡⅡ類、ＣⅠ類が共伴している。第15、24、25号住居跡出土の土器群がこれにあたる。土師器坏は底部が大きめで浅い器形のものが主で、底部付近に手持ちヘラケズリ再調整の加えられたものが再調整の加えられないものよりも多くみられる。須恵器坏は総べて回転糸切り無調整のもので底部は大きめのものからなる。これらに共伴する赤焼土器はみられない。

第３グループ：土師器坏Ａ類、ＢⅡ類が主体となるグループである。これに赤焼土器坏、土師器坏ＢⅠ類、須恵器坏が伴う。甕は須恵器甕が多くみられ、土師器甕ＡⅡ類、ＢⅡ類が共伴するものもある。第14、27、31号住居跡出土の土器群がこれにあたる。土師器坏は底部が小さめのものからなる。また無調整のものが多く再調整が加えられるものは極く少数である。共伴する須恵器坏は回転糸切り無調整で底部は小さめのものである。また第１、２グループにみられない赤焼土器坏も共伴する。

以上のような各グループの土器群の様相について主に本遺跡と同様宮城県北部に位置する遺跡の表杉ノ入式期の土器群と比較しそれらの位置付けを試みたい。

まず第１グループ（第６号住居跡出土土器）では須恵器坏において、底部が回転ヘラ切りのものと回転糸切りのものとが共伴している。回転糸切りと回転ヘラ切りのものが共伴する例として本遺跡の南約１㎞に所在する色麻町上新田遺跡第１号住居跡出土土器をあげることができる（小井川：1981）。上新田第１号住居跡では住居跡に伴うと考えられる土器として土師器甕18点、小型鉢１点、須恵器坏11点、高坏１点、高台付坏１点、高台付皿１点、鉢１点、蓋２点、壺２点、赤焼土器坏３点がある。このうち須恵器坏は回転糸切りが７点、回転ヘラ切りが３点、切り離し不明のものが１点含まれている。土器の特徴としてヘラ切りのものは概して器厚が薄く口縁部がわずかに開くのに対して、糸切りのものは器厚が厚く体部から口縁部にかけて直線的に外傾することが指摘されている。以上のような須恵器坏にみられる糸切り、ヘラ切りの共伴、土器の特徴などの要素は本遺跡の第６号住居跡出土のものに極めてよく一致するものである。また共伴する土師器甕についても、頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部が直線的に外傾するという類似した特徴を示している。したがって本遺跡の第６号住居跡出土土器は上新田第１号住居跡出土土器にほぼ対応する時期のものと考えられる。

次に第２グループについてみると、ＢⅠ類を主体とする本グループの土師器坏の特徴は以下

のようにまとめられる。

①体部が直線的もしくは内弯気味に外傾し口縁部は丸くおさまるものが多いこと。

②底部の器壁は概して薄く体部、底部の境が不明瞭なものが多いこと。

③体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ再調整を加えるものが無調整のものよりも多くみられること。

これらに類似した土師器坏を主とする土器群の例としては、栗原郡高清水町西手取遺跡第３、４号住居跡出土土器（早坂・阿部：1979）、同郡築館町佐内屋敷遺跡第28号住居跡出土土器（森：1983）などがあげられる。しかし、これらの土師器坏には本遺跡の第２グループにはみられない回転ヘラケズリ再調整が加えられるものが含まれること。また共伴する須恵器についても佐内屋敷遺跡第28号住居跡では回転ヘラ切り離しによるものが含まれる点で異っている。したがって土師器坏の特徴、赤焼き土器坏の共伴が確認できないなどの点では一定の共通性を示しながらも、本遺跡の第２グループの土器は上記の各住居跡出土の土器群よりは一段階新しい要素をもつものと考えられる。

第３グループについてみると、A類、BⅡ類を主体とする本グループの土師器坏の特徴は以下のようにまとめることができる。

①体部は内弯気味に緩やかに立ち上がり口縁端部で軽く外反するものが多い。

②底部の器壁は概して厚く体部、底部の境は明瞭なものが多い。

③再調整が加えられるものは極く少数で、住居跡によっては無調整のものだけからなるものもある。

これらに類似した特徴をもつ土師器坏を主とする土器群の例としては、高清水町五輪C遺跡第５号住居跡出土土器（小野寺：1979）、同町手取遺跡第３号住居跡出土土器（早坂・阿部：1979）、佐内屋敷遺跡第33号住居跡出土土器（森：1983）があげられる。このうち五輪C遺跡第５号住居跡出土土器、佐内屋敷第33号住居跡出土土器は本遺跡第３グループの土師器坏とほぼ同様の土師器坏をもつものであり同一段階の土器として位置付けられる。これに対して手取第３号住居跡出土の土師器坏は、口縁端部が外反し底部は厚手で体部、底部の境が明瞭なものだけからなり、さらに再調整が全く加えられないことなどから、第３グループの土師器坏よりは一段階新しい要素をもつものと考えられる。

これらのうち手取、西手取遺跡においては土器群を２群に分け、それらに含まれる土師器坏について「製作技法の手数の省略化」という観点から再調整が多く加えられる第１群土器が第２群土器に先行するものと考えた。さらにこれら両群の土器群は増改築された手取第４住居跡において第１群土器が増・改築前の第４B住居跡に、第２群土器が増改築後の第４A住居跡にそれぞれ伴って出土していることから両者の前後関係は具体的な遺構の重複関係によって明ら

かにされている。上記の西手取第３・４号住居跡出土土器は第１群土器に含まれ、手取第３号住居跡出土土器は第２群土器に含まれる。

西手取、手取遺跡における土器群の前後関係は本遺跡の第２グループから第３グループへの土師器坏を中心とした土器の変遷過程を考える上で参考になる。すなわち本遺跡における第２、３グループの土師器坏の特徴、類型の組み合せは一定の共通性をもち、ほぼ連続的な土器の変遷過程を示すと考えられる。これに対し西手取、手取遺跡の第１、２群土器の間には時期差が想定されている。本遺跡の第２、３グループは西手取、手取遺跡の第１群土器から第２群土器への連続的な変遷を示す、中間の土器群として位置付けることができよう。

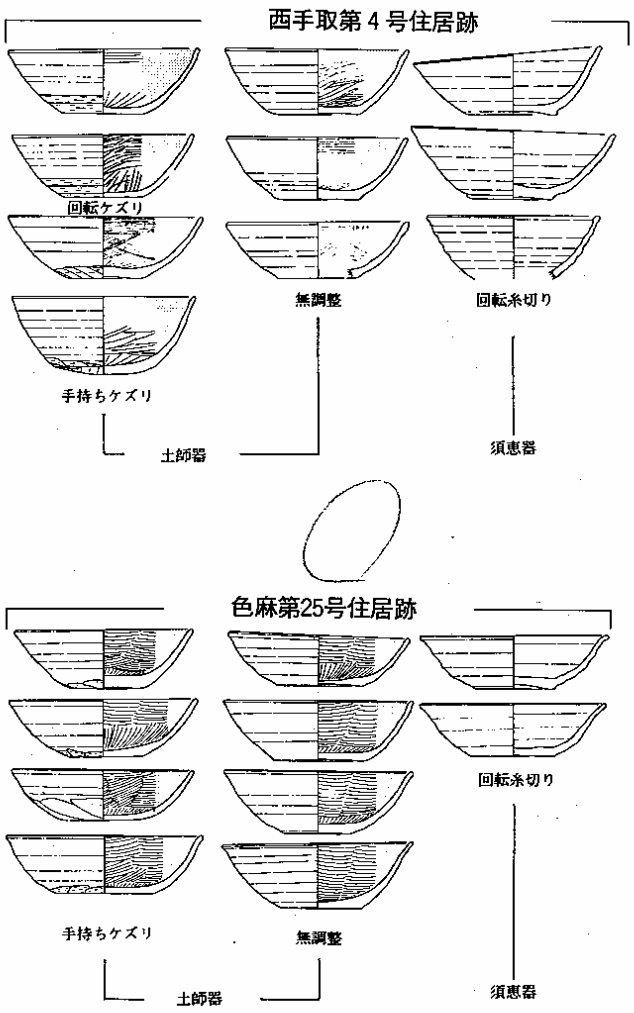
なお、須恵器坏、赤焼土器坏の共伴関係についてみても西手取、手取遺跡では第１群土器には少量の須恵器が伴うのに対し赤焼土器は伴わず、第２群土器には須恵器、赤焼土器が共伴することが指摘されている。本遺跡において赤焼土器坏が第２グループでは共伴が確認されず第３グループで共伴が確認できることと類似した傾向を示すものと考えられる。

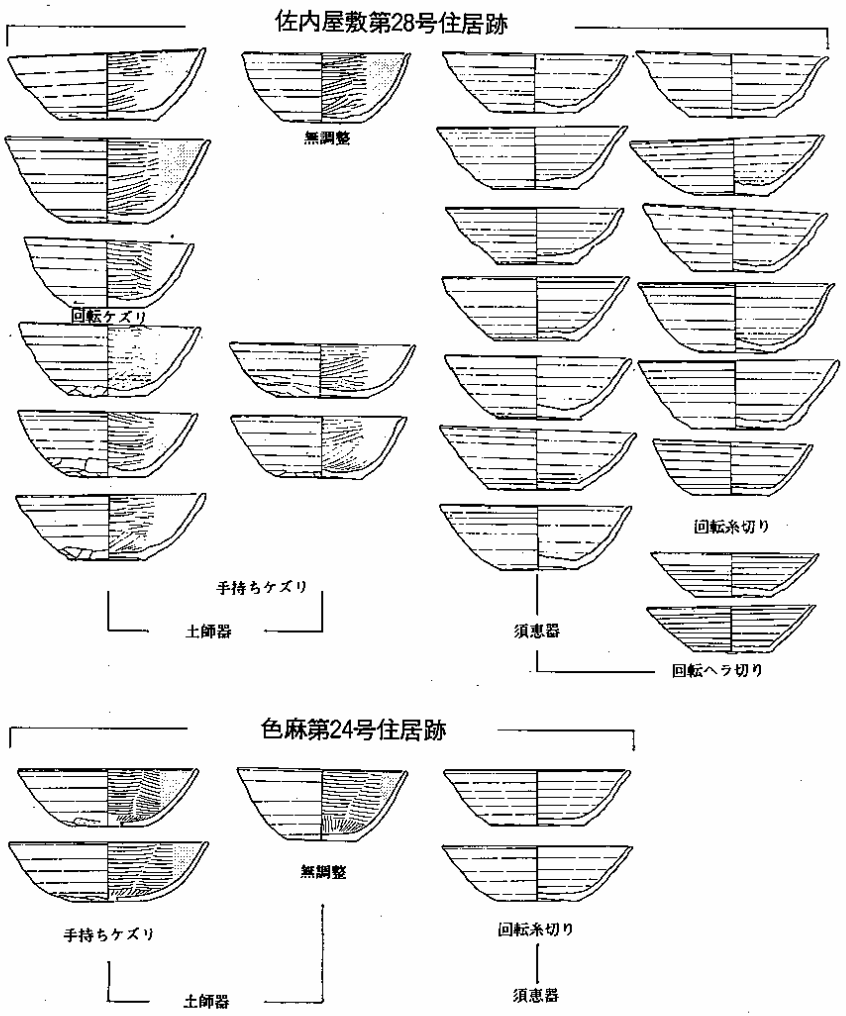
最後にこれらの年代的位置付けを試みる。

上新田第１号住居跡出土の須恵器高台付皿の類例が栃木県三通窯跡出土土器のなかに見出せる。三通窯跡については８世紀後半～９世紀の操業年代が想定されており、同住居跡出土土器は「平安時代でもより遡った時期」に位置付けられている。本遺跡の第６号住居跡出土土器についてその年代を直接推定できるものはないが、上新田第１号住居跡出土土器との対応関係から平安期でもより遡った時期に位置付けられるものと考えられる。

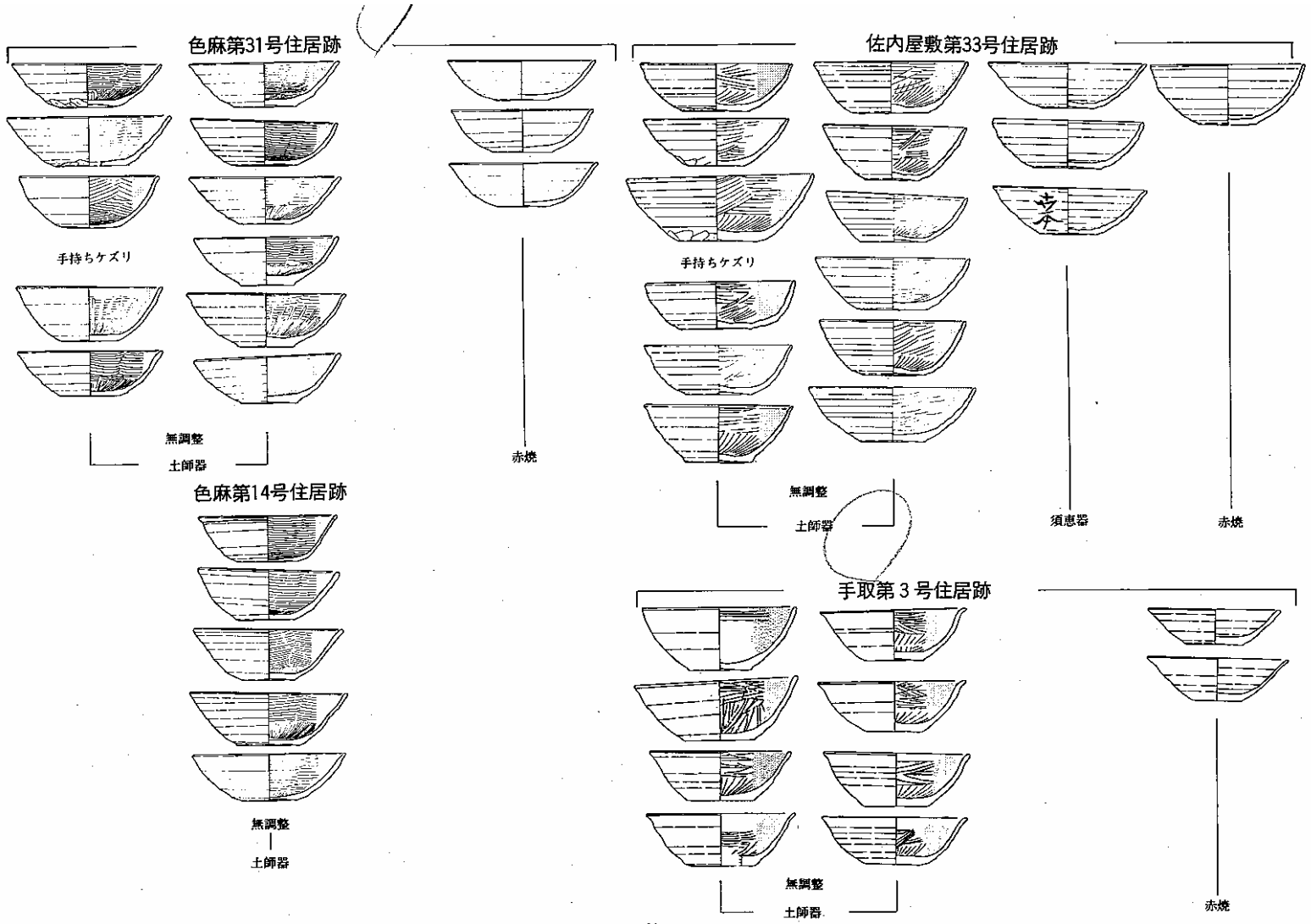
第３グループの土器を伴う第31号住居跡の掘り方埋土からは緑釉稜埦が出土している。愛知県猿投窯跡群においては９世紀後半に比定される黒笹14号窯で緑釉陶器の生産が確認されるが生産量は多くないとされる。10世紀前半代の黒笹90号窯式から黒笹89号窯式にかけては緑釉陶器の生産が最も活発化する時期とされ出土する緑釉素地は埦が主体となる黒笹90号窯から稜埦が主体となる黒笹89号窯への推移が考えられている。一方10世紀後半に比定される折戸53号窯式では緑釉陶器の生産は激減するものと考えられている（斉藤：1982）。本遺跡出土の稜埦をこれら各窯跡出土資料と直接対比することはできない。しかし本遺跡周辺における施釉陶器のあり方が明確でない現時点では、本遺跡出土の稜埦が体部中位の稜が明瞭で器壁が薄く浅い器形のものであるなどの特徴をもつことからその年代的位置付けには10世紀前半の黒笹89号窯跡出土資料が最も参考になるものと考えられる。したがって第31号住居跡によって代表される本遺跡第３グループの土器群の上限年代についてはこの緑釉稜埦からみて10世紀前半の年代が想定されよう。

さらに第３グループの土器群の下限については、やや地域は異なるが宮城県南部の名取市安久東遺跡第２号住居跡出土土器（土岐山：1980）が参考となる。安久東遺跡第２号住居跡に伴


西手取第４号住居跡
回転ケズリ
無調整
回転糸切り
手持ちケズリ
土師器
須恵器
色麻第25号住居跡
回転糸切り
手持ちケズリ
無調整
土師器
須恵器

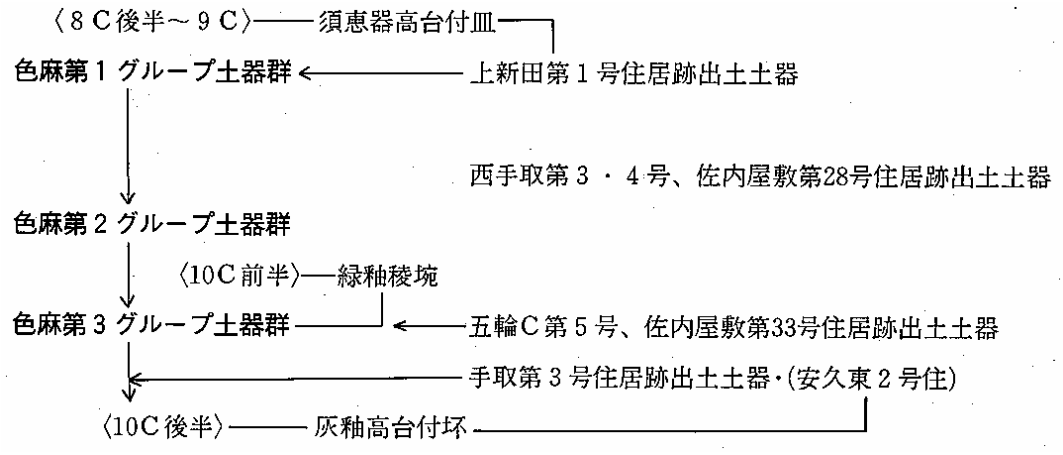

佐内屋敷第28号住居跡
無調整
回転ケズリ
回転糸切り
手持ちケズリ
土師器
須恵器
回転ヘラ切り
色麻第24号住居跡
無調整
手持ちケズリ
回転糸切り
土師器
須恵器

第88図


色麻第31号住居跡
手持ちケズリ
無調整
土師器
赤焼
色麻第14号住居跡
無調整
土師器
佐内屋敷第33号住居跡
手持ちケズリ
無調整
土師器
須恵器
赤焼
手取第３号住居跡
無調整
土師器
赤焼

第89図

う土器は土師器坏12点、同甕３点、須恵器坏３点、赤焼土器坏９点である。このうち土師器坏についてみると、その特徴は、再調整が全く加えられないなどの点で、先述した手取第３号住居跡出土土器に極めて類似しており、本遺跡の第31号住居跡のものがより古い要素をもつものと考えられる。安久東遺跡第２号住居跡の住居内堆積土からは折戸53号窯に併行する灰釉高台付坏が出土しており同住居跡出土土器の下限については10世紀後半が考えられる（斎藤：1982）。したがって本遺跡の第３グループの土器の下限の年代は10世紀代に求めることができる。以上の本遺跡における第１～３グループの土器の位置付けは以下のようにまとめることができる。



（３）遺構の構造、性格、年代について

今回確認された竪穴住居跡、焼土遺構、畑跡、掘立柱列についてその構造を検討し、遺構の性格、年代について考えてみたい。

○竪穴住居跡

精査を行った22軒のうち第10号住居跡を除く21軒から土器類が出土している。土器類の特徴からこれらはいずれも平安時代に属するものと考えられる。さらに平安時代の中でも時期差がみとめられるものもあるが大きくみた場合、９～10世紀代の平安時代前半期を中心とした住居跡群・集落跡と考えることができる。住居跡の分布状況をみると、地蔵堂地区に15軒、新宿二番地区に３軒、栗木地区に４軒みられる。これら三地区が地形的にまとまりをもつことはすでに述べたが、住居跡の分布もまた各地区ごとにまとまりを示していると考えられる。さらに、住居跡の方向をみると地蔵堂地区のものはいずれも真北からやや西偏しているのに対し栗木地区、新宿二番地区のものはやや東偏しており上記各地区の住居跡群は別個の集落として捉えることもできよう。

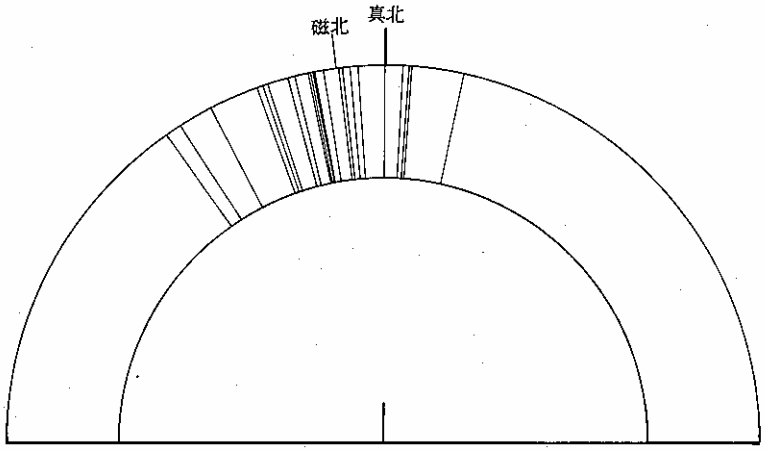
以上のような年代、広がりをもつ集落としての住居跡群の各住居跡の構造をみてゆく。住居平面形は長方形を呈するものと方形を呈するものとがほぼ同数みとめられる。両者はカマドの

位置、柱穴においてやや異なった傾向を示している。まず長方形を呈するものでは長軸はいずれも南北方向にありカマドは住居東辺につくものが多く柱穴は壁柱穴をもつものがみられる。これに対し方形を呈するものではカマドが住居南辺につくものが多く、柱穴は住居対角線上にあるものがみられる。方形を呈する住居は第２グループの土器を伴うものが多く、長方形を呈する住居は各グループの土器を伴っており住居構造が時期により異なった傾向を示していると考えることもできる。しかし部分的な調査であるためこれを遺跡全体の傾向として捉えるには十分ではない。次に住居内諸施設についてみると周溝のあるもの（第27号住居跡）、貼り床のあるもの（第15、19、24号住居跡）、貯蔵穴状ピットのあるもの（第15、19、24、30、31、32住居跡）などがみられる。これらの施設は少数の住居跡にみられるもので多くの住居跡ではカマド以外の施設はみられない。カマドは第18、34号住居跡を除き総べての住居跡にその構築がみられる。ただしカマド本体が失われているものも少くない。

確認された貯蔵穴状ピットのうち底面がすり鉢状をなすものはカマドに向って右隣りにあるという規則性がみられる。これらは第19号住居跡のように土手を廻らすものもみられ須恵器大甕の捉え方と考えられる。一方底面が平坦なものは第32号住居跡にのみみられるが、その堆積土中にはもみがら状、わら状の炭火物層が確認されており上記のものとは性格が異なると考えられる。

カマドは先にも触れたが、住居の南辺、東辺に位置するものが多い。これは本地域が冬期を主にして北西風が強いことに関連するものと考えられる。

カマド本体の確認されたものは、その多くが偏平な河原石を粘土で固定して燃焼部側壁を作り出しており天井部前端に横長の河原石が架構されたものも多くみられた。燃焼部底面は浅く掘り窪められ、その中央に棒状の石が支脚として立てられ、その上に土師器の坏、甕が伏せられたものも多くみられた。煙道は地山を掘り抜いて作られており先端部がピット状になり煙り



第90図　住居跡方位

出しが明瞭に確認できるものもあった。

住居床面は、部分的な掘り方、貼り床をもつものが数例みられるが大半は住居掘り方底面を床面としている。これは住居掘り方底面が地山中の礫層の直上に位置していることに関連するものと考えられる。住居床面は礫層直上にあるため安定しておりさらに透水性もよいことから周溝を設ける必要もほとんどなかったものと考えられる。同様のことは柱穴についても考えられ大半のものは直柱により上屋を架構したものと推定される。

住居の改築が確認されたものはないが、各住居の床面積には大きな差がある。10㎡未満のものは５軒でこのうち極端に小さい第18、34号住居跡にはカマドがない。10㎡～20㎡のものは７軒、20㎡～30㎡のものは６軒で、第24号住居は極端に大きく約42㎡の床面積をもつ。

○焼土遺構

住居に伴わない土壙で、堆積土に焼土、木炭の層を含むものを焼土遺構として一括した。

第１、２号は平面形が楕円形を呈し、長軸約２m、短軸1.2mで底面はすり鉢状となるもので、確認面からの深さは約80cmを測るものである。いずれも第20号住居跡を切って作られていることと、堆積土から出土した土師器が住居出土のものと大きな特徴の違いをもたないことから住居跡同様ほぼ平安時代前半期のものと考えることができる。第１号の炭化物層から出土した骨粉は微量で鑑定不能であったが、土壙の規模、堆積土の状況からみて火葬に関係した施設としての性格が考えられる。

第３号焼土遺構は長さ1.8m、幅0.4m、深さ0.3mの溝状の土壙である。第28号住居跡を切って作られていることと、堆積土出土の赤焼土器の特徴から大きくみて平安時代に属するものと考えられる。

堆積土第１層の焼土層中に火はねした石やスラグなどが含まれていることからみて鍛冶遺構などの強い火力を要する遺構に関連する施設であったと考えられる。

○畑跡

新宿一番地区、地蔵堂地区などで検出された。畝間には灰白色火山灰が堆積しておりこれらの畑は灰白色火山灰の降下によって放棄されたものと考えられる。したがって畑の年代としては第３グループ、もしくは第２グループの土器を伴う住居跡群とほぼ同一段階のものと考えられる。部分的に残存しているため地割などの検討は行えないが、畝の方向がまちまちであることからみれば整然とした地割を想定するのは困難であろう。

○掘立柱列跡

第31号住居跡の西辺に平行することから第31号住居跡に関連した施設かと考えられる。

最後に住居跡内堆積土、畑畝間堆積土などにみられる灰白色火山灰について検討を加えたい。今回の調査では第14、27号住居跡床面直上、畑の畝間に灰白色火山灰層が確認された。これらの灰白色火山灰は昨年の調査において第77号墳周湟堆積土第４層、上部畝状遺構畝間堆積土で確認された灰白色火山灰と同一のものと考えられる（古川：1983）。これらについては土壌分析の結果（庄子、山田：1982）古川市衰口沼泥炭層中で検出された灰白色火山灰と同一のものとされた。

本遺跡における一連の調査結果からみると上記の灰白色火山灰の降下は、本遺跡の第３グループ土器群段階に位置付けることができる。第３グループの土器群の年代としては第１、２グループとの関係からおよそ10世紀代に位置付けられ、さらに緑釉稜埦から10世紀前半を中心とした年代が想定された。したがって灰白色火山灰の降下も10世紀前半頃の年代が考えられる。

ところで灰白色火山灰については上記衰口沼泥炭層におけるＣ14年代測定により「約800年ＡＤよりも新しい。」（庄子、山田：1979）とされ、その分布は宮城県北部を中心とした地域に分布することが指摘されている。仙台市陸奥国分寺での七重塔焼失との関係などからこの火山灰について10世紀前半頃の降下年代を与える見解も示されている（白鳥：1980）。本遺跡における灰白色火山灰のあり方はこの見解に矛盾しない。一方宮城県北部に位置する糠塚遺跡、御駒堂遺跡における住居跡内堆積土の観察から灰白色火山灰の降下回数、年代について問題も提起されている。今回の調査で確認された灰白色火山灰については各遺構との関係、土器の年代などから上述したように10世紀前半頃に降下した同一の火山灰と考えることができた。しかし第３グループの土器を伴う第19号住居跡の最上層には火山灰起源の黒ボクと考えられる層が確認された。この土層は第77号墳周湟の灰白色火山灰層の上部でも確認されており明らかに上記の灰白色火山灰とは異るものである。同様の例は黒川郡大和町中峰遺跡でも確認されている。このことは複数回の火山灰の降下の可能性を示唆するものと考えられ灰白色火山灰の降下回数、年代を多くの遺跡で固定的に扱うことができないことを示している。

引用･参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

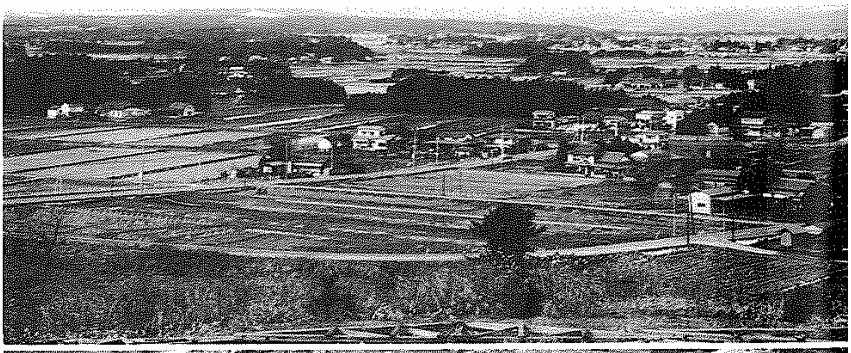
岡田・桑原（1974）：「多賀城周辺における古代坏型土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所

加藤道雄（1979）：「藤屋敷遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ　宮城県教育委員会

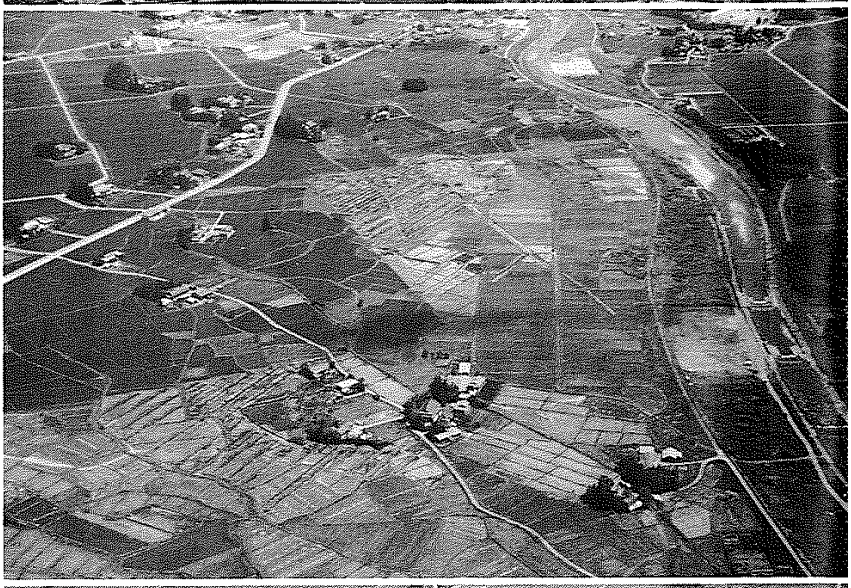
桑原滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯　東北史学会
小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」　宮城県教育委員会
〃　（1982）：「御駒堂遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ　〃
斎藤孝正（1982）：「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』№211
ニューサイエンス社
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅵ　宮城県多賀城跡調査研究所
土岐山武（1980）：「安久東遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書（4）　宮城県教育委員会
早坂・阿部（1979）：「西手取・手取遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ　〃
古川一明（1983）：「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
(昭和57年度)　〃
森　貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ　〃
庄子・山田（1979）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」　宮城県多賀城跡調査研究所
『宮城県多賀城調査研究所年報』1979
〃　（1983）：「色麻古墳群土壌の分析結果」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
－色麻古墳群－（昭和57年度）　宮城県教育委員会

写　真　図　版

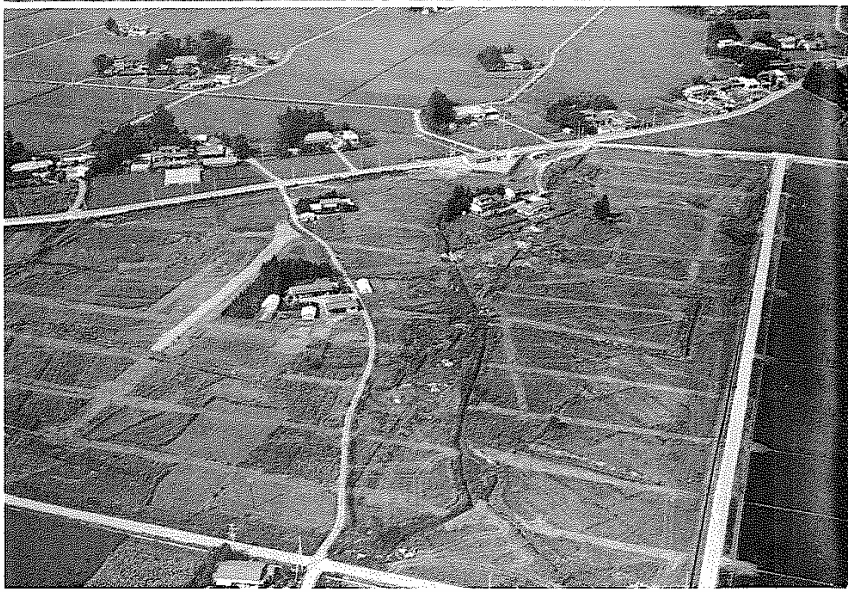
遺跡遠景
（南東より）



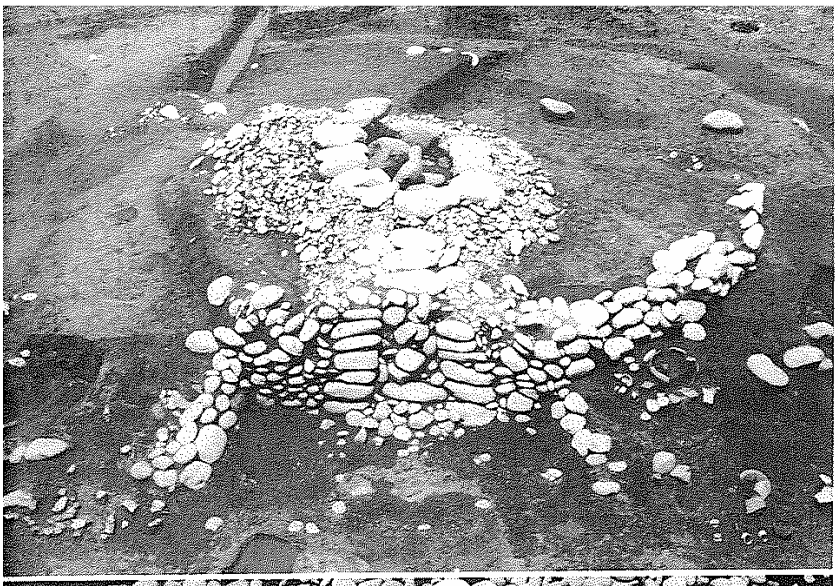
遺跡遠景
（西方上空より）



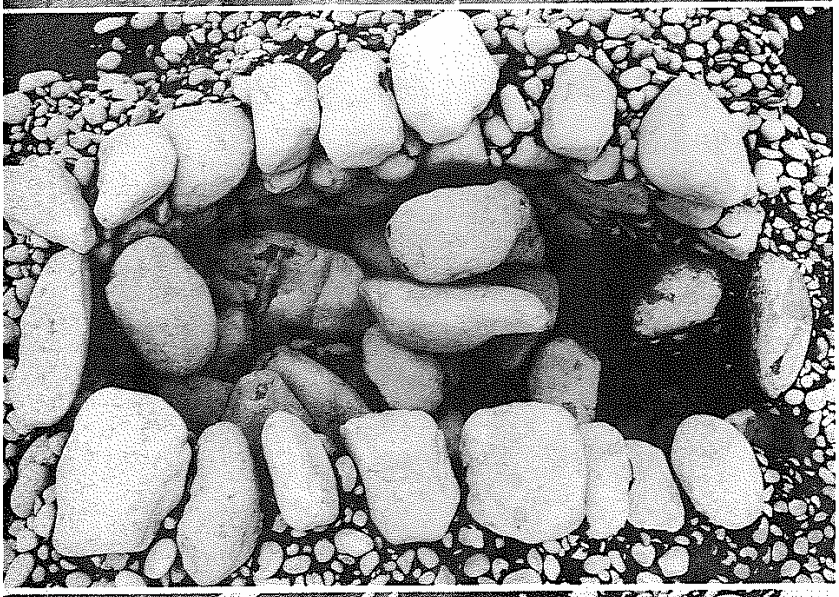
調査対象地区
（南上空より）



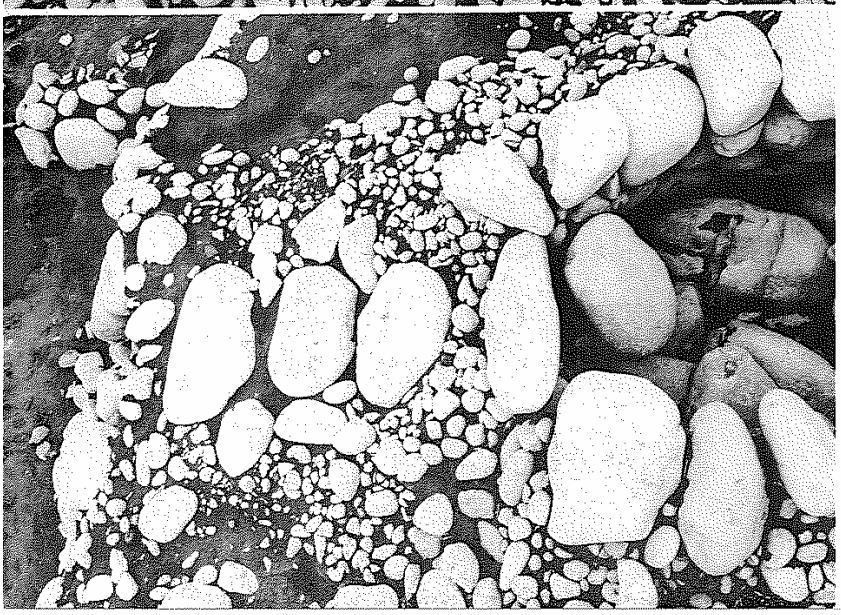
図版 1



第24号墳　全　　景



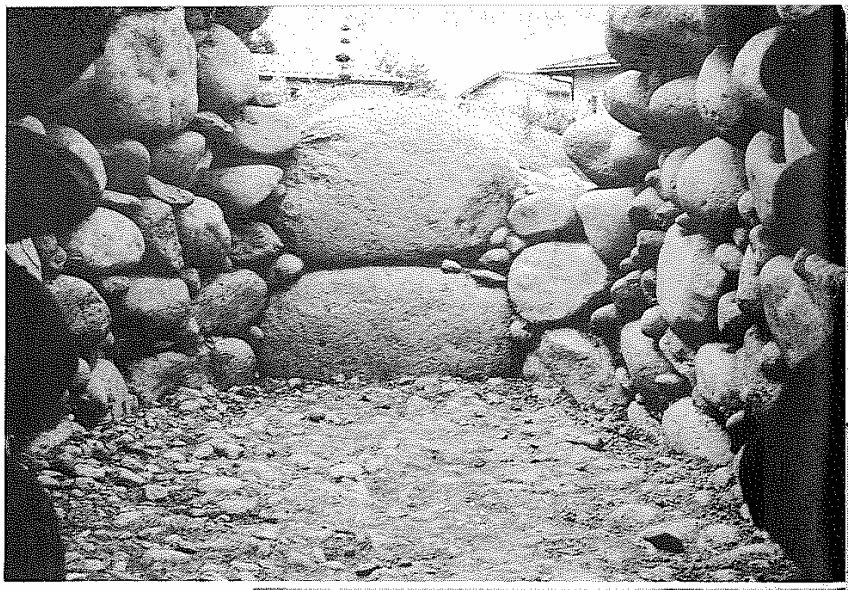
第24号墳　玄 室 部



第24号墳　羨 道 部

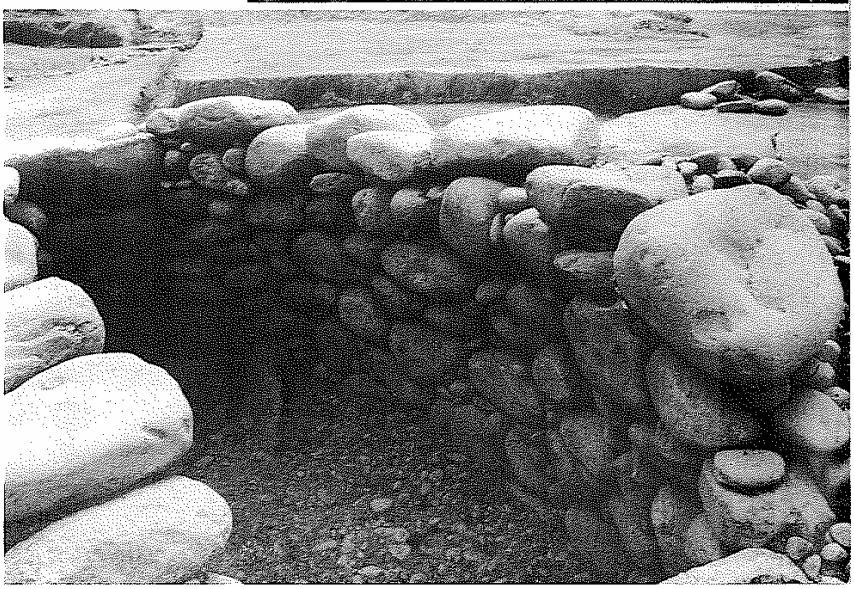
図版２

第24号墳　奥 壁 部



第24号墳　玄 門 部

第24号墳　側　　壁



図版３

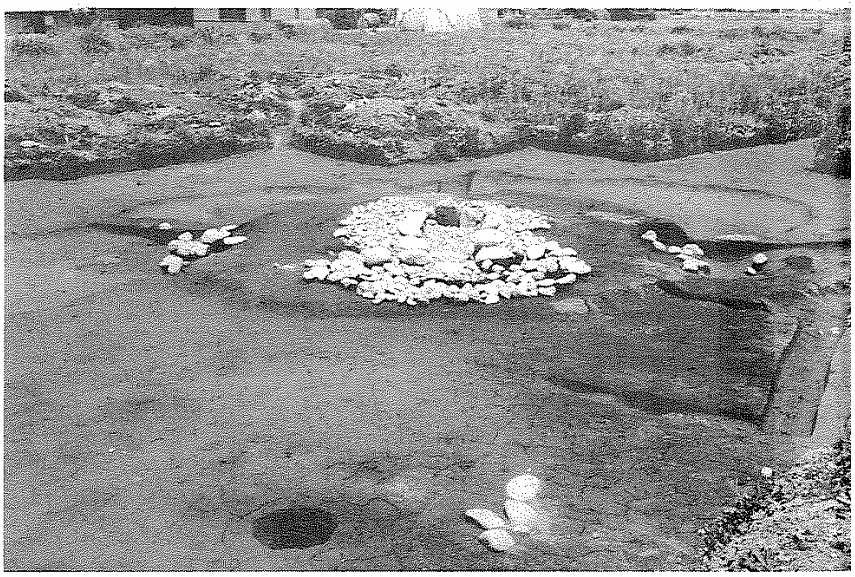
第24号墳　前 庭　部

第24号墳
西側テラス遺物出土状況

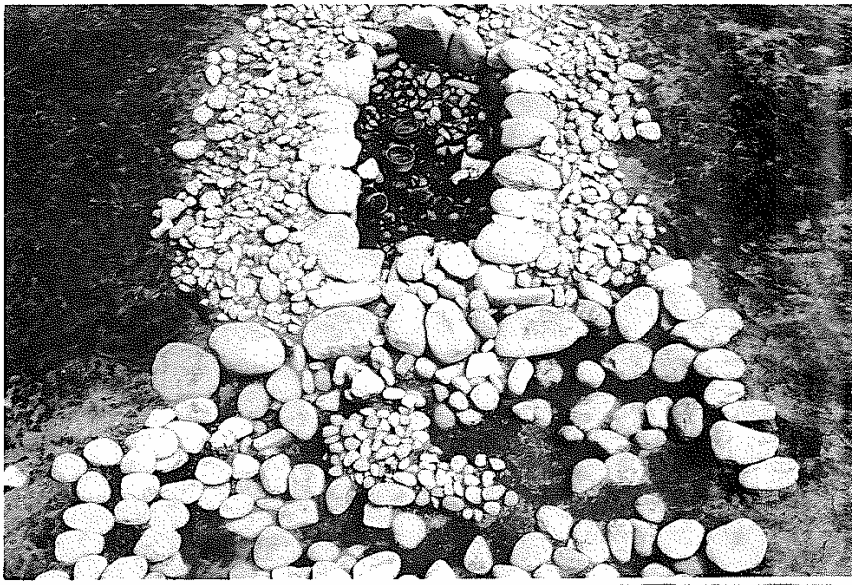
第24号墳
東側テラス遺物出土状況

図版４

第106号墳　全　　景

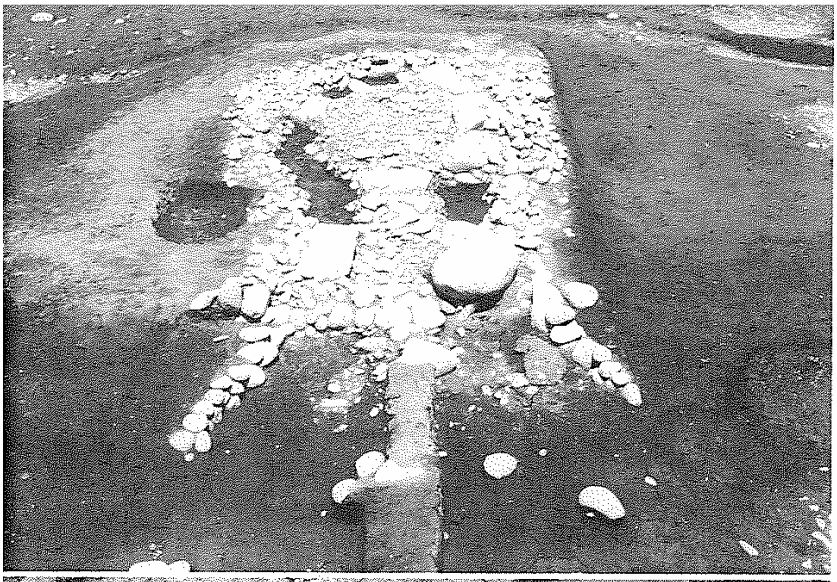


第106号墳　石　　室

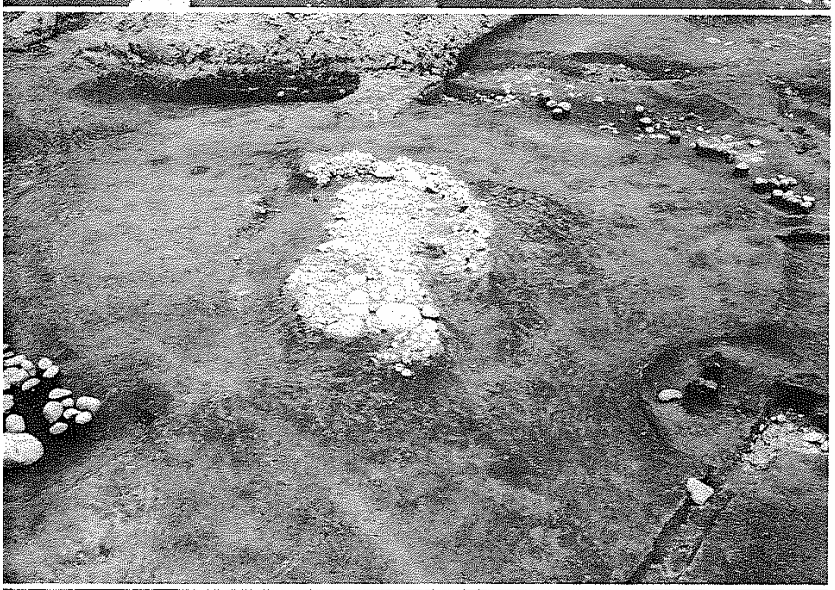


第106号墳
玄室遺物出土状況

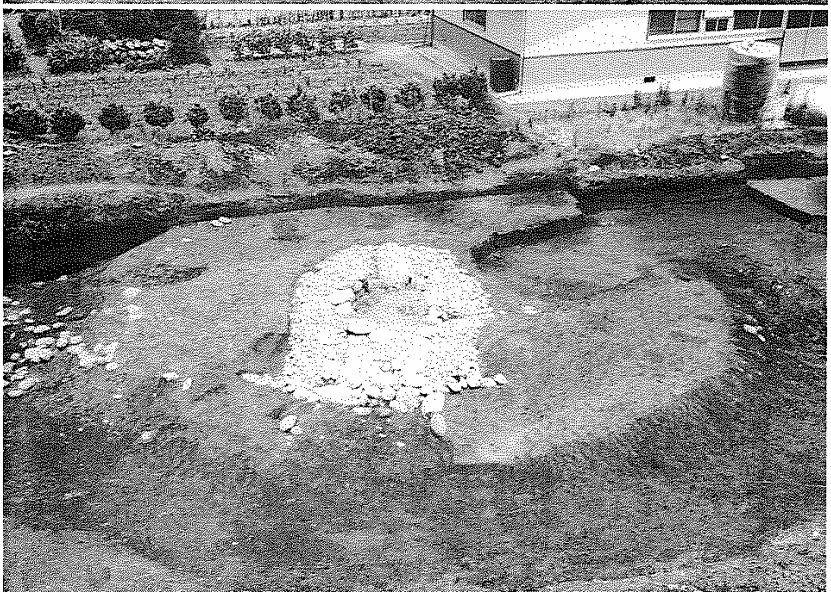
図版 5



第107号墳



第108号墳

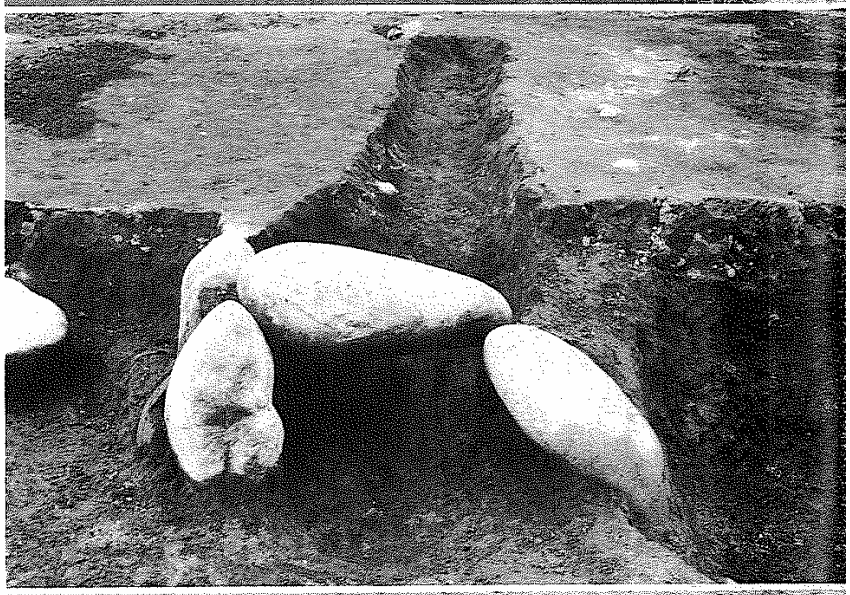


第109号墳

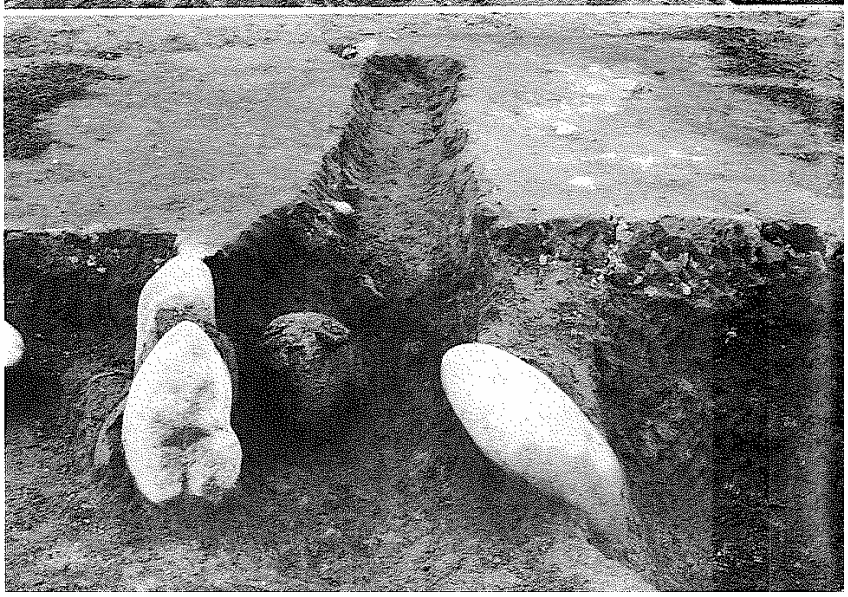
図版 6

第19号住居跡

第19号住居跡　カマド
（天井石除去前）



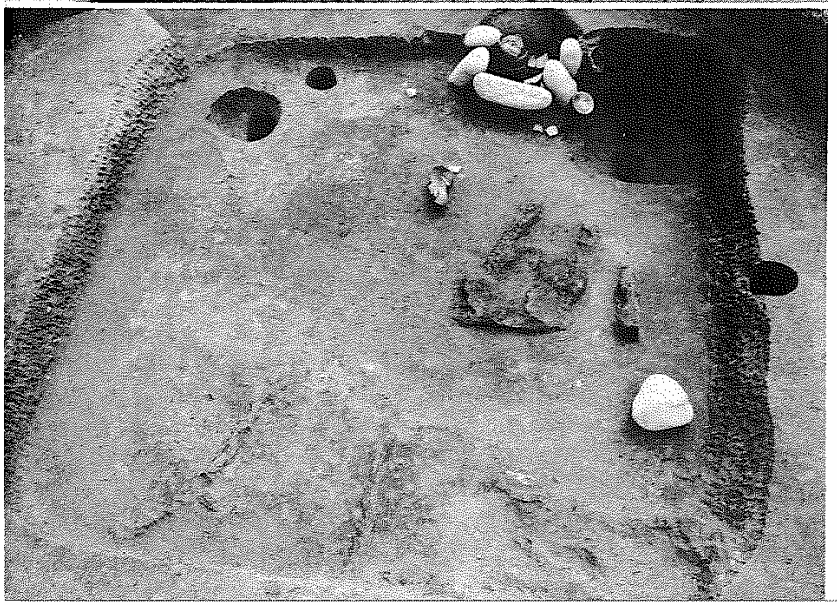
第19号住居跡　カマド
（天井石除去後）



図版７

第25号住居跡

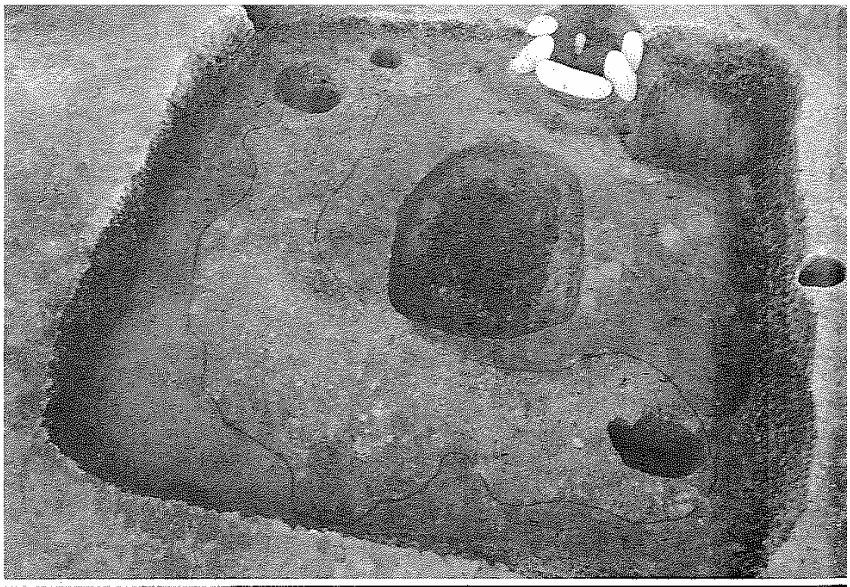
第25号住居跡　カマド



第30号住居跡
（炭化材除去前）

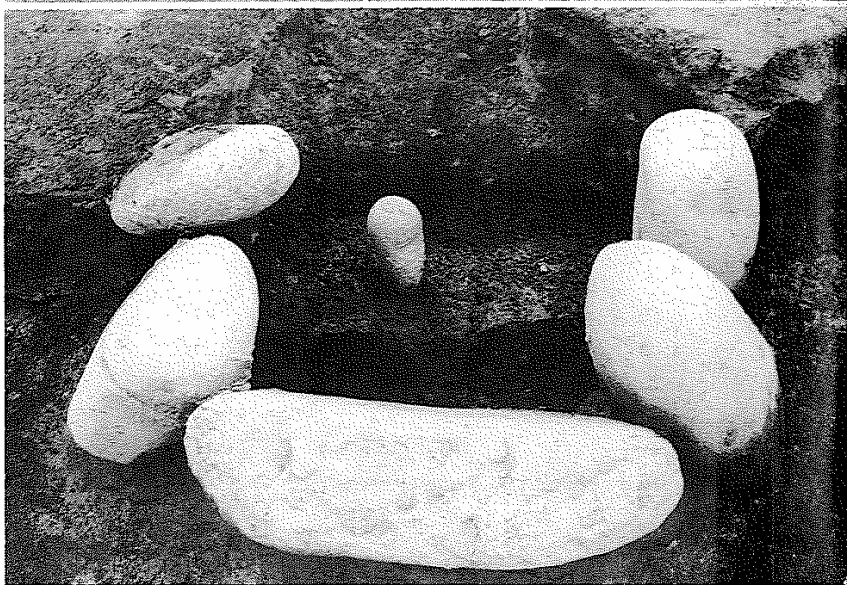
図版８

第30号住居跡
（炭化材除去後）

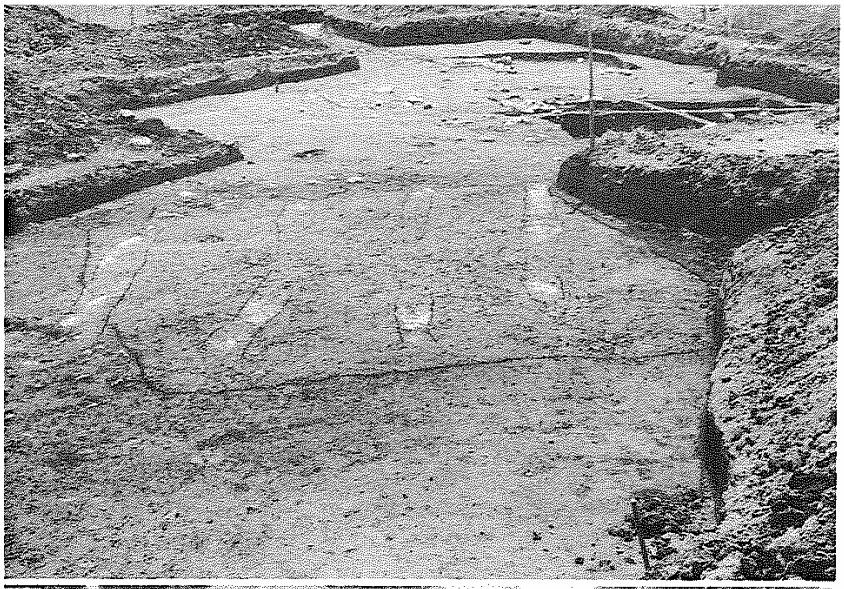


第30号住居跡　カマド
（遺物取り上げ前）

第30号住居跡　カマド
（遺物取り上げ後）

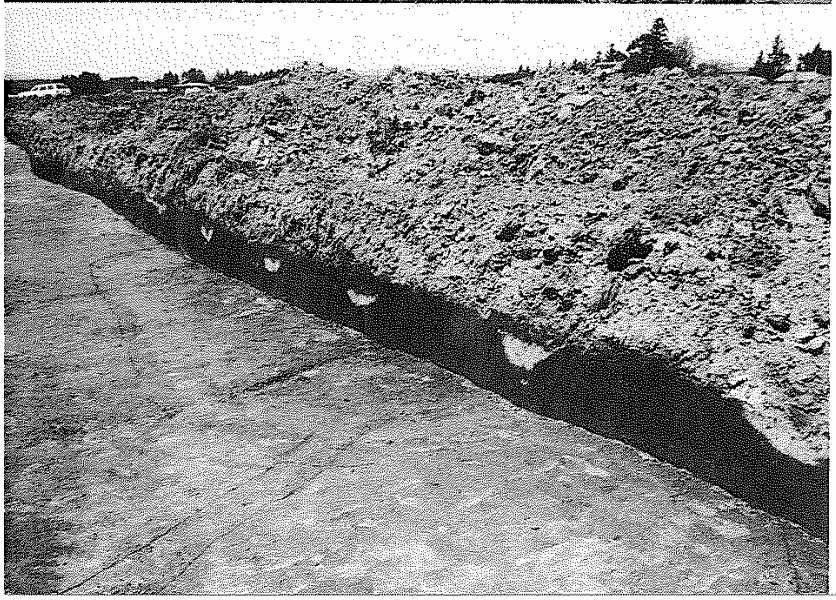


図版９



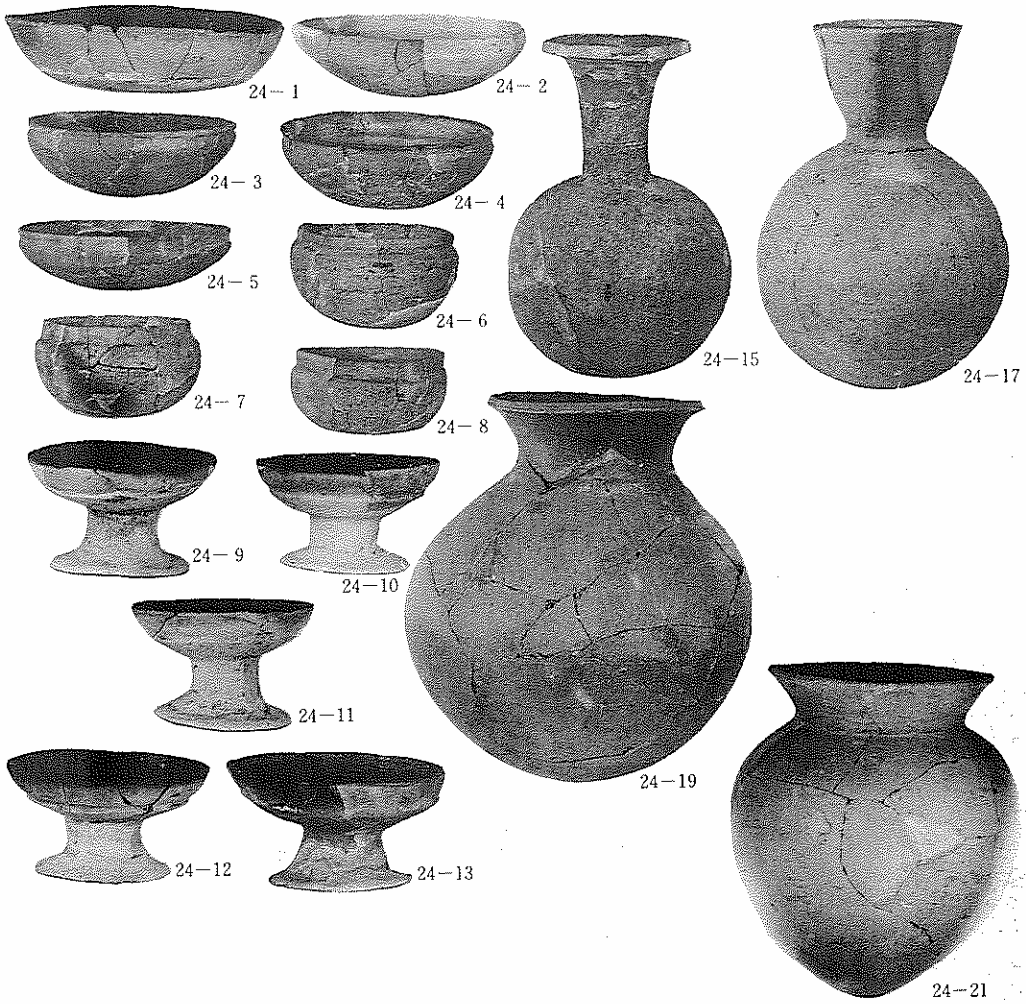
畑跡（地蔵堂地区）

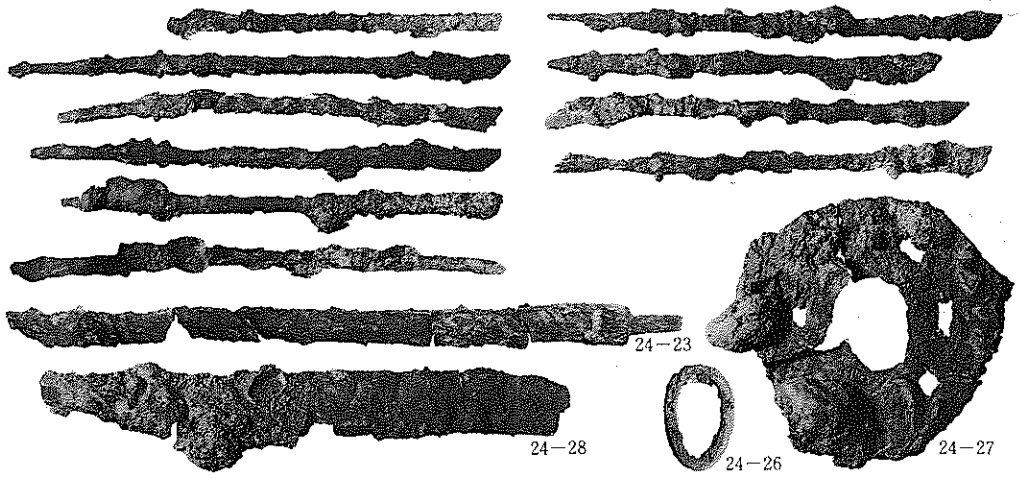
畑跡（新宿一番地区）



畑跡断面（深山地区）

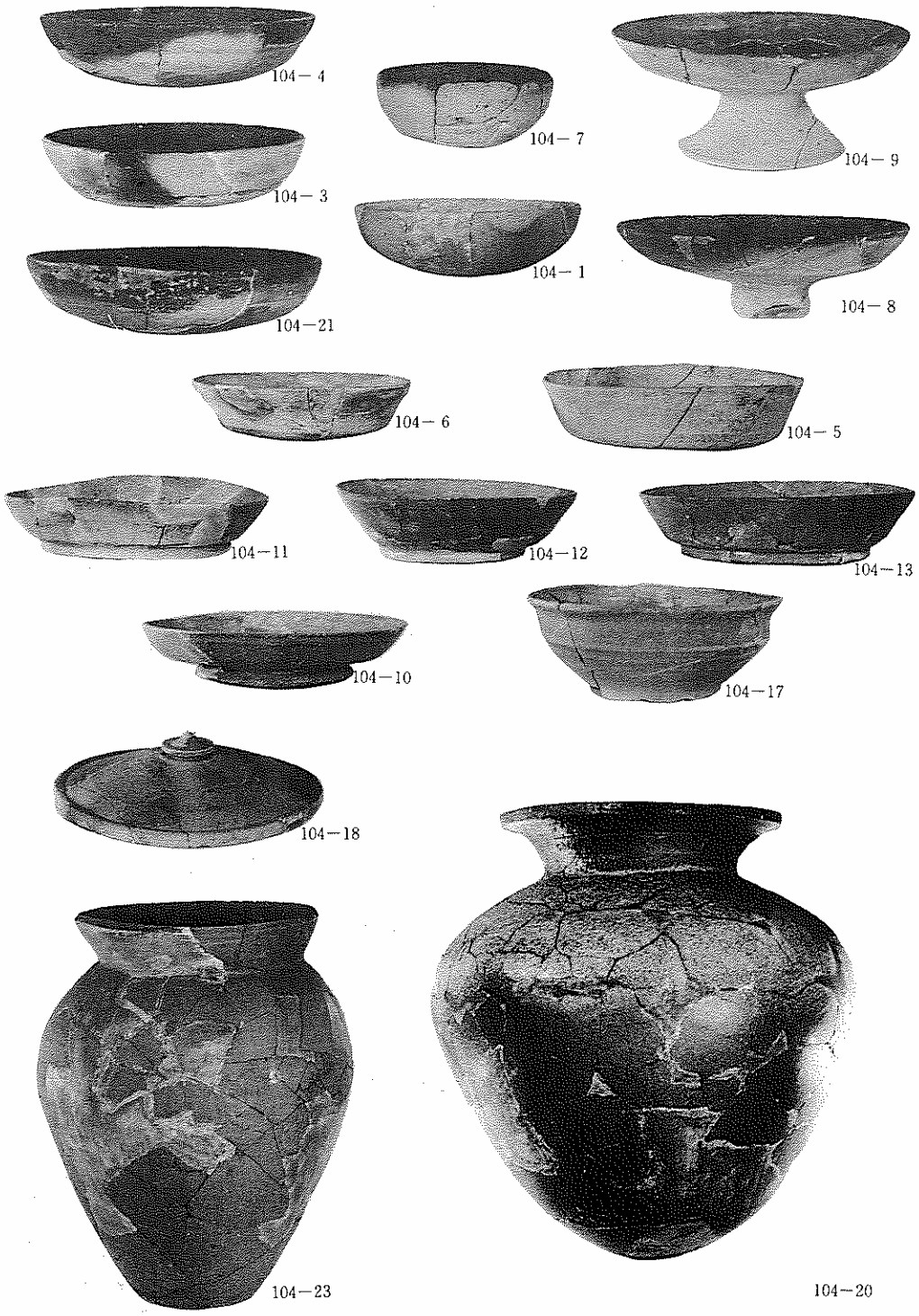
図版10





図版11　第24号墳出土遺物

（縮尺不同）
番号は登録No

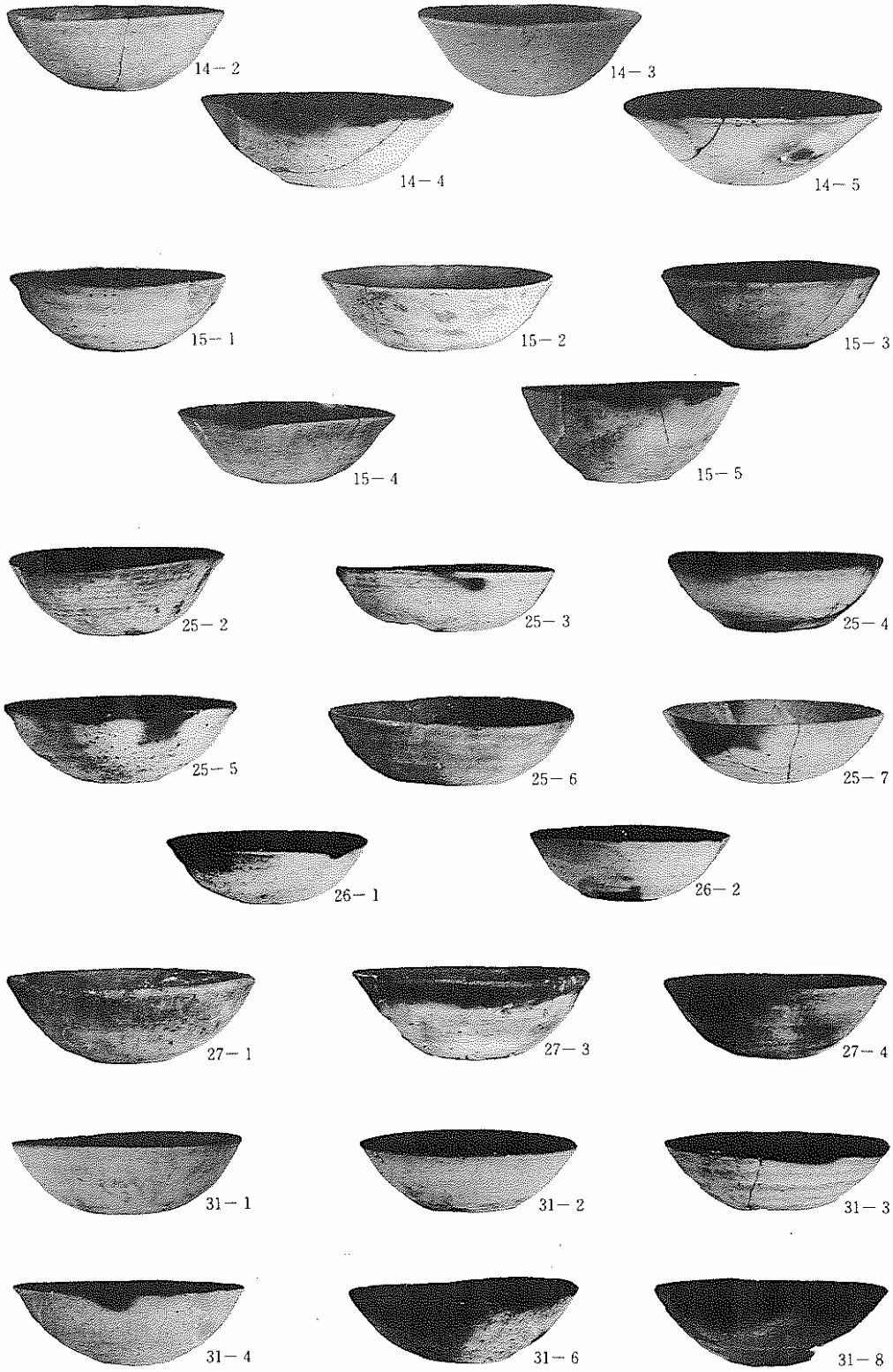


図版12　第104号墳出土遺物

（縮尺不同）
番号は登録No

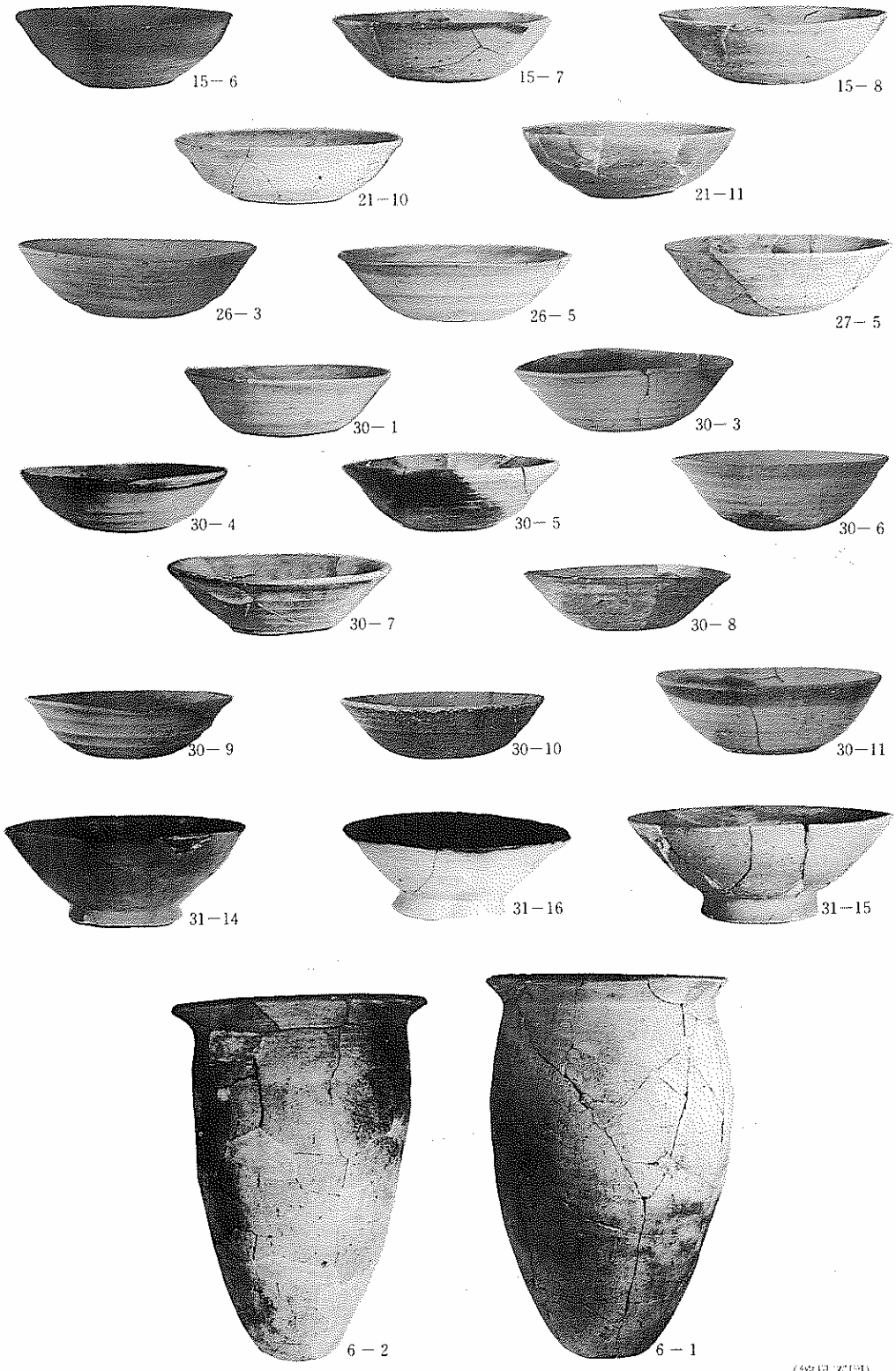
図版13　第106、107、108、109号墳出土遺物

（縮尺不同）
番号は登録No



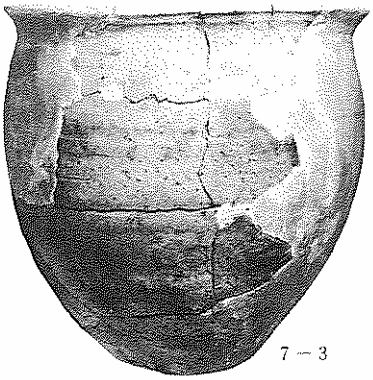
図版14　各住居跡出土土師器坏

番号は登録No

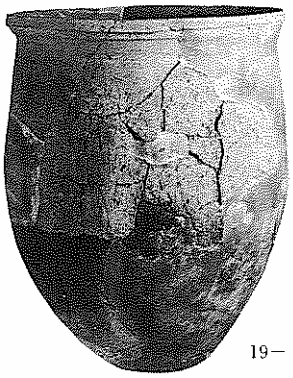


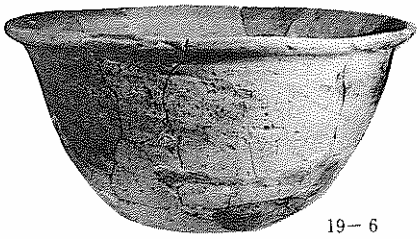
図版15　各住居跡出土須恵器坏・土師器甕

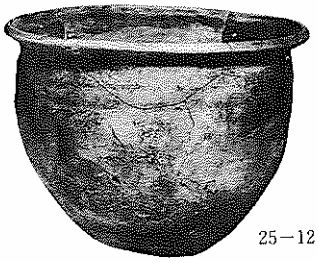
（縮尺不同）
番号は登録No.


7－3

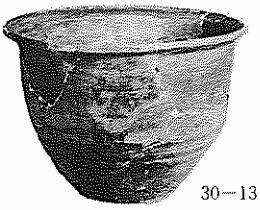
8－3

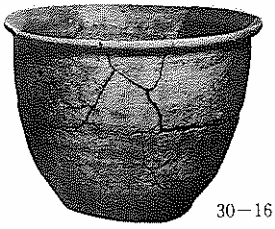

19－5

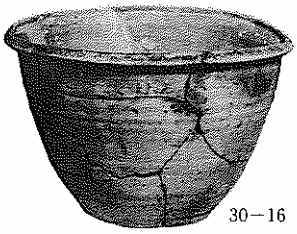

19－6


25－12

30－17


30－13


30－16


30－16

図版16　各住居跡出土甕

Ⅱ 大谷地遺跡（おおやち）

調査要項

遺跡記号：HO（宮城県遺跡地名表登載番号　31017）

遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町小栗山字大谷地

調査期間：昭和58年8月8日～9月2日

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：古川　一明・後藤　彰信

茂木　好光

調査対象面積：約300,000㎡

発掘面積：　5,000㎡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……165
Ⅱ　調査の方法と経過……167
Ⅲ　調査の成果……167
　1　基本層位……167
　2　発見された遺構と遺物……169
　　(1) 住居跡……169
　　(2) 土　壙……189
　　(3) 遺物包含層……196
　　(4) その他の出土土器……206
　　(5) 土製品……214
　　(6) 石製品……214
Ⅳ　考　察……227
　1　出土土器……227
　2　遺　構……230
Ⅴ　まとめ……231
　写真図版……233

Ⅰ　遺跡の位置と環境

大谷地遺跡は、宮城県の北部・加美郡色麻町小栗山字大谷地にあり、色麻町の中心である四釜から西へ約５㎞ほどの地点にある。

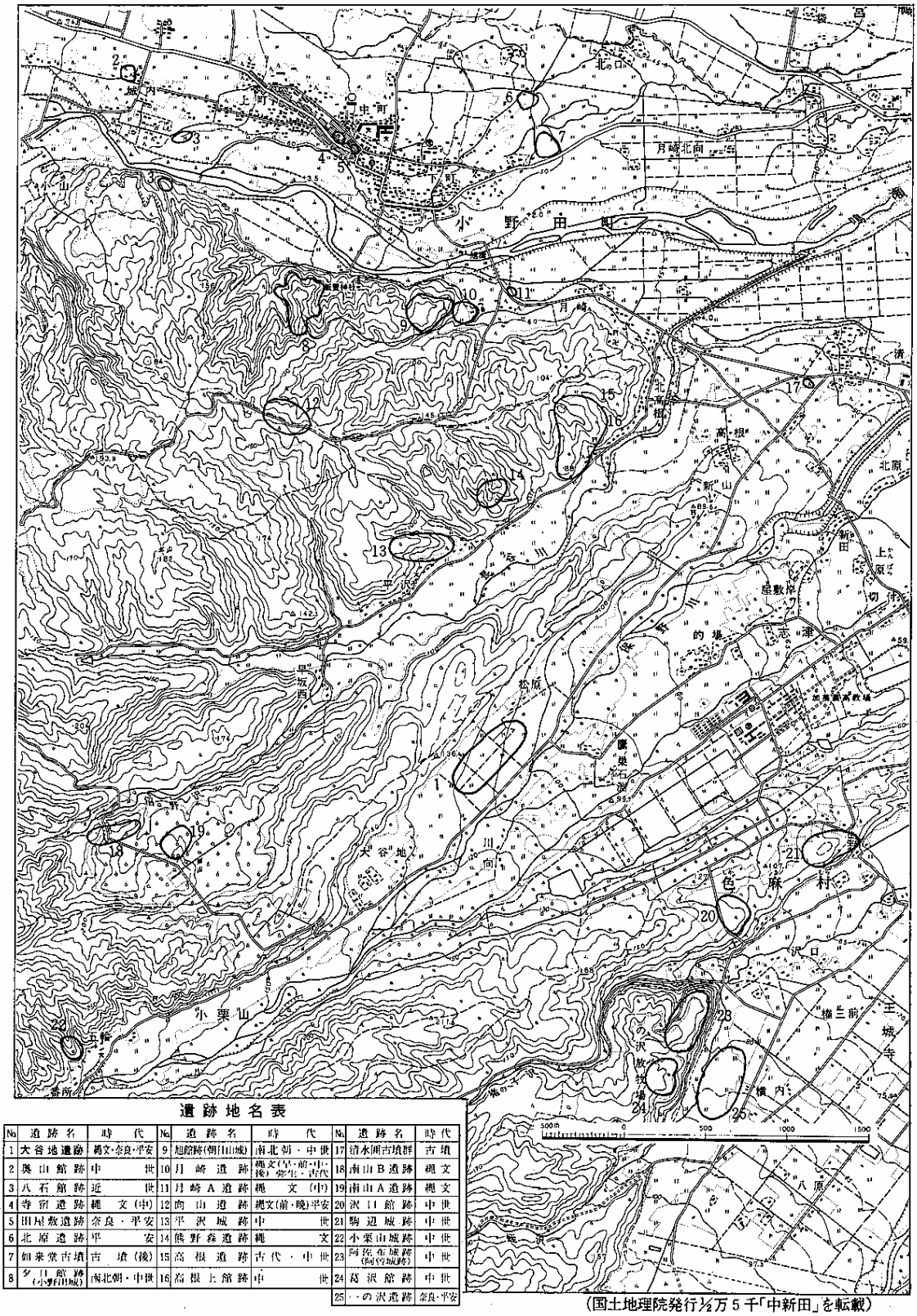
遺跡の周囲を概観すると、西部に奥羽山脈に属する船形連峰がそびえ、そこから東の大崎平野の方向へ枝状にのびる丘陵が発達している。この丘陵は加美丘陵とよばれ、その丘陵の間には、長谷川・保野川・花川・馬洗川などの中小の河川が低い段丘や氾濫原を形成しながら北東にむかって流れ、鳴瀬川に合流する。

大谷地遺跡は、長谷川と保野川にはさまれた北東につきでた細長い丘陵の南側にあり、保野川で形成された扇状地（洪積紀の砂礫台地）に立地する。保野川は船形連峰に属する蛇ヶ岳（標高1,400m）の東に源を発し、流域に度々大洪水による被害をもたらし、流路を変えている。現地を見ると非常に広い平坦面で、一帯が水田として利用されている。

微地形をみると、若干の高低差がみられ、微高地と湿地性の低地が入り組んでいる。まず北側の丘陵に沿った部分に後背湿地が発達し、現状の水田面よりも一段低くなっている。中央部にも沢が西方向から東に向って細長く入りこみ、調査区の西寄りで三本の沢が走り、遺跡の中央部付近でふた又に分れる。住居跡が発見されたのは沢と沢とにはさまれた地域である。色麻町には、『色麻町史』によると、約58ヶ所の遺跡がしられているが、そのうち縄文時代の遺物を出土するのは９ヶ所である。縄文時代の遺跡は枝状の細長く低い丘段の麓や中小河川において形成された河岸段丘扇状地に立地し、町内各所に点在する。いずれもこれまで発掘調査されたものはなく、内容も不明なものが多い。

詳細な分布調査を行えば、町内の縄文時代の遺跡はまだまだ増加する可能性がある。

大谷地遺跡は宮城県遺跡地名表によると、遺跡番号31017で、縄文土器、石器、土師器、須恵器が確認されている。



遺跡地名表

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	大谷地遺跡	縄文・奈良・平安	9	旭館跡(朝日山城)	南北朝・中世	17	清水明古墳群	古墳
2	奥山館跡	中世	10	月崎遺跡	縄文(早・前・中・後)・弥生・古代	18	南山B遺跡	縄文
3	八石館跡	近世	11	月崎A遺跡	縄文(中)	19	南山A遺跡	縄文
4	寺宿遺跡	縄文(中)	12	向山遺跡	縄文(前・晩)平安	20	沢口館跡	中世
5	田尾敷遺跡	奈良・平安	13	平沢城跡	中世	21	駒辺城跡	中世
6	北原遺跡	平安	14	熊野森遺跡	縄文	22	小栗山城跡	中世
7	如来堂古墳	古墳(後)	15	高根遺跡	古代・中世	23	阿弥陀城跡(阿弥陀城跡)	中世
8	夕日館跡(小野田城)	南北朝・中世	16	高根上館跡	中世	24	葛沢館跡	中世
						25	・・の沢遺跡	奈良・平安

(国土地理院発行½万5千「中新田」を転載)

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　調査の方法と経過

今回の調査は、遺跡内でほ場整備事業が実施される地域の計画変更の余地がない排水路部分について、記録保存と遺跡の範囲を知ることが目的とされた。調査対象地区は、遺跡内を「＋」字状に走る幹線排水路敷地で、北西～南東に６m幅、南西～北東に３m幅の総延約1.5kmのトレンチを設けた。南西～北東のトレンチを０ライントレンチとし、その南西の端から３m幅ごとにグリッドを順次設けた。北西～南東トレンチにおいても同様に、交点部分を起点に北西と南東方向へ３m幅ごとにグリッドを設けた。（なお、南西～北東トレンチの南西端は、ほ場整備の工区境界線に当たる。）

調査は、重機を導入して「＋」字状に走るトレンチから開始し、北西～南東トレンチ（０ライン）で土壙４基を検出した。その後に、道路沿いに水道管を埋設するための掘削に立会ったが遺構・遺物は認められなかった。また、一部切土工事のための仮排水路を遺跡の西側に設けるための掘削に立会った結果、37ラインの72～86グリッド附近で遺物包含層と土壙１基が、37ラインの109～118グリッド付近では住居跡５軒、土壙４基が検出された。さらに、遺物包含層の広がりを知るために任意のトレンチを北側に設けた。

Ⅲ　調査の成果

１　基本層位

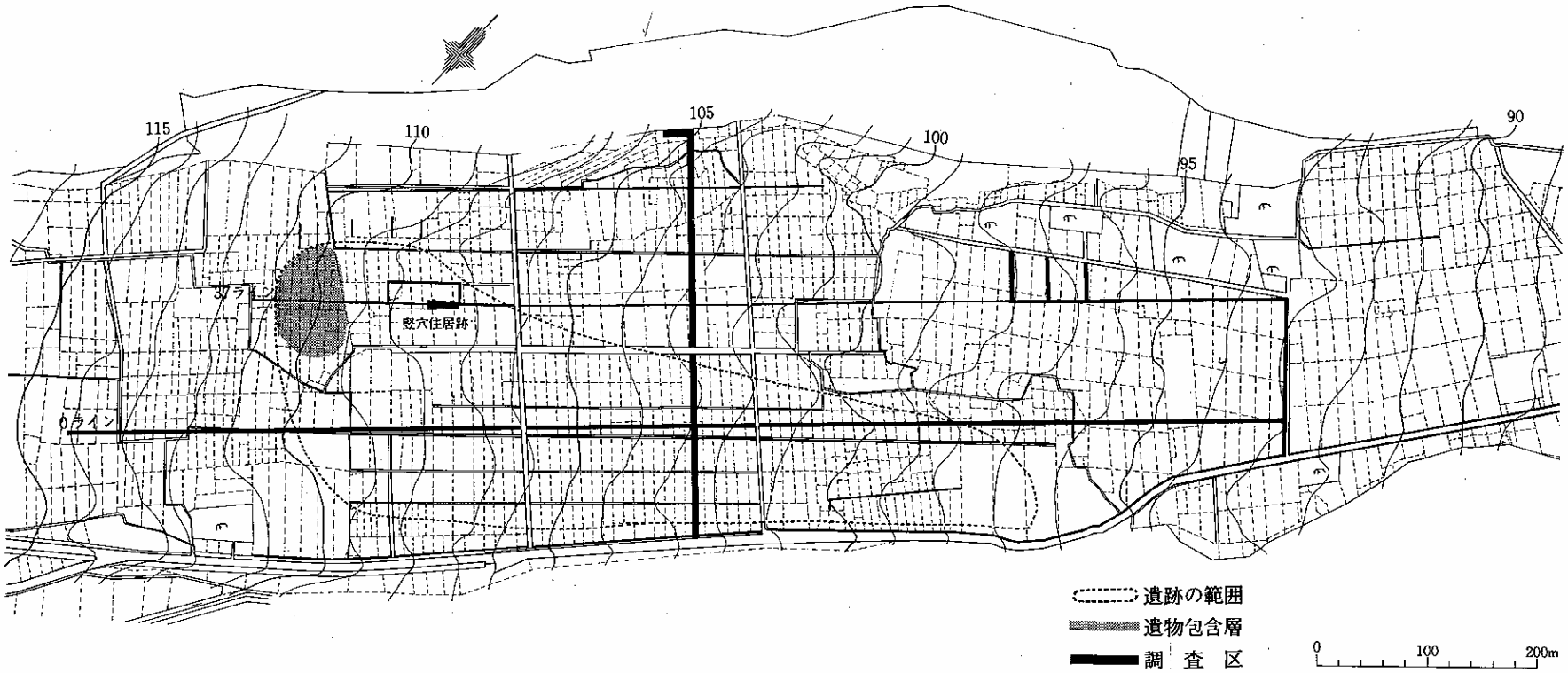
調査区内の層位は基本的には４枚の層に大別される。

第Ⅰ層：厚さは約10～25cmある。黒褐色シルト層で水田の耕作土と床土にあたる。若干の縄文土器片を含む。耕作の際に畦に寄せられた土器片もみられる。

第Ⅱ層：厚さは約20～50cmある。黒褐色砂質シルト層で、いわゆる黒ボク層とよばれるものである。耕作はこの層までおよんでいない。この層の上半部には土器片を多数包含するが、遺物の含まれない下半部との境界に一線を引くことは不可能であった。

第Ⅲ層：黄褐色砂質シルト層の地山である。地域によってはこの第Ⅲ層が堆積していないところもある。遺物は含まれない。住居跡などの遺構はこの層の上面で確認した。

第Ⅳ層：保野川によって運びこまれた段丘礫層である。



第2図 調査区の位置

２　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡５軒、土壙９基、それに遺物包含層である。

竪穴住居跡、土壙などはすべて基本層序の第Ⅲ層の上面で確認されたものである。

（１）住居跡

〔第１号住居跡〕

〔平面形・重複〕　調査区の37－109グリッド附近に位置する。平面形はほぼ円形で径が約４mある。北端が第４号住居跡と重複し、それを切ってつくられている。また、東側に第８号と第９号の土壙が近接しており、西端は第７号土壙に切られている。

〔壁〕　壁は第Ⅲ層の地山ローム層からなっている。全体に床からなだらかに立ち上がる。保存状態の良好な南側では、床面から遺構確認面までの高さが約20cmあるが、東側では保存が悪く、高さは約12cmしかない。

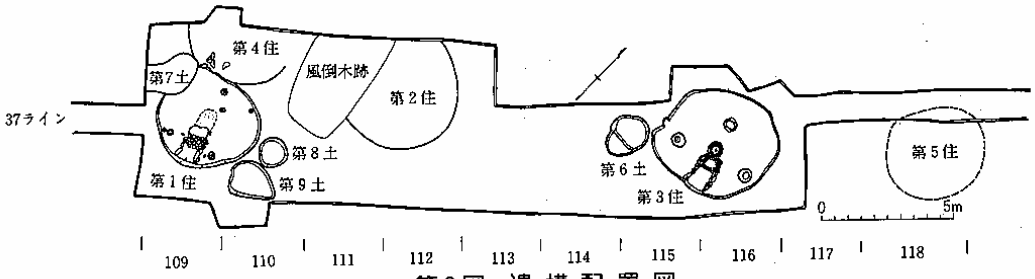
〔床面〕　第Ⅲ層のローム層を掘り込んだ底面がそのまま床面として利用されている。ほぼ全体に平坦で、住居の中央部から炉跡にかけて火熱をうけている。

〔周溝〕　周溝はない。

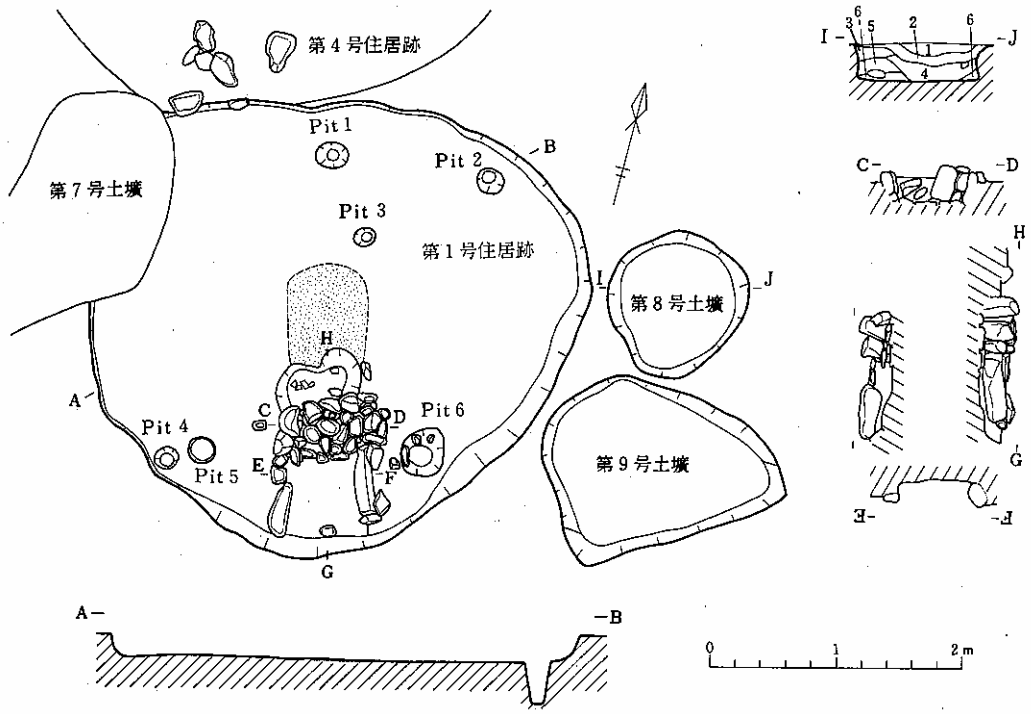
〔柱穴〕床面から６個のピット（P_1～P_6）が検出された。深さは約20cmのものから約45cmのものまであるが、堆積土はいずれも黒褐色の砂質シルトである。P_1は炉の長軸上に、P_5・P_6は長軸をはさんで対称の位置に並び、P_6は掘り方の埋土に３個の小礫を埋め込んでいる。主要な柱穴は位置関係からみてP_1・P_5・P_6で、３本の柱からなっていた可能性がある。他の３個のピットについては、柱穴がどうかわからなかったが、P_1・P_5・P_6の補強的な柱穴かもしれない。

〔炉跡〕　住居跡の南壁に接して河原石を利用して炉が設置されている。平面形はコ字形で南壁に接してひらく形となる。規模は長軸で約1.2m、最大幅で１mで、長軸の方向は真北に対し西に21°ふれている。床面からの石組の高さは敷石石組部の奥壁で９cm、他は４cmくらいである。

構造は敷石石組部と石組部からなる複式炉である。敷石石組部の奥壁と左右の側壁に高さ約25cmの棒状の河原石を平らな面を炉の内側にむけて、コの字状に立て並べている。又この東の



第３図　遺構配置図



第４図　第１号住居跡

側石の上端ではその外側の部分に沿って、８個の河原石を配置し補強している。

石組部の平面形は方形である。左右の壁には長さ60cm、径15cmほどの棒状の河原石を１つずつ横に並べる。南方向は住居跡の壁に接している。深さは床面から約20cmである。底面はローム層を掘り込んだ面で、ややくぼんでいる。

〔炉の構築方法〕　床面を長方形に掘り下げ、まず東・西・北の壁石を立て、次に敷石石組部と石組部の底面を画する境目に数個の石を配し、さらに敷石石組部の底面に石を敷いている。

使用の痕跡をみると、敷石石組部の壁石・敷石とも火熱を受けた痕跡がある。石組部は、壁石・底面ともに火熱を受けた状況を観察することができず、底面近くに炭化物もみられない。なお、炉内部の堆積土は黒褐色シルトの単層で、住居跡の堆積土と同質であった。敷石石組部に接して床面に浅いくぼみがあるが、ここは火熱を受けた痕跡がみられた。ここから床面中央にかけて火熱を受けていることは床面の項でも記した。

〔出土遺物〕　堆積土中から縄文土器、石器が出土している。土器には、深鉢・浅鉢・注口土器・袖珍土器がある。なお、出土した石器については、一括して別項で述べることにする。

深　鉢

口縁部資料

ａ：外反する口縁部で、胴上半部でくびれ、胴中央部で脹らむもの

１：一部連結「Ｓ」字状文のもの（第５図１）

胴上半部に「Ｓ」字状文と逆「Ｓ」字状文を交互に並べ、それらの文様の上部を隆線で連結している。「Ｓ」字状文の内側には、ＲＬＲ縄文が充塡されている。胴下部には斜位、縦位にＲＬＲ縄文が施されている。

２：各部分連結「Ｓ」字状文のもの（第６図19）

胴上半部に「Ｓ」字状文が施され、その間に生じた「∫」字状の区画にＬＲ縄文が充塡されている。さらに「Ｓ」字状文の末端には、玉抱き文が描かれており、外側に縄文が充塡されている。玉を抱いた無文帯の末端は鰭状になる。

３：小破片で、文様構成が不確定であるが、変形「Ｓ」字状文と考えられるもの（第６図８～17）

10は小波状突起を有している。

ｂ：口縁部が直立するもの

１：変形「Ｓ」字状文のもの（第６図１、18）

１はやや内弯気味に直立する口縁部で、突起部に貫通孔を有する。隆線によって「Ｓ」字状に無文帯と縄文帯を区画している。

18は胴中央部でわずかに脹らむもので、胴上部に「Ｓ」字状文が描かれ、文様の外側にＬＲ縄文が充塡されている。さらに胴中央部にも、文様が描かれると思われるが、胴中央部が欠損しているため不明である。

２：地文のもの（第７図１～10・12・13・15、第８図１～３、第９図１～11・13～16）

（ｉ）：頚部に沈線が巡るもの（第７図１～10・12・13・15、第９図11・15・16）第９図11・15・16は、口縁部内側に陵をもつ。

（ⅱ）：頚部に隆線が巡るもの（第８図１）

胴中央部でやや脹らむ。

（ⅲ）：頚部に沈線や隆線が巡らないもの（第８図２・３・策９図１～３・５・９・10・13・14）

第８図２は、口縁部がやや内弯ぎみに直立し、縄文を施したのちに、口縁部を肥厚させている。第９図９・10・13・14は、口縁部が内側に折り返され肥厚している。

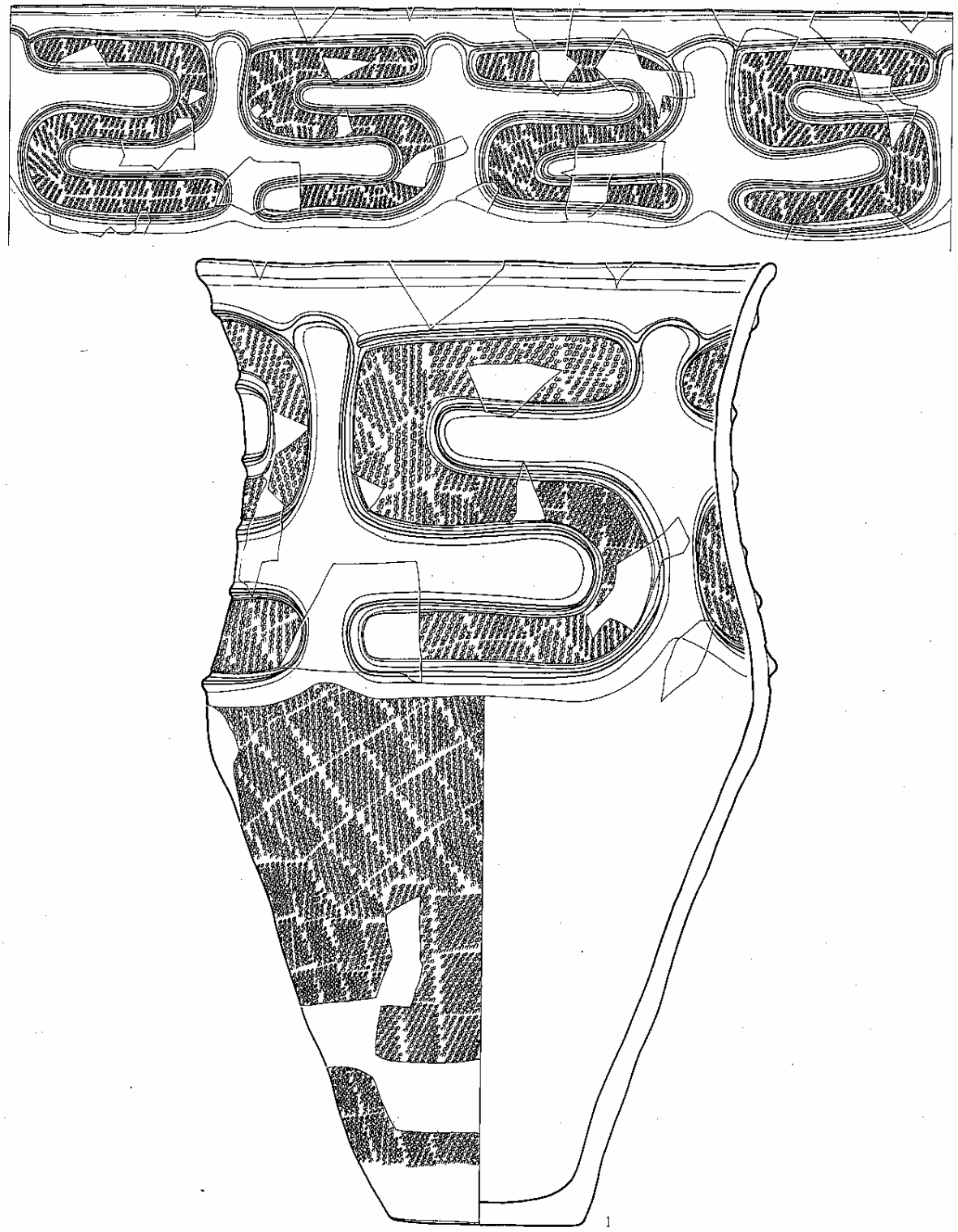
ｃ：口縁部が外傾し、直線的に胴部に至るもの

１：文様のあるもの（第６図３～７）

突起部と口縁部に１段、あるいは２段の連続刺突が施文され、胴部には、沈線文が描かれる。３・４・６は口縁部に撚糸文が施されている。

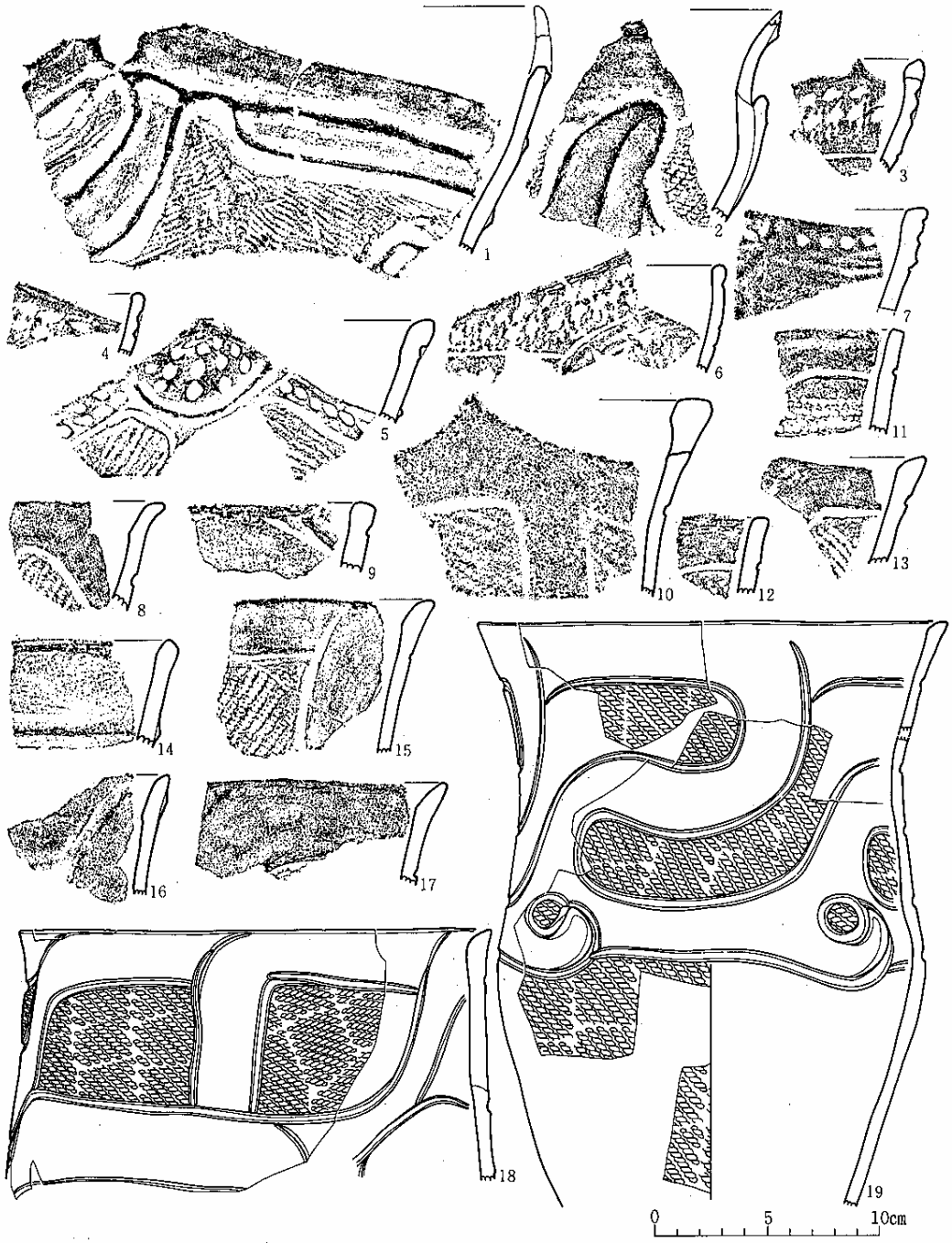
２：地文のもの（第７図11・14）

頚部に一条の沈線が巡らされる。



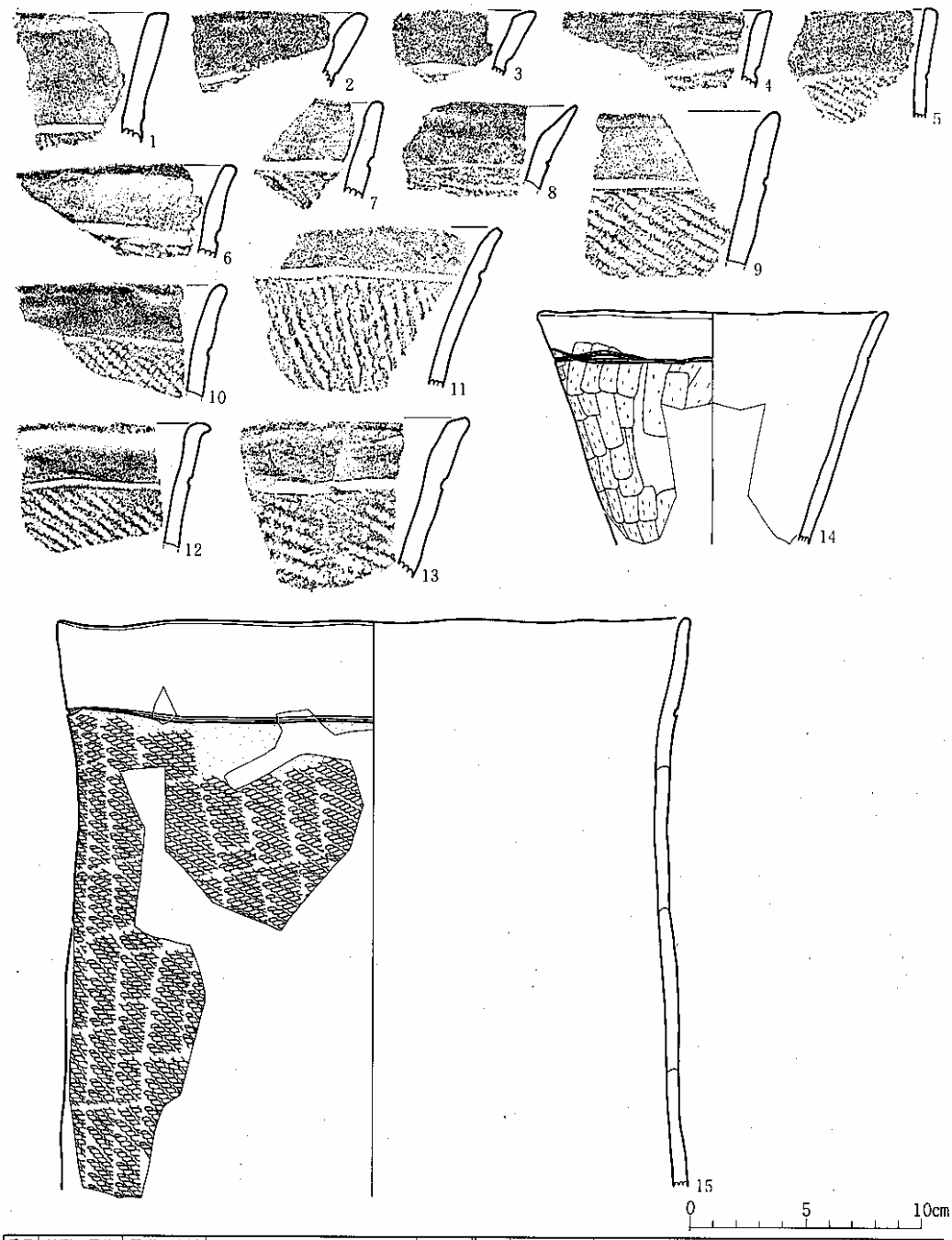
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深鉢BⅡa	RLR縄文・RLR縄文充塡	5－7

第5図　第1号住居跡出土土器



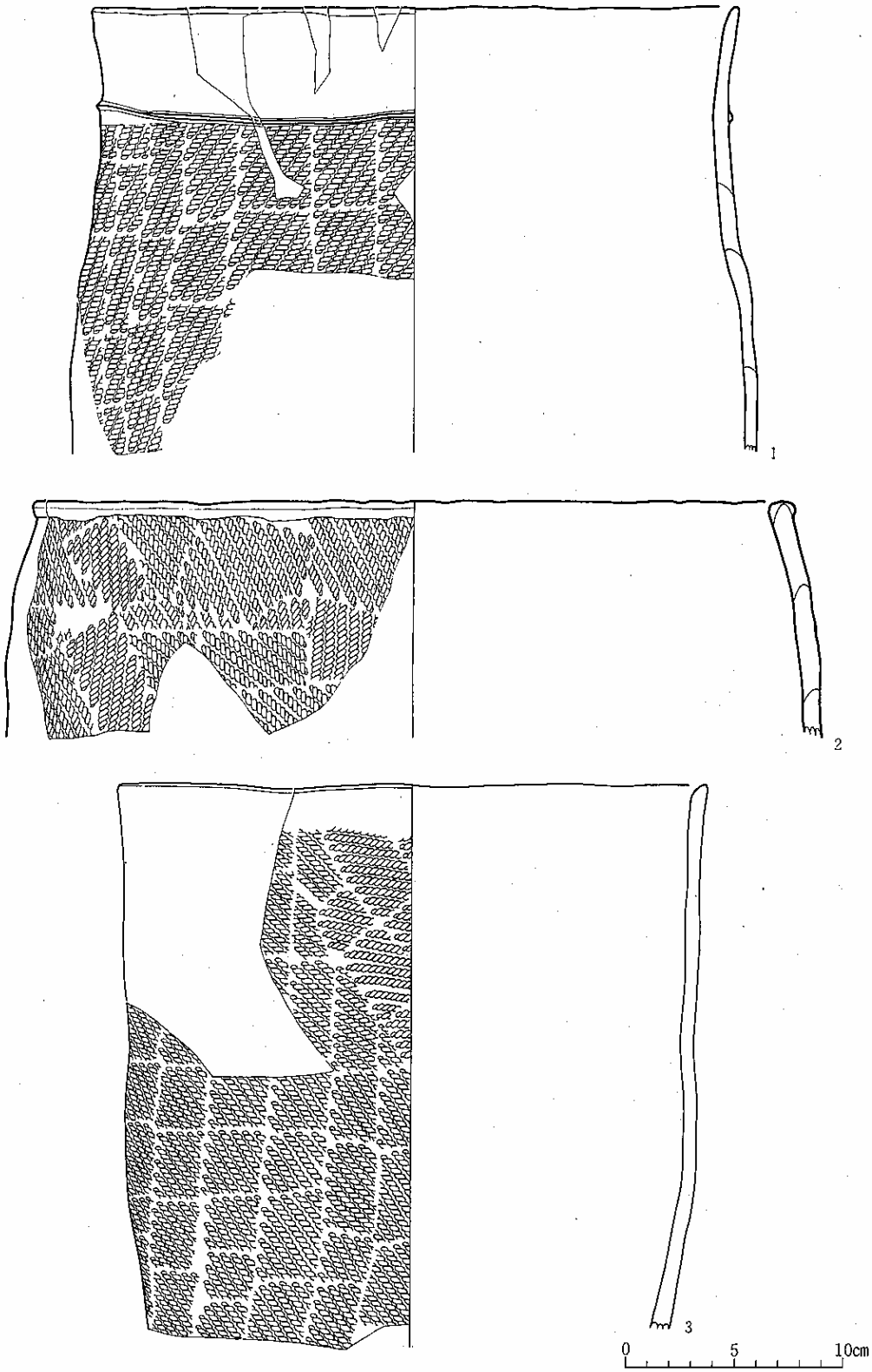
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深鉢Aa	L R 縄文	5－2	11	1住・埋土	深鉢BⅡc	L R 縄文	5－10
2	1住・埋土	浅鉢B	LRL縄文	5－3	12	1住・埋土	深鉢BⅡc	L R 縄文	
3	1住・埋土	深鉢Ca	L 撚糸文	5－4	13	1住・埋土	深鉢BⅡc	R L 縄文	5－11
4	1住・埋土	深鉢Ca	L 撚糸文	5－5	14	1住・埋土	深鉢BⅡc	——	5－12
5	1住・埋土	深鉢Ca	L R 縄文	5－6	15	37-110・Ⅱ層	深鉢BⅡc	R L 縄文	5－13
6	1住・埋土	深鉢Ca	L 撚糸文		16	1住・埋土	深鉢BⅡc	——	5－14
7	1住・埋土	深鉢Ca	L R 縄文	5－8	17	37-109・Ⅱ層	深鉢BⅡc	——	5－15
8	1住・埋土	深鉢BⅡc	R L 縄文	5－9	18	1住・埋土	深鉢Aa	L R 縄文	5－19
9	1住・埋土	深鉢BⅡc	——		19	1住・埋土	深鉢BⅡb	L R 縄文	5－24
10	1住・埋土	深鉢BⅡc	LRL縄文	5－7					

第6図　第1号住居跡出土土器



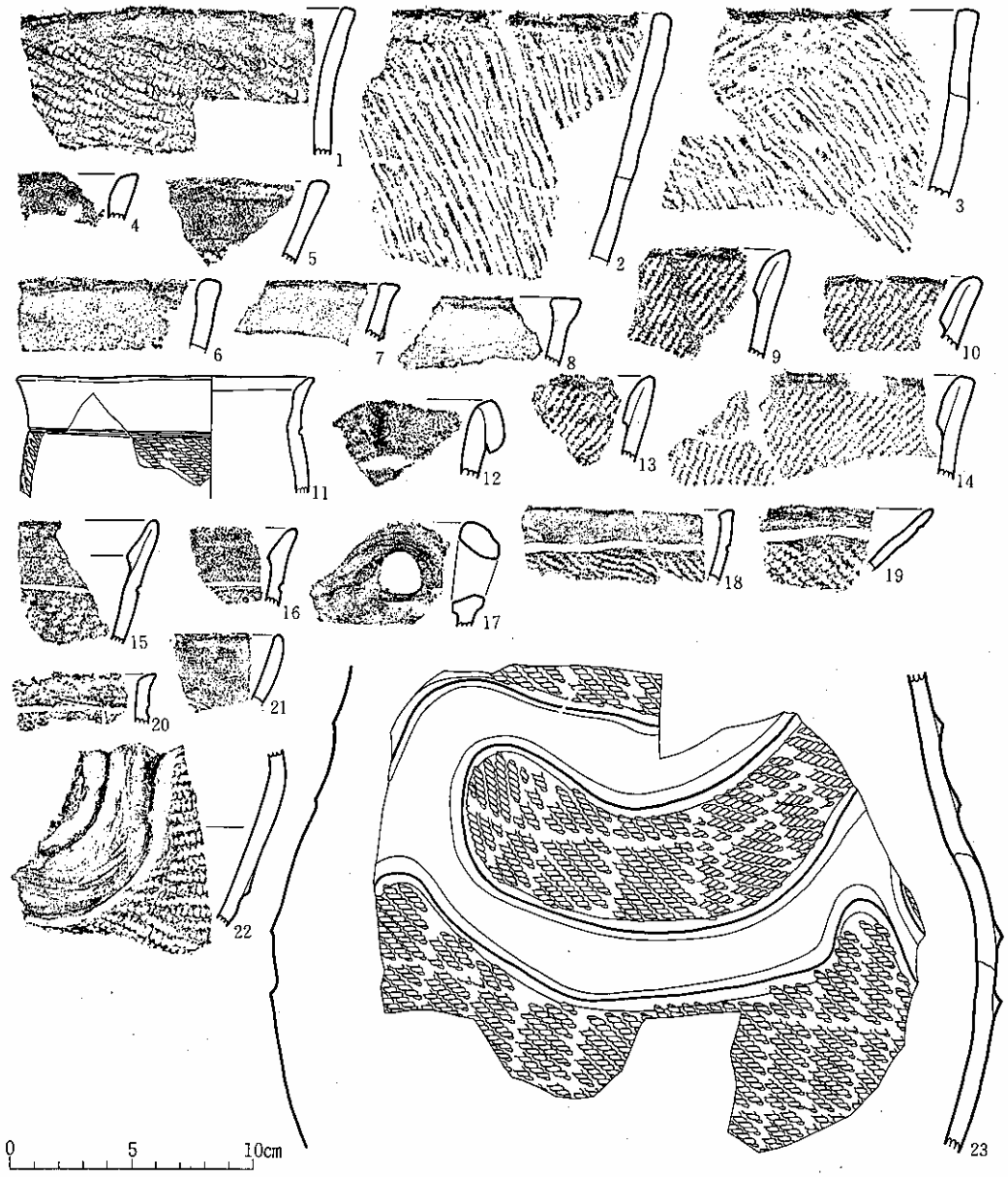
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深鉢Ａｂ	Ｒ撚糸文		9	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文	5－17
2	1住・埋土	深鉢Ａｂ	不　　明		10	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文	5－18
3	1住・埋土	深鉢Ａｂ	不　　明		11	1住・埋土	深鉢Ｃｂ	Ｌ撚糸文	5－22
4	1住・埋土	深鉢Ａｂ	不　　明		12	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文	5－21
5	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文		13	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文	5－23
6	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文		14	1住・埋土	深鉢Ｃｂ	――	
7	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文	5－20	15	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文	5－25
8	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文	5－16					

第７図　第１号住居跡出土土器



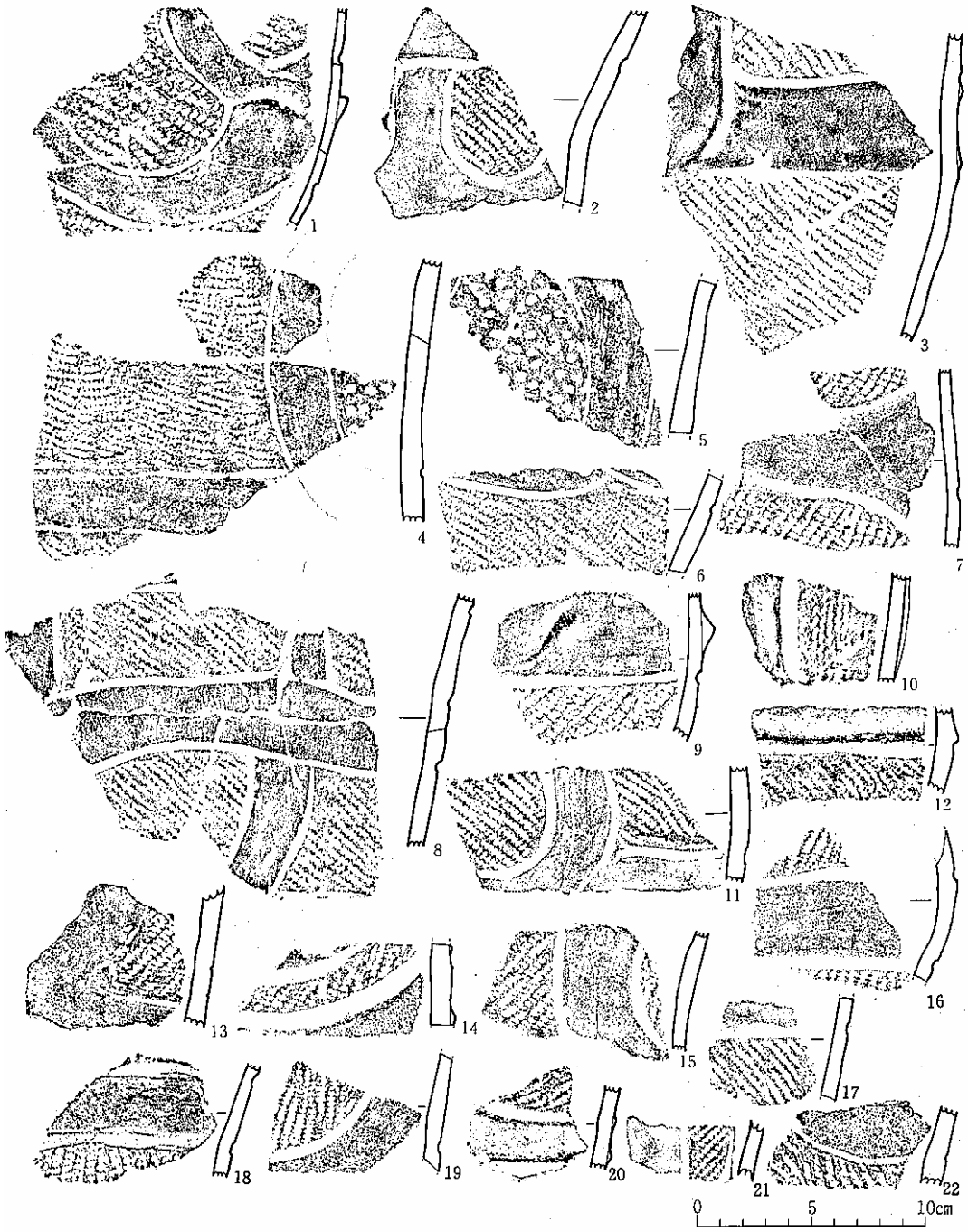
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深鉢Ab	R L 縄文		3	1住・埋土	深鉢Ab	L R 縄文	6－1
2	1住・埋土	深鉢Ab	R L 縄文						

第8図　第1号住居跡出土土器



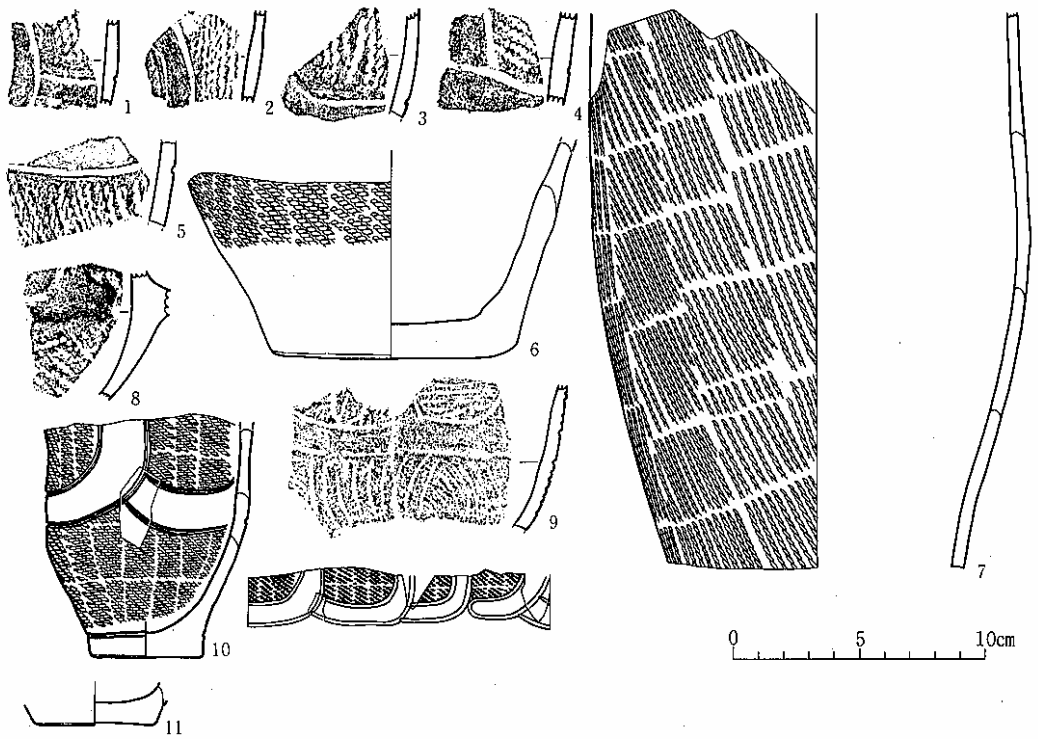
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文		13	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文　同一個体	
2	1住・埋土	深鉢Ａｂ	Ｒ撚糸文		14	1住・炉埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文　同一個体	6－8
3	1住・埋土	深鉢Ａｂ	Ｒ撚糸文		15	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬＲ縄文	
4	1住・埋土	深鉢Ｃａ	――		16	1住・埋土	深鉢Ａｂ	不　　明	
5	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文		17	1住・埋土	深　鉢	――	6－6
6	1住・埋土	深鉢ＢⅡ	ＲＬ縄文	6－3	18	1住・埋土	袖珍土器	ＬＲ縄文	6－9
7	1住・埋土	深鉢ＢⅡ	――	6－5	19	1住・埋土	袖珍土器	ＬＲ縄文	
8	1住・埋土	深鉢ＢⅡ	――		20	1住・埋土	袖珍土器	ＬＲ縄文	6－7
9	1住・炉埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文同一個体		21	1住・埋土	袖珍土器	――	
10	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＲＬ縄文同一個体		22	37－110・Ⅱ層	浅　鉢	ＬＲ縄文	6－10
11	1住・埋土	深鉢Ａｂ	ＬＲ縄文	6－4	23	1住・埋土	深　鉢	ＬＲ縄文・ＬＲ縄文充填	6－2
12	1住・埋土	深　鉢	――						

第９図　第１号住居跡出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深　鉢	LRL縄文		12	37-109・Ⅱ層	深　鉢	R L 縄 文	6－18
2	1住・埋土	深　鉢	L R 縄 文	6－12	13	1住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	6－22
3	1住・埋土	深　鉢	L R 縄 文	6－11	14	1住・埋土	深　鉢	RLR縄文	6－23
4	1住・埋土	深　鉢	LR縄文　同一個体	6－13	15	1住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	6－24
5	1住・埋土	深　鉢	同一個体	6－14	16	1住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	6－21
6	1住・埋土	深　鉢	L R 縄 文	6－15	17	1住・埋土	補珍土器？	L R 縄 文	6－25
7	37-110・Ⅱ層	深　鉢	R L 縄 文		18	1住・埋土	深　鉢	RLR縄文	6－26
8	1住・埋土	深　鉢	L R 縄 文	6－19	19	1住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	6－27
9	1住・埋土	深　鉢	RLR縄文	6－16	20	1住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	6－31
10	1住・埋土	深　鉢	L 撚 糸 文	6－17	21	1住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	6－32
11	37-110・埋土	深　鉢	L R 縄 文	6－20	22	1住・埋土	深　鉢	R 撚 糸 文	6－33

第10図　第１号住居跡出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	1住・埋土	深　鉢	L 撚 糸 文	6－28	7	1住・埋土	深　鉢	R 撚 糸 文	
2	1住・埋土	深　鉢	L 撚 糸 文	6－34	8	1住・埋土	注口土器？	R L 縄 文	6－35
3	1住・埋土	深　鉢	L 撚 糸 文	6－29	9	1住・埋土	袖珍土器	――	6－36
4	1住・埋土	深　鉢	L R 縄 文		10	1住・埋土	袖珍土器	L R 縄 文	6－37
5	1住・埋土	深　鉢	L 撚 糸 文	6－30	11	1住・埋土	深　鉢	――	
6	1住・埋土	深　鉢	L R 縄 文						

第11図　第１号住居跡出土土器

浅　鉢

a：口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴上部で脹らむもの（第６図２）

口縁部外端に陵をもつ。胴上部には鰭状の隆帯が付される。地文はＲＬＲ縄文である。

なお、第９図４～８は小破片のため、文様・地文などが施文されているか否かは不明である。

胴部資料

深鉢もしくは浅鉢の胴部破片であるが、その器形文様については不明な点が多く、分類することが難しい。特徴のある破片について述べる。

第９図22は、浅鉢の胴上部破片で、隆線により縄文帯と無文帯とに区画される。第９図23は口縁部が外反し、胴上半部でくびれ、中央部で脹らむ深鉢の胴中央部の破片である。胴部は、曲線状に隆線が描かれ、縄文帯と無文帯とに区画される。第10図４・５図は同一個体で、沈線によって円状に区画された、その内部に刺突が施される。第10図１・９は、鰭状の隆帯がみられる。その他、沈線、隆沈線で文様が描かれるものがある。

底部資料

深鉢の底部と思われる。（第11図６・11）

注口土器

第11図８は、胴中央部の破片で、上半部には把手が付されていると思われる。把手下には、縄文が施されている。

袖珍土器

第９図18～20は頚部に１条の沈線を巡らしている。20は口縁外端に押圧痕がある。第９図21は直立ぎみの無文の口縁部である。第11図９は２条の沈線が横位に巡り、上下に文様が描かれている。上部の文様は沈線によって円状に区画され、その内部には数条の横位沈線が施されている。下部の文様は、向い合せの孤状沈線が施される。第11図10は、胴上半部で直立ぎみになり、胴下半部でしぼまる器形である。胴上半部には、沈線によって無文帯と縄文帯とを区画している。胴下端には、１条の沈線が巡る。

第16図４は、外反気味に直立する口縁で、胴部に区画沈線文が描かれ、内側にＲＬＲ縄文が充填される。袖珍土器の可能性が大きい。

〔第２号住居跡〕

第２号住居跡は、37－112グリッド付近の第Ⅲ層ローム層上面で検出された。平面形は、径約４mのほぼ円形のプランであるが、西側は風倒木で攪乱されている。住居跡中央部の南側よりに炉を有する。今回の調査では、住居跡の確認だけに留めたが、その際に出土した土器について述べる。

深　鉢

口縁部資料

ａ：口縁部が外反し、胴上半部でくびれ、胴中央部で脹らむ器形のもの（第12図１～６・10・11）

１は突起があり、胴上部に変形「Ｓ」字状の文様が、その外側に縄文が充填されている。

２～６・10・11は、小破片のため文様構成は不確定であるが、変形「Ｓ」字状の文様が描かれると思われる。

ｂ：口縁部が直立するもの

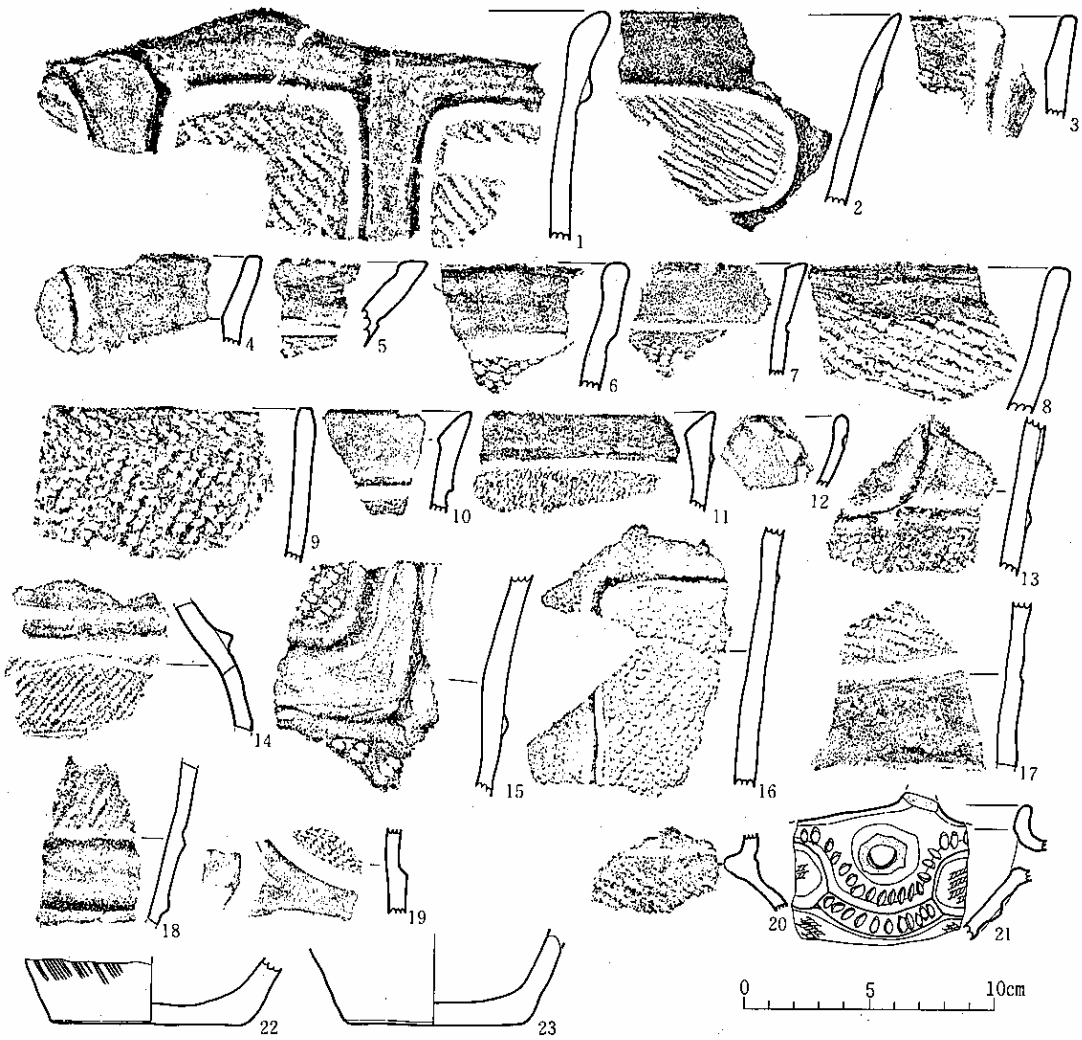
胴部全体が緩かにしぼまる器形のもの（第12図７～９）

頚部に沈線の巡るもの（７）、地文のもの（９）がある。なお、８は小破片のため、文様、地文文などが施されているか否かは不明である。

突起部

第12図12は、爪形の刺突文が施される。

胴部資料



番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	2住・埋土	深鉢BⅡC	L R 縄 文	7－1	13	2住・埋土	深　鉢	R L R縄文	
2	2住・埋土	深鉢BⅡC	L R 縄 文	7－2	14	2住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	7－10
3	2住・埋土	深鉢BⅡC	——	7－3	15	2住・埋土	深　鉢	R L 縄 文	7－11
4	2住・埋土	深鉢BⅡC	——	7－4	16	2住・埋土	深　鉢	R L R縄文	7－12
5	27-112・Ⅱ層	深鉢BⅡC	L R 縄 文	7－6	17	38-111・Ⅱ層	深　鉢	L R 縄 文	7－13
6	38-111・Ⅱ層	深鉢BⅡC	R L 縄 文		18	38-112・Ⅱ層	深　鉢	R L 縄 文	7－14
7	2住・埋土	深鉢Ab	R L 縄 文		19	38-111・Ⅱ層	深　鉢	R L R縄文	7－15
8	38-112・Ⅱ層	深鉢Ab	L R 縄 文	7－7	20	2住・埋土	注口土器？	L R L縄文	7－16
9	2住・埋土	深鉢Ab	R L R縄文	7－5	21	2住・風倒木	注口土器	L R縄文充填	7－17
10	2住・埋土	深鉢BⅡC	——		22	2住・埋土	深　鉢	糸　　線	
11	38-112・Ⅱ層	深鉢BⅡC	L 撚 糸 文	7－8	23	2住・埋土	深　鉢	——	
12	38-111・Ⅱ層	深　鉢	——	7－9					

第12図　第２号住居跡出土土器

小破片のため、器形、文様が不明な点が多い。文様の施文方法をみると、隆線によるもの（第12図13～16）、沈線によるもの（第12図17・19）、隆沈線によるもの（第12図18）がある。
第12図20は胴上部で「く」字状に屈曲する頸部破片である。頸部に１条の沈線が巡る。内面には、段を有する。

底部資料

深鉢の底部と思われる。（第12図22・23）

注口土器（第12図20・21）

鉢状の器形で、注口部には橋状の把手が付される。胴部には、孤状の隆線が向い合せに描かれ、さらに孤状隆線は２条の横位隆線で連結されている。隆線の内部と外部には爪形の連続刺突文が施されている（第12図21）。

〔第３号住居跡〕

〔平面形・重複〕　調査区の37－116グリッド附近に位置する。平面形はほぼ円形で、約４mの径がある。住居跡の南側に隣接して第６号土壙があるが重複はしていない。

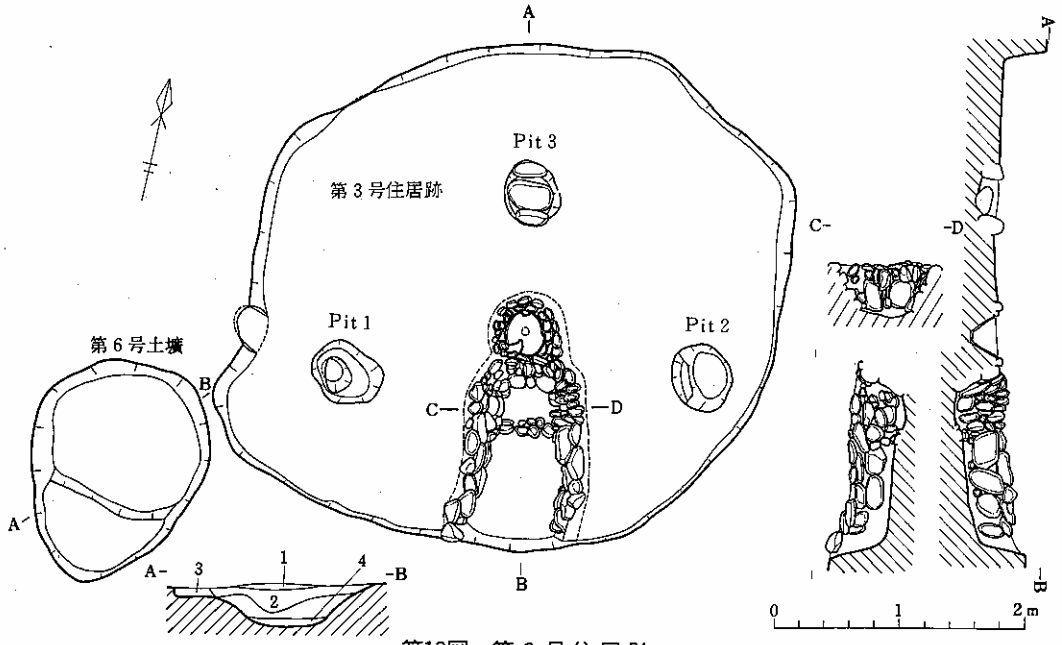
〔壁〕　壁は第Ⅲ層の地山ローム層からなるが、東壁では地山礫層が露出している部分がある。全体に床からの立ち上りがきつく、北側では直立に近い。全体に保存が良く、床から遺構確認面までの高さが約30～35cmある。しかし、東壁の一部では約４cmくらいしか残っていない。

〔床〕　第Ⅲ層の地山ローム層を掘り込んだ底面がそのまま床面として利用されている。東壁に近い部分では床にも礫層が露出している。全体に平坦であるが、中央部より壁にむかうにつれて若干高くなる傾向がある。また、炉跡の土器埋設石囲部の外側の床面も高くなっているが、これは炉との関係からと思われる。

〔周溝〕　周溝はない。

〔柱穴〕　床面から３個のピット（P_1～P_3）が検出された。底面からの深さは約11～16cmである。P_3は炉の長軸線上にある。掘り方の底に扁平な河原石をすえ、この石を両側から支えるように２個の細長い河原石が直立してはめこまれている。P_1とP_2は炉跡の長軸をはさんで対称的な位置にあり、掘り方もみとめられた。このP_1～P_3は位置からみても柱穴であろう。

〔炉跡〕　炉跡は、土器埋設石囲部、石組部Ⅰ、石組部Ⅱの３つの部分から構成される。
土器埋設石囲部は直径が25cmの円形である。中心に浅鉢（第14図１）を埋設し、その周囲に２列１段に河原石を並べている。土器は口縁の大半を欠くが胴部はのこっている。石も土器も火熱をうけて赤色を呈している。とくに、土器はその表面の剥落が著しい。
石組部Ⅰは奥壁と左右側壁に河原石を３段に積み上げているが、最下段に大きな石を、上位段



第13図　第３号住居跡

にひとまわり小さな石を横に並べて積み上げており、その壁はゆるやかに外反する。平面形は胴脹みのコの字形となる。規模は上端で約95cm×60cm（区画石の幅を含む）、下端で約40cm×25cmとなる。奥壁の高さ約43cm、側壁は約42cmある。底面には石はなくロームの面でやや凹んでいる。石組部Ⅱの境には２列の河原石を並べ境界としている。なお奥壁側壁は火熱をうけた痕跡がみられるが、底面にはない。また堆積土には炭化物が含まれていた。

石組部Ⅱの平面形は長方形で、南側は住居壁に接する。住居壁に石組がないため、壁に向ってひらく形となる。また、石組部Ⅰとは２列に河原石をならべて区画される。左右の壁は石組部Ⅰで使用された石よりも大きな河原石で３段に組まれて傾斜はきつい。底面は礫層の小礫の面を利用している。とくに、敷石をした痕跡はない。大きさは上端約90cm（区画端はふくめない）×100cm・下端で約80cm×60cmである。内部は火をうけた痕跡はないが、堆積土には炭化物がみられ、また、上部に土器片が含まれていた。

〔炉の構築方法〕

この炉は、はじめに床面を長方形に大きく掘り込み、住居の中央に近い方の端部に土器を埋め、その周りに小礫を２列配置する。

次に石組部Ⅰの奥壁と側壁に河原石を３段ならべる。但し、奥壁の下段の石は他の石より２倍の大きさのものを使用している。また、側壁の下段もその中・上段よりやや大き目のものを使用している。そして、石組部Ⅰと石組部Ⅱの境目となる河原石を２列並べ、さらに、石組部Ⅱの下段に大きな河原石を並べ、その後に、２・３段目の石を横み上げる。但し、石組部Ⅱの

右壁に２段、左壁には３段の石が積まれる。

〔出土遺物〕

炉に伴う埋設土器が１点出土しており、住居跡の年代決定資料となり得るが、その他は、いずれも堆積土中からのもので、床面に伴うものもない。剥片石器がその他出土している。

深　鉢

口縁部資料

ａ：口縁部が外反し、胴上半部でくびれ、胴中央部で脹らむ器形のもの

１：大波状口縁のもの（第15図２・３）

波頂部と谷部には下垂する渦巻文が隆線で描かれ、渦巻文間には沈線による区画文が描かれている。区画内にはＲＬ縄文を充塡している。

２：平口縁のもの（第15図４～６、第16図１～３）

胴部には変形「Ｓ」字状の文様が隆線で描かれていると推定される。

ｂ：口縁部が直立するもの

地文だけのもの（第16図５・７・８）

頚部に沈線が巡るもの（５）と隆線が巡るもの（７・８）とがある。

突起部（第16図６・９～20、第17図24）

第16図13・16～18は、孤状の突起である。19は突起部に貫通孔を有する。17・18は口縁部に沿って２段、19は貫通孔の周縁、第17図24は隆線に沿って刺突文が施される。14は把手状のもの、15は２つの沈線文が施される。６・９～11・20の口縁部には磨消縄文が施され、12は無文である。

浅　鉢

ａ：口縁部が内弯し、端部が外反気味になる。胴部は直線的にしぼまる器形のもの（第14図１）

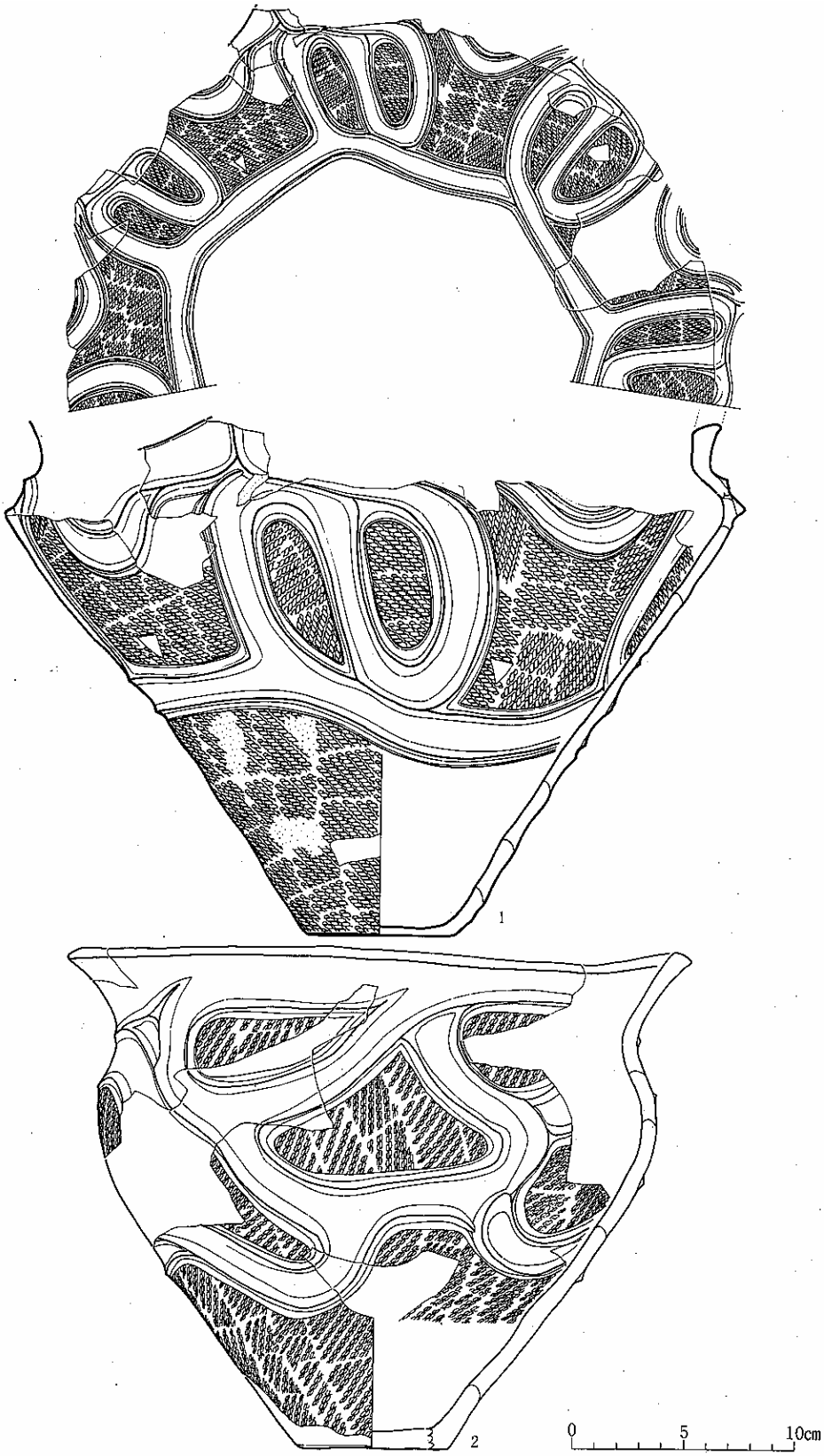
器上半に隆沈線による変形した「Ｓ」字状文が各部分で連結し、その間に楕円形や不整方形の区画を生じさせ、その内部にはＬＲ縄文が充塡されている。胴部には、ＬＲ縄文が施文されている。全体に火熱を受けているために、器面が赤褐色を呈し、脆くなっている。

ｂ：口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴上半部で脹らむ器形のもの（第14図２）

胴部には、隆線による変形「Ｓ」字状文が各部分で複雑に連結し、その間に楕円形や不整三角形状の区画を生じさせ、その内部にＲＬＲ縄文が充塡されている。変形「Ｓ」字状文の末端には一部鰭状の隆線が施文される。胴下部にはＲＬＲ縄文が施されている。

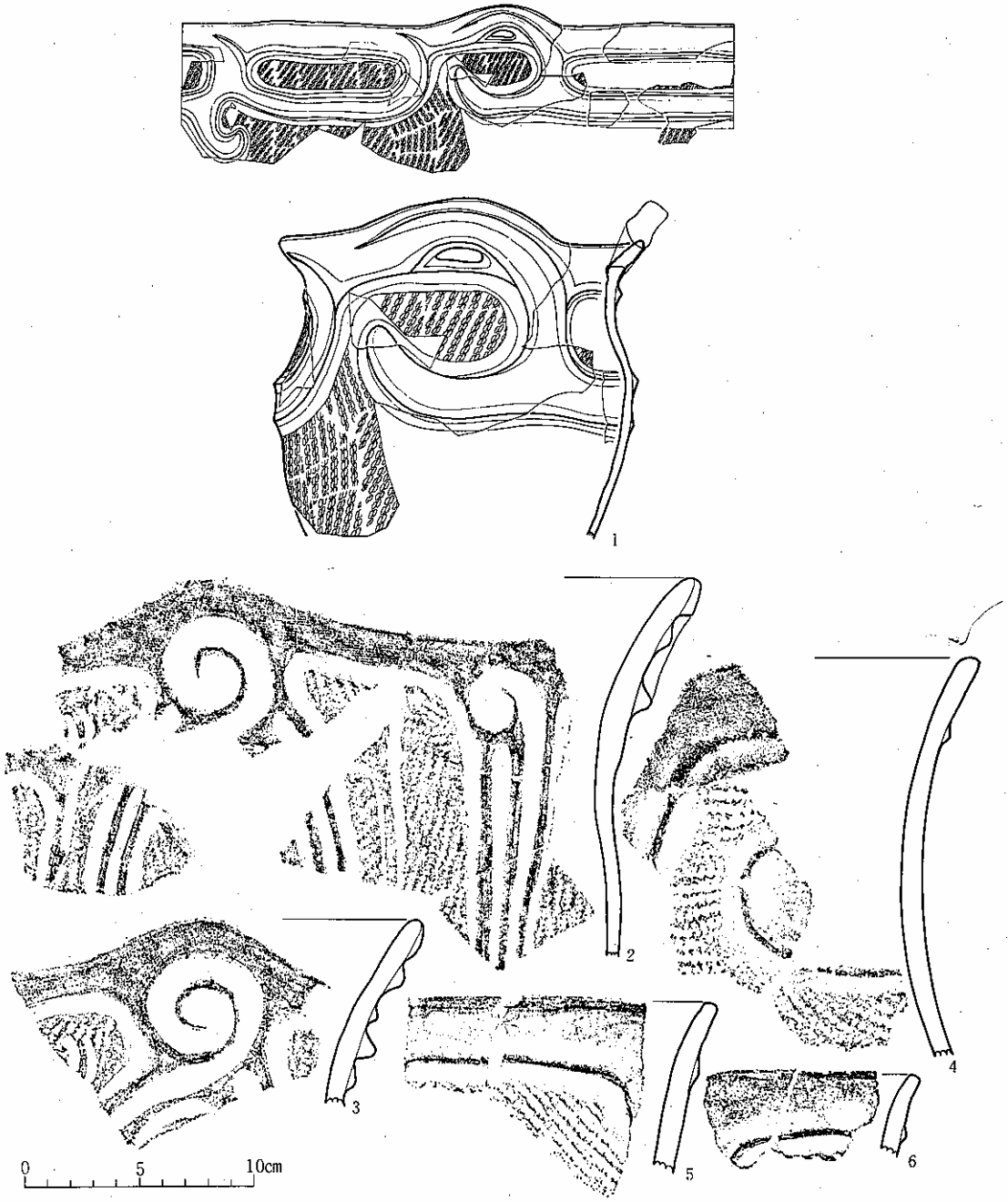
ｃ：口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴部全体が脹らむ器形のもの（第15図１）

突起部には、貫通孔がある。器上半に変形「Ｓ」字状文が隆線によって描かれ、その外側に



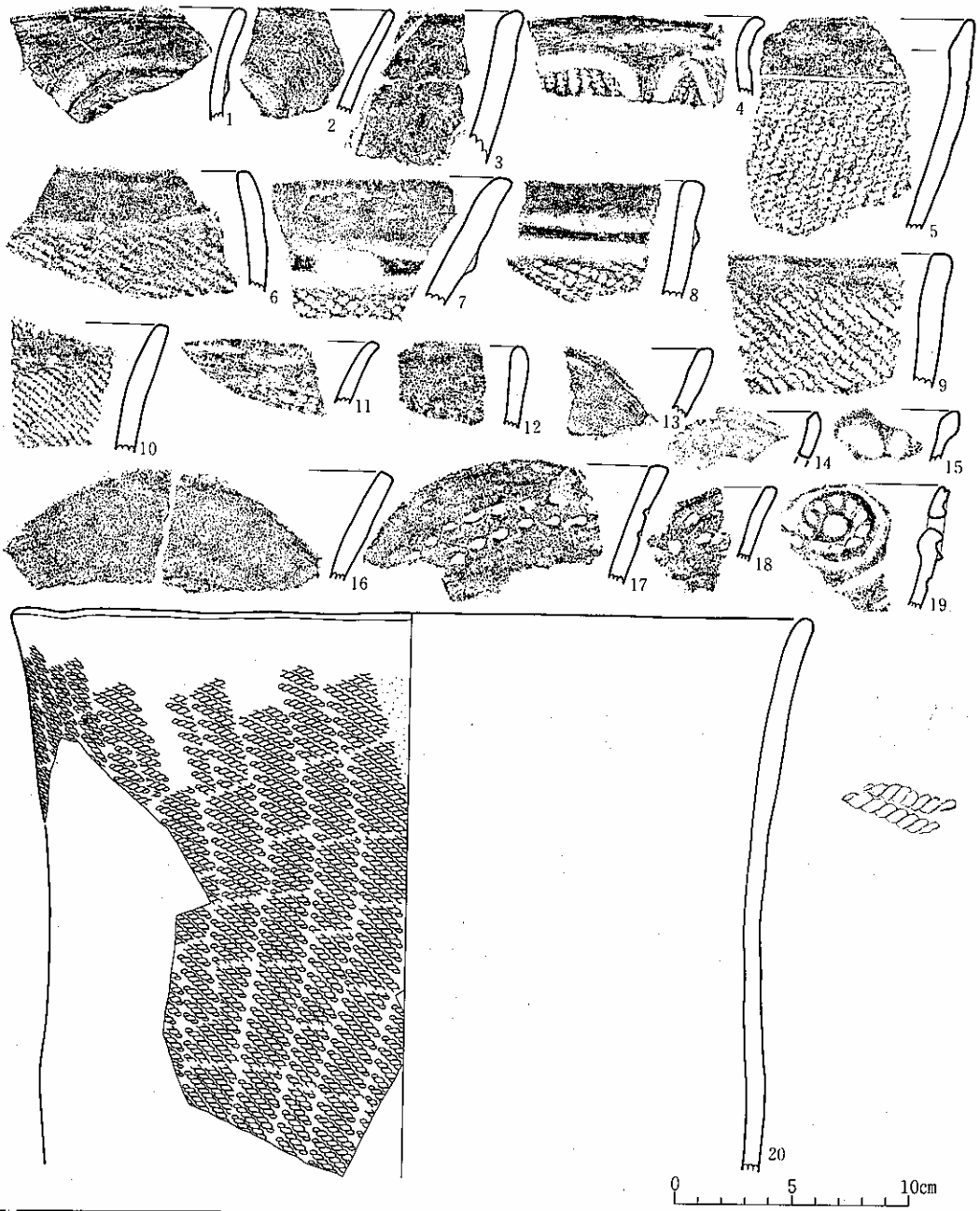
番号	地区・層位	器形・分類	地　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　文	図版
1	3住・埋設土器	浅 鉢 A	LR縄文・LR縄文充填	7－18	2	3住・埋土	浅 鉢 B	RLR縄文・RLR縄文充填	7－19

第14図　第３号住居跡出土土器



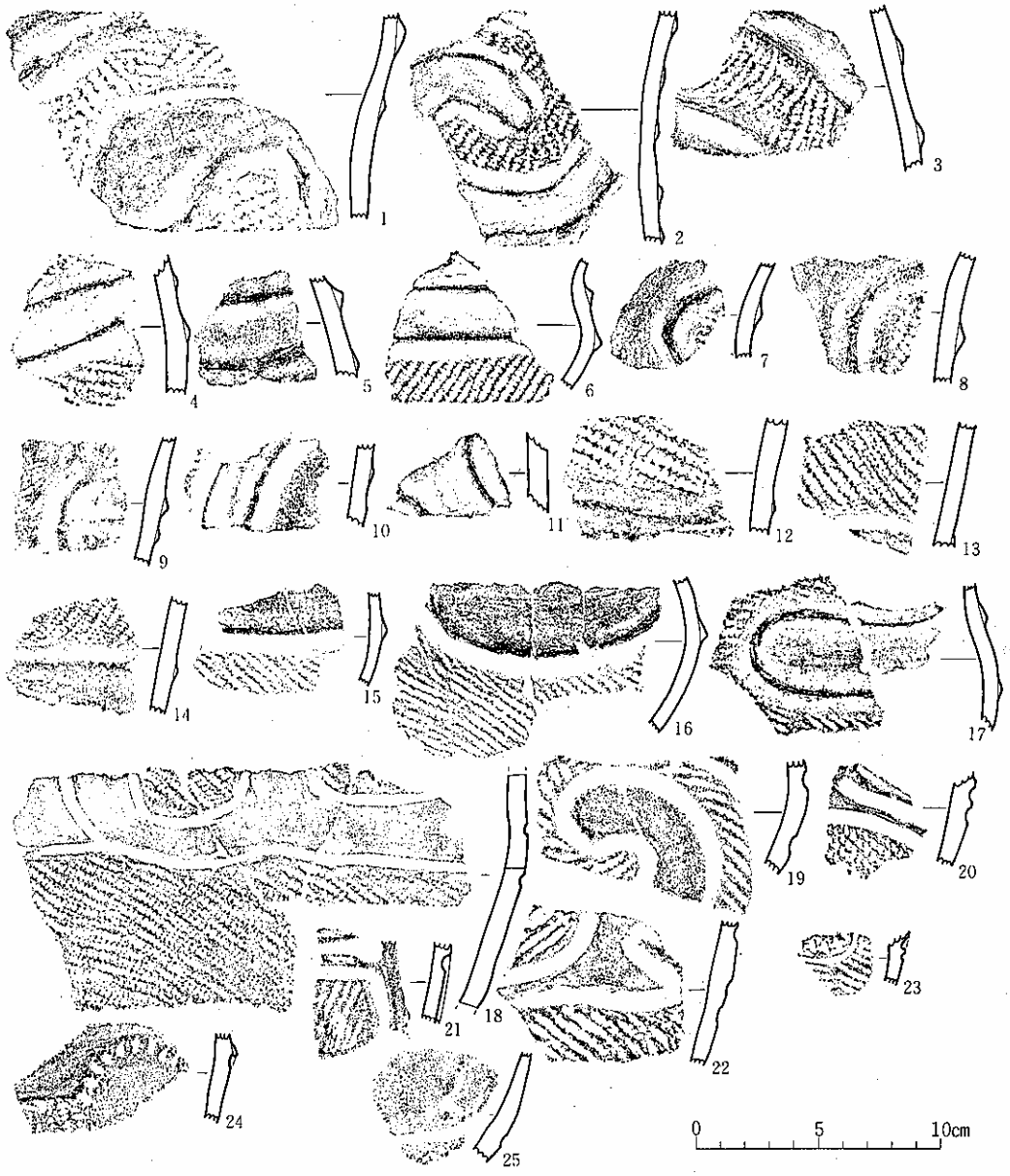
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	3住・埋土	浅鉢C	RLR縄文・RLR縄文充塡	7—20	4	3住・埋土	深鉢BⅡc	LR縄文充塡	
2	3住・埋土	深鉢BⅠ	RL縄文充塡		5	3住・埋土	深鉢BⅡc	LR縄文充塡	
3	3住・埋土	深鉢BⅠ	RL縄文充塡		6	3住・埋土	深鉢BⅡc	縄文充塡	

第15図　第3号住居跡出土土器



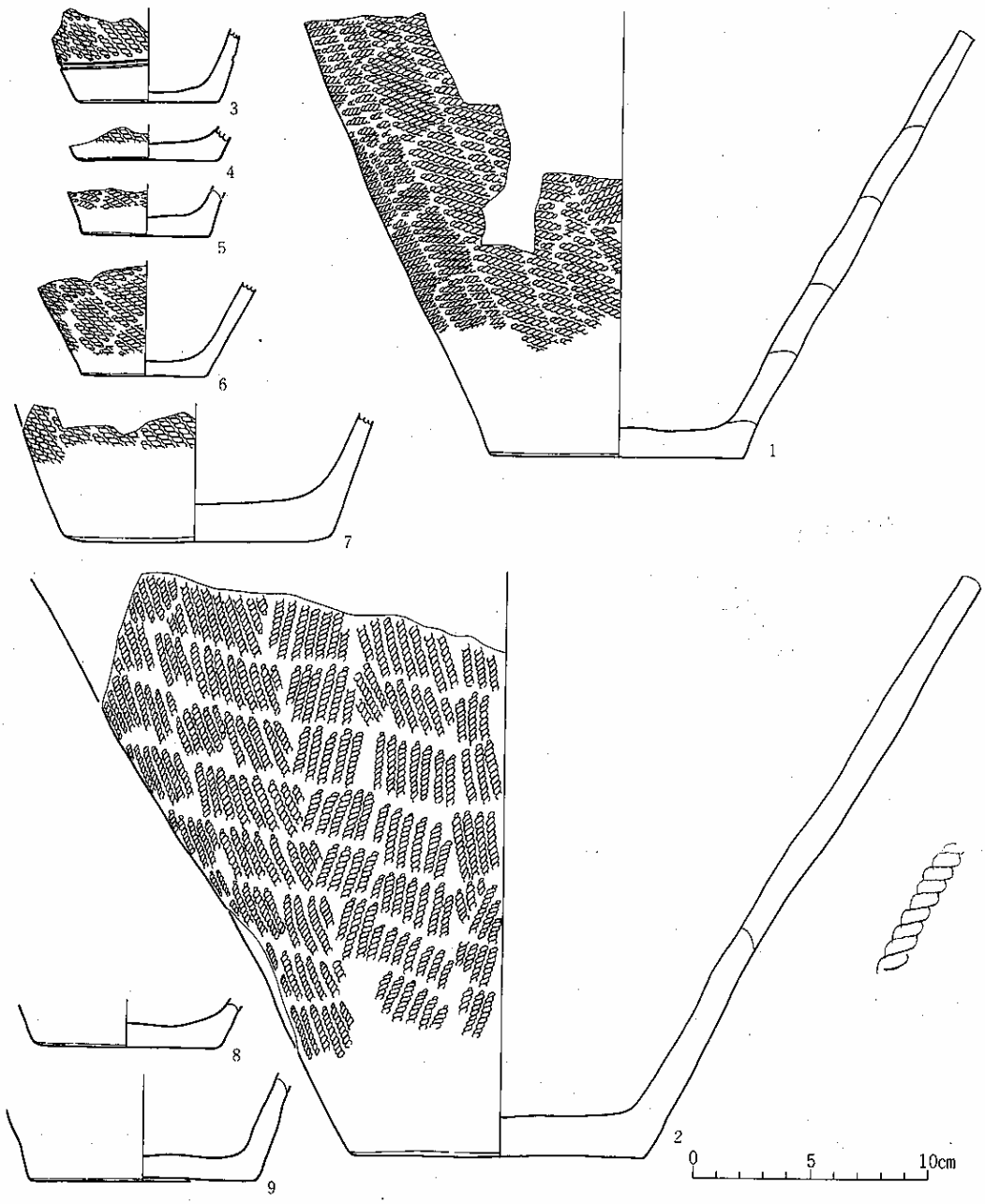
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	3住・埋土	深鉢BⅡc	不　　明		11	3住・埋土	深鉢Ab	RLR縄文	
2	3住・埋土	深鉢BⅡc	——		12	3住・埋土	深　鉢	——	
3	3住・埋土	深鉢BⅡc	——		13	3住・埋土	深　鉢	——	
4	3住・埋土	補珍土器	RLR縄文充塡		14	3住・埋土	深　鉢	——	
5	3住・埋土	深鉢Ab	RLR縄文	8－1	15	3住・埋土	深　鉢	——	
6	3住・埋土	深鉢Ab	L R 縄 文	8－2	16	3住・埋土	深　鉢	——	8－3
7	3住・埋土	深鉢Ab	L R 縄 文		17	3住・埋土	深　鉢	——	8－4
8	3住・埋土	深鉢Ab	LRL縄文		18	3住・埋土	深　鉢	——	8－5
9	3住・埋土	深鉢Ab	L R 縄 文		19	3住・埋土	深　鉢	——	8－6
10	3住・埋土	深鉢Ab	L R 縄 文		20	3住・埋土	深鉢Ab	L R 縄 文	

第16図　第３号住居跡出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填	8－9	14	3住・埋土	深　鉢	RL縄文充填	
2	37-116・Ⅱ層	深　鉢	LR縄文充填	8－10	15	3住・埋土	深　鉢	L　R　縄　文	
3	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填		16	3住・埋土	深　鉢	L　R　縄　文	8－12
4	3住・埋土	深　鉢	LR縄文・LR縄文充填		17	3住・埋土	深　鉢	L　R　縄　文	8－11
5	3住・埋土	深　鉢	縄　　文		18	3住・埋土	深　鉢	LR縄文・LR縄文充填	
6	37-116・Ⅱ層	浅　鉢	R　L　縄　文	8－7	19	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填	8－13
7	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填		20	3住・埋土	深　鉢	R　L　R　縄　文	
8	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填		21	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填	
9	3住・埋土	深　鉢	縄　　文		22	3住・埋土	深　鉢	LR縄文・LR縄文充填	8－14
10	37-116・Ⅱ層	深　鉢	縄　　文		23	3住・埋土	深　鉢	R　L　縄　文	8－15
11	3住・埋土	深　鉢	縄　　文		24	3住・埋土	深　鉢	――	8－16
12	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填		25	3住・埋土	注口土器？	R　L　R　縄　文	
13	3住・埋土	深　鉢	LR縄文充填						

第17図　第３号住居跡出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	3住・埋土	深　鉢	L R 縄 文		6	3住・埋土	深　鉢	L R 縄 文	
2	3住・埋土	深　鉢	RL縄文(斜位・横位)		7	3住・埋土	深　鉢	L R 縄 文	
3	3住・埋土	深　鉢	L R 縄 文		8	3住・埋土	深　鉢	——	
4	3住・埋土	深　鉢	L R 縄 文		9	3住・埋土	深　鉢	——	
5	3住・埋土	深　鉢	L R 縄 文						

第18図　第３号住居跡出土土器

は長楕円状の区画を生じさせ、その内部にＲＬＲ縄文が充填されている。また、変形「Ｓ」字状文の末端は（一ヶ所）渦巻状になっている。

胴部資料

深鉢もしくは浅鉢の胴部破片であるが、その器形・文様については、不明な点が多く、分類することが難しい。

文様の施文技法をみると、隆線で文様が描かれるもの（第17図１～17）、沈線で文様が描かれるもの（第18図18～23）がある。第17図25は、注口土器の胴部破片で、沈線で無文帯と縄文帯とを区画している。

底部資料

深鉢もしくは浅鉢の底部である（第18図３～９）。胴部下端に沈線の巡るもの（３）もある。

〔第４号住居跡〕

本住居跡は、第１号住居跡の北西に有り切られている。第Ⅲ層ローム層で確認したが、壁はみられず、床面のプランだけが検出された。遺構はさらに調査区外へ広がるため、平面形は不明であるが、検出された部分から円形状のものと考えられる。本住居跡には、第３号住居跡と同じく埋設土器を伴う複式炉が南側壁に石組部の端を接して存在することがわかった。

今回の調査では、確認だけに留めた。

〔第５号住居跡〕

本住居跡は、第３号住居跡の東側の37－118・119グリッド附近で確認されたが、その際、一部を破壊してしまった。その他の部分については、未調査である。

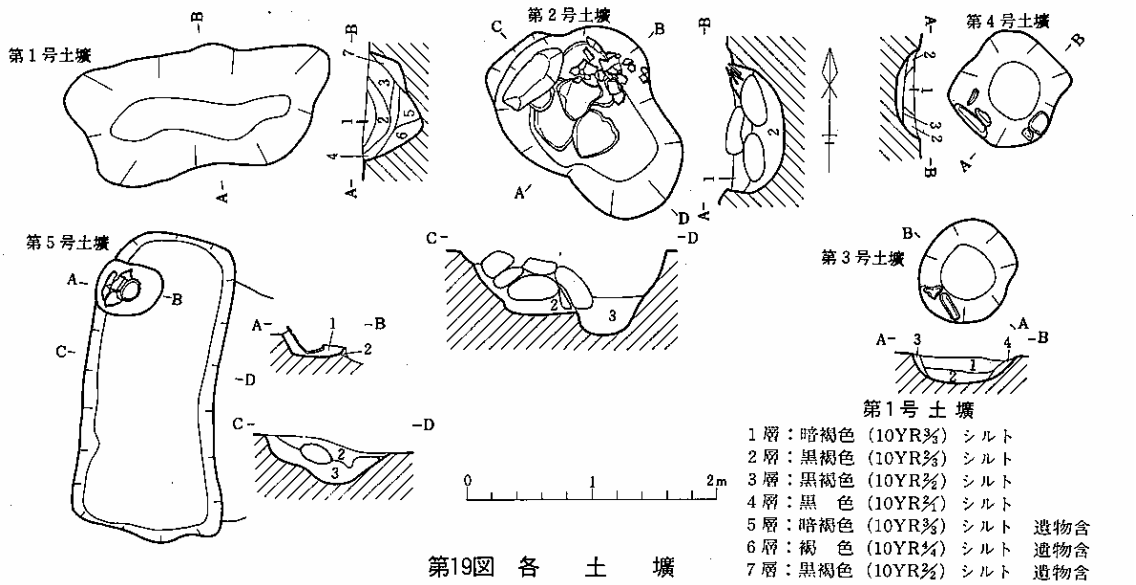
（2）土　壙

第１号土壙

０－80グリッド内の第Ⅲローム層上面で確認した。平面形は、長方形の長軸約100㎝、短軸約90㎝のものである。底面は舟底形で、遺構確認面からの深さは約46㎝である。堆積土は、レンズ状に堆積し、全体的に暗褐色シルト層であるが、下層に少々ローム、を含む。遺物も小破片であるが、全体的に各層に含まれている。特に、２層に多くみられる。自然堆積のものと思われる。

第２号土壙

０－89グリッド内の第Ⅲローム層上面で確認した。第２号土壙は平面形が長軸約70㎝、短軸約120㎝の楕円形のもの（A）と、径約60㎝の円形のもの（B）とがある。Aにはひとかかえもある巨礫が数個底面より浮いた状態で積み重なれており、石組の上面と北壁に接して２個体（第



第19図　各　土　壙

20図５・６）の土器がつぶれて出土している。石組は東壁において、ローム層中にくい込んでいる。底面は、石組部のところでくぼみ状になっているが、石組部と東側の壁との間のところは一段掘り込まれた状態の円形の平面形である。遺構確認面から石組部の底面までの深さは約50cm、一段掘り込まれた状態のところで約70cmある。Ｂは底が浅く、小礫が数個点在している。底面に小破片の地文だけの土器がみられた。

出土状況から考えて、２個体の土器はこの遺構に伴うものであり、遺構の時期を知る上での資料となり得る。

第３・４号土壙

第３・４号土壙は隣接して０－101グリッド内で確認された。第３号土壙は、直径約70cmの円形で、第４号土壙は一辺が約80cmの隅丸方形で、底面がおのおの丸底を呈している。遺構確認面からの深さは、おのおの約15cmと約10cmを計る。底面は小礫がみられるが、地山のものと考えられる。堆積土中には、おのおの焼土や炭化物がみられる。いずれも自然堆積のものであるが、第21図１・２が出土している。

第５号土壙

37（ライン）－87グリッド内で、第Ⅲローム層上面で確認された。平面形は南北を指す長軸約240cm、短軸約100cmの隅丸方形のものと思われるが、本遺構が、風倒木による攪乱された層を掘り込んでいるため、東壁の検出が難しかった。遺構内中央部には、底面から浮いた状態で河原石があり、北西の壁際に、土壙を掘り込んだ状態で埋設土器（第22図15）が据えられていた。これらは、遺構に伴うものではない可能性が大きい。堆積土１・２層中からは、土器片やフレイクが出土している。遺構確認面からの深さは約30cmで、底面は舟底形である。

なお、写真にみられる石は浮いているものである。

第６号土壙

第３号住居跡の南壁に隣接したところに位置する。長軸約180㎝、短軸約140㎝の楕円形のプランを呈するが、底面は南東部で２段になっており、１段低い部分の底面は円形になっている。堆積土は黒褐色砂質シルトで、２層中に土器片を少々含む。

第７号土壙

第１号住居跡の西側壁で切り合っており、住居跡よりも新しいものである。調査区外に遺構が広がっており、全体形は不明である。

第８・９号土壙

第１号住居跡の東壁に隣接したところで、北側より８号、南側に９号土壙が位置する。平面形は８号が径約100㎝の円形であり、９号は幅約160㎝の隅丸方形のものであるが、礫層の露出している層に南側が接しており、不明である。遺構確認面から底面の深さは８号が約60㎝でくぼみ状の底面であり、９号は約21㎝である。８号土壙では堆積土中から土器片や石器が出土しているが、９号土壙からはあまりみられない。いずれも自然堆積のものである。

各土壙出土遺物

各土壙出土の遺物は、多くの場合、堆積土中からの出土である。ただ、第２号土壙では、土器が石組部上面にみられ、遺構に伴うものと言える。以下、各遺構出土の土器について述べる。（第20・21・22・23図）

第20図１は胴上部で脹らみ、直立する口縁で、下端と胴部に沈線文が施文される。

第20図２は直立ぎみの平口縁で、盲孔を中心に放射状に数条の沈線文が描かれる。沈線間を磨消する。３は内・外面に稜をもつもの。４は「ハ」字状磨消帯の間に沈線文が描かれる胴部破片。５は胴部下半部から胴上部にかけて外傾し脹らむ。頚部では内弯し、口縁部で外反する波状口縁の深鉢である。口縁下端に１条の沈線が巡り、波状部の環状沈線文を連結する。また、頚部にも環状沈線文が付され、２条１対の沈線による磨消帯が下垂し、これに向い合う形でさらに、２対の磨消帯が描かれる。同様の文様が状部間の胴部にも屈曲した沈線下に描かれる。地文は条痕である。口縁部と胴部下部は磨かれている。

６は、５つの波状部をもつ胴下部から胴上部にかけて外傾し、口縁部にかけて直立する深鉢である。地文はＲの撚糸を使用し、棒に巻きつける際に間隔をあけない部分と、最後の一巻だけの間をあけた部分と２種類の部分で施文している。胴部下端で磨消している。全体的に薄手である。

第21図１は、立ち上がりで若干脹らみ、胴下半から胴上部まで開きぎみになり、口縁部では外反する波状口縁を有する深鉢土器である。大波状部をもつが不明である。小波状部は２つの

第2号 土 壙

1層：黒　　色(10YR3/2) シルト　炭化物・遺物
2層：暗 褐 色(10YR3/4) 砂質シルト
3層：褐　　色(10YR5/4) 砂質シルト 炭化物

第3号 土 壙

1層：黒 褐 色(10YR3/2) シルト　炭化物
2層：褐　　色(10YR5/4) 砂質シルト 炭化物
3層：暗 褐 色(10YR3/3) シルト
4層：にぶい黄褐色(10YR5/3) シルト

第4号 土 壙

1層：黒 褐 色(10YR3/2) シルト　焼土・炭化物
2層：褐　　色(10YR5/4) シルト
3層：にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト

第5号 土 壙

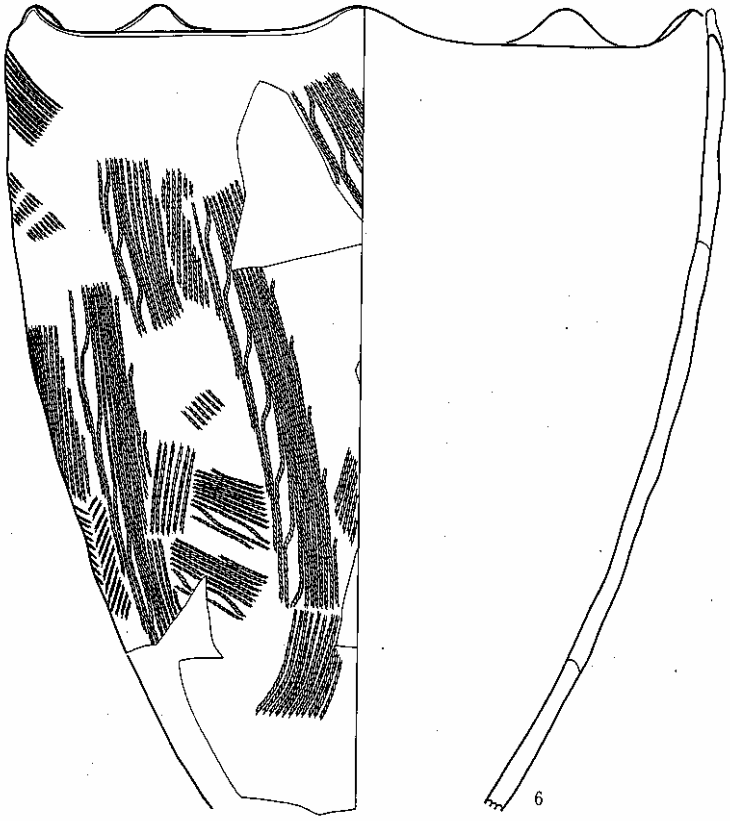
1層：黒 褐 色(10YR3/2) シルト　しまりなし
2層：黒　　色(10YR3/1) シルト
3層：黒 褐 色(10YR3/2) シルト　地山ブロック含む。

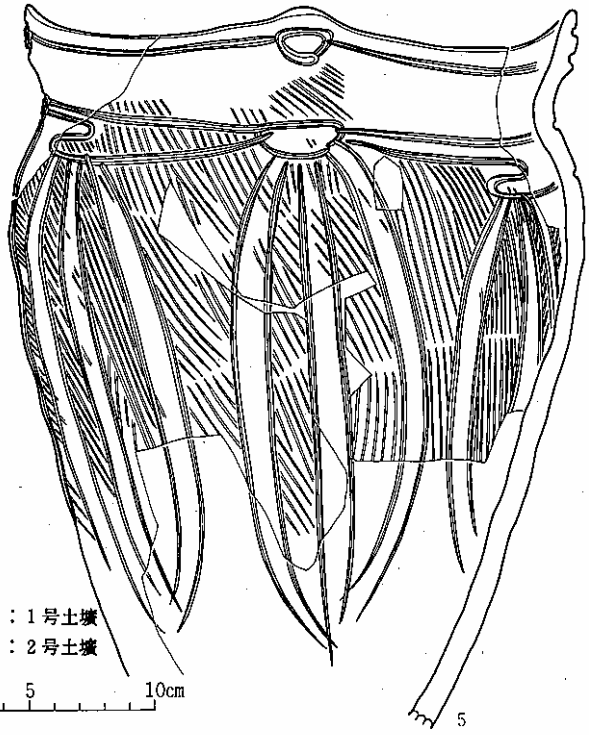
第6号 土 壙

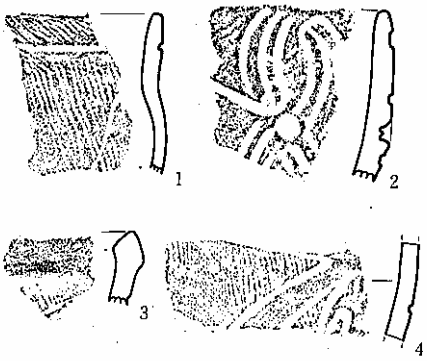
1層：黒 褐 色(10YR3/2) 砂質シルト 遺物含む
2層：黒 褐 色(10YR3/2) 砂質シルト 中礫含む
3層：暗 褐 色(10YR3/4) 砂土
4層：暗 褐 色(10YR3/3) 砂質シルト

第8号 土 壙

1層：黒　　色(10YR3/1) 砂質シルト 遺物含む
2層：黒 褐 色(10YR3/3) 砂質シルト 遺物含む
3層：暗 褐 色(10YR3/4) 砂質シルト
4層：黒 褐 色(10YR3/2) 砂質シルト
5層：暗 褐 色(10YR3/3) 砂質シルト
6層：黒 褐 色(10YR3/2) 砂質シルト





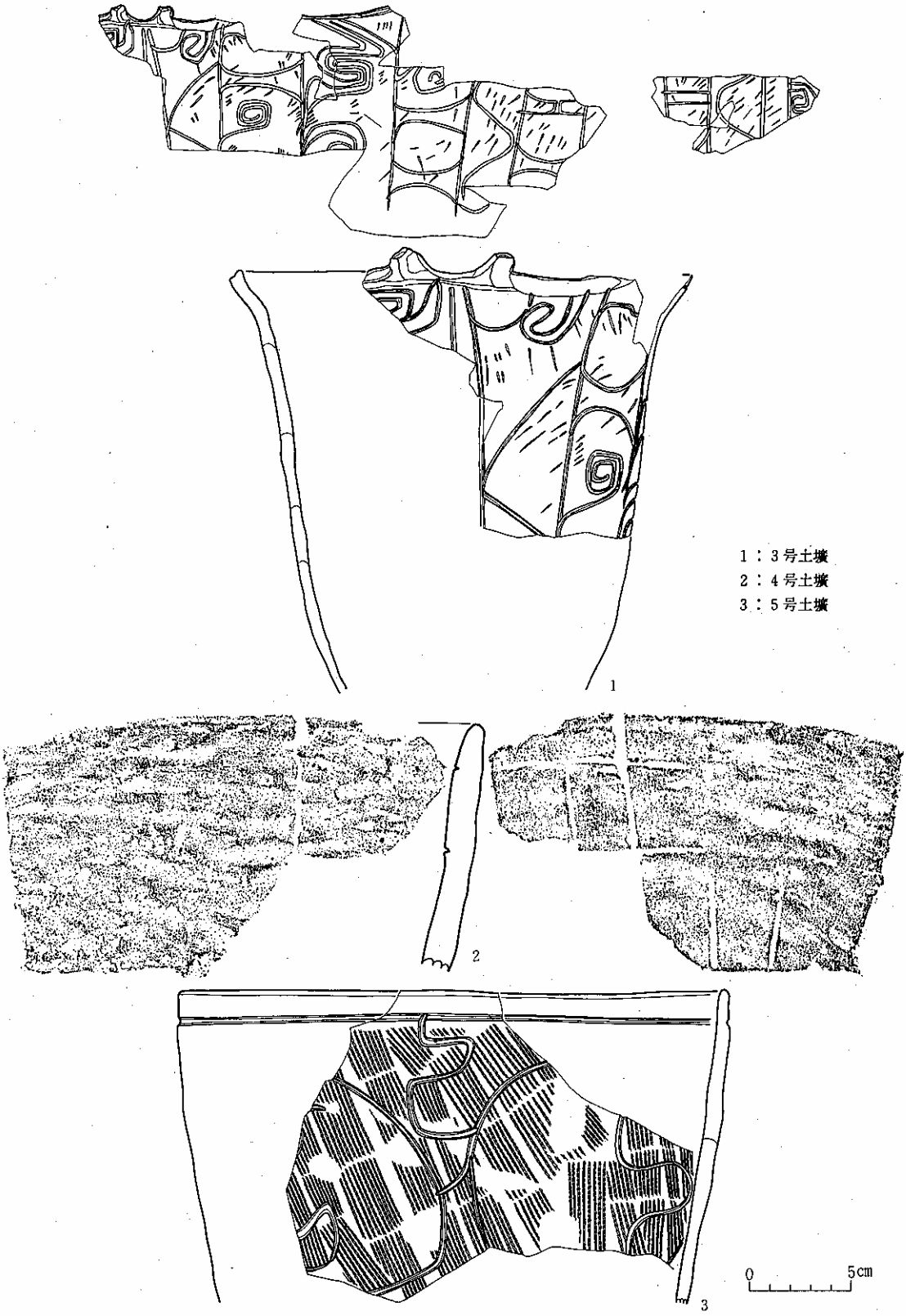


1～4：1号土壙
5・6：2号土壙

0　5　10cm

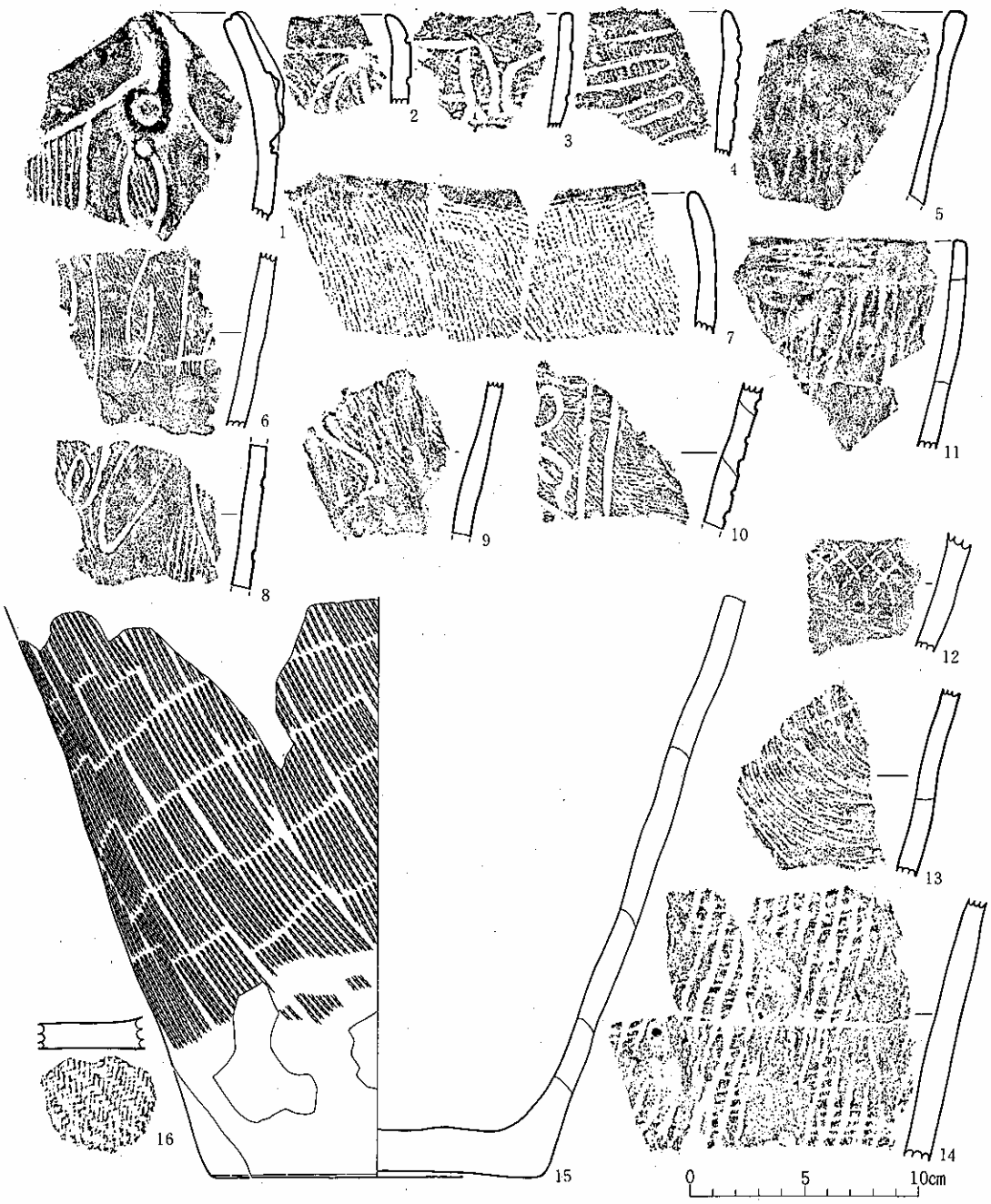
番号	地区・層位	器形・分類	地　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　文	図版
1	第1土壙・埋土	深鉢ⅢC	R 撚 糸 文	8－18	4	第1土壙・7層	深鉢ⅢC	R 撚 糸 文	8－20
2	第1土壙・埋土	深鉢ⅢC	L R 縄 文 ?	8－19	5	第2土壙	深　鉢	条　線	8－21
3	第1土壙・1層	深鉢ⅢC	R 撚 糸 文		6	第2土壙	深　鉢	R 撚 糸 文	8－22

第20図　各土壙出土土器



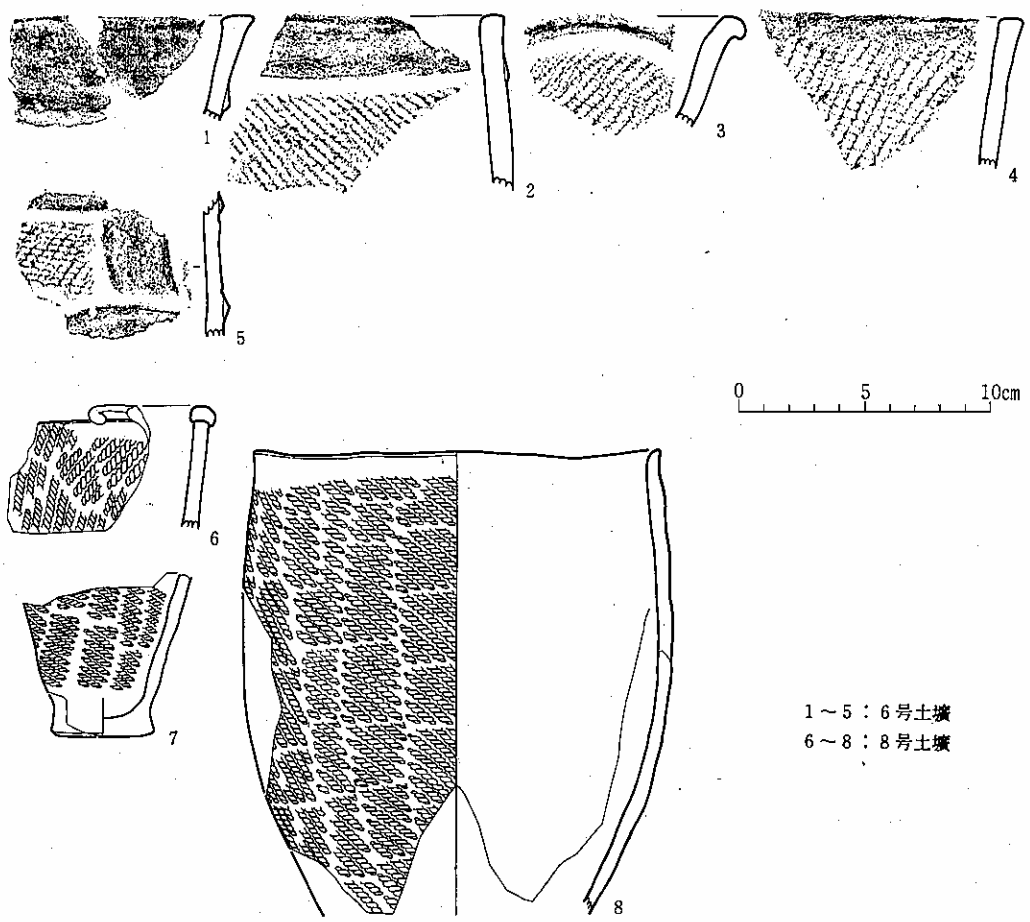
番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	第3号土壙・埋土	深　鉢	無文・カギH		3	第5号土壙・埋土	深鉢ⅢC？	R　撚　糸　文	8－24
2	第4号土壙・埋土	深鉢ⅢF4	無　　文	8－23					

第21図　各土壙出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	第5号土壙・1層	深鉢ⅢC	R撚糸文	9－1	9	第5号土壙・2層	深鉢	R撚糸文	9－7
2	第5号土壙・2層	深鉢ⅢC	R撚糸文	9－2	10	第5号土壙・1層	深鉢	R撚糸文	9－9
3	第5号土壙・2層	深鉢ⅢC	R撚糸文	9－3	11	第5号土壙・1層	深鉢ⅢF3	R撚糸文 5と同一	
4	第5号土壙・1層	深鉢ⅢC	R撚糸文	9－4	12	第5号土壙・1・2層	深鉢	R撚糸文	
5	第5号土壙・2層	深鉢ⅢF3	R撚糸文 11と同一	9－8	13	第5号土壙・1・2層	深鉢	条線	9－10
6	第5号土壙・2層	深鉢	R撚糸文		14	第5号土壙・1層	深鉢	R撚糸文	9－11
7	第5号土壙・1層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	9－5	15	第5号土壙・埋設土器	深鉢	R撚糸文	
8	第5号土壙・1層	深鉢	R撚糸文	9－6	16	第5号土壙・埋土	深鉢	網代痕	

第22図 各土壙出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	第6号土壙・2層	深鉢	――	9－12	5	第6号土壙・埋土	深鉢	L R 縄文	9－15
2	第6号土壙・2層	深鉢	L R 縄文	9－13	6	第8号土壙・埋土	深鉢	L R 縄文	9－17
3	第6号土壙・2層	深鉢	RLR縄文	9－14	7	第8号土壙・埋土	袖珍土器	L R 縄文	9－16
4	第6号土壙・2層	深鉢	RLR縄文		8	第8号土壙・埋土	深鉢	L R 縄文	9－18

第23図　各土壙出土土器

くぼみをもつ突起がつき、口縁端部は少々くぼみ気味になでられている。胴部文様は、縦位に12区画する沈線が施され、その区画帯内部に渦巻文、ジグザグ文、「X」字状文の規則性の不明な沈線文様が描かれる。地文にはケズリの痕跡がみられる。

第21図２は、外反ぎみで厚い無文の口縁部である。内面に格子状の沈線文が描かれる。

第21図３は、胴部から口縁部にかけて外傾し、頚部に口縁部無文帯と胴部文様帯とを区画する１条の沈線が巡る。口縁部から「S」字状沈線が下垂し、胴部に円状の沈線文を描き、その中に単位不明の文様を描く。地文はRの撚糸文である。

第22図１は、波状口縁で末端に「ノ」字状の貼付けがなされ、口縁部無文帯と胴部文様とを区画する沈線文が巡る。胴部には「ハ」字状の磨消帯が施され、その間に連鎖文を描く。

第22図２も１と同様、磨消縄文によって文様が描かれ、３は沈線文による文様が施される。

第22図４は区画文として頚部に沈線を巡らし、横位に磨消縄文する。

第22図５・６は同一個体で波状口縁で、内面にケズリがはいる。

第22図７は内弯ぎみの地文（R撚糸文）だけの口縁部破片である。

図22図８～11は、胴部資料である。８～11は磨消縄文の間に連鎖文などの沈線文様が描れる。

第22図12は網目状撚糸文、13は孤状条線文、14は角棒状の軸に撚糸を巻きつけて施文したもので、撚糸はRである。第22図15は、掘り方を有し据えられていたRの撚糸地文の深鉢である。

第23図１～７・９は深鉢の口縁で直立もしくは外反する。１・２は隆帯によって頚部に施文され、３も口縁部に隆帯が貼りつけられたもので肥厚している。

４・９は口縁部下端が磨消されており、胴部はＲＬ、ＬＲの縄文が施されている。

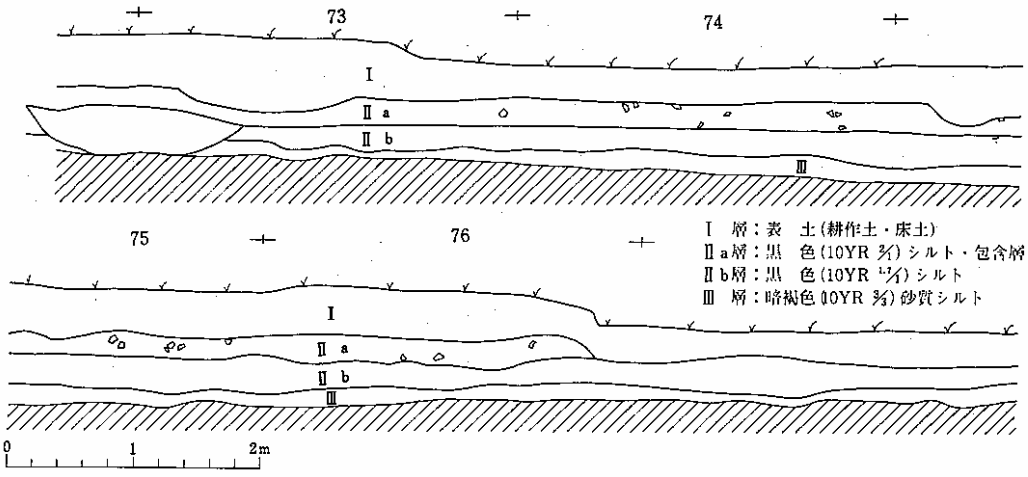
５・６は隆沈線によって文様が描かれている。７は外反する口縁端部が平坦であり、棒状の貼り付けがなされる。地文はＬＲ縄文である。

８は袖珍土器である。底部が厚く、全体に粗雑なつくりをしている。赤褐色を呈している。地文は、ＬＲ斜行縄文である。

（３）遺物包含層

遺物包含層は住居跡の立地する微高地の西方の沢をはさんだ37ラインの72～86グリッド附近にある。本遺跡は前述したように微高地と低湿地の地形が入り込んでおり、本包含層もこの微高地から低湿地になだらかに傾斜してゆく斜面に形成された。この広がりは、微地形などから判断して、37ラインの北側と、南側のなだらかな斜面に広がってゆくものと思われる。

包含層の層位は大別すると、３層にわけられる。第Ｉ層は水田の耕作土と床土で少量の遺物



第24図　遺物包含層セクション図

が含まれる表土である。第Ⅱ層は、いわゆる黒ボク層で、上部層に遺物を多量に含む部分（ａ）と、遺物を含まない下部層（ｂ）とがみられる。このａの遺物包含層からは、縄文土器・土製品・石器が出土しているが、一つの面で出土しているわけでなく、層の中に散在した状態で出土している。第Ⅲ層は暗褐色の砂質シルト層となる。

遺物包含層出土土器

遺物包含層から出土した土器は、すべて破片で復原できるものはない。この中の比較的特徴の明瞭な被片について検討を加え、「器形」「文様」を基準にして分類したい。

出土土器としては、深鉢・浅鉢・注口土器がある。

口縁部資料

口縁部資料には、深鉢・浅鉢・注口土器がある。深鉢には、胴上部で脹らみ、口縁部が外反するもの（深鉢Ⅰ類）、胴上部から口縁部が外反気味に立ち上がるもの（深鉢Ⅱ類）、底部から緩かに立ち上がり、口縁部が内弯気味・外弯気味のものもあるが、ほぼ直立するもの（深鉢Ⅲ類）、頚部でくびれ、口縁部が外傾もしくは外反するもの（深鉢Ⅳ類）、胴部から頚部にかけて外傾し口縁部が強く内傾するもの（深鉢Ⅴ類）がある。

深鉢Ⅰ類：胴上部で脹らみ、口縁部が外反するもの

Ａ類：胴部文様が隆線で描かれるもの（第25図１～６・８）（１～４・８及び５・６は同一個体）
薄手の波状口縁で、頚部に１条の鍔状の隆線が巡り、波頂部には渦巻文が付される。
胴部には一部刺突の施された隆線による文様が描かれている。磨消縄文技法が施される。６は突起部に貫通孔を有する。

Ｂ類：胴部文様が沈線で描かれるもの（第25図７）

「ハ」字状の沈線文の中に盲孔や連鎖文が描かれる。磨消縄文技法を用いている。

深鉢Ⅱ類：胴上部から口縁部にかけて、外反気味に立ち上がるもの（第25図９）

胴中位が角ばって稜がつくものと思われる。口縁部に小突起がつき、胴部には下垂する連鎖状隆線と横位隆線によって方形区画文が描かれる。

深鉢Ⅲ類：底部から緩かに立ち上がり、口縁部が内弯気味、外弯気味のものもあるが、ほぼ直立するもの。

Ａ類：胴部文様が渦巻状の沈線文のもの（第25図10～13）

頚部から胴上部にかけて、渦巻状に沈線文様が描かれ、磨消縄文技法が用いられている。

Ｂ類：胴部文様が楕円の隆線文のもの（第25図14）

胴部に、縦位に文様が描かれ、隆線上と区画された部分の内側に沈線が施される。

Ｃ類：胴部文様が「ハ」字状の沈線文のもの（第26図１～12・18・21～23・25・26）

磨消縄文技法が用いられ、「ハ」字状沈線文の起点に、盲孔、連鎖文が描かれる。

番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地　　文	図版
1	37−74・Ⅱa層	深鉢ⅠA	LR縄文充塡　2〜4・8同一	9−19	8	37−74・Ⅱa層	深鉢ⅠA	LR縄文充塡	9−25
2	37−74・Ⅱa層	深鉢ⅠA	LR縄文充塡	9−20	9	37−76・Ⅱa層	深鉢Ⅱ	――	9−27
3	37−74・Ⅱa層	深鉢ⅠA	LR縄文充塡	9−21	10	37−73・Ⅱa層	深鉢ⅢA	LR縄文	9−28
4	37−74・Ⅱa層	深鉢ⅠA	LR縄文充塡	9−24	11	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢA	R撚糸文	9−29
5	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅠA	―― 6と同一	9−22	12	37−79・Ⅱa層	深鉢ⅢA	R撚糸文	9−30
6	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅠA	――	9−26	13	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢA	R撚糸文	9−31
7	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅠB	LR縄文	9−23	14	37−75・Ⅱa層	深鉢ⅢB	RLR縄文	9−32

第25図　遺物包含層出土土器

Ｆ類：口縁部・胴部が地文あるいは無文のもの

１類：頚部に隆線の巡るもの（第26図16）

１条の刻目隆線が付されている。これは、Ｆ類に類似する土器の一部とも考えられる。

２類：頚部に沈線の巡るもの（第27図９～11）

３類：頚部に区画線のないもの（第28図、第29図１～３）

他より厚手で、胴部の内面に条線文が施されるもの（第28図１）や口縁頂部に縄文が施されるもの（第28図９・10）がある。第29図１～３には小突起がつく。

深鉢Ⅳ類：胴上半部で脹らみ、頚部でくびれ、口縁部が外傾もしくは外反するもの

Ａ類：胴部文様が渦巻状の沈線文のもの（第26図19、第27図12）

12は小突起を有する口縁部で上端に沈線が施されている。胴部には、蕨手状に沈線文が描かれ、懸垂文が下垂する。磨消縄文技法が用いられている。文様間には、ジグザグ文が下垂する。第26図20は、これと類似するものである。

Ｂ類：胴部文様が「ハ」字状沈線文の起点に渦文が描かれる。

Ｃ類：胴部文様が単位不明の沈線文のもの（第27図５・６）

文様単位は不明であるが、Ａ・Ｂ類とは異った文様と思われるので、別に分類した。磨消縄文技法が用いられる。頚部に盲孔が付される。

Ｄ類：頚部に文様のあるもの（第27図７）

平行沈線間に連続の刺突文がみられる。

深鉢Ⅴ類：胴部から頚部にかけて、直線的に外傾し、口縁部が内傾するもの（第29図４～６）

口縁部に長楕円文と盲孔が、胴部には単位不明の沈線文がみられ、５は磨消縄文技法が用いられている。

第29図７～14は器形が明らかでない破片である。７・８はⅢ・Ⅳ類のいずれかにつく突起と思われる。７には円文、８には渦巻文がみられる。９～14は頚部がくびれる器形と思われるが、

11・12はＡ、Ｃ類と異って、磨消縄文技法が観察されないが、いずれも小破片で、Ａ、Ｃ類にも磨消が不十分なものがあることから、これらのいずれかに含まれる可能性が大きい。

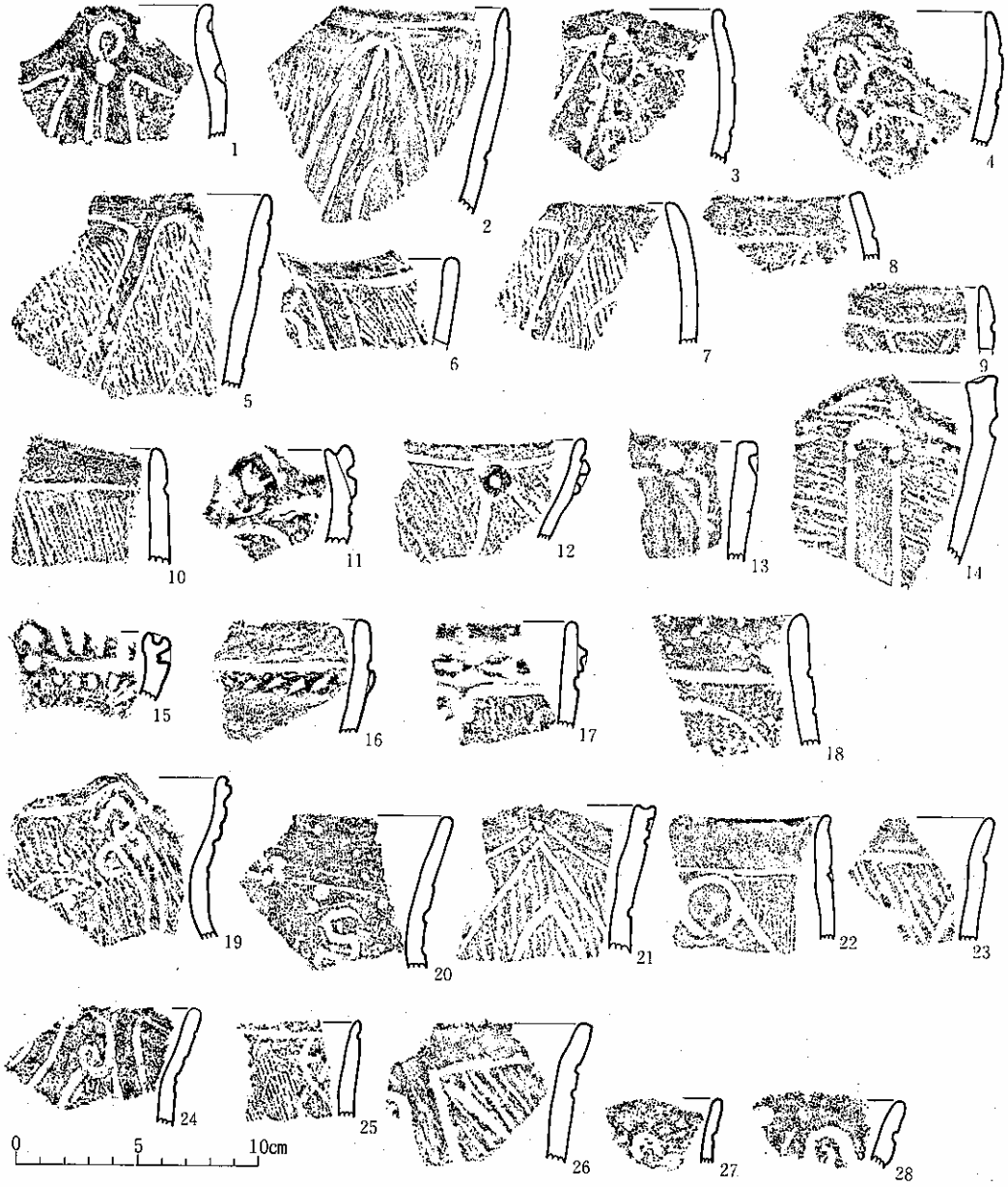
Ｄ類：胴部文様が長方形の沈線文のもの（第26図13・14）

頚部に盲孔が付され、その下に長方形沈線文が下垂する。

Ｅ類：口縁部にのみ文様をもつもの（第26図15、第27図13）

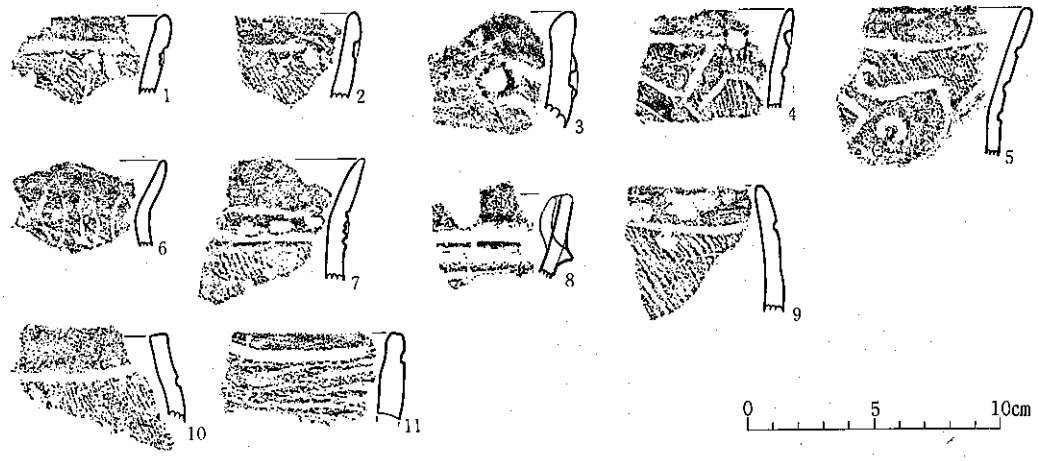
15は口縁部上端、頚部に盲孔や刻目・刺突が施され、13は口縁部の小突起下に「Ｖ」字状文が刻目隆線で描かれている。頚部には、刻目隆線が巡り、胴部はＲ撚糸文が施文される。

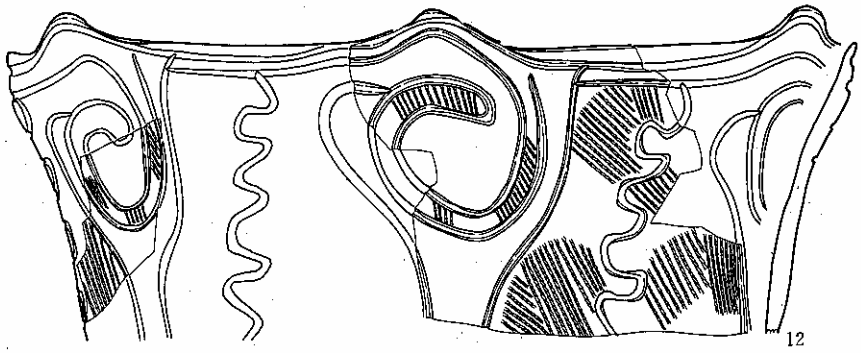
第26図17・27・28、第27図１～４・８は、胴部に沈線文が施されるが、文様単位は不明である。

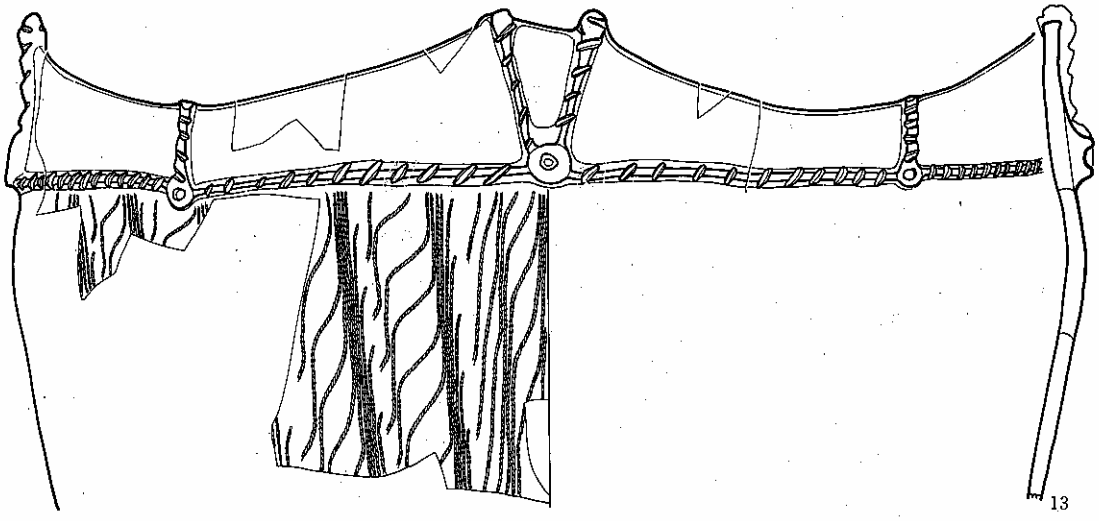


番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R L 縄文		15	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢ⅢE	——	10−8
2	37−74・Ⅱa層	深鉢ⅢC	L 撚糸文	9−33	16	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢF1	L R 縄文	10−9
3	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢC	——	9−34	17	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢE	R 撚糸文	10−15
4	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	——	10−1	18	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R撚糸文？	10−16
5	37−82・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−2	19	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅣA	R 撚糸文	10−10
6	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−3	20	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅣA	——	10−11
7	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−4	21	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−12
8	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	——	10−5	22	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−13
9	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−6	23	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−17
10	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	L 撚糸文		24	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅣB	R 撚糸文	10−18
11	37−71・Ⅱa層	深鉢ⅢC	——		25	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−19
12	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢC	L 撚糸文		26	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢC	R 撚糸文	10−20
13	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢD	L撚糸文？	10−7	27	37−73・Ⅱa層	深鉢ⅢE	——	10−21
14	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢD	L 撚糸文	10−14	28	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢE	——	10−22

第26図　遺物包含層出土土器

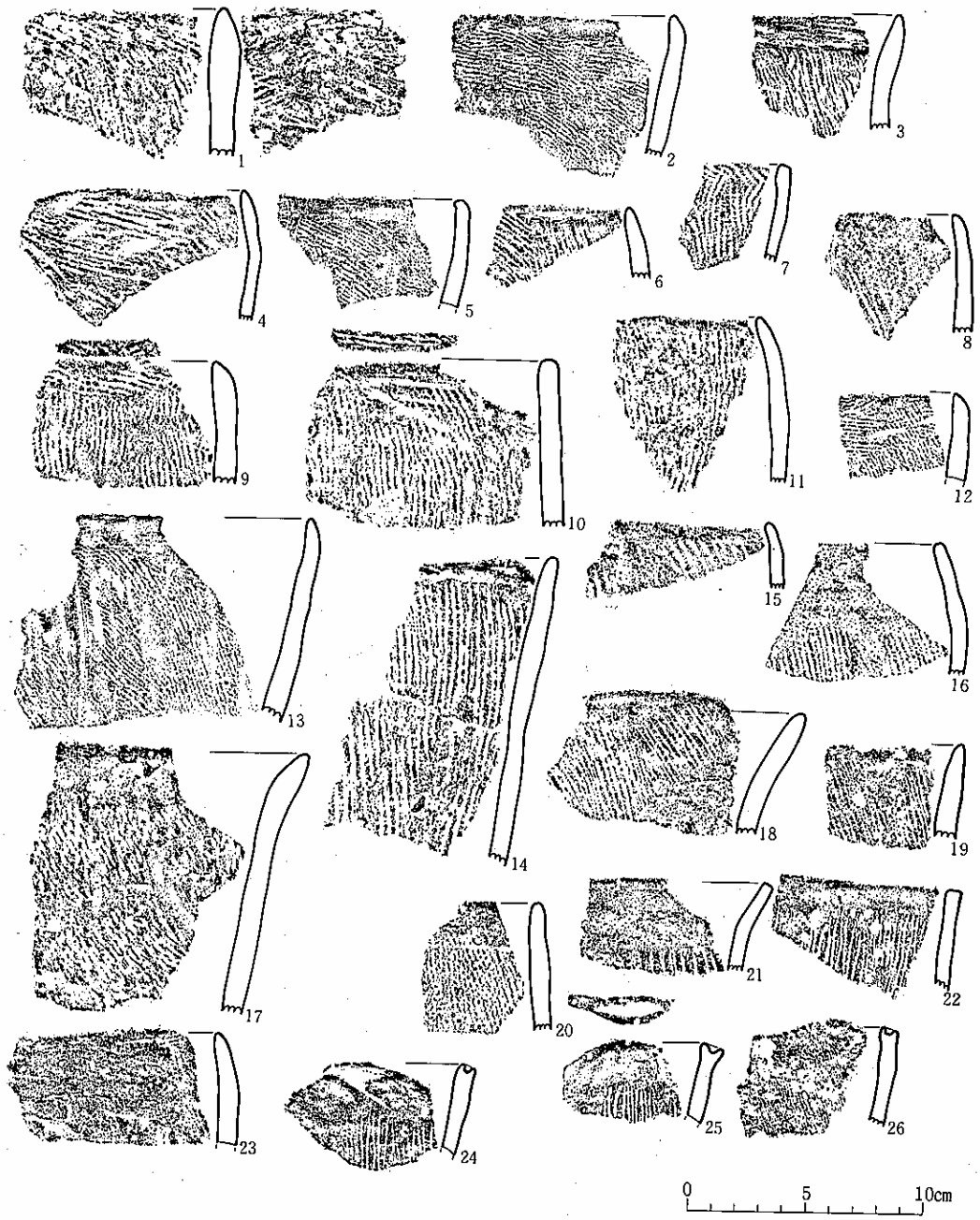






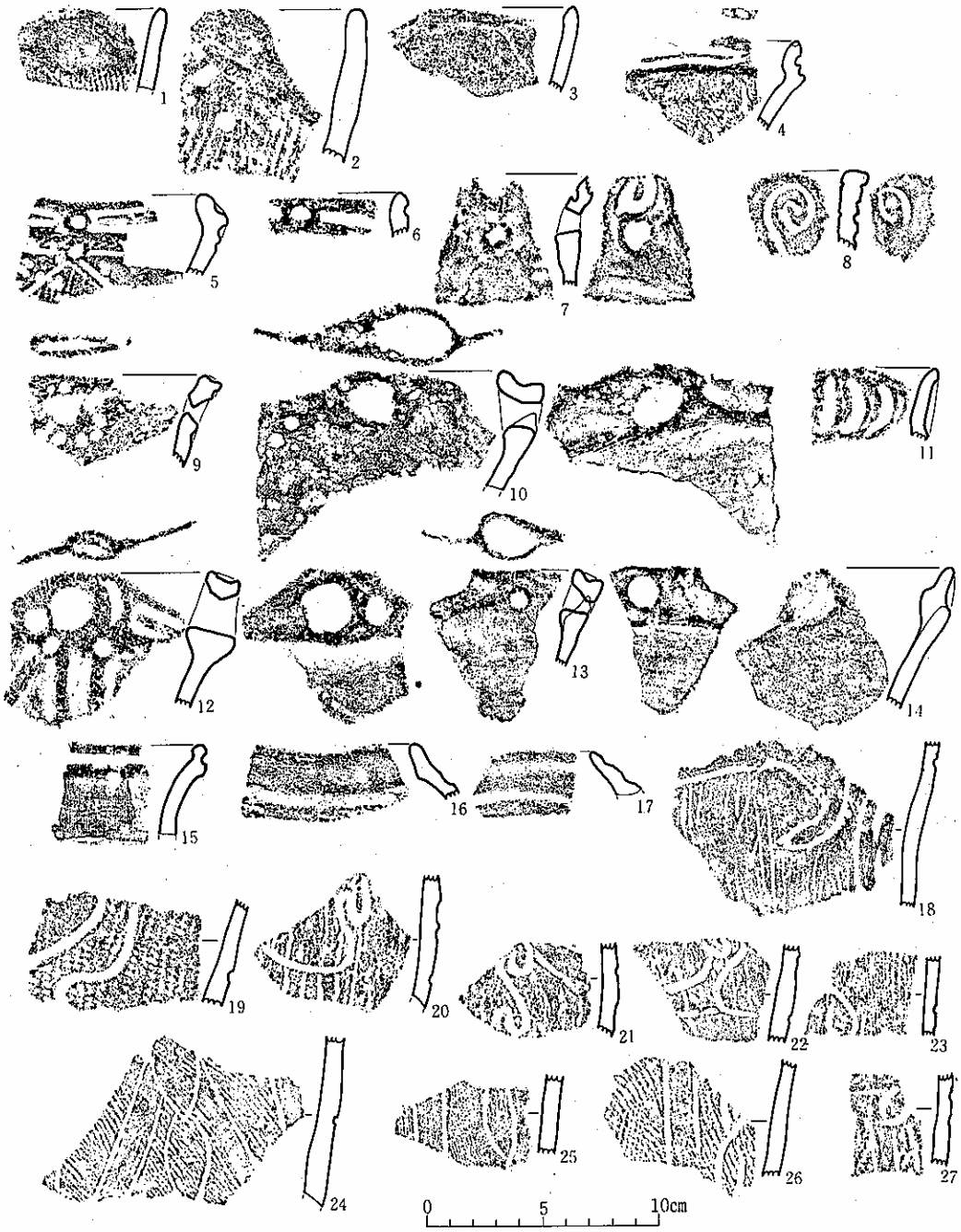
番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	37—76・Ⅱa層	深鉢ⅢE	R撚糸文	10—23	8	37—77・Ⅱa層	深鉢ⅢE	不明	10—30
2	包含層・Ⅱa層	深鉢ⅢE	R撚糸文	10—24	9	37—77・Ⅱa層	深鉢ⅢF2	R撚糸文	10—31
3	37—78・Ⅱa層	深鉢ⅢE	R撚糸文	10—25	10	37—79・Ⅱa層	深鉢ⅢF2	R撚糸文	10—32
4	37—75・Ⅱa層	深鉢ⅢE	R撚糸文	10—26	11	37—75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢ⅢF2	L撚糸文	10—33
5	37—73・Ⅱa層	深鉢ⅣC	R撚糸文	10—27	12	37—78・Ⅱa層	深鉢ⅣA	R撚糸文	
6	37—77・Ⅱa層	深鉢ⅣC	LR縄文?	10—28	13	37—77・Ⅱa層	深鉢ⅢE	R撚糸文	10—31
7	37—73・Ⅱa層	深鉢ⅣD	R撚糸文	10—29					

第27図　遺物包含層出土土器



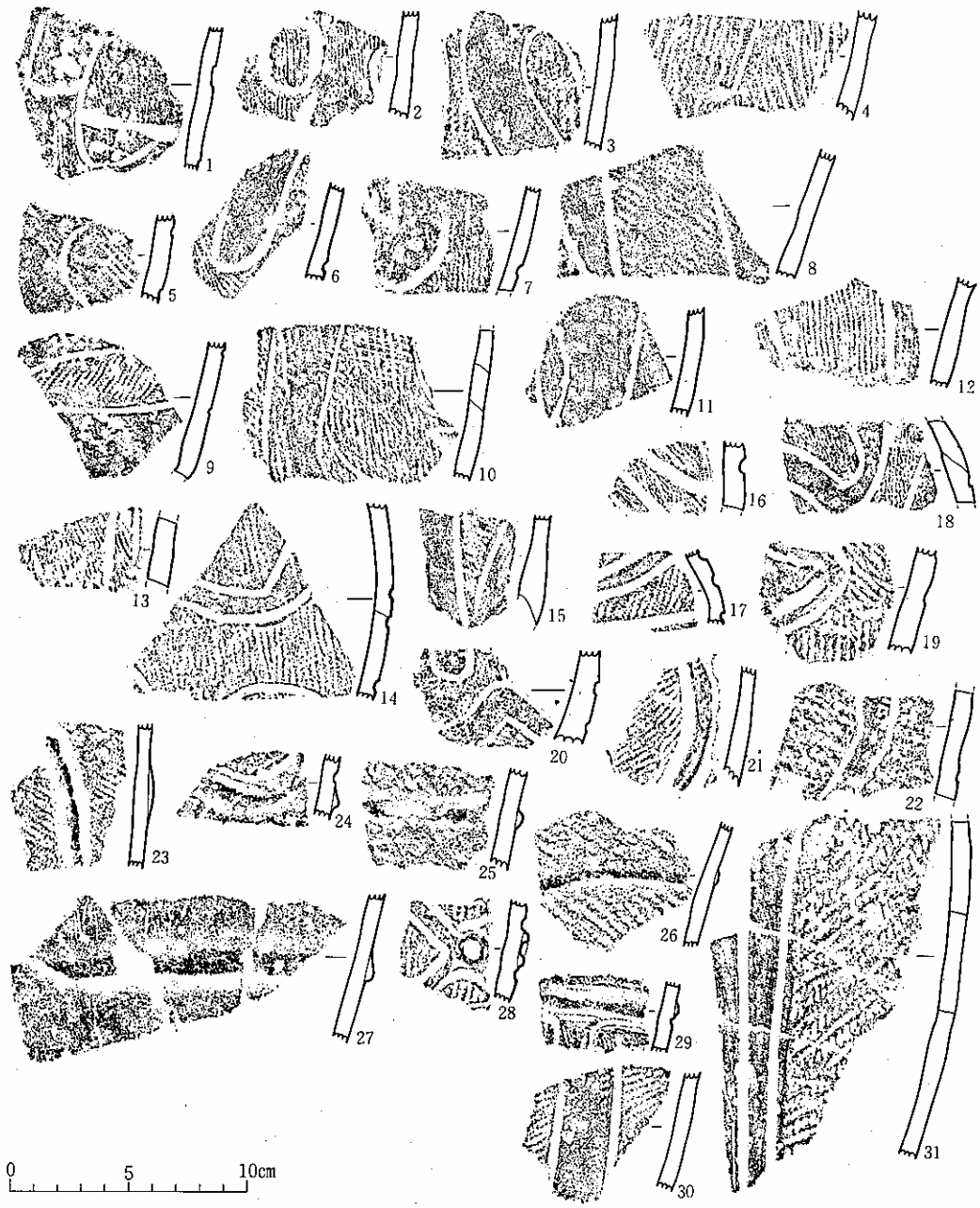
番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	37−79・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	外面・R撚糸文、内面・条線	10−35	14	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−46
2	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文		15	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	10−47
3	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−37	16	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−51
4	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文		17	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−53
5	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−36	18	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−48
6	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−38	19	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	
7	37−79・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	RL縄文?	10−39	20	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	
8	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文		21	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	10−44
9	37−78・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−40	22	37−73・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	
10	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−41	23	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	無文	10−49
11	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−42	24	37−72・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	10−52
12	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−43	25	37−72・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	10−55
13	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−45	26	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−57

第28図　遺物包含層出土土器



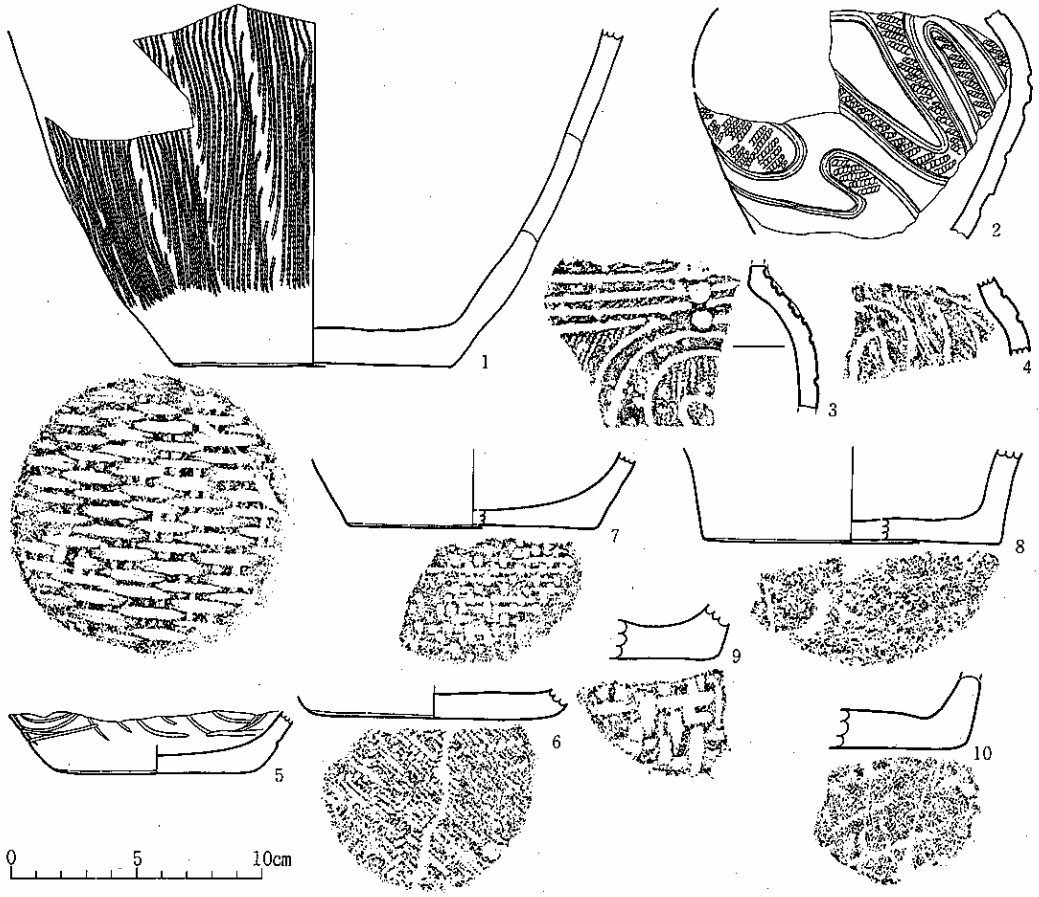
番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	37−76・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	10−54	15	37−77・Ⅱa層	浅鉢	——	11−8
2	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	10−58	16	37−77・Ⅱa層	注口土器	LR縄文	11−9
3	37−77・Ⅱa層	深鉢ⅢF3	磨消縄文?	10−50	17	37−76・Ⅱa層	注口土器	——	11−10
4	37−77・Ⅱa層	深鉢Ⅴ	LR縄文	10−56	18	37−75・Ⅱa層	深鉢	R撚糸文	11−11
5	37−77・Ⅱa層	深鉢Ⅴ	RL縄文	10−59	19	37−77・Ⅱa層	深鉢	LR縄文	11−12
6	37−77・Ⅱa層	深鉢Ⅴ	——	10−60	20	37−75・Ⅱa層	深鉢	L撚糸文	11−13
7	37−73・Ⅱa層	深鉢	——		21	37−77・Ⅱa層	深鉢	L撚糸文	11−14
8	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢	——	11−1	22	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢	L撚糸文	11−15
9	37−78・Ⅱa層	深鉢	——	11−2	23	37−73・Ⅱa層	深鉢	R撚糸文	11−16
10	37−76・Ⅱa層	深鉢	——	11−3	24	37−76・Ⅱa層	深鉢	R撚糸文	11−17
11	37−77・Ⅱa層	深鉢	——	11−7	25	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	深鉢	R撚糸文	11−18
12	37−70・Ⅱa層	深鉢	——	11−4	26	37−77・Ⅱa層	深鉢	L撚糸文	11−23
13	37−74・Ⅱa層	深鉢	——	11−5	27	37−77・Ⅱa層	深鉢	RL縄文	11−19
14	37−77・Ⅱa層	深鉢	無文	11−6					

第29図　遺物包含層出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	37−75・Ⅰ・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−20	17	37−77・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−344
2	37−77・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−21	18	37−78・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−40
3	37−76・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−22	19	37−77・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−35
4	37−77・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−24	20	37−77・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−36
5	37−78・Ⅱ層	深鉢	撚糸文		21	37−75・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−37
6	37−78・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−25	22	37−78・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−41
7	37−77・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−26	23	37−75・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−42
8	37−77・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−27	24	37−76・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−43
9	37−76・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−28	25	37−71・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−44
10	37−77・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−29	26	37−75・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−45
11	37−76・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−30	27	37−77・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−46
12	37−78・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−31	28	37−76・Ⅱ層	深鉢	RL縄文	11−48
13	37−73・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−38	29	37−73・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−49
14	37−71・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	11−32	30	37−76・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−50
15	37−76・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−33	31	37−76・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	11−47
16	37−78・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	11−39					

第30図　遺物包含層出土土器



番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版	番号	地区・層位	器形・分類	地文	図版
1	37−72・Ⅱa層	深鉢	R撚糸文	11−51	6	37−78・Ⅱa層	深鉢	——	
2	37−80・Ⅰ層	注口土器？	L R縄文	11−54	7	37−74・Ⅱa層	深鉢	——	
3	37−75・Ⅰ・Ⅱa層	浅鉢	L R縄文	11−52	8	37−73・Ⅱa層	深鉢	——	
4	37−81・Ⅱa層	浅鉢	R撚糸文	11−53	9	包含層	深鉢	——	
5	37・109・Ⅰ層	深鉢	条線文		10	37−76・Ⅱa層	深鉢	——	

第31図　遺物包含層出土土器

浅鉢（第29図15）

口縁部破片である。外反して、端部に段がつき内外面に沈線が走る。

注口土器（第29図16・17）

口縁部の破片で、全体的な器形は不明である。内傾する口縁部に沈線を巡らしている。

胴部資料

深鉢の胴部破片については、文様の描かれているものと特徴的な地文をもつものについて述べる。（第29図19〜27、第30図１〜31、第31図１・５）

第29図18〜23は沈線により曲線文様が描かれる。第29図24〜27は、「ハ」字状沈線文の起点

から連鎖文が下垂する。磨消縄文技法を用いている。第30図１～22は、文様単位は不明であるが、沈線で文様が描かれ、磨消縄文技法を用いている。第30図23～27・29は、隆線により施文されている。特に、25・26・27は、胴部に「たが」状に巡るものである。第30図28は「X」字状の沈線文にボタン状の貼付文があり、29では頚部に隆線が巡り、胴部に単位不明の沈線文様が描かれる。30・31は縦位の沈線文がみられる。第31図１はR撚糸文、５は沈線文である。

浅鉢の胴部破片について、次に述べる。

浅鉢は口縁部が外反し、頚部でくびれるものと思われる。胴上部が脹らむ。胴部に渦巻状沈線文が描かれる。磨消縄文技法を用いている。２は注口土器の可能性もある。

底部資料

底部裏側には、磨き調整されているもの（１・５）、網代痕のあるもの（６・７・９）、木葉痕のあるもの（８・10）の３種類のものがみられる。磨き調整されているものが数的に多い。

（4）その他の出土土器

ここでは、各調査区に於いて層位的まとまりをもたずに出土したものや、各遺構から出土したものでも明らかに混入と思われるものについて、まとめて編年的位置づけをしたい。

〇第32図（１～５）：口縁部が直線的に外傾する器形のもので、１は外面に条痕文、内面に縄文を、２は外面に縄文、内面に縄文の後に条痕文を、３は内外面に縄文を施す。１は口唇部に刻目が施され、２は折返し口縁で、口縁部下端に刺突文が施される。４はＲＬ縄文が施される底部破片である。５は斜位に２条の縄文（ＬＲＬ）押圧がなされる。これらは、すべて繊維を含む。

〇32図（６・７）：６は、末端ループ文（ＲＬ）が、７は結節縄文（ＲＬ）が施文される。すべて繊維を含む。以上１～７は名取市宇賀崎貝塚（阿部恵：1980：3）のＡ群土器とＢ群土器の特徴とおのおの類似しており、１～５は縄文早期後葉～末葉に、６・７は縄文前期（初頭）に属するものと思われる。

〇第32図（8～16・30）：８は網目状撚糸文の小突起を有する口縁で、９・10・13・14は葺瓦状撚糸文が施され、外反する口縁である。11は波状口縁、12は平口縁で、木目状撚糸文が施される。30は撚糸文が施される底部破片で胎土に繊維を含む。15はコンパス文が、16は波状文が半截竹管で施文される。

以上、８～16・30は欠・特長地遺跡（菊地淳一：1982：3）のＡ群の土器の中に類似がみられ縄文前期大木２ａ式に位置づけられる。

〇第32図（17～20・29）：17・18は頚部に粘土貼付けをし、連続刻目を施す。20は頚部に刺突が施される。20は頚部に刺突が、29は刻目貼付文が頚部に巡らされ、胴部には、菱形状の沈線

文が施される。

以上、17～20、29は糠塚貝塚出土土器と特徴が類似しており、大木２ｂ式に比定される。

○第32図（21～27）：21・22は同一個体で頚部に二段の連続刺突を施し、刻目貼付文が文様を描くように付加される。胴部には対称をなして竹管文が施される。23～25は、頚部に二段の刺突が施され、26は隆線上に刺突される。27は外反する口縁の頚部に連続の竹管文か施される。

以上、21～27は糠塚貝塚出土土器と特徴が類似しており、大木３式に位置づけたい。

○第32図（28）：28は外反する口縁の内面に、波状の貼付文が施される。これは、縄文前期中葉に属すると思われる。

○第33図（１～３・６）：１・２は口唇部に連続した縦位刻目が施文され、３は胴部に波状の沈線文が描かれる。６は数本の平行沈線間に沈線による山形文が描かれる。これらは大和町勝負沢遺跡（丹羽・阿部・小野寺：1982：３）の中に類例がみられ、大木８ａ式に比定される。

○第33図（４・５）・第35図（１）：４・５は胴部に渦巻状の沈線文がみられ、１は渦巻状の突起で貫通孔になる。これらは勝負沢遺跡の中にみられ、大木８ｂ式に位置づけられる。

○第33図（７・８）：２本の平行の沈線が縦位し、施文されたり、横位に文様が展開されている。これらは大衡村上深沢遺跡（宮城県教育委員会：1978：３）の中に類例がみられ、大木９式に位置づけられる。

○第33図（９）・第35図（２・３）：渦文が描かれるもので、２は突起部に盲孔が付され、頚部に沈線が巡る。

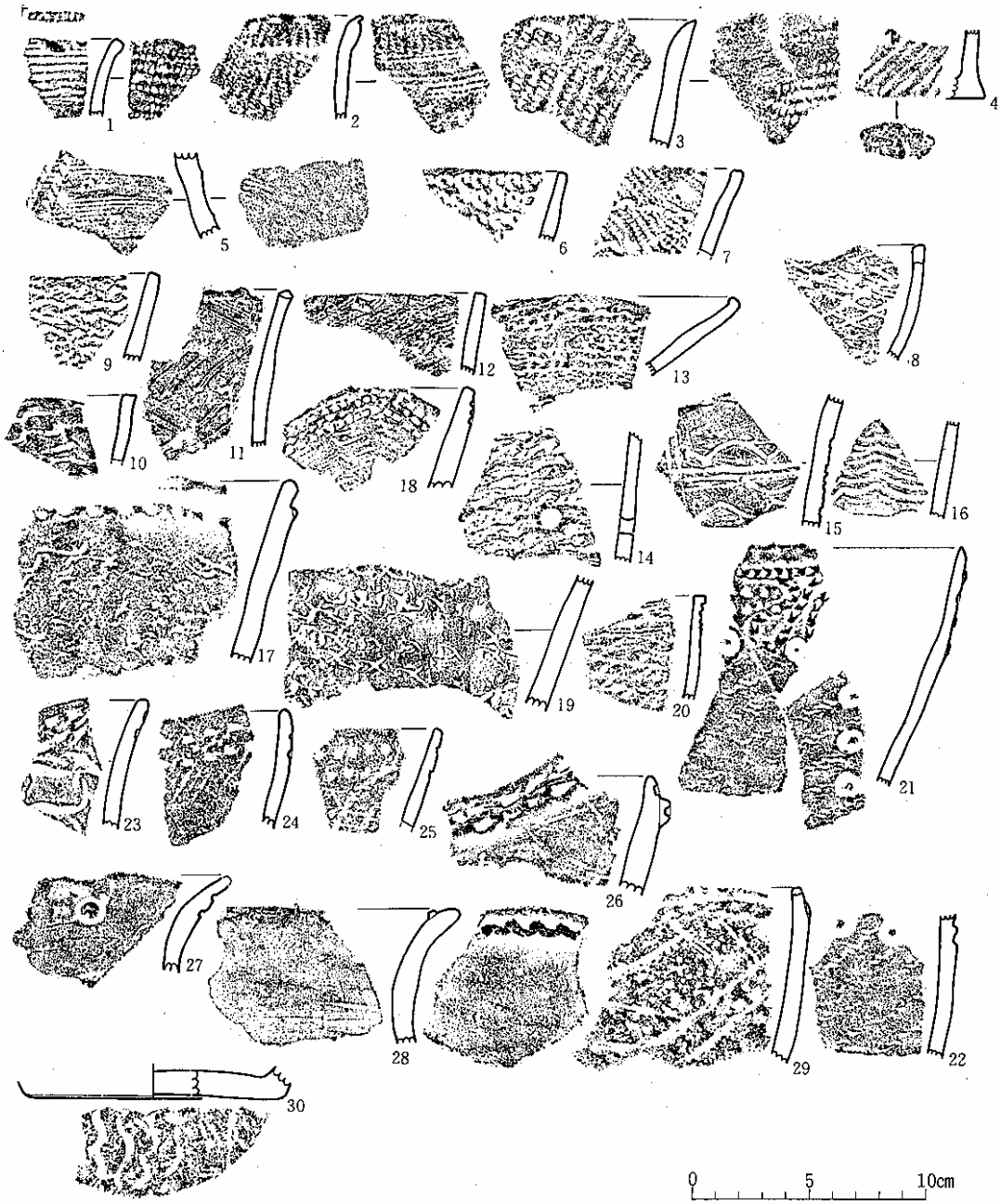
○第35図（４～６・８・９）：頚部の盲孔もしくは小円文を起点として、「ハ」字状に沈線文が下垂する。９はこれらの一部と考えられる。

○第33図（10～13）・第35図（７）：10は外傾する口縁部で、口縁部から頚部にかけて逆π字状に付される。11は頚部に貫通孔を有し、隆線を巡す。12は頚部に隆線を施し、盲孔下より２本の隆線が胴部に下垂する。13は頚部に、１条の隆線が巡る。７は頚部に２条の沈線を巡らし、胴部には盲孔下に沈線が下垂する。

○第33図（14～22）・第35図（10～21）：第33図15・16、第35図12・13は直立ぎみの厚手の口縁部で、内面に格子状の沈線文が施される。第33図17は胴部に横位の平行沈線が多数施される。18は外ぞりの頚部で、外面に縦位に隆線がみられ、内面の口縁部附近で肥厚しており、突起が付加されていたと思われる。20・21は胴部に孤状の連続した沈線が施される。第35図10は口唇部に刻目が施される。

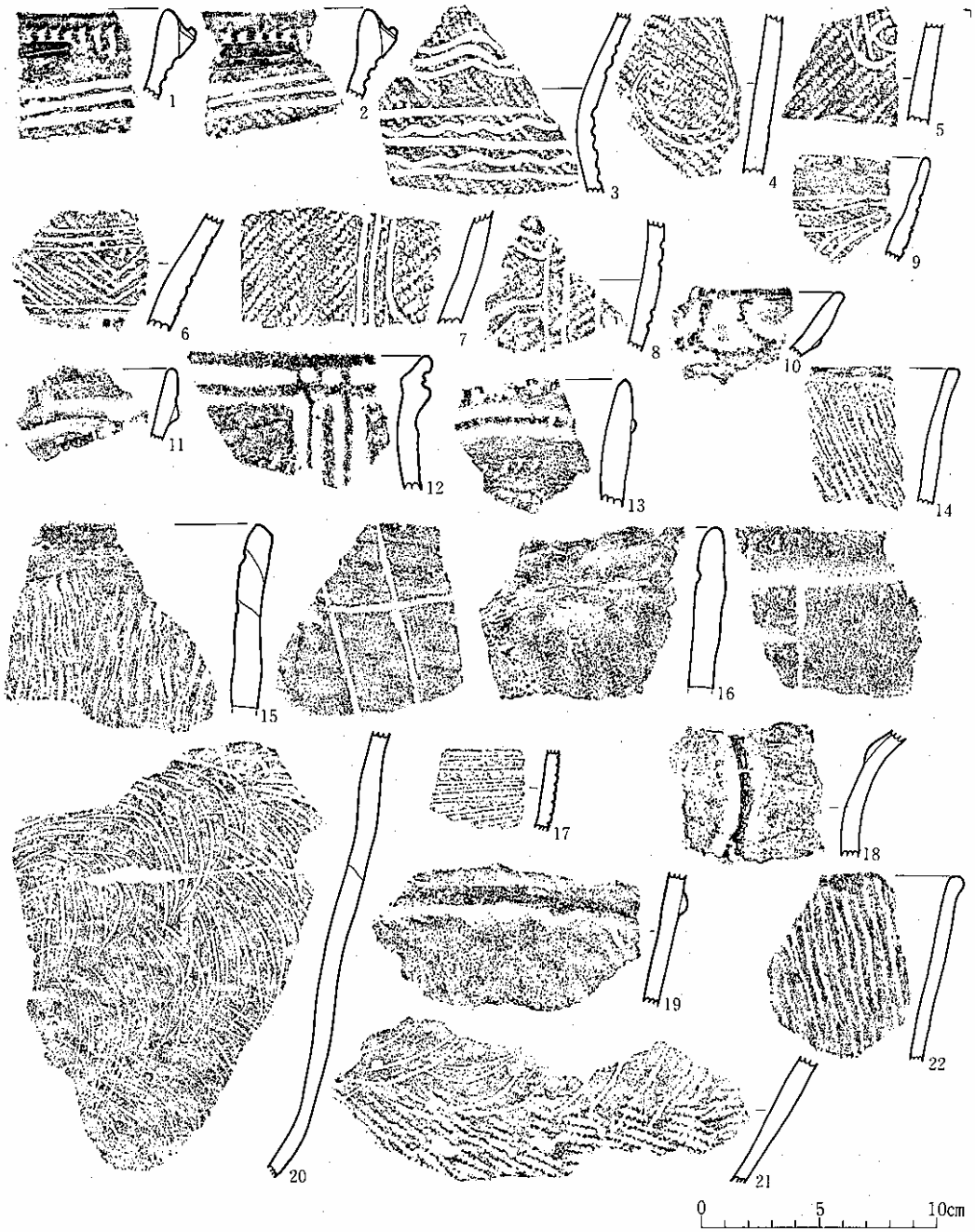
○第35図（24）・第36図（１）：24は口唇部に溝を施すもの。１は袖珍土器で全体がナデ調整されている。

○第35図（25）：口唇部に連続の刺突が施され、胴部には２条の沈線により、単位不明の文



番号	地区・層位	器形	地文	図版	番号	地区・層位	器形	地文	図版
1	3 住・埋 土	深 鉢	外面・条痕文、内面LR縄文	12—1	16	3 住—埋 土	深 鉢	——	12—14
2	1 住・埋 土	深 鉢	外面LR、内面LR条痕文	12—2	17	37—109・堆積層	深 鉢	不整撚糸文	12—16
3	37—107・Ⅰ 層	深 鉢	外面・LR縄文、内面・LR縄	12—3	18	第6号土壙・2層	深 鉢	不整撚糸文	12—15
4	37—108・Ⅱa層	深 鉢	L R 縄 文	12—4	19	第8号土壙・	深 鉢	不整撚糸文	12—17
5	2 住・埋 土	深 鉢	貝殻条痕文(内・外面)		20	3 住・埋 土	深 鉢	不整撚糸文	12—18
6	37—108・Ⅱ 層	深 鉢	末端ループ文(RL)	12—5	21	2 住・風倒木	深 鉢	不整撚糸文	12—19
7	0—253～254・Ⅱ層	深 鉢	結 節 縄 文(RL)	12—6	22	2 住・風倒木	深 鉢	不整撚糸文	12—20
8	3 住・埋 土	深 鉢	網状撚糸文(L)	12—7	23	1 住・埋 土	深 鉢	——	12—21
9	第6号土壙・1・2層	深 鉢	茸瓦状撚糸文(L)	12—8	24	4 住・確認面	深 鉢	撚 糸 文	12—22
10	0—253～254・Ⅱ層	深 鉢	茸瓦状撚糸文(L)		25	37—109・Ⅱ 層	深 鉢	R撚糸文	12—23
11	2 住・埋 土	深 鉢	木目状撚糸文(L)	12—9	26	3 住・埋 土	深 鉢	——	12—24
12	38—111・Ⅲ 層	深 鉢	木目状撚糸文(L)	12—10	27	37—109・堆積層	深 鉢	——	12—25
13	第8号土壙・埋土	深 鉢	茸瓦状撚糸文(L)	12—11	28	1 住・埋 土	深 鉢	——	
14	3 住・埋 土	深 鉢	茸瓦状撚糸文(L)	12—12	29	3 住・埋 土	深 鉢	——	12—26
15	37—109・堆積層	深 鉢	L R 縄 文	12—13	30	第8号土壙・埋土	深 鉢	不整撚糸文	

第32図 出土土器

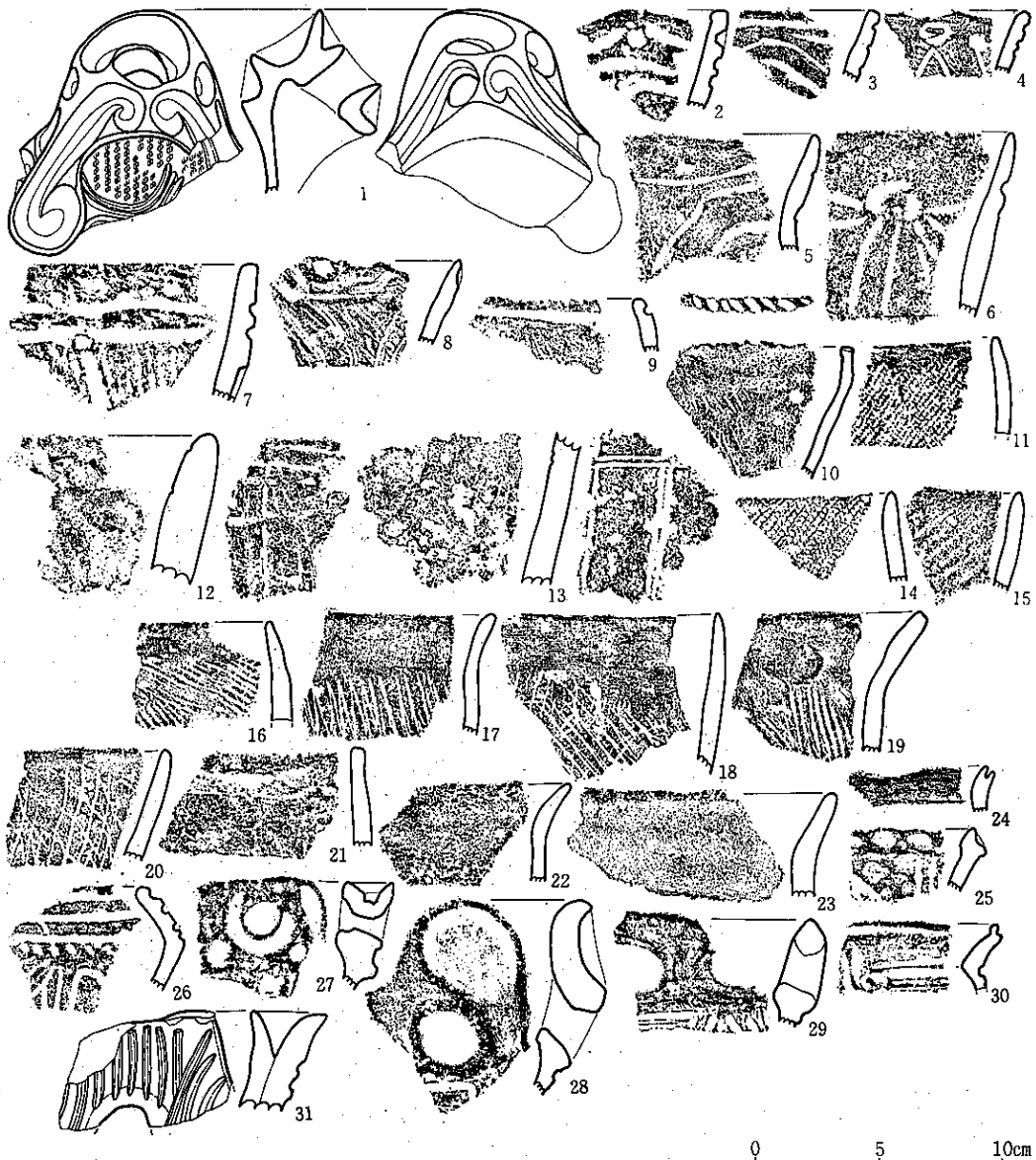


番号	地区・層位	器形	地文	図版	番号	地区・層位	器形	地文	図版
1	37−106〜105・Ⅰ層	深鉢	L R 縄文		12	1 住・埋土	深鉢	——	12−33
2	37−106〜105・Ⅰ層	深鉢	L R 縄文		13	37−107・Ⅱ層	深鉢	——	
3	37−106〜105・Ⅰ層	深鉢	L R 縄文		14	2 住・風倒木	深鉢	R 撚糸文	12−34
4	2 住・埋土	深鉢	L R 縄文	12−27	15	36−112・3 層	深鉢	R 撚糸文	12−35
5	2 住・埋土	深鉢	L R 縄文	12−28	16	37−109・堆積土	深鉢	無文	12−36
6	3 住・埋土	深鉢	——	12−29	17	3 住・埋土	深鉢	条線	12−37
7	1 住・埋土	深鉢	R L 縄文	12−30	18	37−107・Ⅰ層	深鉢	——	12−38
8	37−105・堆積土	深鉢	R L 縄文		19	2 住・埋土	深鉢	L R 縄文	12−39
9	37−109・Ⅱ層	深鉢	R 撚糸文	12−31	20	1 住・埋土	深鉢	条線文	12−43
10	38−111・堆積土	深鉢	——	12−32	21	37−109・Ⅰ層	深鉢	LR縄文・条線	12−40
11	3 住・埋土	深鉢	——		22	38−111・堆積層	深鉢	R 撚糸文	12−44

第33図　出土土器

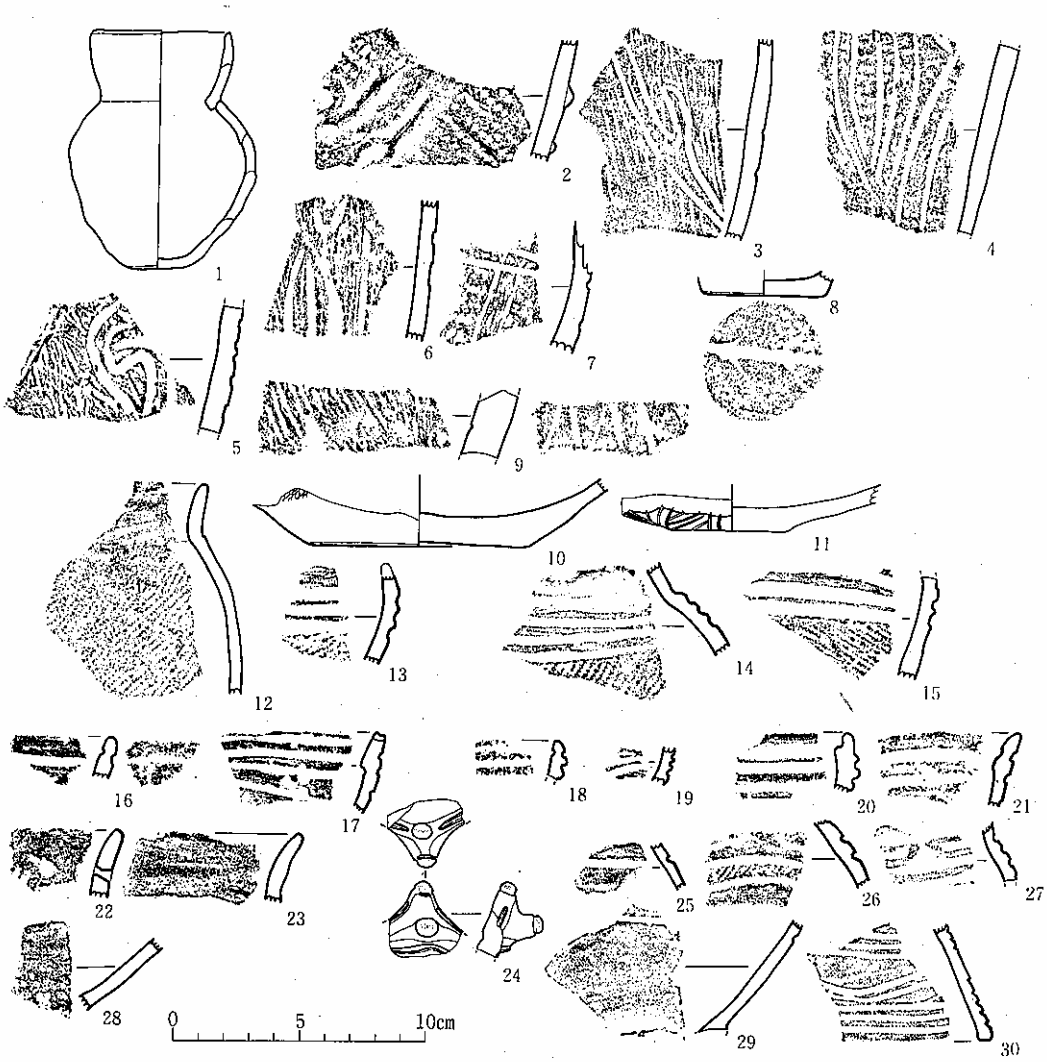
番号	地区・層位	器形	地文	図版	番号	地区・層位	器形	地文	図版
1	2 住・埋 土	深鉢	LR縄文		15	37−106〜105・I層	深鉢	LR縄文	
2	1 住・埋 土	深鉢	LR縄文	12−41	16	1 住・埋 土	深鉢	LR縄文	13−3
3	37−115・I・II層	深鉢	LR縄文	12−42	17	1 住・埋 土	深鉢	LR縄文	13−4
4	37−109・堆積層	深鉢	LR縄文		18	37−103・II 層	深鉢	LR縄文	
5	37−109・I 層	深鉢	——		19	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−6
6	38−111・堆積層	深鉢	RL縄文		20	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−5
7	37−109・I 層	深鉢	磨消縄文		21	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−7
8	37−109・I 層	深鉢	磨消縄文		22	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−10
9	37−109・堆積層	深鉢	磨消縄文		23	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−11
10	37−109・堆積層	深鉢	磨消縄文		24	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−12
11	37−109・堆積層	深鉢	磨消縄文		25	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−13
12	38−111・堆積層	深鉢	——	13−1	26	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−8
13	2 住・埋 土	深鉢	——		27	2 住・埋 土	深鉢	羽状縄文(LR・RL)同一個体	13−9
14	37−108・堆積層	壺	——	13−2	28	3 住・埋 土	注口土器	——	13−14

第34図 出土土器



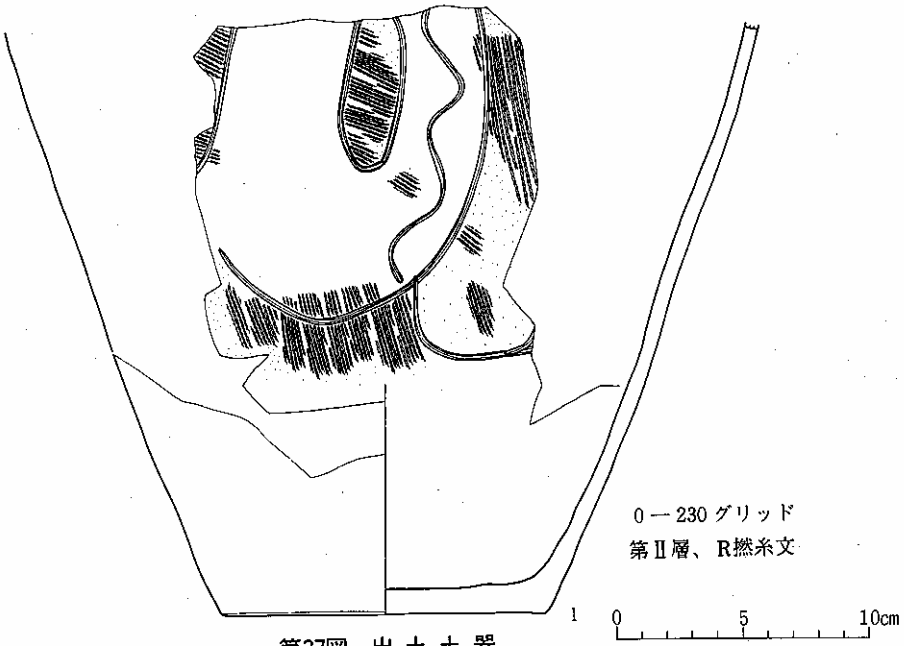
番号	地区・層位	器形	地文	図版	番号	地区・層位	器形	地文	図版
1	0－231・表採	深鉢	RLR縄文充塡	13－15	17	0－99・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	13－23
2	0－83・Ⅱ層	深鉢ⅢA	RL縄文	13－16	18	0－102・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	——	13－24
3	0－93・Ⅰ層	深鉢ⅢA	——		19	0－99・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	13－25
4	0－85・Ⅱ層	深鉢ⅢC	L撚糸文	13－17	20	0－90・Ⅰ層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	13－26
5	0－90・Ⅱ層	深鉢ⅣA	L撚糸文	13－18	21	0－255・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	13－27
6	0－93・Ⅰ層	深鉢ⅢC	——	13－19	22	0－210～220・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	LR縄文	
7	0－90・Ⅱ層	深鉢ⅢC	L撚糸文	13－20	23	0－99・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	R撚糸文	
8	0－90・Ⅱ層	深鉢ⅢC	L撚糸文	13－21	24	0－234～240・Ⅰ層	深鉢ⅢF3	——	
9	0－89・Ⅰ層	深鉢ⅢF2	L撚糸文		25	0－83・Ⅱ層	深鉢	——	13－28
10	0－99・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	L撚糸文	13－22	26	0－92・Ⅰ層	深鉢	——	13－29
11	0－206～211・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	RL縄文		27	0－90・Ⅰ層	深鉢	不明	13－30
12	0－113・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	——		28	0－113・Ⅱ層	深鉢	——	13－31
13	0－85・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	——		29	0－83・Ⅱ層	深鉢	不明	13－32
14	0－240～250・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	LR縄文		30	0－81・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	
15	0－99・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	LR縄文		31	0－90・堆積層	深鉢	——	13－33
16	0－106・Ⅱ層	深鉢ⅢF3	L撚糸文						

第35図　出土土器



番号	地区・層位	器形	地文	図版	番号	地区・層位	器形	地文	図版
1	0－75？・Ⅱ層	袖珍土器	無文	13－34	16	0－205～211・Ⅱ層	深鉢？	――	
2	0－90・Ⅰ層	深鉢	LR縄文	13－35	17	0－206～211・Ⅱ層	深鉢？	――	13－45
3	0－93・Ⅰ層	深鉢	R撚糸文	13－36	18	0－206～211・Ⅰ層	深鉢？	――	
4	0－90・Ⅰ層	深鉢	不明	13－37	19	0－200～204・Ⅱ層	深鉢？	――	
5	0－81・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	13－38	20	0－240～250・Ⅱ層	深鉢？	――	13－48
6	0－85・Ⅱ層	深鉢	R撚糸文	13－39	21	0－200～204・Ⅱ層	深鉢？	――	13－49
7	0－96・Ⅱ層	深鉢	LR縄文	13－40	22	0－240～250・Ⅱ層	深鉢or浅鉢	――	13－46
8	0－80・Ⅱ層	深鉢	――		23	0－233・Ⅰ層	深鉢or浅鉢	――	
9	0－10・表土	深鉢	R撚糸文		24	0－240～250・Ⅱ層	高坏	――	13－50
10	0－87・Ⅱ層	深鉢	LR縄文		25	0－206～211・Ⅰ層	壺？	――	
11	0－89・Ⅱ層	深鉢	条線文	13－41	26	0－220～230・Ⅰ層	壺？	LR縄文	13－51
12	0－189・堆積層	深鉢	LR縄文	13－43	27	0－253～255・Ⅰ層	壺？	――	13－52
13	0－233・Ⅰ層	深鉢	LR縄文	13－44	28	0－206～211・Ⅰ層	高坏	――	
14	0－231・Ⅱ層	深鉢	L撚糸文	13－42	29	0－206～211・Ⅰ層	高坏	――	13－53
15	0－206～211・Ⅰ層	深鉢	R撚糸文	13－47	30	0－211～220・Ⅱ層	高坏	――	13－54

第36図　出土土器



第37図　出 土 土 器

様が描かれる。

○第34図（１～４）：数条の沈線で縦位に描かれ、４のように斜位に沈線間を走るものもある。器形は胴部から口縁部に至るまで外傾するものである。

○第34図（15）：貫通孔を有する突起をもち、胴部に楕円状の沈線で区画し、その外側を磨消縄文している。

○第34図（16～18）：16は沈線間に縦位の沈線が施され、17は沈線の末端が渦状になる。

○第34図（19～28）：外反ぎみの口縁部で、頚部で屈曲し、胴部で脹らむ器形で、沈線で区画された文様帯が描かれる。28はこの類に属するもので、注口土器の口縁部と考えられる。

○第34図（12～14）・第35図（27～29・31）：第34図12には深鉢の突起部で、貫通孔を有し、内面に突出したものが付加されていたと考えられる。13は口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴上部で脹らむ器形のもので、ねじれかみ合った隆線が付加される。14は壺形土器で、把手が付加され、頚部の隆線に刻目が施される。第35図27は、方形の突起で、貫通孔の周辺部に盲孔を付す。頂部には、凹みがみられる。28は舌状の突起で、貫通孔を有する。29は橋状の突起で、胴部に数条の沈線文が描かれる。31はひだ状の突起で、外面に縦位に沈線文が施される。

○第36図（２～７・９）：２は鎖状の隆線が施され、隆線間に磨消縄文がなされる。３～６は、沈線により文様が描かれ、３・５は蕨手状に類似する文様、４・６は「ハ」字状文に類似する文様を各々施文している。７は格子状の沈線文に磨消をしている。９は厚手の胴部に格子状に沈線を施している。

○第36図（８・10・11）：いずれも底部破片である。８は底部に木葉痕がみられる。10は胴が開きぎみのもの、11は胴部下端に数条の沈線を１つのまとまりとする工具により底面を中心に放射状に施文される。

以上、第33図（９）～第35図（２・３）まで述べたものは、本遺物包含層出土土器群のもつ特徴と関連する点があるので編年的位置づけについては後述する。

ただ、第34図（16～28）については、その特徴から縄文後期中葉金剛寺式に比定される。

○第36図（12～30）：12～15は口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴中央部で膨れる器形のもので、沈線間は磨き調整がなされる。16～18・20・21の口縁部は内面に段を有し、外面に一条もしくは、数条の沈線が施される。22・23は高坏形の口縁部ではなく、浅鉢もしくは深鉢の類になるものと考えられる。26・27は壺形のもので、工字状文様が頚部に描かれる。24・28・29・30は高坏形土器で、24は２つの突出部をもち、その周りに沈線が巡っている。28・29は坏部のもので、30は平行沈線間に、波状文が描かれる台部のものである。これらは青木畑遺跡（加藤道男：1982：３）の中に類似するものがみられるが、縄文晩期末～弥生初頭に位置づけたい。

なお、図化できないが、奈良～平安期の須恵器と土師器の小破片を表採している。

（５）土製品

円盤状土製品

円盤状土製品は73点出土している。遺物包含層から主体的に出土している。素材となっている土器片はすべて胴部で、撚糸地文のものが多い。これらは、打ち欠いて円盤状に成形し、ものによって周縁を研磨加工するものもある（矢印でその範囲を示した）。なお、第38図１の渦巻状の隆線文の描かれるものや第39図28の胎土に繊維を含み繊維束で押圧された土器片を利用しているものもある。

土　錘

第39図29は長楕円状の若干扁平なもので、縦位に一本の溝が巡る。

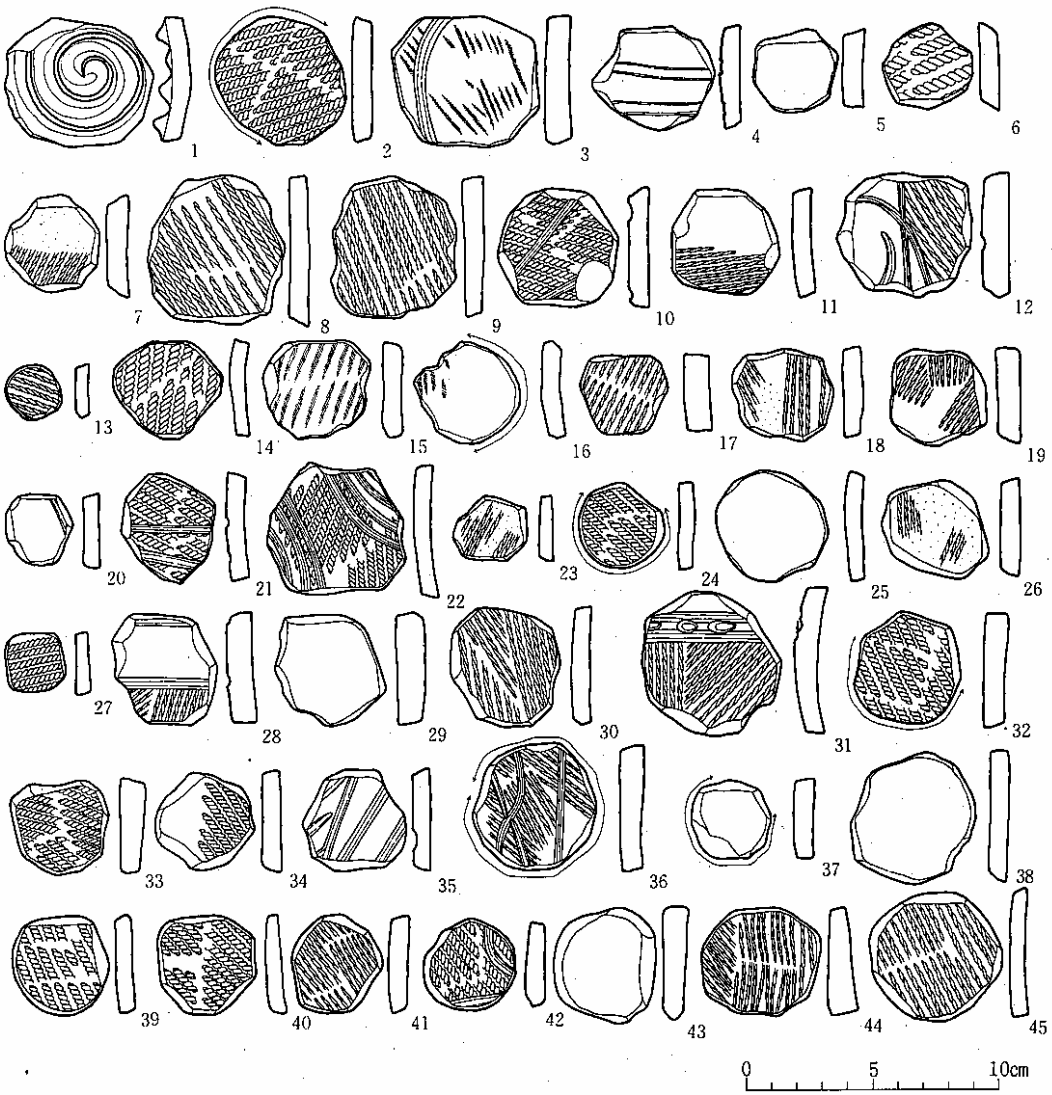
（６）石製品

石鏃（第40図１～13）

石鏃は計13点出土している。１～９は無茎の凹基のもので、７・９は片面加工のものである。10・11は有茎のえぐりの深いもの、12・13は有茎のえぐりの浅いものである。13は基部が欠損している。

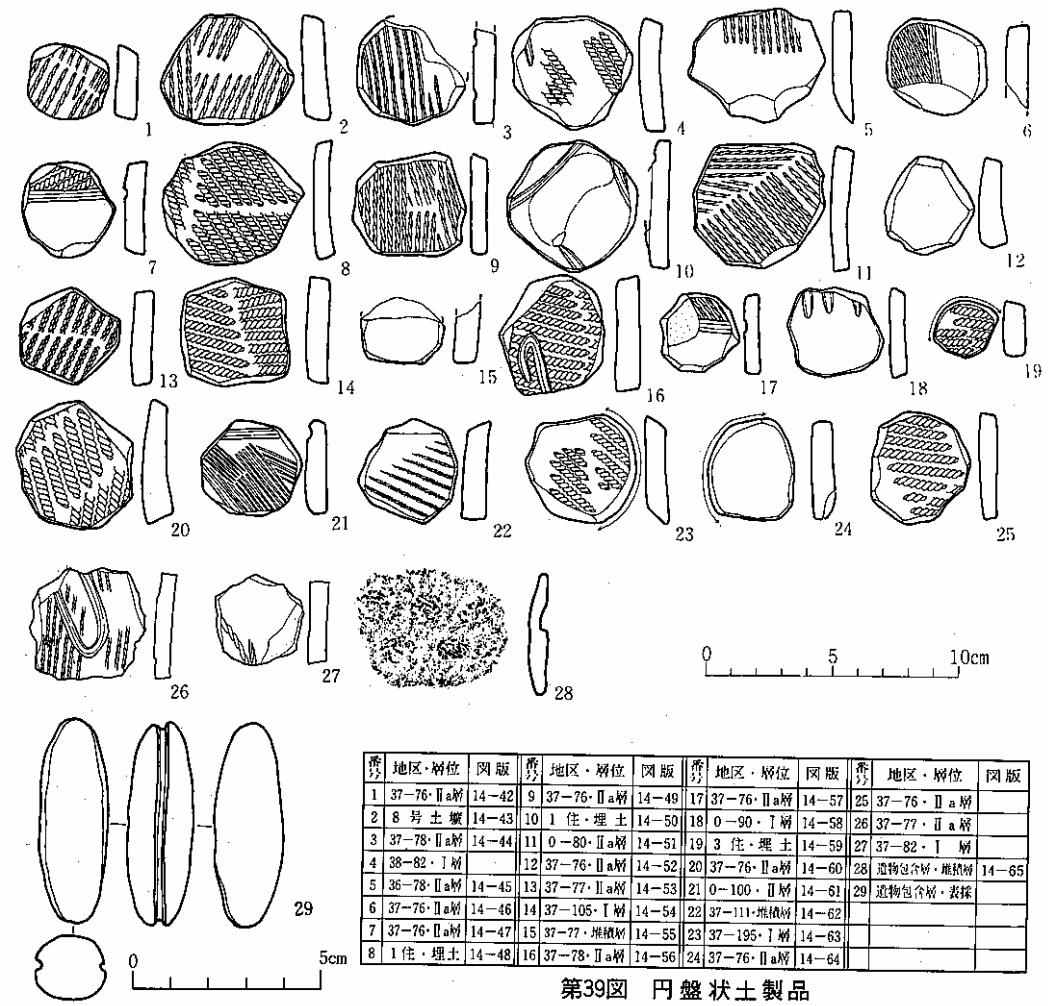
石錐（第40図14～16）

14は一部自然面が残る。15は錐部が短かくなっている。



番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	37—77・Ⅱa層	14—1	13	遺物包含層・Ⅱa層	14—13	25	第1号土壙・埋土	14—24	37	37—78・Ⅱa層	14—34
2	37—78・Ⅱa層	14—2	14	1 住・埋土	14—14	26	37—73・Ⅱa層	14—25	38	37—74・Ⅱa層	14—35
3	遺物包含層・表採	14—3	15	37—106・Ⅰ層	14—15	27	1 住・埋土	14—26	39	37—76・Ⅱa層	14—36
4	37—72・Ⅱa層	14—4	16	37—75・Ⅰ・Ⅱa層		28	第1号土壙・埋土	14—27	40	2 住・埋土	
5	1 住・埋土	14—5	17	37—77・堆積層	14—16	29	37—77・堆積層	14—28	41	37—76・Ⅱa層	14—37
6	1 住・埋土	14—6	18	37—77・Ⅱa層	14—17	30	37—73・Ⅱa層	14—29	42	37—78・Ⅱa層	14—38
7	1 住・埋土	14—7	19	37—73・Ⅱa層	14—18	31	37—73・Ⅱa層	14—30	43	37—77・Ⅱa層	14—39
8	37—109・Ⅱa層	14—8	20	2 住・確認面	14—19	32	2 住・埋土		44	37—76・Ⅱa層	14—40
9	1 住・埋土	14—9	21	37—79・Ⅱa層	14—20	33	37—78・Ⅱa層	14—31	45	0—90・Ⅰ層	14—41
10	37—75・Ⅰ・Ⅱa層	14—10	22	0—86・Ⅱ層	14—21	34	37—76・Ⅱa層				
11	39—71・Ⅱa層	14—11	23	37—79・Ⅱa層	14—22	35	0—90・Ⅰ層	14—32			
12	37—75・Ⅰ・Ⅱa層	14—12	24	1 住・埋土	14—23	36	37—78・Ⅱa層	14—33			

第38図　円盤状土製品



番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	37−76・Ⅱa層	14−42	9	37−76・Ⅱa層	14−49	17	37−76・Ⅱa層	14−57	25	37−76・Ⅱa層	
2	8号土壙	14−43	10	1住・埋土	14−50	18	0−90・Ⅰ層	14−58	26	37−77・Ⅱa層	
3	37−78・Ⅱa層	14−44	11	0−80・Ⅱa層	14−51	19	3住・埋土	14−59	27	37−82・Ⅰ層	
4	38−82・Ⅰ層		12	37−76・Ⅱa層	14−52	20	37−76・Ⅱa層	14−60	28	遺物包含層・堆積層	14−65
5	36−78・Ⅱa層	14−45	13	37−77・Ⅱa層	14−53	21	0−100・Ⅱ層	14−61	29	遺物包含層・表採	
6	37−76・Ⅱa層	14−46	14	37−105・Ⅰ層	14−54	22	37−111・堆積層	14−62			
7	37−76・Ⅱa層	14−47	15	37−77・堆積層	14−55	23	37−195・Ⅰ層	14−63			
8	1住・埋土	14−48	16	37−78・Ⅱa層	14−56	24	37−76・Ⅱa層	14−64			

第39図　円盤状土製品

石匙（第40図17～22・第41図１～３）

17～22は縦形のものである。21は両面加工のもので、20・22・23は欠損品である。

１～３は横形のものである。２は縦形の石匙の未製品のものを加工している。３は交互剥離が施されている。

石錐（第41図５～７・10）

いずれも二等辺三角形状のもので、５は両面加工されている。

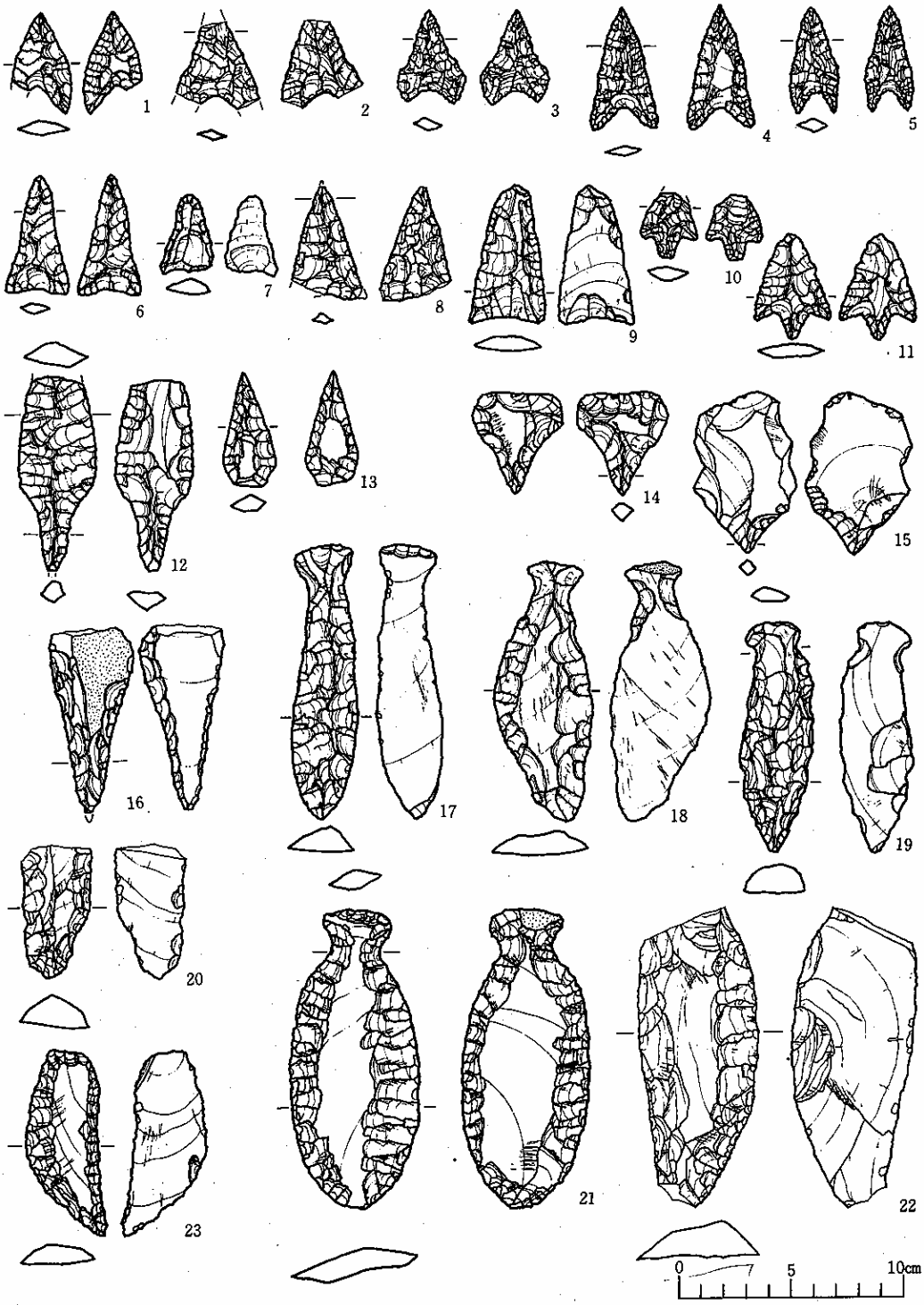
その他の剥片石器（第41図４・８～13、第42図、第43、第44図、第45図１～４）

第41図12・13は小円形状のもので尖端部を有し周縁に調整剥離が施される。

第41図４・８は両面加工されている。第41図９は片面加工である。

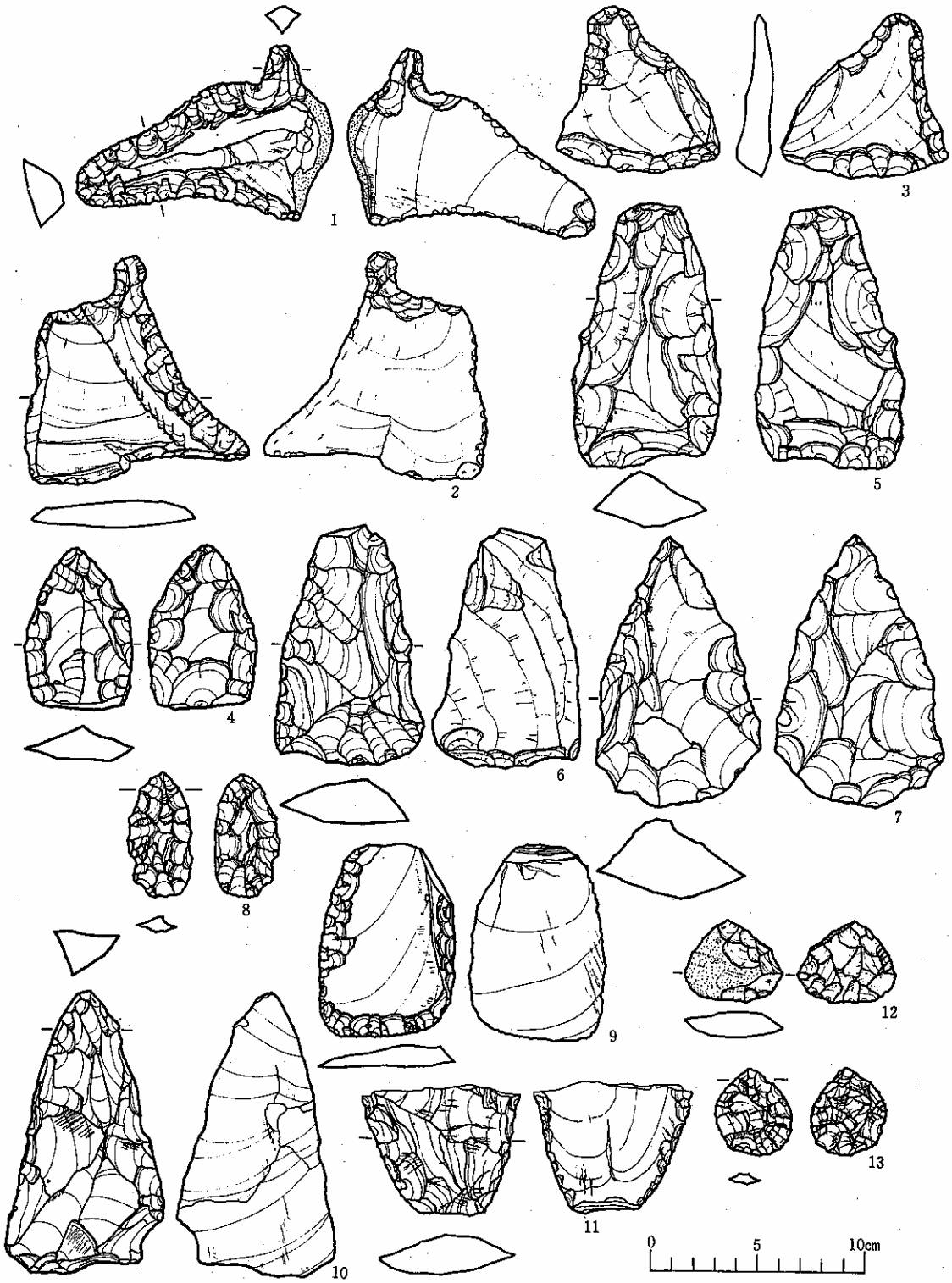
第42図１～９はいずれも扁平な縦長の剥片を素材とし、片側の側縁だけに調整剥離が施される。

第42図10、第43図１～10、も扁平な縦長の剥片を素材とし、両側縁もしくは周縁部に調整剥



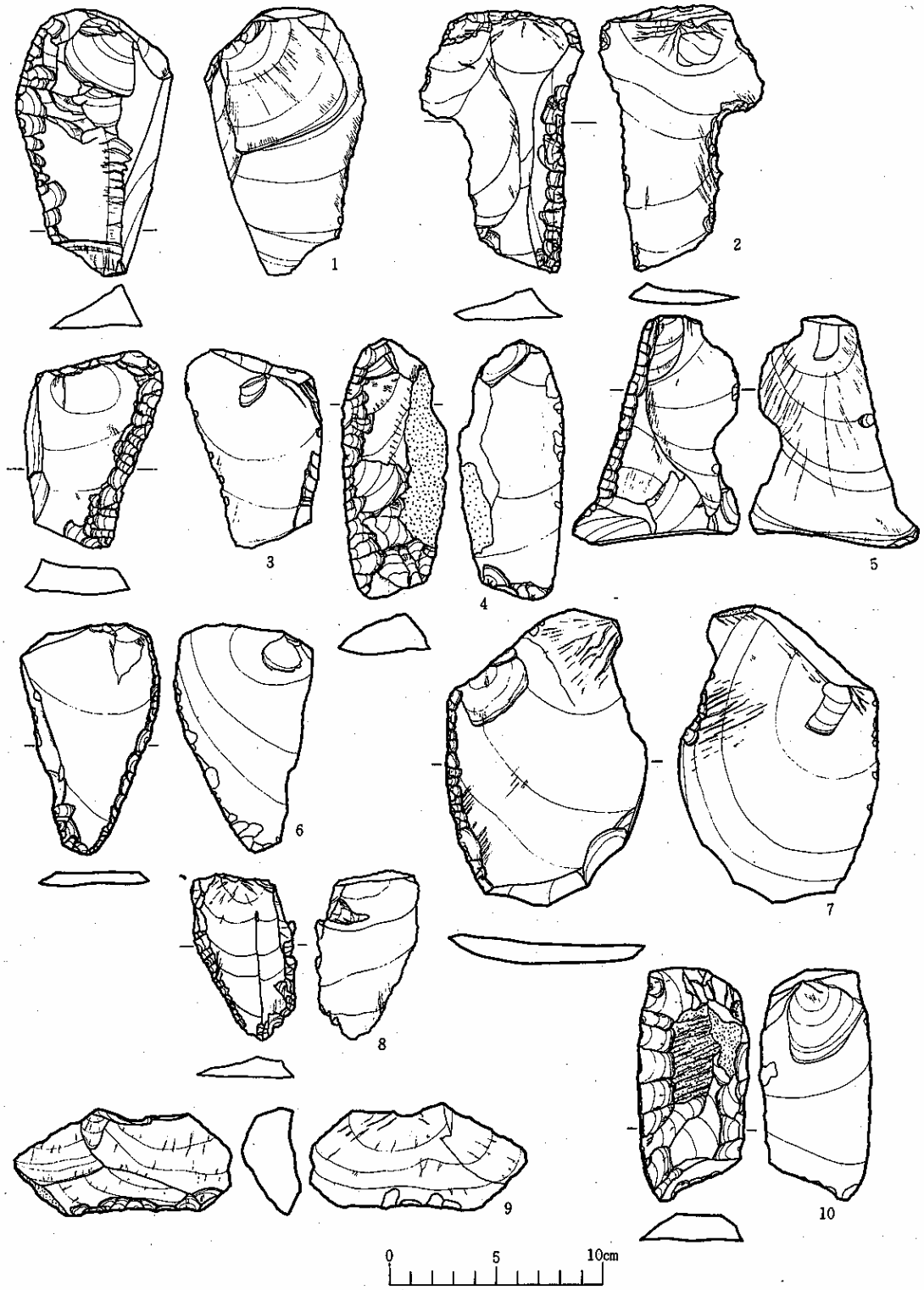
番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	37−80・Ⅰ・Ⅱ層	15−1	7	0 ラ イ ン	15−7	13	0−234〜240・Ⅰ層	15−13	19	3 住・埋 土	15−19
2	表 採	15−2	8	8 号 土 壙	15−8	14	0 −106・Ⅰ 層	15−14	20	表 採	15−20
3	2 住・埋 土	15−3	9	37−00・表 採	15−9	15	37−110・堆積層	15−15	21	37−76・Ⅰ・Ⅱa層	15−21
4	37−79・Ⅱ a 層	15−4	10	0 −93・Ⅰ層	15−10	16	37−76・Ⅱ a 層	15−16	22	1 住・埋 土	15−22
5	不 明	15−5	11	0 −92・Ⅰ層	15−11	17	8号土壙・2 層	15−17	23	表 採	15−23
6	1 住・埋 土	15−6	12	0 −92・Ⅰ層	15−12	18	3 住・埋 土	15−18			

第40図 石 器



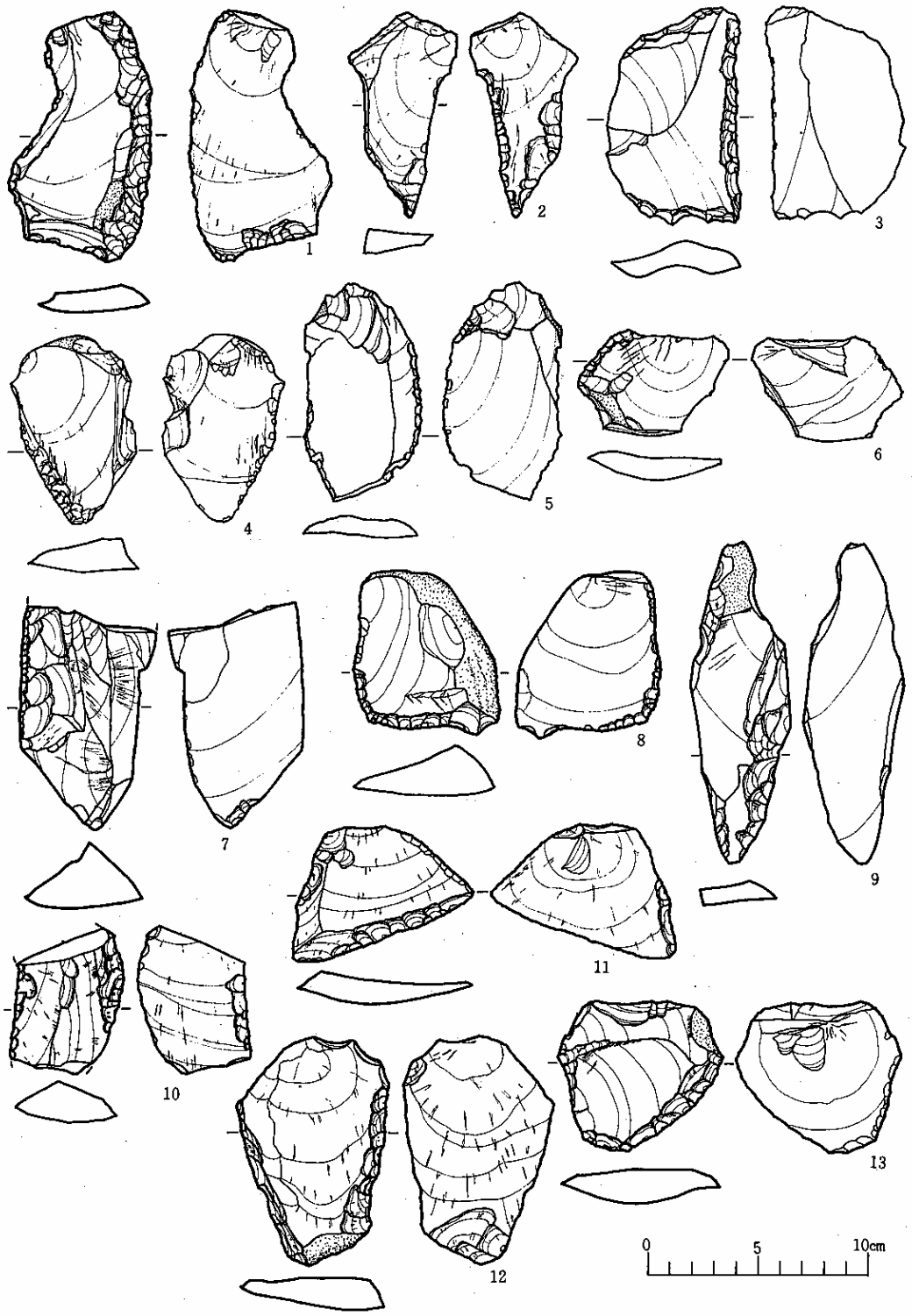
番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	37—110・表採	15—24	5	0—7・Ⅱ層	15—28	9	37—78・Ⅱa層	15—32	13	1 住・埋土	15—36
2	遺物包含層・表採	15—25	6	45—108・表採	15—29	10	3 住・埋土	15—33			
3	3 住・埋土	15—26	7	1 住・埋土	15—30	11	37—00・表採	15—34			
4	1 住・埋土	15—27	8	37—109・Ⅱ層	15—31	12	37—109・Ⅱ層	15—35			

第41図　石　　器



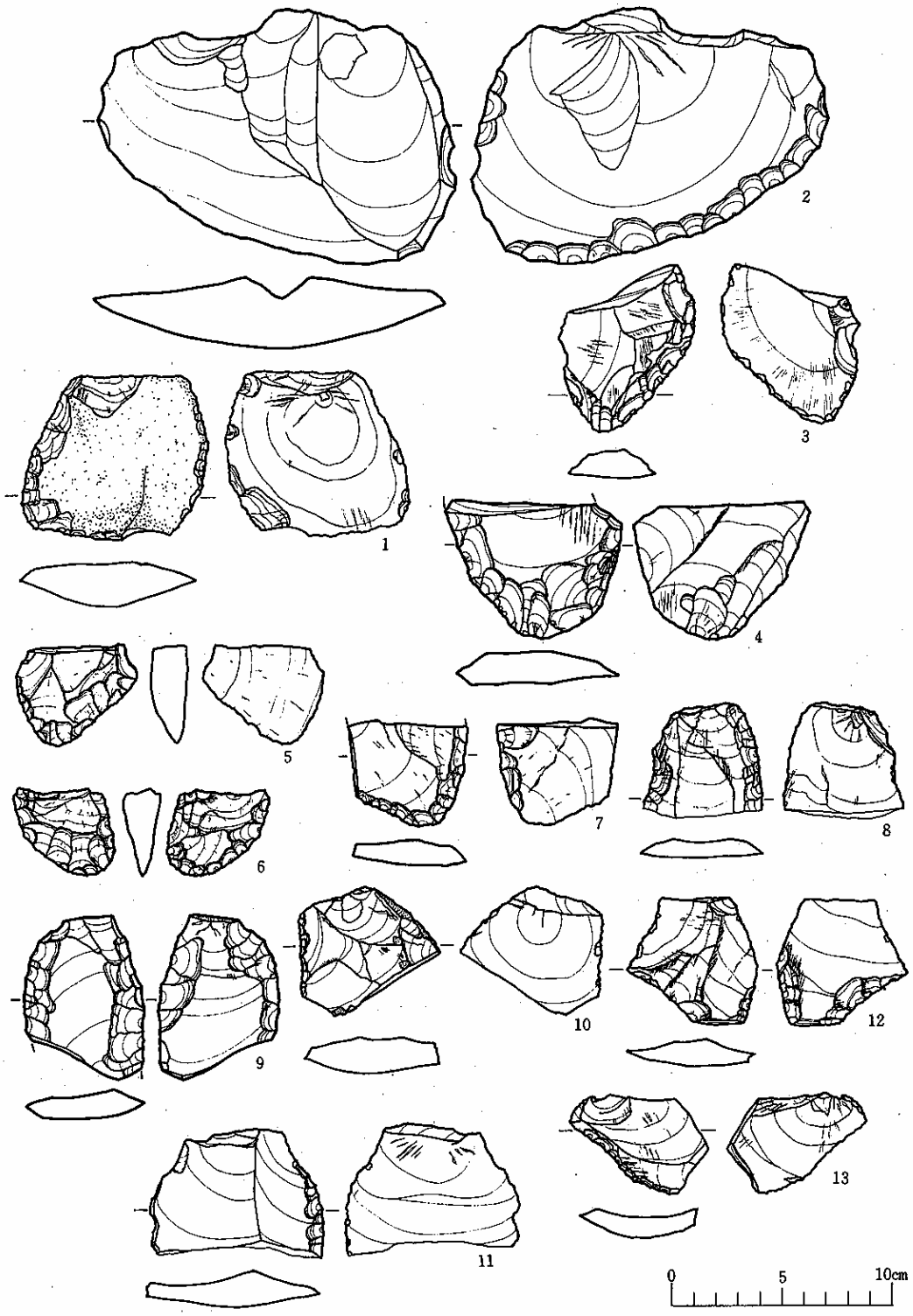
番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	1 住・埋 土	15−37	4	37−107・Ⅰ 層	15−40	7	2 住・埋 土	15−43	10	37−109・Ⅱ 層	15−46
2	3 住・埋 土	15−38	5	37−113・Ⅱ 層	15−41	8	3 住・埋 土	15−44			
3	37−77・Ⅱa 層	15−39	6	1 住・埋 土	15−42	9	37−77・Ⅱa 層	15−45			

第42図　石　　器



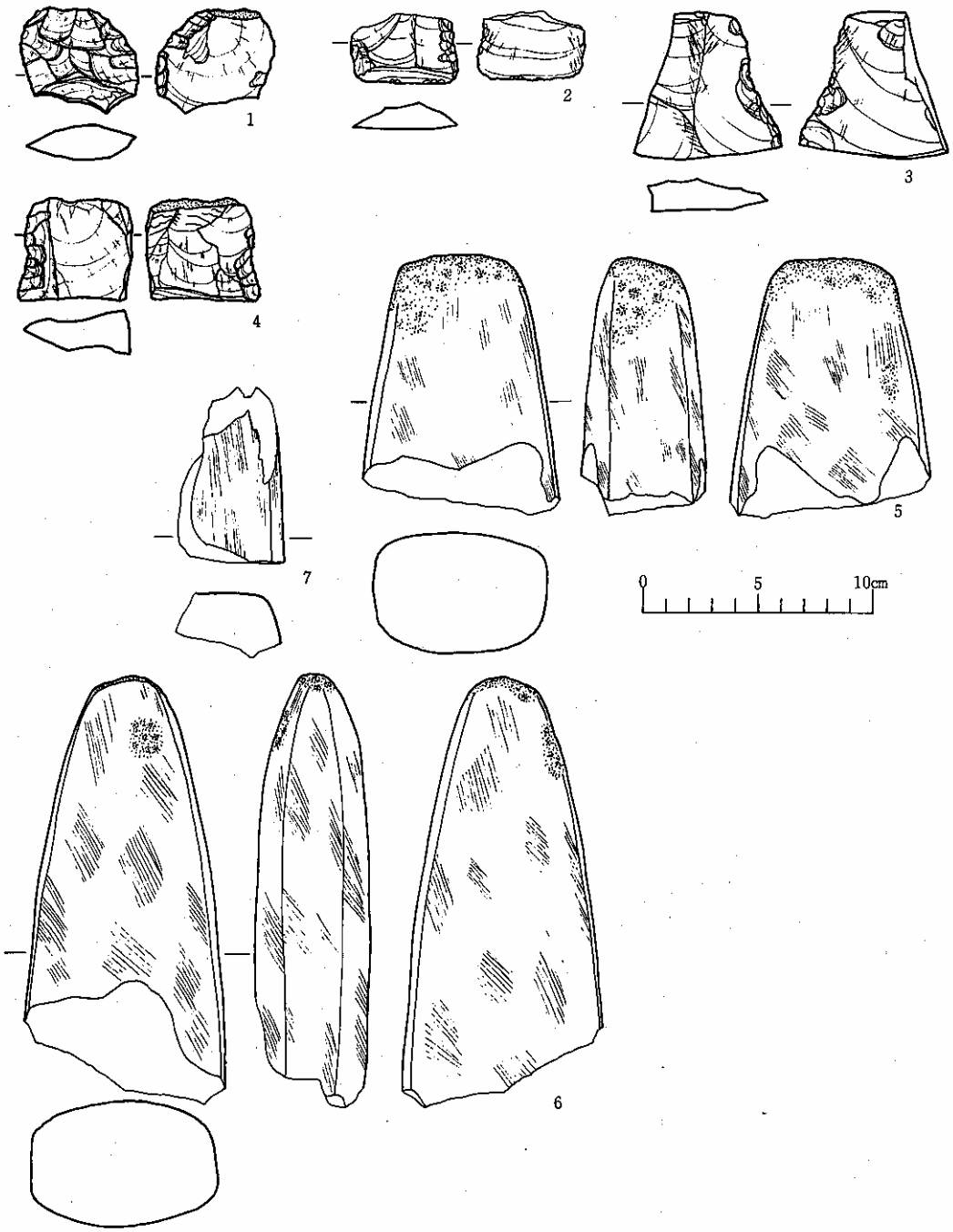
番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	1 住・埋 土	15−47	5	37−77・表 採	15−51	9	1 住・埋 土	16−3	13	3住・複式炉B、4層	16−7
2	2 住・確認面	15−48	6	37−77・Ⅱa 層	15−52	10	37−109・Ⅰ 層	16−4			
3	0−43・Ⅱ 層	15−49	7	37−109・Ⅰ 層	16−1	11	37−108・Ⅱ 層	16−5			
4	2 住・確認面	15−50	8	37−82・Ⅱa 層	16−2	12	37−110・表 採	16−6			

第43図 石 器



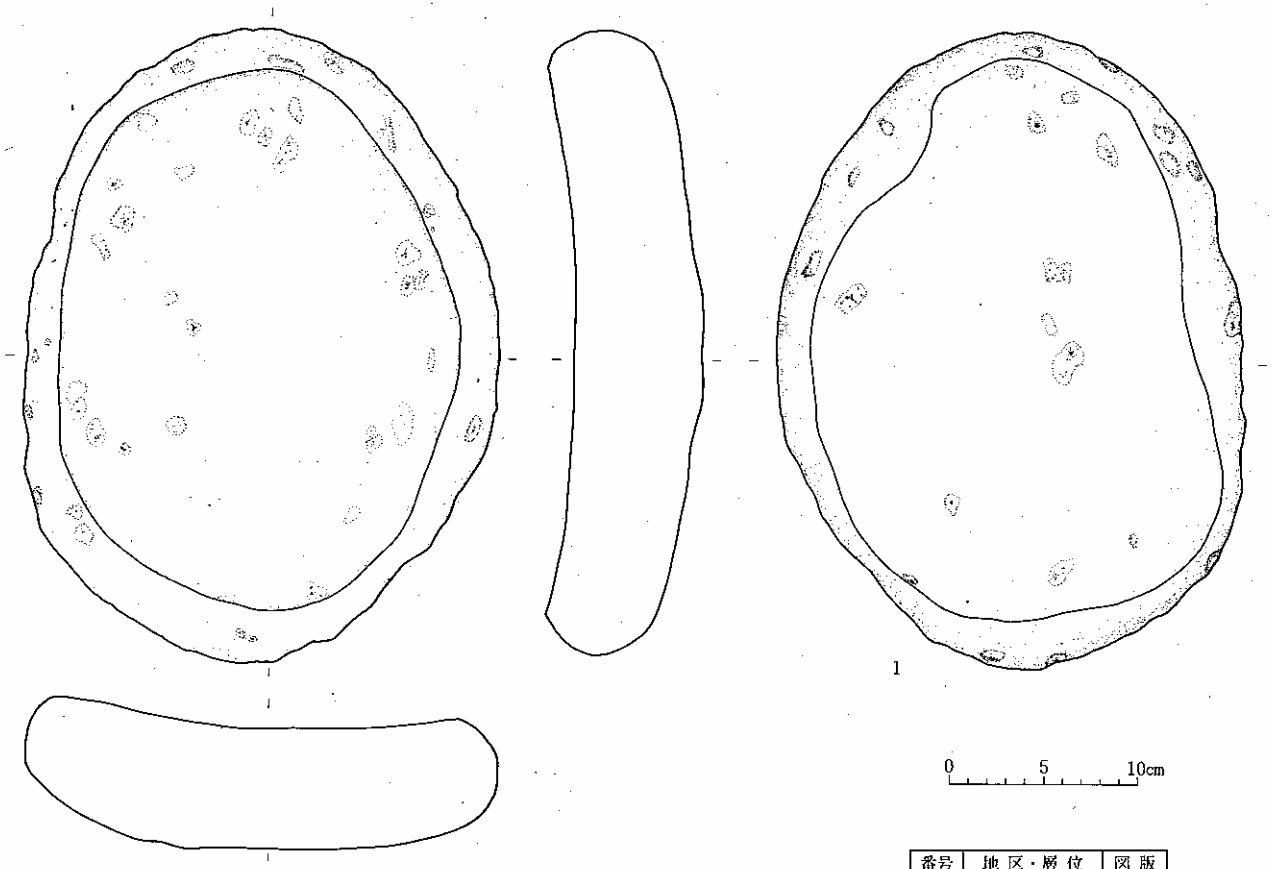
番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	0－99・Ⅱ　層	16－8	5	37－36・Ⅱa層	16－12	9	37－78・Ⅱa層	16－16	13	0－90・Ⅰ　層	16－20
2	37－79・Ⅱa層	16－9	6	37－78・Ⅱa層	16－13	10	37－77・Ⅱa層	16－17			
3	37－77・堆積層	16－10	7	2　住・埋　土	16－14	11	表　採	16－18			
4	3　住・埋　土	16－11	8	37－109・Ⅱa層	16－15	12	0－255・Ⅱ　層	16－19			

第44図　石　　器



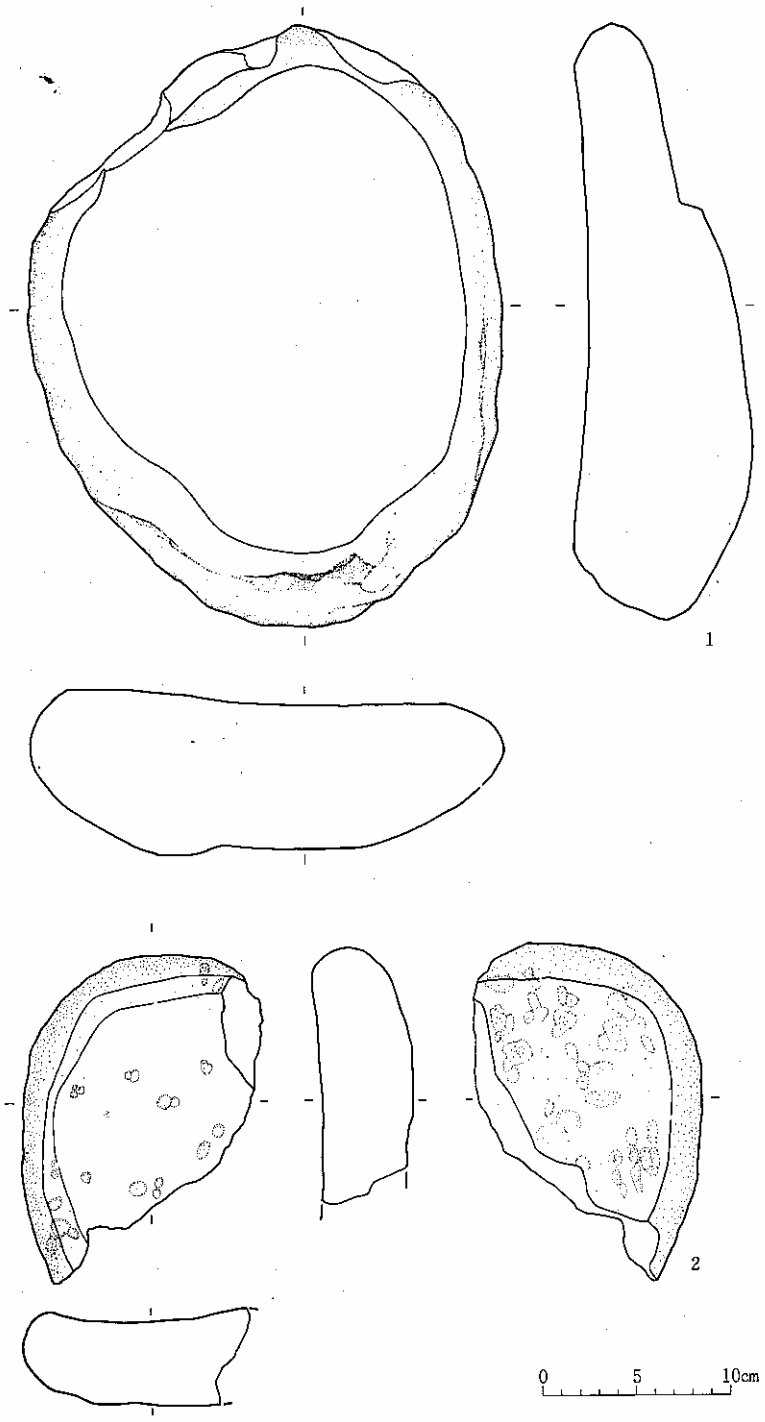
番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版	番号	地区・層位	図版
1	37−109・Ⅱ 層	16−21	3	3 住・複式炉	16−23	5	37−101・Ⅱ 層	16−25	7	0−93・堆積層	16−27
2	37−78・Ⅱ a 層	16−22	4	37−108・Ⅱ 層	16−24	6	37−76・Ⅱ a 層	16−26			

第45図　石　　器



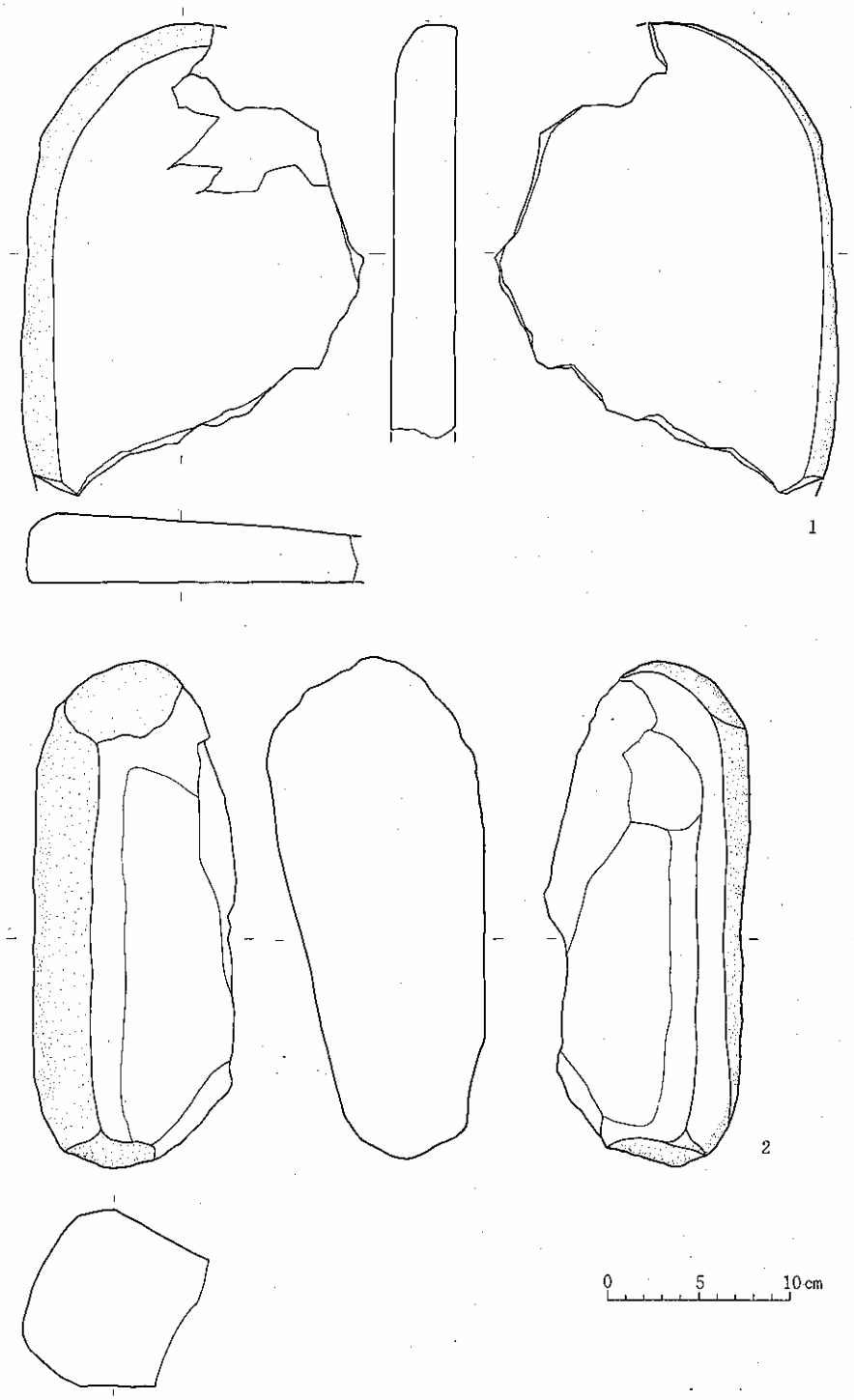
番号	地区・層位	図版
1	0−88・Ⅰ・Ⅱ層	16−31

第46図　石　製　品



番号	地区・層位	図版
1	0—91～92・風倒木跡	16—32
2	0－92・Ⅱ層	16—29

第47図　石　製　品



番号	地区・層位	図版
1	1 住・埋 土	16−28
2	1 住・埋 土	16−30

第48図 石 製 品

離が施される。

第44図２は蛤刃状の横長の剥片石器で、大きな調整剥離が施される。第43図11は三角形状のもので周縁部に細かな調整剥離が施される。

第43図13、第44図１は不整の四角形のもので周縁部に粗雑な調整剥離が施される。

第44図3～13、第45図１～４は製品であったものの欠損品である。

磨製石斧（第45図５・６）

２点出土しているが、いずれも欠損品である。６は基部の尖端部が鋭くなっているのに対し、５は角ばっている。

不明磨製石器（第45図７）

断面が偶丸長方形の棒状の製品の破片である。表面はなめらかであるが、使用痕とみられる条線が走る。

石皿（第46図１、第47図１・２、第48図・１）

第46図１、第47図１・２は、卵形の平面形を有し、中央部が皿状に凹んでいる。第48図１は楕円形の平面形を有し全体に平らである。上端部には角がなく全体的になめらかである。

磨石（第48図２）

第48図２は棒状のもので２面を使用しており、平滑になっている。

Ⅳ 考　　察

１　出土土器

今回の調査では縄文時代早期後葉～末期・前期前葉、中期後葉、後期前葉・中葉、晩期末ないし弥生時代初めの土器が出土している。このうち縄文時代早期末・前期前葉、後期中葉、晩期末ないし弥生時代初めの土器についてはすでに述べているので、ここではそのほかの土器について検討する。なお、須恵器、土師器の破片も表採されている。

縄文中期の土器

前述の項で、各々住居跡から出土した中期末葉の深鉢・浅鉢・注口土器・袖珍土器について器形、文様を中心にして記述した。ここでは、これらの土器のうち、深鉢・浅鉢を対象にして分類してみたい。はじめに深鉢から分類を行なう。

深鉢

A類：口縁部が直立するもの

ａ：変形「Ｓ」字状文のもの（第６図１・18）

ｂ：地文だけのもの

（ⅰ）頚部に隆線の巡るもの（第８図１、第16図７・８）

（ⅱ）頚部に沈線の巡るもの（第７図１～10・12・13・15、第９図11・15・16、第12図７、第16図５）

（ⅲ）地文だけのもの（第８図２・３、第９図１～３・５・９・10・13・14、第12図８・９、第16図６・９～11・20）

B類：口縁部が外反し、胴上半部でくびれ、胴中央部で脹らむもの。

Ⅰ類：大波状口縁のもの（第15図２・３）

Ⅱ類：平口縁のもの

ａ：一部連結「Ｓ」字状文のもの（第５図１）

ｂ：各部分連結「Ｓ」字状文のもの（第６図19）

ｃ：変形「Ｓ」字状文のもの（第６図８～17、第９図６～８、第12図１～６・10・11、第15図４～６）

C類：口縁部が外傾し、直線的に胴部に至るもの。

ａ：文様のあるもの（第６図３～７・第９図４）

ｂ：地文のもの（第７図11・14）

浅鉢

A類：口縁部が内弯し、端部が外反気になり、胴部は直線的にしぼまるもの（第14図１）

B類：口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴上半部で脹らむもの（第６図２、第14図２）

C類：口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴部全体が脹らむもの（第15図１）

以上、深鉢と浅鉢について分類した。この他に、注口土器と袖珍土器があるが、数が少なく分類するまでには至らなかった。

編年的位置

住居跡から出土した土器のうち、深鉢Ａａ、ＢⅡａ・ｂ・ｃ、浅鉢Ａ・Ｂ・Ｃ類はいずれも胴上半部に「Ｓ」字状文様を描いている点では特徴が類似しており、縄文中期末の大木10式土器（山内清男：1937）に比定される。さらに、大木10式土器は第Ⅰ～第Ⅳ段階（丹羽茂：1981：11）に細分されており、それにしたがえば上記の土器群は連結「Ｓ」字状文が横方向に展開するという点で大木10式第Ⅱ段階に含まれる。

深鉢Ａｂ、Ｃ類は、その特徴が不明確ではあるが、前述した土器と同様に大木10式土器に含まれるものと推定される。

つぎに、深鉢ＢⅠ類は上記の土器群とは編年的には明らかに相違している。このような特徴をもった土器は勝負沢遺跡（丹羽、阿部、小野寺：1982：３）などに類例がみられ、大木８ｂないし９式土器とされている。

なお、中期後葉の土器は土壙（第６・８号土壙）、各地区堆積層からも出土しており、第35図１は上記深鉢ＢⅠ類に類似するところから大木８ｂあるいは大木９式に、第23図１～４は深鉢Ａ・Ｂ類の中に似たものがみられ、大木10式と思われる。

後期前葉の土器

後期前葉の土器は遺物包含層、住居跡内堆積土、土壙、その他各地区の堆積層から出土している。その中には遺物包含層出土土器と同じ特徴をもつものと、明らかに特徴の異るものがあるところから、前者を第Ⅰ群土器、後者を第Ⅱ群土器とする。

〔第Ⅰ群土器〕

遺物包含層出土土器は前述のように分類された。このほか、下記のものが含まれる。

第１号土壙（第20図１～４）――――――包含層分類深鉢ⅢＣ類

第４号土壙（第21図２）――――――――包含層分類深鉢ⅢＦ４類

第５号土壙（第21図３）――――――――包含層分類深鉢ⅢＣ？類

第５号土壙（第22図１～４）――――――包含層分類深鉢ⅢＣ類

第５号土壙（第22図５・７・11）――――包含層分類深鉢ⅢＦ３類

各地区堆積層（第35図２・３）――――――包含層分類深鉢ⅢＡ類

〃　　（第35図４・６～８）――――――包含層分類深鉢ⅢＣ類

各地区堆積層（第35図５）――――――――包含層分類深鉢ⅣＡ類
〃　　（第35図９）――――――――包含層分類深鉢ⅢＦ２類
〃　　（第35図10～24）――――――包含層分類深鉢ⅢＦ３類
〃　　（第34図12～15）――――――包含層第29図９～14

この第Ⅰ群土器は、その特徴から宮城県内における縄文後期前葉の南境式（伊東信雄：1957・1981・９）に比定される。後期前葉の土器群については、南境式のほかに宮戸Ⅰｂ式（後藤勝彦・1974・11）。また、これらとは別に後期初頭の土器型式に袖窪式（林謙作：1965・７）が設定されている。これらの研究の動きから後期前葉の土器群の中にいくつかの変遷があり、細分が可能であることを伺い知ることができる。

それでは、本遺跡の第Ⅰ群土器は、後期前葉の中にあって、どの位置にその年代をさらに限定して考えることができるであろうか。

そこで、以下において、県北の後期前葉とされる代表的な遺跡と比較・対象することによりより具体的な年代を模索してみたい。ここでは、一迫町青木畑遺跡（加藤道男：1982・３）、大和町金取遺跡（小野寺祥一郎：1980・３）の遺物包含層出土土器を対象資料として考えてみたい。

青木畑遺跡の包含層は、基本層位第Ⅳ層の単層から成り、深鉢、注口土器が出土している。口縁部形態と文様の種によって、これらを分類し、その特徴から後期初頭に位置づけられるものとしている。大谷地遺跡の第Ⅰ群土器と比べると、深鉢Ⅳ類の存在が明らかではないものの深鉢の器形組成がほぼ共通しており、深鉢Ⅰ・Ⅱ類の文様も同様である。したがってほぼ同時期に属する土器群と思われるが、青木畑遺跡では深鉢Ⅰ類が主体であるのに対し、本遺跡では深鉢Ⅲ類であること、またⅢＡ・Ｃ類、ⅣＡ・Ｂ類の渦巻文や「ハ」字状文が青木畑遺跡にみられないなどの相違点があり、それは後述する金取遺跡との類似性につながる特徴と考えられることから、後期初頭の中でもいくぶん新しい要素を含んだ土器群とみることができる。

金取遺跡の土器には、深鉢・浅鉢・壺（注口）の器形がみられ、器形、文様表現技法・文様及び文様構成の点から３つのグループに大きく分類されている。第Ⅰ群土器と比べると、深鉢ⅢＣ・ⅣＢ類＝ＩＢ１ｂⅱ類、深鉢Ⅴ類＝ＩＡ１ｂ類の一部と金取遺跡の胴部資料ｂ・ｆ・ｇ類の磨消縄文技法による磨消文様が描かれるものとが類似している。しかし、金取遺跡では“頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部外傾もしくは外反する器形を持ち口縁部から頸部にかけては無文帯がめぐっているもの”や“胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形のもの”が主体を占めており、それは青木畑遺跡や本遺跡には認められない特徴であることから、南境式の中でも金取遺跡の土器群はより新しい段階に位置づけられるものと思われる。

なお第４号土壙、第５号土壙、各地区堆積層出土の深鉢ⅢＦ２・３・４類については、単純な

器形であり、文様が施されていないので、時期の異る可能性がある。

第Ⅱ群土器

前述の、遺物包含層出土土器を中心にした第Ⅰ群土器に含まれない後期前葉の土器を集めた。第２・３号土壙出土土器、各地区堆積土出土の第33図９・12、第34図１～11、第35図25～31などである。これらは前述の金取遺跡に類例が認められ、同時期に比定される。

土製品

円盤状土製品は、その出土主体である遺物包含層の年代から、縄文後期初頭の新しい時期に含まれる。金取遺跡や白石市菅生田遺跡（丹羽、阿部、小野寺：1982・９）など、中期末～後期初頭にかけての遺跡で多く出土していることが知られている。

石製品

本遺跡出土の土器の大部分は中期末葉から後期初頭の新しい時期のものであった。縄文早期末から弥生初頭に至る土器も出土しているが極く少量である。したがって、このことから本遺跡出土の大部分の石器は縄文中期末葉から後期初頭の新しい時期に属するものと言える。

２　遺　構

⑴ 住居跡

第１・３号住居跡は、炉埋設土器や堆積土出土の土器から、縄文中期末葉（大木10式期）に属すると考えられる。また、これらには、複式炉が設けられており、玉造遺跡（千葉宗久：1978・３）、上深沢遺跡（宮城県教育委員会：1978）など、多くの遺跡に類例がみられる。

⑵ 土　壙

第１・３・４号土壙は堆積土から縄文後期前葉の土器が出土している。このことから後期前葉に属する可能性がある。また、第２・３号土壙は、土器の出土状況から後期前葉に属するものと考えられるが、その遺構の性格については不明な点が多い。

第６・８号土壙は堆積土から縄文中期末葉の土器が出土しており、このことから中期末葉に属する可能性がある。

Ⅵ　ま　と　め

1．大谷地遺跡は宮城県北西部、鳴瀬川の支流である保野川左岸の河岸段丘上に立地している。

2．今回の調査の結果、縄文時代早期後葉～末葉、前期前葉、中期後葉、後期前・中葉、晩期末ないし弥生時代初頭、奈良・平安時代の遺構・遺物が発見され、その主体を成すのは中期末、後期前葉のものである。

3．縄文時代中期末の大木10式第Ⅱ段階に属する住居跡２軒を精査した。住居跡は上原型複式炉をもつ。

4．縄文時代後期初頭には遺物包含層が形成されており、出土土器は、後期初頭の中でもいくぶん新しい要素をもつほかに後期前葉と思われる土壙が検出された。

5．遺跡周辺の河岸段丘上には微高地と低湿地が入り組んでおり、遺構は微高地上で、遺物包含層は微高地から湿地への移行部緩斜面で検出された。

〈引用・参考文献〉

阿部　恵（1980・3）：「宇賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集

伊東信雄（1957・3）：「古代史－縄文式文化の変遷」宮城県史１

伊東信雄他（1981・9）：「縄文時代」宮城県史34

及川　旬他（1974・10）：「門前貝塚」

小野寺祥一郎（1980・3）：「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集

加藤道男（1982・3）：「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集

菊地淳一（1981・3）：「欠・持長地遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第79集

後藤勝彦他（1972・9）：「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』

後藤勝彦（1974・11）：「縄文後期宮戸１ｂ式周辺の吟味」『東北の考古・歴史論集』

興野義一（1968ａ）：「大木式土器理解のために（Ⅱ）」『考古学ジャーナル№16』

（1968ｂ）：「大木式土器理解のために（Ⅲ）」『考古学ジャーナル№18』

（1968ｃ）：「大木式土器理解のために（Ⅳ）」『考古学ジャーナル№24』

色麻町　（1979・2）：『色麻町史』

千葉宗久（1980・3）：「玉造遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第68集

丹羽　茂（1981・11）：「大木式土器」『縄文文化の研究』第４巻

丹羽・阿部・小野寺（1982・3）：「勝負沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第83集

丹羽・阿部・小野寺（1982・9）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第92集

林　謙作（1967・7）：「縄文文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学』Ⅱ

宮城県教育委員会（1978・3）：「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集

山内清男（1973）：「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』第１巻第１号

吉田義男（1957）：『門前貝塚』

写　真　図　版

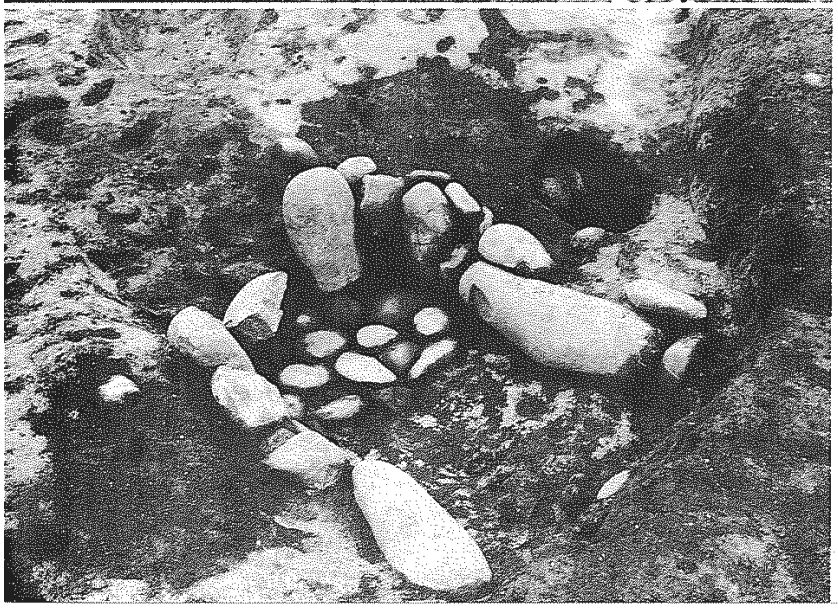
遺跡遠景
（北東より）

発掘区ー住居跡ー
（南西より）

図版１　全　　景

発掘状況ー0ライントレンチー
（西より）

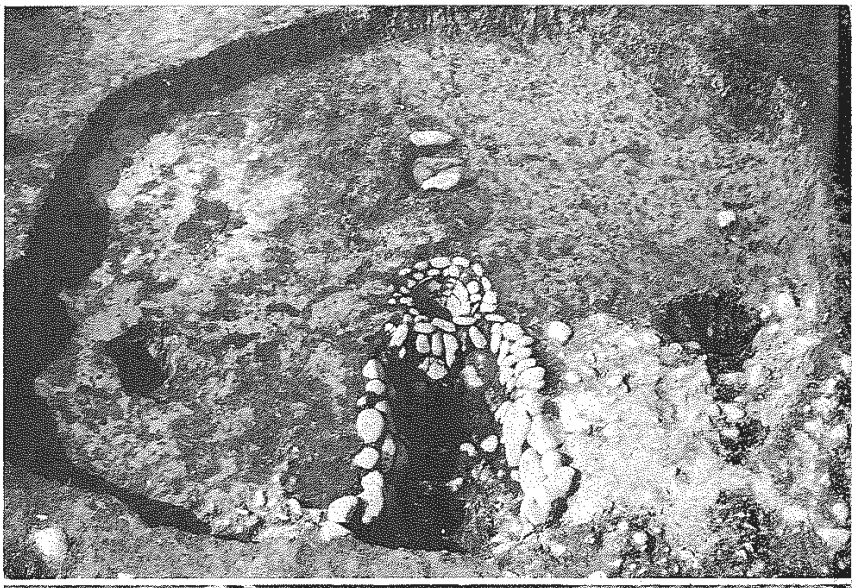
第１号住居跡
（南西より）



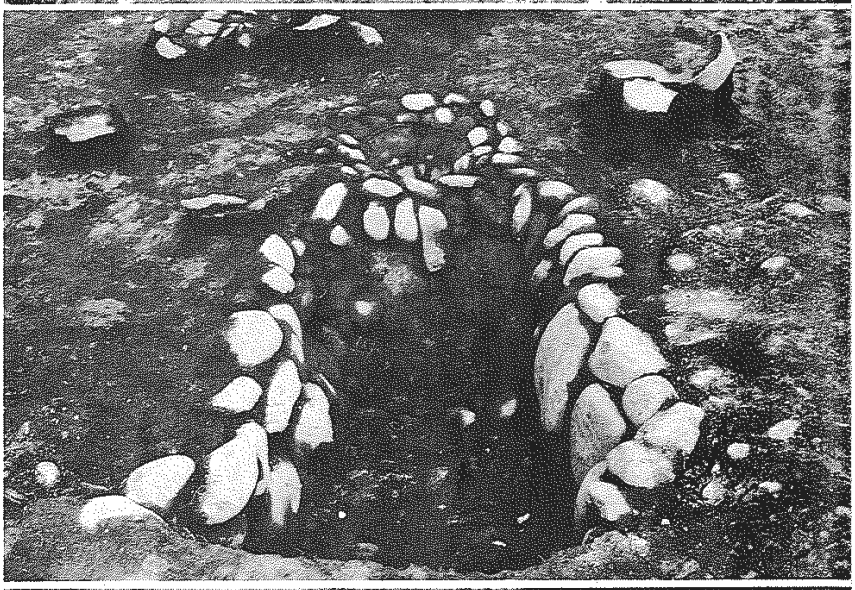
第１号住居跡ー炉ー
（南より）

図版２　住居跡

第３号住居跡
（南西より）



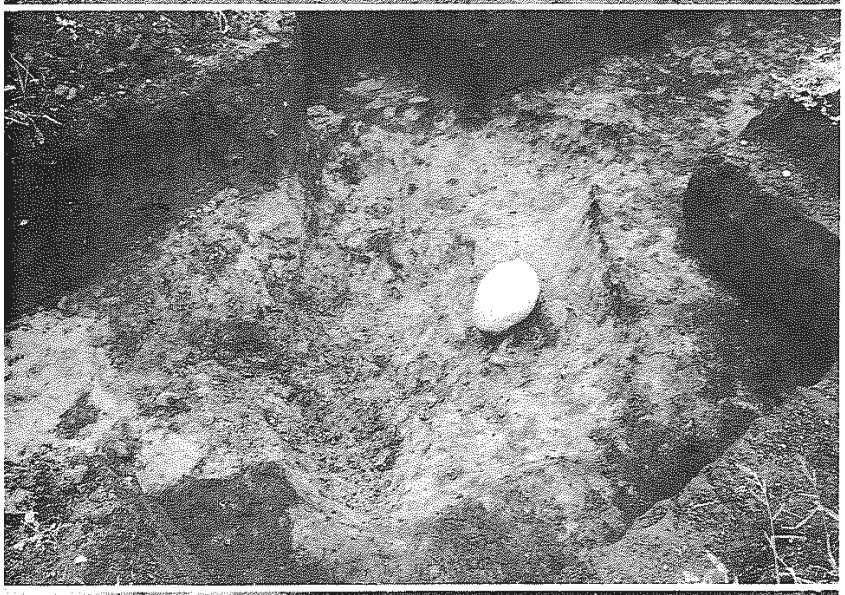
第３号住居跡ー炉ー
（南西より）



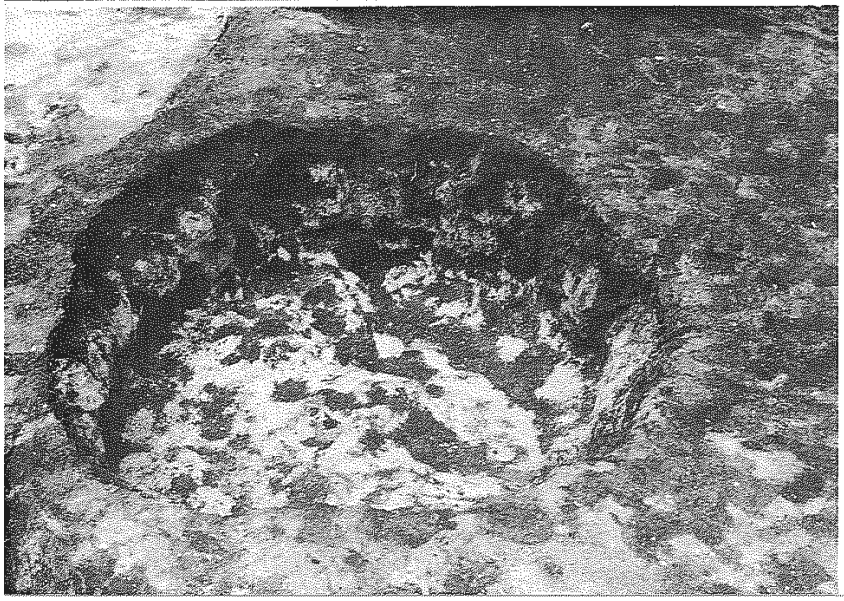
第２号土壙
（西より）

図版３　住居跡・土壙

第３・４号土壙
（南西より）
左・３号　右・４号

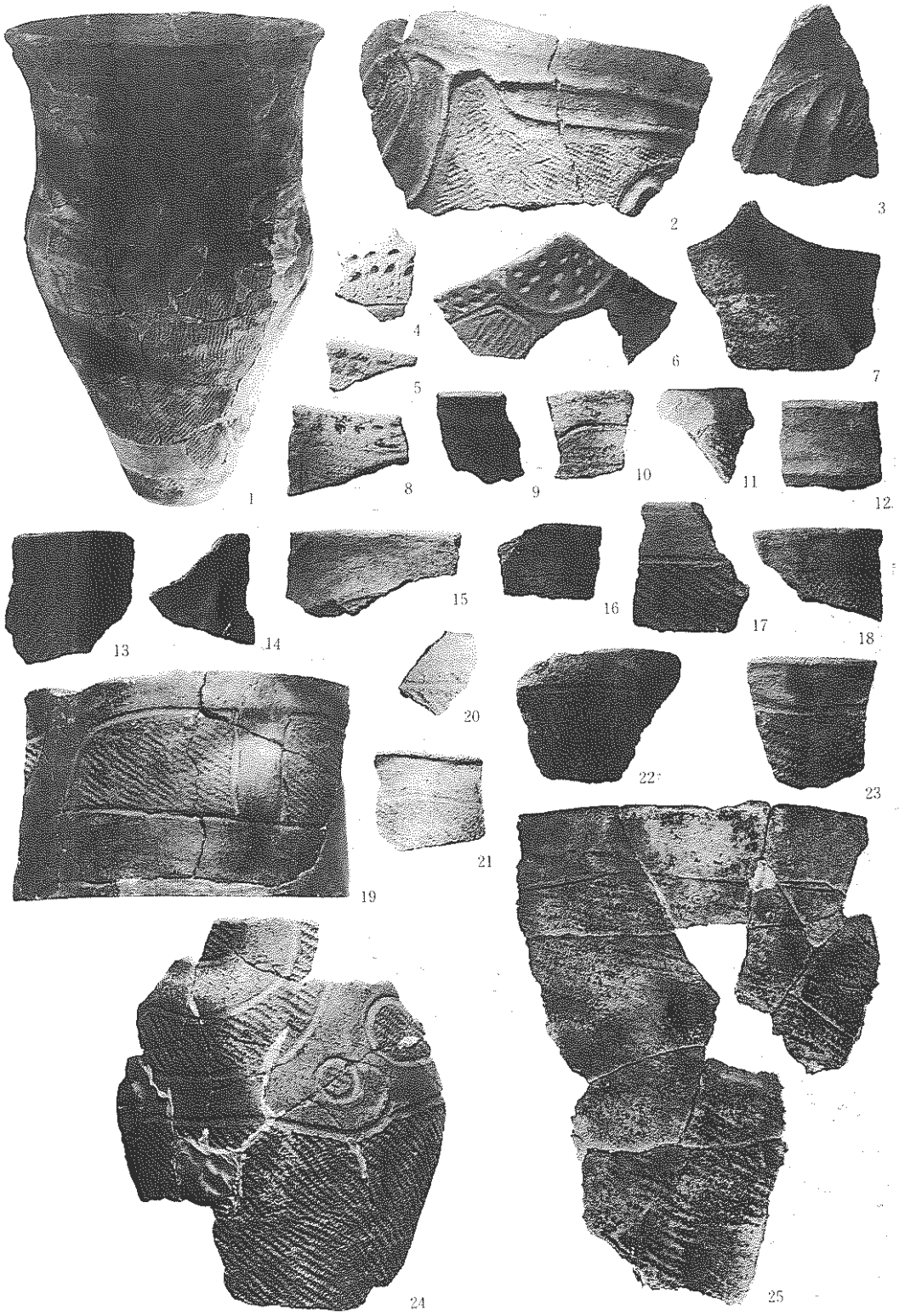


第５号土壙
（北より）

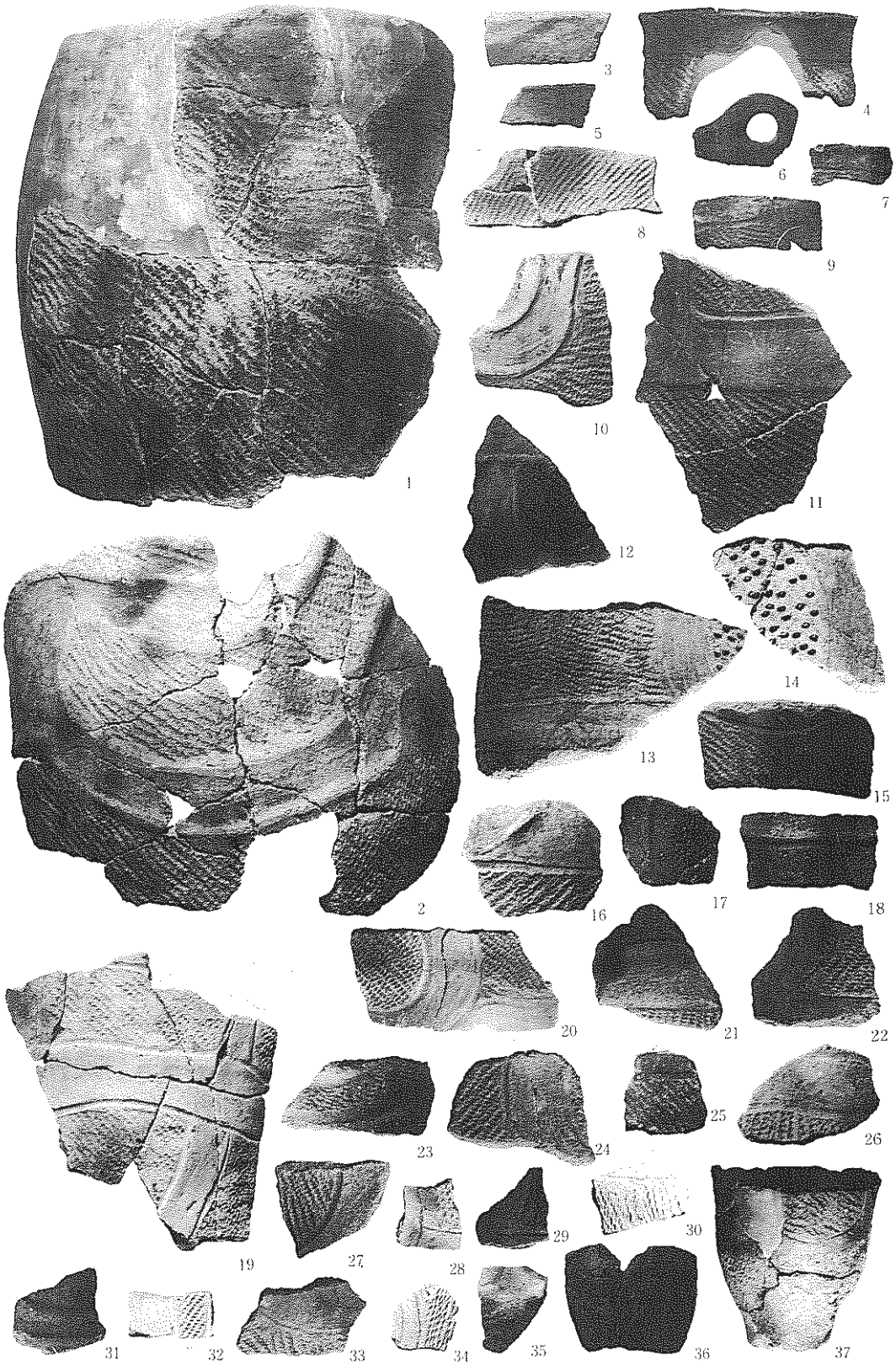


第８号土壙
（南西より）

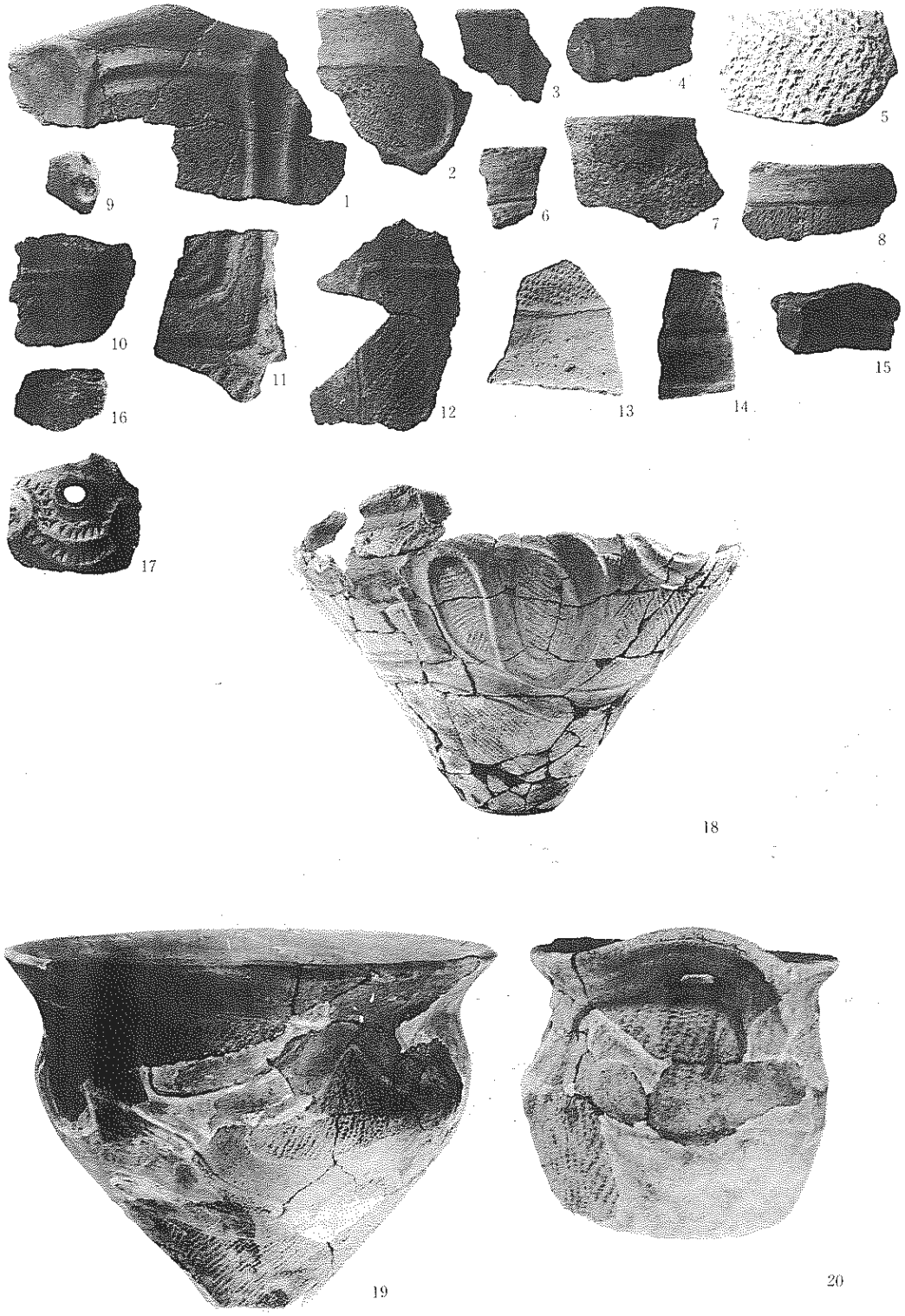
図版４　土壙



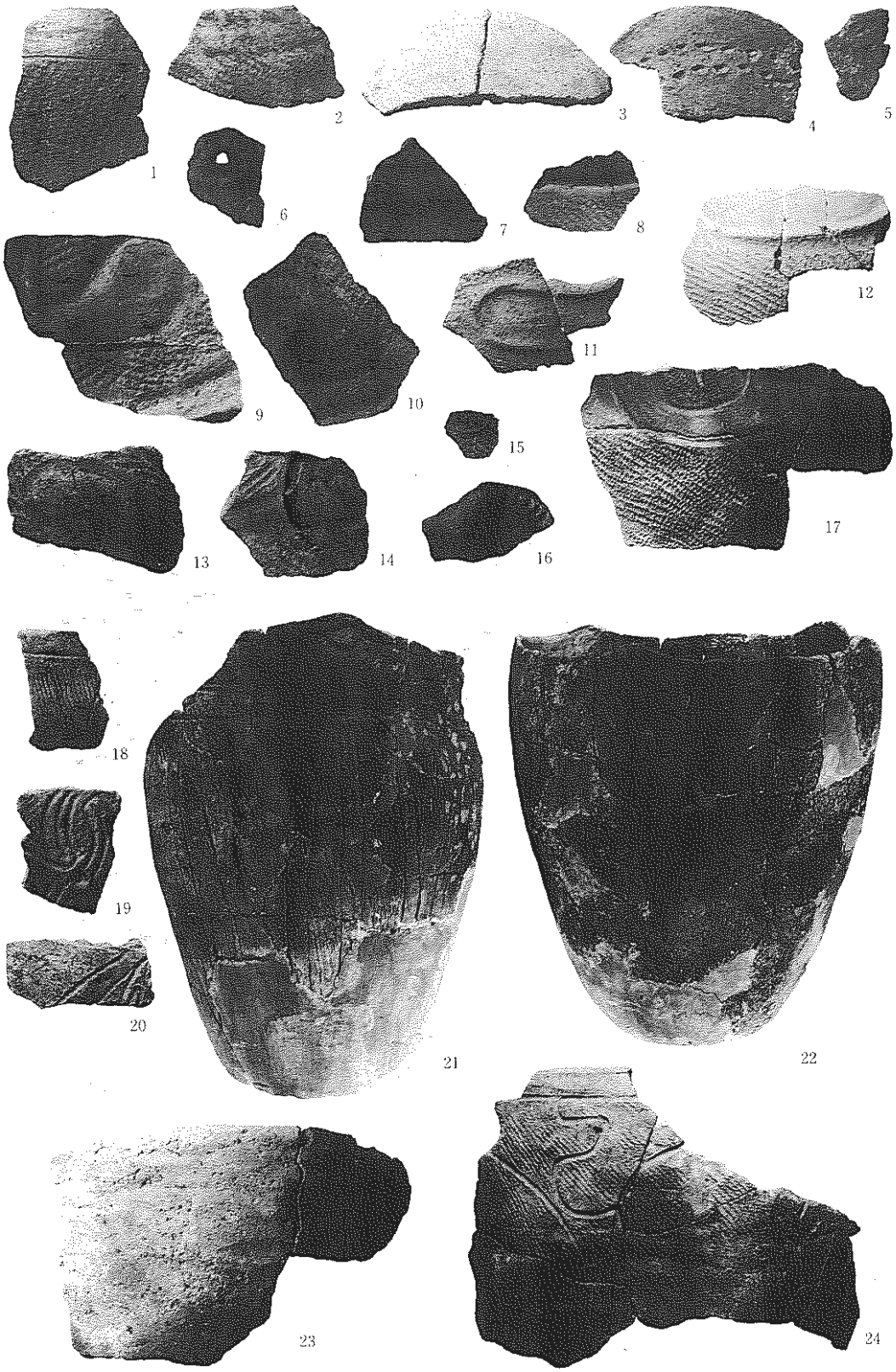
図版５　第１号住居跡出土土器



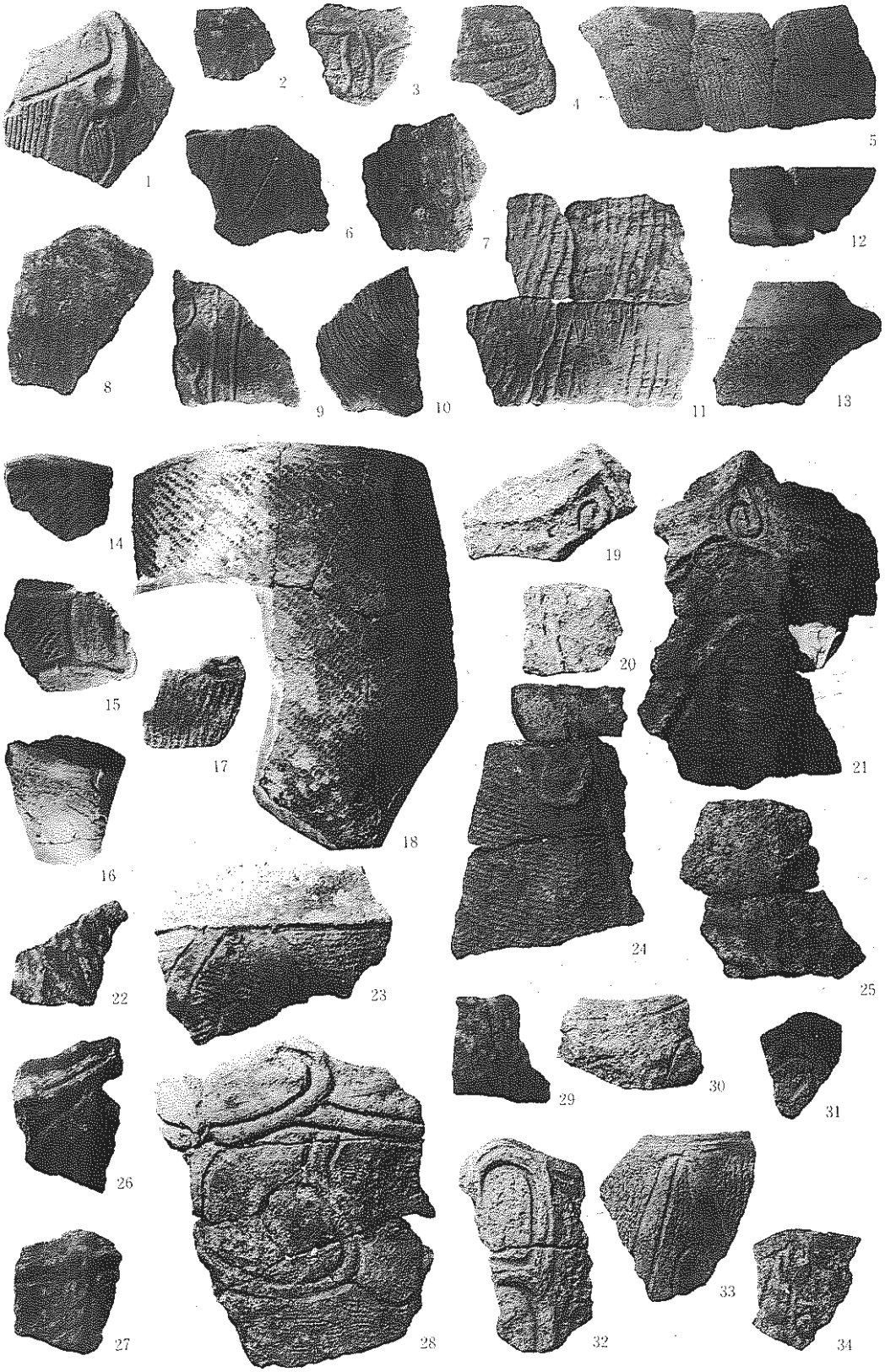
図版６　第１号住居跡出土土器



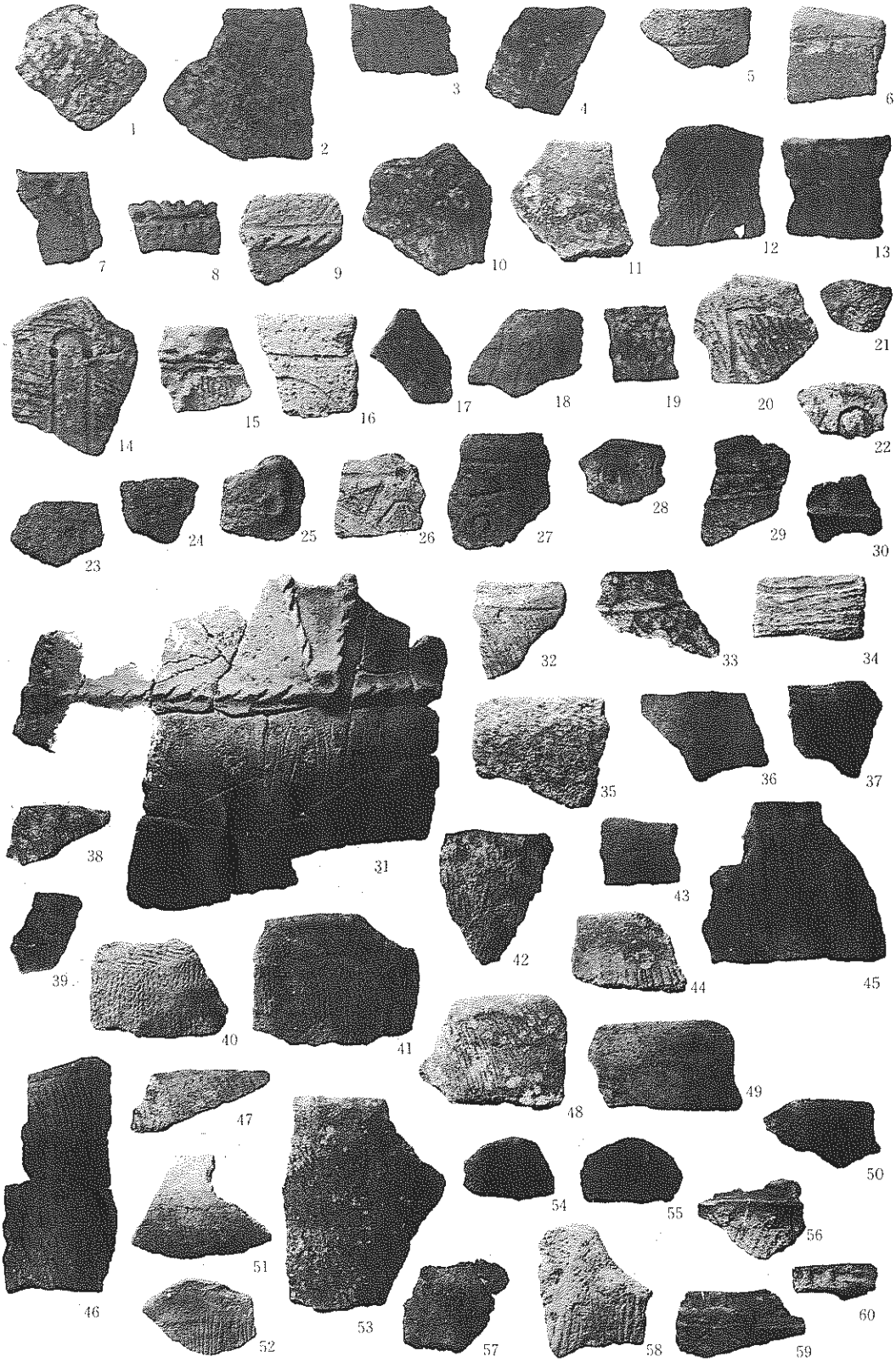
図版７　第２号住居跡（１～17）・第３号住居跡出土土器（18～20）



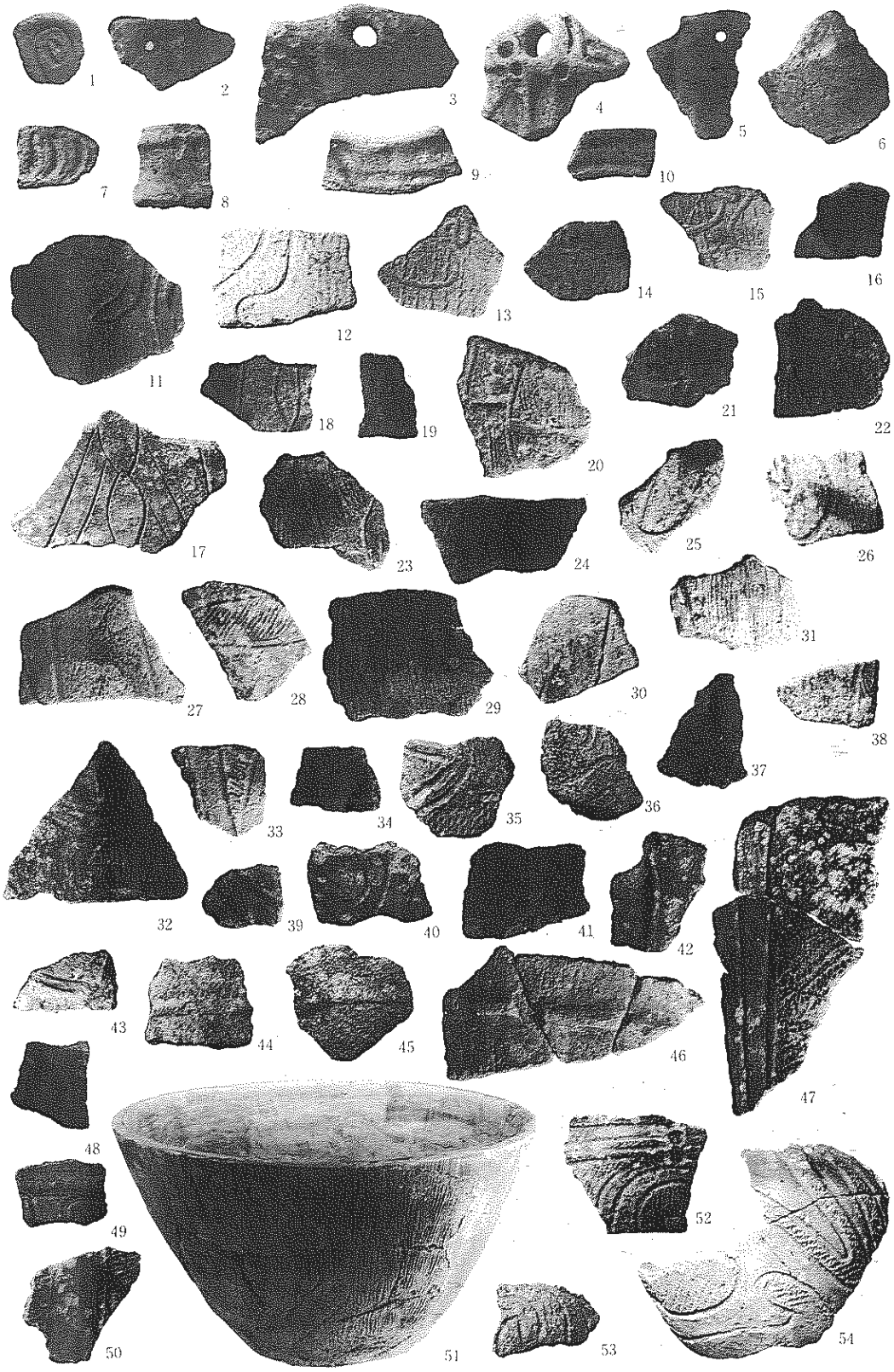
図版 8　第 3 号住居跡（1 ～17）・第 1 号土壙（18～20）・第 2 号土壙（21・22）
第 4 号土壙（23）・第 5 号土壙出土土器（24）



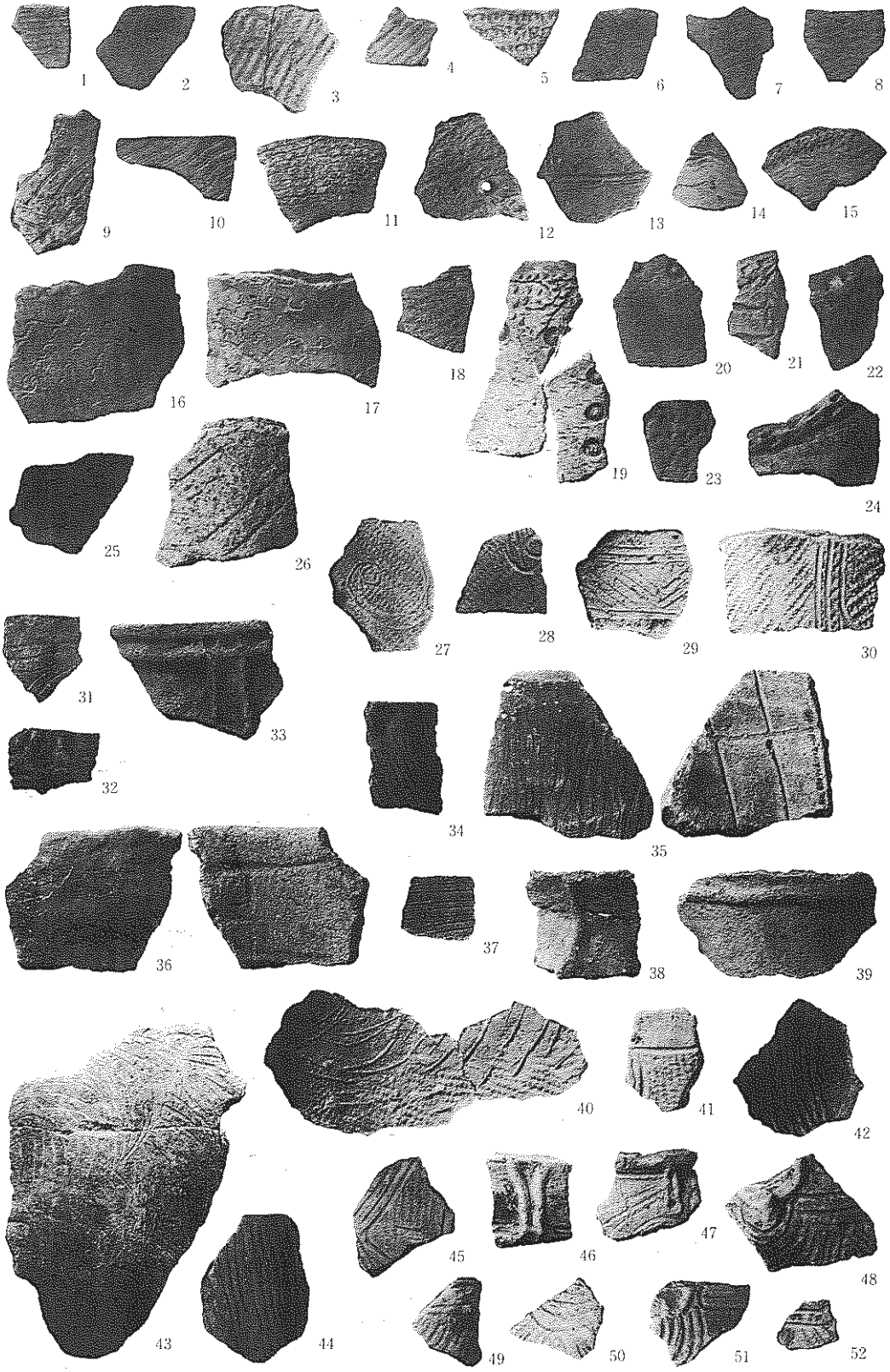
図版９　第５号土壙（１～13）・第６号土壙（14・15）・第８号土壙（16～18）・遺物包含層出土土器（19～34）



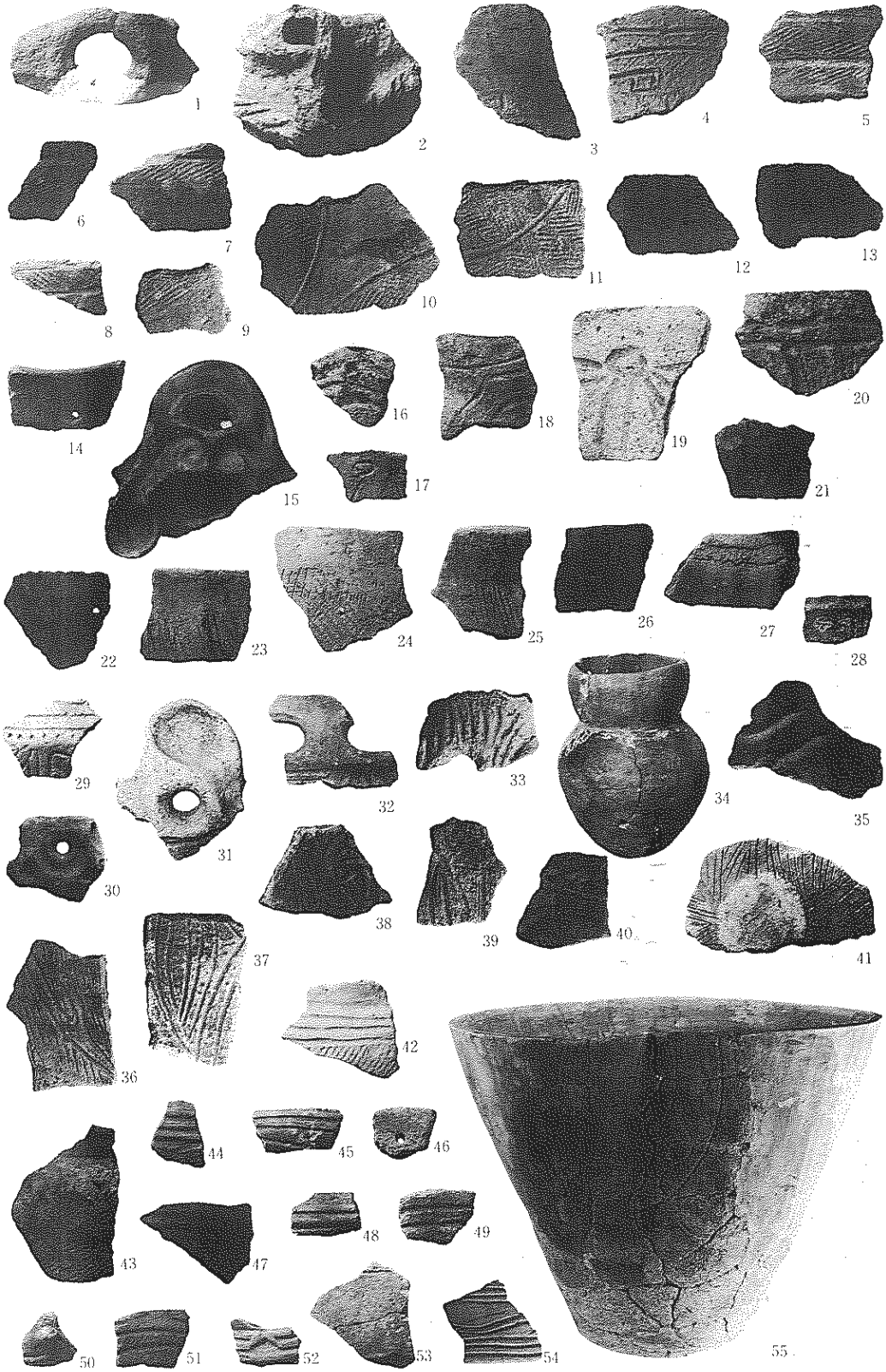
図版10　遺物包含層出土土器



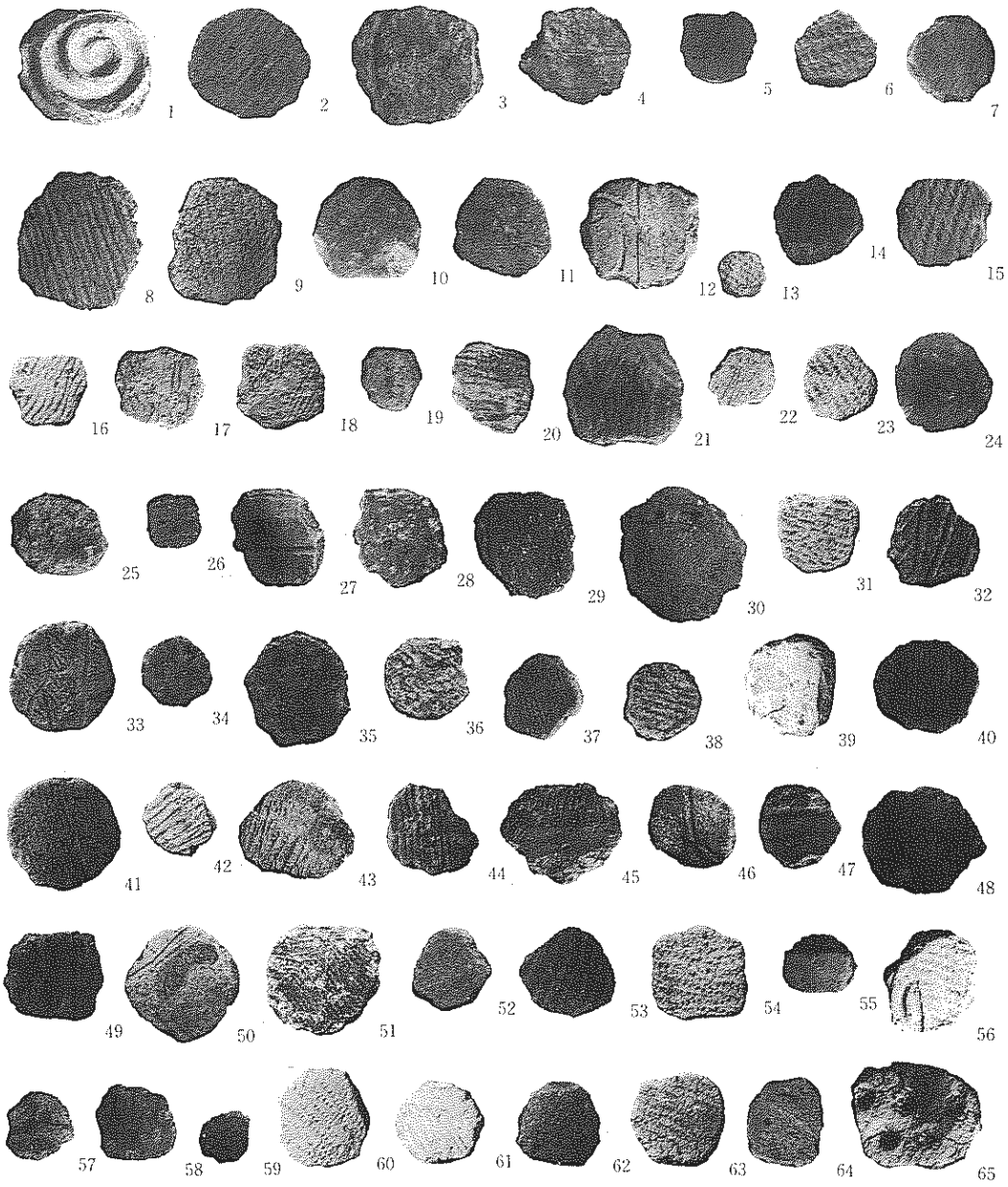
図版11　遺物包含層出土土器



図版12　その他の出土土器



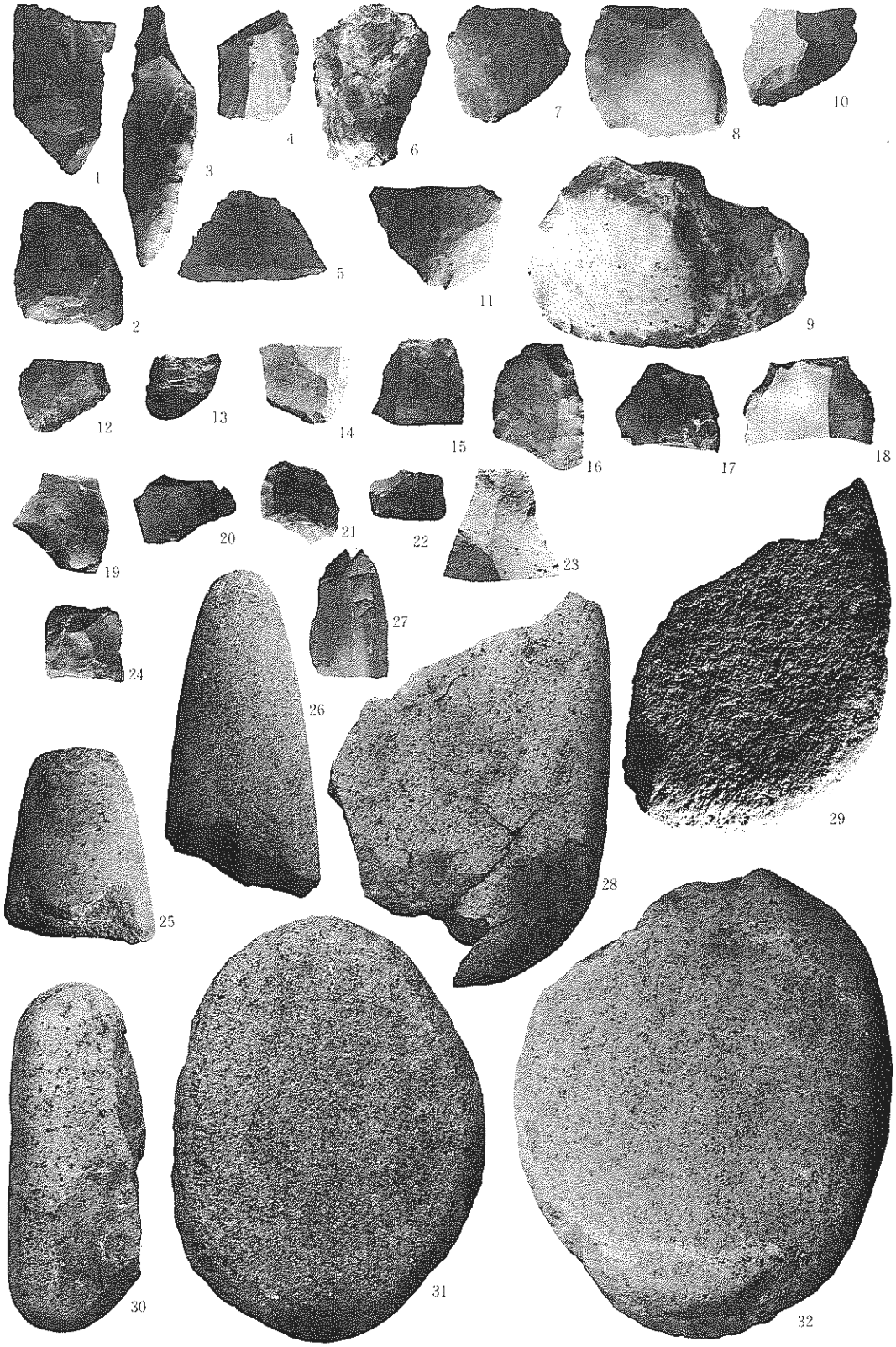
図版13　その他の出土土器



第14図　円盤状土製品

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52

第15図　石　　器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

第16図　石　　器

Ⅲ　矢（や）ノ　目（め）　遺　跡

調　査　要　項

遺 跡 記 号：ＨＢ

遺跡所在地：宮城県伊具郡丸森町小斉

調 査 期 間：昭和58年10月24日～11月18日

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：狩野　正昭・佐々木和博

後藤　彰信・菊地　逸夫

古川　一明・小川　　出

調査対象面積：16300㎡

発 掘 面 積：6942㎡

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境……253
Ⅱ　調査の概要……256
Ⅲ　発見された遺構と遺物……256
　1　中世の遺構……256
　2　中世の遺物……265
　3　古代の遺物……271
Ⅳ　まとめ……272
　写真図版……275

Ⅰ　遺跡の立地と環境（第１図）

矢ノ目遺跡は、伊具郡丸森町小斉に所在する。

丸森町は、南に阿武隈山地、北西に阿武隈山地から派生する角田山地、東にやはり阿武隈山地の支脈である亘理山地を控え、阿武隈川の貫流する北部が角田盆地に連なる沖積低地として開ける。

小斉地区は、東流する阿武隈川が流路を変えて北流する部分の右岸に位置し、西部は阿武隈山地に東部は阿武隈川に画された沖積低地の一画である。この付近は養蚕地帯として知られていたが、阿武隈川築堤にともなう農業構造改善事業によってその大部分は水田化した。

矢ノ目遺跡は、この小斉地区の沖積低地上に立地する。

この付近には、縄文時代から中世の多くの遺跡が存在する。ここでは、本遺跡とかかわる古墳時代及び中世の遺跡について概観してみたい。

古墳時代中期の遺跡には矢ノ目遺跡があり、今回の調査区の東約200mの地点から多量の土師器と石製模造品が出土し、祭祀遺構と考えられている（志間：1964）。また、南約1.2kmの自然堤防上には石製模造品を出土する前並遺跡が知られている。

本遺跡周辺の中世城館を挙げれば、沖積地上に立地する矢ノ目遺跡、光目内館跡、丘陵上に立地する金山城跡、柴小屋館跡、台町館跡、冥護山館跡等がある。とりわけ、矢ノ目館跡は本遺跡に近接しており、そのかかわりが注目される。

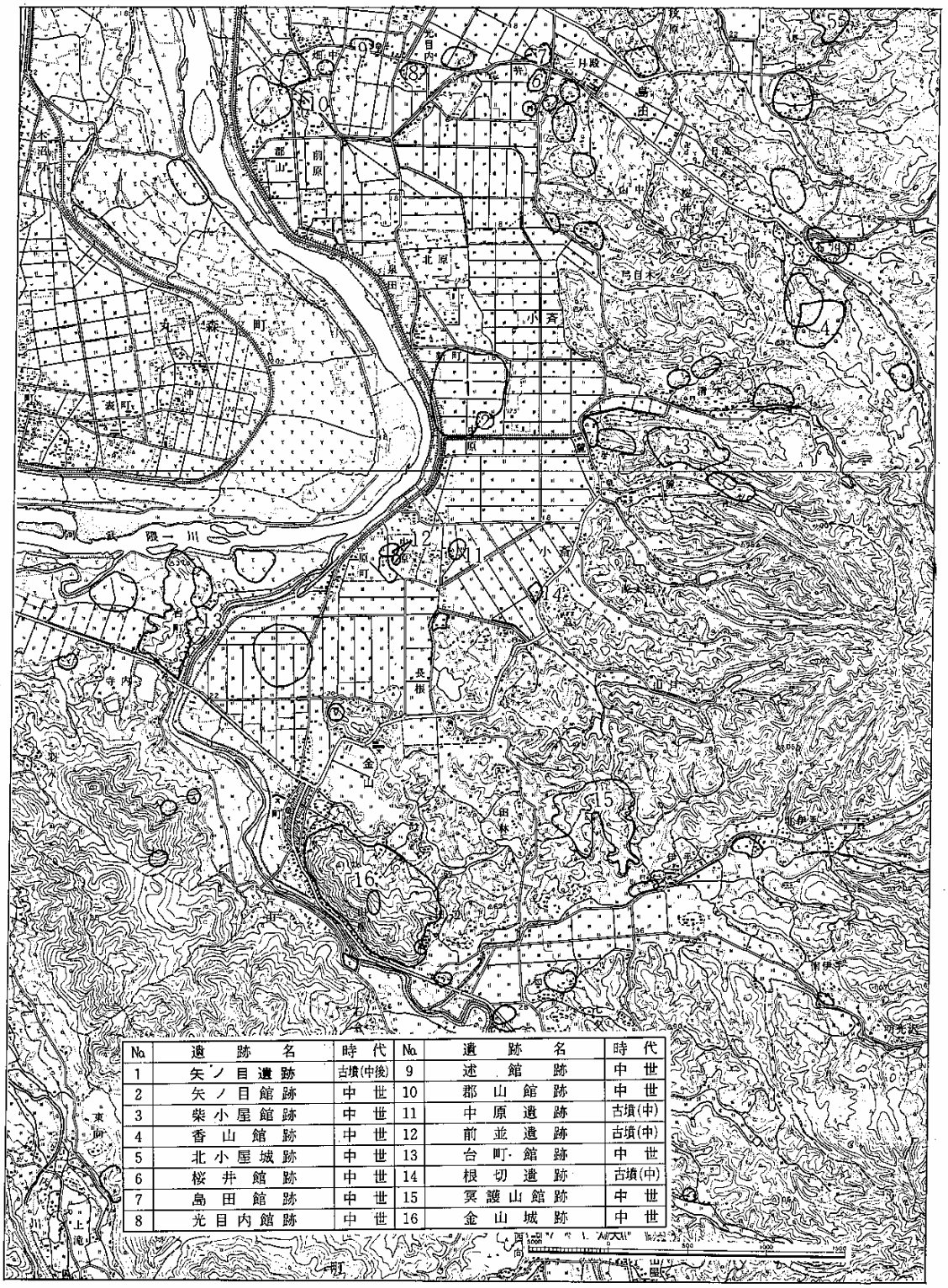
次に、文献史料の面から当地方の中世を概観する。

当地方は、鎌倉幕府の成立とともに千葉氏一族武石氏の支配下に入った。この後、伊具郡は北条氏所領に編入されたものと考えられている（小林・大石編著：1978）。

南北朝期には、武石（亘理）氏が初め南朝方につき後、足利尊氏に帰属したことにみられるように当地方の武士集団も戦況の推移や一族内部での所領配分をめぐる葛藤のなかで動揺を重ねたものであろう（亘理町史編纂委：1975）。

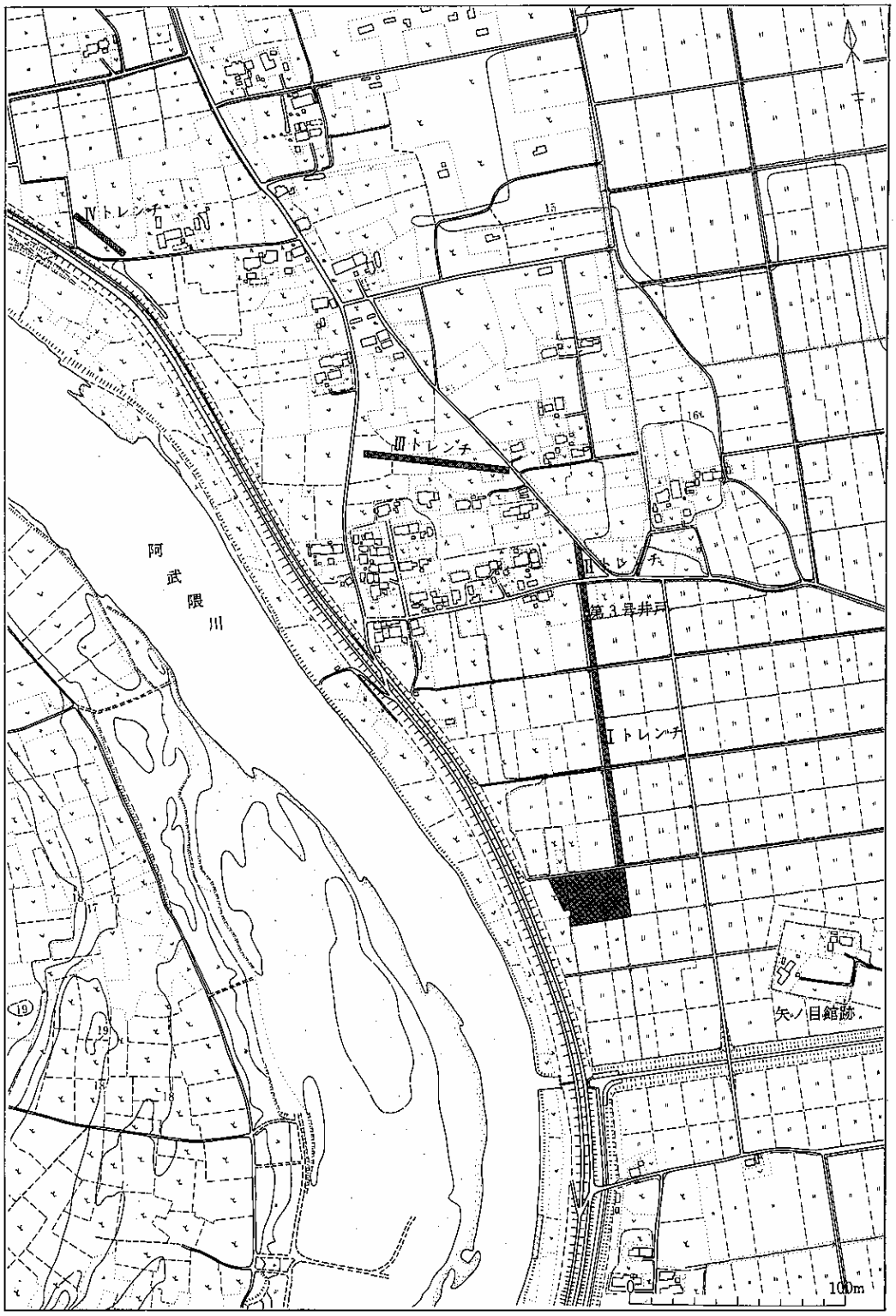
戦国時代末期には、この地域は相馬氏、伊達氏の係争の地となり、矢ノ目館跡はその拠点の一つとなっている。永禄９（1566）年に、金山・小斉が、元亀元（1570）年には丸森が相馬領となり、これに伊達輝宗・政宗が天正９（1581）年から攻勢に出て天正12（1584）年まで攻防を重ね、当地方は最終的には伊達氏の手に帰した。

本遺跡からは、すでに井戸１基が発見されている（志間：1982）。今回の調査区はその東側に隣接している。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	矢ノ目遺跡	古墳(中後)	9	述館跡	中世
2	矢ノ目館跡	中世	10	郡山館跡	中世
3	柴小屋館跡	中世	11	中原遺跡	古墳(中)
4	香山館跡	中世	12	前並遺跡	古墳(中)
5	北小屋城跡	中世	13	台町・館跡	中世
6	桜井館跡	中世	14	根切遺跡	古墳(中)
7	島田館跡	中世	15	冥護山館跡	中世
8	光目内館跡	中世	16	金山城跡	中世

第1図 周辺の遺跡



第2図　調査区位置図

Ⅱ　調査の概要

調査は、揚水機場の建設される阿武隈川堤防に隣接した地区約4500㎡（第１次調査）、およびこれにともなう送水樋管の埋設される幅７m、延長1685mの細長い部分約11800㎡（第２次調査）を対象に行われた。その際、全面に表土除去を行ったのち遺構確認、精査という順序をとった。

調査区は桑畑と水田からなるが、水田部分の遺構の一部は過去の削平によってすでに失われていた可能性がある。

調査区の基本層位についてまとめると次のとおりである。

第１層　耕作土　厚さ約15cm

第２層　シルト質土壌　厚さ約２m

第３層　砂層と粘土質シルト層の互層　厚さ2.7～３m

第４層　礫層

調査においては、基準線を現水田区画（真北方向）にあわせて３m×３mのグリッドを設定し、南から北へアルファベットを、東から西へアラビア数字を付し、遺構の実測・遺物のとりあげに用いた。

また、７m幅のトレンチについては、南からそれぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳトレンチとし、これの東西（短辺）を３mのもの２本、１m幅のもの１本とに３分割して東からＡ・Ｂ・Ｃとし、南北（長辺）をやはり３m幅で南から番号を付した。

遺構の実測は、1/20の遣り方測量を行った。

今回の調査で発見された遺構は、溝34本、井戸３基、土壙３基、火葬施設２基、ピット群である。

これらにともなう遺物は、陶磁器・鉄製品（刀・刀子・釘・轡（くつわ））・青銅製品（古銭・用途不明品）・砥石・木製品等である。

この他に、土師器の集中地点が検出され坏・甕が出土している。

Ⅲ　発見された遺構と遺物

１．中世の遺構（第３図）

（1）溝（第４図）

溝は34本検出された。平均して幅２m、深さ１mほどの規模をもち遺物をともなうものと、幅約40cm、深さ約15cmと狭く浅い遺物をほとんど含まないものとに大別できる。ここでは、前者５本について詳しく述べる。後者については、その規模、走行方向、切り合い関係等を一覧

表として掲げるにとどめる。

〔第７号溝〕

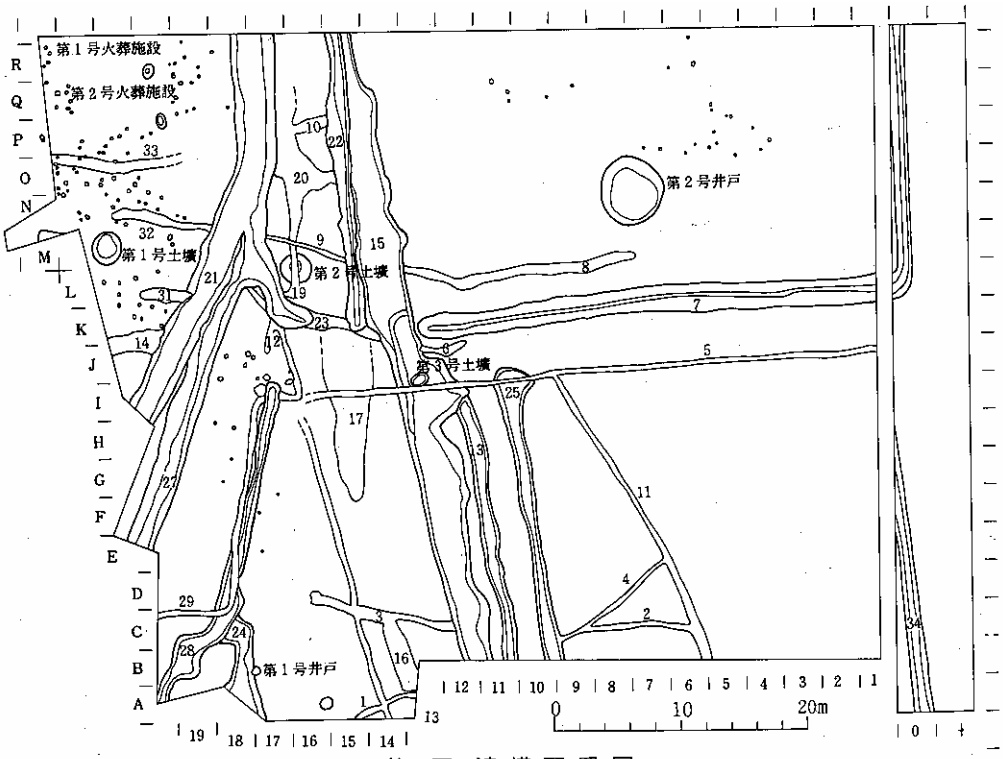
北から南へのびほぼ直角に西に折れ、第15号溝に交わる直前で終る。堆積土は５層に分かれ第２層以下はグライ土壌である。幅約２m、深さ約90cmである。断面Ｖ字型のいわゆる「薬研堀」である。その端部の壁はほぼ垂直である。底面は、南北に延びる部分はほぼ平坦で、東西に延びる部分で東に向って緩やかに傾斜する。出土遺物には中世陶器・磁器がある。中世陶器は第１層から５点、第３層から１点、磁器は第３層から１点出土している。

〔第15号溝〕

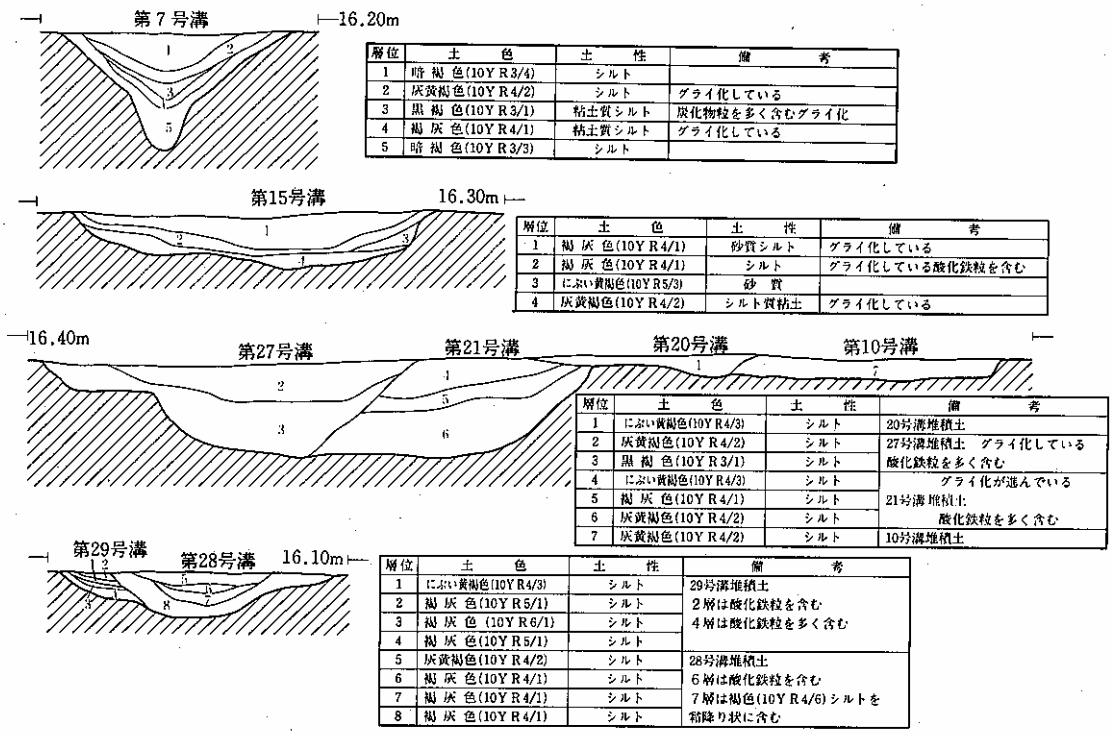
第22号溝に切られ、第３・８号溝を切る。ほぼ南北に走り、第７号溝とともに第２号井戸およびその周辺のピット群を矩形に区画する。堆積土は４層に分かれ、第１・２・４層はグライ化がすすんでいる。幅３m～5.6m、深さ30～50cmと広く浅い。両肩がなだちかに傾斜し、広く平坦な底面につづく。Ｌ－14グリッド付近の第１～２層からは陶磁器・鉄製品・古銭が集中して出土している。

〔第21号溝〕

第27号溝に切られる。ほぼ東西に走る。ほぼ同一方向に走る第27号溝とＬ－18グリッド付近で重複する。堆積土は３層に分かれる。幅約2.5m、深さ約80cmである。断面形はU字形をし



第３図　遺構配置図



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	グライ化している
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物粒を多く含むグライ化
4	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	グライ化している
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	

層位	土色	土性	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	グライ化している
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	グライ化している酸化鉄粒を含む
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質	
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	グライ化している

層位	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	20号溝堆積土
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	27号溝堆積土　グライ化している
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	酸化鉄粒を多く含む
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	グライ化が進んでいる
5	褐灰色(10YR4/1)	シルト	21号溝堆積土
6	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	酸化鉄粒を多く含む
7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	10号溝堆積土

層位	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	29号溝堆積土
2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	2層は酸化鉄粒を含む
3	褐灰色(10YR6/1)	シルト	4層は酸化鉄粒を多く含む
4	褐灰色(10YR5/1)	シルト	
5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	28号溝堆積土
6	褐灰色(10YR4/1)	シルト	6層は酸化鉄粒を含む
7	褐灰色(10YR4/1)	シルト	7層は褐色(10YR4/6)シルトを
8	褐灰色(10YR4/1)	シルト	霜降り状に含む

第４図　溝　断　面　図

ている。底面は北に向って緩傾斜する。主にその第Ｉ層から古銭１枚と多数の中世陶器を出土している。

〔第27号溝〕

第21号溝を切る。ほぼ東西に走る。堆積土は２層に分かれる。幅約２m、深さ約80cmである。断面は半円形である。底面は南へ向って傾斜している。中世陶器・釘・青銅製品（古銭・用途不明品）を出土している。

〔第28号溝〕

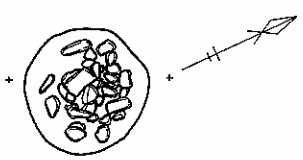
第６号溝、第24号溝を切り、第29号溝に切られる。第27号溝に平行して北から南へ延び、その南端部で東へ向きをかえる。堆積土は４層に分かれる。幅約1.7m、深さ45～50cmと幅広く浅い。傾斜の緩い両肩部と平坦な底面をもつ。底面は北に向って緩傾斜する。中世陶器を出土している。

（2）井　戸

井戸は３基発見された。第１号、第２号井戸は、それぞれＡ－16・Ｎ－７グリッドから検出された。第３号井戸はこれらから北へ約300m離れたＩトレンチＢ－108グリッドから検出された。

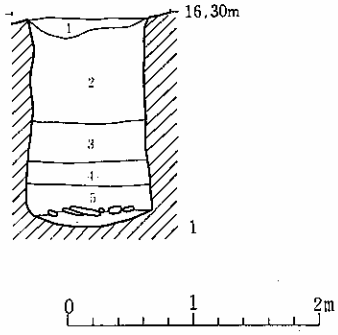
〔第１号井戸〕（第５図１）

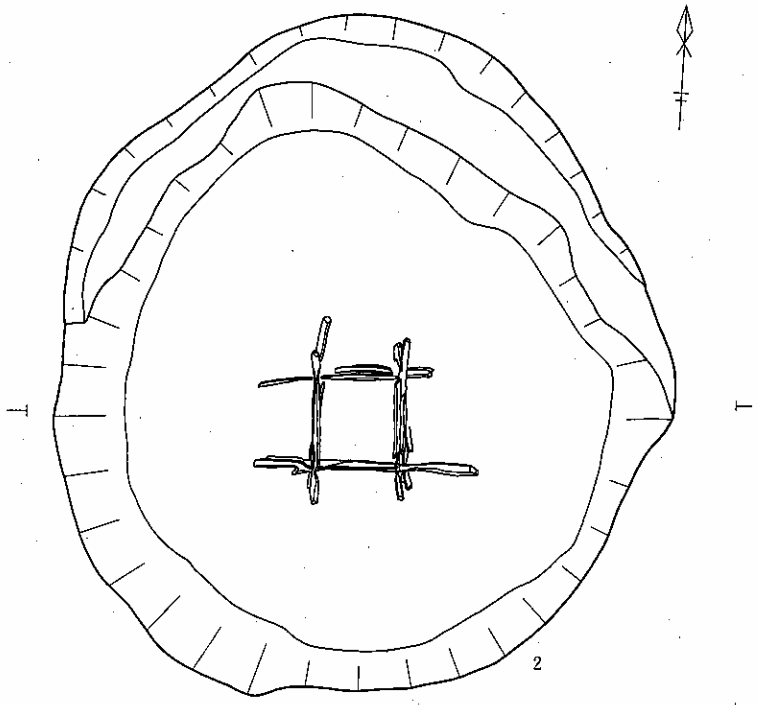
平面形は円形で、径１m、深さは1.68mの素掘りの井戸である。底面に径20cmほどの円礫を

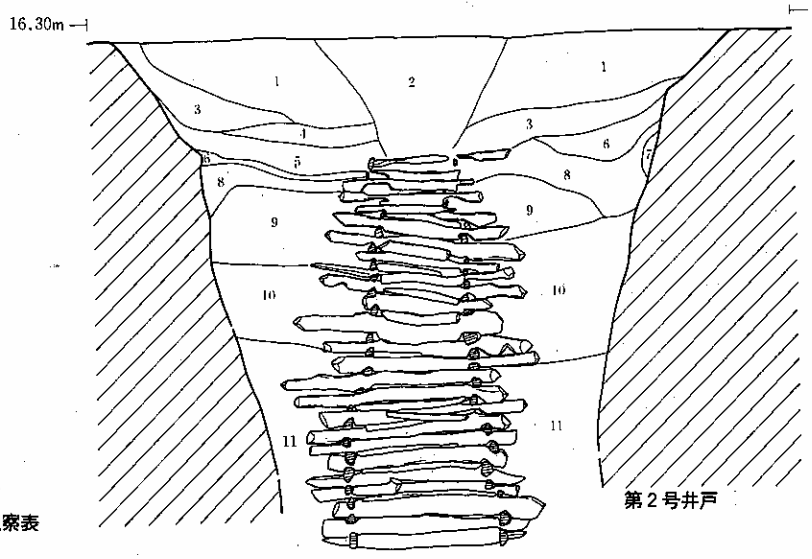


第1号井戸堆積土

層位	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物を若干含む，グライ化している
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物を含む、黄褐色・にぶい黄褐色シルトブロックを含む
3	褐 灰 色(10YR4/1)	シルト	炭化物を含む
4	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト質粘土	
5	黒 褐 色(10YR3/1)	シルト質粘土	植物種子・炭化木片を若干含む







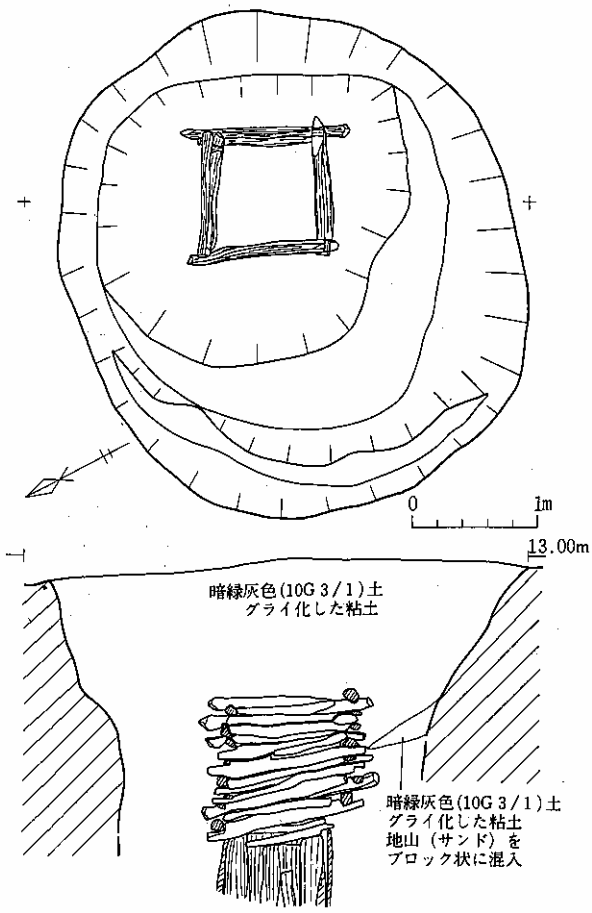
第2号井戸

第2号井戸土層観察表

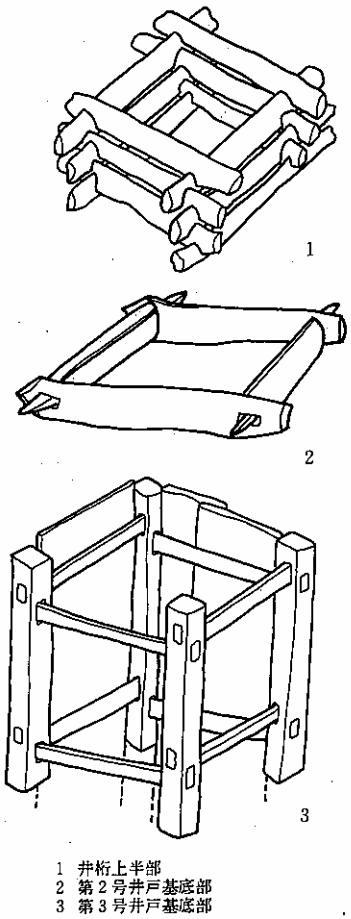
層位	土　色	土　性	備　考
1	褐　色(10YR4/4)	シルト	灰黄褐色(10YR4/4)シルトブロックを含む，グライ土壌
2	暗 褐 色(10YR3/4)	粘質シルト	木炭片をわずかに含む、グライ土壌
3	褐 灰 色(10YR4/1)	シルト	褐色(10YR4/6)シルトブロックを含むグライ土壌
4	暗 褐 色(10YR3/3)	シルト	
5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	酸化鉄土を含む
6	赤 褐 色(5YR4/8)	シルト	酸化鉄土

層位	土　色	土　性	備　考
7	褐 灰 色(10YR4/1)	シルト	
8	褐　色(10YR4/6)	シルト	酸化鉄土
9	灰　色(7.5Y4/1)	シルト	灰色中砂ブロックを含む
10	灰　色(7.5Y5/1)	中　砂	灰色シルトブロックを含む
11	灰　色(7.5Y4/1)	シルト	

第5図　第1・2号井戸



第6図　第３号井戸



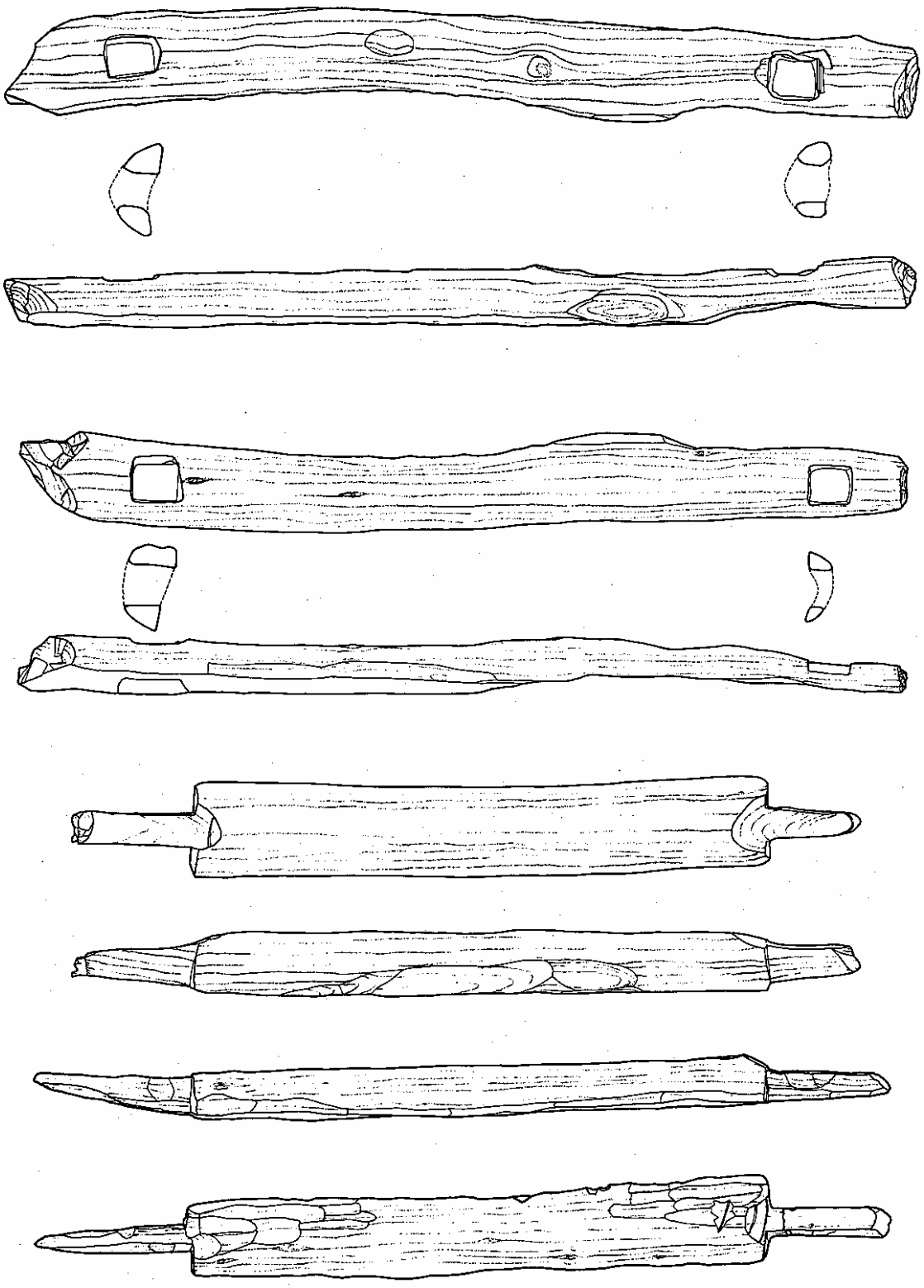
第7図　井桁模式図

敷く。堆積土は５層に分けられ、いずれもグライ化している。遺物の出土はない。

〔第２号井戸〕（第５－２・７、９－１・２図）

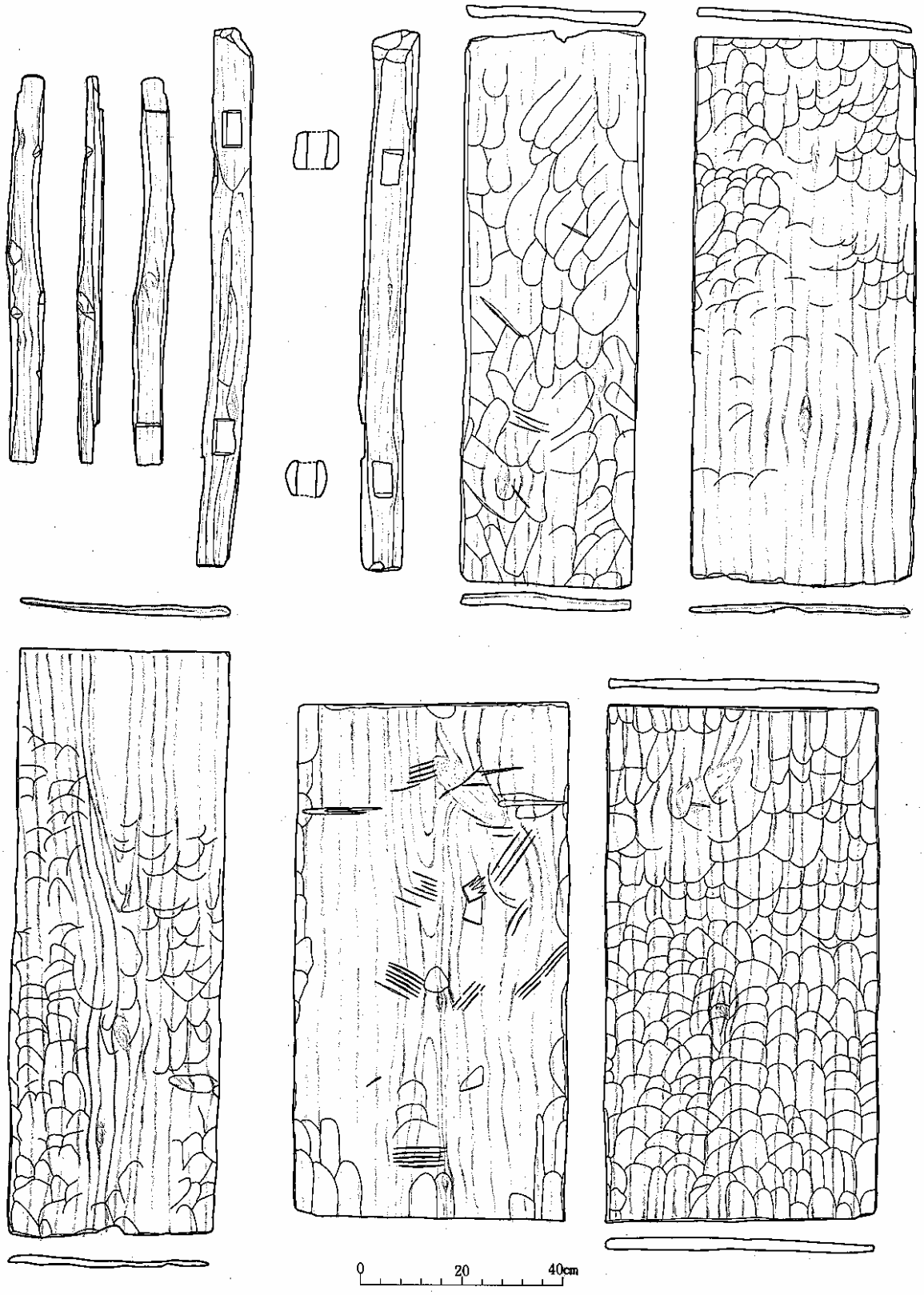
掘り方の平面形は径約5.3mの円形で、深さは4.1mである。遺構確認面下96cmで井桁が確認され、井桁が基底部まで残存していた。井桁の基底部は、径15cm、長さ1.6mほどの丸太を半截したもの４本を利用している。４本のうち２本の両端に枘を削り出し他の２本に枘穴を切り組んでいる。材はいずれも樹皮のついたままのものである。この内法1.1mの基底部の上に丸太を半截した材を46段以上組みあげている。この井桁は、上部にいくにしたがってその内法が小さくなる。材は組みあわせ部分に梯形の切れ込みをいれており、材どうしがうまく組合うよう調整されている。なお、材の中には重なりあう部分と切れ込みの位置があわず、切れ込みの位置を修正したものもある。組みあげる際に細目の割材を井桁の外側に補強として入れている。

掘り方の埋土は11層に分かれる。井戸の底面は基本層位第３層下部のグライ化の進んだ砂層に達している。井桁内の底面からは木葉などとともに曲物２個体が出土している。



0 20 40cm

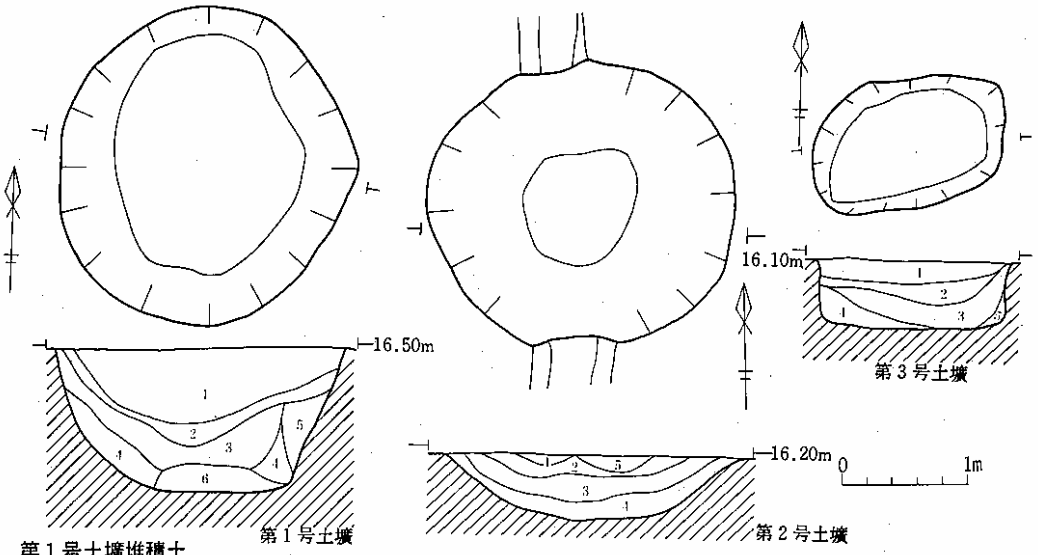
第8図 井 戸 枠(1)



第9図　井　戸　枠(2)

〔第３号井戸〕（第６、８、９－３図）

掘り方の平面形は径４mの円形であり、深さは約2.3mである。遺構確認面下1.1mから井桁が検出され基底部まで残存していた。井桁の基底部の構造は、四隅に柱を立てその柱に枘組で上下２段の横桟を取付け、これの外側に縦板を東側・北側に１枚づつ、西側・南側に１部を重ねて２枚づつをあてて、さらに押えの板を外側に並べている。内法は１辺80cmである。隅柱には１辺８cm、長さ１mの角材を用い横桟には１辺４cm、長さ76cmの角材で両端に枘を削り出したものを用いている。縦板は、刃巾５cmほどの手斧で、厚さ約２cm、幅35～52cm、長さ100～115cmの板に製材したものである。この基底部の上に第２号井戸と同様の材を用いて井桁が18段以上組まれている。組み方は粗雑で、東辺が低く傾いていたのを細目の割材を入れて高さを調整しながら最終的に４辺が水平になるよう井桁を組みあげている。



第１号土壙堆積土

層位	土　色	土 性	備　考
1	にぶい黄褐色(10Y R 4/3)	シルト	炭化物粒と焼土粒を多く含む
2	暗 褐 色 (10Y R 3/3)	シルト	褐色(10Y R 4/6) シルト、にぶい黄橙色(10Y R 6/3)細砂を含む
3	黒 褐 色 (10Y R 3/2)	シルト	炭化物粒を若干含む
4	黒 褐 色 (10Y R 3/2)	シルト	ブロック状に褐色(10Y R 4/4) シルトを含む
5	にぶい黄褐色(10Y R 5/4)	シルト	
6	褐　色 (10Y R 4/6)	シルト	

第２号土壙堆積土

層位	土　色	土 性	備　考
1	にぶい黄褐色(10Y R 4/3)	シルト	
2	暗 褐 色 (10Y R 3/3)	シルト	
3	灰黄褐色 (10Y R 4/2)	シルト	酸化鉄粒を含む、グライ化している
4	灰黄褐色 (10Y R 4/2)	シルト	グライ化している
5	褐　色 (10Y R 4/4)	シルト	19号溝堆積土

第３号土壙堆積土

層位	土　色	土 性	備　考
1	褐 灰 色 (10Y R 5/1)	シルト	グライ化している
2	灰黄褐色 (10Y R 4/2)	シルト	グライ化している
3	褐 灰 色 (10Y R 4/1)	シルト	グライ化している
4	にぶい黄褐色(10Y R 4/3)	シルト	
5	にぶい黄褐色(10Y R 4/3)	シルト	

第10図　土　　壙

掘り方の埋土は、２層に分かれる。井戸の底面は基本層位第４層の礫層に達している。出土遺物はない。

（3）土　壙（第10図）

〔第１号土壙〕

Ｍ－21グリッドから検出された。形状は約2.4mのほぼ円形で、深さは1.1mである。底面は平坦で壁の立ち上りは急である。堆積土は５層に分かれ、第１層は炭化物粒と焼土粒を多く含む。また、炭化物粒を若干含む第３層から陶器の甕体部片と赤焼土器の坏口縁部片が出土している。

〔第２号土壙〕

Ｌ－16グリッドで、第19号溝に切られた状態で検出された。形状は約2.3mのほぼ円形で、深さ52cmである。底面はわずかにくぼみ壁は緩やかに立ち上る。堆積土は４層に分けられ、第３・４層はグライ化している。出土遺物はない。

〔第３号土壙〕

Ｊ－13グリッドの第15号溝底面で検出された。形状は1.5m×１mの不整の楕円形で、深さは54cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上る。堆積土は５層に分かれ、第１～３層はグライ化している。出土遺物はない。

（4）火葬施設（第11図）

火葬施設は２基発見された。

〔第１号火葬施設〕

Ｐ－20グリッドで検出された。形状は長軸1.1m、短軸0.8m、深さ20cmの楕円形を呈し、皿状である。堆積土は５層に分かれる。第１層は、木炭粒、骨片を多量に含む。第３層は、木炭層で骨片をわずかに含む。第４層は、焼土層である。第１層からは、刀子１点と砥石が１点出土している。第１層の骨片は、火難を受けた頭蓋骨、右下顎骨、肋骨、上腕骨などである。

〔第２号火葬施設〕

Ｒ－20グリッドで検出された。西半分のみが残存していた。底面は平坦で壁の立ち上がりは急である。残存部は長軸1.2m、短軸42cmの隅丸長方形である。深さは22cmである。堆積土は５層に分かれ、第１層は骨片、焼土ブロックを含み、第２層は骨片、焼土ブロック、木炭を多量に含んでいる。焼土層中の骨片は細片のためその部位等は不明である。

（5）ピット群（第３図）

第２号井戸周辺およびＯ－21グリッド付近から、ピット群が検出され、その中には柱痕跡と認められるものもある。しかし、建物として組合うものは見出せなかった。

２．中世の遺物

（1）陶磁器（第12・13図）

溝および土壙出土の陶磁器をあつかう。陶器は中世の無釉陶器、磁器は舶載磁器である。

ⅰ無釉陶器

甕・擂鉢がある。すべて破片であり、総点数96点で、82点が甕、14点が擂鉢である。図示し得たものについて、器種ごとにその特徴を述べる。

〔甕〕１～13は甕の体部および底部の破片である。１は甕の肩部で外面に自然釉がかかり内面に横ナデ、指の圧痕がある。２～４は底部片で、２・３は内面に横ナデがあり、３・４は外面にヘラケズリが見られる。５～13はいずれも押印をもつ甕の体部片である。押印には、簾状格子目のもの、正格子と斜格子の組合せのもの（９）とがある。14は周縁を磨滅させたものである。

〔擂鉢〕15～21は擂鉢の口縁部片である。口縁部上端が平坦なもの（15・17・19）と、沈線状の浅い凹みがめぐるもの（16・18・20・21）とがある。15には５条１単位の卸目がある。16～18・20・21は、使用痕が認められる。22は口縁部片、23は高台の剥れた底部の刃破片で、どちらも外面に自然釉がかかる。24～27は擂鉢の底部片であり、26には外面にヘラケズリが施される。27は内面に卸目がある。

28は、体部片である。内面に縦位に５条１単位の卸目があり、これに横位の卸目がまじる。軟質の陶器である。

以上の陶器の産地と年代についていえば、甕では押印をもつ５～13が常滑産と推定される。また１～４についても胎土などから同様のことがいえる。擂鉢では18がこのなかに含まれる。いずれも13～14世紀頃のものである。

その他の擂鉢では、15～27が卸目をもつことや胎土などから地元産とみられる。これらも、13～14世紀頃のものであろう。

22・23は、産地は常滑と推定される。12～13世紀初めのものであろう。

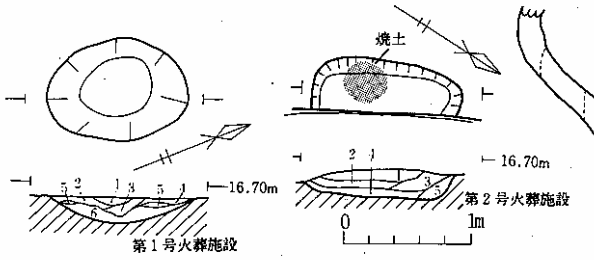
28は、地元産のものである。焼成および胎土からいって、15～27のグループより後出的であり、15～16世紀に降る可能性がある。

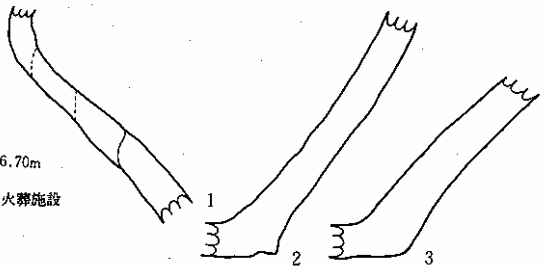
ⅱ磁　器（第14図）

溝堆積土から中国青磁が４点出土している。

29は、第15号溝堆積土第１層出土の碗の口縁部片である。釉調は明緑灰色を呈する。外面に蓮弁文の刻されたものと思われる。器厚は４㎜で、釉のかかりは薄い。

30は、第15号溝堆積土第２層出土の碗の体部下半の破片である。釉調はオリーブ黄色である。見込みに圏線がめぐり、２条の沈線がやや曲線的に口縁に向って伸びる。劃花花弁文の仲間で





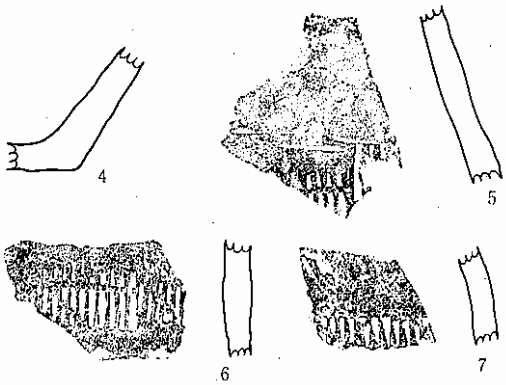
第1号火葬施設堆積土

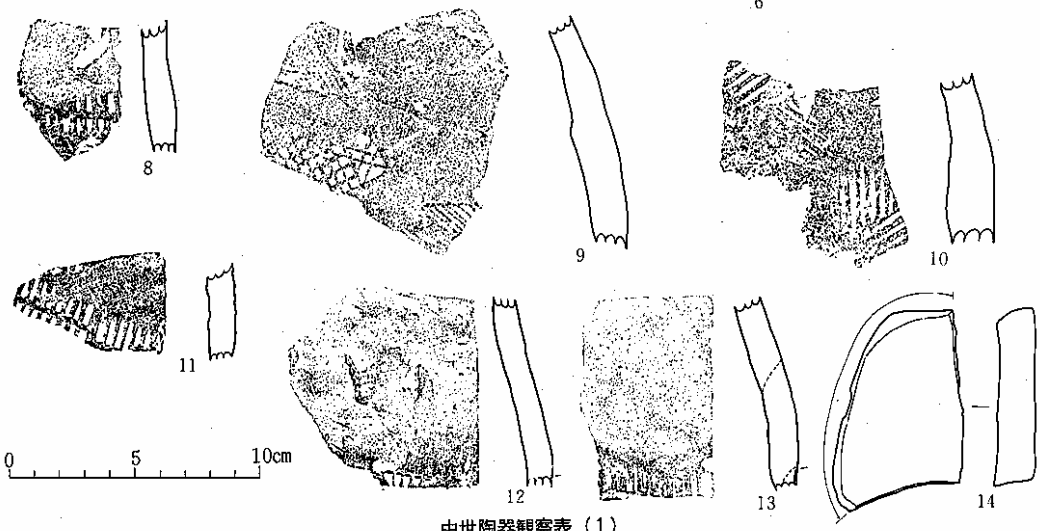
層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR4/3)	シルト	木炭粒、骨片を多量に含む
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、骨粉を若干含む
3	黒褐色(10YR1.7/1)	シルト	木炭層、骨粉をわずかに含む
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、骨粉を若干含む
5	極暗赤褐色(5YR2/4)	シルト	焼土を多量に含む、木炭、骨片を含む
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭、焼土、骨粉を若干含む

第2号火葬施設堆積土

層位	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR3/3)	シルト	骨片焼土ブロックを含む
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土ブロック、木炭、骨片を多量に含む
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	

第11図　火葬施設

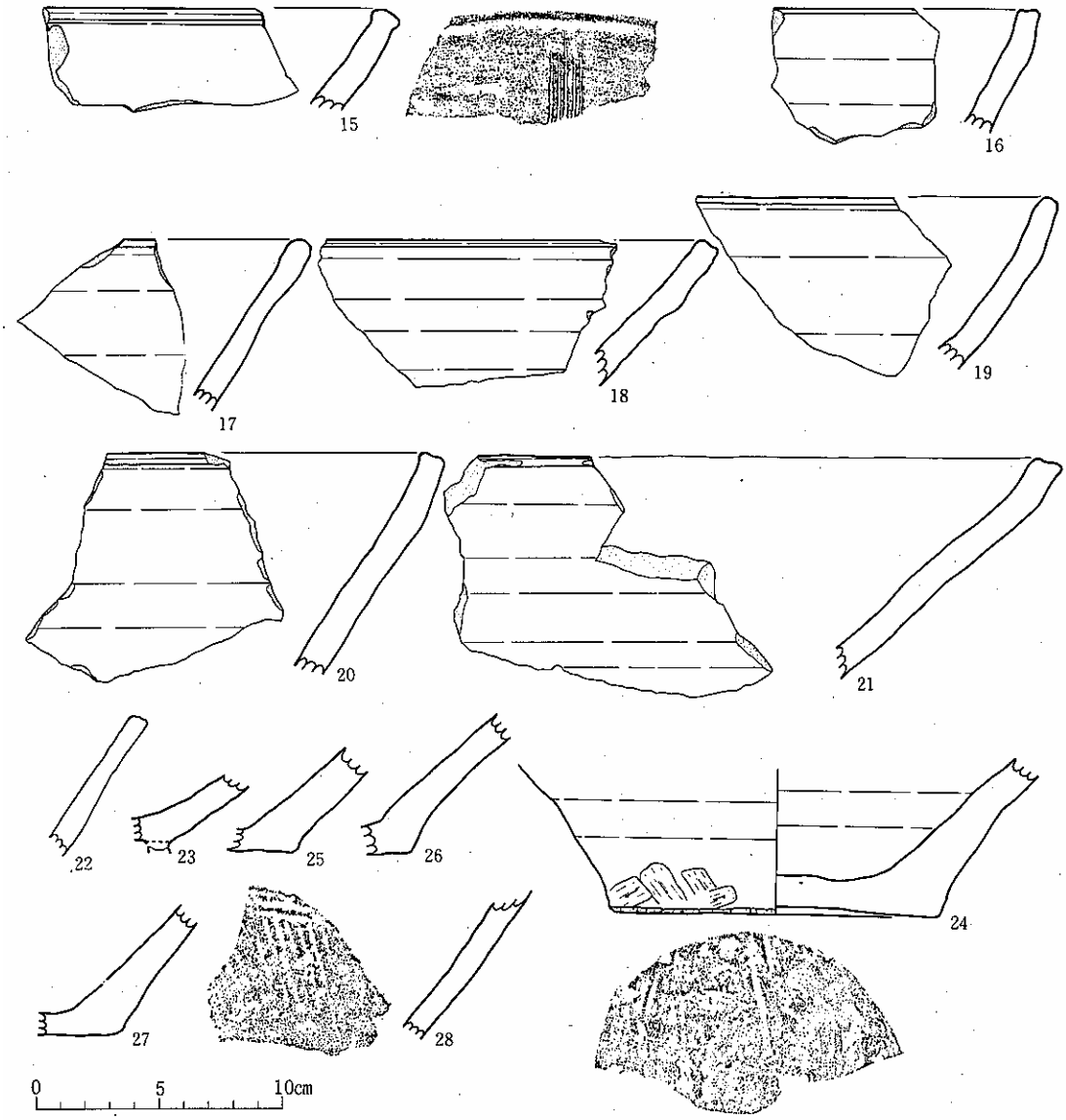




中世陶器観察表（1）

図版No.	グリッド	遺構	出土層位	器形	部位	産地	備考
1	L－14	15号溝	1～2層	甕	肩部	常滑	外面自然釉がかかる、内面に横ナデ、指の圧痕あり
2	N－15	15号溝	1層	甕	底部	常滑	内面横ナデ
3	L－13	15号溝	1層	甕	底部	常滑	外面、底部周縁にケズリ有、内面横ナデ
4	O－17	21号溝	1層	甕	底部	常滑	外面にケズリ有
5	M－14	15号溝	2層	甕	体部	常滑	押印有
6		27号溝	層位不明	甕	体部	常滑	押印有
7	L－14	15号溝	層位不明	甕	体部	常滑	押印有
8	L－14	15号溝	2層	甕	体部	常滑	押印有
9		27号溝	層位不明	甕	体部	常滑	押印有
10	Q－15	15号溝	1層	甕	体部	常滑	押印有
11	K－8	7号溝	3層	甕	体部	常滑	押印有
12		21号溝	層位不明	甕	体部	常滑	押印有
13	D－12	15号溝	1～2層	甕	体部	常滑	押印有
14		2号溝	層位不明	器形不明	体部	在地系	破片を再利用、縁片磨滅

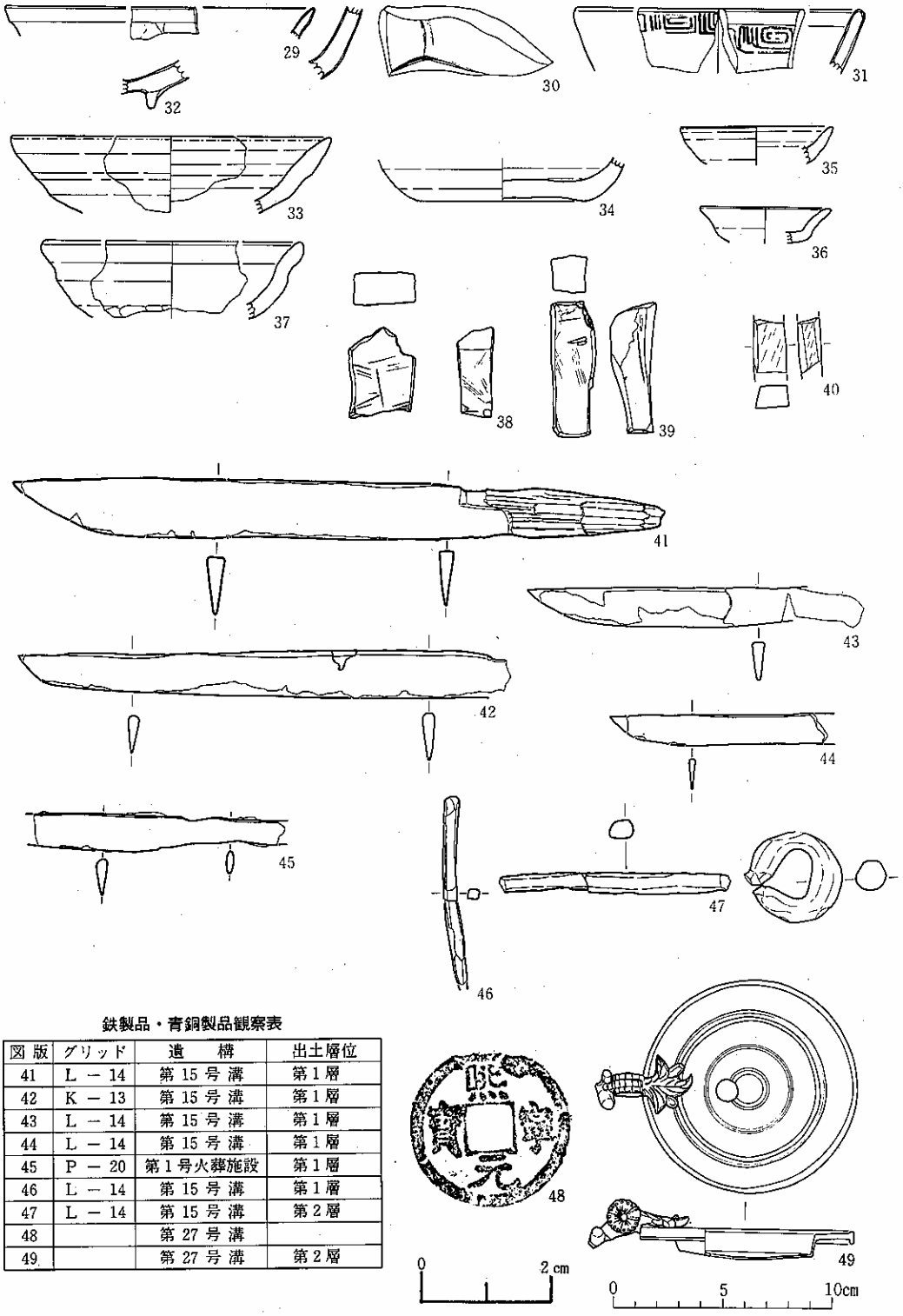
第12図　中世陶器(1)



中世陶器観察表（2）

図版No.	グリッド	遺構	出土層位	器形	部位	産地	備考
15		32号溝	層位不明	擂鉢	口縁	在地系	卸目有
16		32号溝	層位不明	擂鉢	口縁	在地系	使用痕有
17		21号溝	層位不明	擂鉢	口縁	在地系	使用痕有
18		7号溝	3層	擂鉢	口縁	在地系	使用痕有
19	M－14	15号溝	2層	擂鉢	口縁	在地系	
20	M－14	15号溝	1～2層	擂鉢	口縁	在地系	使用痕有
21		28号溝		擂鉢	口縁	在地系	使用痕有
22	M－14	15号溝	1～2層	擂鉢	底部	常滑	外面に自然釉がかかる
23	P－16	20号溝	層位不明	擂鉢	底部	常滑	外面に自然釉がかかる
24		15号溝	1層	擂鉢	底部	在地系	使用痕有
25		27号溝		擂鉢	底部	在地系	使用痕有
26	O－17	27号溝	1層	擂鉢	底部	在地系	外面ケズリ、使用痕有
27	I－11	25号溝	1層	擂鉢	底部	在地系	
28	N－14	15号溝	1層	擂鉢	体部	在地系	卸目有

第13図　中世陶器(2)



鉄製品・青銅製品観察表

図 版	グリッド	遺　構	出土層位
41	L － 14	第 15 号 溝	第 1 層
42	K － 13	第 15 号 溝	第 1 層
43	L － 14	第 15 号 溝	第 1 層
44	L － 14	第 15 号 溝	第 1 層
45	P － 20	第 1 号火葬施設	第 1 層
46	L － 14	第 15 号 溝	第 1 層
47	L － 14	第 15 号 溝	第 2 層
48		第 27 号 溝	
49		第 27 号 溝	第 2 層

第14図　青磁・土師質土器・石製品・鉄製品・青銅製品

あろう。器厚は７㎜で釉のかかりは薄い。貫入がある。

31は、第７号溝堆積土第３層出土の碗の口縁部である。内外面に雷文が施されている。器厚は６㎜で、釉のかかりは厚い。釉調は灰オリーブ色である。

32は、第７号溝堆積土中出土の付高台の碗の底部片である。器厚は８㎜で釉のかかりは厚い。釉調は明緑灰色である。

29・30は文様などの特徴から13～14世紀、31・32は15～16世紀と考えられる。

（2）土師質土器（第14図33～37）

ここでは、溝および土壙出土の土師質土器を扱う。

33は第１号土壙堆積土第２層出土の坏口縁部片である。体部がやや内弯し、体部と口縁部の境がくびれ、肥厚した口縁が外反気味に開く。内外面ともにロクロナデ調整のものである。34はＫ－14グリッド第15号溝堆積土第１層出土の坏底部片である。底部切離しは回転糸切りによる。体部下半の内外面にはロクロナデが施されている。35は第21号溝出土の小型の坏の口縁部片である。内外面ともにロクロナデ痕がみられる。36はＫ－14グリッド第15号溝堆積土第１層出土の小型の皿の破片である。口縁から底部にかけてのもので、底部から体部にかけて外傾し、外反する口縁がつく。器厚は3.5㎜と薄い。37はＫ－14グリッド第15号溝堆積土第１層出土の坏口縁部片である。体部は底部から外傾しつつ立ち上り口縁部が外反するものである。

以上の33～37については、断片的なものでもあり、その所属時期は不明である。

（3）石製品（第14図38～40）

砥石が３点出土している。

38は第15号溝出土のもので、両端が欠失しているが、折損面にも使用痕がある。

39は第21号溝出土のものである。38・39ともに石質は細粒の凝灰岩である。

40は第２号火葬墓から刀子とともに出土したものである。石質は泥岩質の変成岩である。

38・39は４面が使用されており、擦痕がみられる。

（4）鉄製品（第14図41～47）

溝および火葬墓出土の鉄製品（刀・刀子・釘・轡（くつわ））について述べる。

〔刀〕刀は２点出土している。いずれも第15号溝堆積土第１層から出土している。

41はＬ－14グリッド出土のものである。全長29.8㎝、刃長20.3㎝、茎長9.5㎝、刃幅2.6㎝である。平造平棟で棟関がある。茎には柄の木質が付着している。

42はＫ－13グリッドで出土した。茎が欠失している。刃長21.5㎝、刃幅1.5㎝あり、平造で丸棟、棟関がある。

〔刀子〕３点ある。43・44はＬ－14グリッド第15号溝堆積土第１層から出土したものである。

43は全長15.3㎝、刃長12.3㎝、茎長3.1㎝である。平造で平棟、棟関がある。44は茎が欠失

している。残存長9.9cmである。平造で平棟である。関の部分は欠損していてその有無は不明である。45は第１号火葬施設出土のものである。鋒と茎の末端を欠いている。残存長11.5cmである。平造で平棟、両関である。

〔釘〕３点出土している。いずれも角釘である。図示し得たのはK－13グリッド第15号溝堆積土第３層出土のものである。最も保存の良いもので残長8.5cmである（46）。

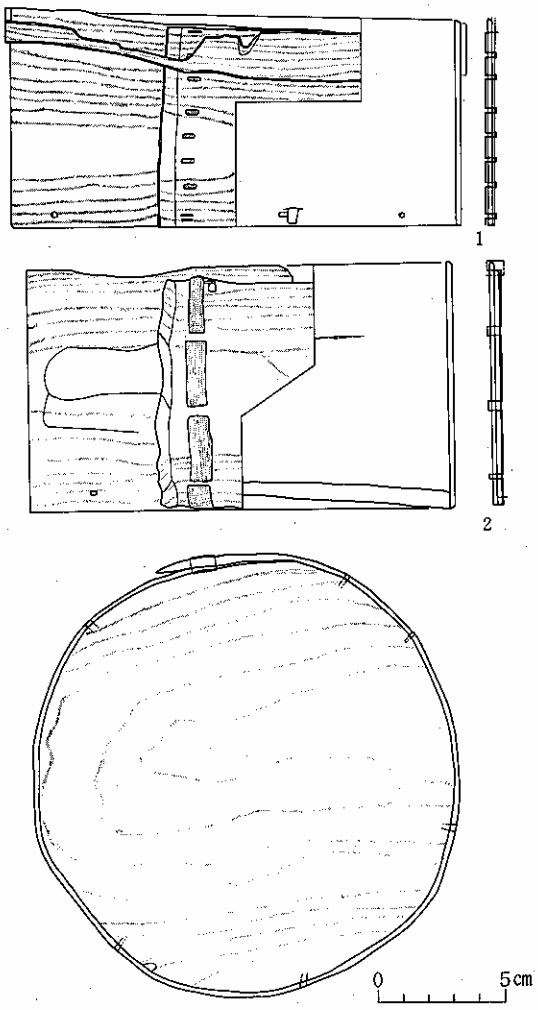
〔轡（くつわ）〕M－14グリッド第15号溝堆積土第２層から出土した。外径4.2cmの環で、これに１辺８mm、長さ11cm以上の棒状の部分がつく（47）。形状と大きさから推して、銜（はみ）と手綱を結ぶ引手の部分であろう。

（5）青銅製品（第14図48・49）

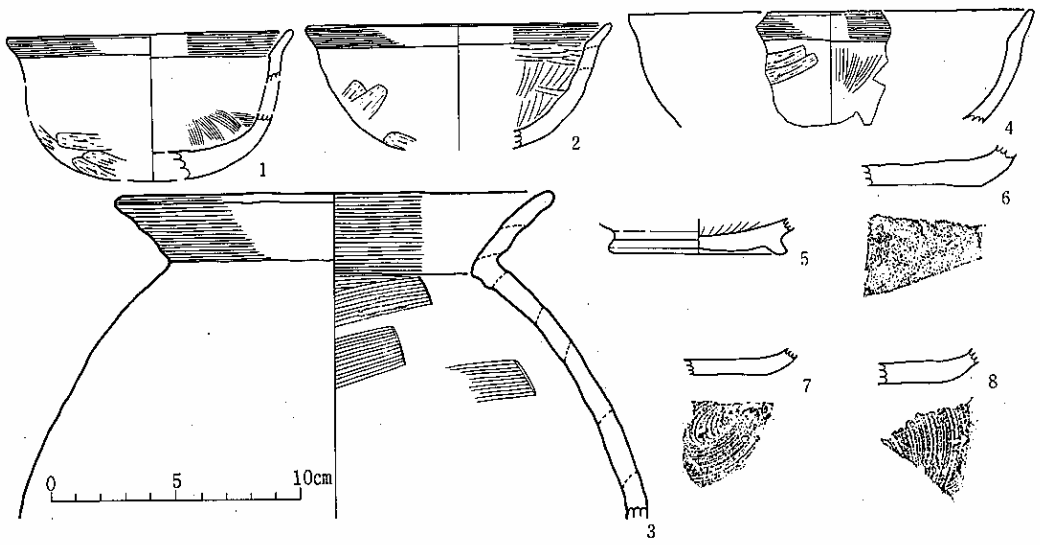
〔古銭〕溝堆積土中から４枚出土している。銭銘が読めるのは２枚である。９は第27号溝堆積土第１層から出土した「熙寧元宝」である（48）。他はM－14グリッド第15号溝堆積土第３層出土のもので「祥符元宝」である。いずれも北宋銭である。第15・21号溝堆積土中からそれぞれ１点づつ出土しているが、銹が甚しく銭銘は判読できない。

〔用途不明品〕第27号溝堆積土第２層出土のものである（49）。径9.5cm、深さ１cmの浅い皿状のもので、周縁が横に折れ幅広の縁帯となる。一見すると襖の引手金具とよく似た形状である。内面に１組３条の毛彫の浅い沈線が同心円状に２組めぐる。縁帯部分の内外端部に細い隆帯がめぐる。縁帯に植物の葉の飾りのついた蝶番（ちょうつがい）が固定されている。蝶番の軸のある部分は円形で花模様が彫刻されている。蝶番の外端部分は欠損するが、残りの部分に縦位置の小さな貫通孔がある。

蝶番部分の外端を容器の口縁端に固定し、皿状の部分を蓋とした可能性がある。なお皿状部分には径１cmの孔が開けられ



第15図　曲　　物



第16図　古 代 の 遺 物

ている。これは本来的なものではなく製作完了後のある時期に適宜開けられたものである。

（6）木製品（第15図）

曲物が２点出土している。いずれも第２号井戸底面からである。大小あり、入れ子の状態で出土した。

１は底板の抜けたものである。径17.8㎝、器高8.4㎝である。曲物本体は、厚さ２㎜の柾目板を曲げ6.6㎝幅で両端を重ね、幅５㎜の桜皮で綴じ合わせたもので、桜皮の末端は本体の板の内側におさめこまれている。これに曲物本体と同じ材質の幅２㎝の箍（たが）が上端と下端の部分に２本めぐるが、腐朽化のため本体への取付状況はわからない。

２はやや小振りで径16.9㎝、器高9.6㎝である。刃幅２㎝の削り痕の残る、厚さ２㎜の柾目板の両端を５㎝幅で重ね、幅８㎜の桜皮で表に長く裏に短く綴じ合わせている。底板は、曲物本体にはめこまれ６本の木釘で脇から固定される。曲物本体の一部には、１㎝ほどの間隔で鋭い線状痕が斜めに数条みられる。板材を曲げる作業に関係あるものであろう。

３．古代の遺物（第16図）

ここでは、遺構外出土の土師器溝堆積土中に混入していた土師器および須恵器を扱う。

１～３はＢ－16グリッド周辺出土のものである。１・２は土師器坏の口縁部片である。いずれも丸底になると思われるもので、体部がやや内弯し口縁部で外反、内面に稜が形成される。１は口縁部が内外面ともに横ナデ、体部が内面ヘラミガキ外面ヘラケズリによって調整されている。２は口縁部が内外面ナデ、体部が内面ナデ外面ヘラケズリによって調整されている。３は土師器甕であるが、体部下半がない。器形は体部中央がふくらみ口縁部が大きく外反する。口縁部には内外面ともに横ナデを加え、体部には内面ヘラナデ外面にヘラミガキが施されるが

明瞭ではない。

４はＦ－10グリッド第25号溝堆積土第１層出土の土師器片で、坏の口縁部から体部下半にかけてのものである。体部がやや内弯し口縁部が外反、内面に稜が形成される。口縁部が内外面ともにナデ、体部が内面ヘラミガキ外面ヘラケズリによって調整されている。５はＫ－14グリッド第15号溝堆積土第１層出土の土師器高台付坏の底部破片である。内面は黒色処理されている。

６はＰ－16グリッド第20溝堆積土第１層出土の須恵器甕の底部片である。ヘラ切りによる底部切離しの後、手持ヘラケズリを底部および底部周縁に加えている。７・８は須恵器坏の底部片である。どちらも、回転糸切りによる底部切離しのものである。底部調整はない。８は内面が磨滅によって平滑になっている。転用硯かと思われる。

１～４のような形態および製作技法の特徴をもつ土師器は、東北地方南部においては古墳時代中期の南小泉式として位置づけられている。

５は内面が黒色処理され高台がつくなどのことから表杉ノ入式に位置づけられる。６～８もその製作技法の特徴から表杉ノ入式並行の須恵器と考えられる。

なお１～３の出土したＢ－16グリッド周辺からは他にも土師器がまとまって出土しているが図示し得たのは以上の３点であった。またこの周辺には焼面もあり、床面直上まで削平された竪穴住居跡であった可能性もあるが、断定できない。

Ⅳ　ま　と　め

１．矢ノ目遺跡は、阿武隈川右岸の自然堤防上に立地する。

２．矢ノ目遺跡では、溝34本、井戸３基、土壙３基、火葬施設２基、ピット群などの遺構が検出された。溝のうち規模の比較的大きなもの５本と、土壙のうち１基から中世の陶磁器片が出土しているところから、これらの遺構は中世に属すると思われる。その他の井戸、土壙、火葬墓、ピット群は出土品がなく、その所属年代を明らかにすることはできなかった。しかし、遺物全体をみると古墳時代中期の土師器等を除けば大部分が中世のものである。したがって、これらの遺構も中世に属するものと考えたい。なお、中世の遺物として陶磁器があり、それにともなう鉄製品（刀・刀子・釘・轡）、青銅製品（古銭・用途不明品）がある。その多くは溝から出土したものである。

３．井戸は構造的に特徴がある。井桁本体の基底部の形態がそれぞれ異なるが、その上半に組まれる井桁の構造は共通するところがある。

４．古墳時代中期の土器が検出された（数は少ない）地点があり、竪穴住居跡かと思われるが確証は得られなかった。この時期に属する他の遺構はない。

なお、本遺跡の西方約160mには天正年間（1573～92）の構築という矢ノ目館跡があるが、「正方形に近い平面形をもち、二重の水堀で囲まれ」るという古い形態を残したものであるところから、土地の土豪的武士による天正以前の築造の可能性が考えられている（藤沼：1981）。本遺跡の遺構群はこの館跡の周辺に散在する集落の一部を構成するものであった可能性も残している。

参考文献

志間泰治（1964）：「矢ノ目遺跡調査」日本考古学年報12

亘理町史編纂委員会（1975）：「亘理町史上」

志間奏治（1982）：「篠崎横穴墓群西矢ノ目古井戸の調査」

丸森町教育委員会（1980）：「丸森町の城と館」丸森町文化財調査報告第５集

紫桃正隆（1974）：「史料　仙台領内の古城・館」第４巻

藤沼邦彦（1981）：「宮城県」日本城郭大系３

入間田宣夫（1978）：「鎌倉幕府と奥羽領国」中世奥羽の世界

溝 観 察 表

	幅 上幅最大 下幅最大	深さ 最深 最浅	切り合い関係等 (走行方位)	出土遺物
1号溝	40cm 20cm	8.5cm 4.5cm	(W-21.5°-S)	
2	40cm 30cm	14.5cm 8.5cm	(W-1°-S)	中世陶器
3	1 m 70cm	13.5cm 7cmcm	(W-11°N)	
4	50cm 20cm	9.5cm 6.5cm	(W-30°-S)	
5	60cm 30cm	16 cm 12 cm	26号溝を切る 25 〃 (W-4°-S)	中世陶器
6	80cm 40cm	9.5cm 13 cm	(W-27°-S)	
7	2.4m 40cm	91.5cm 49 cm	(W-4°-S N-1°-W)	中世陶器
8	1 m 60cm	15 cm 8 cm	(W-3°-S)	
9	50cm 20cm	8.5cm 6.5cm	(W-19°-N)	
10	1 m 70cm	14 cm 11 cm	(W-13°-S)	
11	80cm 50cm	12.5cm 7 cm	2号溝を切る (N-18°-W)	
12	50cm 20cm	21 cm 4.4cm	(N-10°-E)	
13	1.5m 1 m	26 cm 23.5cm	(N-9°-W)	
14	1.9m 1.2m	36 cm 17 cm	(W-4°S)	
15	5.6m 4.4m	44 cm 12.5cm	3号溝、8号溝を切る、 22号溝に切られる (N-12°-W)	中世陶器、刀2、刀子2、釘2、鑓、古銭2
16	1.6m 90cm	13 cm 10.5cm	(N-19°-W)	
17	4 m 3.2m	12 cm 5 cm	(N-1°-E)	
18	60cm 30cm	12 cm 8.5cm	(N-14°W)	
19	80cm 60cm	6 cm 8.5cm	2号土壙を切る 9号溝に切られる (N-2°-E)	
20	2.9m 2.2m	17 cm 14 cm	10号溝、21号溝、22号溝を切る (N-4°-W)	中世陶器
21	3 m 2 m	7.2cm 1.02m	27号溝を切られる (N-25°-E)	中世陶器、古銭
22	1.4m 40cm	50 cm 38 cm	15号溝を切る (N-4°W)	中世陶器
23	1.3m 50cm	23 cm 22 cm	22号溝を切る (W-15°-N)	
24	4.3m 2.8m	50 cm 39 cm	(N-2°-E)	
25	3.5m 2.6m	19.5cm 15 cm	2号溝を切る 5号溝に切られる (N-9°-W)	中世陶器
26	60cm 30cm	10 cm 3 cm	(N-15°-W W-21°-S)	
27	2.2m 40cm	77 cm 42.5cm	21号溝を切る (N-20°-E)	中世陶器、釘、古銭、青銅製品(用途不明品)
28	2.2m 1.4m	35 cm 27 cm	(N-12°-E)	中世陶器
29	60cm 20cm	3 cm 8.5cm	(N-9°-E W-2°-S)	
30	1.3m 50cm	37 cm 32 cm	(W-19°-N)	
31	1.1m 30cm	27 cm 12 cm	(W-5°-N)	
32	1 m 30cm	17 cm 12 cm	(W-11°N)	中世陶器
33	1 m 30cm	26 cm 17.5cm	(W-2°-N)	
34	1.6m 70cm	10 cm 7 cm	(N-8°-W)	

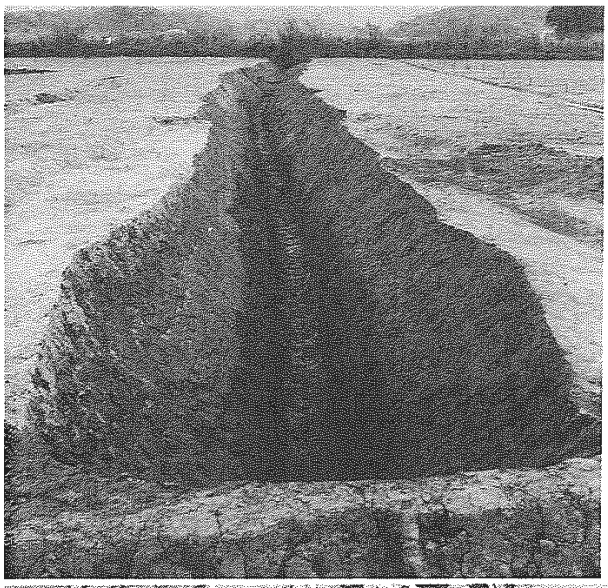
写　真　図　版

遺 跡 遠 景

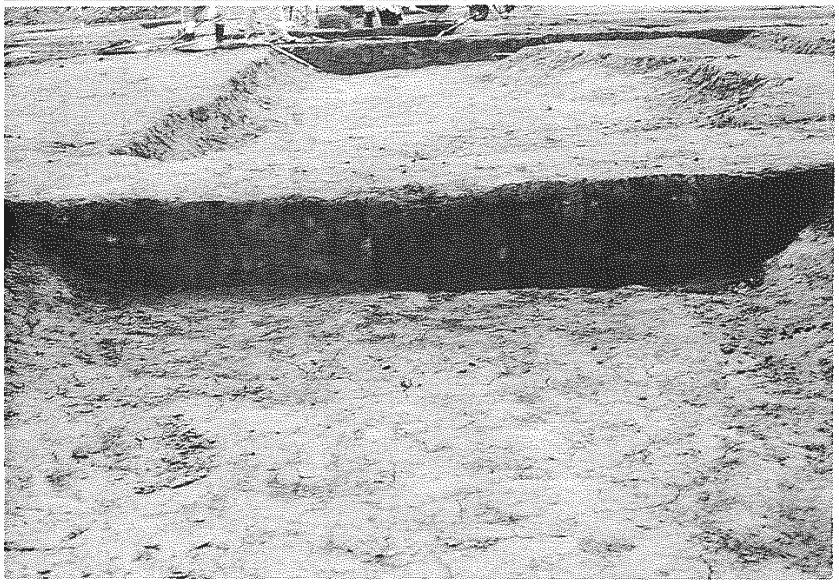
遺 跡 遠 景

第7号溝西端

図版1



第 7 号 溝

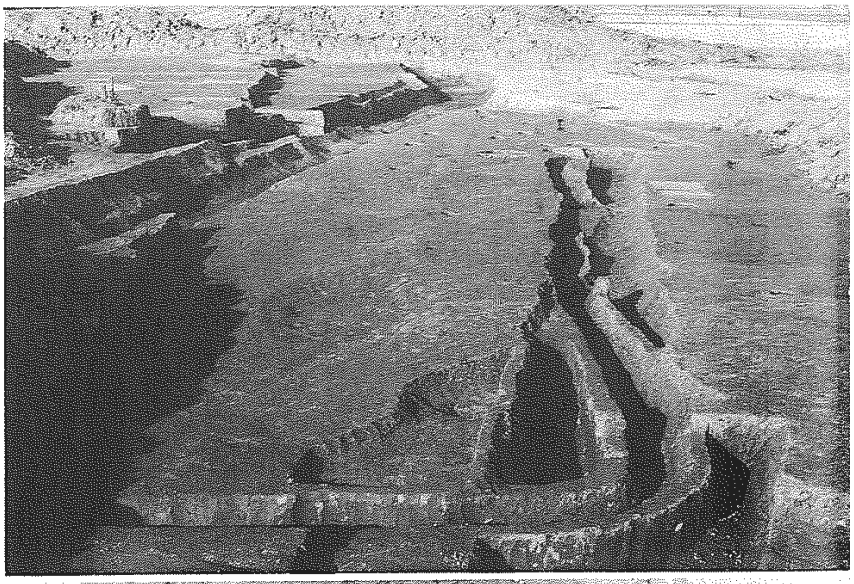


第 15 号 溝

第 21 号 溝

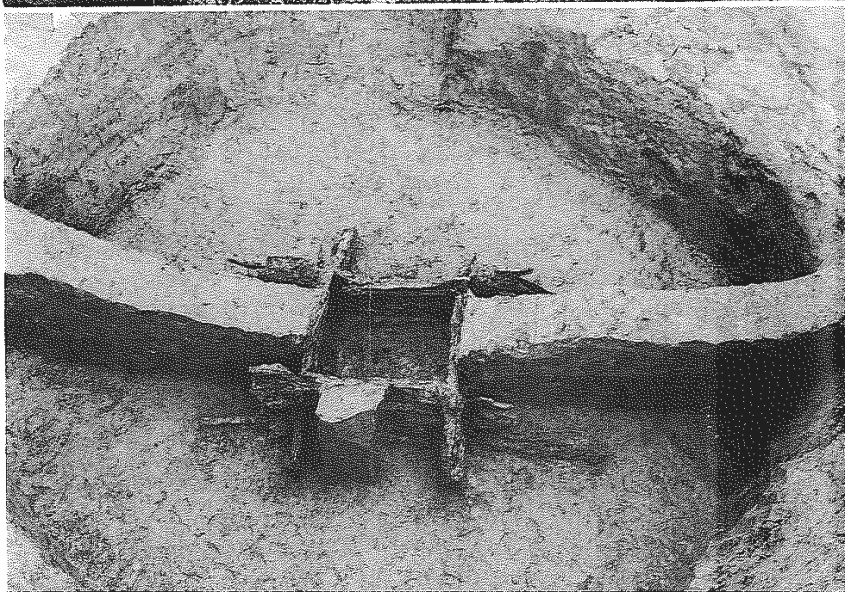
図版2

第 28 号 溝

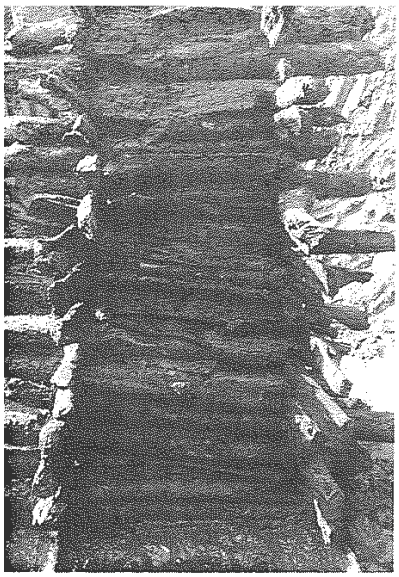


第 1 号井戸

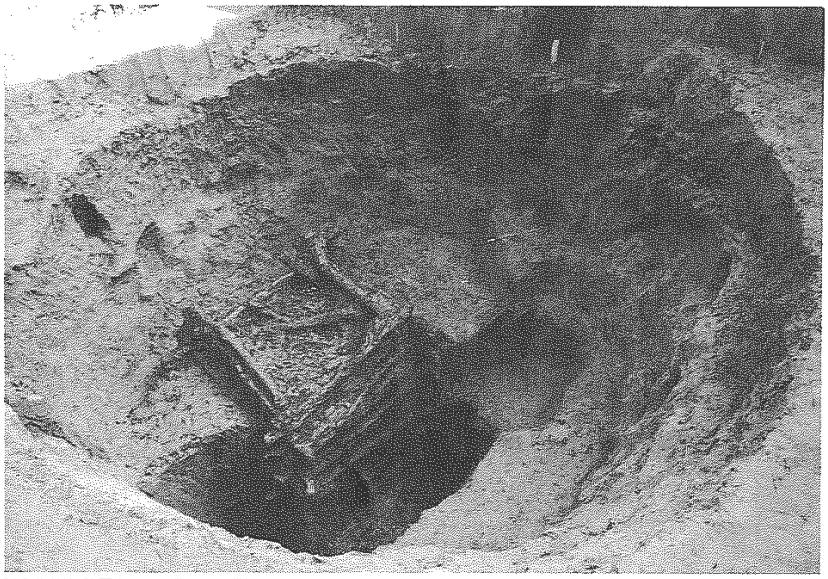
第 2 号 井 戸



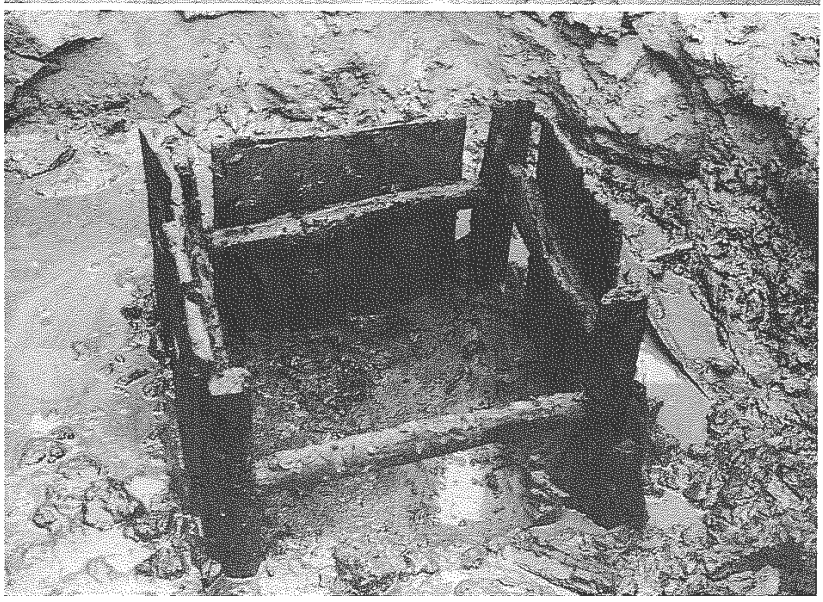
図版3



第２号井戸井桁（東側）



第 3 号 井 戸

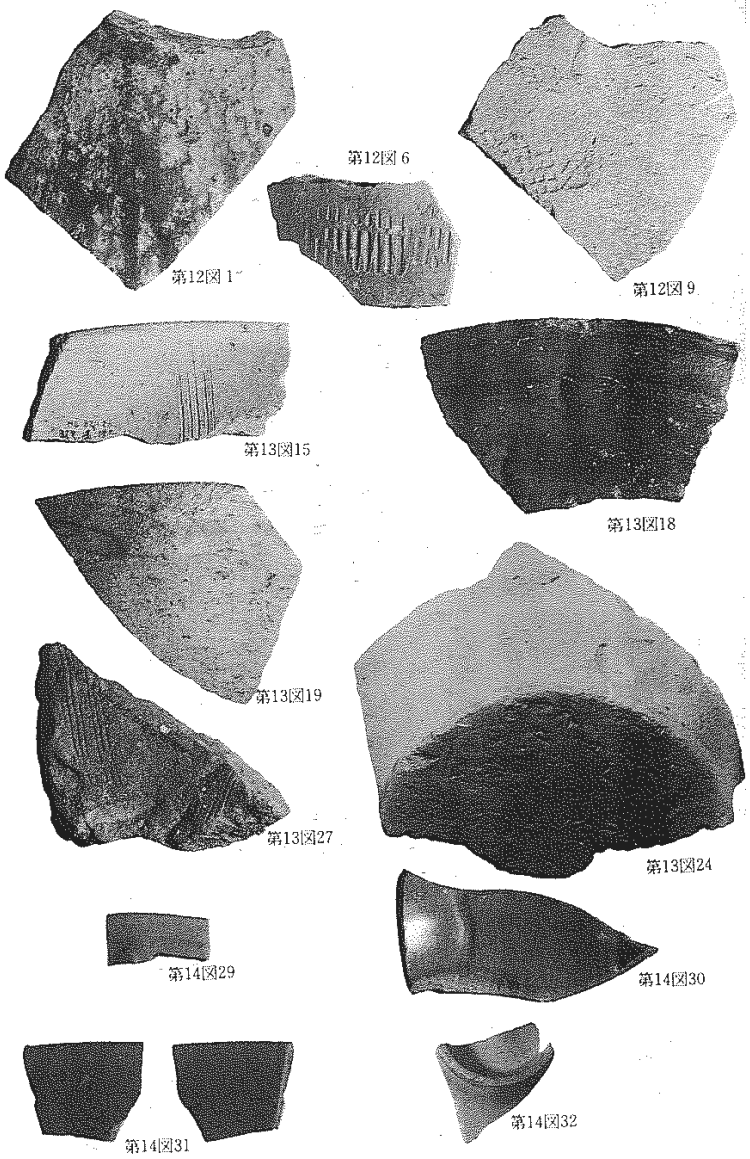


第３号井戸井桁基底部

図版４

ピット群
右 第31号溝
左 第32号溝

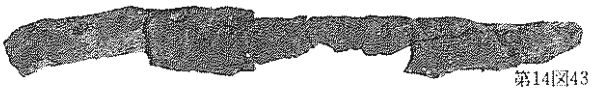
出土遺物（1）
陶磁器



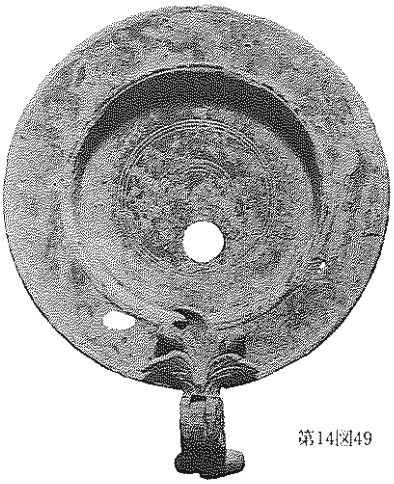
図版５

第14図41

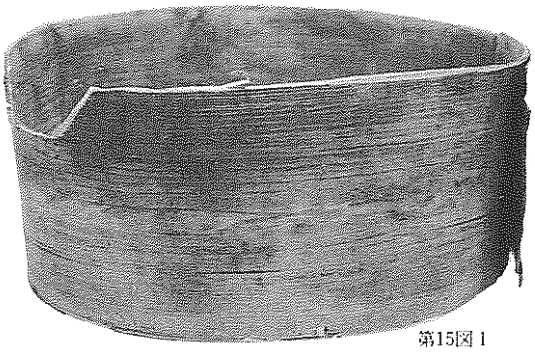
第14図42



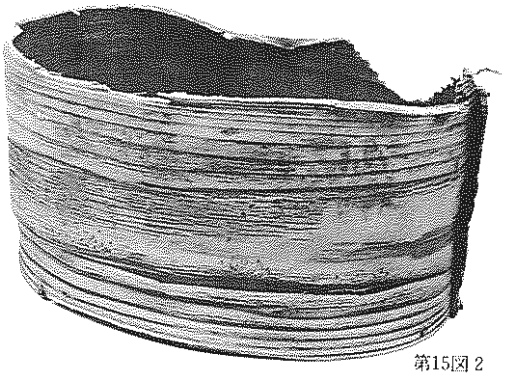
第14図43



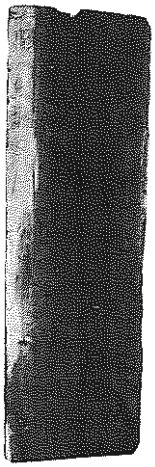
第14図49

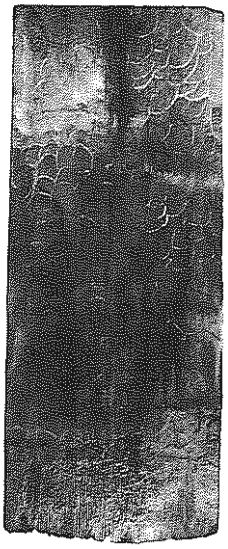


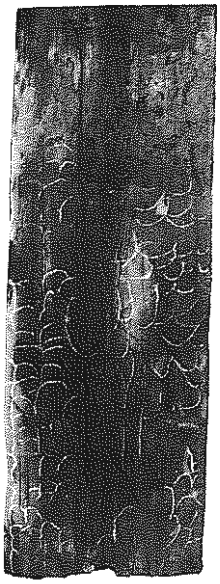
第15図 1

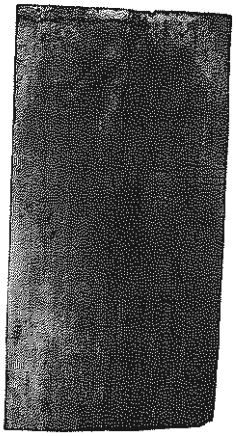


第15図 2









第 9 図

図版6　出土遺物(2)